THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附錄號

第三十一年第十號　第三百卅五號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

ノベル賞金を得たる、白耳義國文豪
マーテルリンク著
文學士 栗原古城先生譯

最新刊

萬有の神秘

四六判總クロース
全一冊
正價壹圓貳拾錢
郵税十二錢

本書は有名なるベリツト、テンプル（埋宮）の全譯也。マーテルリンクの神秘思想は、一言にして云へば、『古道復興』なり。科學の破産は既定の事實となれり。**人間の淺薄なる理智は、大自然の神の前に叩頭せり。**原始人類の神に對する敬虔と驚異の情とは、今や文明に中毒せる廿世紀人類の思想に復活せんとす。此の先聲を爲すものは、それマーテルリンクの**神秘哲學歟、**假令白耳義は滅ぶることあるも、マーテルリンクは不滅なり。要するに彼の思想は來るべき**新宗教と新文明の先聲也。**譯筆亦定評あり。

三版
マーテルリンク著
文學士 栗原古城譯

死後は如何

四六判總クロース
全一冊
正價金壹圓貳拾錢
郵税十二錢

▼朝あれば夕あり、生あれば死あり。死後を窮むるは即ち斯の生を知る所以也。

東京本郷西片町
玄黄社
電話下谷一三九番
振替東京七九九五番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

改訂縮刷

未だ想痕を讀まざる人ありや！

一代の碩學三宅先生の眞髓に觸れよ

讀後必ずや頓悟一番せん！

厖然たる大著縮刷されて繙讀に至便となる

文學博士三宅雄二郎先生著　忽五版

新式ポイント活字印刷　紙數壹千餘頁全裝幀優美　箱入天金特製　携帶至便

想痕

定價金壹圓六拾錢　郵送料金八錢

賣れ行き飛ぶが如し、初版・再版・三版・四版忽ち賣切れ五版出來

發兌　東京市本石町　至誠堂

電話本局三六六六番　振替東京一七四四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

思想界の炬火・出版界の權威！近時稀に見る不朽の名著！

書を讀むは猶山に登るが如し、其愉快は、其眼界を濶大にし、氣宇を高朗にするにあり。山に登らば當に大山に登るべく、書を讀まば須らく良書を讀むべし。

三宅雪嶺先生は嶄然思想界に峙立す、其識は天漢を貫き、其學は地表を掩ふ。玲瓏の人格巍々たる德操、雪嶺と號するの有名有實たるを見る。先生の人格が一代の敬仰を受け、先生の著書の上下に渇讀せらるゝ、誠に所以ある哉。先生の著皆學術界、思想界の權威たりと雖も最も良く文明批評家たる先生の特色を代表するものは「**想痕**」を推して第一とす。想痕は先生三十年間の思索の結晶にして宛然**雪嶺全集の觀**あり、篇を分つこと七、**歲時篇**は「夏は天然娛樂多し」とか「登山か水泳か」といふが如き四季の景情に托して政治に談及し、風流と塵事とを渾融して珠玉の文を爲し、**修養篇**は先生一家の經驗を說き、一々人情の機微を穿ち、**思潮篇**の對社會的活識と相俟つて一大處世訓を示し、**教育篇**は人格を以て教育宗教の多端の問題を一貫し、**人の父たり人の子**たる者をして嚮ふ所を覺らしむ、若それ**政治篇** **人物篇**に至りては先生得意の擅場時勢に照して人物を評し人物に依りて時勢を論じ古今東西の歷史の俳優と背景とを併せて紙表に活躍せしむ、**雜篇**は即ち文章を品し、庭園を評し、草木の花卉に及んで興味湧くが如し、七篇の章篇約三百、山濤海嶽變幻の妙を極め、**筆端白雲を起し**、**紙上淸風を生**ずるの威あり、而して其取材の廣汎にして多趣多端なる有らゆる階級の有らゆる人士をして必ず會心の文章を發見せしむべく、**一文を讀む每に一段の識見を增**すを覺えしむべし、加ふるに博士の文は**獨創的**にして淸新の氣充溢し、含蓄極めて深きを以て、文に志あるの士日夕本書を**精讀**せば必ず著しき**進境**を見るを得べし、今や各階級讀書家の熱望に應じ鮮明なるポイント活字を用ひて**縮刷新**に**成**り**實費僅**に金壹圓六拾錢の**大廉價**を以て、廣く滿天下に提供す。

萬朝報曰く

文中一字の無駄なく、博士獨得の筆致着想、寶石の輝きを有し、一番確に現下の思想界言論界に炬火を投ずるものといふべし。漫りに避暑を口にする勿れ。靜かに本書を繙かば暑熱忽ち去つて涼風坐に滿つることを覺えん……

發兌 東京市本石町 **至誠堂** 電話本局三六六六番 振替東京一七四四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

〔最新刊〕

マーク・トウエーン原作　佐々木邦譯

ユーモア十篇

◉杉浦非水裝幀◉

四六判頗美本
定價金八十錢
郵送料八錢

諷刺と教訓に富みたる理想的の諧謔文學!!

■米大陸の明星として世界の文壇に名聲を馳せたるマーク・トウエーンの傑作『ユーモア』は『いたづら小僧日記』の著者として其才筆を發揮したる佐々木邦氏の譯筆に因つて我文壇に紹介されたり。

■『ユーモア』は清新潑溂の趣味に富める理想的の諧謔文學にして人類の實生活に快よき諷刺と深き教訓を與ふる藝術なり左れば此の文學が現代の物質的生活のため疲勞倦怠せる人心に無量の慰安と活力を與ふるは論を俟ざるなり。

■『ユーモア』無き我が文壇に『ユーモア』を需めて憧憬する我が讀書界は本書の刊行によりて多年の饑渇を充すことを得べし。

秋の文藝

◎銀と藍（文藝雜感）　日向きん子著
△四六判美本　定價八十五錢　送料八錢

◎シェイクスピア（傳記と作劇）　帝國大學講師　齋藤勇著
△四六判美本　定價一圓五十錢　送料八錢

◎折にふれ（感想錄）　新渡戸博士著
△四六判上製　定價一圓廿錢　送料八錢

發行所　東京麴町三丁目　振替東京七八四七　丁未出版社

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉

專務取締役 小原元美

專務取締役 鈴木市之助

常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地

電話長本局一八五六、五一五〇、一二八七番

振替貯金口座東京一七一七番

支店 大阪市東區本町一ノ一三(電話長本局二一三一番)

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第卅一年九月號（秋期大附録號）目次

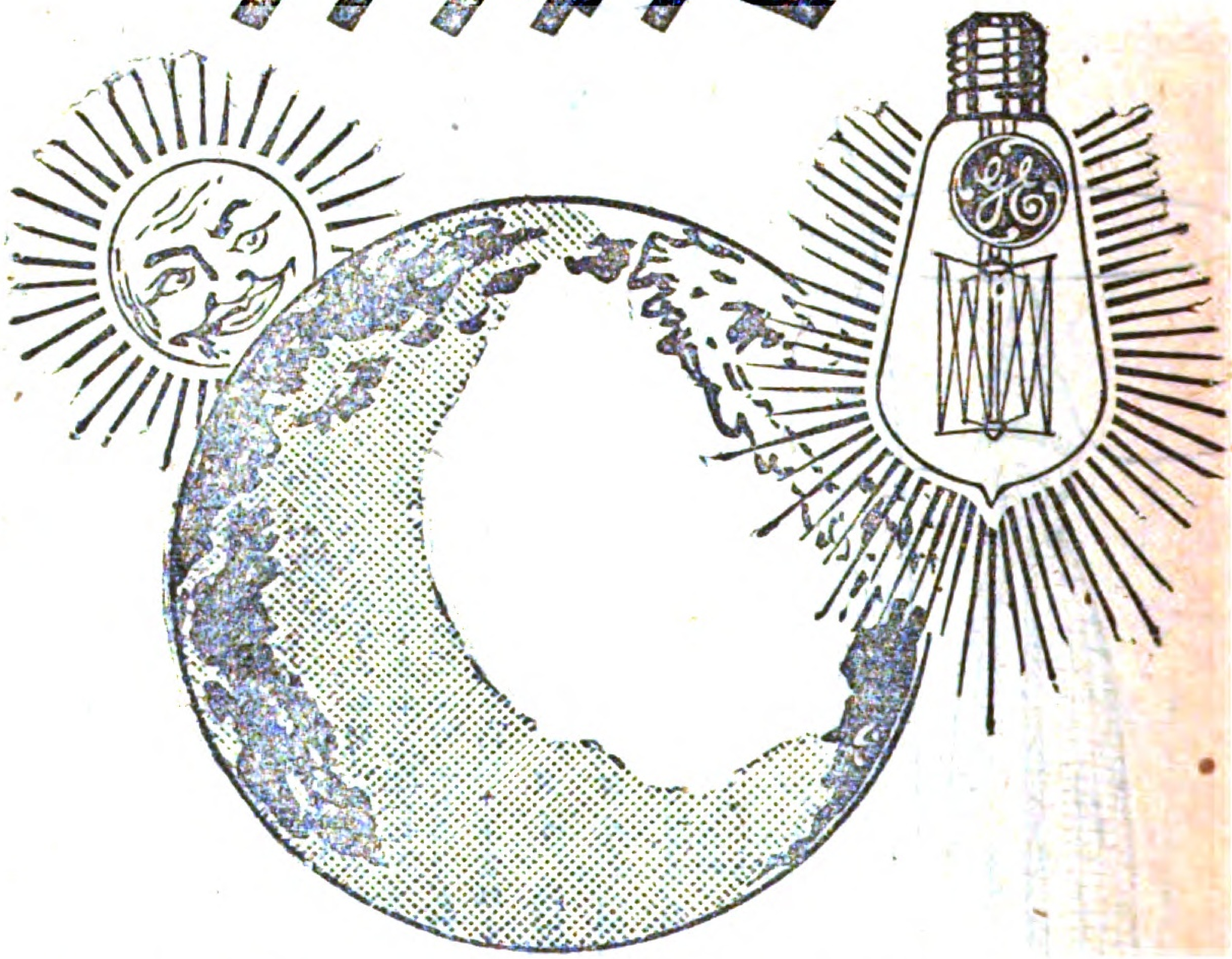
▼公論

▼説苑



日とのみ競ふ

マツダランプ



五拾燭光迄長型壹個金五拾錢

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇番一〇一番一〇二番一〇三番一〇四番

販賣部

東京出張所　東京市京橋區銀座尾張町一丁目　電話新橋　一九三・三二一二　長一〇五九

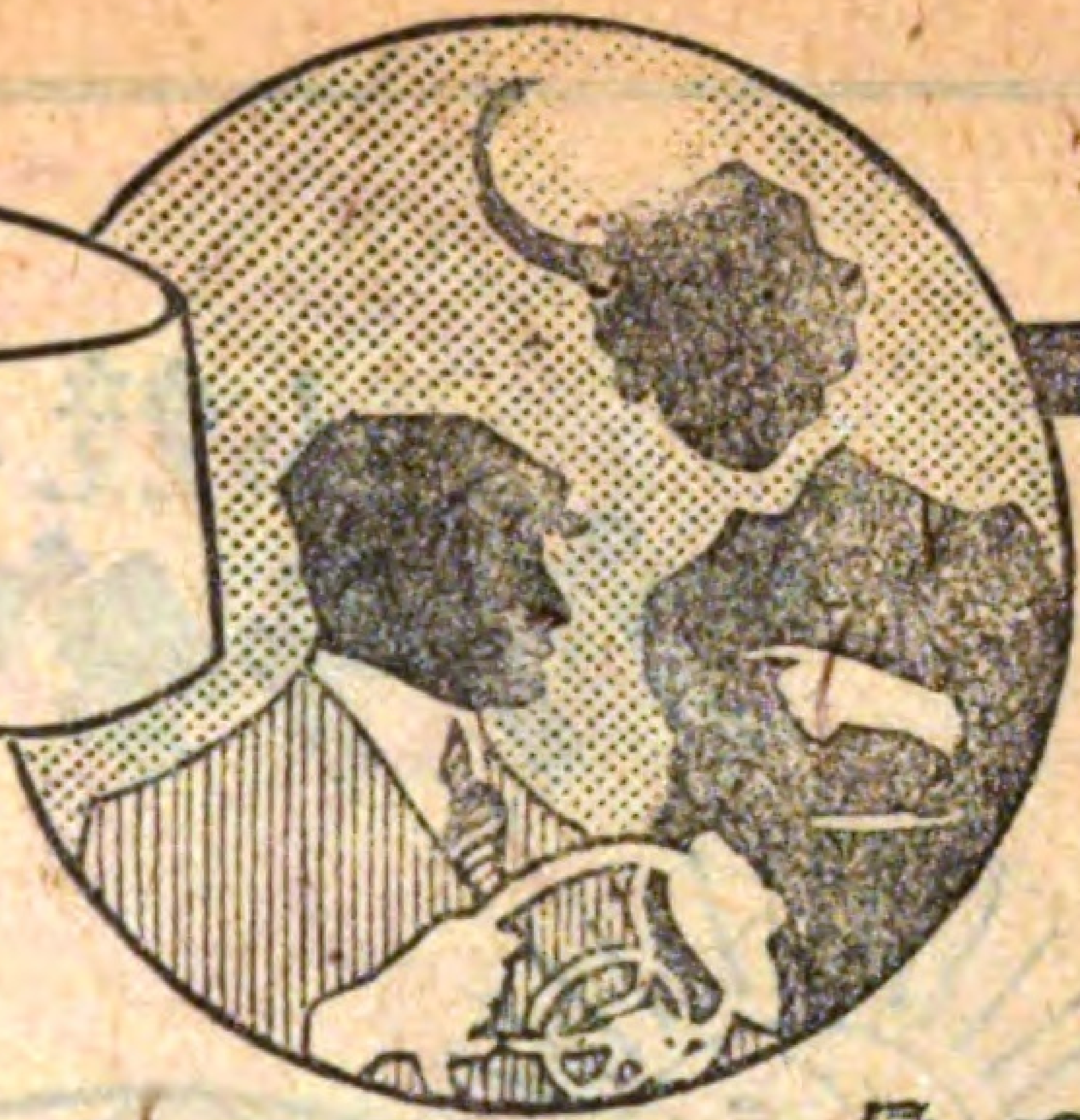
横濱出張所　横濱市伊勢佐木町一丁目　電話[illegible]一七一一

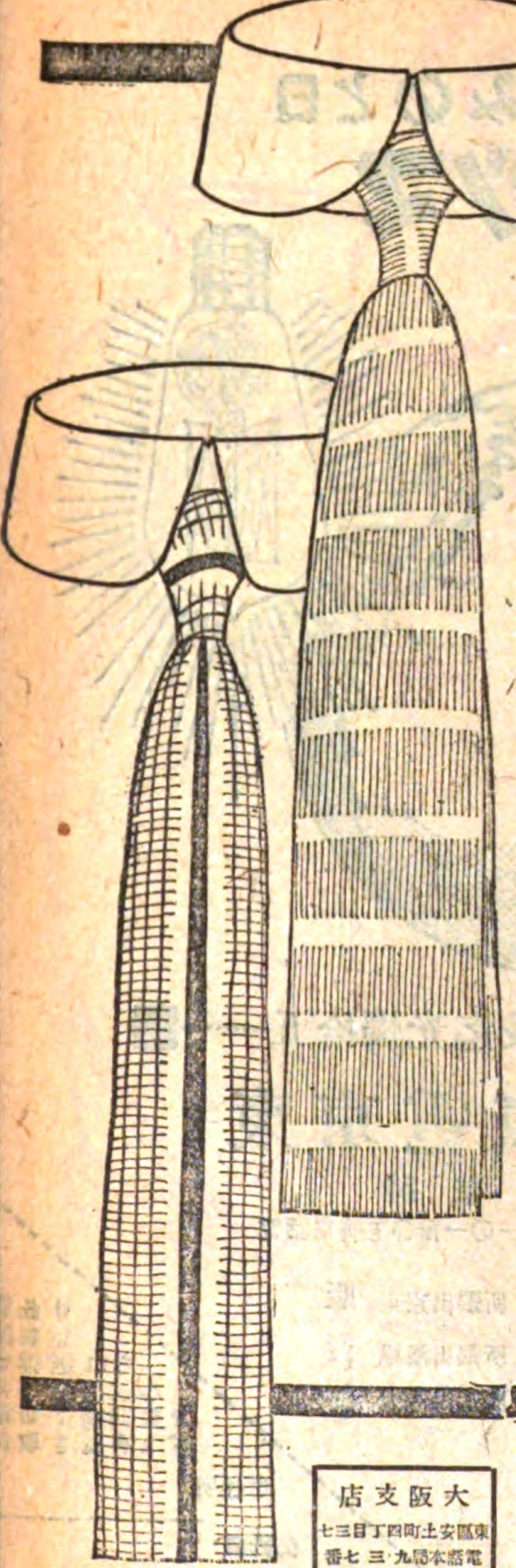
大阪出張所　大阪市西區阿波堀通一丁目五番地　電話長西一〇九五

御照會の節に此點線を切取りお送り下されば綺麗な説明書を差上ます

御住所

御姓名





清快の象徴たる 洗濯可能(ウオッシユエーブル)ネクタイ

登録商標 BEST MADE RED HAT WEAR GUARANTEED

輕い着物を着て愉快に活動の出來る季節となりました。清新。爽快。溌溂。鋭氣の充ちた若い新しい季節となりました。此季節を代表する生氣ある輕い清い新らしい壯んなる精神を象徴する洗濯可能(ウオッシユエーブル)ネクタイの新柄が取揃ひました。皆樣御覧下さりませ。本年の新製品にはリボン式も筒織式も御座います柄行色合は現代の流行を更に洗練しました瀟洒なる逸品揃いで御座います。染織は堅牢でリボン式の内には皆樣をあつと言はせる優秀なるものも御座います其れで價が低廉です一日も速く御注文下される樣願ひます。

□リボン式洗濯可能(ウオウシユエーブル)ネクタイ　自金五拾錢至壹圓五拾錢

□筒織式洗濯可能(ウオウシユエーブル)ネクタイ　自金拾八錢至金八拾錢

洗濯保証

東京本店
日本橋區通鹽町一五
電話浪花二一〇四番
振替東京九七四三番

南文藏商業部
赤帽印ネクタイ發賣元

大阪支店
東區安土町四丁目三七
電話本局九三七番
振替大阪一九一九番

中央公論



九月號
第卅一年第十號
第三百三十五號

開戰第三年の眺望

（一）

歐洲大戰爭の開けてより己に二週年を過ぎて第三年に入り、從來各方面とも獨軍跋扈跳梁し聯合軍は之を遠巻に巻きて僅かに防制するを得たるも、今や氣運一轉、露佛英伊孰れも一大攻勢を執りて起ち獨墺をして防勢の態度を取るの止むを得ざるに至らしめたり、此れより先き獨の皇太子軍は二月二十四日を以てヴエルダンの堅城に對し六十萬の大兵と幾千の重砲、機關銃を集めて大規模の攻撃を開始し驚くべき犧牲を惜まず、一氣之を屠らんと試みたりしも佛軍亦た能く固守して下らず、獨軍は攻戰六閲月、兵を損ずるたと六十萬人に及べるも遂に志を得ず、寧ろヴエルダンは獨逸に取り躓きの石、礙けの磐とこそ云ふ可けれ、獨逸參謀部は如何なる天魔にや誘はれけん、全部を包圍して軍資補充の路を絕つ能はざ

る此堅城を無謀にも意地づくにて攻撃し多大の兵力を失へる外、少なからず自ら信念を損じ意氣を阻喪したるは謀略上の大失誤なりと謂はざる可からず、茲に獨逸がヴェルダンの陥穽に引係りて苦悶せるを見たる露軍は昨夏の波蘭土撤退以來軍器を補充して養ひ得たる新鋭氣を鼓舞し、六月上旬を以てガリシャ回復の快擧に出で、ブコウィナを始め東南ガリシャに到る處に破竹の勢を以て墺獨軍を敗り生獲五十餘萬人、重砲機關銃等の鹵獲二千門の多きに及び、首府レムベルグを抜く將に近きに在らんとす、茲に於てヴェルダンと東南ガリシャに於て苦戰に陥れる獨墺は他の戰線の兵を割きて此の兩方面の補充に努めたれば伊軍に對する壓迫自ら緩和せらるゝと同時に北佛ピカディイの方面亦た防禦の手を薄ふせしかば當時墺軍の爲めに國境以内に追撃せられて頗る苦境に在りし伊軍再び攻勢に出づるを得たり、即ち露のブルシロフ軍が南ガリシャに鯨波を擧げて攻進を始めしより未だ二週間を出ざる六月中旬に伊軍は陣容を立て直ほし、一方はアディジュ河畔より始めてトレント市正面の大進撃を開始し更に他の一方にはイソンゾ河の西ゲリッツの攻略に取掛りて着々成功し既にトレント正面に對しては前日來退却したる地域の大半を回復したる耳ならずゲリッツの堅城亦能く八月七日を以て之を陥落することを得たり、抑もゲリッツはトリエスト市の西北に於ける要害にして其關係宛も箱根の舊江戸に於けるが如し、今此の堅關已に伊軍の有に歸す是より海軍と協力し進んでトリエストに迫りて之を抜き多年の宿望を達し得んこと殆んど疑を容れず、北佛ピカイディ方面に於ては英佛兩軍は七月一日を以て大擧前進を始めソム河の東北二十餘里に亘り獨軍の築けたる堅牢無比の塹壕防備に向ひ猛烈なる攻撃を開始したり、乍ちにして第一、二線を抜かれて獨軍はヴェルダル方面より多大の補充を得て大に防戰に努め、英佛軍の突進稍〻阻止され

るが如くなるも、其攻勢は毫も衰へず、無盡藏なる砲力を以て敵の防備を破碎し餘裕綽々たる豫備兵に依賴して益々進擊を試みんこと疑を容れず、而してヴエルダンの敵軍已に大に其攻擊力を失へるを示しヴオー、チールモン方面も既に佛軍の進出に委ねたり、即ち各方面とも少くとも獨軍破竹の勢は永久に阻止されたりと謂ふを得べし、轉じて海面戰局を觀れば五月三十日に北海海戰ありて英國海軍は其傳統的大膽なる作戰の爲め自ら多大の損害を受けしに相違なきも獨逸海軍は更にこれ以上の大損害を蒙り、夜暗に乘じて敗走遁竄し辛ふして全滅を免るを得たり、此れが爲め獨艦隊は今後數箇月の大修繕を要し其修繕後と雖も重ねて英海軍に敵す可らざるの悲境にあり、此海戰の結果として獨逸に對する海上封鎖は愈々完全に實行せらるゝに至り各方面陸軍の成功と相待ちて聯合軍の攻擊力を益々優勢ならしむるを得たり、此の悲慘なる海戰に關する一種の喜劇と云ふべきは獨逸當局の當初の態度にして、彼等は頻りに獨逸海軍の大勝利を云々し、努めて自國の受けたる損害を隱蔽し盛んに英國側の損害を誇張し、以て動もすれば沈滯せんとする國內の人氣を振作せんと企てたり、此れ極めて淺慮の策たりしや論を待たず、何となれば數日を出でず此海戰の眞相世界に知れ渡り、獨逸政府も亦た遂に晚蒔ながら當初隱蔽せし沈沒各艦の名稱を發表するを餘儀せられたればなり、該海戰後獨帝はヴイルレム・ハーフエンに到り(六月五日)大海戰に參加せし各艦の代表者を引見し其功勞を讃美するの勅語を賜へり、其中に曰く

優勢の英國艦隊の來るを見て朕が艦隊は之と戰へり、其結果如何なりしが、英國艦隊は大敗せり、而して茲に初めて一大鐵槌は英國艦隊の上に加へられ、英國の世界制海權の後光は乍ち消滅せり、宛も電光の如く大海戰の報知は世界に廣まり到る處の獨逸人及び我同盟國人を前例なきほどに歡喜せしめ

たり、此れ即ち北海海戰の成功の結果なりと。

然るに實際の結果は此と全然反對にして北海戰の眞相一たび明なるや世界到る處の獨逸人及び其同盟國人を痛く失望落膽せしめたり。

斯くて海陸兩方面に於て聯合諸國の旗幟頗る振へるに反し獨墺の氣勢漸く擧らず、兵器彈藥に不足なく、人民の食糧亦た辛ふじて補充の途ありて聯合諸國の封鎖に堪へ得べしとするも、其最大困難は兵員の補充にあるもの丶如く、偶ゝ聯合軍攻擊の焦點たる方面に當りては、例せばガリシヤのレムベルク方面又は北佛ピカデイ方面の如く、其時どきに尙ほ十分の豫備兵を置くことを得べしとするも、其最必要以外の方面に於ては自ら大に手薄ならざるを得ざるべく、且つ兵員の素質に於ても是より次第に粗惡となるの傾向を免る能はざるべきなり、現に佛英軍の爲め俘虜となりし獨兵中には十七歲の少年少なからずと云ふを以て見れば已に一九一六、七年度の徵兵を募集せること察するに難からず、又獨軍が近來其兵の數と質に於て著るしく實力を損減したりと推斷すべき理由は從來孰れの國よりも猛烈に戰ひし結果已に其最精英中より四百萬人の死傷者を出だせる一事に（就中ヴエルダン五箇月の攻擊のみで六十萬の損失）ありと云ふべく、更に近時ピカデイの戰線に於て佛英軍は敵の機關銃、重砲を多數に鹵獲せしことにあり、蓋し斯の如きは從來曾て聞かざる處にして、獨軍已に從前の精英を缺き其兵數亦た全般に亘りて充實す可らざるに至りしこと察するに足れり、ナポレオン大帝の露國を討つや其軍三十二萬五千を算し、就中佛國兵十五萬五千人あり、其敗れて國に歸るもの將校士官の一部を除き殆んど皆無なりしと云へり、此後數月にして帝は二十五萬人を帥ゐてサクソニーに進軍し尙ほ敵の聯合軍を敗ることを得たる

も、已に其兵の素質從前の如くならず、是より大戰を重ぬる毎に補充益ゝ困難にして又軍馬の供給意の如くならず、グロス・グエルシエンに勝ち又たドレスデンに勝ちしと雖も精鋭の騎兵を缺きしを以て勝利の成菓を收穫すること十分ならず、遂にライプチヒに大敗しウォトタルーに覆滅せり、帝をして終まで其老錬の精兵を有せしめば假令ウエルリトン、ブリユヘルありと雖も未だ容易に其目的を達すること能はざりしや想像するに足れり、今後の獨墺亦た最も精兵の補充に窮すべく、聯合諸國の將さに乘ずべきは主として此の敵軍の弱點にありと謂はざる可らず。

論者或は云はん兵數の不足に困窮するは單に獨墺に限らず、露國の如き多數の俘虜を出だし死傷者を出だし、佛國亦た初めより敵軍の最精英に接衝したることなれば其蒙りし所の損害決して少なからずと、是れ然り、然れども露國が兵員の補充に餘裕ある一事は其最も頼みとする處にして、露の當局曰く假りに今後露軍の損害が從來に倍加するも尙ほ五年間の戰爭を支へ得べしと、佛國に至りては開戰以來消極的作戰法に由り極力兵數の損失を少からしむるに努めたれば、過去二年間に於ける其損害（卽ち二百萬人）大は卽ち大なれども獨逸の一半强に當るに過ぎず、是より最後の大攻勢を執らんとするに當り佛軍の實質は遙かに獨軍に優れりと云ふは疑もなき事實ならん、過日の外電に佛軍の總帥ヂョフル將軍が米國の新聞記者團を引見して、余は今日西部戰場に於ける佛兵の數が開戰當時に於けるより眞實に多數なることを諸君が明瞭に了解せんことを欲するものなりと云へり亦以て吾人の推測を裏書するに足る、而かも聯合軍側の大に賴みとする所は唯だ單に是より佛露の兵數が獨軍に對し益ゝ比較的優位を占めんとする傾向ある一事のみに非ず、兵器彈藥補充の事亦た敵國と對し大に人意を强ふするに足るもの

あらん、蓋し獨墺の兵器彈藥に關する補充力は依然として偉大ならんも、是より原料缺乏等の理由により漸く減少することを免る能はざるべし、之に反して佛國は過去二年間の辛苦經營の結果として兵器彈藥の製造力は非常に擴大せられ、重砲其他の兵器の改良亦た頗る見るべきものありて殆んど獨逸を凌駕するの概あり爲めに自國軍隊に供給して毫も不足を知らざる耳ならず亦た露國に多分の供給を爲すに至れるは疑を容れず、現に露軍が昨夏の苦き經驗に顧りみて鋭意其兵器彈藥の補充に勤むるに當り、我日本よりの補給の外、佛國より亦大に補給されりしは露國の軍隊が數回に及び佛國に派遣せられし一事を以て亦た察するに足れり、即ち佛は兵器を供給し露は兵員を供給し相互に有無を通ぜんとするに非ざるなきを得んや。

然れども開戰第三年以後に於て聯合軍側が益〻其兵力の優勢を加ふべき觀測を維持する爲めには英國大陸軍の編制已に殆んど完成せる一事を看過す可らず、故キチネル卿は開戰劈頭に於て此戰爭が少なくとも三年を繼續すべしとの說を發表して世人を驚かせしが、是れ流石に能く敵を知り又は自己を知る名將の名言として今に咀嚼せらるゝ所なり、即ち該三年說の如き獨逸は十分の開戰準備あるも聯合諸國は戰備頗る不十分にして開戰後數年の準備を要すと爲すものにあらずや、實に卿が在職二箇年間鋭意編成を急ぎし其勞空しからず、今や卿は其身不幸にして北海に沈沒するも卿の遺業たる英國大陸軍は其編成已に完成し方にピカテイ方面に於て最後の大開展に從事しつゝあり、獨逸已に兵數の不足に困まんとし、佛國亦已に兵數の最大限度に達し此以上擴張の餘裕を存せざるに際し、英國の新鋭數百萬人將に西方の戰線に立たんとするは最終の戰局に向つて至大の影響あるものに非ずや。盜兒を見て繩を綯ふの愚

を笑ふを休めよ、寧ろ聯合諸國の誤を見て其仁を知らんことを要す、而して繩索已に成りて豎兒の途に縛に就かんこと毫も疑を容れざるなり。

（二）

三年說を唱へしキチネル卿をして今の戰局を見せしめば彼は果して殘る一年を以て戰爭の終局を見るを得べしと爲すべきや否や、試みに二年以前の今頃に溯り當時世間一般に戰局の前途に對し如何なる觀測を爲せしかを見よ、當時に在りてはキチネル將軍の如く特種の知識を持ちしものの外、今次の戰爭が二年以上の久しきに及び、三年に入るも更に前途の見込確かならざるべしと豫測せしものは殆んど一人も見出す能はざりしが如し、最も普通の輿論は三ヶ月より短からず六ヶ月より長からずとなし、是れ文明列國が驚動すべき經濟の破壞、戰慄すべき人命の損失に對し到底半歲以上に亘り忍耐し得可らずとの論據に立ちしなり、而してキチネル卿の三年說に對しては或は以て獨墺に對する一種の威嚇に過ぎずと爲し、又は文明社會の財政、經濟に通ぜざる武辨の迂濶なる作戰計畫に外ならずと爲し、文字通りに卿の三年說を解したるものは甚だ寥々たりしなり、然るに事の實際は如何、二箇年已に過ぐるも各國孰れも戰時財政に窮せず、此以上更に一年、二年を繼續するも財政に行詰り止むなく屈服すべく思はるる國は一國も見當らず、窮せんとすれば則ち通じ各種の遣繰手段を須ゐれば前途尙ほ綽々餘裕あるは疑ふ可らず、蓋し此れ各國財政經濟の打擊酷甚ならざるが故に非ず、交戰各國の財政、經濟の破壞は實にブロッハ初め戰爭不可行論者輩の曾て指摘したるに違はざるなり、而かも尙ほ且つ戰爭の繼續し得らるゝ所以のものは破壞的結果の意外に輕微なるが爲めに非ずして寧ろ其豫期以上餘りに多大なるに因れり、此

れ如何にと云ふに、今交戰團の孰れが最後の敗者たらんとするも、其敗者たらんものは或は本國に又は殖民地に多大の割地を命ぜられ又は堪へ難きの賠償金を徵集せらる可きは必然の成行にして、敗者たらんものに取りては今年亡ぶるも明年亡ぶるも財政、經濟の亡國たるは一なり、而かも萬一にも勝者たることを得るに至らんか、開戰以後の大損害を償ひ得べき耳ならず又敵に對し當分經濟上の競爭者たること能はざる底の打擊を加ふを得ん、是れ各國が國家存立の必要上又は民族的大野心を滿足せん爲めに此乾坤一擲の大戰爭を開始して、裡面には已に財政、經濟の未曾有の破壞に迫られつゝも、中途にして姑息の平和に安んずる能はざらんとする所以なり、之を市井の日常事に譬へんに、人あり試みに其資產の一半を取りて投機に着手せりと假定せよ、彼れ勝てば可なり假令全然損失するも必ずしも甚だしく不可ならず、彼れ少しく手を燒きしに凝りて前途復た相場師たらずと決心せば更に大に可なり、然れども其損失の金額單に資產の一半に止まらず資產以上幾萬の負債を起して投機を試みて敗を取れりとせんか、殆んと破れかぶれの燒腹に苛ら立ち、只だ萬一を僥倖して進んで勝つを求め退いて善後策を講ずること能はざる可きなり、獨墺の如き是より其戰況の漸く振はざらんとするに從ひ平和を希望するの情念愈々切なるに從ひ却て益々平和に遠からざるを得ざるに至らん、是れ交戰國中能く戰局の實況、國際關係の眞相を辨識するものの脚地よりする觀察なりとす。

之に反し若しも戰局の實況、國際關係の眞相を辨識せざる一國民ありとせば如何、例せば獨逸國民の如く獨逸の最後必勝を期待し、或は聯合諸國の結合十分堅固ならず或る時機に至らば必ず相互間の分離を來し爲めに獨墺を利する處あるべしと信ずるに於ては此の誤信は平和保進に便利すべきや否や、試み

に獨逸人民の交戰心理に就て觀んに、現今獨逸に於ては平和を希望するの人情頗る一般に認むべきものあるに似たり、然れども此れ當初此戰爭が短期にして獨逸の勝利を以て終るべしと思惟せしも、其長期に亙らんとするを見て寧ろ速に媾和して有利の條件を收めんと欲するものにして、其求むる媾和は聯合諸國を敗者とし獨逸を勝者としての媾和に外ならず、例せばアルサース・ロウレーンを返還するに對し佛國より巨額の賠償金を獲得し、獨逸殖民地の返還と交換に白耳義占領を撤回し同時に同國に對しては永久一種の保護權を手握し、更に露國に南部ガリシヤを與ふる代償に墺國をして塞爾維、黑山兩國を合併せしめ且つ波蘭を露より奪ふて獨墺に附庸たるべき波蘭王國を建立すと云ふが如き條件の下に平和克復を希望するものなれば、之を聯合國側より見れば斯の如き媾和希望は到底出來可らざる相談に外ならず、故に過般此意味の媾和希望が獨逸宰相の口より宣明せらるや乍ち英國首相の反駁演説を喚起したるは素より當然にして毫も怪むを須ゐざるなり、蓋し獨逸民族の心理狀態は一種特別にして、彼等は開戰の責任を以て聯合國に在りとなし、獨逸は文化道德を以て世界を主宰するの天職ありとなし、其富强盛運の隆々赫々たる遂に列國の猜疑嫉猜を招き以て今次の開戰を視るに至れりと確信せり、所謂汎獨逸主義者の理想は即ち此の心理狀態を素地として起れるもの、彼等思へらく佛國は腐敗し、英國は老朽し、露國は半野蠻なり、獨逸の此等隣邦に對する宛も往古上帝の選民たる猶太民族がカーナン地方の邪信民族に對するが如く、之を退治し其國土を押領するは獨逸民族が上帝より受けたる特許に屬すと、獨逸が近年其富强に任せて益々横暴侮慢の振舞ある渾て此心理狀態より發す、故に今次の戰爭に付ても彼等は毫も其最終の勝利を疑はず、假令當初期待せしが如く勝を一氣呵成に制する能はずとするも最終の勝利

に至りては必ず獨逸に歸すべきものとして疑はざるなり、是れ則ち彼等に平和の希望あるも其今日之を實現す可らざる所以なり、且つ現在の戰局が獨逸に取り頗る不利の狀況に在るは世界周知の事實なれども、官權萬能の獨逸に在りては國民は戰局の眞狀を知るに由なく、且つ彼等が其軍隊を信じ政府を信じ、自國の運命を信ずるの頑迷今日の如くなる間は東方にも西方にも到る處獨逸軍隊が大敗して國境内に追擊せらるゝを目擊するに至らずんば到底媾和成立の機會に接す可らず、是れ單に普魯西國民に付て然るのみならず南獨逸、而かも巴威利の如く平生普國に好からざる地方に於ても然り、現に巴威利國軍隊が戰線に立ち最も勇敢に戰ふの一事亦以て之を證するに足れり、抑も汎獨逸主義の妖夢は今や獨逸民族一般を襲ひつゝありて、大獨逸帝國の保護と利益に與らんとする熱情は普國以外に在りても毫も普國に讓らざるものあり、是亦た然も在るべきことにして、汎獨逸主義の經綸の一端たる歐亞貫通の陸上及び河海連絡の計畫に付て觀るも利益の一般に分配せらるべきこと分明なればなり、即ち此の歐亞交通計畫に由れば陸上に於ては白耳義アントウエルプより伯林、維那、君須丹丁那堡を經て波斯灣に達する縱貫鐵道を經管し此間諸國の關稅同盟を行なはんとするものにして、若しも一たび此計畫を成就するに於ては、是より一轉して印度を脅かし印度洋の制海權を占有するに至らんこと難しとせず、即ち英國の印度洋沿岸に於ける各殖民地を中斷して別に獨逸民族の殖民帝國を此方面に開拓するに至らんこと想像に餘りあり、現にアントウエルプと君府の間には一週二回の直通急行列車を運轉しつゝあり、是れ戰勝後に來らんとする歐亞直通急行列車の前提として歡迎せられつゝあり、斯の如き妄想に耽りつゝある獨逸人民が戰局に多少の不利あればとて容易に退讓屈服せざる可きは睹易き道理にして、彼等思へらく國難は

天以て我民族の信念を試練する所以、長期戰より來る困難の如きは偶〻一時の辛抱を要するのみ、若夫れ一朝戰勝ち平和克復を見ば汎獨逸主義の理想は直に事實となり眼前に現はれ來るべく、戰時の困苦は必ず幾倍して報ひられんと。

（三）

以上觀察に基づきて戰局の前途をトせんに、今や交戰二箇年の後に於て聯合軍側は已に分水嶺の絶頂を越えたりと謂ふべく、若しも從來の戰局に於て獨墺側は百中五十五の利を占め聯合側は其四十五を占めたりとせば今や比例を顚倒し露佛英伊は多少優勢の地歩を占め得たりと謂ふべし、之を開戰以來久しく獨墺の猛攻烈擊に苦しみ、相顧みて軍備不整に惱みし狀態に比較せば聊か以て人意を强ふするに足れるが如きも、此より頑强の獨逸を屈服せしむるまでには尙ほ甚大の努力を要し、決して輕々に終局を期す可らず、先づ露國方面に付て之を觀んに六月初旬ブルシロフ軍が其眼覺ましき大運動を開始し以來已に三箇月を經過するも未だガリシヤの三分一を占領せるに過ぎずして、更に進んでその大部分を略し、終に波蘭土の全部を恢復せんとするが如きことは極めて難事に屬すと云はざる可らず、殊に最近獨の名將ヒンデンベルグは東方戰線の總司令長官に任ぜられたりと云ふを以て察すれば敵は何れの部分に於ても最も頑强の抵抗を試むべしと假定せざる可らず、但し獨墺側に於て昨夏露軍が苦みしと同じく兵器彈藥の缺乏の爲めに苦むこともあらば大に僥倖を得べきも、左もなき限り到る處敵を塹壕より驅逐して進まざる可らずして、露軍の苦辛亦た名狀す可らざるものある可し、西部戰線に至りては塹壕の防備最も嚴重にして、奥行き約十哩の間に三重の備あり、第一塹壕より第三塹壕に至るまでを破壞し盡して始め

て一段落を告ぐる譯なれども、其後方に至らば更に他の塹壕線ありて又同一の順序を繰返して之を破壞し拔取らざる可らず、但し現在の塹壕線は過去一年有半の久しきに亘り工夫に工夫を凝らして築成せるものなれば地下の金城湯地と云ふべき堅牢のものなれども、是より敵軍が退却の際に後方に築かんとするものは自然現在のもの程堅牢なること能はざるべしと雖も、假令不完全なりとするも塹壕戰の容易ならざるは開戰以來の苦がき實驗により知らるゝが如し、且夫れ最近活動開始以後已に二箇月に及ぶも未だソム方面の第三塹壕を拔くに至らず、之を拔くも延長二十五哩内外に過ぎずして西部戰線二百哩の僅僅たる一少部分のみ、全線に亘りて現在の塹壕線を破壞し敵を其後方線に追擊するまでに尙ほ幾月を要するや知る可らず、ウエルダン方面の如き僅々其東北部數哩に亘りて少しく突進を敢てするを得たる耳、即ち今や戰機遂に一轉して聯合軍始めて一般に攻勢を取り最後の大努力を開始せるが如くなるも、僅かに其序幕を開くを見る耳、巴爾幹半島に於ては獨逸と土耳其の連絡を遮斷して勃爾牙を壓して塞爾維、黑山兩國の囘復に成功し、其他伊太利はアドリヤ海東岸を攻略し、露國は波蘭士を囘復し、白耳義は其本領を囘復し、佛國はアルサース・ロウレーンより獨軍を一掃し、以て獨墺をして各々城下の盟を爲すに至らざるも、少なくとも之をして最後戰勝の絕望なるを事實により認定せざるを得ざるに至らしむるまでには尙ほ多大の日子を要すべきこと察するに餘あり、殊に吾人が記憶せざる可らざる一事は是より敵軍退却して戰線の縮少するに從ひ其兵數に餘裕を生ずべく、防禦力に於て次第に勢力を增加するの奇觀を呈せん、是れ數の上に於て耳然るに非ず、獨墺軍益々追擊せられて其祖國以內に退却するにも至らば絕望の極更に一層の死物狂ひを演じ、聯合軍をして幾度か敵の痛擊に惱ましむることもある可

し、現に世間傳ふる所によれば獨逸の最高幹部は聯合側が彈雨を犯し怒濤の如く遮二無二押よする日の到來する迄兵士の生命を成るべく損せざる樣注意するが爲め、今や獨軍の戰線幷に塹壕内に於ては大尉級以上の士官を見ること幾んと稀にして上級士官の多くは戰線の最後に備へ居れりと云ふもの亦是れ一種の消息と云ふべく、獨軍最高幹部の如何にも用意周到にして戰機一轉の今後と雖も乍ち敗北潰走するが如きことなく、聯合軍をして容易に最後の勝利を誇らしむるに至らざるや知るべきなり、但し玆に一の考慮すべきは獨軍不利の形勢一たび定れる後、獨逸の人心が尙ほ且つカイゼル及び軍人派の指導に服從すべきや、既に彼等の爲めに大に誤られたること、遂に解悟することなかるべきや否や、と云ふの一事是れなり、文明國普通の人情よりせば獨軍果して最後の大敗に近づくにも至らば獨逸人民の最も健全なる意識を有する部分に於ては必ずや普魯西軍國主義の橫暴が正義人道と相納れざるを覺り、國家民人を亡破の間に救ふは一大革命を起してホーヘンツォレルンの主宰を脫するより外途なきを思ふに至るを以て最も自然の成行と謂はざるを得ず、若しも斯る覺醒の起るを期するを得べしとせば戰爭の終結亦た比較的に速なるべきは想像するに難からず、然らば獨逸の人情は果して普通文明國の人情と同一なるや否やと云ふに、吾人は其甚だ特殊にして他と異なれることを思ふ、往古羅馬の史家タイタスの眼に映ぜし獨逸人民は頗る武勇率直にして、自由を愛し、優秀人種の資質を有せしが如くなるも、近來の獨逸人は千有餘歲に亘る幾多の逆遇、即ち匈奴人の征服、三十年戰爭の慘劇、ナポレオンの蹂躙等の爲め其性質拗曲して、一種の猶太人根性を有つに至れり、カント、シエルリンク、ギヨーテ、フエヒテの如きチウトン人種本來の純粹にして偉大なる素質を示現すれども、フリドリヒ大王、ツラチユケ、ビスマーク、

モルトケは寧ろ非道義的なる威力崇拜の示現にして、最近の帝國再與以來は唯物的傾向殊に著るしく、武力を以て世界を一統し、外は權力の慾を擅まゝにし內、肉體の慾を充滿せんと欲するを專念とす、故に其見識透明ならず、其態度公正ならず、謀破れて自省反正の途に出づるを知らず、只益々我意に反するものを怨惡す、是れ則ち今回の大災禍を招くに至れる所以にして、亦た彼等が其容易に覺醒して公明の見地に歸す能はざらんとするも是れ其拗曲にして不透明なる心事に因らずんばあらず、此れ吾人が戰局の前途を眺望して平和克復の甚だ容易ならざるを思ふ所以なり。

然らば平和の來る何の日ぞ、半歲の後に在るか、一年の後に在るか、或は二年の後に在るか、吾人は聯合軍の必勝毫も疑を容れざるを知る、然れども其何の日に來るべきは得て豫言す可らず、曩日故キチネル卿の將に露國に向ひ英京を去らんとするや、人あり卿に向ひ平和克復の期日を問へるに對し、來年五月にも至らば或は平和の曙光に接せんかと云へりしと傳ふ、蓋し以て中らずと雖も遠らずと謂ふべきか。

大隈首相の態度を難ず

大隈首相辭職內奏の說七月の初に世間に傳はりてより八月上旬其居据決定の發表せらるまで約四十日間、世間一般の噂は首相の辭職と後任の沙汰風說を以て持切り、政府部內の官僚は孰れも皆な浮足となりて業務其手に附かず、內治外交爲めに影響を蒙りしもの舉て數ふ可らず、內閣大臣、書記官長、與黨の領袖等交も〳〵口を開き或は內奏の無根を云ひ、或は辭職の無實を云ひ、或は官僚の陰謀を誣ひ、或

は反對黨の揑造を語る、然れども風説は毫も止まず却て首相を初め某々巨頭の往來頗る頻々たるありて風説を支持するものの如く、若しも此際大隈侯親ら一言内奏の無根を言明せば乍ち風説も止み人心も安定せしならんも、宛も言を左右に托するものゝ如く遂に一言之を否定せず、世人をして遂に内閣大臣内閣書記官長、政黨領袖孰れもしら〳〵敷き虛僞を語れるものと斷定せしむ、大隈内閣成立して以來奇怪事少なからずと雖も今回の如き不思議なる現象はあらず、之を孰れより觀察するも遺憾極りなきことたらざるを得ず。

吾人の確聞する所に因れば事件の眞相は大略左の如し、卽ち去る六月二十四日大隈首相は　闕下に伏して老齡大任に堪へざるを理由に辭意を内奏し寺内朝鮮總督を適當の後繼者として推擧す、七月三日西園寺侯京都より東上す、同五日寺内伯京城より出京す、是れ首相の要求に由り伯が其日定を繰上げたるものとして知らる、十日隈侯寺伯と會見して其辭意奏上及び伯を後繼者に擬して奏請せることを告げ、現政府の政策を踏襲するの必要を說き加藤同志會總理と聯立して内閣を組織せんことを勸誘す、之に對し寺内伯は若し大命降下せば必ずしも後繼内閣を組織するを辭せんとするに非ざるも、伯の志は擧國一致の實を擧げんとするに在り一黨一派に偏し聯立内閣の組織を欲せざるの意を明かにす、二十二日首相は山縣公を訪ひ改めて寺伯に對し交涉を懇托す、二十九日首相は未だ山縣公より最後の報告に接せざるに關はらず寺内伯は後繼者たるを肯せずと推定し、伏奏して適當の後繼者なきを以て當分居据り奉公を勵むべしと言上す、八月一日山縣公參内、隈侯が辭意撤回の再内奏の事を拜承して愕然たり、此日高田文相は首相が居据に決定せるを宣言す、二日隈侯山公を訪ひ辭意撤回に非ざるを辨疏す、此より山縣公は

寺伯隈侯の間に介し大に調停に努めしも双方の意志遂に相容れず、十一日首相山公を訪ひ居据の決心を告ぐ、以上は此れ經過の大略なり、即ち之に由りて觀れば隈侯は始め辭意を奏上するに際し條件を附し後ち其條件の成立せざるを理由に辭意を撤回せるものと謂ふべく、又た寺内伯に對しては伯恪勤の性質上承諾し得可らざる難題を提議し其躊躇するを觀て伯が後繼內閣の組織に意なきを誣ひ遂に居据の決心を奏上せるものなり。

大隈首相にして眞に老齡大任に堪へずとせば何故に無條件に辭意を奏し謹んで聖鑒を仰がざるや、首相として條件附きの辭意を奏するは補弼の重任を私有物視するものにして、即ち大權を侵害するものならずや、英國の如きに於てすら未曾て首相が條件附辭表をなせし例を見ず、君主の要求により後繼者の推薦をなすことはあり、然れども其要求なければ推擧を爲さゞるを臣道とす、況んや大權の尊貴至上なる我邦に於てをや、大隈侯の這般の態度は臣子の分を忘却して大權を侵犯するものと云ふも侯果して辨疏の辭あらんや、又其の山縣公、寺内伯に對する態度の如き頗る政治家の公德に背き朋友の情誼に悖るものと云ふべく、首相が公伯を飜弄する亦た實に甚だしからずや。

想ふに隈侯と雖も第二の居据を爲さんとして敢て這般の混雜を惹起するは其欲する所に非ざりしなるべし、但た前議會に於ける貴族院に對する妥協條件の手前、這般の狂言を演ずるに至れるものならん、然れども此亂暴極まる狂言の爲め時局は毫も安定せず、單に隈閣の地位の益々危殆に瀕する耳ならず天下の人心は將に其繫がる所を失なはんとすと云ふも不可なし、嗚呼天與の好機を捕へて潔よく辭職せず、強ゐて政權に執着せんとする老首相の責や實に輕からずと謂つべきなり。

大懸賞募集・九月號

◁面白く爲めになる事日本一の雑誌▷

講談倶楽部

■江戸長者 奈良茂（新講談） 田村西男

▽帶刀の戀（新講談）…大橋青波

▽妖婦お玉（新講談）…番茶樂齋

▽戀女房（寫眞小説）…白根甲斐雄

▽長恨歌（挿繪小説）…畠山秋更

■出世美談 林謙三郎（新講談）…天野雄彦

■戰爭小説 ベルダンの秘密……松本園子

■女義太夫美人史……堂摺老人

■義士外傳 丸津田越前守（浪花節）…桃中軒雲右衛門

▽上州の小安（俠客）…筑波四郎

▽失戀の果（活動寫眞）…一記者

▽噫講釋（落語）……松廼家緑

▽覺禪坊胤榮（武勇）……楠柯樓

■千鳥ケ淵（涙夜小説） 渡邊霞亭

□活版小僧花井卓藏（新講談） 文淵

□お染久松（新講談） □九星運氣

□腰元小萬（新講談） □名流逸話

□茶番狂言（落語） □口繪優艶

□名婦傳（新談） □讀者文藝

□勝田武堯（浪花節） □懸賞繪探し

□月さまぐ（漫畫） □挿繪畫帖

□川柳くらべ（漫畫） □仙臺の演藝

□まてく袋（お伽噺） □古川柳『嫁』

□乞食になる迄（漫畫） 山田みのる

正價廿八錢 郵税二錢五厘

前金（郵税共）
四冊 壹圓拾五錢
六冊 壹圓六拾五錢
十二冊 三圓十錢

東京本郷駒込坂下

講談社

振替東京六二六九

（中付一の三）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■■早稻田大學教授中島半次郎序文

早稻田大學文學士 原田實氏新譯■■（賣行激甚）

最新刊

（世界的名著 全譯成る）

エレン・ケイ女史原著

兒童の世紀

四六判上製美本箱入

全壹冊紙數五百餘頁

金壹圓卅五錢

郵稅金八錢

エレンケイ女史の名は今や全く世界的である。女史の**至純**なる**戀愛**を高調し高尚眞面目なる**結婚**を主張し**生殖**の**權威**を唱號するは何の故ぞ其の間に生るゝ兒童を眞の**人格者**たらしめんが爲である。兒童を眞の人格者たらしむるは人類を**眞**の**人類**たらしめて**幸福と平和**と悦びとを此世に齎し**生命**に**輝**く**世界**を**創造**せんが爲である。而して其第一の又最大の準備として先づ女史の主張するものこそ所謂「兒童の世紀」である其内容は**遺傳・生殖・優生學**等最近科學的研究の結論を自由に採用して可憐なる兒童の爲に其の光焔を揚げたるものにして一般の**歐米**人に**甚深**の**印象**を與へ其主張せるところは今日の教育を導く一の**光明**となつて居る。譯者は夙に女史の**偉大**なる**思想**と人格とに敬服し多年其著作に親炙するもの其の敬仰の熱情遂に茲に女史が代表的著作の全譯となる。或は淚に濡れ或は力に輝く其の原文を移し得て餘す所なし。我が思想界教育界は本書を得て一の至寶を加へたりと云ふべし。

吉田絃二郎著■タゴール哲學と文藝 全 壹圓廿八錢 郵稅金八錢

本間久雄著■エレンケイ思想の眞髓 全 金九拾錢 郵稅金八錢

稻毛詛風著■心の呷（感想文集）全 金九拾五錢 郵稅金八錢

上司小劍著■小ひさき窓より（感想小品）全 金七拾五錢 郵稅金八錢

吉田絃二郎著■生の悲劇（感想文集）全 金壹圓 郵稅金八錢

野村隈畔著■ベルグソンと現代思潮 全 壹圓五拾錢 郵稅金十二錢

西澤富則著■歐洲文藝界の逸話 全 壹圓貳拾錢 郵稅金八錢

稻毛詛風著■批[illegible]評[illegible]論 全 金壹圓廿錢 郵稅金八錢

東京市神田區表神保町七番地 ■大同館發行■ 振替貯金口座東京八七七貳番

（中付一の四）

信な用き店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

公論

☆國家中心主義個人中心主義 二思潮の對立・衝突・調和

法學博士 吉野作造

はしがき

その最も精錬された純白の形に於て、國家中心主義と個人中心主義とは、議論として本來何等乖離矛盾すべきものでないに相違ない。然れども「眞理」はもと多くの場合に於て赤裸々に出現せずして、傳說や風習や又は時代思潮や、果ては誤解、偏見等の衣(ころも)を着て吾人の眼前に展開するものなるが如く、以上の二主義も亦實際に主張せらるゝ場合には、いろ〱の附隨の思想に附き纏はれ、從つて其儘の態に於ては、文句なしに正反對の學說として取扱はるゝを常とする。況して之等の主義が實際政治の上に適用せらるゝに當つては、其主義の本來當然の結論たる可らざるものまでが、得たり賢しと跳り出づるので、兩者の對立反目の外觀は一層著しきものとなる。然らざるも此兩主義は、實際政界に現はるゝ效果の點より觀れば、本來常に必しも相調和するものでもない。從つて政治家は時の宜しきに從ひ、常に此兩主義の適用を

然るべく按排するを心掛くる必要がある。

然し乍ら、此兩主義が兩々過不足なく理想的に併用せらるゝと云ふ事は、多くの國に於て實際上望み難い。そこで或る特定の國に於て、此兩主義の孰れが果して餘計に主張せらるゝを必要とするやといふ實際問題が起り得る。而して差し詰め我國に於て斯の問題が起り得るのであるが、予輩は之に對して、特に今日の場合我國に在ては、個人本位の政治的施設の急を高調力說するの必要ありと認むるものである。然るに此論に對して世上案外に反對の考を有する人の少くないのは、予の大に怪訝に堪へぬ所である。而して其反對の論據を檢するに、或は個人中心主義を說くに因りて國家的觀念を弱むると杞憂するものあり、或は個人中心主義に伴ふ多少の弊害を怖るゝに由るものあり、又或は西洋に於ける極端なる個人的思想に對する非難を聞いて之に絕對的價値を附するの誤に出づるものあり、甚しきは歐洲大戰當初の一時的現象に觀て早くも個人中心主義の末路を斷ずるものなどもありて、孰れも國家中心主義と個人中心主義との利弊並に其相互的關係を精細に研究しての上の立論ではない。專ら個人中心主義の弊のみを見ての議論である。個人中心主義が偶々若干のボロを出したからとて全然之を排斥するのは、甲といふ優等生が過度の勉强の結果死んだからとて、餘り頭のよくない而かも身體の相當に健全な乙までが、一切勉强を廢める樣なものである。西洋で個人中心主義が種々の弊害を生じたからとて、故なく之を嫌惡するは羹に懲りて膾を吹くの類ではあるまいか。

予は偏狹なる國家中心主義の跋扈する時弊に憤慨して、聊か個人中心主義の一端を鼓吹せんと欲し、先きに本年一月の本誌に於て、我國憲政の現狀及其發展策を述ぶる所があつた。而して之に對して加へられた批難の多くを見るに、概ね公平にして精細なる比較研究に根據せざる國家主義の立

場に出づるものであつた。以て如何に偏狹なる國家主義の人を誤つて居るかを想ふべきである。而して歐洲戰爭に成績の皮想なる觀察に伴ふ獨逸讃歎の風潮は、益々此傾向を甚しからしむる樣に見ゆる。

予は決して國家本位の政論政策に反對なのではない。只我國今日に流行する國家中心主義には一大陰翳の附き纏ふものあるを認め、個人中心主義の高調に依りて國家中心主義を正路に導かんことを冀ふものである。然らば個人中心主義と國家中心主義とに予輩は如何なる價値を附して居るのか、又此二主義と我國今日の政界との關係を如何に觀るか。是れ予の本篇に於て解説を試みんとする要點である。早卒になせる一席の談話、構想の疎雜と用語の不適當とが思ふ所を十分に表さしめなかつた事を遺憾とする。(八月十日)

一　團體と分子

國家は特定の個人=某々の國民といふ團體に一纏めに彙類せらるべき特別の共同標識を有する人々=の相集合によつて成るところの有機的團體であることは言ふを俟たない。こゝに『國家』の完全なる學理的定義を試むるのは、本論の目的ではない。只上に述べたところに依つて國家といふ團體の最も著しい特色の一つを明かにするを得ば足りるのである。

凡そ有機的の集合團體にあつては、全部と一部との相關といふことが最も著しい特色をなして居る。全體の運命は即ち一部の運命、又分子の盛衰は即ち全體の消長で、一方に起る一定の變化は必らず他方に一定の影響を及ぼすといふ關係がある。此全體と分子との相關の關係は、總ての有機體を通じて皆同樣であるが、然し其相關の程度は、總ての有機體に於て同一樣に密接なのではない。換言すれば、物によつて其相關の關係に粗密の差別がある。粗密の差別があるといふ意味は、甲に於ける變化の影響の他方にあらはるゝのが、或は著しいと著しからざるとの差があるといふ方面にあらはれ、又は甲に於ける變化の影響の乙にあらはる

る時間に、遲速の別があるといふ方面にあらはるゝ等の場合を云ふのである。而して此第二の場合に於ては、單に短き時間を限つて見れば、何の變化も起らないやうに見えることがあり、又場合によつては、甲といふ原因の當然の結果として起るべき事實が急に起らずして、一時は却つて其反對の結果があらはるゝやうなこともある。斯くの如く考へて見ると、有機的團體は其全部一部の相關の關係の粗密の度に從つて、色々の階段に之を分つことが出來るものと言はなければならない。

全部一部相關關係の疎密の別は、大體に於て有機體其物の單複の別と伴ひ、又有機體の組織の發達の程度に伴ふやうに思はるる。單純なる有機體に於て全部と一部との相關の關係が密接なることは、例へば之を人間の身體に觀ても解かる。健全なる身體に於ては、全體の强健は即ち分部の强健で、部分の發達は即ち全體の發達である。やゝ複雜なる家族的團體などになると、此關係は餘程薄くなる。更に進んで極めて複雜なる國家といふ團體になれば、全部一部の關係は、固より結局に於ては相當に密接なる相關の關係にあると云はなければならぬけれども、其あらはるゝ具合を其儘に見れば、元より個人の身體に於けるが如く適確迅速なものではない。是れ單純なる有機體にあつては、其の起るところの變化は概して自然的又は準自然的行動に起因するのに、複雜なる有機體にあつては、概して意識行動又は目的行動が其變化の主たる原因であるからであらう。尤も發達したる有機體に於ては、此有機體內に起るところの各種の意識的活動といふものも、自ら合理的に秩序づけられて、自然的行動に於けると同じやうな効果を全體の上に奏する樣になるものであるけれども、未だ完全に發達しない團體に於ては、斯の如くすることを得ない（有機體の發達といふ事に關しては、丘理學博士の著書に有益な研究があるといふとを聞いたけれども、旅先の事とて參照することが出來ない。篤志の方は就て參照せられんことを希望する）。殊に國家なる團體に在ては、各種の意識的行動の結果は

猶更著しくあらはれないのを常とする（無論著しくあらはるゝ事もあるが）のみならず、時としては相反撥する効果を現出し、一方の發達は他方の發達を犧牲に供するといふ風に見ゆることもないではない。固より結局に於ては矢張り全部の發達は分子に益し、又分子の發達は全體に利することと疑なきも、一時的の短い着眼點から觀ると、全體の發達の爲めに分子が犧牲に供せられ、分子の充實の爲めに全體が傷けらるゝといふ現象がないではない。

一體意識的活動の盛に行はるゝ有機的團體にあつては、多少の差はあるも、全體分子兩者間の右の如き一時的不調和といふものは、概して免れぬものゝやうに思はるゝのであるが、此關係は國家といふ團體に於ては殊に最も著しいやうに思はるゝ。詳しく言へば、「國家」の爲めになすところの一切の施設は必ず「個人」の爲めになり、又「個人」の爲めに爲すところの一切の施設は必ず「國家」の爲めになるのであるけれども、一時的に觀れば、兩者は常に必しも調和するものではなくして、多少の犧牲を一方に求むることなくして、他方の發展擴張を計るといふことは、多くの場合に於て甚だ困難である。是に於て國家の名に於てなさるゝところの一切の政策、一切の施設は、其直接に「國家」の爲めにするものと「個人」の爲めにするものとを問はず、現在當面の問題としては、常に必ず多少の禍を何れかの方面に殘して行くものである。早い話が、國家の力を張る爲めに軍備を擴張すれば、國家の分子は租税の重き負擔に困しみ、又個人の發達の爲めに言論の自由を無限に許せば、他方必ず國家の統一を弱むる結果を來たすではないか。故に理論としては、兩者の調和、國家個人双方の圓滿なる併進的開發といふことは、之を言ふに易いけれども、實際の問題としては、實に兩者の調和は相當に六ケしい。そこで之に處する實際上の主義としては、其國其時の事情に從つて「國家」なり「個人」なり孰れか一方に主たる着眼點を置くを要すべく、而して他の半面に於ては之によつて起る禍を修補するを力むべく、斯くして出來る丈け兩者を調和して

行くといふ外はあるまい。總明なる政治家のなした跡を觀ると、多くは此流儀で遣つて居る。近代に於ける國家中心主義のチャムピオンなるビスマルクも、軍備の擴張などに莫大な金を使つた傍ら、他方に又大に社會政策を實行して、一般國民殊に勞働者階級の個人的幸福を圖ることを怠らなかつた。然しながら世の多くの凡庸なる政治家は、其見識概ね斯くの如くなるを得ず、其好むところに偏して、識らずして國家運營の正路を踏み外づす者が多い。是れ近來の政界に國家中心主義と個人中心主義との爭の常に絶えざる所以である。

二　國家中心主義と個人中心主義

前述の如く、國家の政策の根本的決定に方つては、國家中心主義と個人中心主義との二つの主張が兎に角事實上對立して居ることは疑ない。蓋し全體を重んずる思想と分子を重んずる思想との對立が、複雜なる有機體に於て免るべからざるものなる以上、我々は國家的團體に亦此事あるを怪まない。從つて歴史に遡つて研究すれば、兩者對立の觀念は餘程昔からあつた事を認むるものである。少くとも哲學者等の間には、彼の希臘の時代に於て既に、『全體は其發達を圖るに當つて分子を犧牲にするの權利ありや』とか、又は『全體が分子に對して犧牲を要求し得るの學理的基礎如何』といふやうな問題が、頻りに研究されて居つた。但だ然しながら大體に於て、昔は國政運用の衝に當るものは少數の特權階級で、所謂『國家の爲めの政治』によつて犧牲を要求せらるゝ多數者は絶對的服從に甘んじて居つたから、分子の利益の爲めの代辯は、實際に於ては何等の勢力もなかつた。從つて個人中心主義と國家中心主義との對立の觀念が昔からあつたといふのは、一個の議論として少數の哲人の間に存在したといふに過ぎぬので、一般の國民の意識の中に考へられて居つたのではない。況して之が國民的活動の意識的基礎となるといふやうなことは、全然なかつたのである。

國家中心主義、個人中心主義二思潮の對立の觀念が、國民的意義に於て明白になつたのは、言ふ迄もなく第十九世紀以後のことである。即ち國政の運用が少くと

も主義として、國民の意識的活動の基礎の上に置かれてから後の事である。玆に『主義として』といふ意味は、國政の運用が完全に國民一般の意識的活動の基礎の上に置かるゝといふ事は、長き進歩の過程を經て初めて實現することであつて、第十八世紀が第十九世紀となつた爲めに、一躍して之が完成したのではない。けれども其論據は世紀の代ると共に開かれた。即ち國民全體の運命に關する政治上の問題は、從來は少數者のみの左右するところであつたのが、今度は改めて國民全體の關心すべき筈のものである、少數者の壟斷すべき事柄ではないといふ原則が、第十九世紀の初めに於て明白に定められた。一旦此原則が定まると、それが段々に發展進化して其勢を停めない。當初此原則が定められた時は、原則の示す通りに國民の全體が悉く政治問題に關心するといふ程度に其智見が發達して居なかつたから、そこで事實上は、國民全體の名に於て國民中の開明したる一部分が、從來の傳説的少數階級から政權の讓與を受けたのである。此一部が政權を讓受けたのも、畢竟政治は即ち全體の關心すべきものなりといふ主義に基いたのである。是れ予の特に「主義として」と斷つた所以である。而して根本の主義が此處にあるのだから、世の進むと共に智見が一般の下層の人々にも擴がれば、自然に當初の原則が段々に其本來の面目を發揮して、政治に關心する國民の範圍が擴まらざるを得ない。尤も、當初國民の名に於て政權に關係した一部の者は、一旦政權を掌握すると、長く之を自分等の手に壟斷したいといふ不當なる慾望を起すを常とし、之を更に多數人の間に擴げるといふことを欲しない傾向がある。その結果として、國政の運用を一般國民の意識的活動の基礎の上に置くといふ原則の實現は、其都度多少の困難に遭遇しないではない。此事は最も明日に各國の選擧權擴張運動にあらはれて居る。が、然し、大勢を觀れば、第十九世紀の初めに定まつた所謂デモクラチック・プリンシプルといふものは、今日に至つて益々其勢を張つて止まない。斯くして分子を重んずるの主義、個人〳〵を主として着眼す

るの政治主義は、現代に於ては哲學的思索の領分を超えて、今や動かす可らざる實際上の一政治主義となるに至つた。從つて又個人中心主義は、國家中心主義に對抗して有力に主張せられ得る丈けの力を備ふるに至つたのである。

加之、從來の傳統的支配階級が、其階級擁護の無意識衝動よりして、國家中心主義の名に隱れて個人中心主義の要求を排斥するの態度をとつたといふ事が、自ら個人中心主義の國家中心主義に對抗する立場を一層鮮明にした。尙又、一切の國家政策の影響を、よかれあしかれ、最も適切に受くべきものは、一般國民なるが故に、彼等が國政の運用に實質的に干與し得るの望みを有するに至れば、從來壓迫されて居つた彼等としては、先づ以て自家の利害を最先に主張すべきは自然の勢である。此等の點もまた右の二つの主張の對立して爭はるゝ關係を一層强めたものであらうと思ふ。斯くの如くにして、今日では、國家中心主義と個人中心主義とは、實際の政治上に於て、同等の立場に於て論爭さるゝことゝなつたのである。

抑も此二つの主義は、其理想的意義に於ては、兩者決して相排斥すべきものではない。けれども實際上の主義としては、兩者往々正反對の關係に立ち易い。是れ恰も其極致に於て一致すべき利己主義と利他主義とが、實際上の主義としては全然相容れざると同樣である。蓋し國家中心主義によれば、眞に國家の發達を圖るには個人の完全なる發達を圖らねばならぬといふ根本の點よりも、先づ以て國家の有機的統一並びに其外部的發展といふ事を念とするに急にして、其爲めに多少の犧牲を分子に課することを顧みないといふ傾向がある。殊に國際競爭の激烈なる今日の時勢にあつては、國家の競爭力の强盛を圖るといふ必要に忙殺され、自ら專ら國家の物質力の擴張と云ふ方面に力を注ぐといふことになり易い。之と同じく個人中心主義によるも亦、個人の十分なる發達は鞏固なる國家の庇護の下に於てのみ之を期し得るといふ根本の關係を見るに先んじて、個人の生存發達の最大要件たる自由を尊重する

の餘り、動もすれば統一の爲めにする國家的桎梏を厭ふの傾向がある。其弊は犠牲奉公の精神を消磨し、國内に於ける精神的統一の緩弛を來たし、以て國際場裡に於ける敏活有效なる行動に、事缺かしむることゝなる。斯くの如く、實際の主義として觀れば、此二つの主義は兩々相排斥するやうな形になる。是れ殘念ながら亦止むを得ない。而して此兩者を併用してうまく調和を取るといふことは六ッかしいから、政治の實際に當つては前にも述べた通り、時と場合によつて其何れの主義に主として據るべきかを定むるの外はない。又實際の政治家にあつても、各々其好むところによつて據る所を同じうせざるを常とする。けれども甲に據れば必ず乙の難あり、乙によれば又必ず甲の難あることを免れないので、どの道圓滿なる結果を見るを得ない所から、政治上の主義の論として此二者の何れを主とすべきかは、何れの國に於ても議論紛々である。

さて此の議論紛々として定らないといふ事は、もと兩主義本來の關係より來る當然の結果であるが、之は政治上常に憂ふべき事かと云ふに必しもさうではない。何となれば之が又一面に於て、實際當局の政治家を牽制して國政運用の方針を誤らしめざるを得るの利益もあるからである。蓋し實際の政治家は、前にも述べた通り、自然其好むところに誘はれて一方の主義に偏し勝ちのものである。之は決して國家の爲めによろしくない。そこで我々は常に政治家を牽制して彼等をして主として甲の主義を取りつゝ又乙の主義をも顧むるを忘らざらしむるを要するが、斯くあらしむるには是非とも言論の力に依るの外はない。故に兩主義爭論の紛々たるは或る點に於ては之を放任した方がよいのである。言論の自由はもと文明國の通義であるが、其尊重の必要はまた此方面からも立論することが出來る。短見なる政治家は動もすると政論の紛雜歸する所なきに怖れて自由なる言論の壓迫を試みんとするが、之は却つて如上の妙用を阻止するの結果を來たし、寧ろ國家の進路を誤らしむることが多い。

三　歐洲に於ける兩主義の爭

國家中心主義と個人中心主義との爭は、近來殊に歐洲に於て最も激しきを見る。是れ蓋し歐洲に於て此二主義の弊害が最も切實に感ぜられ、從つて一方に對する他方の反抗が、最も著しく主張せられるからであらう。抑々第十九世紀の初頭に於て、個人中心的の自由論が起つたのも、之れ前代に於ける極端なる國家中心主義の弊害の結果＝之が唯一の原因ではないとしても＝である。然るに此個人中心主義の極端に主張せられたることの弊害も、亦第十九世紀の後半に至つて切實に感ぜられ＝國によりて遲速の差はあれども＝玆に漸く國家中心主義が再び勢を盛り返さんとして居る。そこで大體から觀察すれば、第十九世紀の初めから半ば過ぎまでにかけての歐洲は、個人中心主義の旺盛時代といふことが出來、第十九世紀の末頃から最近までのところは、國家中心主義復興の時代と言ふことが出來よう。尤も前の時代に於ても、國家中心主義が全然鋒鋩を斂めたのではなく、又後の時代に於ても、固より個人中心主義は仍然として旺盛を極めて居る。只或る一定の觀察點を基礎とすれば第十九世紀の初めから今日までの政界をば大體右の如く分つても差支なからう。要するに現今の形勢は、將に兩主義が之より大に調和せんとして大に爭ひつゝある時代と見て可なりと思ふのである。

更らに之を近代の歷史に照らして論ずるならば、先づ第十八世紀の末から第十九世紀の初めにかけて最も著しく世界を騷がしたものは、言ふまでもなく夫の佛蘭西革命である。之れ直接間接の影響を受けて、歐洲の全土は皆自由思想の一大洗禮を受けた。若し此大勢の外に超然として居つたものを强いて探がせとあらば、そは露西亞位なものであらう。然し露西亞といへども、實は全然此影響を受けずに居つたのではない。只露西亞では、其社會事情が著しく他の歐洲諸國と面目を異にして居つたから、自由運動も同じやうな形を取り得なかつたまでゝある。特權階級の壓迫が餘りに强かつた爲めに、公然たる運動として發達するを得ずして、虛無黨などの如き革命的危險運動として發達し

たのを觀ても、兎に角露西亞も亦自由思想の見舞ふ處となつたことは明かである。要するに佛蘭西革命を起點として、歐洲諸國の間には、個人的自由の思想に根柢を有する諸々の運動が、燎原の火の勢を以て振ひ起つた。之より數十年間の歐洲の歴史は、主として特權階級の獨占的支配より國家社會を解放せんとする運動の歴史である。此大勢は、夫の神聖同盟等の力を以てするも、到底阻止することが出來なかつた。只特權階級が其階級の擁護の爲めに生死を賭して藻掻き爭うたから其結果個人中心主義は意の如く開展することを得なかつた。否、中には其開展の進涉の大に邪魔された處もある。けれども個人的自由を目標として進むといふ大勢丈けは、何處の國に於ても、全然防げられて仕舞はなかつた。此事は、各國に於てそれ〳〵民本主義に基く憲法が與へられたといふ沿革に徵しても明かである。斯くの如く第十九世紀の初め以來の歐洲の歴史は、明白に個人中心主義の發展を語るものと言はなければならぬ。然しながら一歩を進めて、此主義が、其反對の國家中心主義＝或は一層適切な言葉を以て言へば國家中心主義の名に隱れて個人中心主義の進步に反抗するところの傳統的特權階級の勢力を、一擧に全然壓伏して了つたものと考ふるならば、大なる誤りである。事實を明らさまに言へば、此後者の潛勢力は、佛蘭西革命の當時に於てこそ一時大いに屛息したけれども、千數百年養ひ來つた深い根柢がある丈け、案外に强いものがあつて、個人中心主義の猛烈なる急追に遇ふや第一線の防守に於てこそ思はざる不覺を取つたけれど、第二線第三線に退いては可なり頑强なる抵抗を試みたのである。斯くして所謂「國家中心主義」は、個人中心主義の十分なる發展に取つては後漸く其の前途に横はる一大障礙たることが明になり、從つて個人中心主義は其最後の勝利を確實にする爲めには、尙幾多の困難なる事業を成し遂げねばならぬこととなつた。而して此等の事業の成功の困難は、特權階級の反抗努力に激せられて一層强く之を感じ、爲めに近來、個人中心主義者の一部の者は段々極端の方向に進むや

うな傾向を呈して居る。尤も此主義は、其唱道せられた當初に於ては、實は非常に極端なものであつた。何等の反省を經ざる破壞的色彩を帶び、盲目的に突進的に主張せられて居つた。けれども其後時勢の落ち付くと共に段々に其態度が着實になつて來たのであるが、近來に至り復た極端に奔るやうになつたのである。

近來個人中心主義の徒らに極端に奔れる事の一つのあらはれは先づ之を絕對的平等主義の流行に見ることが出來る。元來個人中心主義は、個人の價値の形式的平等を主張するけれども、社會を組織する個人の間に實質上優劣の別あることは之を認むるのみならず、其優劣二者をして各々其所を得しむるの必要をも拒むものではない。否、寧ろ、優者は其優越せる精神の能を以て社會の高處に居り、以て一般の劣者を指導する事を社會の健全なる發達の爲めに必要なりと認むるものである。故に實質的若しくは精神的の關係に於ては、少數の優者が精神的指導といふ方面に於て大に跋扈する事を決して厭はない。只社會の政治的組織の形式上に於ては、優者なるが故に政權を壟斷するといふ特例を認めざらんとするので、此點に於ては何等までも平等を主張する。故に彼等の本來の趣意は、只優者をして實質上其處を得しむるといふ承認の下に、各個人間の合理的平等を主張するに在る。然るに極端なる個人中心論者は、此事を悟らず、絕對的の平等を唱へて、優者に對してその優者として社會に盡すべき實質的の本分をも否認せんと擬するの誤に陷る。尤も斯くまで極端に個人論者を奔らしめたについては、所謂特權階級にも責任があると思ふ。けれども兎に角最近の極端なる個人中心主義が、偉人傑士の國家社會に對する精神的使命を認めず、我々の國家的生活を極めて平凡化せんとする傾向あるに對しては、心あるものは孰れも皆多少の不平を有つて居る。此不平を最も露骨に而かも多少誇張して之を表したものは蓋し獨逸のニーチエであらう。獨逸並びに我國に多く見る所の偏狹なる國家主義者も亦此型の外に出でない。

個人中心主義の極端に奔つたといふ事の第二のあら

はれは、國家的拘束の價値を無視し、犧牲獻身の德を輕んじ、通俗に所謂「個人主義」なる名の下に理解せらるゝ放逸無羈を喜ぶの傾向に之を見る。國家的拘束の價値を否認する思想は、學問上の說明としては、前にも述べた如く昔からあつたし、又近世に至つても餘程古くから唱へられて居つた。殊に自由思想の最も深き發達を見た英吉利などに於ては、第十九世紀の初めより此種の考が殆んど當時學界の定說の如くになつて居つた。只然しながら、此等の考は學理的論究の題目となつた丈けであつて、流石に實際的なる英吉利國民は、理論一點張りで押し通して飽くまで國家の束縛に反抗するといふ態度には出で得なかつた。國家の拘束を解して『必要なる禍惡（ネセッサリーイヴィル）』なりとせし當時の英國の通說の如きも、實際上束縛の必要なるを感じつゝも理論上其根據を說明し得なかつたことを示すものである。斯くして當初は、國家の束縛を事實上排斥するといふ運動は一般に起らなかつた。露西亞に起つた虛無主義無政府主義の如きは、畢竟官憲の不當なる壓迫に起因するの特別の現象である。然るに最近に至つては、國家の拘束を否認するところの思想は、段々に比較的健全に開明した國民の間に浸潤し、遂に此等の人の確信と化（な）つて、彼等の實際の行動にあらはるゝに至つた。佛・伊・英等の下層階級に、近來比較的根柢のある發達を見つゝある所のサンヂカリズムの運動の如きは其最も著しき例である。斯くの如く近來個人中心主義の極端に唱道せらるゝより來る實際上の弊害は、段々顯著になりつゝある。之は理論上直接に個人中心主義共ものの責任に歸すべきものではないといふやうな說は、議論としては成り立つかも知れない。然し實際論としては、此等の弊害は、個人中心主義に對して從來何等格段の拘束を加へず自由奔放に其主張に耽けらしめた結果に相違ない。斯くして段々國家の健全なる進步に實害を及ぼすやうになつたので、識者は漸く反省するやうになつた。是れ近來國家中心主義の傾向が著しく復活しかけた所以であらう。

個人中心主義の弊害に關する反省は、特に近來に及

んで、國際競爭の激烈と云ふ事實によつて强められた。國際競爭が激烈になれば、小國は强國の壓迫を感じて益々國力の統一を計る必要に迫られ、大國と雖も各々覇を爭うて、各自將來の地歩を占めるが爲めに益々國力を統一し國勢の發固を計るの必要を感ぜざるを得ない。元來國際競爭といふことは、國と國とが境を接して居る以上は免れないのであつて、從つて之は今日に初まつた事ではないが、併し今日は、産業の發達の爲め、更に又交通機關の發達の結果、一方には海外發展といふ内部的必要もあり、他方には國家的活動の舞臺が世界的になつたので、一層激烈に銘々の競爭心を鋭敏ならしめて居る。故に今日の國際競爭といふ言葉は、云はゞ之を昔とは全く別の意味に解せねばならぬ程のものである。加之、歐洲では、第十九世紀の前半に於ては所謂權力均衡といふことが國際上の主義であつて、五大强國連合の力を以て全局の平和を維持せんとするの考が一般に行はれて居つたが、獨逸帝國の統一成つてから以來は、ビスマルクが新興帝國保安の爲めに强いて佛蘭西を孤立せしむるの必要上、夫の同盟政策を執る事となり、而して彼の作りしところの三國同盟が漸く歐羅巴の平和を威嚇するの形勢を馴致するや、やがて又反對同盟の成立を促がしたので、遂に今日では歐洲の强國は相對立する二大同盟に分れて相爭ふといふ形勢を見ることとなつた。要するに今日では激烈なる國際競爭といふことは歐洲諸國民の最も切實なる當面の大問題となつて居る。從つて又國家内部のあらゆる要素の組織乃至統一といふことが、政治家の最も意を注がねばならぬ問題となつたのである。

此點について最も早く覺醒したものは、云ふ迄もなく斯かる形勢を作つた本源であり、又國勢上斯くあるべき本來の素質を有つて居つた獨逸帝國である。獨逸に於て個人中心主義の思想が必ずしも無勢力であると言ふのではない。けれどもビスマルクを先達とし、カイゼルを指揮官とする獨逸のあらゆる方面に於ける國家的活動は、國家中心主義のチャンピオンとして最も著しい。之に比較すると、佛蘭西や英吉利などは、從

來餘りに個人中心主義に深入りした傾向があるので、假令近來均しく時勢に覺醒するところあつても、國家中心主義の實際に於ける復興は決して容易なことではない。而して獨逸の强大なる國家組織の壓迫は日に日に感ぜらるゝので、國家中心主義者にはこゝに好個の辭柄を捉へて極力其説を主張する。是れ最近に於て、獨り獨逸に於てのみならず、英吉利、佛蘭西等の本場に於てすら、或は個人中心主義の政治思想を難じ、或は代議政治、立憲政治の弊害を極論して國家中心主義の鼓吹に努むるもの多き所以である。

斯く言へば歐洲諸國の人々は今や皆個人中心主義の弊害より覺めて、國家中心主義の方向に其進路を一轉したといふやうに聞える。が、然し、事實はさうではない。國家中心主義が復活しても、個人中心主義は亦依然として其勢力を墜めない。恰度第十九世紀の初め、自由思想が勃興しても保守的潜勢力が依然として强大であつたと同じやうな形勢になる。只偶々時弊に適中するものあるが爲に、國家中心主義の唱道が聊かヨリ聲高く響くまでのことである。之を以て歐洲政論界の大勢已に一に歸せりと見るならば、蓋し淺見の譏を免れない。事實は、國家中心主義の主張も時勢に乘り出して大なる勢力を占めたが、個人中心主義も亦深き根柢の上に立つて決して其主張を讓らないといふに在る。兩者互に爭ふて下らず、歐洲の政論界は正に此兩主義の爭鬪の爲めに混沌として居る有樣である。

四　歐洲政論界の形勢

予は前段に於て歐洲の政論界は個人中心主義と國家中心主義との主張相錯綜して混沌を極めて居ると説いた。而してこの兩主義相爭うて形勢定まらずといふことについても、靜かに考へて觀ればまた實は斯くならねばならぬ相當の理由があるやうに思ふ。

予は元來、第十九世紀の初め歐洲に個人自由の思想の起つたについても、又最近に至り國家統一の思想が起るに至つたについても、皆それ〳〵斯くなるべき當然の理由があつて然るものと考ふるものである。一言にして言へば、それ〳〵異つた時勢の要求が、それぞ

れ異つた形勢を呼び起したのである。之を個人に譬ふるに、過度の勉强によつて疲れたものには、身體の休養を説くを要し、休養によつて元氣を恢復したものには、再び精神的修養をやれと勸むべき必要がある。身體と精神との健全なる開發を同時に完全に進むることの常人に於て困難なるが如く、國家に於ても亦全體と分子との圓滿なる發展を同時に計ることは事實上甚だ六づかしい。是れ甲乙の政治主義時に依つて相交代するを必要とする所以である。然しながら、若し國家といふ有機體が、普通健全なる人體の如く、十分に精神的活動をなす前に十分なる肉體の休養をなすことが出來るといふ單純な關係になるものならば、國家中心主義と個人中心主義とを、適當に交代せしむれば＝適當に交代せしむるといふ事それ自身が又一つの六つかしい事業ではあるけれども＝よいので、從つて此の兩主義の關係は極めて單純で、彼此恒久の爭論を戰はして政論界を混沌たらしむる恐は決してない筈である。然るに實際上、個人中心主義によるべきか、國家中心主義によるべきかの歸趨定らずして恒に所謂混沌たる形勢を呈する所以は何故なりやと言ふに、是れ國家にあつては、自由思想の要求未だ國政の上に完成せざるに――極端な場合に於ては、漸く其端緒についた許りだのに、早く已に國家統一の要求が起るからである。之を個人に譬ふるに、未だ十分に肉體の休養を終らないのに、早く已に精神的活動に從はねばならぬ必要に迫らるゝやうなものである。もつと適切な例を言へば、胃病と腦病に共に苦しむ患者の如きもので、腦が惡いと言うて頻りに其服藥をしてゐる中に、段々に胃が惡くなつて今度は治療の手を胃の方に向けねばならぬ。やがて又胃の方が十分快復しない中に、腦の方が打捨てゝは置けぬ狀態になるといふやうに、畢竟何れを先にしてよいか解らなくなるといふやうな類である。即ち最近の國家統一の必要は、一方に於ては多少個人の發達を犧牲にしても其統一の實を擧げざるべからざるを感ぜしめ、否、其統一に熱中するの餘り個人の幸福などは之を省みるに遑なからしむる程までに押

し詰つて居るのに、翻つて個人的の方面を觀れば、所謂個人の充實、個人自由の發達は、未だ更に完成してゐない。從つて之より益々其發達を計るべき必要があるのに、一方國家統一の必要といふ理由の下にムザムザ其發達の芽をもぎ取られるは、個人中心主義者の最も苦痛とするところである。茲に於て一方には國家中心主義を說くものあるに對して又他方には個人中心主義を說くものも少からずして、茲に兩々相讓らずして今日の混沌たる形勢を致したものであらう。

之を實際の事實に徵せんか、個人中心主義は先づ立憲政治の創設といふ形を取つてあらはれた。立憲政治の、民本主義の原則に基いて起つたものであることは、今更ら言ふを俟たない。而して民本主義は、當初其主張を貫徹していよ〱理想的制度を立てんとするに方つて、圖らず特權階級の强大なる潛勢力を以てする反抗に遭遇し、以て十分に其目的を達することが出來なかつた。彼等と特權階級との爭議は、何時でも妥協で結末がつき、その妥協の結果としてあらはれたものは即ち各國の憲法である。然し之では憲政の根本精神たる民本主義は十分に徹底し得ないので、其十分に徹底しない部分は即ち爾後の發展に俟たなければならぬ事になつた。此點に於て、憲政創立の當初の精神は、爾後或は議會制度の改造とか、議會と政府との關係の改善とか、其他各般の方面に於ける改革の要求として現はれ、從つて所謂憲政有終の美を濟すが爲めに、現に未だ多くの困難なる問題が解決せられずして殘つて居る。之等の點に付て個人中心主義が如何に多くの努力奮勵を、吾人に要求して居るかは、予輩曾て一度之を本誌に於て論じた事がある(本年一月號所載拙論參照)。故に憲政の樹立といふ點のみから觀ても、個人中心主義の主張要求は、決して未だ十分に完成してゐない。國によりては僅かに其端緒についたばかりのところもある。今後更らに大に「自由」の開展の爲めに努力するところなければならぬのである。

然し之ればかりではない。個人中心主義の要求は、獨り政治的自由の開展の方面ばかりでなく、更に人類

の社會生活の各般の方面にも、其開展を要求して止まない。蓋し自由は個人の生存發達に缺ぐべからざる要件である。個人が其生存發達の爲めに、各種の方面に向つて「自由」を主張するのは當然でもあり又必要でもある。只如何なる方面に向つて、其の要求の鋒先を向くるやは、自ら時勢の變遷に伴ふものであつて、第十九世紀の初め以來長らくの間は、專ら政治的方面に於てのみ之が主張されたのであるが、最近では更らに經濟的方面に向つても其主張を見る事となつて居る。尤も經濟的方面に於て個人の自由なる發達を促進する爲めには、他働的に政府の方面からもいろ／＼の方策が講ぜられないではない。近代政治の一つの特徴たる所謂國家社會政策の如きは、主として此目的の爲めの施設と見てよからう。けれども最近に至つては、經濟上不當の拘束を受けて居ると感じて居る所の下層階級自身が、自己の社會的地位の自覺の基礎の上に、自働的に進んでいろ／＼の努力要請をなすに至つた。之には彼等自ら計畫運營するところの社會政策的施設もあるが、最も著しいのは所謂社會主義の主張である。社會主義の主張の中には、之に附隨していろ／＼の思想が附き纏ふので、一二の人の間よりは危險思想視されて居るけれども、根本の點は經濟上に於ける自由の要求に外ならない。只彼等が經濟的自由の主張をなすに方つては、彼等は自ら彼等と利害を異にする資本家企業家の階級と戰はねばならぬ。それが爲めに又、資本家階級が動もすれば據つて以て自己の後援者と爲すところの國權と衝突するの機會に富む。而してこの國權に反抗するといふ態度はまた、一面に於て社會のあらゆる「權威」を輕んずるといふ思想をも惹び起すの傾がある。是れ保守的傾向の人々が推しなべて頻りに社會主義を危險視する所以である。概して之をいふ。社會主義の主張には、全然危險なる分子を存しないといふ譯には行かぬが、然し其根本の要求には確かに一面の眞理のあることを認めねばならぬ。而してそれは單に下層階級の當然の要求として是認すべき理由ある外に、國家的見地から見ても、其要求を相當に聽容するを得

策とすべき理由もある。從つて此方面に於ても亦、自由の完成の爲めに將來に爲さるべき仕事が非常に多いと言はなければならない。

其外、日本には割合に此方面の問題は起らないけれども、西洋には同一國家内に於ける人種と宗教とが統一されてゐない結果として、或は其統一されてゐないといふ點が餘りに强く感ぜられて居ることの結果として、其間に激しい爭のある事、例へば獨逸に於ける舊教新教の反目、墺太利に於ける各種民族の嫉視の如きがあつて、爲めに國家の統一を著しく妨げて居る。而して斯かる場合に若し一國内の或特定の宗教、或特定の人種が、特に政治的に又は社會的に特別に厚い保護を受けて居るといふ事であれば、かゝる保護に浴せざる結果として不當に不利益の地位に置かれて居る宗教なり人種なりは、またそれ〲其方面に於て其自由平等を要求するといふ事になつて來て居る。露西亞に於ては、純粹の露西亞民族並びに露西亞舊教の堅き特權に對して、不平の聲は相當に强いけれども、特權の後援者たる國家の壓力が餘りに强いので其不平の聲は未だ有力なる運動とはなつてゐない。けれども佛蘭西などに於ては、既に宗教自由の主張は少くとも法律上に於ては解決せられ、英國ウエールスの地方に於ては、今現に非國教徒の自由の要求が有力なる政治上の問題となつて居る。人種の點から言へば、露西亞に於けるフインランド問題、獨逸に於けるポーランド問題の如きは、それ〲民族的自由の主張によつて國家の統一政策を煩ひして居る例であり、英國に於ける愛蘭の自治の要求の如きは、已に半ば其目的を達した。宗教の問題は暫らく之を措き、人種關係に於ける自由の要求の如きは、近來一般に此關係の複雜なる國家を悩まして居る。而して之れ亦時勢當然の要求に出で、如何に國家統一の妨げになればとて到底之を抑ふることは出來ない。從つて之に處するの途も亦頗る六つかしい問題で、餘程聰明遠慮なる政治家にあらずんば、之を適當に解決することは出來なからうと思ふ。同じやうな問題は近く日本に於ても朝鮮との間に起ると思ふので

あるが、我々は日本帝國の立場から、朝鮮によつて統一的結束の累せらるゝことを欲せざると共に、又朝鮮人の自由開發の要求に向つても、大に之を聽容するの寬量を示さなければならぬと信ずるものである。

更に進んで個人的自由思想の要求は、最近に於ては更に進んで男女兩性の間にも主張せらるゝやうになつた。即ち「婦人の解放」といふ要求は、卽ち人類としての婦人の自由を叫ぶの聲である。此問題の如き我國に於ては、多少嘲笑の態度を以て迎へられて居るけれども、實際に於ては極めて眞面目なる問題である。中には英國の一部の婦人參政權運動者の如く、狂暴なる態度に出で、爲めに社會の顰蹙を買ふて居るものもあるけれども、大體に於て聰明なる歐洲諸國の識者は、此方面に於て尙幾多の努力すべき事業があるといふことを認めて居る。

斯く論じて見れば、個人中心主義の開展は、憲政の創設を以て端緒を開かれ、而して憲政其物が未だ十分に完成しないのに、經濟的自由、宗教的自由、人種問題、婦人問題と、それからそれと、新らしい問題が繼起して、今後尙一層の努力を以て之を解釋せんことを我々に迫つて居る。さういふ譯であるから、多少心あるものは、今や時勢が更に進んで國家統一の必要をも同樣の强味を以て主張せられねばならぬ世の中となつても、專ら力を之等の新要求に注がんが爲めに、從來の方針を一變して個人的開發の事業をば打切るといふ樣な無暴の擧には出で得ない。況んや從來此方面に特別の興味を有せし人、又は直接に此方面の事業に當りし人に於てをや。

單にそれ許りではない。平素精神的問題に多く頭を使ふ思想家は槪して、國家中心主義の特に鼓吹せらるる時代の新傾向に惑はされて個人中心主義の確信を動かすといふやうなことは決してない。何故なれば彼等は、徒らに國家の名に於て少しでも個人を無視するの態度に出づるのは、結局に於て國家其物の爲ではない、個人の開發充實を計ることは、永遠の着眼點から見れば畢竟國家其物の爲めになることを疑はないからであ

る。「現在」に活くる政治家には動もすれば此遠大なる見識を缺くも、「永遠」に生くる思想家の立場としては、右の如き態度を取るは、固より當然である。加之現代歐洲の多數の思想家は、國家の本質を解して畢竟個人の爲めに存在するものと觀るやうである。元來國家の本質論としては、團體其物が絕對的の實在か又は團體を組織する個々の分子が實在か、他の言葉を以て言へば、國家あつて初めて個人ありと觀るべきか、又は個人あつて初めて國家ありと觀るべきかの二樣の解說が立ち得る。我國の學者の間には、西洋のプラトーなどの如く、國家の本質を超個人的に解釋し、國家に認むるに個人を超越した意義と目的とを以てするものが頗る多い。然し斯くの如き說明は、西洋の學者の間には由來極めて少い。ヘーゲルは國家を立てゝ之を個人の目的と認めたけれども、併し彼の說は我國の所謂國家主義者の說とは餘程違ふ。然らば西洋に於ける大體の通說は、つまり國家は理論上個人の爲めに存するものと解するに在るやうだ。固より國家は個人の集合に成る有機的團體なるが故に、個人と國家とを分離して、其間に手段目的の別を時間的に又空間的に立つるのは或る意味に於ては無意義であらう。併しながら一個の思想上の問題としては、其間に主客の別を立つることは妨げあるまい。斯くの如き見地よりして、多くの思想家は、國家を以て個人の爲めに存すと解するのである。固より國家なくしては、個人の生存發達は不可能である。ヘーゲルの言つたやうに、個人は國家の中に初めて眞の人として存在し、國家の一分子として初めて、眞の意義に於ける個人は存在するのである。然し此れ丈けの說明では、國家は個人の生存發達に到底缺くことを得ざる必須の條件（ベヂンギング）たることは明かであるけれども、直に個人の生存發達の終局目的（エンドツイール）なりといふ證明にはならぬ。現にヘーゲルも、個人に對してこそ國家を目的と立てたけれども、國家夫れ自身は決して最終の絕對的目的とは論じない。美術・哲學・宗教に對しては、國家はまた一つの方便に過ぎないと說いた。故に個人の完成は基礎鞏固なる國家の庇護の下に於ての

み最もよく到達せられ得るといふは可なれども、個人の生活は其「國家の一分子としての生活」を以て全然終つたものといふことは許されない。尤も此派の多數學者は、一部の功利主義者の如く、國家は個人の幸福（狹き意味に於ての）爲めに存するものとの解釋には反對する。然しフイヒテすら國家を以て個人の三大天賦權（身體の自由、財産の所有、肉體の保存）を擁護せんが爲めの機關だと言つた程だから、以て如何に個人本位の思想が根柢深きかを想ふべきである。文學藝術の士が、動もすれば國家的桎梏が彼等の精神生活の向上發展を妨ぐるを厭ふの餘り、國家其物までを嫌惡輕蔑するに至るが如きは、固より非常なる誤解には相違ないが、人類の精神生活が其の國家生活を以て全然終了するものと觀るのは、彼等の斷じて承認する所ではない。文學藝術の士の生活も亦國家を豫想して初めて成立するものであつて、從つて國家はそれ程個人の發達に必要缺くべからざるものであり、從つて國家を以て個人の目的なりと觀ても可なる程に密接の關係あるものではあるけれども、然し理論上に於ては、國家は畢竟個人の爲めに存するものである。かくて西洋には、「國家は個人の爲めに存するものなり」といふ考が、一面に於ては中々根柢深きと共に、他の一面に於て多少誇張された形に於て信仰せられ主張せられたことは亦免れない（此點は朝永文學博士の「近世に於ける我の自覺史」及「獨逸思想と其背景」に負ふ所あり。記して以て謝意を表す）。

右の如く西洋には幾分不當に個人の價値を尊重するといふ風潮があるから、假令國家の爲めだからと言つて漫りに「個人の尊嚴」を蹂躙するといふことに對しては、多くの場合に於て激しき反對の態度をとつて居る。其最も明白なる例は、間諜の取扱であらう。茲に間諜といふのは、法律上嚴格な意味に於て言ふのではない。又間諜に對して法律が如何なる取扱をして居るかといふことも、こゝでは問題外に置く。只一般世人の常識は、若し間諜が其秘密探偵の使命を全うするが爲めに、其執るところの手段の如何を擇ばず、時とし

ては人を陥れ、甚だしきは處女若くは人の妻をまで陥れて、之によつて偵察の端緒を得るなどゝいふ惡德を働くに至るならば、假令國家の爲めにする慘澹たる苦心に出づるものと雖も、斷じて之を許さないのである。國家は斯くまで個人の尊嚴を蹂躙して、所謂「國家」の目的の爲めに個人を使役すべきではないといふのが、西洋の常識である。戰爭の場合に、イザといはゞ潔く死ぬといふのが東洋道德の誇りであるのに、彼等が寧ろ捕虜となるを以て其本分を全うする所以と考ふるのも、一つには又此點からも來て居る。英吉利などになれば、個人の自由を重んずるの餘り、國難に方つても出征を強制しないといふ主義を最近まで執つて居つた。以て西洋に於ける自由思想の根柢深く、且つ今日尙極めて盛なるを想ふべきである。

尤も每々言ふが如く、西洋では此點の幾らか極端に主張せらるゝを常とするので、其の弊害も亦近頃は漸く識者の注目するところとなつた。其反動として最近獨逸などに於て盛に極端なる國家主義が唱へらるゝことになつたのであるが、然らざるも例へば最近佛蘭西に於て段々勢力を得つゝあるところの所謂社會連帶論の如く、厭くまで個人本位の根柢の上に立ちつゝ、團體的結束の價値を力說するの說も起つてゐる。所謂社會連帶論は、自由を以て個人の生存發達の要件なりと認めつゝ、而かも其個人の生存は他の一面に於て空間的には他の個人、時間的には過去の個人に負ふ所大なるものあるを承認し、以て一面に於て社會團結の要件たる個人的連帶義務の方面を高調するの說である（此の點は牧野法學博士著「刑法と社會思潮」に負ふ所あり。記して以て謝意を表す）。斯く觀察すれば現代の歐洲に於ては個人本位の論も現に盛であり又之からも益益盛になると思ふのであるが、他の一面に於て團體的生活の價値を主張するの議論も亦、次第に識者の眞面目なる注意を惹いて居ると云はねばならぬ。

但だ團體生活の價値を高調するの說も亦、個人本位論が極端に主張せらるゝと同じく、反動的に極端まで說き詰めらるゝ傾のあるのは、是亦止むことを得ない。

此種の傾向は特に獨逸に於て起り、其思想的方面の代表者がニーチエであることは、先にも述べた。而して其實際的方面を大體獨逸政府最近の政策が、之を代表して居ることは言を俟たない。獨逸が其物質的國力を張るに熱中してマキアヴエリズムを外交上に弄したのは、明かにニーチエの所謂『人は他の上に生き、他を犧牲にして榮える』といふ説を其儘實行したものとも言へる。獨逸が海外貿易の發展を英國と競爭した遣り方の如きは、最も露骨に個人を犧牲にして所謂國力の伸張を企てたものゝ適例である。例へば關税の障壁の下に、國内では自國製品を高く賣り、而して海外には政府から補助金を與へて安く賣らしむるといふが如きは、自國の民に物を高く賣つて、而かも其上餘計な租税を課するといふ遣り方である。又彼は英吉利の海外に於ける得意を奪はんが爲めに、商賣人をしてドンドン品物を貸賣りさする。貸賣りをするから、容易に得意を奪ふことが出來るが、其結果偶々貸倒れになつて、本國の會社が非常の窮境に陷る事となる。すると此會社が破産しては國家の輸出入の關係を紊亂して財政上由々しき大事を惹き起すといふ理由の下に、何等かの名義で政府が之を救濟する。さすれば結局其缺陷の負擔に任ずるものは國民である。尤も予は獨逸の斯くの如き政策を、必ずしも惡るいと言ふのではない。殊に獨逸ではビスマルク以來、一方に斯くの如き國家本位に偏した政策を採りながら、他の一方に各種の社會政策を實行するなど、個人本位の政策をも怠らなかつたから、大なる破綻を來たさずして、國運は益々榮えて來たのである。けれども、考へて見れば隨分險呑な途を通つて來たものと、他人事ながら密かに戰慄を禁じ得ざるものがある。庶幾獨逸國運の隆盛を見て、單に之を其所謂國家本位の施設のみに歸せんとするは、決して本當に獨逸を解するものではない。而して獨逸に於ては、實際の施設としては今日尚個人本位の基礎に基くものも中々盛に行はれて居るのである。が、全體の思想としては、段々に一方の國家本位論に偏するの傾向あるは、心あるもの丶等しく獨逸の爲めに憂ふ

るところである。

之を要するに、現代の歐洲に於て個人中心主義、國家中心主義の二思潮の理論上實際上盛に相爭はれて居ることは一點の疑を容れない。或者は甲を是とし、或者は乙を是とするのであるが、之を達觀すれば、二者混沌として爭はれて居るは是れ畢竟二者共に國家國民の生存發達に必要であるからである。時と處との必要に應じて二つの說の間に主從輕重の別を作るのは、固より勝手であるけれども、苟も國政指導の任を以て居るものは、西洋の學說實例を皮相に見て、一を採つて他を排するが如き偏狹な態度に出でてはならぬ。

五　我國政論界の傾向

飜つて我國の政論界を見るに、國家中心主義個人中心主義の二說の相爭ひ、混沌として殆んど歸嚮する所を見ざること、恰度西洋と同じやうである。唯我國では自由思想の開けたのが比較的に遲いのと、一般東洋の思想が本來服從的であるのと、更に之に加へて西洋思想の壓迫も國が遠い丈け強いやうでも實は案外に薄いといふやうな關係から、何れかと云へば國家中心主義の方が比較的に遙かに優勢である。個人中心主義は常に一般には甚だ不人望な說で、時には種々に誤解され又曲解されて迫害を蒙つたこともある。加之日露戰爭以來は國家中心主義は尙一層盛になつて着々個人中心主義を押し縮めて居る。蓋し日露戰爭は我々國民に與ふるに從來畏敬して居つた西洋に勝つたと云ふ自負心を以てした。斯くして我々はこゝに大膽に且つ公然に西洋の文物を批評的に觀ると云ふ獨立の態度を執るに至つた。此態度を執つて先づ眼に着いたものは、西洋自身が西洋の特色たる個人中心主義に加へつゝある所の批難であつた。而して此方面の弊害は又現に日本の憲政運用の上にもあらはれて居つた。のみならず夫の幸德事件の起つてよりは、更に急激に國民の思想を驅つて個人本位論に面を背けしむるに至つた。而して日露戰爭後の日本の政界は今日に至るまで大體軍閥の跋扈に委して居つたので、國家中心主義が更に幾分誇張された形に於て唱へらるゝ事となつた。加之日本の

勝利は新たに他の東洋諸國民の種族的敵愾心を刺戟し、其半面に於て彼等は盛に日本を煽てたので、我々國民は自ら益々其國家的觀念を偏狹ならしめざるを得なかつた。斯うなると個人中心主義者も默つては居られない。彼等は起つて「自由」のために大に爭つた。國民は段々に偏狹なる國家主義に浸潤して留らなかつた有樣であるから、個人中心主義者のこの叫びは案外に反響がなかつたやうにも見える。けれども彼等の大に戰はんとするの態度には、從來に比して更に一段の熱烈が加はつたやうに見える。

然るに今度の戰爭は、更に又一層國家本位主義的傾向の極端なる主張を見るに至らしめた。此思想は今や殆んど凡ゆる有力なる階級を風靡して、個人中心主義に對しては殆んど壓迫的態度を以て臨んで居る。何故かと言ふに、從來個人中心主義者の主張して來たやうな議論は今度の戰爭で殆んど一つも實現して居ないからである。先づ第一に個人中心主義者の動ともすれば唱へて居つた所の國際的正義とか或は國際法とかいふものは、今度の戰爭で全然蹂躪されて居る。蹂躪するのが善いか惡るいかは是れ所謂學者仁人の机上の空論であつて、正義も國際法も武力の前には全然無能力であるといふことだけは目前に示された間違のない事實である。イザと云ふ時に物を言ふのは卽ち「力」の外にはない。而して獨逸は此「力」に最も重きを置いたが爲めにあれ程見事な成功を博した。獨逸の奮鬪は敵ながらも天晴れである。然らば將來の國家經營の方針としては、此獨逸の遣り方に眞似るの外にはないではないか。斯ういふ議論からして我國の有力なる識者の間には近來著しくニーチェ流の思想が流行するやうになつた。獨逸を以て最後までの勝利者と見るのが正しいか如何か、或は正義並びに國際法の蹂躪が戰後に於ても何等の制裁を蒙ることなしに繼續されて行くものか如何か。(現に米國が獨逸の態度に憤慨して盛に聯合諸國を輔くるのは、獨逸に對する一種の制裁ではあるまいか)。一時の成敗を見て輕々に之を判斷するは誤なりと思ふけれども、兎に角獨逸が國家内部の複雜なる諸勢

力を組織統一して、最も敏活に最も有効に之れを運用せるの手腕には、固より敬服に堪へないものがある。けれども之より一歩を進めて、唯物的の實際主義を謳歌し、國民の盲目的統一を讃美するに至つては、個人主義者の到底同感を表し得る所ではない。故に少數の眞面目なる思想家の中には、戰後に於ける偏狹なる國家主義の横行を怖れて、密かに聯合軍側の勝利を冀ふ者が少く無かつた。又其中の極めて少數なる部分には、聯合軍側の最後の勝利を事實確信して疑はないものもないではなかつた。けれども我國の大多數の識者は概してみな獨逸崇拜主義者で、甚だしきは敵國獨逸の勝利を願ひ、又は敵國獨逸との同盟を説くものさへあつた。是れ必ずしも英・佛を憎んで獨逸を喜ぶの意に出づるに非ず、畢竟個人中心主義の流行を厭ふて國家中心主義を極端まで主張せんとするの精神に基くものである。

斯かる風潮は我國の本當の發達の爲めに果して喜ぶべきことであらうか。少くとも看過すべきことであらうか。國家中心主義も適度に主張せらるゝ場合には先づ何の弊害もない。けれども其極端に主張せらるゝことゝなると、爲めに個人の發達を直接の目的とする各種の努力が自然輕んぜらるゝの傾向を見ることがあるまいか。物によつては差當りの國家統一の邪魔になると言ふて排斥せらるゝといふ如きことは起るまいか。最近或新聞の報道する所に據ると、學士院恩賜賞授與式參列の所感を叩かれたるに對して、大隈侯は、哲學や宗教の研究も可いが然し之れで國家は強くならぬ。今後の日本は無線電信とか、飛行機とかの理化學の方面に大に發展しなければならぬと言はれたとある。侯の眞意は唯我國に於て理化學の研究の比較的に進まざるを警告されたものであらう。けれども傳ふるものは、哲學宗教を不急無用の研究と爲し、國家の爲めに有要なるは專ら科學に在りといふ風に紹介した。之を以て觀ても、一部の識者が近來如何に餘裕のない實際主義に感染しつゝあるかが察せられる。斯くして我國近來の政論界の傾向は、段々一方に偏して深入りし、殆ん

ど個人中心主義は其存在の餘地をすら與へられざらんとして居る。偏狭なる國家主義者の中には、國家中心主義の跋扈する時勢に乘じて、個人中心主義的傾向の所説に對して直接間接の壓迫を試みんとしてゐるものもある。斯る傾向は決して我國の本當の發達の爲めに喜ぶべき現象ではない。

斯る傾向を見て憂ふべしとする所以の根據は、之によつて個人中心主義の眞價を掩ふといふ事の外に、抽象的に言論の自由を壓迫するが故に之を不可なりとする點もある。前にも述べた如く、言論の自由は即ち動もすれば一方に偏する所の國家の施設に對して反省の機會を與へ、結局に於て國政の運用を誤なからしむる所以のものである。故に國家主義的の傾向の議論が盛なればなる程、個人主義的の議論が盛であつて欲しいのである（日本の政治家がとかく自分の意見に反對の輿論の起るのを厭ふのは、憂ふべきことである）。政府が法律を以て或は警察の取締として濫りに言論を壓迫するは勿論、社會が聰明を缺く輿論の形を以て之を壓迫するのも甚だよろしくない。尤も予は必ずしも言論の壓迫を絶對に不可なりとするものではない。大體に於て之を不可とするも、場合によりては其壓迫に對して多少恕すべき事情あることを認むるを辭せざるものである。何故なれば所謂文學の士の間などには隨分過激狂暴の説を吐くものも散見するからである。文學の士は政治法律に直接の交渉がない丈け、概して彼等の精神生活が本來直接に安固なる國家的生活と共に消長するものなるの意識が薄弱である。偏狭なる國家主義者が動もすれば個人の充實發展の國家隆盛の根本的原因たる事を看過するが如く、文學の士も亦動もすると安固なる國家的生活と文藝の消長との根本的關係を忘るゝの傾がある。中にも頻繁に文藝に干渉するを好む國家にあつては、彼等は終に此處置に激して進んで國家を呪はんとするに至る事さへある。故に濫りに壓迫するも可けないが、併し壓迫さるゝ方にも全く罪がないとは云へない。何故なれば我國の文學の士の間には隨分頽廢したる西洋文學の思想に惑溺して居るものが

多いからである。之も亦考へて見れば無理ならぬ事情もある。その故は我が明治の教育は、西洋文物の外形を輸入するに急にして、精神の道義的訓練を輕んじた結果、其養成する所の子弟は概して高尙なる方面に興味を有つことが出來なかつたからである。蓋し維新後當面の急務は、西洋と同等に國家としての組織體面を整ふる事であつた。從つて法律政治の運用とか軍隊の組織とか化學工藝の研究とかの方面に、それ〴〵急に間に合ふ人格の養成に骨折つた割に、倫理道德の如きは殆んど之を顧みなかつたと言つて可い。尤も表向きは學校の科目の振り當てなどに於ても、倫理を一番大切なものとして劈頭に掲げては居る。けれども實際上教育當局者も子弟も共に一番輕視して居るのは倫理と體操とではないか。獨逸の小中學校邊では、外の課目の出來が惡くとも、我國の修身に當るべき「宗教」の點數が良ければ父兄は滿足する。我國では倫理や體操が合格點に入らなくとも、英語か數學か理化學が良ければ父兄も本人も又教師も皆滿足する。之れほど子弟の精神的訓練を忽かせにする國は、世界の文明國に殆んど其の例を見ない。而して社會一般も亦品性の價値を輕んずることと實に夥しいものがある。曾て、今は故人となつた、九重雲深き邊りに奉仕して謹嚴の聞え高かつた某公爵が、一定の基金を寄附して有望なる學生の學費を支給する事を企てられた事がある。其選に當るの條件としては第一に品行方正、第二に身體健康、第三に學業優等の三條件を掲げられたが、最後に但書として「第一の點は深く之を問はざるも可なり、何んとなれば爲めに人才を逸するの惧あればなり」と書いてあつた。是れ亦如何に明治の先輩が道義を重んぜなかつたかと云ふの証據になる。斯う云ふ風潮に養はるゝのであるから、一般の子弟にも人格を磨くと云ふ觀念がない。少くとも其爲めに努力すると云ふ熱心が乏しい。學業にさへ成功すれば可いと思ふてゐる。故に一度學業に蹉跌せん乎、彼等は之を以て全人格の失敗と感ずる。父兄も社會もまた例へば高等學校の入學試驗などに二三度も落第すれば、人間として丸で價値のな

いものゝやうに思ふ。之れ近來青年の意氣揚らず煩瑣なる記憶に齷齪として、而かも二三度目的を取外づせば忽ち噴火口に身を投じたりなどするものある所以である。斯う云ふ雰圍氣に養成された子弟が、何等積極的根柢なくして身を文學界に投ずれば、其多くの人が所謂頽廢文學以外に興味を感じ得ざるは當然である。然し之は文學者に限つた事ではない。國家主義を實物にする官吏に就ても軍人に就ても、同樣の事が云へる。彼等は其職にある間は、衣食も足り又功名の望もあるので、其爲めに一所懸命努力奮鬪するけれども、一度其職を去つて浪人となると、本來精神的操守の訓練を與へられざりし彼等の事とて實に醜態を極めて居る。是れ皆高尙なる方面に興味を感ずるやうに訓練されて居ない結果である。而して之れ專ら明治教育の當然の產物であつて、而して其責任は之を西洋文物の外觀に眩惑して偏狹なる國家本位主義に奔つた明治先覺の失態に歸すべきものである。然し責任は何れにあるにもせよ、頽廢思想を紹介して益々國民の精神的標準を低下するといふ事は、また心あるものゝ堪ふる所ではない。故に一部の極端なる文學の士の著作言論に對しては、打捨て難き點もあるから、之を苦慮する所の當局の態度にも相當の理由あることは、我々深く之を諒とする。之を諒とはするが、然し、彼等が執る所の手段には固より全然贊成しない。殊に彼等の慣用手段たる發賣禁止は、却て之を社會を廣告し、弘く天下の耳目を之に集むると云ふ反對の結果を生ずるに止るのである。而して之等頽廢危險の思想と戰ふ唯一の根本的方法は、言論の自由を許し、反對の健全なる思想をして勇敢に戰はしむるの外にはない。

適當の程度を超えて誇張せらるゝの結果禍を流して居るのは、個人中心主義許りではない。國家中心主義に就ても亦同樣の事が言へる。即ち此派の極端なる論者は、國家を以て最高の道德などゝ言ひ、全然人道主義を輕蔑する。斯かる思想の實際の適用が如何に社會を毒するかは、一々之を辨ずるの必要はないが、我等の最も之が爲めに憂ふる所は、國家中心主義が斯くの

如き誤つた衣物を着て現はさるゝの結果として、一部の人より嘲笑の態度を以て迎へられ、終に眞正なる國家中心主義までが誤解せらるゝ恐ある事である。國家中心主義が極端なる國家主義者によつて累せらるゝは、個人中心主義が極端なる個人主義の爲めに迷惑を感じて居ると異る所はない。

要するに國家中心主義及び個人中心主義については、西洋に於けると同様に我國に於ても爭論は絶えないが、兩方共に動もすれば誇張して説かるゝ事と、又兩方共に一層眞面目に根本的に研究せらるゝの必要ある事とは、亦我に於て彼と異なる所はない。唯茲に暫く我國の現狀を基礎として、特に我國に適切なる議論を立てると云ふことになれば、予輩は特に今日の場合個人中心主義の方面の研究と主張とが一層盛になることを必要と認むるものである。何故かと云ふに、前にも述べた如く、我國民一般は今日餘りに國家中心主義の説に醉ひ過ぎて居り、中にも實際直接間接に國政運用の衝に當る一般政治家の頭が特に著しく偏狹なる國家主義に感染れて居ると思はるゝからである。尤も段段と精密に考へて見れば、今日の政治家が斯くの如き態度を採るに至つたに就ても然るべき事情があると思ふ。そは前に述べた通り明治政府の永い間の事業と云ふものは、主として國家としての組織を外面的に整ふる事にあつたからである。維新後草創の際は、中央政府の威力を立てゝ國家の統一を完成することが何よりの急務であつた。やがては法律制度を文明式に改造して歐羅巴諸國に對して對等の態度を主張するの準備をなさねばならなかつた。軍隊も入用である。軍艦も必要だ。斯くして當時の政治家は、社會政策的の方面には殆んど頭を費し力を用ゆるの餘裕がなかつたのである。又一般國民としても、日清戰爭に依つて自國の「力」を實際に試すまでは常に外勢の壓迫を感じ、只管國力の强盛を計るを念として居つたのである。されば我々の小學校時代——明治二十四五年頃迄の國民教育は、今から見ると滑稽な程排外的敵愾心を兒童に鼓吹したものだ。學校の唱歌は多くは勇壯なる軍歌で、其

外には「三千餘萬の同胞共に、守れよ守れ我が日の本を……」とか、萬國公法ありとても、弱肉强食の世の中には空論に畢ると云つたやうな六つかしい思想を歌はしたものだ。露國皇太子遭難事件當時の廟堂の狼狽の醜態をみても、如何に外國の壓迫に怖れて居たかゞ解る。斯う云ふ時代には、勞働者が困るの、物價が高くて貧民が困るのと云つたやうな問題に、頓と頭を使ふの餘裕がない。今日の政治家は皆斯の時代を通つて夫れ〴〵成功して來た人であるから、今尙ほ自分の通つて來た途に執着し、自分の成功して來た方法に執着するといふのは免かれない。然しながら今日の日本は已に二三十年前の日本ではない。今日は小學校の兒童にも花が咲いたとか月が圓いといふやうな呑氣なことを歌はして居る時代である。外勢の壓迫は全く之を感じないではないが、已に自己の「力」の自覺が出來た。故に翻つて國家を構成する分子即ち個人の充實發達をも顧みて、國家の根本的隆盛を根柢から作り上ぐべき時代になつて居る。けれども一般の政治家の頭腦は、仍ほ過去の制度、過去の經驗、過去の事業に捉へられて、十分に其新らしき方面を見透して居ない。全く見て居ないとは云はないが、少くとも十分に徹底してゐないと認めざるを得ない。殊に今日直接行政の衝に當つて居る者に至つては、動もすると官廳の便宜を先にして國民の開發といふ問題を後にするの傾がある。學校などでも常に先きに立つものが管理の問題で各兒童の個性の教育といふが如きは後廻しになる。役所でも事務取扱ひの便宜の爲めに種々の規則を拵らへるが、之が却つて人民の爲めに繁文褥禮の煩累となつて居ることが珍らしくない。其外官廳の方では、少しでも面倒な事或は後で面倒になりさうな事は、善かれ惡かれ、之を抑へると云ふ方針をとる。勞働者の團體的行動を禁止する警察規則の如きは最も其著しきものであらう。勞働者が團結をすると警察の仕事が多くなるに相違ない。けれども勞働者を今日のやうな狀態に置くことの國家永遠の爲めに甚だよろしくない事、又大勢は到底斯くの如くして行けるものでない事は、今日極め

て明白な定說である。官廳の便宜を先に考ふる政治家は、斯くても未だ之を許さうとしない。それでも日本內地に於ては、段々大勢に推されて個々の國民の便宜も餘程考へられるやうになつたが、植民地になると此弊害は今日尙甚だ著るしい。植民地に於ける土民は、純粹の內地人程面倒を見なくとも可いといふ事情もあり、又彼等の間から有力なる不平も起らないと云ふ點もあるのであらうが、我國の植民地統治の方針は、殆んど全く統治官憲の都合の好いやうに組み立てられて居る。根本の精神が其處にあるから、末節に於ていろいろ世話をしても、結局土人に統治者の親切が徹底しない。是れ一部の心あるものが我國の植民地統治方針に對して不滿を感じて居る所以である。

啻に之のみではない。我國の政治家の間には直接に國民個々の開發を目的とする政策、殊に社會政策的施設の本當の意味を解してゐないものがある。最近新聞の報ずる所に據れば、小阪鑛山附近の鉛毒被害民三千餘は鑛山事務所に押しかけて救濟を求めたと云ふ事である。同じやうな問題は曾て足尾銅山にも起つた。無論其外の到る處にも亦起つて居ることであらう。此種の問題に就ての當局者の從來の態度若しくは說明を聞くに、被害民の慘狀も實に同情に値するが、之が爲めに鑛山事業に拘束を命ずるといふやうなことをすれば、日本の輸出貿易の上に玆に一大蹉跌を生ずる。爲めに輸出入の從來の均衡を破り、日本の財政の上に由々しき影響を生ずる。被害民も氣の毒だが、此の國家的重要には換へ難いと。然らば之に對して鑛毒被害民に十分の賠償を與へよとか、又は鑛毒が流下せざる樣完全なる設備を爲さしめよと言ふと、夫れには莫大な費用がかゝる。斯くては到底事業が立ち行くものではないといふ。斯くて輸出貿易の國家的重要といふ名義の下に、被害民の窮狀は口で同情されて實際に於ては殆んど顧みられずして泣寐入になる。予は固より是等の問題を未だ正確に研究して居ないけれども、然し曾て小阪鑛山の經營に任じた藤田組、足尾銅山の持主たる古河家が、之れに由つて鉅萬の富を積んで居るの事實あ

る以上、國家が眞に社會政策の國家的意義を認むるならば、も少し其間に干渉する餘地はあつたらうと思ふ。當今の政治家が國家の名を盾として富豪を保護するに厚過ぎるといふ批難は、必ずしも田中正造氏一流の狂熱的志士の言分のみではあるまい。今度の工場法の施行に於ても、雇主側の保護に不當に厚くして、勞働者の保護の殆んど言ふに足らざるは、識者の間に已に定論がある。而して之れ必ずしも政府が富豪雇主側の强要に屈したと云ふ許りではない。彼等の頭腦が常に、雇主に急激なる拘束を加ふることによつて生ずる所の國家產業の一時的影響のみを專ら眼中に置いた結果であらう。而して勞働者の保護を等閑に附する事の結果、國家が如何に見えざる大損害を蒙りつゝあるやは、彼等の深く考ふる所となつて居ないやうだ。予は先頃内閣統計局の二階堂保則氏の講演を聽いて、圖らず我國の前途に對して實に多大の憂患を起さしめられた。同君の說に據れば、人間の死亡を男女によつて分つと、何處の國でも其率は男に多いのを常とするのに、日本は獨り之に反對である。尤も日本も三十六七年頃迄は常態に在つたが、近年女の死亡率が多くなつた。何故女の死亡率が多くなつたかと言ふに、統計の示す所に據れば、近年著しく青年中年の婦人の死亡が多くなつたからである。同じ婦人の中で青年中年の者に死亡率が高いといふ此點も亦、日本の現狀は西洋と正反對である。而して日本の青年中年の婦人が如何なる原因で死亡するかと云ふに、主として結核性の疾患によつてゞある。其原因を更に遡つて考ふると、青年中年の婦人の工場に働いて居るものが此病を得て遂に死亡するのであると云ふ事が想像さるゝ。して見れば我國の工場生活が最も盛に子供を產むべき青年中年の婦人を殺しつゝあると云ふことが分る。若し工場生活といふものが一般に青年中年の婦人の生命を累するものであるならば、西洋でも同じやうな現象を呈すべき筈であるのに、西洋では女よりも男に死亡率が高く、又同じ女の中でも青年中年者に却つて其率が低いと言ふ事實に照らせば、我々の第一に下さねばならぬ推定は、日本の

工場の設備其物が惡いと云ふ事に歸せなければならぬ。一體日本では毎年人口が五十萬增殖するといひ、之を西洋に於ける出産率の遞減と對照して誇つて居るが、實を云ふと之の方面でも餘り誇るべきものがない。之は日本の出産率は本來が極めて低いからである。之も二階堂氏の說であるが、今日年々增加しつゝある所の日本の出産率は、千人中僅かに二十二人である。獨逸は最近年々減じつゝあるに拘らず、尙千人中二十五人である。而して出産率が一定の所まで高くなつてやがて遞減するといふのは、免かるべからざる各國の大勢で、日本も亦早晩遞減の時期が來るであらう。二階堂氏は三四十年の後には此時期が來ると說明されたやうに記憶する。故に我國は決して人口の增加を誇つて安心して居る事は出來ない。而して出産率の遞減する國に於ては、死亡率減少の方策を講じて、辛うじて其均衡を保たんとして居るのであるが、西洋では概して出産率遞減といふ自然的傾向に對して死亡率減少と云ふ人間の努力が旺んに行はれて居るのに、我國に於ては自然的傾向近く將に來らんとするのに、之に對抗すべき國家社會の人工的努力が殆んど講ぜられてゐない。之れ實に國家の將來を思ふ者の、大に寒心すべき點ではないか。而して政治家はいろ〳〵國家の外面を飾る方面にのみ力を注いで、直接に人民の幸福利益を計る方面に眞實頭を費さない。之によつて我國が如何に大なる禍を蒙らんとして居るかは、今や已に統計の上にもあらはれかけつゝあるではないか。

更にもう一つ考へねばならぬことは、個人中心主義を輕蔑するが如き態度を以て極端に主張せらるゝ國家中心主義の效果は、一見其目的に適ふが如くにして、實は本來其達せんとする目的を結果に於て貫徹し得ざるに了るものであるといふことである。此事はいろいろの方面から、之を證明することが出來ると思ふのであるが、國家中心主義者の最も熱心に主張する軍國的施設の方面から之を說いたなら、予輩の說は最も明かにならう。國家として鞏固なる軍隊を有せざるべからざることは、如何なる個人中心主義も皆之を認める。然

し強固なる軍隊は如何にして之を作るを得るか。世人動もすれば、軍隊の强盛は日本の特色であると言ふ。從來の經歷によれば、成程我國の軍隊は世界列强の軍隊であるらしい。斯くあらんことは亦我々の希望で、又事實斯くあるならば、我々も亦之を誇りとするを躊躇しない。然しながら他國の軍隊と比較するとを止めて、暫らく我國の軍隊のみを取つて之を見るに、果して我々は之に滿足するを得るや否や。第一に軍隊の組織に入る個々の國民は今日軍隊を如何なるものと觀て居るか。斯ういふ問題になると、予輩は遺憾ながら其觀るところを正直に告白しなければならない。卽ち多くの敎育低き一般人民は＝而して之れ軍隊を組織する淵源である＝軍隊の服役を肉體上、並びに精神上、非常に苦痛なるものと看做して居る。中には體裁のいゝ監獄だなどゝ罵る者もあるではないか。予は今幽かに幼時鄕里にあつて或夜母の懷に抱かれ、近處の腰掛茶屋の圍爐裏の緣で、折から通りがゝりの除隊兵士の歸鄕する者より、いろ／＼軍隊生活の苦痛を訴ふるのを聞いて、恐怖と戰慄とを感じた事を記憶して居る。昔は隨分亂暴なこともあつたと聞くが、然し之と同じやうなことを、今日でも全く聞かないではない。是れ一つには訴ふる者の誤解誇張もあらう。然しながら國民皆兵の主義を採つた國に於て斯くの如き觀念を多數の者に抱かしむるとのことは、果して强盛なる軍國を作る所以であらうか。獨り敎育の低い者ばかりではない。驚くべきことは、高等の敎育を受くる者の間にも、軍隊に服役することを厭ふ者の非常に多いことは之を爭ふことが出來ない。一方には、兵役は卽ち國民の光榮ある義務であるなどゝ敎へながら、他方高等なる學校の學生、並びに其出身の紳士等の間には、如何にかして服役の義務を免れんことを冀ひ、又は企圖し、而して之を免れたるを以て、公然之を喜ぶ者は非常に多い。之れ一つには、今日の服役の制度が、餘りに社會の實際生活とかけ離れ、學業の妨げ、就職の途を禍するといふ事情もあるからであらうが、然し主なる原因は、軍隊が其躾けを爲すに必要ありとて極端に個人々々の

便益や、感情を無視するからである。一體兵役に服するといふことは、表向きは國民の本分だの、光榮ある義務などゝいふても、個人的感情から言へば、極めて迷惑な勤めである。何處の國でも、短艇競爭や野球仕合に行くやうな氣分で、喜び勇んで服務に赴く者はない。只西洋では、一方國民の義務といふ意識的觀念が相當に強く、他方國家の方でも精神上並びに物質上出來る丈けの便益を提供して、兵士となるべき個々の人人の感情を尊重することを怠らない。然るに此第二の點は、我國に於て甚だ缺けて居る。然らば獨り第一の點を國民に强要しても、實効の思はしく擧らないのは怪むに足らない。そこで我國では何を以て軍隊統率の業を實際に行ふやといふに曰く威壓である。是れ軍隊を以て一般下級の人が恰かも監獄のやうな所と推定するに至る所以である。然し全然個々の自由なる發言主張を許さず、上よりするの何等の横暴に對しても、全然之を訴ふるの途なきは、或點に於ては監獄以上と言つても差支ない。斯くして强盛なる軍隊は永久に之を作るといふことが出來やうか。單にそれ許りではない。個人の便益と感情とを無視する所謂軍隊的威壓主義は、軍隊內部だけならまだしも、時に軍隊外にまで及ぼして演ぜらるゝことがある。其最も著しき例は、徵兵檢査の際に於ける二三檢査官の横暴である。先達ての新聞でも、或檢査官が徵兵忌避の疑ひありといふので、壯丁を擲り飛して重傷を負はしたといふ記事があつた。又予の間接に知る所の最も尊敬すべき品性を有する某大學生は、檢査官の全然誤解に基く嫌疑を蒙つて散々打擲され、之に附隨して更に非常な窮境に陷らしめられた。檢査官が田舍の郡役所や役場に來て、自分のみが國家の命令權の執行者であるといふが如き態度で、人も無げなる振舞をすることは決して珍らしい現象ではない。彼等のかゝる心なき態度の如何に無辜の青年子弟をして「軍隊のお役人といふものは非常に怖ろしいものだ」といふ偏見を抱かしむるか分らない。一體、假令壯丁に忌避の嫌疑があつても、之を罰するのは相當の官憲がある。檢査官に糾問處罰の權限は絕

對にない筈だ。警察官などに對して、動もすれば人權蹂躙を責むるところの我が法曹社會が、每年起るところの徵兵檢查官不法の暴行に對してまた人權蹂躙を責めないのは、誠に不思義にたへない。予は檢查官其者を憎むのではないが、檢查官の如斯態度を默認する軍政當局の心掛を、甚だ心得ずと思ふ者である。之を看過する社會の態度も、亦大いに責むる必要がある、要するに今日までの軍政當局者の兵士並びに壯丁に對する態度は、根本的に間違つて居る。彼等は絕對的服從を以て、軍隊精神の第一要素と考へて居るやうだが、斯くの如くにしていかでか一般國民をして兵役に就くを喜ばしむることが出來ようか。幸にして我國では明治初年以來屢々對外の戰亂があつた。少くとも近來は十年每に一回、外戰に從事して居る。故に國民一般は、常に耳目を外方に晒らすやうに馴らされて居つたから、軍隊に謳歌こそすれ、敢て不平は言はなかつた。けれども斯くの如き國民の態度が永遠に繼續するものと思ふならば、是れ少くとも先見の明かなる政治家の立場ではない。軍國主義者は近頃頻りに空疎なる義勇奉公の形式道德を說くに特別の努力をなして居るけれども、之れ丈けで之れからの國民精神を左右せんとならば、大に誤りである。眞に軍國の組織と設備とを鞏固にし、且保持せんとするならば、結局事實の上に民心を得なければならない。此點に於て獨逸には流石に感心なものがある。日本は獨逸の軍國的經營の外形を學んで、其內部に潜んで居る苦心を見損つた。

尤も軍隊に對する民心の歸嚮を得んが爲めの施設の一端は、日本に全くないではない。例へば軍人には普通の文官よりも高き位階を與へ、又高き特種の勳章を與ふるが如き、又普通よりは割のよい恩給を與ふるが如き、之れである。畏れ多くも皇室に於ても亦、いろいろの場合に特に軍人を優待するの意を示し給うて居る。例へば、其卒業式に陛下御臨幸の光榮を有するは、一般の學校中では目下のところ帝國大學に限るのに、陸海軍の學校は餘程下の方まで此光榮に浴することが出來る。優等生に賜はる恩賜品の如きも、陸海軍の學

校の分は餘程潤澤である。社會も亦軍人に對して特に優待の意を示すことと已にいろ〱の場合にあらはれて來る。是れ皆軍隊に對して民心を惹きつけんとするの苦心に出づるものにして、即ち軍隊と民心との關係を密接ならしむるの必要を、軍政創立者が念頭に置きし明白なる證據である。然しながら我國では、此精神は只其一端を模倣したのみで、全體としては甚だ徹底して居ない。何故なれば此精神を十分に貫徹せんとするならば、もつと軍隊と社會とを接觸せしむる工夫あつて然るべき譯であるからである。我國に於ては、軍隊の服役と我々國民の社會生活と、利害の調和の取れてゐないことが非常に夥しい。一つの例を言へば、一年志願の制度である。之は專ら高等の學校教育を受けた者に與へらるゝ特典であるが、中には在學中に此特權を利用する者も少くない。此頃の樣に一學校を了へて他校に入るに入學試驗の難關あることゝなりては、學業の途中已を得ずして一年志願をやるものが頗る多くなつた。然らば此制は須らく學校生活の便宜と調和するやうに組立てられることを必要とする。然るに其服役は學校生活の途中たる十二月に初るのであるから、事實に於ては、一年の服役の爲めに二年棒に振らなければならない。尤も軍隊の方から言へば、一般の兵士が十二月の入營であるから、學生の便宜を計りて四月とか九月とかに入營する者をも認めては、其者丈け特別に訓練しなければならぬといふ不便があるといふだらう。之も軍隊に於ける訓練の便宜といふことから見れば尤もの議論である。けれども、之が爲めに壯丁が服役を厭ひ、如何にかして之を逃れんと企つる者あるの不祥なる精神的効果に比較するならば、如何であらうか。又之は一年志願に限つたことではないが、軍隊の服從は今日我國で教育ある青年の就職を非常に妨げて居る事實を呈して居る。第一職業を探すに當つても、軍隊の方に引つ掛ゝりのある者は、役所でも會社でも、之が採用を好まない。服役の義務を旨く免れた者が、職業を得るに最も都合がよいのである。偶々職業を得ても、其人が軍隊に入ると、多くの場合に於て、其職

を止めねばならぬ。服役の爲めに、やつとありついた職業を失ふ人が今日實際に非常に多い。否らざるも、其間丈け立身が停滯し、其後も度々召集さるゝので、會社などでは、斯ういふ人を段々嫌ふといふ事になる。斯の如く軍隊の服役が其人の生活の途に累するやうでは、之を忌避せんとする者あるに至るのは、寧ろ當然と言つてもよい位である。現に實際のところ、忌避は非常に多い。當局者は近頃此事を矢釜しく取締らんとして居るけれども、それでも現に高等の教育を受けた者の間には、何とかして服役を免れんと試みる者非常に多い耳ならず、又現に不當に之を免れて居る者も事實上決して少くはない。若し當局者に眞に眞面目に此問題を解決するに意あるならば、獨逸などで行はれて居るやうに、服役の理由の爲めに職業を失つたり、立身出世が妨げられたりするやうな事が絶對にないやうに、須らく實業社會と協定すべき筈である。服役の爲めに職業を失はしむるといふ會社が惡るいなど丶呑氣に構へて居るべき問題ではない。況んや同じ國家の政府が、一方に兵役を以て國民當然の義務なりと唱しつつ、他方に於て兵役の關係に累せらるゝ者は努めて之が採用を避け、其關係のない者のみに仕官の便宜を與へ、以て自ら徴兵忌避を奬勵するが如き現象を呈するのは、一つの大なる矛盾ではないか。獨逸などでは、更に進んで特に或種類の官吏を限り、之には兵役を畢つたものでなければ全然採用しないと定めてある。佛蘭西では兵役の義務を畢つた者でなければ國會議員の被選權がない。之れでこそ、本當の軍國主義の行はれ得る基礎があると言ひ得べきである。

更に我國に於て矛盾の最も甚しいのは、法律制度の上に貴族富豪の事實上の徴兵忌避を默認して居ることである。三十二歳まで海外に留る者は服役を命じないといふ規則が即ち之れである。貴族富豪の子弟にして、進んで陸海軍の將校とならざる者を除いては、殆んど總て此規定の恩惠に浴して所謂光榮ある義務を全く果たしてゐない。國民の先達たるべき上流の階級の態度を、斯く不埒千萬の狀態に放任して置いて、以て强大

なる軍國的經營を完成せんとするのは、矛盾も亦甚しいと言はざるを得ない。尙序でに言ふが、貴族富豪に斯くの如き特典を與ふることは、他の方面から觀ても、國家の爲めに不得策である。何故なれば、一體將校などには貴族出身の者が多ければよいのに、此特典は貴族をして自然軍人たらんとするの志望を懷かしめざるに至るからである。斯くいふ故は、元來政治家とか、軍人とかいふやうな職業は、勞力に對する報酬の少い商賣であり、且つ政治家には何時止めねばならぬといふ地位の不安定があり、軍人には何時戰死せねばならぬといふ運命の不安定があるから、家に相當の產を有して、萬一の場合に臨んでも更に後顧の虞がないといふ類の人でなければ安心して取れぬ職業である。後顧の虞ある者が斯かる職業に就けば兎角其地位に戀々としたり、又徒らに生命を惜しがつたりして、結局動もすれば墮落腐敗する者を生ずる。且つ又政治家や軍人などゝいふものは、人を支配し人を命令する地位に立つものであるから、出來得べくんば、普通平民の出身よりも、それ自身生れながらにして社會の尊敬を博する家柄の出の人の方がよい。此點に於て政治家と軍人とは、貴族富豪に最も適當なる職業である。殊に今日の如く强大なる軍備を必要とする時勢に當つては、財政上現役として斯かる多數を養ふを許さゞるの結果として、豫備役を多數作るといふ譯になつて居るが、之にはまた在鄕將校の多數を必要とする。此在鄕將校の如きも、貴族富豪の出身でないと、兎角衣食名利に追はれて腐敗墮落し易い。其爲めに一年志願の制を設けて貴族富豪に優遇の途を開いて居るのであるが、我國の政治家は態々他に別法を設けて貴族富豪を軍職以外に逸して仕舞つた、その結果は今日在鄕將校に其人を得ざるといふ弱點があらはれて來たではないか。尤も貴族富豪を將校たらしめやうと言ふても、根本に於ては、貴族富豪の心掛乃至敎育の問題である。けれども彼等に容易に兵役の義務を免れ得るの道路を開いて居るのは、之れ亦著しき矛盾の一つと言はなければならない。

之を要するに、個人中心主義を深く顧慮することな

くして獨逸邊の制度を皮相的に模倣した軍國主義は、結局に於て到底失敗に終らざるを得ない。尤も目前の急務のみを眼中に置く人は、盲目的に威壓的に、服從せしむるでなければ、軍隊は用をなすものではない。一々世間の批評を聞いて居つては、立派な軍隊を作ることが出來ないと言ふだらう。目前の事のみを念とする人の言としては、之れ亦一應尤もではあるが、國家の永遠の生命に着眼する我々の立場としては、到底其說に無條件で賛成することは出來ない。

斯くいへば、人或は我國の目下の形勢は周圍の有形無形の壓迫が强烈にして一刻も油斷が出來ない。個人中心主義の要求も一應尤もではあるが、餘り之を顧慮して國家の統一的生命を少しでも傷けては大變であると云ふだらう。此種の人は、動もすれば近世歐米に盛になりつゝある人種競爭の說＝白禍論＝を擧げ、又は戰後に於ける軍國主義の流行を說いて、日本今後の困難なる地位を說かんとするのである。然し日本一國のみを取つて絕對的に其形勢を說くならば、我國今後の地位は論者の云ふが如く極めて困難なものであるに相違ない。然しながら他の强國に比較し又我國の從來の形勢に比較して、我國の將來は個人の充實と云ふやうな問題を考へて居られぬ程切迫したものであらうか。此等の點は固より將來の事に屬し、人によつて各々其觀る所を異にするだらうけれども、予一個の考へとしては、人種的觀念の如きは寧ろ年と共に段々減退すべき筈のものであると考へる。一體見知らぬ人に取敢へず敵意を示すと云ふのは、野蠻人の常で、開明に進んだ人程皮膚の色や眼鼻立の差によつて彼と此れを區別しなくなる。白人の黄色人種に對する觀念は、純粹な人種的觀念としては、決して黄色人種自身の想像して居るが如き危險なものではないと確信する。尤も歐羅巴の一部の人の思想の根柢には昔の蒙古人種やサラセン人の侵掠と云ふ傳說が基となつて、東方に勃興した民族に對しては本能的に一種の恐怖を感ずると云ふ傾向が幾分ないではない。是等の點は愚にもつかぬ黄禍論の說がともすれば不思議に歐人の間に多少の眞面目

を以て耳傾けらるゝ所以を說明するものである。然し彼等の有する東洋民族に關する諸般の知識は、今や漸く是等の迷信的傳說の基礎を弱めつゝあることは云ふを俟たない。故に予輩の考では、我々日本國民の態度其物が徒らに彼等の猜疑を挑發せない以上、單に黃色人種なるが故に彼等の理由なき壓迫を蒙るといふことは、將來段々薄くなると思ふ。猜疑を招く丈けの因を作れば、例へば今日の獨逸の如く同じ白人の間でも壓迫を蒙るのである。之れ迄の日本に對する歐米の批評の中には、其根柢を人種の差に置いたものもあつたけれども、之れは實は我等の態度が彼等の十分なる諒解を得ざるに方り、彼等が其次第を說いて輕卒に之を人種を異にするの結果たる思想感情の根本的差異に歸したのであつて、我等の態度さへ其宜しきを得たりしならば、かゝる誤解に基ける人種的偏見を見ずして濟んだものであつたらう。人種の差と云ふ事が問題になるのは表向の口實で、根本の原因は常に他にある。人種が違ふと云ふ丈けで、我々は特に歐米の壓迫を蒙るとは思はない。成程從來白皙人種は自ら最優等人種なりと云ふ自負心は有つて居つた。かくて白人は本來有色人種を支配するの道德的權能ありと考へたものもあるが、之と共に又他方には、有色人種も我々と同等の人種なりと云ふ人道主義の立場を主張した人も少なく無かつた。況んや今日は、有色人種中に大に其能力を發揮して白色人種を瞠若たらしめ、彼等の獨り自ら優秀なりと誇るの確信を事實に於て動搖せしめて居るに於てをや。又戰後に於て益々武力一點張りの軍國主義のみが流行すると觀る說もまた、蓋し一面の眞理たるに止るものであらう。戰爭の結末の模樣によつては、軍國主義は無論盛になるだらうが、他の一面に於て人道主義も亦必ずや從來無比の勢を以て起つて來るに相違ないと思はるゝ。暫く一歩を讓つて所謂實力主義が盛になつたとしても、今度の戰爭の與ふる敎訓は、本當の底力の涵養が第一の急務だといふ事であらう。今度の戰爭で我國の多くの人は、獨逸の勇敢なる戰鬪振りに敬嘆するものが多いのであるが、西洋の多くの識者

は、寧ろ軍國的設備の缺けて居つた英吉利などがあれ迄に持ち耐へあれ迄に盛り返した事を、何よりも餘計に敬嘆して居る樣である。我國の立場としては將來固より相當なる軍事的經營は之を怠るべきではない。けれども遠く離れた孤立の地位にある丈け、歐羅巴の諸國が互に感ずる程我々は外勢の壓迫を激烈に且現實に感ずるのではない。故に日本としては、假令如何に外勢の壓迫があると云つても、相當に個人中心主義を主張するの餘地は確かにあると思ふ。況んや此方面に於ては、從來とても我國は最も後れて居りしに於てをや。無論之に伴つて來る所の弊害は極力之を警戒せねばならず、又防禦せねばならぬが、たゞ外勢の壓迫と云ふ影法師に怖れて、一に國家組織の外面的粉飾に專念し以て個人本位の政策を等閑に附するのは、余輩の最も反對する所である。

八月十五日米國に向つて出發せる茅原華山氏は途中十日を布哇に費やし、九月中旬桑港に着、直ちに世界第一の大都なる紐育に到り、五六年振りにて觀たる米國の印象及び歐洲大戰が如何に米國に影響しつゝあるか等を論述したる「世界第一の大都の中央に立ちて」の長篇を寄せらるべし。こは恐らく十一月の本誌に掲載せらるゝととならん。

去らば日本よ

横濱解纜前二日大井の里に於て

茅原華山

瀧田樗陰盟兄足下

僕がこの度日本を去つて復たび寰宇の間に周流せんとするに至つた主要動機は、願くは、可能ることなら、全然第十九世紀を擺脱して第二十世紀の人間と爲りたいといふ一念でありました。歐洲戰爭は人類と文明とを一大鎔鑛爐に投じ、こゝに流動體的世界（フルイド、ウオールド）を現出したのである。いかにそれが流動し、又それがいかに固定するかを看取し、以て將來の日本を其裡に發見したいといふのが、僕の目的であります。

僕は最早見物的旅行をする積りはない、紐育に在つても、グラント將軍の廟を見舞ふ必要がない、ボストンに在つても、晩霞丘モニユメントに詣く必要もない、僕に於てはパーリメントが倫敦を代表して居るでもなければ、凱旋門が巴里の象徴でもない、僕は自ら此戰爭に促されて人間の信仰、定義、慣習、道義、制度の惜しげもなく人心の中に破壞され、それが流動浮遊しつゝある間に漂うてその刺擊を受け、深切に自己を內省して見たいのであります、僕は殆ど地球の表面を見盡しました、南米諸國、濠洲、西部利亞は僕の足跡の未だ印せられざる處ではあるが、態々出掛ける必要もあるまい、既に外、地球を究めた、今度は內に精神的彼岸を探り人生宇宙の無限無極なるを徹底味到體得して見たいのである。

樗陰盟兄足下

僕は足下の命を受けて、近年幾度か筆を『中央公論』に執つた、世間には『中央公論』は原稿料を以て文士論

客の血を啜り盡くすといふものもあるが、僕は此に確言する、僕は未だ曾て楞陰兄から原稿料を以て誘はれたことがないと、僕が眞面目に文章を書く場合には必ず人を避くるが爲めに家を出でゝ何處にか去る習はしがある、十行二十字の原稿紙十枚か十二枚の新聞の論説を書くにもさうである、況して雜誌の論説には特に意を用ゆる、何處に去るかは其時の氣分次第で、或は寺に引籠ることもある、或は溫泉に赴くこともある、宿屋の一隅を借りることもある、友人の家の二階を臨時に占有することもある、海岸の小さな料理屋に陣取つて、波濤の聲を聽きつゝペンを取ることもある、これに必要な費用を取ればそれで僕は滿足なのである、書いて了つて原稿料がいくらに爲つて居るか算盤に當つた事などは勿論ない、それで金に困つたこともない、楞陰兄は未だ曾て僕を誘ふに原稿料を以てせざるのみならず、僕も亦原稿料を以て誘はれない人間である。

楞陰兄は大學にまで入つた人である、學術には根柢のある人である、楞陰兄の御齡は承知しないが、兄の年頃で漢詩の讀める人は實は幾人もない、然るに兄は漢詩の能く讀める人である、僕は曾て山形縣から秋田縣に入つたことがある、山形縣で僕の作つた漢詩を撣毫しても讀める人がない、然るに秋田縣に入ると全く其趣きを異にし、僕の面會するやうな人々は大抵自由に讀み下すばかりではない、中には批評をもするものがある、それが往々肯綮に中つてゐる、蓋し秋田縣は藩政時代に盛んに漢學を奬勵したものである、漢學といへば漢詩は附物である、これ秋田縣人が他の東北の諸國と選を異にして文學に深い趣味と憧憬とを有つてゐる所以であらう、近時漢學が一轉して西洋文學と爲り、『秋田魁新報』の日曜附錄を見れば、トルストイもツルゲネフもドストイエフスキーもベルグソンもオイケンも遠慮なく紹介されてゐる、石田友治といへば世間では蛇が棒を呑んだ人のやうに考へてゐるかも知れないが、『第三帝國』の社中で漢學もあり漢詩もあつたのは彼れ一人である。

楞陰兄はそれだから文士論客の理會があるのである、

同情もあるのである、これ楞陰兄に頼まるれば何となく骨を折り身を入れて書きたく爲る所以ではあるまいか、僕は直接楞陰兄から聽いたのではないが、兄が或人に直覺的に問題を大觀して綜合的論文を草し得るものは當代たゞ茅原華山を然りと爲すと語られたさうだ、僕は自ら僕の缺點を知つてゐる、僕は動もすれば結論に急ぐの風がある、然しながら僕の志す所は綜合大觀に在り經國濟民に在つて分析解捂彫章琢句に在らず、否、分析解捂、彫章琢句を內容とした綜合大觀、經國濟民に在る、楞陰兄はそれを知つてゐて吳れる、楞陰兄は他をして知己の感を抱かしめる、これ楞陰兄が雜誌の編輯者として當代に獨步なる所以ではあるまいか。

僕は一千九百十一年日本に歸つてから、政府から、『注意人物』として見做されてゐたやうである、何でも大浦子爵が言つたさうだ『茅原華山は社會主義ではないが危險思想だ』と、一時は政府で僕の家庭生活まで取調べたやうだ、僕には貸金もないが借金もない、僕は妾狂ひもせねば藝妓狂ひもしない、酒樓旗亭、バーカフエーさへも已むを得ざるに非ずんば入つたことがない、僕の母と妻とは眞の親子も及ばない程睦ましい、僕が妻を叱かれば母は常に妻の味方をする、二子は既に大學に學んでゐる、兄弟の交膠膝の如く嘗て口論などをしたことはない、其處で『國家打破、國家創造』を唱ふる茅原華山の家庭生活は決して爆裂彈などを製造するのではない、寧ろ家庭生活に於ては世の一小模範とするに足るといふことに爲つて、『茅原華山は行動は毫も危險はない、唯其言論が危險なのである』といふことになつたさうだ、今日に於ても僕の言論を危險としてゐるや否やは僕の自ら與り知らぬ所である。

僕は英國に於て注意人物と爲つた、三たび愛蘭に遊んで探偵に尾行せられ、印度人と交つて復た探偵に尾行された、僕がアイスランドに航せんとして蘇格蘭のリースといふ港に居つた、探偵が僕のホテルの前に立つてゐる、外出する每に追跡する、所が僕がホテルに著いた晩、ホテルの小僧にウイスキーや葡萄酒を御馳走

して遣つた禮といふ意味もあらう、其小僧が夜中に僕の部屋の戸を叩いて僕を呼び起して『ピストルの用意を爲さい、何時捕まるか解らない』と注意する、小僧は定めし僕を人殺しか盜賊の類と判斷したのであらう。

それから僕は堪忍袋が切れて、倫敦に歸つてから英國政府の探偵部なるスコットランド、ヤードに書面を飛ばし、其責任者に面會を申込んだ、リッチヤードソンとかいふ人が尋ねて來て呉れた、其處で僕は唯新聞記者として世界の人と物とを知りたいといふ外他念はない、僕は熱烈なる愛國者だが日本政府の爲めに外國の秘密を探るやうな人間ではないと說明したら、彼れは首肯いて歸つて行つた、それから僕は自由に爲つた。

倫敦に居る時分から僕は露西亞政府の注意人物に爲つて居つた、露國に在る友人から手紙を僕の許に出すのに、直接僕に宛てないで倫敦なる或日本人に送り、その日本人から改めて僕のアドレッスに郵送した、露國に在る友人の書中に『何うも君の處へ直接手紙を出せば、露西亞政府で開封するやうである、だから斯かる迂回した方法を取るのである』とあつた、段々考へて見ると、僕は倫敦で三四の芬蘭人と交つた、園遊會のやうな公の集會でも芬蘭人と交歡して居つた、芬蘭人といへば孰れ露西亞政府の注意人物である、その注意人物に交つたから、僕までも注意人物と爲つたのである、僕がコンスタンチノープルから露國の汽船に搭し、オデッサに上陸し、莫斯科を經て露都に入つたが、終始探偵に睨らまれてゐた、芬蘭に入り、瑞典から英國に還らうとしたが、或人の注意で、波蘭を經て、獨逸に引上げたことがある、僕は國際政策に於て伊藤公と見る所を同じくするものである、故に僕は熱心なる日露同盟論者である、それが露西亞政府の注意人物たらんとは。

兎に角渺たる乾坤の一布衣一逸民たる僕が世界三强國の注意人物に爲つたといふだけでも、僕に取つては名譽の至りではないか。

僕は米國人を愛す、猶僕が支那人を愛すといふやうな意味で、今や日本には世界の舞臺で芝居を打つやう

な人間は一人も居らなくなつた、僕は日米戰爭を贊成せぬものである、又僕は局外中立國たる米國と局內中立國たる日本が歐洲戰爭に對して終始消極的態度を取るは決して得策ではないと信ずるものである、或機會に二國が互に知照し協議して此戰爭を終局するに積極的手段を取るべきものと信ずる、渺たる乾坤の一布衣一逸民を以てして何處まで踏み込み得るかそれは僕にも疑問であるが、何うです日本には世界を呑み込み、世界を舞臺にして芝居を打ち得る經國家は果して幾人かある。

僕が最後に特筆大書して置きたいことは、元老、官僚、政友會等の閉息である、大隈侯が辭職すべしとは一般に信ぜられて居つた、僕も亦大隈侯が寺內伯を後任に推薦して圓滿辭職を斷行すべしと話された一人である、而も信據すべき筋から話されたのである、僕は大井町の隱栖に於て靜かに大隈侯の性情閱歷を稽へて見て、大隈侯は決して辭職するものではない、侯の性情は辭職することを許さないと斷定した、由來佐賀縣には唐津といふ港があるからでもあらうが、支那人の日本に歸化したもの丶子孫がある、古賀廉造は自ら劉氏と稱してゐる、武富時敏が明の皇室の連枝に屬するもの丶子孫であるといふことは既に世に遍く知られた事實である、僕は大隈侯も亦支那の英雄の血を傳へた日本人ではあるまいかと思ふ、由來日本人は潔白を尙ぶ、然るに大隈侯の執着たるや、到底他の日本人に發見する能はざる所である、支那の歷史では珍らしくはない、近く袁世凱を見ても解かる、世或は桂公を以て袁に擬したが、公は長州人で、長州人は多少朝鮮の血を傳へてゐて、朝鮮人に支那人のやうな執着がないやうに長州人にも亦支那人のやうな執着がない、朝鮮人が女性的であるやうに長州人にも亦女性的の所がある、大隈侯に至つては毫も朝鮮的の點はない、飽くまで惟物主義である、惟物主義の作用は功利主義である、大隈侯が道德仁義をいへばそれは道德仁義をいふが功利であるからである、侯には詩もない歌もない俳句さへもない、長州の政治家は皆雅號を有つてゐるが、侯には雅

號さへない、侯の饒舌を以てしして不思議にも詩、歌、俳句を引用したことは殆どない、山縣公は『一肩任重愧朝衣』と言つた、伊藤公は『萬死平生志。千秋一寸功』と言つた、何處かにしほらしい所がある、そして女性的の所がある、大隈侯には全くこれがない。

大隈侯は大俗物である、惟物主義の巨人である、此點が既に支那的ではないか、侯の徹頭徹尾個人主義なる亦支那的ではないか、侯の天下的大風呂敷を擴げ、その饒舌無比なる亦支那的ではないか、其生活の驕奢豪華なる亦支那的ではないか、其金儲の上手なる亦支那的ではないか、侯は女には淫しないが政權に淫する、その支那人の如くに女に淫するものを移して政權に淫する、辭職などは思ひも寄らぬ。

袁世凱をして日本の空氣を呼吸せしめ日本の衣を着せしめたならば全く大隈侯に爲るではないか、若し袁にして抵死政權と離ることが可能ないとしたならば、大隈侯も亦抵死政權と離るゝことが可能ないではないか、一旦政權に有附けば殺されても政權と離れない、侯は辭職しないのではない、侯の性情辭職することが可能ないのである。

それから大隈侯は明治に屈した人である、その大正に伸びんとする要求の抑ゆべからざるものあるは爭はれないことである、

故に僕は大井の里の隱栖では大隈侯は決して圓滿でも不圓滿でも辭職するものではないと斷定した、所が東京に出でゝ諸處を訪問する、僕は屢々大隈は今度は辭職する、辭職せざるを得ぬのであると保證されたものだ、侯が辭職すると否やとは直接僕には何の利害はないが、政局の推移を研究するものとしては多大の興味を感ぜざるを得ない。

所謂與黨側は辭職説を打消したが、與黨でない側はこれを僕に保證までしたものだ、悲しいことには僕が辭職せぬといふは大隈侯の性情人格を呑み込んでの判斷ではあるが、要するに推測である觀察である、侯は必ず辭職すべしと言はれて見れば、それは事實を言つたものと視ねばならぬ、事實を打消し得るものは唯事

實である、然るに僕には事實がない、大井の里では辭職せぬと推定し、東京に出てゝは此推定が破壞され、破壞されて歸つて前後を商量して見れば、依然辭職せぬといふに歸着し、何んでも斯かることを五六回繰返へし、大井の里の或軍人と語り合つて、果ては大笑したことがある、こゝに或官僚の一驍將との對談を記して見やう。

僕『大隈侯は居据はりますよ、餘りに樂觀しては失望することがありませう。

官僚『我々は既に侯が辭職せねばならぬことを知つてゐる、我々は侯から約束手形を取つてゐる、その委細は誰々が知つてゐる筈だ。

僕『其約束手形なるものが何の位有効なものでせう、恐らく不拂ではありますまいか、侯の平生から言つて侯は決して自ら辭職する人ではない、寺内伯を推薦するといふのはその本意ではない、加藤子を推薦するといふことも若し本意ではあるとすれば、餘程遠き未來のことであらう、大隈侯が百二十五歳に爲つてからのことであらう。

官僚怫然色に作して曰く『大隈侯の閲歴や性情は茅原君の講義を聽かないでも我々は疾くに心得てゐる、心得てゐるからゐるだけの方法が取つてある、願ふに君が出立までには新内閣が成立するであらう。

今に爲つて見て『茅原君の講義』を聽いた方が可かつたのであらうか、それとも『茅原君の講義』を聽かない方が可かつたのであらうかと一問を發せざるを得ないではないか。

女に惚れゝば直ぐに向ふの女まで惚れるものと見るが安全であらうか、自身が汽車に乘つてゐる、山が奔る、川が奔る、林が奔る家が奔ると見るは、實は自分の汽車が奔つてゐるのではないか、主觀と客觀とは常に一致するものではない、英語に『希望は思想の母なり』とある、主觀の希望欲求を取つて直ちに客觀界の事實に化せんとし、觀照的に虛心平氣に客觀に面せずして、客觀をば主觀を以て彩色し以て自ら欺かんとす、これが人情の弱點である。

僕が重ねて西遊の途に上らんとするに方つて憶ひ起すは、僕の前度の西遊は米國以後は全く萬朝報の命であることである、僕は幾多數を黒岩先生から受けた、その致で今も尚僕の守つてゐるものがある、則社長の山田藤吉郎君から僕の家族が受けた溫情は僕の永く忘れぬ所である、その日夕相見る能はざるのは、これは運命の然らしむる所とあきらめるより外はない。

「第三帝國」は石田君を中心として組織されたものであるから、石田氏に歸するのが當然である、僕は當時石田君に一切を引渡す積りであつたが、他の社員が自己の權利を主張して訴訟を提起した、僕がこれを差止める譯のものでないから、其爲すがまゝに任かしたのである、僕は今や僕の雜誌を弟茅原茂に讓り渡して了つた、僕は天地間眞成の一布衣一逸民一無職業者である、僕は一切の外物を拋却して赤裸々に還元したのである、平生言ふ所を實現したのである。

僕の心識面識は日本に遍ねしといはんよりは、寧ろ世界に遍ねしと言つた方が可からう、僕は切に諸君が第十九世紀を擺脫して第二十世紀の人に爲るやうに努力せよと勸告する、獨り老人が滅ぶのみならず、新人も亦滅ぶ、或は新人の方が素養がないから、老人が滅びないで新人が先づ滅ぶかも知れない、僕は切に諸君の努力と反省とを勸告するのである。

僕が日本に歸つてから時折物した漢詩がある、中には專家も及ばないと評されたものもある、此に「中央公論」の餘白を藉りて世に傳へる、指正を賜らば幸甚

志懷二首

誰能成敗見眞機。自古文章在布衣。廊廟何如湖海闊。滄波萬里一鷗飛。

登壇豈敢說經綸。擲作烟霞不厭貧。鐘鼎調和委賢者。春風好作詠歸人。

山中雷雨

紫電劈空遥射樓。滿天星斗望中收。過溪知是雨來近。萬木欲風山欲秋。

十和湖上作 湖在秋田縣

兩桁青山入暮煙。湖光瀲在小樓前。時平一擲英雄

氣。臥讀南華秋水篇。

移居于在原郡大井有作

閒處何妨伍二蠢魚一。生涯書卷外無レ餘。千章老木一灣水。山海中間卜二我居一。

自題小照

寫レ形非レ寫レ眞。寫得却傷神。誰辨相中相。空看身外身。襟懷自千古。勳業覓微塵。麟閣君休レ說。乾坤一逸民。

丙辰新年

文思湧如レ泉。忽成二長短篇一。非レ刑豈功利。不レ佛況神仙。身世徒多事。風雲仍壯年。一生堅苦力。欲レ學古之賢。

丙辰秋日重將載筆遊寰宇賦此志懷。

何願讀書爲二蠹蟲一。吾生四十六春風。天開二新局一人難レ老。志繼二前賢一道不レ窮。大陸煙塵鬪二龍虎一。幾時山澤產二英雄一。重將三載レ筆遊二寰宇一。經國唯期尺寸功。

青年佛教僧侶諸君に檄す

高島米峰

（一）僧侶は宗教家にあらず

青年佛教僧侶諸君。

諸君に對しては、誠に言ひ惡いことではあるが、若し、僧侶といふものが、單に、法を賣り道を鬻いで、己が生活を營むのみのものならば、僕は、僧侶の存在を必要としない。若し僧侶といふものが、單に、死人の取片附けと、葬式法事との外に、何等の能のないものならば、僕は、僧侶の存在を必要としない。而して、日本現代の佛教僧侶、その數實に十幾萬、中に就き僕をして、その存在を必要とせしめ得るだけの僧侶が、

果して幾人あるであらうか。しかし、世間は廣く、人は多い。その多い人々が、悉く、僕と同感だといふ譯ではあるまいから、まだ、此くの如き僧侶をも、これを必要とするものが、尠くないかも知れない。さういふ人のためには、當分これを保存して置いても、差支はあるまい。

僧侶を保存するならば、たゞこれを僧侶として保存すべきであつて、斷じてこれを、宗教家として保存すべきものでないといふのが、僕の年來の宿論である。元來、僧侶と宗教家とが、その領域を同じうして居たために、生ける人間の濟度を爲すべき筈の宗教家が、たゞ寺院内に居住して、死んだ人間の始末をつけることのみを、本業の如くに心得るやうになり、遂に、宗教家亡びて、僧侶だけが、時を得るやうになつてしまつたのである。僧侶にして、若し、世間並に「家」の字が羨しくば、よろしく僧侶家と稱するがよからう、宗教家といふ名は、斷じて許すことが出來ない。と言つて然らば、その謂はゆる宗教家といふものが、果してどれだけエライものであるか、存在の意義のあるものであるかといふに僕は、この宗教家といふものさへ、この世には、存在の意義の怪しいものであると觀るのである。

こゝに、道德を行ひ、道德を鼓吹する人があるとすると、世間は、これを道德家と呼ぶのである。こゝに、宗教を信じ、宗教を宣傳する人があるとすると、世間は、これを宗教家と稱するのである。然るに、道德家に對して、その人が道德家であるといふことのために誰がこれに報酬を贈り、誰がこれに月給を拂ふものがあるだらう。道德家は道德を行ふことに依つて、衣食しないし、又、道德を鼓吹することに依つて生活を營まない。卽ち、世には道德家といふ職業はない筈であるし、從つて、自己の生活上の保證を道德を行ひ道德を鼓吹するといふことによつて、得やうとする人はあらう筈がない。然るに、今の謂はゆる宗教家は、宗教を信じ宗教を宣傳することを以て、職業であるかの如くに心得、自己の生活上の基礎を、こゝに定めやうと

して居る。否、滔々たる現代の自稱宗教家は、悉く宗教を賣り、信仰を鬻いで、これによつて生活して居るのである。古聖曰はく、衣食に道心なく、道心に衣食ありと。衣食を目的として鼓吹する道德は、道德そのものではなくて、道德の形式である。衣食を目的として宣傳する宗教は、宗教そのものではなくて、宗教の殘骸である。形式と殘骸、此くの如きものがどうして、人心の根柢に培ふことが出來やう、人の心の緒琴と共鳴することが出來やう。

僧侶家でもない、宗教家でもない、たゞ、誠意熱心の、宗教信者たり得れば足るではないか。眞宗の祖師親鸞上人は、「親鸞は弟子一人も持たず」と言ひ、信者を呼ぶに「御同朋御同行」と言つて居られたといふ態度は、正に、僕等の學ぶべきところではあるまいか。青年佛教僧侶諸君、諸君は、果して、謂はゆる僧侶家とならうとするのであるか、謂はゆる宗教家とならうといふのであるか、抑々また、眞の宗教信者たるを以て滿足しやうとするのであるか。

(二)　僧侶の教育と獅子身中の蟲

青年佛教僧侶諸君。

佛教の衰へたること、今日より甚しいことはない。そして、それは、畢竟、現代の僧侶があまりに人間離れのしたゝめの罪であるといふものがある。人間離れにもいろ／＼ある、神となり佛となるのも、人間離れしたのであるし、石と化し獸に墮するも、亦、人間離れのしたのである。而して、青年佛教僧侶諸君、諸君は、果して神か佛か獸か石か、否、諸君と雖も、必ずまづ人間とならなければならない、人間でなければならない。必しも、諸君に限つたことではない、人は誰でも、佛になるに先ちて、まづ人間でなければならない。未だ一個の人間たることさへ出來ない分際で、早くも已に、未來の佛果を豫約しやうといふのは、實にこれ、僭上の沙汰である、噴飯の料である。

諸君の中には、或は世間の大學を卒業したものもあらうし、或は宗門の大學を出たものもあるであらう。中には、或は中等教育さへ、滿足には受けなかつたも

のも少くはあるまい。否、これが一番多いのであらうが、苟も宗教信者として、信仰皷吹の大任を帶びやうとして居るものならば、少くとも、世間並の大學教育位を受けて居なくては、一人前の人間とは稱するに足らない。一宗の學者として、學界に相應の地位を得やうとしても、世間並の大學教育位は受けて居なくては矢張り一人前の人間とは言ふことが出來ない。その一人前の人間となりたる上に、宗門の學者とならうといふものは、更に進んで、宗學を專攻しなければならぬことは勿論、布敎傳道に從事しやうといふものも、亦、それに必要なる修養を積まなければならないのである。

昔の僧侶は、その時代に於ける最高知識であり、その當時の思想界に於ける、一大權威であつた。これに加ふるに、熱烈なる信仰と、崇高な德性彼此相待つて佛敎の宣傳、意の如く出來たのである。然るに、今や、僧侶は、知識に於て、時代の水平をさへ保つことが出來ない。從つて、佛敎が、次第に識者の心から遠ざかるやうになり、現代の思想界と、殆ど沒交渉の觀を爲すに至たのである。言ふまでもなく、信仰の皷吹は、學問の背景が無くてはならぬ。日本現代の思想界に最高權威として、學問としての佛敎が儼として控へて居るならば、それを背景として、宗敎としての佛敎の宣傳弘布は、甚だ易々たるものがあるのである。然るに佛敎各宗、各々、微々たる貧乏經濟を以て、不完全なる宗門大學を經營して居るのであるが、それは、宗門の學問を修める上から見ても、對世間の方から見ても殆ど無意義に近い程の微功をさへ、收め得ないで居るのである。現に佛敎各宗の大學で敎育されたものが、果して能く、立派な宗學者となり得るか、果して能く立派な布敎師となり得るか。否、元來、彼等に、眞實その宗說くところの信仰を確立して、自ら安住の境を見出し得たるもの、幾人ありとするか。檀信徒の信施に活き、佛飯に育ちたる彼等、なまなか世間の學問を噢りかけたゝめに、舊信仰を破壞するとは學び得たけれども、新信仰を樹立するだけに徹底し得ない。たゞ彼等が、殊勝氣に頭ヒン丸めて、空念佛を唱へて居る

所以のものは、この生存競爭の烈しい時代に、自己の腕と脛とによつて額に汗して己を養ふ程の實力を有しないために、寺院に隱れて、その日を安泰に送らうとする、一種の手段として居るのである。これを以て、若し彼等に對して、パンを與ふることを約するならば彼等は、直に喜んで、その袈裟を捨て、その寺を捨てゝ、還俗することを辭しないであらう。即ち、今日、佛教の各宗が、貧乏經濟を遣繰りして、中途半端な宗門の大學を建てゝ置くといふことは、寧ろ、その宗門に對する叛逆者、獅子身中の虫を養成して居るといふことにもなるのである。何故に、各宗合同して、一大佛教大學を設立し、宗門の青年に對して、學者たらむとするものにも、布教師たらむとするものにも、徹底的教育を施さうとはしないのであらうか。青年佛教僧侶諸君、諸君果して能く、宗門の叛逆者となることが出來るか、將たまた獅子身中の虫として終るのか。叛逆者の勇は稱すべしとするも、身中の虫の陋は、唾棄すべきではないか。

（三）僧侶の怠慢と會堂の建設

青年佛教僧侶諸君。

諸君も知つて居るが如く基督教は、東京の各區に巍然たる會堂を有して居て、此處で、死人の葬式もするが、生ける人間の救濟が、主要な目的となつて居る。勿論、佛教の殿堂も、各區に聳えては居るが、しかし此處では、葬式法事以外、生ける人生とあまり交渉を有して居ない。說教もある、演說もある、しかし、その聽衆は、大多數が老人であつて、生氣潑剌たる青年男女は近づかないのである。總に、淺草に青年傳道會の會堂があり、本郷に上宮教會の會堂と、求道會館とがあつて、一部青年の渇を醫しては居るが、この貧弱なる三つの會堂も、すべて一個人の寄附、若くば經營に成つたもので、青年佛教僧侶諸君の力は、殆ど加はつて居ないのではないか。諸君の怠慢か、諸君の微力か、孰れにもせよ、諸君の恥辱でなければならぬ。殊に、東京帝國大學基督教青年會附屬の會館が、本郷追分の大通りに、輪奐の美を縱にして居るのを見ては

青年佛教僧侶は、何をして居るのかと言ひたくなる。一學校内に於ける、一小團體たる東京帝國大學の基督教青年會さへ、尙且つ、この位の事をして居る。然るに、日本の佛教十三宗五十六派、僧侶の頭數約十四萬その半が青年僧侶であるとしても、實に七萬人の多數ではないか。その七萬の青年佛教僧侶諸君が、全國相呼應して蹶然として起たば、天下何事か成らないことがあらうや。金を集めるとして、一人僅に五圓づゝを醵出するとしても、立地に三十五萬圓を得ることが出來る。一人五圓の金は二回の宴會費に相當し、自ら節するも、これを得ること安く、人に喜捨せしめるとしても、これを得ることは難くない。否、その道を以てさへすれば、……至誠と勇氣……縱令一人にても、五萬十萬の金を得ることは容易である。金が無いから仕事が出來ないといふのは、畢竟これ、至誠なく勇氣なき、怠惰者の口實である。青年佛教僧侶諸君、綜合佛教大學の設立も、諸君の事業である。東京市中、四五の佛教會堂を建設するも、亦諸君の事業である。二千年の歴史と、十四萬の僧侶とを有する日本の佛教、これしきの事だに爲し得ずして、果して新來の基督教に對抗し得ることが出來やうか。否、かくては、近き將來に於て、或は、おみき婆さんの天理教にも、蹴飛ばされるやうな運命に、逢着しないとも言へまい。

(四) 僧侶は人間の大禮に參加せよ

青年佛教僧侶諸君。

宗教は、死なむがために必要なるものではなくて、生きむがために必要なものである。死人のために必要なものではなくて、生者のために必要なものである。死後に必要なものではなくて、生前に必要なものである。然るに、今の佛教、諸君の屬して居る佛教から、葬式を引去り、法事を引去つて、剩すところ、果して何物であるか。諸君の說教といふもの畢竟これ老い先きの短い爺婆が、死支度の說明以外、何事を語つて居るのであるか。僕をして極言せしめよ、人に死支度を敎へてこれを殺し、その死骸の始末までして尙飽足らず更に年回法事と稱して、骨に向つて讀經して錢を貰ふ、

誠に至れり盡せりではないか。想ふに、活ける社會に手を垂れて、活ける人間を教導し、人類を幸福にし、社會を進歩させて、以て宇宙の目的を翼賛するといふやうなことは、諸君の全く、與り知らないところではないか。されど、それが即ち佛教の面目であり、宗教の極致である。

僧侶家や、宗教家が、葬式や法事を行ふことを、批難はしないとしても、たゞ僧侶家や宗教家が、葬式や法事のみを行ふことを、批難せずには居られない。寺院が葬式や法事を營むことを、攻撃はしないとしても、たゞ寺院が、葬式や法事のみを營むことを攻撃せずには居られない。言ふまでもなく、寺院は、大法弘通の道場であつて、活ける人間を救濟するための機關である。此處に葬式を營み、法事を行ふといふのは、纔に寺院成立の目的の一少部分であつて、寧ろ止むを得ざるに出でたる、一種の方便業と解すべきである。然るに、今や、この方便業のみを、寺院本來唯一の目的であるかの如くに思惟し、葬式法事以外、活ける人間の如何なる事件にも、全然これに關係せず、否、關係することの出來ないやうになつたのは、一體誰の罪であるか。

冠婚葬祭の四大禮の中、葬祭は死後のことであつて、今の寺院は、主力をこゝに集めて居る。冠は明治維新以來、殆ど全く廢れて、最早問題とするに足らない。たゞ婚の一事は、いよ〳〵ます〳〵、世人の注意が深くなつて來て、その儀式をどうしやうかといふことに多少の考慮を費さないものはない。この時、日比谷の大神宮が、結婚式執行の看板を掲げ、近來の繁昌眼も廻はる程で、好みの時間に式を擧げやうといふには、數日前から、申込んで置かなければならないといふ程の盛況は、全くその着眼、頗る機宜に適した爲めと、賞讃するに足るに反し、寺院が、全然この好題目を逸し去つた愚さは、實に憫笑に堪へないではないか。勿論、今からでも遲くはない。各寺院奮つて結婚式を行ふの道を拓き、佛教信者の結婚式は、必ず寺院で擧行するものと定めたならば、誠にこれ、佛教を死地に活

かす所以であつて、又實に、活きたる人間を救濟するといふ、佛敎本來の目的に沿ふものと、言ふことが出來るのである。然るに、かゝる好題目を、せめて出雲の大社でもあらば兎も角、日比谷の大神宮や、料理屋の女中輩の手に委ねて、寺院は全然これに參與することが出來ないといふのは、正に佛敎の耻辱であり、寺院の不面目である。

誕生に祝意を表するといふことは、親としての至情である。然るに、これまた全然寺院と沒交渉であるといふことも、遺憾千萬ではないか。苟も、その人を葬むる儀式を行ふ寺院が、その人の誕生に關して、何等知るところがないといふのは、首尾全からざるものである。僕思ふに、佛敎信者が子を產めば、まづ寺院に就いてその子の名を貰ひ、宮參りの代りに、寺參りをさせるやうにするがよい。生れて俗名を寺院から貰ひ、死んで又、法名を寺院から貰ふ。生れて寺院に參り、結婚の時に寺院に參つて置いてこそ、始めて、死んでから、寺院に參つて、葬祭を營んで貰ふといふことの意義が、明になるのである。誕生にも寺院、結婚にも寺院、葬式法事にも寺院、その度毎に、大法の發動、信仰の活躍、かくて、活ける人間の救濟は、力を勞することが少くて、功を收めることが多いのである。青年佛敎僧侶諸君、諸君は、かくても尙、葬式や法事のみを行ふを以て、滿足して居らうといふのであるか。寺院を以て、葬式や法事のみを營む場所として平然として居らうといふのであるか。

（五）僧侶の司る葬式に三大缺點あり

青年佛敎僧侶諸君。

僕今、姑く、第二義門に立つて、僧侶の存在を是認し、僧侶が葬式を司ることをも是認するとして、さて少しく言ひたいことがある。古來、葬式に關しては、これを厚くせよと論ずるものと、これを薄くせよと說くものとがあつて、厚葬薄葬は、議論としては、今以て解決がつかないやうである。しかし、近來は、葬列といふ外觀、山菓子といふ虛飾を廢するものが、次第に多くなり、放鳥生花の寄贈を謝絕するもの香奠返し

を廢して、その料を公共事業に寄附するものなど、漸次增加し來つたのは、葬式に伴ふ諸種の弊害の改善せられつゝあるものとして、大にこれを慶ばざるを得ないのである。形式外觀の盛大は、必ずしも厚く葬るの義ではない。質素簡淨は、必ずしも葬を薄くするといふわけでもない。要は、葬主が誠を表すの志に於て遺憾なく、哀を致すの意に於て缺くるところがなければその儀式の繁簡の如き、もとより論ずるに足らない些末なことである。たゞこれを司る佛教僧侶が、この人間相愛する最終の一幕たる葬式に際し、蓄音器的の香語を拈し、芝居掛りで引導を渡し、機械的なる讀經を爲すといふことの外、遺族に對して、一言の教誨を施すでもなく、會葬者に對して、一場の說教をするでもなく、しかも、讀經未だ半ばならざるに、早くも會葬者は、喧々擾々裡に燒香して、退散することを、引止めるだけの力もなく、嚴肅の態なく、哀悼の意なく、心あるものをして、將た末法濁世の嘆を發せしむるといふことの外、何物を與へないといふことは、何たる腑甲斐ないことであらう。

棺前の讀經は、別に意義があるとしても、死人に向つて引導を渡すといふことは、全然無意義である、引導渡すべくば、この千歲一遇の時に際し、遺族のものに對して、引導を渡すべきである、一般會葬者に對して、引導を渡すべきである。縱令、香語讀經を廢しても、この絕好の機會、人皆死に對して、何等かの感想を懷いて居る時に當り、生死の關門を、如何に透過すべきか、人生の歸趣を、那邊に求むべきかについて、一席の法話をなすといふことは、實に極めて有力なる傳道である。死人を緣として、生者を救濟する、宗教の妙用は、實にこゝにあるのではないか。流石に基督教は、この機會を逸することがない。殊に、基督教の葬式に於て學ぶべきは、故人の履歷を朗讀することゝ葬式了りて、靈柩場外に出づるまでは、會葬者一人も席を去らないといふことである。この說教、履歷朗讀及び退散のことは、佛教の葬式……特に東京の……に於ける三大缺點であつて、基督教の葬式に於ける三大

長所である。青年佛教僧侶諸君、諸君の葬式を司る時果して能く、この三大缺點を補足するだけの覺悟があるか。否、必ずこれを補足するのが、諸君の務めでなければならない。

（六） 僧侶はたゞ信仰に依つて動け

青年佛教僧侶諸君。

諸君も既に人間である以上、人間の行くべき道を行かなければならない。人間の行くべき道は、たゞ向上の一路のみである。この向上の一路を驀進するには、自分の信仰を發動機としなければならない。信仰の發動機なくして進まうといふことの困難は、羽翼なくして飛ばうといふ困難よりも、更に一層困難である。若しそれ、舊信仰に滿足するものは、舊寺院にとゞまつて、舊佛教の宣傳に努めるを妨げないけれども、苟も、舊信仰に滿足の出來ないものは、舊寺院を捨てるのが道である、勿論、この兩者、共に、自分の信仰によつて向上の一路を前進するものであるといふ點に相違はないが、たゞ、舊信仰には滿足することは出來ないけれども、舊寺院を捨てゝは、自分の生活に危難が到る恐れがあるといふので、表面、如何にも信仰ありげに如何にも有り難さうに裝ひ、自ら欺き人を欺くといふのは、甚だ以て怪しからぬことであつて、新しい教育を受けた青年佛教僧侶諸君の中には、この種の奴輩……獅子身中の虫……が尠くないといふではないか。要はたゞ、眞實なれ、赤裸々たれ、嘘をつくな、胡麻化すな、有り難くもないのに、有り難さうな風をするな、筆尖きや口頭で如何に殊勝げに裝うても、自分の心が疚しいであらう、佛の心が承知し給はぬであらう。青年佛教僧侶諸君、僧侶たるも可、還俗するも可、寺に入るも可、寺を出るも可、葬式や法事を營むも可、營まざるも可、法を賣るも可、道を傳ふるも可、一にたゞ、諸君の信仰に依つて動け。そこに佛が現じ給ひ、そこに極樂が成る。

（七） 起たむと欲するか坐せむと欲するか

青年佛教僧侶諸君。

聞く、近頃、老年佛教僧侶諸君は、佛教護國團とい

ふを組織して、大に社會的の活動を試みるといふことである。これに對する諸君の覺悟はどうであるか。内務省や文部省などの勸誘によつて、出來上つた地方青年團、その數今や三萬を超え、團員三百萬人に達したといふことであるが、これ等の團體に對する、精神的食物の供給は、一にこれを、基督教徒の手に委ねて、諸君はこれを袖手傍觀して居やうといふのであるか。朝鮮の布教は、基督教徒に先鞭を着けられて、佛教の傳道は、立後れとなつて居るのを、諸君は何と觀て居るか。臺灣三百萬の土人の心田の開拓は、何人の事業であるか。基督教徒は、今や歐洲戰亂のために、その手を延ばし得ないで居るのではあるが、臺灣布教の作戰計畫は、業に既に熟して居て、本國から資金が到着しさへすれば、一擧にして、臺灣全土を席捲しやうとして居るのを知らない譯ではあるまい。樺太をどうする、滿洲をどうする。到るところ、人は、靈の饑渇に堪へ得ずして、諸君の來るを待つて居るのではないか。血の氣の通つて居る青年ならば、信仰の熱の高い僧侶ならば、起てと言はれなくとも、坐つては居られまい。

（大正五年八月八日）

所謂「遊蕩文學」と現在の文壇

本間久雄

一

八月初旬の讀賣新聞の日曜附錄に赤木桁平氏は「遊蕩文學の撲滅」と題する論文を公けにして、現文壇の一部の作家たちに對して痛烈な批難の矢を投げた。これに對して小山内薫氏は時事新報の文藝欄に、「所謂遊蕩文學について」と題する一文を寄せて赤木氏の所論

を反駁した。かくして所謂「遊蕩文學」といふことが、今の文壇の一つの問題となつて來た傾きがある。果して遊蕩文學なるものは撲滅すべきものであるか。そもそも遊蕩文學とは如何なる作品に蒙らすべき名稱であるか。赤木氏が遊蕩文學の作者として擧げてゐる長田幹彦、吉井勇、久保田萬太郎、後藤末雄、近松秋江の諸氏は果して、遊蕩文學の作家であるか。又しかく撲滅を叫ばるべき作家であるか。私は今、赤木、小山内二氏の所論から出發して、こゝに改めて以上の諸問題を攻究して見ようと思ふ。

まづ順序として赤木氏の說から檢攻しよう。赤木氏の說に從へば遊蕩文學とは次のやうなものである。曰く、「人間の遊蕩生活に纏絡する事實と感情とに重きを置いて、人性の本能的方面に於ける放縱淫逸なる暗黑面を主題とし、好んで荒色耽酒の惑溺境を描出せんとするものである」と、又曰く「從つて遊蕩文學の徒が慣用する藝術的境地は、常に酒樓と娼婦とに圍繞せられた浮華狂噪の世界であつて、吾人の實生活を經緯する大部分の境涯、即ち靜謐なる感情と冷徹なる理知とに依つて支配せられた生活に至つては、彼等の殆んど一顧をだに拂ふを肯じないところである」と。これに依つて赤木氏の遊蕩文學なるものゝ如何なるものであるかはわかるであらう。赤木氏は尙、遊蕩文學なるものゝ特質として、曰く現世的、曰く主情的、曰く享樂的、曰く片面的、曰く頹廢的、曰く氣質的、曰く回避的等の諸點を擧げてゐる。そして氏は、この遊蕩文學からは「人生の眞實味に根したものと云つては殆んど何物をも見出し得ない」ことと及びこの遊蕩文學は「ただわづかに婦人小兒の涙を促す安價なる感激と俗物愚衆の興味を唆る低劣なる情緒とを有するばかりである」こと、及びこの種の遊蕩文學が近來頻りに通俗的勢力を得て來たがためにそれが一面には遊蕩文學の作家でない作家をもその方に赴かしめることに依つてそれは「善藝術を滅して、惡藝術を助長する」ものであり、又一面に於てはそれは「一般の世道人心における頹廢と糜爛とを挑發して、人間の誠實なる精神生活を

益毒し、健全なる倫理的意識を稀薄ならしめる」ものであることを述べ、そして氏は「予の一般藝術に對する批評の筆を棄てざる限り、あらゆる機會と、あらゆる方法とを盡して、かゝる遊蕩文學の撲滅に專心する考へである」と云ふ文句で氏の文を結んでゐる。

さて、赤木氏の以上の主張は、果して當を得たものであるかどうか。赤木氏の說いて以て遊蕩文學とするものは果して遊蕩文學の名に値するかどうか。更に、赤木氏が遊蕩文學の作者として名指してゐる人々の作品が果して所謂世道人心を害するものであるかどうか。果して赤木氏の如く聲を大にしてその撲滅を叫ばなければならないものであるかどうか。所謂「世道人心」といふことだけを常に念頭に置いて文藝そのものゝ存在(レーゾン)理由(デートル)を等閑視するものであるならば、云ふまでもなく何等の考察なしに直ちに以上赤木氏の所說に贊成するであらう。しかしながら、私を以て見れば、赤木氏の以上の所說には容易に與し得ないものがある。

赤木氏の所說は以上の梗概でもわかる通り、極めて大ざつぱなものである。先づ理論的に云へば、赤木氏の遊蕩文學なるものは、毫も特に遊蕩文學の名稱に値しないものである。氏が遊蕩文學の定義として揭げてゐる人間の遊蕩生活に纏絡する事實と感情とに重きを置いて、人性の本能的方面に於ける放縱なる暗黑面を主題として、好んで荒色耽酒の惑溺境を描くといふことが遊蕩文學であるならば、小山内氏が反問してゐるやうに、我が國現在の作家にして、殆んど遊蕩文學の作家でないのはない位であるばかりでなく、例を歐洲近代文學に借りても自然主義以後最近のデカダン一派の作品の多くは、或る意味で或ひは人間の遊蕩生活に纏絡する事實と感情とを主題としたり、或ひは荒色耽酒の境地を主題としたり、或ひは酒樓と娼婦とに圍繞された浮華狂噪の世界を主題としてゐる。さういふ近代文學の多くは、すべてこれを遊蕩文學と云ふ範疇の中に入れて了はなければならないことゝなるわけである。更に「人性の本能的方面における放縱なる暗黑面」に至つては、近代文學の名篇として推さるゝ殆んどす

べてが、それを題材としてゐることは改めてこゝに喋々するを要しない位である。

更に、赤木氏が遊蕩文學の特質として擧げてゐるところを見ると、氏の所謂遊蕩文學なるものが一層不得要領なものとなる。何となれば氏が擧げてゐる現世的、主情的、享樂的、片面的、頽廢的、氣質的、回避的等の諸特色は、それ〲殆んどすべて近代文學の高級なる作品が當然受くべき特色であるからである。赤木氏の所說に從へば、實に、トルストイもモウパッサンもストリントベルヒもダヌンチオもワイルドもベルレーヌもボードレールも、近代文學の作家として特に深刻であり、特殊的である作家は何れも皆或る意味で遊蕩文學の作家とならなければならないわけとなるのである。かくの如きは果して是認し得べきことであらうか。

要するに赤木氏の遊蕩文學そのものに對する見解は極めて不得要領なものである。小山內氏が「一體赤木氏はみんなの作物が惡いと云つてゐるのか、みんなの生活がわるいと云つてゐるのか、みんなの態度がわるいと云つてゐるのか、或ひは全體がわるいと云つてゐるのか、私にはよくわからない」と云つてゐるのはたしかに赤木氏の所論に對する急所を突いてゐる。少くも赤木氏のやうな立論の樣式からは遊蕩文學そのものの本質は到底これを說明することが出來ないのである。

二

さてそれならば、どういふのを遊蕩文學と云つてよいのであるか。遊蕩文學とは一體如何なる文學に與へらるべき名稱であるか。これが當面の問題となる。尤も私は「遊蕩文學」といふ文學上の特殊の名稱、範疇のあるのをこれまで聞いたことがない。西洋の文學史にも又文學上のイズムにもこれに相當する言葉があるかないかを知らない。しかし强ひて求めるならば或ひは所謂フレッシリー、スクールといふやうな肉派の文藝がこれに相當するかも知れない。又例を我が國に求めるならば我が江戸末期の所謂洒落本、人情本と呼ばれる種類の大部分が或ひはこれに相當するやうにも思は

れる。そしてそれらの藝術的價値の低いものであることはこゝに改めて云ふまでもないのである。

所謂遊蕩文學の考察に於て第一に陷る誤謬は、作家の材料と作家の態度とを混同することであり、乃至さうすることから生ずる誤解である。現に赤木氏の考察が上來述べたやうな不得要領なものであるのも一に氏が、この材料問題と態度問題とを明確に區別しないで考察の步を進めてゐるところにある。思ふに藝術上の問題は、明確にこの二つを區別して考へなければならないものではあるまいか。

藝術としての材料方面から云へば遊蕩的生活無論可なりである。惡魔主義的生活無論可なりである。尤もさういふ生活そのものは普通の倫理的立場乃至道德的立場からは當然批難さるべきものには相違ない。所謂「健全なる倫理的意識」の立場からは一も二もなく「不健全」として、又は「不道德」として難ぜらるべきものには相違ない。しかしながら、「惡德と德義とは藝術家に取つて、藝術に取つての材料である」と、かのワイルドが、いみじくも云つたやうに、藝術家としての題材の上から見れば、放縱耽溺の生活たると「靜謐なる感情と冷徹なる理知とに依つて支配されたる生活」たるとを問はないのである。材料上の一種の限定を求めることは些かでも藝術そのもの、本質乃至藝術家その人の氣質（テンパラメント）といふことを念頭に置くものに取つては最も嗤ふべき誤謬である。

要するに藝術の價値無價値、高下深淺はその材料にあるのではなくて、その材料に對する作者その人の態度にある。換言すれば作者のその「人」にある。これを所謂「遊蕩文學」の場合に當て嵌めれば遊蕩生活に纏絡せる事實と感情とを描出し、又は好んで荒色耽酒の惑溺境を描寫することに依つて、その作品に價値の高下が生ずるのではなくて、さう云ふ遊蕩生活そのものをいかやうな態度で觀察し、取扱ひ、批判してゐるかといふ作者その人の態度に依つて生ずるのであるといふことになるのである。

この理を說明するために、最もわかり易い例を取れ

ば、かの大近松の作と江戸末期の酒落本或ひは春水一流の人情本の比較である。大近松の作は、誰人も知つてゐるやうに、その傑作の大部分は例へば『天網島』でも『冥途の飛脚』でも『女殺油地獄』でも『曾根崎心中』でも、何れも皆、所謂遊里生活に纏絡する事實と感情との描寫でないのはない。酒樓と娼婦との浮華狂喋の巷の描寫でないのはない。彼れの作物から、もしも酒樓と娼婦との巷に生起する事件と感情とを取り除いたならば、彼れの作物がいかにその味ひを減ずるであらうかはこゝに改めて贅するまでもないことである。而もその材料乃至題材の點から云へば、所謂人情本或ひは所謂酒落本の多くもさまで近松のそれと異つてゐるとは思はれない。しかし、もしも、その材料乃至題材が類似のものであるといふ理由で、わが大近松の作と人情本或ひは酒落本とを同一視して、近松の作を以て「遊蕩文學」とするものがあるならば、誰れかその愚を嗤はざらんやである。重ねていふ。題材そのものは決して作品そのもの丶價値の高下を定めるものではない。それを定めるものは、題材ではなくて飽くまでも、その題材を取扱ふ作者のその「人」である。

かくの如きは極めて見易き、且つ一點の疑惑さへ挿む餘地のないほど解り切つた道理である。しかしながら題材そのものが直ちに藝術の高下善惡を定めるものと誤解する道學者並に短見者流が多いことは洋の東西を問はないところであつて、かのワイルドがその『ドリアン、グレー』を公けにしたとき、「不道德な作品」「不健全な作品」として所謂「世道人心」に害あるものとして一代の批難を蒙つたことなどは皆人の知つてゐるところである。我が文壇の近い例について云へば、永井荷風氏や谷崎潤一郎氏の作品の或るものなどの發賣を禁止されたことなども畢竟上のやうな誤解が基となつてゐたといふべきである。とにも角にも一個の作品を所謂「世道人心」を害する「遊蕩文學」として批難しようとする場合には、この材料對作者の「人」の間に横はる重大なる一線を見落してはならないのである。

三

さて問題は前に歸つて、赤木氏が名指したやうな現文壇の作家たちの作品は、果して「遊蕩文學」の名に値するものであらうか。これらの人々の作品が果して善藝術の發達を阻害したり、又は所謂「世道人心」に害毒を流したりするものであらうか。江戸末期の頽廢文明から生れ、そして又逆に、その頽廢文明を生んだかの人情本や洒落本と同じやうな影響を、これらの人々が現代の文化乃至人心の上に與へつゝあるのであらうか。私はこれについても赤木氏とは全く見解を異にする。

赤木氏は遊蕩文學の代表的作者として前にも記して置いた通り長田幹彦、吉井勇、久保田万太郎、後藤末雄、近松秋江の五氏を擧げてゐる。私は不幸にして久保田、後藤、吉井三氏の藝術については殆んど知るところがないために、三氏については兎や角云ふことは出來ないが、少くも長田、近松二氏の作品について云へば、これらの人々の作品は、何等世道人心に害毒を流すものでないのは無論のこと、何等他の「善藝術」の發達を阻害するものでもないのである。成程、長田近松二氏の作には、よく酒樓と娼婦とに圍繞された浮華狂噪の世界がその題材となつてゐる。よく荒色耽酒の惑溺境がその題材となつてゐる。よく人間の遊蕩生活に纏絡する事實と感情とがその題材になつてゐる。しかしこれらの題材は彼等の作品に取り入れられるとそこに一種別な、情趣の世界が釀し出される。これは些かでも鑑賞（アプリシエーシヨン）のデリカシーを持つてゐる人である限り、その人に取つては否むべからざる事實である。

私は今一々、こゝに具體的作品についての具體的說明を試みるわけにはゆかないが、例へば幹彦氏の如きは、最も多く所謂酒樓と娼婦との浮華狂噪の世界を描いてはゐるが、しかしそこに描かれたそれら浮華狂噪の世界には決して、所謂「世道人心」をのみ念頭に置く道學者流の鑑賞を許さない「或るもの」がある。これは氏の描く多くの舞妓が、華かな衣裳に包まれ、華やかな背景の前に立つて、そして華やかに振舞ひながら、而もその姿には、一味の淋しみと、哀れさと、ほろほ

ろしい一味の物悲しさ、赤木氏の所謂「婦女子の涙を促す安價なる感激」以上の「或るもの」を與へる、さういふ淋しみと哀れさと物悲しさ（氏の出世作『零落』などに見る如き）がついて廻るのが常であるのを見落さない人に取つては誰しも首肯するところであらう。もし夫れ近松秋江氏の作品の或物に至つては、赤木氏が「低劣なる乞食文學」など丶一口に罵倒し去つて了ふことの、如何に理不盡であるかは、少しく虚心平氣で氏の作に對するもの丶誰れしも認めるところであらう。氏の作の或る物の如きには、たとへ、表面はいかにヘドニスチックに見えてもその底には、實に、一個世紀末的人間の苦惱と懊惱とを藏してゐるといふ意味に於て高級なる文藝の作品たるものがあるのである。この意味に於て、私は却つてこれらの人の作品をたゞ一概に低級なる遊蕩文學として撲滅し去らうとする人の妄を嗤はずには居られない。

尤もかう云つたならば、或人は、私が幹彦氏や秋江氏の作品を推賞し、讃美するものと思ふかも知れない。しかし、私は何も殊更に氏等の藝術を推賞し讃美しやうとして以上の言をなすものでは決してない。たゞ氏等の藝術乃至作品を一個の遊蕩文學として撲滅しようとすることのいかに理不盡であるか、又さういふ議論のいかに大ざつぱであるかといふことの反證として敢て以上の言をなすまでゞある。このことは讀者諸氏の誤解のないやうに明確に斷つて置く。否、そればかりでなく、私一個としては秋江氏の作品に對しても、幹彦氏の作品に對しても、私一個の立場から相當に不滿がある。殊に幹彦氏のそれに對しては少なからぬ不滿がある。

然し私は、幹彦氏等が、所謂遊蕩生活に纒絡する事實と感情とに重きを置いてそれを題材とすることを決して咎めはしない。荒色耽酒の惑溺境を好んで描出することを決して、惡いとは思はない。酒樓と娼婦との浮華狂噪の世界を材料とすることを決して無價値だとは思はない。否、氏等の氣質がそれに好適を感ずるならば、私は氏等が益々さういふ世界に深く這入つてゆく

ことを私かに希望する。何となれば藝術の世界に於て最も貴ぶべきは氣質(テンパラメント)であるからである。

四

私は以上述べたやうに材料の上では、秋江、幹彦諸氏に對して何等の不滿をも感じない。私の諸氏就中幹彦氏に對する不滿は、氏の對題材の態度に關する不滿である。換言すれば氏の作家としての「人」そのものに對する不滿である。これに關しては私は全然小山内氏の意見に贊成する。小山内氏曰く「吾々の生活、吾々の人物、吾々の作物は實に憫むべきものです。……遊蕩が惡いのではありません。人間がわるいのです。作物がわるいのではありません。人間がわるいのです。肉がわるいのでありません、靈(たましひ)が惡いのです」と。流石に作家としての小山内氏の言として肯かれる。

幹彦氏のある作に遊蕩をし盡して、半ば浮世を棄てて半僧半俗の生活を營んでゐる一蕩兒の成れの果てを描いたものがある。幹彦氏のこの一蕩兒に對する作家としての態度は、「三昧の境地に悟入した高僧の姿よりも」この「蕩兒の成れの果ての皺ばむだ頬に浮ぶ拈華微笑の方が遙かに尊く見えたのである」といふところに最もよく窺ひ得る如く、日本在來の安價なる「諦め」的な、極めて常識的な現世主義である。又氏の一つの作に老僧の戀を描いたものがある。これなども極めて常識的な戀であつて、戀そのものに對するその老僧の、自己の境遇と、閲歴と、思想とからの苦惱もなければ又烈しい執着的なところもない。すべてが、日本在來の安價なる諦め的常識的である。これはほんの一例に過ぎないが、兎に角幹彦氏の作の多く、殊に今、問題になつてゐる氏の「遊蕩文學」の多くは、題材の上から云へば、極めて常識的な遊蕩兒の遊蕩生活であり、作家としての態度の上から云へば、極めて常識的な平凡な態度から書かれた作品といはなければならないのである。これ幹彦氏の作が前にも一言した一味の哀れつぽさ、一味の物悲しさをその底に湛へながら、遂に近代文藝に見る如き「新情緒派」たり得ず、又所謂遊蕩生活を描きながら遂に「官能派」たり得ないところであ

る。こゝに幹彦氏の作に對する最も大なる私の不滿がある。そして又この、作に對する不滿が、前にも一言したやうに、氏の「人」そのものに基因するものであることは云ふまでもない。

　幹彦氏の作は、以上縷說したところで明かである通り、あらゆる點から見て餘りに常識的である。餘りに健全である。これを以て「世道人心」に有害であるなどと考へる如きは餘りに事情に疎いものと云はなければならぬ。寧ろ一歩を進めて云へば、幹彦氏の作の多くは、餘りによく、現代の或る方面における「世道人心」そのもの丶最もよい反射鏡である。幹彦氏の作が比較的實行きがよいといふのも、一つは、平凡な、しかし安價な遊蕩的な己が心象をその鏡の中に見やうとするもの丶多いといふことにも依るのである。とにも角にも氏の作は、消極的に所謂「世道人心」に有益になるものでないと同じやうに、積極的にも何等の害毒をも齎らすものでないといふことは、少しく虛心平坦な心で氏の作に對したもの丶等しく認めるところであらねばならぬ。もし夫れ、現今の文壇が、幹彦氏やその他以上の名を擧げた人々に影響されて滔々として「遊蕩文學」に赴くといふ如きに至つては、更に〳〵事情に疎い、嗤ふべき一種の空論に外ならないことは、少しく現文壇の重なる作家達の個々について些かの注意でも拂つてゐる人には容易に承認さるべきことであるのである。秋江、幹彦氏等の作物を「遊蕩文學」として、その撲滅を叫ぶ如きは、寧ろ一種奇怪なる滑稽事である。

　しかし再び云ふが、私はかう云つたからと云つて何も以上の諸作家の作品を讃美し推賞しやうとするのでは決してない。たゞ、赤木氏並びにその贊成者のやうに大聲叱咤して、その「撲滅」を天下に呼號し咆哮することの理不盡であることを指摘したまでゞある。私自身としては、これらの諸作家に對して、前に述べたやうに一種の不滿を抱いてゐる。そしてその不滿そのものについては上來論述した通りであるが、序でに、ここに私自身のこれらの作家に對する要求の一端を述べて私はこの稿を終らう。

私のこゝで要求といふのは、所謂「世道人心」を念頭に置けといふことでは無論ない。所謂「健全なる」倫理的意識を旺盛ならしめよといふことでも無論ない。遊蕩生活を描くなといふことでは尙更ない。それはたゞ彼等の生活に於いて、態度に於いて、換言すれば、「人」として今少し徹底せよといふことである。彼等の所謂遊蕩生活可なり、享樂生活可なり、要は、今少し味の底に徹するにある。小山内氏が「吾々はもつと〳〵吾々の生活を深く掘下げてゆかなければなりません。ほんとのどん底に落ちなければほんとの光明を捉へる事は出來ません。天使の翼は天國の藏に納つてあるのではなくて、地獄の釜の中に隱してあるのです」と云つたのは彼等に對する警告として最も當を得たものである。例へば彼等にして、もし官能の世界に、彼等の氣質（テンパラメント）の好適を見出すならば、かのアーサーシモンスがダヌンチオを評して「ダヌンチオに取つては、この世に存在してゐるものはたゞ性（セックス）と藝術との二つである彼れは戀人の熱烈を以て美を欲求した。そして彼れに取つては性が最も貴重なる美であつた」と云つてゐるほどの熱烈を以てその世界を追求せよと云ひたい。要はその己がじゝの生活の味に徹するにある。そしてその生活の味に徹した境地から自ら（おのづから）開展さるべき新人生を闡明するにある。そこにこそ、本當の意味の世道人心の爲め、即ち「生」のための藝術に寄與し得る彼等の唯一の途があるのではないか。私は、私かにそれを待ち望んでゐる。（八月二十日稿）

太陽は黄人を愛す

若宮卯之助

一

露國の詩人バリモントが、日本を詠嘆した「爾は太陽の寵兒！」の一句。此の一句は詩人の直覺を經由し

て世界に發表された含蓄多き眞理の一に數へられる。太陽は一切の物を照らす。松竹梅を照らし、子丑寅を照らす。源平と共に藤橘を、惡魔と共に聖人を、被告と共に原告を照らす。老若男女の甲乙丙丁を公平に照らすが如くなるに拘らず。而も太陽には氣紛れがあり、愛憎がある。日月無私照と云ふ古代支那人の判定は、其の思慮の未熟と、其の經驗の不足とに由來した一種の迷である。虛空に懸かれる太陽は一つ。其の虛空に懸かれる唯だ一つの太陽は、而も氣紛れ其物であり、愛憎其物である。晝の太陽と夜の太陽との氣分の異りは、何人か之を認めざる。露國の太陽と日本の太陽との愛情の差は、其の愛情を感じたものにして、何人か之を否定する。北半球の太陽と南半球の太陽との個性的特徴は、熱、溫、寒、三帶に於ける太陽の氣紛性と共に、何人か能く之を無視するを得る。否、同一地帶に於てさへ、否、同一地帶の同一國土に於てさへ、自動車人の太陽と行路人の太陽との別を認め得るが如く、物持ちの太陽と物持たずの太陽との二個の異物と稱するを得るが如く、太陽の氣紛れと愛憎とは隨處に於て發見される。略して言へば、虛空の太陽は單數であるも、地球の太陽は複數である。而して此の複數太陽の愛憎は、黃白黑の人種の異りに於て最も鮮明に發現されて居る。

二

已に太陽の愛憎を認むるときは、其の愛憎が如何にして發現せられ、如何なる處に於て、如何なる種族に對して、如何やうに發現されるかを知らんとする、これ亦人間好奇心の一要求で無くてはならぬ。所謂太古の非邈たり、世界の始は無始の始にして、人間の思量を絕するが如く、人間の始も亦人間自らの當て推量に於て纔かに其の解答を求むるばかり。然らば其當て推量に於ける人間の始に在りて、否、人間が種族の別を有するに至つた當時に於て、其の愛憎ある太陽は如何なる種族に最も多く、或は比較的多くの愛を示して居たであらう乎。これ亦其の解答の大半を當て推量に委ぬべき問題である。

喜怒哀樂を大體に於て共通する人間を、主として其の皮膚の色に據つて別つときは、黄白黒の三大部門となる。少くとも此の三大部門の別け方は最も簡便なる別け方である。此の三大部門の中の白人族は全世界を通じて其の數六億强を占め、其の黄人族も亦略ぼ六億の上を出でる。而して其の黒人族は約二億を通算する。されば地球の全人口を十五億とするも十六億とするも此の三大部門に屬せざるが如き種族は、悉く之を是等の派生物と看做すも、決して不當では無い。此の三大族の中、黄人族は記錄無き上古より、ユウラシアの中部と東北部とに繁殖して、他の種族を遙に凌駕した許りで無く。今日に於ても、亞細亞に於ける白人の總數は僅かに黄人の十分の一に制限される。其の數に依りて其の地位に依りて、及び其の他の理由に依りて推量すれば、此の世界に始めて人間の名のりを擧げた生物は我等が直接の祖先たる黄人であつたらしい。此の黄人から、移動に依つて、氣候に依つて、生活の樣式に依つて派生したものが、他の黒白の二大族であつたらしい。即ち黄人の本部から、別れ別れて、赤道的阿弗利加の彼方に落ち着いた一團の者が、世代の上に世代を重ねて、遂に今日の黒人となつたらしく、西北の方歐洲に蔓延した他の一團の者、濕氣と冷氣との氣候の影響の爲めに、黒人と反對の特徴を得て、次第に今日の白人に變形すべき徑路を辿つたらしい。これ固より一種の當て推量に過ぎざるも、姑く此の當て推量に據れば、人間として太陽の恩寵を受けた第一の者は實に黄人である。

三

人が力士を東西に分けて土俵の勝負を爭はしむるが如く、自然は其の氣紛れに因つて區別した黄白黒の三大族をして、地球の切り取り强盜を働かしめる。已に黄人の占め得た處、白人の占め得た處、黒人の占め得た處は、其の黄白黒人、各一の部內に於ける甲乙勢力の消長が如何樣であらうとも、各々其の先占の權利に因つて、容易に他をして窺はしめざるの保障を有して居る。今や黄人は、已に白人の領分として畫定されて

居る歐洲の只中へ、隊を成して移住するの機會を有せざるが如く、世界を我物顏に振舞つて居る。鼻梁骨の高き白人と雖も、黄人の本場たる亞細亞の中心に來りて子孫を繁殖するの權利を有せざるが如く。曾て白人の法律に於て一種の動產と認められて、全く人格無き奴隷として扱はれた事のある黑人の同族でさへ、——若しさいへと謂ふを得ば——其の進歩の階程に於て殆ど稱すべきの何物をも所有せず、其の獨立の文化と云ふを得べき何物をも示さざるに拘らず、猶ほ黄白兩大族の、到底、打ち克つを得ざるが如き生理上の權利を、地球の一部に對して行うて居る。然らば地球の切り取り强盜は、最早進行するを得ざる、已に確定せる事實と看做すを得る乎。

同一の父母に生れた兄弟姉妹にも、智愚賢不肖の差は自然に其の間に生ずるが如く、甚だ粗雜なる言ひ方ながら、黄人を一體として、之を一團とした白人に較ぶるときは、其の造詣の種別と其の進歩の程度とが一定の時に於て、必ず不同を見るは當然の成行である。强弱の差、賢愚の別は、其の一定の時代に於て、必ず分明の事で無くてはならぬ。曾ては東方の榮華が、一切白人の景仰せざるを得ざる、唯一の理想であつた時代もあつた。其の時代に於ける西洋白人の東方は、恰も他力本願の徒の西方淨土の如きものであつた。已にして世界の秤は顚倒した。西洋白人の間に於ける考へ方の根本的變革以來、即ち歸納科學の決定的成立以來、西洋人は全く新しき方法を以て、陸を制し、海を制し空を制するを得て、地球に對する唯一至高の命令者であるが如き地位に到達した。斯くして世界の必要は白人の必要となり、白人の必要を滿たすべき各種の方法は、世界の文明を構成する主要の成分であるが如き外觀を呈出した。人定つて能く天に勝つ。白人の增上慢は今や登りつめた峠の頂きの如く、其の轉一歩は孰れの方向に於ても、降るの外無き勢に驅られて居ると云へさうにまで發達した。世界の理想は、白人の理想であるが如く、白人の要求は、世界の動力である。

四

「賀茂川の水、雙六の賽、山法師、是ぞ我が御心に叶はぬ物」とは、その昔一天萬乘の尊きにて洩らし給ひつる歎きであつた。人にして神を伴らんとするが如き今日の白人も其の定まれる天の掟には遂に降らざるを得ざるが爲か、彼等は其の知慧の泉を涸して、其の力の源を渇らし、世界の隅々に渉りて、弱肉强食の亂暴劇を演じながら、他の異れる種族の存在を悉く否定せんとしたるに拘らず、彼等の全知的思慮を以てしても、其の全能的力量を以てしても、到底、能はざるものは熱帶の征服であつた。現に熱帶的亞細亞には、和蘭、葡萄牙の支配があり、現に熱帶的亞米利加には西班牙の勢力があり、英人の印度に於ける、佛人の交趾支那に於ける、米人の比律賓に於ける、其の優越權は、各々現に成立した事實として認められる。而も是等の熱帶的領土は、終に之を統制する種族の子孫をして繁殖の自由を得せしむる區域ではない。

然しながら其の性格に、増上慢の多量を宿して白人は其の熱帶征服の眞實の不可能を識得するまでに、多くの犧牲を拂はざるを得なかつた。彼等は熱帶に往かんとして、先づ熱帶に於ける移住を實現した。其の移住の或ものは明に生理的に成功した。而して其の移住は道徳的には殆ど例外無き墮落の實例とならざるを得なかつた。其の熱帶的溫度と濕度と、豐饒とは其の移住者の活力を減殺して、土人と歐洲人との間に毫も異る所を見ざるが如き墮落の實際を現出した。印度に於けるアリア人の墮落、メソポタミアに於ける波斯人の墮落、阿弗利加に於けるヴアンダル人の墮落、是等古代に於ける白人墮落の實例は姑く之を措くも、佛人、西班牙、及び獨逸人等の近代的實例は、之を一言するの必要がある。一七一五年以來、印度洋上のレウニヨン、モリチウの諸島を占領した佛人は、其の占領地が纔かに南部熱帶の緣端に屬する許りにして、溫和なる海洋的氣候の惠みを受くる處たるに拘らず、其の勤儉尙武の氣象は全く之を喪失した。マダガスカルに於けるホヴア族征服の爲に、レウニヨン島より派遣された義勇軍の無氣力は、今尙ほ人の記憶に新たなる事實で

ある。今日、墨耳古に渡來する西班牙人は、西班牙其の儘の氣力を具へて居る。而も其の子孫は、其の平均溫度が本國西班牙の平均溫度を超ゆること華氏十八度なるの地點に於て發育されるときは、漸次に其の活力を減退して、其の三代目には、毫も紛ふ所無き熱帶的墨耳古人の氣風を受けて、其の懶惰の生に滿足するに至る。堅忍不拔を其の代名詞とするが如き獨逸人も、南部ブラジルに移住した多數の例に由りて判ずるときは其の平均溫度の差が、本國のそれよりも高きと華氏二十度たる處に於て其の滔々として墮落し了るの實例は墨耳古に移住した西班牙人の子孫と全く異る所が無い。米國の一高社が一九〇〇年に於て研究した結果に據れば、サンタ・カサリナ洲に於ける獨逸農夫の耕作する小麥畑の面積は、平均殆ど一英町を超へずとの事である。信仰の自由を求めて、此の世に天國を建立せんとした新英洲の所謂清教徒。其の清教徒の子孫にして、傳道の爲に布哇に移住した宣教師。其の宣教師の子孫にして、其の甘蔗園の主人となり、契約勞働の要求者となつた者は、僅に二世代を重ねた後に、其の祖先の豪健なる邁往なる性格は、悉く分解し去られて居る。――熱帶移住の白人の努力は、明に不成功であつた。而も運命は惡戯を好む。熱帶に對する白人の移住は、全く之を禁制し了れるに拘らず、自然は溫帶に於ける白人の生活をして、所謂文明の進歩と共に、益々熱帶の産物を要求せしむるの傾向を強めて居る。

五

今や文明の生活は、熱帶の産物を離れて一日も持續するを得ざる事、これ即ち無論の條件として受取られる。今や文明人は、一日も茶を飮まず珈琲を飮まず、若くはココオを飮まずして過ごすを得ざることは、煙草無く、砂糖無く、香料無く、脂肪無くして、一日も立ち行かざると同樣である。米も、麻も、果物も、木材も、染料も、藥材も、其の大部分は、文明の利器として今や最も仕たり顔の護謨及び棉花と共に、文明的生活の必要條件たる熱帶の産物である。熱帶の産物は今や白人文明の進歩に缺くからざる原料である。其の熱帶産の原料の利用、即ち其の原料の加工に於て最も善く成功するものは、今や最も進歩した文明人として世界に雄視することを得る。約して言へば白人は其の移住すべき熱帶の領土を欲せざるも、熱帶の産物を支配すべき權利を痛切に要求する。而も領土を離れて産物は無い。熱帶の産物を支配する權利は、其の儘に熱

帶の領土を統制する權利で無くてはならぬ。此處に白人の弱點がある。熱帶の生活に堪へずして、然も熱帶を支配せざるを得ざるの弱點がある。然らば其の白人の弱點即ち其の熱帶生活に堪へざる根本の理由は何處に在る乎。其の理由は、果して確定的のものである乎。

六

熱帶的氣候が、人體と其の機能とに及ぼすの効果は明に之を認むるを得る。其の第一の効果は、呼吸の一時的促迫である。次には脈搏の增加であり、食慾の亢進である。更に腎臟の興奮となり、性慾の繼起となる。其の結果として全身は次第に瘦せ、肝臟は其の大さを增す。其の皮膚の蒼白は、此の肝臟變化の致す所であらうと思ふ。而して婦人の月經は屢次妨げられて其の成人期は迅速に到來する。略ぼ決定的と稱するを得べき重要の變化は實に體溫の一時的亢騰である。此の亢騰は其の人の熱帶を去つた後までも尙ほ持續の傾向を示すことがある。即ち熱帶生活二ヶ年の白人體溫と其の四ヶ年生活者の體溫との間に四分の相違がある。而して其の比較的低下せる四ヶ年生活者の體溫と雖ども、之を歐洲平均の體溫に比較すれば、其の高きこと華氏の五分である。

此の體溫の相違は、恐くは之を種族の病理的特質に歸するの外は無く、此の事實を認めて之を說明せんとした第一の人は即ちダアキンであつた。ダアキンは皮膚の色の相違に於て熱帶病毒の感染の難易を說明せんとしたのである。熱帶の黑人及び熱帶の風土に馴れた白人に於て全く免疫になれる熱病も、新來白人の容易に感染する所となるの事實を研究して、ダアキンは之を主として其の皮膚の色の相異に歸せんとするのであつた。彼は其の理由を左曲右折に說明せんとして、終に左の如く結むで曰く『黑人の黄熱免疫が、何程か其の皮膚の色に在りとするは、固より單なる當て推量である。此の免疫は或は其の血液、其の神經系統、乃至他の組織に於ける多少の相異に關係があるかも知れぬ然しながら、上に引用した事實から、及び皮膚と結核との間に存在する明白なる一種の關係から、余は寧ろ此の當て推量に根據を認めんとするのである』と。此の研究は久しく其の繼承者を看出さずに居たのであるが、今や水療法の發達と共に、其の結論の裏書きを爲すべき時代に到達したやうである。人類の體溫は種族に從つて異るものであることが證明された。種族の正常體溫は種族と共に異るものであることが、疑無きまで

に研究された。其の研究に據れば、馬來人の體溫は、歐洲人のよりも少しく低しとの事、其の低き理由は、其の褐色の皮膚其物が、歐洲人よりも多く其の體熱を放散するが爲であるとの事。或人の實驗に據れば、赤道と北緯十度の間に於ける黑人六百の平均口中溫度は華氏九十七度八分なるに、歐洲人の正常溫度は其の九十八度六分である。されば熱帶新來の歐洲人に於ける其の體溫の一時的亢騰は、多くの場合に於て、其の正常體溫と其の土人の正常體溫との差異よりも、より多く增加する。熱帶に於けるマラリア感染の原因は、實に此に在るが如く、言はれて居るのである。

　體溫の微小なる變異と黴菌に由來する病毒感染との間に於ける關係は、動物の間に在りては、已に成立した事實と看做されて居る。其の正常體溫が著しく馬、狗乃至兎を超ゆる或鳥類は、是等の獸類の容易に感染する脾臟炎から免疫されて居る。而もパステウルの實驗に據れば、此の鳥類も、其の體溫を其の足を冷水に浸して是等の獸類と同一の度に降すときは、之に脾脫疽菌を移植するは容易であるとの事。他の鳥類の疾病も、其の體溫を人工的に高めて其の黴菌の繁殖し得ざる程度に之を上ぼすときは、其の疾病は之を醫するを得るとの事。之と同一の理由に於て、結核は蛙其の他の冷血動物の間に存在せざれども、其の血液を人工的に溫めるときに、之に結核菌を移すことも亦可能であるとの事。同一の法則は、果して熱帶の『創傷的』疾病に對して適用され得るや否やは、今日に於て速斷するを得ざれども、唯だ言ひ得て一事の安全なるは、熱帶新來者の體溫が、其の土人の正常體溫を超ゆること最も高き期間に在りて、特に醱酵病に罹り易き傾向の明かなる事實である。且つ此の疾病よりの免疫、若くは其の豫後の佳良が、其の體溫の降下と共に來ると云ふ事實は、特に之を注意する必要がある。而も熱帶に於ける歐洲人の體溫は、其の歐洲的正常の體溫に降下した後に於ても、尙ほ熱帶土人の體溫の上に在るのである。白人對熱帶の關係は、其の最緊最要の點は此處に宿して居ると謂はざるを得ない。若し果して白人が一部の白人の主張するが如く、能く熱帶の風土に馴化するの資格を有するとせば、白人の歐洲的正常の體溫が熱帶土人の正常體溫の程度まで降下するを得るものと爲さざるを得ない。而も種族の生理的特徵は確定した事實である。印度人の體溫と阿弗利加黑人の體溫との同じからざるが如く、熱帶黑人の體溫と歐洲白人の

體溫との差別は、殆ど動かすべからざる差別である。

七

一切の物は變化する、少くとも徐々に變化する。然しながら、已に成立した種族の生理的特徴は、世代一二の經過位で、變化するが如き性質のものでは無い歐洲白人が熱帶的マラリアに對して抵抗力を有せざるが如く、熱帶的黑人は、溫帶的結核菌に對して極度の感染性を有するも亦之が爲である。所謂自然界の征服と利用とを標語とする今代白人の文明は、古代の不可能ど爲し、他の種族の夢想にも上ぼらざる奇蹟的事業を殆ど一切の部門に亙りて、已に成就し、現に成就し、將に成就せんとするに拘らず、熱帶に對する風土馴化の一事は、到底、水中の月として、鏡裡の花として諦め了るの外は無いのである。然も熱帶の産物は、白人の文明に對して絶對に必要である。

必要は良師であり、必要は武器であり、必要は發明の母である。熱帶的産物に對する白人の必要は、白人をして知慧を絞らしめ、力を揮はしめ、熱帶住居に關する一切の利便を圖らしめた。其の衞生狀態は、著しく改善した。其の死亡率は、漸次に遞減した。熱帶圏内の各部分は微細に研究されて、白人の棲息に堪へる地點は、限無く穿鑿された。其の山岳系統に根據を定むるの比較的安全なるは、證明された。而も今日の英人が印度に在りて、其の眞の風土馴化に近かざる事實は一八四〇年の印度に於ける英人と毫末の異る所が無い。

白人が熱帶移住と共に漸次に其の生殖力を喪失して其の三代目には、唐様で書くにあらず、全く無生産となると云ふは、已に言ひ觸らされて居る事實であるが此の事實は之を實驗するが爲めには歳月を要するの謂を以て、確定的とは云ふを得ざれども、兎に角其繁殖力の增加せざる證據の一つと爲すには十分である。

八

此の主題に關する多くの權威を參照した以上の論辯は要するに熱帶に對する白人移住の不可能の證明である。白人は阿弗利加に往き、南米に往く。而も彼等の落ち着く處は必ず其の熱帶的陸土の溫帶的部分である。南阿に於て彼等の比較的雲集する所は喜望峯であるが如く、南米に於てはアルヘンチナにあらざれば、ウルワイであり、パラワイにあらざれば南部ブラヂル及び南部智利である。然して其のアルヘンチナに於ける人口分布の狀態を看よ。其の人口の約二割即ち百萬

餘りだけが、純粹の白人と稱し得べき存在物。其の熱帶ウエネヂユラに至りては、純粹白人の移住者は、文字其の儘に皆空である。而して其の總人口の百分の一だけが純粹の白人である。其の他は悉く黑人にあらざれば、黑人と白人との混血であり、然らざれば黑人と土人との混血、即ちサンボ種族である。英領ギアナに於て其の總人口の八割一分を占むるものは黑人及び黑人と類似の東印度苦力であり、メキシコ及び秘露に於て征服者の威權を輝かした西班牙人は、其の溫帶的と稱するを得るが如き山岳を本據としたのであつた。而して西班牙人は、他の一切の白人よりも比較的熱帶的生活に適すべき民族である。熱帶に對する白人の無能力は、更に蛇足を加ふの必要が無い。

然らば黃人と熱帶とは如何なる關係を有する乎。熱帶的亞細亞に於ける支那人の地位は、已に一定不動として、殆ど例外無く承認されて居る。英人の堪へざる香港に於ける、新嘉坡に於ける、卑南に於ける、若くは蘭人の堪へ難き蘭領印度に於ける支那人の活動力と繁殖力とは、其の種族的特徵として何人も之を疑ふ者が無い。

日本人の南洋熱は、僅かに起りかけた許りであるも布哇に於ける經驗は、我が日本人の亞熱帶に於ける活動力の證明として毫も不足は無いのである。然しながら支那人と日本人との間に、如何なる生理上の差異を有するやは、余の知る限りでは、今尙ほ未了の問題と謂はざるを得ない。或歐洲人は日本人に對して支那人の生理的特徵を否定せんとするも其の否定は、當て推量を離れて根據の信ずべき何物をも認むるを得ない。若し皮膚の色にして熱帶生活と密接の關係を有するとせば、日本人が歐洲白人よりも熱帶生活の資格を、より多く有するは、無論の事實と謂はざるを得ない。若し黃人にして果して白人の棲息し得ざる地球の部分に於ても、尙ほ能く大手を振るの資格を有するとせば、世界の熱帶は、或は悉く黃人の熱帶となるの機會の到來も亦或は必無の事にはあらざる乎。

最新版 九月二十日發行

露國通十八大家分擔執筆!!

露國研究

菊判洋裝美本五百頁全壹册
正價金壹圓小包送料金拾錢

發兌 東京神田區駿河臺鈴木町十六番地
同文館雜誌部
振替東京三一六七七 電話本局一五三九

我が國民の必讀を望む

本書は露國通を以て名高き十八大家が、各自專門の立場より研究せる三十餘項に亘れる新研究論文を網羅せるものにして一讀直に露國の政界・財界・軍事・商業・産業・世態風俗・美術文藝の總てに通じ得べく蓋し本邦唯一の露國研究書也!

今日の露西亞……		編輯同人
露國の陸軍……	砲兵中佐	坂部十寸穗
露國の海軍……	海軍少佐	板原百合一
露國の經濟……	法學博士	堀江歸一
露國の政治……	文學士	有川治助
露國の交通……	法學博士	松岡均平
露國の文學……	早稻田大學講師	昇曙夢
宗教上の露國……	正教神學校長	瀨沼恪三郎
西伯利亞一般	朝日新聞記者	大庭柯公
日露貿易……	外務省飜譯官	鈴木陽之助
露國の智識階級	外國語學校教授	八杉貞利
日露外交史…	早稻田大學教授	煙山專太郎
露國の貴族と法制……		大井包高
露國の外交…	文學士	齋藤清太郎
露國の哲學	ペトログラード大學マキストランド	岩澤丙吉
露國の農工業…	正教時報主筆	石川喜三郎
露國の化學工業	工學博士	西田博太郎
露國の人種……	帝國大學講師	鳥居龍藏
露西亞史觀…	學習院教授	堀竹雄

（中付二の二）

縮刷 荷風叢書

すみだ川 縮刷六版
紅茶の後 縮刷四版
冷笑 縮刷三刷
牡丹の客 縮刷四版
新橋夜話 縮刷六版

永井荷風著
橋口五葉装畫
新型新装總ポイント活字
各冊三百頁内外美本
各冊定價金六拾五錢 送料八錢

女優ナナ
定價金七拾錢

文明
小説 腕くらべ
（長篇小説八月號より連載）
主筆 永井荷風
九月號
定價金貳拾錢
半年壹圓八錢

東京市丸の内 三菱廿一號館
籾山書店
振替東京二四一七番
電話本局二一三二番



近世史、現代史に於ける澁澤翁の位置

山路愛山

(一)

論文起草の因縁

中央公論の瀧田君一日突然長者町の弊廬を訪問し足下は近世史若くは現代史を修むるに志ありと聞く、澁澤翁の事に就ても多少研究したるべし。翁、今度第一銀行を退き全く實業家と云ふ商賣を止めたれば、之を潮に翁に就て足下の思ふ所を記すべしとて青淵先生六十年史と、青淵百話を置いて去れり。僕今海岸に退居し世間の眼には人並の夏休みと洒落居る樣に見ゆべけれども其實は山の如き文債を片付ける爲の勉强に人を避けたるに過ぎざれば特に青淵研究に費すべき時間はなし。さりながら澁澤翁の傳記に就ては多少所見なきに非れば、此に宿論の一端を記して些か瀧田君の來意に答ふべし。

(二)

澁澤翁は精しき自叙傳を有す

澁澤男は自身を語るに吝かなる人には非ず。第一翁（男と書きたけれども、つい筆が滑りて翁となり易し。男などは所謂天下の大老の一人なれば翁と書く方が、男などゝ云ふ水臭き人爵の語を用ふるよりは適當なり

と存ずれば、いつそ翁にして仕舞ひたる方が書き心地よし。以下因て翁と記す。孟子梁の惠王を訪ふ。惠王孟子を叟と云ふ。叟も翁も同じ程の敬稱ならん。讀者華族さまに向て失敬な書方を用ふるよとて尤むることなかれ。我等が男を翁と云ふは日本國民の此老人に對する敬意を代表したるものなり）は文章家なり。翁の親族には文才あるもの多く、從兄尾高惇忠は立派の文章家なり。彼は英雄若くは英雄の出來損ひと云ふべき人らしく文を賣りて暮したる人に非れば文苑、儒林に伍することなかりしやうなれども文章にて立派に世に立ち得べき人なり。說文の學にも通じ近頃の書生はうそ字をのみ書くとて近世の碑文を集めたる書物を刊行して文字の誤謬を正し、其中には自身の造りたる碑文を多く載せたり。我等も嘗て之を一讀したるよとありしか文章中々手に入りたることにて優に作者の中に列すべし。次には翁の長女（穗積男の室たる人と覺ゆ）の作りしと云ふ和文を見たることあり。是も女性ながらしつかりしたるものなり。翁の父既に俳句の作者として鄕里に鳴り、其血族に文才の士あること此の如し。翁は實に讀書作文の下地ある家に生れ自身も亦文才ある人なり。明治十二三年の頃、武藏國六鄕の近所、小向井村と云ふ所に面白き梅林ありとて學農社の津田仙氏之を發見し、其頃の文士成島柳北先生など津田氏の發見を妙なりとし、それより文士の間に小向井探梅と云ふことやゝ行はれ紀行文などを新聞、雜誌に載するものもありしが、其文士の一人或時、例の探梅に出掛ける途中、翁に逢ひて小向井に行くことを語りしに翁は「諸君に左樣の閑日月あるは羨ましきことなり、迂生などは全く世事に俗了されて、左樣の樂天地を發見する能はず」と挨拶したりとて「澁澤めが、謙遜のやうな、冷笑のやうなことを云ひたり」とて、文士先生いさゝか癇癪を起したる如き語氣にて作りたる紀行文を或る雜誌に載せしことありて、我等は少年時代に之を讀みたり。其時代には我等も翁は唯だ相場師同樣の人物なりとのみ思ひ居りしに其後翁の詩文を讀むに文學の素養、決して淺薄ならず、商賣の片手間、ほんの消

関のなぐり書きと思はるゝものも可なりの出來なり。羅馬の英雄シーザルは第一等の軍人、政治家となりし故に第二等の文人となれり。シーザル若し其の精力を文學に集中したらば勿論第一等の文人たるべしと云へり。翁は雑誌記者にもならず、新聞記者にもならざりし故、文學を以て顯れざれども、造物者、若し戯れに翁を以て文士たるべき境遇に置かば翁は立派の文章家たり得べし。唯今にても自身を世に傳へるだけの文章は書ける人なり。其上翁は辯者なり。翁の演説は我等も一二度聞きしことあり。座談も信州にて或る宴會の席上に聽聞したり。「私、少年時代御當地に參り、藍を賣りたることあり」などゝ諄々として物語れる其辯舌には眞情ありて、虚飾なく、しかも自然に聽くものを引付くる力あり。窃にさて〳〵口も八町、手も八町の老人かなと感心したり。翁既に文學あり、既に辯才あり。其上心掛よき人にて自身の傳記を後世に殘すべき仕度も十分あり。二十餘年前既に雨夜譚の著あり、十餘年前既に青淵先生六十年史あり、近頃又青淵百話あり。凡そ近き世に生前、自叙傳を殘すもの、翁と福澤先生を以て二幅對とすべし。就中青淵百話は賣行き甚だ宜しく既に數版を重ねたりと聞く。是だけにて十分、十二分なり、今さら我等などが翁を説く必要もなきやうなり。

(三)

自叙傳は容體書。評論は診斷書

さりながら我等は猶ほ翁を論題として見たく思ふ。仔細は、翁、既に多く自身を語り、自叙傳、準自叙傳を作り、世間の耳目、既に翁の一代記を聞くに飽きたりと雖も、我等より之を見れば畢竟、翁一人の世間に提供したる容體書に過ぎず。病人の容體は病人自身、最も善く之を知る。固より他人の吻を容れ得べき所に非ず。就中、病人、自身辯者にて掻ゆき處に手の屆くやうに善く言ひ廻し得る時は容體書はそれにて十二分なり。さりながら容體書は診斷書に非ず。容體は病人自身の語り得る所なれども、診斷書は醫者の任なり。翁は自身の容體を語りある人なれども、翁、若し自脈を

取りて自身の診斷書を作らんとすれば是は翁の爲し得る所に非ず。餅屋は餅屋、靴屋は靴屋なり。人の職業に貴賤なけれども其種類は千差萬別なり。翁は自動車に乘りて市中を奔走す。請ふ自動車を以て譬へん。翁精力人に絕し、何事も功者なりと雖も、翁若し、其車掌の運轉振りを手緩るしとし、自身手把(ハンドル)を手にして八百八街を馳せんとしたらば恐らくば翁も無辜の人間を殺すことあらん。自動車の車掌は翁の傭人なりと雖も、其專業の權威には素人の翁は之に立入ることを得ず。翁の自ら作る所は容體書なり、獨り翁の自敍傳が容體書たるのみに非ず、遠くは新井君美の折焚柴の記、近くは福澤諭吉の福翁百話、いづれも容體書なり。此容體書を基礎にして診斷書を作るは史家の權威にして病人自身の任に非ず。翁の爲し得る所は容體書を作ることなり、既に容體書を作りたる上は其の診斷は則ち史家の權威に任かせざるを得ず。勿論、醫者に筍醫者藪醫者あるが如く史家にも、筍もあり、藪もあり。强ち史家の權威などと威張り得べきに非れども、それにても史家は史家なり、其業に專らなれば素人よりは好し。諺に碁の岡目は八目の得ありと云へり。天下の事當局者あり、傍觀者あり。翁は當局者にして史家は傍觀者なり。馬鹿にても他人の事は善く分(わか)るものなり。極々粗末なる史家にても猶ほ岡目八目だけの得はあるべし。翁と雖も此專門の權威には抗すること能はず。我等は人間に生れて何の得たる所もなし。唯だ少年より好んで古今の史を讀みたれば固より未だ筍(たけのこ)にもなり得ざる程の未熟ものながら猶ほ史家の一人なり。不肖ながら此權威は翁と雖も如何ともすると能はざらん。翁、多くの容體書を世間に出だせり、之に依りて診斷書を作るは我等の分内のことなり。商賣して金を儲けるは實業家の仕事なれども、何處までも傍觀者の態度を取り、世間の舞臺の外に立ちて無遠慮の批判を試むるは我等の役目なり。我等既に翁を捉へたり。我診斷所の床上に翁は赤裸々にして橫はれり、我等は我が好題目たり、善き研究の資料たる翁を逸し去ることを欲せず。

（四）天下亂るべくして亂れざりし秘密は如何

賴山陽の日本政記を讀むに其論文には例を上古、中古に取りながら其實山陽自身の時代を諷したるもの多し。日本政記の興味は正に此に在り。其中に『世が末になれば馬鹿者が政治の要路を占め、貴姓、高姓、悉く愚人となり、英雄、豪傑、奴隷の境界に屈す。左樣に智愚賢不肖處を易へたる時は天下は大亂に陷るものなり』と云ふ筋の議論あり。唯今、手許に政記なければ本文を其儘此に引く譯には行かざれども、論旨は此通りなり。是れ正に山陽が自身の時代を憤慨したるものにて幕末の世相は眞に此の如し。たとへば其頃は德川家の天下にして所謂旗本、家人は門閥を誇り、將軍の直參たるを自負し、大威張りに威張り居たれども其實は大抵無學文盲に育ちたる柔弱者にして文もなく武も亦なき輩なり。されば福澤先生などは旗本と云ふは靑公家同樣のものなりと思ひ居たりと云へり。是は德川氏の家臣に限りたることに非ず。其時代は諸藩にても大藩の上士以上は大抵馬鹿者なり。但し馬鹿の程度が幕府の旗本程濃厚ならざりしのみ。されば土佐にて後藤象次郎が上士の家に生れながら相應の人傑なりしかば土佐の志士は後藤は上士に不似合ひなる人物なりと評判したる程なりと云ふ。あの人は身分が高し、故に賢き人物なりと云ふが當然なるにあの人は身分が高し、故に愚物なるべしと定むるを通則としたる當時の世態の正に亂世に近きたるものなるは明白なり。天下國家は建築物なり。上流社會はその建築場の基礎なり。其基礎が白蟻に喰ひ盡されたる材木の殘骸となり居りては其社會の破壞は既に眼前に迫りたる事實なり。山陽は此狀態を目擊したれば事を古史に假りて天下の治安既に行詰りたることを歎息したり。斯樣に世家、門閥に馬鹿者多く上流社會に愚物多く、山陽の日本外史は無學の武士も讀み得るやうにと心懸けて作りたる平易の漢文なれども其日本外史さへ自由に取廻しがならず、俗用の書簡すら碌々認め兼ぬる平凡以下の人物が天下の御役人と稱して力味居たりたる世界が、兎も

角も、直ちに亂世とならざりしは不思儀のやうなれども、それには又相應の仕掛ありて變則の人才登用も多少は行れ居たれば當分はどうか、こうか立行きたり。たとへば長州の毛利家にては其始め國政を執行したるものを奉行と云ふ。何れも戰國の世を經來り、人事に百錬千鍛したる俊才なり、其子孫自ら門閥をなし、奉行となるべき家柄も略ぼ定まりたる後は奉行の才も衰へたれば、後には空名となり、公文に署名するのみにて實務に當るものは其中にて江戸、國に分かれて各一人となれり。是を同藩にて當役、當職と云へり。さりながら當役當職となるものも、固より膏梁の子弟たるは他の奉行と殊なることなければ、後には是も多くは床の間の置物になり、實權は其下に働く手元役と云ふ卑官の手に移れり。近世の長州史に有名なる村田四郎左衛門淸風なども此手元役なりしと覺ゆ。是は諸藩も同樣なり。德川家にても勘定所には小身より出身し得る仕掛あり。有名の勘定奉行、身を微賤に起したるものも少からず、幕末の名士川路左衛門尉なども小官よりたたき上げたる人なり。又目付と云ふは纔かに千石高なれども、老中の諮問に應じ、凡そ天下の政務に關し、何事にても口を出すを得ざることなかりしかば其人を得れば中々役に立ちたり。斯樣の道具立てありて上流社會が馬鹿者を以て充滿したる天下も猶ほ人才の氣息は通ひたり。動物の機關は天然不思儀の妙用あり。肺臟にて呼吸のならぬ時は皮膚が呼吸の機能を生ずるものもありと云ふ。何處かに足らぬ所が出來ればそれを補ふ仕掛を生ずるは人事の妙にして幕府の世にても、山陽の歎息したる通り、全く上は愚、下は智と鑄型のやうに極まりたるに非ず。馬鹿の上役には利口の下役あり、長官無能なれば屬僚に人才あり。名實相違、權勢下に移る形はありたれども兎も角もそれにて當分の埒を明けたり。たとへば安政の頃江戸町奉行の與力に鈴木藤吉郎と云ふものあり。其素性を尋ぬれば元來何處かの馬骨にして怪しむべき奴なりしかども一時は江戸市政の全權を其手に收めたる觀あり。飛ぶ鳥も落つる程の勢なりしが、後に其不正、露顯して刑辟を蒙り

たり。さりながら斯樣の馬骨がたとひ一時なりとも小官微祿を以て猶ほ炎日の猛威を揮ひしは彼が一個の才物にして奉行、頭人悉く其才に捲かれたるためなり。大鹽平八郎は大坂の町與力に過ぎざりしかども一時は關西に雄飛し、人皆其威を畏れたり。賴山陽、或時大坂にて菅茶山より貰ひし杖を紛失し、故人の物なれば何とぞ取返したしとて大鹽に依賴したるに、大鹽の威勢にて間もなく探がし出したりと云ふ。奉行、惣物にて其人を得ざれば其屬僚に過ぎざる與力に威を生じ、其中に大鹽の如き人才あれば實權は其手に歸す。獨り奉行のみに非ず、其上には京都に所司代あり、大坂に城代ありしかども所司代も城代も木偶人同樣なれば關西にて畏ろしき人物は獨り大鹽一人に過ぎず。斯樣の世の中となりては大鹽が大に自惚れ天下の英雄は乃公のみと思ひ做して殷湯周武の業を以て自ら期する高慢病に罹りたるも敢て怪むに足らず。詰る所は人才の缺陷を補ふべき仕掛として代用機關を生じ其代用機關が自己の力量を自覺し進んで本機關たらんとする運動を開始したるものなりと解釋すべきのみ。さりながら大鹽のやうに自惚れ強きものは何の世にても餘り多からぬが常なれば其頃にても大抵の人才は上役、長官はたとひ庸人なりとも、上役長官として尊敬し、自身はそれに使はれて代用機關の作用を爲すを以て滿足し、門閥世家の間に身を狹められながら猶ほ多少其志を行ふを得るを以て甘んじ、取て代らんとする念を起さず、世間の形を其儘に保存せんとしたり。德川幕府の早く覆へりて亂世となるべき謂れありながら容易に亂世とならず、二百餘年の太平を續け得たるは是が爲なり。

(五) 自覺と自惚れ

さりながら門閥、世家を以て政治社會を壟斷したる德川氏の天下は元來が無理の仕掛けなれば何時か一度は亂世となり、再び實力の競爭に還るべきは自然の約束にて是は間違なきとなり。唯だ其時期の來るには自ら機會なきを得ず。然らば此機會は何時起るべきやと云ふに實力ある人才か自己の價値を自覺したる瞬間に

始まると言はざるべからず。保元、平治の亂に武士は自己の價値を自覺し、自己なくては公家は何事も爲し得ずと見拔きたれば、淸盛なるものも出で、賴朝なるものも出でて公家の天下を覆へし、武家の天下としたり。德川の末世も所謂海内の文章布衣に落ち、上流社會には文才もなく、學問もなく、天下を我物顏に振舞ひたる德川氏の士は間拔けの旗本八萬騎の惡口通り事實それに相違なき正眞、正銘の間拔けとなり了りたれども、下流に沈みたる人才は猶ほ舊式の殘夢より覺めず、天下は何時もそうした物と心得、自身に國家、社會を擔當すべき力量あるを曉らず、やはり將軍家には忠節を盡し、大名、旗本を敬ひ、愚劣の武士を人間の風上に立てゝ其下風を仰ぎ居りしに、世界の形勢一變し、白人種の威力極東に加はり一道の砲聲、天に震ひて浦賀の關門、忽ち米國軍艦の殺到を見たりしより、彼等は將軍、大名、旗本を始め武家一統の柔弱不武にして國家を擔當する力量なきを憤慨し、是に始て在上者の無能力を看破り、事此に至りては日本國を他人に任せ難し、火事場に於ては役目の甲乙を詮義し、身分の上下を論ずべからずとて、仲間も、下男も飛び出し頭を爛らし、額を焦して火掛かりを爲し、尊王攘夷の大運動に從事して見れば、自身の力量も分かり、自身の力量が分れば自身の價値も知れ、此分にては王侯將相何の種あらん、自身と雖も、秀吉、家康の事業を爲し得ざるに非ずと自覺し、此自覺に依りて國家の形を立直したるが則ち維新の改革なり。或はそれは自身の價値を正しく解釋したるものに非ず、自身の價値を不正當に解釋したる誇大妄想狂、分かり易く言へば自惚れなりと云ふものもあらん。さりながら自惚れと自覺との境界は容易に判斷し得べきものに非ず。自惚れと云へば惡德のやうなれども、人物に定まりたる相場なく、人の力量に何程と云ふ定量もなきことなれば自惚れは則ち自覺に外ならずと云ふも可なり。畢竟一人の大きに氣張り、我は是だけの事は必ず爲し得べしと我を立てたる其有樣を善き意味にて自覺と云ひ、惡しき意味にて自惚れと云ふだけのことにて自惚れと自覺は必

しも分界あるものに非ず、均しく心の高潮に達したる有様を指すものなり。されば其心の高潮に達したる様子を他人より見れば醉人の漫語と見ゆることもあるべし。當人自身にても時勢、既に變じ、齡も亦少年より老境に進むときは昔を回顧し、熱病の醒めたる如き思ありて志大才疎の未熟なりし時代を懺悔することもあるべけれども、兎も角も雄心、烈志、心弦高く鳴り、英雄、豪傑の業を以て自任する其心は則ち自己の價値を解したるものにして天下の大事業は總て此心の高潮に依りて出來上りたるものなり。人心此高潮に進むときは一人に於ても一身の革命期にして天下に於ても同樣なり。我澁澤翁はかゝる時代に生長し、少年時代に於て英雄豪傑の業を以て自ら期したる一人なり。

(六) 天下は廻り持ち

諺に天下は廻り持ちなりと云へり。德川家の先祖は三河國松平村の名主莊屋の類なり。其又先祖は上野國の新田氏なりと云ふ。足利の世に一旦落魄して社會の下た積みとなりたる德川氏は尊氏將軍と共に天下を取りたる英雄豪傑の子孫、所謂三管領、四職の門閥家が馬鹿となりて滅亡し、群雄、自力を以て天下を爭ひし世に出でゝ再び社會の上は積みとなれり。その德川氏の關東入國以來、それまで關東の名門、舊家たりし馬鹿殿樣は其威に畏れ、多くは落ぶれて其好運のものは名主、庄屋の類となり、其惡運のものは水呑百姓となり、三河武士は獨り天下に羽を伸ばして治者階級の位置を占めたり。たとへば下總國、印旛郡の百姓木内惣五郎の先祖を尋ぬれば千葉氏の門葉なれども德川家の天下となりて後は其家は土民の境界に落ちたり。關東には此類多く名主、庄屋の家は多くは昔の大名なりしを、新大名の世になりて其政權を失ひ百姓に成下りたるが多し。澁澤家の家譜は我等の知らざる所なれども聞く所に依れば先祖は足利氏なりと云ふ。足利に二姓あり。平家物語の宇治川合戰に出陣して源三位賴政と戰ひたる足利は藤原氏なり。澁澤氏の先祖なりと云ふ足利氏は藤氏なるや、源氏なるやを知らず。どちらに

しても昔は名門なり、其名門も世に連れ時に從ひて武藏國榛澤郡血洗島村の百姓となり下りたれば社會の上は積變じて下た積となりしものなり。此段木内惣五郎の家が千葉氏の門葉にて關東の大名たりし位置より落ちて下總國印旛郡公津村の名主となりしと同樣のことなり。但し斯樣に家運の衰微したることは悲しむべきやうなれども、上のものは下になり、下のものは上になる循環の理法の天下に存ずることを思へば敢て落膽すべきに非ず。榮枯盛衰は環の如く廻ぐるものなりと定むる時は我世の末に再び花さく春に逢ふべしと諦められざるにも非ず。維新の改革なども一寸見れば偶然の賭博にして、人間の實力が紛然、錯然として亂鬪したる結果の如くなれども關ヶ原の戰勝者たりし德川氏を始め其黨派として成功を歌ひし細川氏(肥後)、黑田氏(筑前)山内氏(土佐)が權力を失ひ、關ヶ原の戰敗者たりし毛利氏(長州)島津氏(薩摩)が權力を得たるは猶ほ天下は廻り持ちの理法に漏れざるものなり。獨り是のみにはあらず維新の前後より日本國に起りたる英雄豪傑の素性を尋ぬるに其先祖は元龜天正頃までの大名高家なりしを德川氏の時、社會の新組織に壓倒され土民に落ちたるものなりと云ふが甚だ多し。則ち彼等は識らず。覺へず風雲に乘じて先生の耻を雪ぎ、二百六十年間の欝懷を散じたるものなり。風呂の湯を沸かすに底の水は釜の熱を受けて膨脹し、上面に出で、既に上面に出でたる後は空氣に觸れて冷たくなり、再び底にかへり、斯くて幾たびも上になり下になる。人事の榮枯盛衰も之に同じ、天下を取りて門閥を誇るものは馬鹿になりて自ら社會の下層に沈むべき運命を作り、社會の下層に沈みたるものは人事に鍛錬して英雄となり、自ら社會の上層に上りて治者たるべき宿根を作る其有樣は風呂の湯の浮沈するに似たり。鎌倉の執權北條氏、政權を我物顔に振舞ひ、日本國の主、天下の副元帥と稱し、其威權を自負して低能兒となり果てたれば、同じ關東の内に住したる上野國の住人新田義貞、其昔し賴朝に善く思はれず自ら失意の境遇に落ちたる家に生れて兵を起し、猛かに起ちて鎌倉に攻め入りた

り。天下の廻り持ちたること是にて明かなり。されば徳川の世に武州の百姓になり下りたる澁澤家より時勢の變動に乘じて英雄を出し、幕末の士民、變じて明治の貴族たりしこと敢て怪むべからず、人事の通則、固より然らざるを得ずと斷ずべし。其證據には徳川の末、明治の初に關東にて一廉の男と云はれしものは多くは鄕士、百姓より身を起したるものなり。たとへば劍客桃井儀八は武藏國中瀨の百姓なり。同國多麻郡沿岸の村民よりは新選組の驍勇、近藤勇、土方歲三を出し、同國蕨驛の名主の家よりは彰義隊の勇士伴門五郎を出し、上野國甘樂郡岩戸村の百姓よりは同じく天野八郎を出し、下總國安食村の鄕士よりは筑波山に立籠りたる竹內百太郎延秀を出し、常陸國眞壁郡木戶村の農家よりは同じく飯田軍藏を出したり。此類猶ほ多かるべし。上總國茂原の寺小屋何某が姓名を變じ、楠音次郎と稱し、無賴の少年を集めて九十九里濱の片貝村は尊王攘夷の旗を舉げ諸藩の兵を蒙りて忽ち滅亡したるが如きは我等が嘗て同地に避暑したる時に所の人より聞たる一場の滑稽談なれども、是れ亦其頃は出來損ひの豪傑が田舍に多かりしを證すべきものなり。詮する所、世間既に空氣の入替へを必要とし、浮きたるもの丶沈み沈みたるもの丶浮くべき際になりては世家、門閥、貴種、高姓に取りて最も懸念すべき强敵の起る所は卽ち平生輕蔑したる士民百姓の階級にして幕末に在りては關東の農家は英雄豪傑の候補者を蒸し出したる如にして、革命の起るべき雲氣に滿ちたりと謂つべし。其頃幕府の役人は所謂芋の煮へたのも知らざる迂濶者多かりしかば此雲氣を察し得る識見なかりしは勿論なれども、それでも百姓町人の書物を讀み、劍術を使ひ、武士の眞似をなし、擧動武骨にして內心、士流を輕蔑する色あり、自然に權高の振舞なきに非るを危險とし數ば百姓は百姓らしくせよと諭したり。世態人情既に內亂の近づきたるを報ずること此の如し。澁澤翁は其氣運に動かされて起ちたるものなり。されば翁自身の容體書のみを見れば何事も翁の一心にてその進退を決したるやうなれども史家の診斷書より言へば翁も亦時

勢の子にして其出處進退は要するに時勢の波に飜弄され、史學の約束に從ひ、自然の命數に依り、今日に至りたるものなりと見るの外なし。尤も斯ふ云へば翁は唯だ好運兒に過ぎず、或るもの丶時勢の浪に破船したるが如く、翁は破船を免れたるだけのとのやうなれども必しも然らず。波浪のみが船の運命を定むるものに非ず。翁の梶取りの巧拙も多少は荒波を乘り切るに功なきに非りしは勿論なり。

(七)

社會の最下層は英雄豪傑を出すべき地盤に非ず

幕末の世、世家門閥の命數既に盡き草莽の英雄起て之に代るべき時期に際したれば澁澤翁も天運循環の法律に支配され、武州の土民より起つて明治の貴族となりたる次第は前文の如し。但し斯く曰へばとて翁、若し無下の土民にて所謂水呑百姓ならば兎ても斯樣の好運に遇ひ難かりしならん。そを何故ぞと云ふに、文明は一大饗宴の如し。此饗宴に出席して衆人と醉飽を共にし得べきものは唯だ其門に入るを許されしもののみなり。翁は武州の百姓なれども翁の家は土地の富豪なり。翁は家產の裕かなるに依りて少年より書を讀み劍を學び、時代の文明に泳ぐことを得たり。翁は每度自身の敎育の不完全なるを述懷し、「私共は正則の學問をしたるものに非ず」とて其趣を演說したることも多けれども、僕自身の世に於ては翁だけの敎育あれば士人の敎育としても既に十二分なり。日本外史さへ讀み得ざるものが江戶の旗本の中十人に九人まであり世の中に翁は少年にして左、國、史、漢を讀み、詩を作り、文を草し、世間の狀態に於て既に一定の見識を備へたり。其頃武藝を本職とすべき武士が柔弱を極めたるは天保の大鹽亂に、城代、奉行の士には敵前に向て猛進し得る勇士に乏しく、上役は唯だ鐵砲玉の飛び來らざる安全の所に在りて口巧者に指圖をのみし、下役も尻込して進まず、穢多は命知らず多しとて穢多町の壯丁を先陣に進め纔かに大鹽と戰ふを得たりし一事に依りて明白なり。さる時代に於て翁は士民の子を以て專門の劍客を氣取り得る程の腕前を有せり。翁はたしかに文明

の門に入り其饗宴に與かり、席上の衆人と共に醉飽の情を同うしたる人物なり。是だけの仕度なければ翁と雖も、時勢の潮合を見て動き出すこと能はず。是は翁の仕合と云ふものなり。幕末より維新に掛けて功を立て名を成し、若くは出來損ひながら猶ほ英雄豪傑の業と目すべきものに手を着けたる人物を見るに多くは多少生活に餘裕あり、黄表紙の一冊位は讀み得たる人物なり。其日暮らしの貧乏人は固より之に與るを得ず。されば諸藩の中、大藩の上士に愚人起り、其階級より碌な人物の出で來らざりしことは前に記したるやうなれども、之と同時に小藩の下士輕輩にも功名を爲したるものは少し。そは小藩の下士以下は大抵、貧骨に徹し纔かに內職などして其日其日の細き煙を立てたるに過ぎざれば暮しに逐はれて文明と云ふ饗宴の門に赴くとを得ざりしが爲なり。尤も大藩の下士輕輩は貧乏は貧乏ながら大藩の事故、人間の綏り合はせも付き、藩內にて出世の道もありしかば追々に成上りて天下の功業も建つるを得たるものなきに非ず。何の點より見るも自身の修業を爲し世間の樣子に目口の開くまで教育せらるゝ餘裕なきものは如何なる場合にも功名の門に入り難しと知るべし。翁は幸にして此點に於ては都合よき家庭に生れ少年時代より大手を揮て文明の饗宴に連なることを得たり。是亦翁の事を研究するものゝ見遁がすべからざる所なり。

(八) 澁澤翁の黨派的根性

翁は極めて福相なり。青年時代の寫眞を見るも愛嬌ある顏つきなり。さりながら翁は顏に似合はぬ黨派根性の強き人なり。斯く言ひたらば翁を好むものは必ず不平を鳴らすべし。誠實無二、論語を以て道德の標準とせんとする翁を黨派根性の強き人なりと斷ずるは翁を誣ふるものなり。翁の風采に接して其野心なく、匠心なく、些か稚氣を帶ぶる談話を聞くもの誰れか翁の公平無私、偏なく黨なき人なるを疑ふを得んや、汝の翁を以て黨人なりと云ふは誤れり、とは思ふに翁の信者の辯解ならん。さりながら誠實の心、平和の情は必し

も黨派の人に伴はざる資格に非ず。たとへば宋の歐陽修は文章に平和の氣象あり。諄々として人の爲に事理を說くと誠に君子人なりと謂つべけれども其黨派根性の强きとも亦甚しく歐一生の傳記は黨派戰の史なりと云ふも可なり。翁と歐陽修は其性癖誠に一致す。翁を以て黨派根性に乏しと謂ふものは試に翁の慶喜公に對する態度を見るべし。靑淵六十年史第一章廿一頁より二十六頁までを讀めば翁は慶喜公に對して滿腔の同情を表し、極度の形容詞を用ひて慶喜公の心事を辯護したり。たとへば慶喜公の將軍家茂に對する態度を論じて

「慶喜は實に其身を忘れたり。否德川氏をも忘れたり。慶喜の決心は一身の安危、德川氏の安危、德川一族の安危は顧みる所にあらざりしなり。否殆ど之を顧るの遑あらざりしなり。慶喜の唯一の目的は如何にもして條約勅許の目的を達し、外國の事端を避け、如何にもして皇室と國家を安泰にせんとするの外なかりしなり。此の目的を達する爲には如何なることをも犧牲に供せんとの決心にてありき」

と云ひ、慶喜公の家茂に繼ぎて將軍となりしことを論じ

「蓋し幕府の滅亡は旦夕に迫り、將軍の大統を嗣ぐは慶喜の一身より之を論ずるときは尤も不利益なるや明白なり。併ながら慶喜は一身の利害を顧慮するの時勢にあらざることを知れり。又德川氏一統中他に代て將軍たるべき適任者なきを知れり。彼の目的は德川氏を擧げて國事に殉死せしめんとするの考にして、其の殉死の目的を正當に達せんとするには自身將軍職の權を執るに若くはなしと信ぜしなり」

と云ひ、其政權返上を論じ

「蓋し外交問題起りてより以來、江戶の權力は日々京都に移り、此に至て最早如何ともする能はざるものあり。慶喜は疾くより此機の熟するを待ちつゝありたるものゝ如し。彼は大權を正當の持主に返上せんことを欲せり。彼は此の大切なる重寶の江戶より京都に移る中間に於て橫奪するものあらんことを深く恐れたり。彼は外國と事を構ふることなく、內亂を

誘發することなく、靜穩無事に政權を移轉し、皇室と國家の安泰を計るの意念にてありき」

と云ひ、その伏見、鳥羽の戰より恭順謹愼して江戶城を出で上野に蟄居し、罪を朝廷に請ひしまでの心事を論じて

「伏見鳥羽の衝突は如何に殘念に慶喜を感ぜしめたるならん。併ながら彼の堪忍は此の衝突と雖も破るゝと能はざりしなり。彼の決心は數年前より一身並に德川氏を擧げて皇室と國家の犧牲に供せり。彼は直ちに二藩に命じて兵を引き去らしめ、又德川氏の臣たるもの一切王師に抗すべからざることを嚴命し、一心に恭順を主としたり。此間に於ける慶喜の深謀遠慮、度量の寬大、皇室に忠に、國家の爲に親切なること筆紙を以て寫出すべきにあらざるなり」

と云ひしが如き則ち是なり。勿論此文は靑淵先生六十年史の著者の筆にて翁自身の起草したるものに非れども翁の嚴密なる校閱を經、翁自身の點削を經たるものに相違なかるべければ之を翁の慶喜論として見るも可なり。されば翁は深く慶喜公の境遇に同情し兼てより幕末史を著し慶喜公の心事を明かにせんと心掛け自ら資を投じて修史の業を起し、明治廿六七年の頃友人福地源一郞氏を主任とし、氏の物故したる後は三上文學博士を顧問に、萩野文學博士を主任に賴み五六名の史家を賴み今日に至るまで二十餘年間、猶ほ其事に從ひ居ると聞きたり。誠に熱心の至にして一旦主人に賴みたる人の爲に斯くまでに心を盡すこと翁ならではなし難きことは相違なけれども翁、若し慶喜傳を研究したる結果、思の外、慶喜公がつまらぬ人物なることを發見したらば如何。翁は慶喜公を佛菩薩のやうなる誠忠無二、尊王一途、些しの私心もなく、些しの臆病もなく少しの惡びれたる處もなき立派の人物なりと信じ居るが如くなれども、世間の慶喜論は必しも翁に同じきものゝみに非ず。尤も慶喜公は生前皇譴も霽れ、公爵に列し、天寵を極め、其家も國家の貴族として繁昌することなればさる家柄の人物に向て彼是批判するは身の爲にならずとて沈默し居るものもあるべけれども幕

末史に就て多少の造詣あるものは必しも一々翁の慶喜論に雷同する能はざるべし。たとへば會津人の近年著したる「守護職始末」などを見れば、慶喜公の弱點も隨分有るやうなり。畢竟するに慶喜公は今日と雖も史學より言へば末解決の問題にして是非褒貶、末定なりと謂つべし。然るに翁は何處までも慶喜公を以て深謀遠慮あり、度量寛大にして國家の爲に親切なりし十五代將軍中尊王心の厚きとに於ては比類なきなりと獨斷し近世史家の慶喜論を一掃し、佛菩薩に均しき純潔なる公の心事を明かにせんと欲し、其趣意にて史局を起したるは所謂我佛尊しと云ふ黨派心に外ならず。我等は是に依りて翁の心事の割合に單純にして物に凝り易く、初一念を立て通ほし、世相を左右、前後、表裏、内外より觀察し、公平無私の處に落付きを求むる超越的の人間に非ることを知りたり。斯く言へばとて我等は翁の黨派心を惡むものに非ず。世間の英雄は多くは黨派心の强きものなり。福澤諭吉先生は賴山陽を世間にてえらきやうに云へども、乃公の親の福澤百助は山陽などよりえらい人物だつだよと云へり。澁澤翁の自身の舊主人たる慶喜公を其心事に於ては一點の混濁なき純忠至孝の人物なりと認め、世間の慶喜論を悉皆誤謬と認め二十餘年間多大の資を投じ文士を傭ひて慶喜傳を著はさんとする心事は公平なる人の目より見れば些か偏執の嫌ひなきに非れども過を見て仁を知るべし、何事にも餘り複雜に考へず、思ひ込み强く、事に熱心にして容易に活動する美德は實に此黨派心の生む所なり。黨派心と云へば惡るく聞ゆれども、心事單純にして岐路に迷はず馬車馬の如く一直線に勇往邁進する心が則ち黨派心なりとすれば黨派心必しも侮るべからず。翁は此意味に於て黨派根性の極めて盛んなる人なり。

(九) 思切よき澁澤翁

餘り多く書物を讀みて理窟が多く、思慮が複雜になれば之が爲に活動の元氣を失ひ、口巧者にのみなりて一種の懶惰者となるべし。昔より文苑、儒林より英雄豪傑の出でざりしは之が爲なり。中年以上思慮の老熟

したる人物が動もすれば有爲の機會を失ひ却て無學の青年に仕て遣らるゝことと多きも同じ道理なり。翁の心事が比較的單純にしていさゝか馬車馬的なるは翁の一生を彩りて面白き畫面を現出したり。翁は嘗て其父市郎左衛門晩香と云ふ人を思ひ切り善き人なりと云ひたり。さりながら思切り善きものは獨り晩香翁のみならず、其子の翁も父に劣らぬ思切り善き人なり。翁は若冠にして豪農の若旦那たることを思切り、幕末の陳勝吳廣たらんことを期し自ら好んで浪人となれり。古草鞋さへ棄つるはいやなるものなり、まして豪家の若旦那株を何の顧慮することなく棄て去りたるは天下將に大に亂れんとす、國を守らざれば家も亦守り難しと見切りを付けたるにも依るべけれども、さりとては隨分の思切りやうなり。さりながら我等の翁の思切り善きに驚くものは此事に非ず。是は青年時代の向ふ見ずと言へば云ふべし。我等の最も翁に驚く所はその年既に壯にして思慮稍や熟し百難を經來りて始て一生喫着の境に達したる明治の役人社會を罷めて斷然商海に乘り出したる膽氣に在り。明治六年と云へばたしかに官尊民卑の時代なり。其頃諸藩より海外に留學したるもの歸朝すれば必ず役人になる。民間に人才を容るゝ地の乏しき爲めなり。今でこそ實業家の羽振り甚だ宜しけれども其時代の民業は總て不振幼稚の狀態に在り。されば翁の官を罷めて商人たらんとするを聞きては翁の友人多く之を危みたり。其時代にても勿論士族を以て商業に從事したるものあり。所謂士族の商法とは其時代の流行語にして士大夫の歸農歸商したるもの少からずと雖も、此輩は大抵時勢の變に逢ひて已むを得ずいや／＼ながら身を落したるものなり。翁の如き榮官に居り、少々辛棒したらば其位置に囓り付き居り猶ほ國家の大官に上り得らるべき希望ある身分にて急流、勇退、進んで商海に乘り出したるものは絕無なり。加之商海に乘り出したる後の翁は必しも始より幸運兒ならず、時としては大に失敗し苦勞したることなきに非ず。翁の第一銀行を經營したる初に小野組を信用し百數十萬兩を貸し出したるに、其小野組が破產し、折角

出來上りたる第一銀行も殆ど共倒れの悲境に陷り、流石の翁も毎日思案に暮れたることあり。當時は幸ひ井上侯の盡力にて救濟の方法に關し三井家と交渉を開くを得て辛うじて危險區域を脱するを得たりと雖も其時若し第一銀行が破産してしまへば世人は必ずそれ見たか、澁澤めが酔興にも實業家となるべしなど新しがり、折角築き上げたる官途を棄てし後のあの醜體は何ぞやと天下の笑はれ物になるべし。其後とても翁の商戰必しも常に勝利のみにあらず、實否は知らざれども明治十四五年頃の近事評論にも翁の事業に蹉跌を生じ、進退に窮し苦惱煩悶を極め居れりなど云ふ記事の載りしこともあり。行路難は山に在らず、河に在らず、虚實盈縮の變化、瞬間に起り勝敗の數豫め測り難き商賈の道中に在るものなれば、謂はゞ一種の冒險事業なり。其行路難の商業に飛入らん爲に世人に羨まるゝ官海を好んで脱し去り、

官途幾歳誤居諸。解印今日意轉舒。笑我疎狂尙未已。献芥留奏萬言書。

と歌ひ、一片の奏議を留めて容易く背水の陣を張りたる思切の善さに至ては誠に以て驚くべし。畢竟斯樣に思切り善きも、胸中餘り複雜ならず、是非の決斷迅速にして信ずる所に向て一直線に驀進し易きが爲なり。翁が公平なるが如くにて實は黨派根性に富むも、思慮深密なるが如くにして實は多少輕卒の風あるも、計數に綿密なる商人の如くにして、一面より見れば壯士、俠客の面影あるも、少年にして横濱襲擊の計畫者たりしも之が爲なり。

(三) 水戸黨の好少年

麴の香を嗅ぐだけにて赤くなる人もあり、斗酒猶ほ酔はざる人もあり。時勢は酒の如し、何人も多少之に酔はざることなきに非れども其酔態は一樣にあらず。翁は幕末の時勢に酔ひて、而も年少氣銳なり。人と爲り割合に單純にして物に熱し易し、翁が十七歲にして既に藩吏の專横を憤り、二十四歲にして德川の天下を覆へさんとする謀叛人となりたるは酒の善く利たる方

なり。斯様に時勢の酒の善く利きたるは翁の人と爲り思切り善く、心緒單純にして物に熱し易きが爲なり。翁は此點に於て純乎として純なる關東兒なり。惡く言へは輕卒、善く言へば齒切れ善く、事あれば草履片足下駄片足にて飛出し得る關東兒の特質を最も明白に代表したるものなり。斯くて時勢の酒は早く翁を醉はして水戸黨たらしめたり。是を翁が士民の境界を脱して英雄豪傑の事業を始めたる初期とす。我等の此處に翁を以て水戸黨となれりと云ふは翁が德川齊昭の黨派になり、慶喜を西丸に入れんとする陰謀團の列に加はりたりと云ふに非ず。又築波山に籠りたる浪士の仲間入をしたりと云ふにも非ず。水戸學派若くは同臭味の議論に感染しその國體論、攘夷論を胡椒丸呑にして自然に同じ思想の流れに棹し、自然に同樣の行動に出でたるを言ふなり。

近世史を修むるものは天保學、一名水戸學、若くは其類似思想の幕末に於ける勢力の甚だ偉大なることを知るべし。長州の思想は水戸學と多少筋を異にしたるものなれども、その大先輩の村田清風も、小先輩の吉田松陰も水戸學に共鳴し大體に於て水戸學の贊成者なり。薩摩の島津齊彬は必しも水戸學の信者に非ず、其偏固なる攘夷論には些か避易したる樣子なれども其腹心の大西鄕は水戸學の大信者なり。肥後の横井小楠なども後には水戸學を看破りたりと稱し水戸嫌ひとなりたれども壯年時代まではやはり水戸の信者なり。土佐の山内容堂、吉田正秋君臣は因より東湖の友人なり。凡そ西南諸藩の志士仁人水戸學に心醉し、共鼓舞する所とならざるもの甚だ稀なり。されば會澤の新論、藤田の回天詩史などは志士愛讀の書にして經典の如く尊ばれたり。西南諸藩の水戸學に風靡したること此の如くなる上は關東に於て水戸學の威力ありしこと勿論なり。尤も江戸の士は利害の衝突もあり、黨派の關係もあり其上水戸の弱點も眼前に掩ひ難きことなれば大寺の門前、却て高僧を侮るものあるが如く水戸學を侮りしものなきに非ず。勝海舟先生などは始より水戸を馬鹿にし東湖を煽動的の僞英雄と見破り、水戸學風を厄介物

視したれども田舎の郷士、豪農などはいづれも水戸樣の忠誠に感服し、其議論に雷同したり。獨り水戸學に同感する能はず、始より開國論を持したるものは其世の社會に於ては日影者と云ふべき極々小數の蘭學者輩ありしのみ。尤も水戸學の受け入れ方に於ては東國と西國は自ら多少の相違あり。出羽國淸川の志士、淸川八郎は西國にも東國にも遊歷し諸方の人氣を實地に經驗したる人なりしが其說に西國の志士は尊王論に動き易けれども攘夷論には餘り氣乘りがせず、之に反して東國の人氣は攘夷一途にして尊王論には熱し來らずと云へり。關東は昔より皇化に遠き東夷の地たりしのみにあらず、德川氏の根據地にて、しかも眼前に江戸城の巍々堂々たるを見たるものなれば道理に於ては忠君の大道を忘れざるものも、皇室に對する親愛の情、西南の日本に比して薄からざるを得ざるは其世に於ては免れ難き勢なり。されば同じ水戸學の感化を蒙りたりとは云ひながら西國に於ては多く共尊王論に共鳴し、東國に於ては多く其攘夷論に共鳴したることとならん。

斯くて關東の野は自然に水戸學の攘夷論に風靡し、翁の故鄕なども早く此種の傳道者を發見したるものゝ如し。たとへば翁は橫濱襲擊の計畫を爲せし頃は同姓喜作氏と共に每度一橋氏の臣平岡圓四郞の家に往來し所謂書生談を試みたりと云へり。平岡圓四郞は幕府の名臣岡本花亭の次男にて其頃一橋家の切者なり。始め慶喜公に侍讀し後には其腹心となり、凡そ其家の機密にして與かり聞かざることなし。此人と密勅事件にて井伊大老の爲に殺されし水戸の側用人安島帶刀とは互に其心事を明かし合ひたる仲にて勿論大の水戸信者なり。諺に牛は牛連れ、馬は馬連れと云へり。鐵は磁石を吸ひ、類は友を集む。我等は翁が何時頃如何なる緣故にて平岡の友となりたるや、翁と平岡の間に交換されし書生談が如何なるものなりしやを翁の口より聞くを得ざるを憾とするものなれども、當時の情況より判斷し、翁も平岡も共に水戸學の海を泳ぎたる人物なりしかば自然に氣も合ひ自ら主從のやうにもなり、師弟のやうにもなり、朋友のやうにもなりしことゝ信ずるな

り。其上翁の妻の兄にて同志者たりし尾高長七郎は大橋訥菴と何等かの關係ありし人なりしが如し。大橋は水戶學に輪を掛けたる攘夷論者にして元寇紀略、闢邪小言を著はし關東の田舍には隨分信者多かりし儒生なり。思ふに翁も其議論を尤なりと感心したることならん。翁の水戶學、若くは其類似思想に感染したること疑なきに似たり。元來水戶學と云ふは隨分疎枝大葉の荒つぽき議論にして精密に之を批評したらば直ちに其破綻を發見し得べきものなれども翁の如き年輩に於てはさる廻りくどき詮義に沒頭すべきに非ず、加ふるに世間既に其說に風靡し萬々一辭之に異論なき時は心事割合に單純にして容易に他人の說を容れ易き翁が之を其儘信仰して尤なる議論なりと思ひたるは勿論なり。さりながら水戶學を信仰すると云ふことゝ、其論旨に從て實動に從事すると云ふことゝとは自ら別問題なり水戶學の尊王攘夷論は別して其攘夷論は始より翁の如き關東青年に愛好せらるべき理由ありしと雖も、直ちに攘夷を實行し、天下の騷動を引起さんと思ふまでに進みたるには別に仔細なきこと能はず。

(二) 天下始て亂世に入る

幕末の史家、大抵一口に嘉永癸丑ペリー提督以來幕府は衰亡に近づきたりとて此年を以て幕府衰亡史の第一頁とし何人も異論なきものゝ如し。さりながら是は大體論なり。若し猶ほ精しく論せば關東內訌の結果、井伊大老の橫死を見、之に續きて高輪異人館の襲擊、坂本門外の變ありしより、天下始て亂を思ひ是より急轉直下の勢を以て幕府の滅亡を早めたるものにして、畢竟幕府を滅亡せしめたる其發端は江戶、水戶の兩德川が本支の關係を存しながら議論感情を殊にして一致すること能はず殆ど兩立し難き勢となりし萬延、文久の社會狀態に在りと斷ぜざるを得ず。崇德、後白河兩帝兄弟を以て國を爭ひ、賴通、賴長、同根を以て相殺さんとす。公家の內訌此の如くにして武人始て野心を生じたり。保元平治の世公家既に積弱の勢ありとも若し善く緝睦して他人の其際を窺ふを許さゞれば武人も頭を

擡ぐるに由なからん。此理は幕末も同樣なり。幕府既に天下を統治すべき實力を失ひ影法師同樣となりたれども流石に三百年に近き惰力あり、關東の地勢は雄大なり。江戸、水戸、本支を以て水魚の交りをなし、勳舊諸藩、其内に參列して將軍、副將軍に貳心なくば天下何人も容易に鼎の輕重を問ふ能はざらん。然るに關東の政治家、不幸にして此見易き道理を解せず、將軍儲貳の議を殊にして本支の兩德川に内訌を生じ其結果井伊の暴斷となり、水戸の復讐となり、攘夷論の煽動となり天下を亂麻の如くならしめて遂に幕府の滅亡を早めたりされば世に水戸人は黨派心强しとて水戸人を非難するものあれども、我等は黨派心の强きは獨り水戸に限りたることに非ず、關東總體の人氣和氣に乏しく、大體を捉へずして小見に拘はり、内輪喧嘩に勞れて一致の運動をなす能はず空しく西國男兒の功名を做すに任かせたりし愚劣の醜體を現はしたることを歎息せざること能はず。さりながら是は澁澤翁に直接關係なきことなれば此には說かず。此には唯だ幕府衰亡の源因は外交の困難に在らずして寧ろ江戸、水戸の内訌にあり此内訌に、依りて亂世の狀態を生じたるは萬延、文久の際にして其頃より天下の英雄豪傑始て幕府の威權を無視し、例の水戸學なども議論の時代より實行の時代に至りたるものなることを語れば足れり。翁なども安政の末、翁の年二十頃までは先づ以て田舍の豪家の旦那樣を其儘守りたる太平の民なりしものにて、若しも時勢がそれより進まねば翁も第幾代の澁澤市郎兵衛として血洗島に平和の一生を送りたることならん。翁自身の說に安政三年翁十七歲の時、親の名代となり同國岡部の安部攝津守陣屋に赴き、代官若林氏より五百兩の用金を申付けられし時、若林氏が翁を少年と侮り、倨傲輕慢の態度ありしを憤り、幕府の政治を宜しからずと感じ、

「百姓をして居れば、蟲螻蛄(むしけら)同樣の智惠分別もないものに輕蔑せられねばならず。百姓はやめたい」

と思ひ始て大志を發したりと云へり。さりながら其時代にも翁は家業を怠らず、藍の商賣も大抵自身にて引

受け年に四度づゝは信州、上州、秩父の三ヶ所を巡廻し家の爲になりたりと云へば未だ產を破て英雄豪傑の事業を爲さんとしたるに非ず。言はゞ時世を慷慨しながら猶ほ百姓の位置を守りたる有志家に過ぎざりしなり然るに萬延、文久に至りて時勢は遽かに險惡の徵候を呈し、今までは風にも、雨にも撼かず、動かざる大伽藍の如く見へたる幕府も根底より動搖し、攘夷の朝旨重く、幕府も其開國主義を守る能はずして表面だけは朝命に從ひ、關東に於ては水戶の壯士、進んで攘夷の先鋒たらんとし、西國に於ては長州既に外國船を砲擊したり。文字に書けば唯だ是だけなれども其時代に際會したる翁に取ては眼前に亂世の光景の展開したるものなれば、天下既に斯く亂れては先祖の家業も守り得べからず。財產も、家業も畢竟國家ありて、然る後に存在すべきものなり。國家の堤防破壞して世は洪水の亂世ともならば財產も、家業も此大洪水に一掃せられん。今は家に安居し居るべきに非ずとて始て身を殺して仁を成すと云ふ志士、仁人の跡を學び、若し幸運ならば名を揚げ功を建つべし。若し否運ならば陳勝、吳廣たるべしと決心し、田舍の若旦那、一變して天下を亂さんとする壯士と變じたるは是れ則ち時世の酒に醉ひたるものにして是非もなき次第なりと謂つべし。酒を飲めば無口の謙遜家も大言を吐き、頑固の老人も起て雨の夜を踊る。翁も亦時勢に醉ひて橫濱襲擊を計畫するに至れり。但し其時代に橫濱襲擊を企てたるものは獨り翁のみに非ず。水戶浪人も常に之を唱へ、長州の志士も之を企て、新徵組の巨魁淸川八郞も之を斷行せんとし、淸川の如きは其實行をすべき時日既に明日に迫りたる場合に暗殺されたり。されば橫濱襲擊は言はゞ其時代の輿論にして東國志士の心、早く橫濱の天に馳せて、其火攻に依りて異人館を燒き落とし惡むべき異人を思ふ儘に屠殺し得る光景を想像して何人も愉快に感せざるはなかりしならん。今日より考ふれば亂暴とも無法とも、名狀し難き野蠻の沙汰なれども、幕府既に攘夷の勅を奉じ、今にも戰爭を始めそうなる虛勢を示し、一旦井伊の爲に抑へられし水戶黨再び全盛の勢

を生じ、齊昭の二子慶篤、慶喜の兩卿、攘夷實行の爲に勅を奉じて江戸に下りたる上は攘夷論は既に主義に於て勝利を占めたるのみならず、國を擧けて其實行に從事すべき時機に迫りたるものなり。斯樣の場合に世間の志士が前後して横濱襲擊を計畫したること敢て怪しむに足らず。寧ろそう無くてはならぬ勢なりしと謂つべし。

(三) 横濱襲擊の價値如何

筆の序なれば横濱襲擊の價値に就て我等の思ふ所を述ぶべし。横濱襲擊異人館燒打にして若し實行せられたらば如何。日本現代の有力者は何れも直接、間接に水戸學の感化を受けたるものなれば史家の議論も未だ全然水戸學の範圍を脫する能はず、さる暴擧を敢てせんとしたる人々の心事を稱讚し、此時若し兵を横濱に加へて國民の憤を漏らすを得ば、是が爲に列强を敵とし、是が爲に大敗北を取るとも猶ほ天下の人心を覺醒するの效ありて幕府外交の因循怯懦なるに優ること萬々なるべしと言ひ、其行動を辯護するものあれども、我等は竊に然らずと思ふ。薩長の攘夷實行は當時の日本政府たりし幕府に於て始より平和論を支持し諸外國との葛藤も色々に取繕ひ、二藩の當局者に於ても一戰して直ちに攘夷の行はれ難きを知り早速止兵に及びたればこの大事に至らず、日本國の土地を割きて和を請ふ程の屈辱に至らざりしかども、若しも江戸と目鼻の間なる横濱が兵燹に罹り、關東忽ち亂國の姿を呈し、怯懦の幕府狼狽して爲す所を知らず、日本の外交全く中心を失ひ、天下憤兵、亂兵、暴兵の恣意縱横に任かするに至らば日本國は如何になるべきや我等は此光景を想像するだに寒心に堪へず、一勝一敗は兵家の常なり、敗北したりとて氣力を盛にするを得ば卑怯の平和に甘んずるに優れりとの說も一寸聞けば尤らしけれども、小敗して恢復の餘地あらば敗北は國民の元氣を盛んにすべき刺擊ともならん、大敗して降參の狀態に陷り、敵の言ふなりに條約を結ぶやうなる難境に陷りては敗軍は元氣を盛んにするどころの沙汰に非ず、敵國

の威を恐怖し國民の氣魄は全く消沈すべし、我等嘗て長州の故老に聞きしことあり、關ヶ原の戰爭にて徳川氏の爲に大打擊を加へられし長州人は其打擊を加へられし後の二百餘年間幕府に對して復仇の念などを起すべき光景に非ず、却て幕府を恐ろしきものに思ひ、只管其の機嫌を損せんことを恐れたりと云へり、氣力さへ慥かなれば敗北は元氣を刺擊するものなりと云ふは小敗ならば或は可なん。大敗に至りては則ち却て元氣を失ふ基たるべし。薩長二藩の攘夷實行は小敗にて濟みたれば却て元氣を皷舞したるやうなれども、其すら其利益は眼(まなこ)を世界の光景に開き、兵器と兵制を改良せねば以て外國と戰ひ難しと覺り得たる位のことにて敗北の結果はやはり二藩の人心に多少の惡影響を殘さゞるに非ず。たとへば我等は近世日本國の外交が白人崇拜の臆病に陷りたることを憤慨す。西洋と謂へば所詮日本の及ばぬものと思ひ、西洋人に對しては何事も抑目(ひかへめ)にし、正理公道と信ずることにても、相手が西洋人なれば正々堂々として抗論する能はざりしは薩長政府の習癖にして我等の竊に歎息したる所なり。近世の日本政府が斯樣に白人の諸國に對して軟弱の政策を取り只管其機嫌を損すまじと勤めたる其原因に溯れば畢竟、薩摩、長州の先輩が外國人と戰つて辛き目に逢ひたる其事が祟りを爲し其先輩の心に白人崇拜の僻見を刻み付けたる結果のみ。今日の日本外務省にすら時として猶ほ此病の殘り大國の度量と自信に乏しき風なきに非ず。彼等が薩長政府の相續者にして其習癖を繼承したるが爲のみ。小敗すら斯くの如し。況んや大敗に於てをや。横濱襲擊にして若し水戸の壯士の思ふが如く或は清川八郎の計畫したる如く、或は長州志士の爲さんと試みたるが如く、若くは翁の黨派の隱謀の如く成功して日本國が世界を敵として大敗北を取るやうにもならば我等は日本國の運命極危殆なりしと想像せざることを得ず、幸にして幕府が曲がりなりにも始終平和主義を取りて、關東諸藩に命じて壯士の横濱に出づべき道を遮斷し辛ふじて其事なからしめたればこそ日本國は今日あることを得たり。されば翁の横濱襲擊の計

畫は如何なる點より見るも天下後世に感謝せらるべき行動に非ず、翁、若し計畫の途中にて幕吏に捕へられ斬首の刑に逢ひたりとて其志は憐むべし、其無謀の行爲たるは辯護の餘地なしと謂つべし。此論或は史家に異論あるべし。翁の黨も亦不平ならん。されど我等は我が思ふ所を隱くす能はず。

(三) 横濱襲撃の中止

さりながら翁等の攘夷計畫は其の黨派の中心人物の一人たる尾高長七郎の異論に依りて消滅し、其同志者は解散したり。翁の自ら語る所は唯だ是だけなりと雖も史家より言へば此解散は亦是れ時勢の潮流を示すべき藥の一片にして、藝者の三味線に依りて踊り出したる醉客の、藝者の三味線止みたるが爲に自ら寂寞を感じて踊り止みたるものに外ならず。仔細は文久三年八月十八日までは京都も攘夷論全盛の時代なり。八月十八日に至て光景一變し、薩摩と會津は京都の全權となり、無謀の攘夷をなすべからずと云ふ穩和論は長州の極端論に入り代はれり。水戸學の蒸し起したる密雲は將に大雷雨を起さんとして忽ち破れ目を生じたり。江戸の幕府は保守黨の京都を獨占したるに依りて稍や威力と自信とを增したり。自身上方に居て時世の變化を目擊し、五條に於ける攘夷黨の失敗をさへ親しく其始終を詳にしたる尾高が是では幕府も容易に破壞し難し、攘夷も少數の浪人の蹶起だけにては行ひ難しと見込をつけ翁等に說くにその計畫の中止を以てしたるは當然にして惡く言へば今までの自信力を失ひたるものなれども善く言へば時勢に眼が開きたるものにて要するに世間の潮流の變化に連れて翁も亦泳ぎ方を易へたるものなり。たとへ翁自身並に翁の黨は自ら發意し、自ら計畫し、自ら中止し、萬事自身の自由判斷に依りて動きたるものなりと信じ、自身の經歷話にも左樣に話すとも史家より見れば正に明かに時勢の變化が翁等を變化せしめたるものなり。尤も斯くは言ふものゝ我等は是だけにては未だ翁等が横濱襲撃を中止したる理由を說明し得て完全なりと思ふ能はず。此外翁等

には無意識の潜在思想ありて其方向轉換を助けたるものなりと云ふ一辯を加ふるを以て翁等の位置を正しく解釋するものなりとすべし。翁等の中にて主盟者とも云ふべき尾高新五郎惇忠は此時既に三十を超え稍々分別の定まりたる年輩にして而も一家の主人なり。其弟の長七郎は二十六歳なり、劍客を以て四方に遊歷したれば稍や時世を解したり。翁は二十四歳、今ならばやうやう高等學校の學生として野球の試合に餘念なき程の年輩なれども早熟の才なれば必しも他人の說に雷同するのみの思慮なきものに非ず。翁等の性格は勿論多少馬車馬的なれども、さりとて翁等の聰明は火光に集まれる夏蟲のやうに無意義の死を取りて悔ひざるものに非ず。翁等も其世の溫和論者が西洋砲銃船艦の巨大鋭利にして容易に敵し難きを說き、宇內の形勢を語りて、西洋と戰はんとするにも先づ敵を知り、敵の謀を伐たざるべからず。それには通商航海を先にして日本國を世界の中心に推し出し、世界の形勢を見拔きたる上に始めて手を着けざるべからずと云ふを聞きて、たとひさる柔弱の議論は聞く耳を持たずと排斥したりとも、一度心に印記したる思想は猶ほ何處かに潜在せざるを得ず。たとへば道樂息子にきびしく意見をしたる親類の教誡は、其の息子が遊女に夢中になり居る當時は徒らに反抗心を高めるだけにて何等の効果を見ざるやうなれども、一旦打込まれたる心中の釘は何處かに殘り、他日に至りて飜然改悟すべき下地を作るが如し。翁等も天下の爲に幕府を亡ぼすべき陳勝吳廣たらんとはやり、其一方にのみ心の波の高まりし時は、反對論を愚論と聞き流し、親類緣者鄕黨の陰言をも何のへちまの皮と輕視したれども時勢一轉して自身の方向を換へざるを得ざる境界になつては心の底に潜みたる樣々の異論、抗論遽かに活動し急に自身の無謀なりしに驚き其圖を改めたることならん。是は何人にも普通なる心理作用にて我等は之を潜在思想の發顯と名づく。翁自ら橫濱襲擊を中止したる後の心事を語りて『事を發しやうと云ふ際にはたとへ八州取締などに嗅ぎ付けられて捕縛に向はるゝことがあつても、氣が勝

つて居るから八州の五人や七人は片端から斬殺して仕舞ふと云ふ勢ひだから些とも畏れなかつたが、其企てを止めることになると危險に思はれた」と云へり。斯く一人の身にて勇怯二人の如くなりしは今まで潜在したる思想が發顯し、自身の無謀を自身にて驚きたるが爲なり。

(四) 浪人の時代既に去る

斯くて横濱襲撃を中止したる翁は關東に居ては身の危きやうに感じたれば同姓喜作氏と共に父母に永訣し京都に行きたり。翁自身の語る所に依れば輦轂の下は志士の輻輳する所なれば、天下の英雄豪傑に會し幕府を破壞する好機會を發見するを得べしとの野心を懷きたるものなりと云ふ。さりながら翁等は關東にては多くの同志者を得、餓鬼大將となるを得たれども京都にては意外にも碌な友人を得ず、諸方を歴訪したれども心腹を開きて謀叛の計畫を共にすべき豪傑を發見し得ざりしが如し。昔し趙の廉頗は趙人の大將となりては赫々の功名を爲し得たれども、他國の大將となりては庸將の如く見へしと云へり。翁等も上方に行きては旅鴉なり。べい〱詞の東夷たる翁等が西國に出でゝ容易に友を得ざりしは勿論なり。其上翁等は江戸に出づる時、慶喜公の用人平岡圓四郎の家臣と云ふ名義にて幕吏の耳目を避け、着京の上は直ちに平岡を尋ね、其後も數々平岡を訪問したれば世間より見れば眞實の平岡の侍のやうにて浪人突合をするには自から世間を狹くしたる形なきに非ず。第一浪人の天下は文久三年八月の五條の亂同年十月の生野亂までなり。其前までは京都を動かしたるものも浪人にて、江戸を恐怖せしめたるものも浪人なり。さりながら其より後は依る處なく、率ゆる所なき痩浪人の境界にてはさすがに現狀打破の大功を擧げ難きことを立證したれば浪人にては天下に重きを爲す能はず、何藩の何某とて藩の威を肩にせねば幅も利かず、何事も爲し得ぬ世の中となりたり其證據には維新の後王政復古の勳功を以て朝賞を蒙り近世の貴人となりたる人々を見よ、何れも某藩に籍を、

置き、その藩論を經て、之を代表して立働きたる人々に非ずや。中には某藩を脫したる浪人にて甘き汁に有り付きたるものなきに非れども、其輩は大抵勤王の大藩に依り歸化人同樣になり、或は有志の公卿に付屬して其臣隷の如くになり、草に附き木に依りて、功名を爲したるものにて、坂本龍馬の海援隊さへ薩藩に附屬し、其附庸同樣となりて始て後光を加へたるに非ずや。されば純平として純なる浪人を以て事を做し得べき時代は文久三年を以て既に其末期に達したるものなり。斯かる場合に翁等が旅鴉の關東べいを以て獨り肘を張りたりとて誰か之を相手にすべきぞ。是に於て平翁等の境界は些か正月の過ぎたる後の萬歳らしき手持無沙汰の位置に落ちたり。剩さへ泣面に蜂とやらん云ふ譬の如く同志の尾高長七郎は不慮の事にて幕吏に捕はれ之に連りて翁等も幕府の御尋者となり明日にも首に繩のかゝりさうなる境界となりたり。翁等の窮厄此に至りて極まれりと謂つべし。是時に當りて翁等の爲に計るに晝伏、夜行して關東に還り一面には親友の前途を見屆け、一面には再擧の機會を待つの外あるべからず。さる場合に幕吏に見出さるゝこともあらば潔く切死にして上野の國、榛澤郡血洗島村に澁澤榮次郎、同姓某と云ふ兩人の倚擲黨ありきと天下後世に其名を殘さんのみ。若し又幸にして幕吏の網を脫するを得ば水戶の天狗の仲間入りをなし。太平山、筑波山、那珂湊諸所に戰ふを得たるならん。どちらにしても死後に誠忠の顯はれて四位五位の贈位に與るが關の山なり。それも迂濶の史官に逢はゞ楠音次郎同樣の草賊と見做されて『青草やつはものどもの夢の迹』其名は草管と共に朽ち果つべし。思うて此に至れば翁の父、晩香翁が翁と共に終夜翁の出所進退を論じ深く翁の前途を憂ひ其身を志士の群に投ずるを許さゞりしは流石に老功の先見ありと言はざるべからず。さりながら翁等の耳朶は厚し、翁は好運兒なり。平岡圓四郎は翁等を此窮境より救ひたり。翁等は平岡の薦を以て一橋家の家臣となりしことに依りて更に其生涯に新紀元を開くを得たり。是や誠に山重水複疑無路。柳暗花明又一村と形容

すべきものならん。

（一五）

中央公論記者足下。我等は一個の微なる史家の立場より澁澤翁の全生涯を論ぜんとして纔かに端緒を發したり。足下若し許さば次號を假りて更に稿を續くを得ん。

山路愛山氏の「近代史、現代史に於ける澁澤翁の位置」は今後二ケ月に亙つて本誌に連載せらるることに決したり。此旨豫め讀者諸君に謹告す（編者しるす）

別れたる我が愛兒等よ！僞らざる母の告白を聽け

中平文子

夜は靜かに更けてゆく。

浩、私はいまお前達に長い手紙を書かうとして居る。欄干からはかたぶく月が皎々と射して、美しい月光は室一面に流れて居る。私は今夜徹宵お前達に手紙を書かうと思つてゐる。やがて月が傾むきつくしたら、軒に釣した岐阜提灯のゆめのやうに朧ろなその火影で書かう、懷舊の念にうたゝむせび出る涙は、さやかな月光に冷たい雫となつて、さつきから心地宜く私の頰を濡らして居る。その涙を明るい燈で干かされるのは、今夜の私にとつて何よりも悲しい。

何處かで梟が寂しくほうと鳴いた。何といふしづかな物なつかしい晩だらう。お前達は四百里のあなたでいまどんな夢を結んで居るのか、私は月が羨ましい。

浩、お前は去年から學校へ通つて居るとか、お前の勉强振はおぢいさまから聞きました。お前達はちつとも知らないで居たろうがおぢいさまは去年の秋會社の用でそちらへ入らしつた。その折の手紙に、

「昨日の朝散歩かた〳〵子供の家の近所まで行つて見た。其邊は淸瀧といつて××では比較的閑靜な場所だ。片側町で往來の向ふを小さな川が流れて居る。然し危險ないやうな川ではない。朝早くてまだ門が閉つて居たから俺はそつと塀の隙きから覗いて見た。恰度浩が學校へ出掛ける前とみえて、鞄をかけたまゝ緣へ机を出して、「からすはかあ〳〵鳴いて居ます」と大きな聲

で復習をして居た。その傍に彌榮子と百合子が寐起らしく寐衣のまゝで、ぼんやり坐つて、兄が本を讀んで居るのを溫和しく聞いて居た、百合子は手のとれた裸人形を大切さうに抱へて、小さな姉の膝にもたれて居た。浩は相變らず痩せて居るが、東京に居た頃よりは色が黑くずつと丈夫さうになつて居る。彌榮子も百合子も見違へる程黑くなつてすつかり田舍つ子になつて了つた。浩は紺絣の筒袖を二人の妹は薄汚れたメリンスの袷を著て居た。朝は女中が忙がしいのか、髮も梳いて遣らないと見えて、二人共頭髮をぼう／＼とさせて寐衣の紐が解けかゝつて居た。母のない子は何處となく哀れなものだ。俺はじつと見て居るうちにつくづく可愛想になつて、とう／＼泣いた。明日の朝もう一度行つてみようと思つて居る。」

と書いてあつた。お前は幼い時から物覺えの好い兒だつたから、學校の成績も屹度善いに違ひ無いと、私は陰ながら安心して居る。

浩、この手紙には私がお前達に別れてから、種々心を狂はせて旅から旅をさすらひ歩いた半年の事が書いてある。いまさら愚痴事をお前達に聞かせるのは、愚痴に過ぎないかも知れないが、私はせめてさうでもして、この切ない母の心をお前達に知つて貰ひたい。私はお前達と別れてから、只の一日も心から樂いと思つて暮した日は無かつた。胸に痛手を深く／＼彫り刻まれた私は、その後世の波風に揉まれるまゝに追々と荒さんで行つて、お前達と一緒に暮した頃のような優しい暖かさは、もう私の心の何處にも求められなくなつて了つた。華かな影を追ふて、その日／＼をまぎらせてゆく私の胸裡には、絕へず呪はしいような淋しさがひそむで居た。その淋しさはやがて、再び得られないお前達の代りに何物かを求めて、其力に縋つてでも居なければ堪へられないような淋しさとなつた。不健全な思想を持つものは兎角誘惑に近寄られ易い。遂に私は種々な運命に翻弄せられた。其揚句、人を恨み世を呪ふ餘りに、筆のゆくまゝいろ／＼の事を書いて、いまは社會から毀譽褒貶の的となつて居る。夜深く獨り

座して靜かに五年の過去を憶ふと、私の頰には涙が潸然として流れる。あゝ、私は私一人ではなかつた。假令うき世の義理で公然子といつくしむ事は出來ずとも、私には失意の今も猶片時忘られぬお前達があつたのだ。私は可愛いお前達の爲にも、色々と心配して呉れる私の周圍の人達に對しても、何時までも斯うした不安な精神狀態を續けて居てはならなかつた。私はもう可い加減に目覺めなければならない。然し私は不安から逃れて果して何によつてこの荒んだ心を慰めて行つたら宜からう。現し世のものはいま何一つ私の心を歡こばせては呉れない、そう思ふと私は矢張つまらなく、淋しかつた。この切ない心を救つて呉れるものは何であろう？神か佛か。幾日も〳〵、夜となく日となく人知れず悶え盡くした私は、近頃しみ〴〵神が戀しくなつた。私はこれから私のすべてを捧げ盡して、一筋に神にすがろうと思ふ。私は三年前にも一度危い迷路を神の御手に救はれた事があつた。いま再び眞に目覺めた人となつて、信仰に生きる事が出來たら、それは私一人の歡びでなく、やがてお前達にも喜こんで貰へる事であらう。先き頃或る方も私に宗敎生活に入れと切に勸めて下すつた。女には是非宗敎がなくてはならぬと云ふ事を、私は今度熟々知つた。

浩、私は此の間から××敎會へ通つて居る。日曜每に神の前に跪いて先づ祈るのはお前達の健康と幸福とである。

お前達！何卒たつしやで幸福で居てお呉れ。母の願ひはいまそれより外に何も無い。

一

私がお前達と別れて××家を去つたのは、大正元年の十二月であつた。何故私がお前達を殘して××家を去ることになつたか、それはやがてお前達が大きくなつたら、いづれおとうさんがお前達によく解るように話して下さるだろうから、お前達はたゞそれを共通りに信じて居れば宜い。

愈別れる事に相談が定つてから、彌榮子だけを私の手許へ引取る事にした。恰度その頃はお前達三人の中

で彌榮子が一番可愛い盛りであつた。浩はこま鼠のように、はしつこくて、「おかあさんの馬鹿野郎だ」の「はるやのこん畜生。」だのと憎まれ口計りたつしやなので、おとうさんより外には餘り皆に可愛がられて居なかつた。百合子の方はまだ生れて幾月も經たない生きた人形だつたので、正直私には身にしみる程の可愛さもなかつた。彌榮子はやつと片言まじりに、あどけないことを云ふ頃で、氣性もおつとりした人なつつこい子であつたから、誰にでも可愛がれて居た。私は彌榮子だけは片時も手離なされない程に可愛がつた。おとうさんとの別れ話も、彌榮子を私に下さるようなら、とそれを條件に話をまとめたくらひ、私には彌榮子が月にも花にも代へられなかつた。けれどもこれはその頃の私のほんの一時の感情で、決して何時までもお前達を依古贔屓な可愛がりようをして居るのでは無いから、どうか惡く思はないで居てお呉れ。

　十二月二十日の晩、とう／＼荷物が實家へ送られて來た。何んにも知らない彌榮子はひとりで喜こんで、

「おかあちやん、孃ちやんとおかあちやんとのおべゞが來ましたよ、御門の處へ行つてみませう。」

と私の手を引いた。玄關へ出て見ると門の處に簞笥や長持鏡臺などを一杯に積んだ荷車が三臺引込まれて、成程後の車には彌榮子の衣服を入れた小簞笥や雛道具の大きな葛籠、玩具箱までが忘れずに積んであつた。るりちやんと名附けた大きなお禿人形が、紅い友禪の着物を着たまゝ荷物の一番上に露出しに載せられて、寒む風に凍えたように蒼白い顏を霜夜の月に照らされて居るのが、何となくいじらしかつた。彌榮子は直ぐにそれを見附けて、

「おかあちやん、るりちやんが寒むさうに震へて居ますよ、早く下ろして抱つこして遣りませう。」

と私にせがむだ。

　もうこれで永久に××家を離れて了ふのかと思つたら、私はいまさらのように名殘惜しさの涙が湧いて、覺えず彌榮子の手を固く／＼握りしめた。

二

別れた當座の私にはそれ程の深い悲しみも無かつた。何故ならば、可愛い彌榮子を傍に置いて居るのと、長い間絶えず加へられて居た思想上の壓迫から逃れたので、私はまるで、氷の下に閉ぢ籠められて居た湖水の魚が、俄かに洋々とした春の海へ泳ぎ出たような自由の歡びに、反つて陰欝な惱みが消えて、再び處女に歸つたような若々しい氣分に、前途にも新らしく希望を持つようになつたからである。

私の結婚は徹頭徹尾失敗の結婚であつた。私の性格は人の妻となるに適して居なかつた。私は再び失敗の愚を繰り返して、兩親に心配を掛けるより、自分に適した職業を求めて、それを一生の計に、彌榮子と二人で心靜かに暮して行かうと考へた。まだお前達と一緒に暮して居る時分新らしくミシンを買つたので、お前達の平生服や前掛を縫ふ稽古に、暫く京橋の△△△といふ洋服屋へ、毎日お辨當持ちで通つた事があつた。其店の女主人は佛蘭西の裁縫學校を卒業して歸つた人で、京橋際に可成大きな洋服店を出して、女店員なども四五人使つて居た。飾窓にいつも佛蘭西式の上品な子供服や前掛、帽子などが、氣の利いた好みに飾附けてあるのでつい眼を牽かれて、通る度に足を止めて居るうちに、店に座つて居る女主人と心安くなつて、とう〳〵敎へて貰ひに行く約束をした。私は普通の裁縫は不得手なので餘り好かなかつたが、ミシンには可成興味を持つて、殊に其店へ通ふようになつてからは、女主人の男まさりな商ひ振りを、折々羨やましく思つた事もあつた。そんな動機からふと、洋服屋になろうかと思ひ附いた。早速訪ねてそれとなく相談してみると、女主人はいろ〳〵自分の經驗などを話して、あなたも本職になさるのなら、何うしても佛蘭西の學校へ行つて入らつしやらなくては駄目ですよ。あちらで充分腕を鍛へて日本へ歸つてからは新らしく取よせた見本を見ただけで、もう直ぐに其形がずん〳〵應用されるようでなくては、とても此職業は發展しません。なに、あちらへ入らつしやるのは旅費だけあれば、學資などは先行へ行つてから何うにでもなりますよ。私なん

ぞ十四の歳に叔父に連れられて米國へ行つて、それから彼方此方を渡つて歩いた揚句佛蘭西の裁縫學校へ入學つたのですけれど、其時分にはもうお金がすつかり無くなつて了つたので、私は鞄の底に殘つて居た日本の繪葉書と、自分で刺繍した絹手巾が二三十枚あつたのとを持つて、或晩賑やかな町へ辻賣りに出ましたの。其市は巴里から四五十里も隔つた場所だつたので、日本婦人を珍らしがつて繪葉書も手巾も羽がはえて飛ぶように、一晩で賣り切れてしまひました。私はそれを資本に絹を仕入れて勉强の暇に刺繍をしては、夜劇場などへ賣りに行きました。其利益で學資は充分に足りて。時々は故郷の母へ送金した事もあつたくらゐです。ですから入らつしやりさへすれば學資は何うにでもなりますよ。語學などもこちらで心配なさる程の事はありません。行けば直きに覺はります。」

と頻りに私に佛蘭西行きを勸めた。

三

洋行歸りの女裁縫師、それは職業熱に浮かされた私の心を忽ちときめかせた。私は早速佛蘭西行きに血を湧かせて、歸ると直ぐにお父樣――お前達のおぢいさま――に相談してみた。おぢいさまも、

「それは可いかも知れない、見込みがあれば旅費や少少の學資ぐらひは都合して遣るが、然し遠い海外へ行くのだから充分に研究した上でないと、行つてから失望するような事があつてはならない。麻布のA畫伯は佛蘭西に長く居られたさうだから、一度行つてあちらの女裁縫師の事を能く尋ねて見たら可いだらう。」

と仰しやつた、私は心せくまゝに早速その翌晩、A先生を訪れた。A先生は洋畫家の泰斗で、佛蘭西仕込みの洒落なそして皮肉の巧い氣焔家であつた。私は折折行く度に畫室でいつも先生に油を絞られた。先生は私の佛蘭西行きの志望を聞いて、

「裁縫學校へはいりに佛蘭西へ行くんですつて、色々な事を思ひ附きましたね。然し佛蘭西行きは考へものですよ。しつかりした保護者でもあつてなら可いが、單身行つて苦學しようなど丶云ふのは危險千萬です。

あちらは非常に誘惑の多いところで、殊に女裁縫師などには賣笑婦同然なのが多いから、其中に混れば自然墮落せずには居られません。苦學するつたつて女が他の事でなか〳〵さう金が儲かるものですか、態々佛蘭西へ墮落しに行くくらゐなら、東京で女優にでもなつた方が餘程氣が利いて居ますぜ。一體あなたのやうな性格の人は女優になると可いんだ。どうです一つ、帝劇へでもお世話しませうか。ハヽヽ。まあ〳〵そんな空想の夢はお覺ましなさい。」

直ちに一笑に附せられて了つた。

其他の方面で色々問ひ合せてみても、佛蘭西行きは何うも思はしくなかつた。私はがつかりして又毎日ぼんやり考へ込んで了つた。押し詰つて家の人達がお歳暮の贈答や煤掃き餅搗きなどに忙がし相にして居るのを見ても、手傳ふ氣にもならず、ひとり室に閉ぢ籠つて物案じ計りして居た。大晦日の晩彌榮子が羽子板を買ひに連れて行つて呉れと云つて聞かないので、近所の賑かな町まで行つた序に、絵草紙屋で新年號の婦人雜誌を一冊買つて歸つた。炬燵で彌榮子を寢かしつけながら、私は何の氣なしに其雜誌の頁を繰つて見ると、卷頭に「女優號」とあつて、口繪の寫眞には須磨子のオフヰリヤ、浦路の王妃、帝劇の律子や浪子、かく子などの歌舞伎姿、其他名の知られて居る女優の舞臺顔や肖像が賑かに並べてあつた。內の記事も悉く女優生活を解剖して書いたもので、帝劇の內幕、其他女優を中心とした劇壇の裏面、殊に文藝協會の事は最も委しく書いてあつた。「どこまでも藝術本意の協會の主義」。「坪內博士の熱心な指導」。「須磨子さんの稽古振り」などには文藝協會の面目が能く窺はれた。終りの頁の、「婦人の職業としての女優。」といふ中には、現代の女優の收入や、其日常の生活の模樣などが明細に示されてあつた。

さらぬだに女優の二字は感傷的な若い女の心をそゝる。況して文藝の趣味に生きやうとする思想に、五年の間絶えず壓迫を加へられて來た私には、如何に此記事が强い刺戟を與へたらう。

「いつそ女優にならうかしら。」私はふと左樣思つた。それは刹那の叫びであつたが、決して瞬間に始めて浮んだ考へではなかつた。長い間胸の底に深く〳〵秘められて居た小琴の絲が何かに觸れて俄かに高鳴りをはじめたやうに私の胸は震動いた。

「あゝ、私は何故いまゝで好きな道へ進まうとしなかつたか、世間の思惑に氣を兼ねて、自分の心を僞つてまで、趣味のない職業を選ぶ程臆病でなくとも、私にはいま自由の天地が開かれて居る。彌榮子と二人暮してさへ行かれれば假令どんな職業を選ぼうと誰にも遠慮する必要はない。」

私は急に大膽になつた。そして漸く、長い間求めて居たあるものが始めて得られたやうに晴々として、一陽來復の春を迎へる氣分になつた。恰度その折淚多かつた大正元年の終りを告げる除夜の鐘が、遠近ちにひびきそめた。

四

一月四日の朝、私は青山の友達の家へ年始に行くと云つて宅を出た。そして新橋から國府津行きの汽車に乘つて熱海へと志ざした。その前夜、大久保に松井須磨子さんを訪れた時、

「協會へおはいりになるのなら、坪内先生に直接にお頼みになるのが一番可いわ。協會の事は何んでも先生のお許しが出なくつちや駄目なの。先生はいま奥樣と御一緒に熱海の御別莊へ行つてらつしやるから、なんならあなた熱海へ行つて入らしたらどう。奥樣も親切な方だから、また先生によく取なして下さるわ。いま協會ぢや娘役の女優を欲しがつて居るから、あなたなら屹度可いでせうよ。でもねえ、協會も外から見るやうでなくて、内裏はなか〳〵面倒ですから、それはあなた覺悟して居らつしやらないとね。とにかくお入りになつたら仲宜くしませうね。」

須磨子さんのほゝえみは何故か淋しかつた。

そんな言葉を心に繰り返しながら、熱海へと急ぐ私は、汽車の窓に四分の不安と六分の望とを繫いだ。

國府津から熱海へは私が豫想して居た道程よりもず

つと遠かつた。遲くも晩には歸る積りで出掛けたのに日が暮れてしまつた、玩具箱を大きくしたような輕鐵は怪し氣な汽笛の音をたてながら、伊豆の山路を覺束なく走つて居た。熱海へ着いた折にはもう夜も更けて、湯の町は人足もまばらに、三階建ての湯の宿の欄干から洩れて來る、三味の音のさんざめきが云ひ知れぬ哀愁をそゝつた。坪内先生の御別莊は小流に添つた門構への瀟洒な家であつた。取次ぎに出た女中に、

「東京から――」

と云つたので奧樣が驚いて玄關へ出て來られて、

「こんなに遲くによくおひとりで。」

と直ぐに居室へみちびいて下すつた。壁も襖もまだ新らしいお室に、花笠の電燈が靜かな夜をあか／＼と輝して居た。私は早速、はる／＼訪れた願を話して、

「猶これに種々書き附けて參りましたから。」

と帛紗包の封書を取り出して奧樣の前に置いた。奧樣は輪廓の正しい中だかなお顏を少しかしげて、私の話を熱心に聞いて下すつた。

「まあ左樣でしたか、協會へはね、是迄も入會たいからと熱心に云つて入らつしやる方が澤山にあるのですけれど、何分主人が嚴格家なもんですから、それに協會は他と違つて眞個に藝術の研究が目的なので、規則や何かも面倒ですし、お稽古も一通りでなく骨が折れるもので、大抵の方はおはいりになつても辛棒が仕切れないで、一月か二月でお止しになるのが多いのですよ。それに女の方はいろ／＼面倒な事情が起つたりするものですから、そんなこんなで主人も近頃は懲りて成る可くお斷りしてゐるようです。それに主人は何んでも自分で恁うと思はなければ、誰が何んと云つたつて決して肯かないと云ふ風ですから、時によると人樣へ隨分お氣の毒なような場合もありましてね。」

と奧樣は語られ乍ら、

「兎に角、折角入らしたのですから、主人に一應話してみませう。暫くお待ちになつて居て下さい。」

やがて封書を手にして室を出て行かれた。暫くすると襖の陰からにこやかに、

「あのね、主人に話してあのお手紙を見せましたら、兎も角も一應會つて見ようと云ひますから、私と一緒に入らつしやい。」

と、直ぐに二階へみちびいて下すつた。

五

私淑する人の前に出て、私は宛ら物怖ぢした小犬のように首垂れた。先生は電燈を低く垂れた紫檀の机の前に、大島絣の小袖を召して、低く結んだしごきに兩手を挾んだまゝ眼鏡越しに凝乎と私を御覧になつた。

「あなたは如何いふ期待を持つて劇に關係つて見ようと思ふのです。現在の劇界の革新といふような事に就いて何か意見を持つて居りますか。」

嚴然と訊ねられて私は鳥渡答へられなかつた。先生は決して無意義に協會へ入る事をお許しにならないのであつた。私はやがて覺束ない調子で、

「革新とか期待とかいふ事に就いては別に意見も持ちませんが、只私の性格が藝術に適して居るように自分で考へられましたから。」

といふような事を云つた。

「左様ですか、宜ろしい。」

先生は應揚にお首肯になつて、

「兎も角試験をして見る事にしませう。」

恰度傍にあつた演藝畫報をとつて脚本のところを開けて私の前へ置きながら、

「何うでも構はないから是れをあなたの思ふように成可く大きな聲で讀んで御覧なさい。」

私は急にどぎまぎして、顔を赤くしながら頭から棒讀みにした。

「聲量は少ないようだが、發音は綺麗だ。」

朗讀が終ると先生は斯う評された。次には柱の脇に立たせて、

「脊は高くないね、松井より低い。」

お傍の奥様に恁う仰しやつた。

「いや宜ろしい。」

私が座に着くと、改めて先生は、

「藝術に依つて劇壇に起たうとする者は、傍からの想

像以上困難が多く、非常な若心と努力とが要ります。ですから始めは熱心に志した人でも兎角中途で頓挫し易く、厭氣になつたり又は誘惑に逢つて墮落したりして了ふ者が多い。あなたも此點は始めから餘程深い覺悟を定めてかからないと不可ません。それに劇壇に立つ爲の修行は他の事とは全然方面を異にして居るから、中途で止したらそれこそ何んにもならない事になります。だから娛樂や慰半分にしようといふのならお止しなさい。もし眞面目に熱心に劇を研究してみようといふ覺悟があるなら、遣つて御覽なさい。私はまだあなたを女優として適任者と認める事も出來ないが。左樣かと云つて資格が無いとも見倣なさい、凡てはあなたの努力と熱心にある事だから、猶よく熟考して御覽なさい。」

これだけを仰有つて、兩親の承諾さへ得れば、兎に角協會へ通つて來ても差支へないと許可て下すつた。

　私の望みは斯くして遂に叶へられた。

その夜は先生御夫婦の御好意で、私は別荘の一室に早や華かな未來を夢みた。

六

　翌日熱海から歸ると、私は直ぐに兩親の前へ出て、

「私文藝協會へ入ろうと思ひます。」

と云つたら、おぢいさまは忽ち火のように怒つて、

「何に苦しんで女優風情に成り下がろうといふんだ。お前は子供等の將來を考へないのか、親の名譽を何うする。」

と一言のもとに退けてお了ひになつた。氣の弱いおばあさまはもうおろ〳〵聲になつて、お前がいまそんな事をして呉れては、私たちまでが世間に合す顏がない。何卒それだけは思ひ留まつてお呉れ、と泣くように仰しやつた。

「おかあさん、私決して一時の浮いた心で成ろうといふのではありません。」

と私は協會の主義などをいろ〳〵話して、是非にと云ひ張つた。舊い道德に新らしい思想が容易く容れられさうな筈はない。おぢいさまはどこまでも頑として許

しては下さらない。おばあさまは涙で私を思ひ留まらせようとなすつた。私は再び失望の淵に沈んで、一室へ閉ぢ籠つたきり、二三月は三度のご飯も喰べなかつた。しまひにはおばあさまが見兼ねて、いろ〳〵執成して下すつた。おぢいさまも到底私の決心を翻す事は出來ないと考へて、それでは兎に角一度坪内先生にお目に掛つてみようと仰有つた。

おぢいさまは先生に會つて、始めてその高潔な人格と眞面目な藝術的態度に動かされて、遂に私の願ひを許して下すつた。私の歡喜はどれほどであつたらう！

「長い間あこがれて居た藝術的生活にやうやく入る事が出來た。是れからは熱心に眞劍に奮勵しなければならない。」

その時は心から眞面目にさう考へたのであつたが、いまとなつて冷靜に振返つてみれば、それも猶且一時の熱に浮かされた、虚榮の夢に過ぎなかつた。況して母なき淋しさに泣くお前達の上を忘れて、山姥の舞の手振りや、百萬の謠の稽古、思へば愧かしさの限りである。

文藝協會の生徒であつた幾月の私の熱心は、いま考へれば狂氣の沙汰であつた。さすがに近所の思惑を兼ねて、未明に起きては風呂場に籠つて科白や朗讀の練習をした。朝霜の消えぬうちにもう舞扇を袖に忍ばせて、藤間へお稽古に通つた。午後からは協會へ出掛けて歸るのはいつも日が暮れてからであつた。夜はまた翌日の稽古の下調べなどに、ゆつくり頭腦をやすめる暇もなくて、お前達の事さへ忘れるともなく忘れて居た。その頃の私には藝術より外に何物もなかつたのであつた。然しそのあこがれの夢はやがて果敢なくも破られて了つた。二月とたち三月と經ち――あゝ、私は多くを語るまい。金魚は見る魚であつて喰べる魚ではなかつた。そう思ひ知つた時私は失望のうちに始めてほんとうの自分を幾分見出したような氣がした。坪内先生は私が協會へ入る時、おぢいさまに、

「あなたの娘さんは、正直すぎる處があつて不可ないようです。」

と仰しやつた。にごり江を美しく婉曲に泳いでゆかねばならぬ金魚としては、私の尾鰭は餘りに短かすぎた。

七

彌榮子、私はこれから先きを特にお前に宛てた手紙に書く。

大正二年三月二十五日といふ日は、私とお前にとつて何といふ恨みの多い日であつたらう。お前はその日に濱町の小父さまに連れられて、私の手から永久におとうさまの許へ歸つて了つた。長き恨み！盡きぬ淚！私はとこしへにその日を呪はしく思ふ。

お前が三歳の夏である。或夜の明け方お前はふと酷い熱に襲はれて苦しさうにうめき出した。私は驚いてすぐにお前を抱へて俥で醫者へ駈け附けた。まだ夜の明け方であつたので、通りすがりの家は皆扉を閉めてやすらかな曉の夢を結んで、街燈がねむさうに立つて居る夜明けの町は寂として薄い朝霧がこめて居た。お前は紅い羽蒲團に柔かく包まれて、すや〳〵と眠つて居た。ひいやりとした曉の微風が、熱にしつとりとした額をそよ〳〵と絶えず撫でゝゆく心地よさに、上氣したばら色のお前の頰には、かすかな笑が浮んで居た。何といふ淸らかな可愛い寐顔だらう、さう思つた刹那、私の腦裡を不安な影が通り魔のやうにかすめた。

「もし何かの事で子供達と別れなければならない時が來たら、私は何うしやう。そして此子の病氣が死ぬ程の大病であつたら……。」

さう考へて私は思はずお前を強く抱き〆た。其瞬間、

「あゝ、私も嘗て一度は恁うした切ない母の慈愛にはぐくまれて來たのであつた。」

とふと思ひ及んで、私は覺えず熱い淚がほろ〳〵とこぼれた。その私があの折よくお前を云はれるまゝに手離す氣になつたと、今考へても私は實に不思議でならない。

三月の中旬、些細な事からお前のおとうさんとおぢいさまとの間に感情の行違ひが出來て、おぢいさまは腹立まぎれにお前を返すと仰しやつた。お前のおとうさんも男の意地で、

「そんなら返して下さい、女親に附けて置いては行末が不安心ですから。」

と双方で角だつた言を云合つたので、だん〱話が面倒になつて、とう〱仲に人が這入つて何とか仕末を附ける事になつた。或る晩協會から夕暮に歸つて來ると、おぢいさまが私を呼んで、

「××が彌榮子を返せと云つて來て居るが、それに就いてお前の考へを能く聞いて置きたいと思ふ。お前がどうしても聞かないから、兎に角許して置いてあるものゝ、俺もお母さんもお前が女優になるといふ事はいまだに賛成しては居ない。いまの日本の女優が藝だけで身をたてようといふのは覺束ない事だ。それをお前は子供を抱へて遣らうといふのだから隨分無理な話しだろうと思ふ。いまの中に思ひ切つて止めにしてはどうだ。もし何うしても止められないようなら、子供はいつそ××へ歸して了つて方が、お前のためにも子供の爲めにも結句可いかも知れない。お前も三人の中の二人を思ひ切つたくらゐなら、一人だけが特別に手離せないといふ譯はなかろう。お前は女だ。俺の眼の黑いうちは可いが萬一の場合を思つたら、感情ばかりで物事を處理せずに、よく子供の將來の事も考へて見なければ不可ない。」

何時にない沈痛な調子で仰しやつた。おばさまも傍で默然と聞いて居らした。

八

私はいまさら協會を止める氣にはなれなかつた。さうかと云つてお前を手離す事は猶々出來ない。毎日ぼんやりと物案じしながら私は協會へ通つて居た。或日、(其事はいまから思へば人の中傷であつたかも知らないが)。おぢいさまの處へ來た人が、

「××さんは、斯ういふ事を云つて入らつしやるさうです。」

とお前のおとうさんの云はれた事を話した。それを聞いておぢいさまは大變にお怒りになつて、

「そんな事を先方で云つて居るようなら、早速明日でも濱町の小杉に話して彌榮子を返して了へ。」

と仰しやつた。日頃は穏かなおばあさまも其時ばかりは腹を立てゝ、
「彌榮子は可愛想だけれど、でもあんまりだからねえ。」
と私に相談なすつた。私も一時にかつとして、
「そんな事を云つて居るようなら、口惜しいからいつそ返して遣りませうよ、子供なんか私もう無くつたつて可い。」
私は泣き〱さう云つた。
お前はとう〱その翌日おとうさまの處へ返される事になつて了つた。
お前と別れた日の事を私はとても委しく書き綴る勇氣はない。その日は朝から私は自暴になつて、ふらりと家を飛出して了つた。そして協會へもお稽古へも何處へも寄らずに、只ぐる〱街を電車に乗つて廻つて、五時頃にぼんやり歸つて來た。臺所口の障子を開けて見ると、土間に何時も行儀惡く脱ぎ捨てゝある、蠶豆のようなお前の下駄が無くなつて居る。私の胸はどきりとした。お茶の室へ上つて見ると、おばあさまは長火鉢の前に氣抜けのした人のように獨りしよんぼり座つて入らした。私の顔を見るといきなり、
「文さん、彌榮子はとう〱歸つたよ、先刻濱町の小杉さんに連れられて。」
と云ひ乍らはら〱とお泣きになつた。私は充分覺悟して歸つて來た積りであつたが、それを聞くと堪らなく悲しくなつた。何時もなら一番に飛び出して來て、
「おかあちやんお歸り。」
と嬉しそうに縋り附いて呉れるお前の姿がもう何處にも見られないのだもの。おばあさまは涙を拭き〱、
「お前は宅に居なくて反つて宜かつた。私はほんとに可愛想な思ひをさせられた。」
とお前が小父様に連れられて歸つて行く時の様子をお話しになつた。
「私が、彌榮ちやん、お前は今日からおとうさんのお宅へ行くのですよ。と云つて聞かせたら、「おばあちやん孃ちやんの兄ちやんとこですか、いゝおべゝ著て、

お土産持つて、ちりん／＼鳴るお鈴のかんこ履いてですか。」と嬉しそうに云つて、兄ちやん／＼と大騒ぎして居たよ。あんなに酷められても矢張兄妹はどこか可いものとみえるねえ。兄ちやんへお土産の菓子箱を大切そうに抱へて、「おばあちやんさよーなら、一寸行つて參ります。」と大人みたいなことを云つて上機嫌で小杉さんに抱かれて俥に乘つた時、私はほんとに可愛相で何うしようかと思つたよ。今夜は乾度お前や私を戀しがつて、泣くだろう。」

おばさまはまたお顔へ袖を當ててお了ひになつた。淋しく暮れてゆく室に、二人は何時までも言葉なく悄然と啜り泣いた。

九

その夜、お前をおとうさんの處へ送り屆けて下すつた小杉の小父さまは、意外な報を齎らせてお歸りになつた。それはお前のおとうさんが俄に九州の××へ轉任なさるといふ事である。おばあさまと私とは驚きに胸を突かれた。あゝお前は母を殘して遂に四百里の異郷へ旅立つてゆくのであつた。さうと知つたら私はお前を返すのでは無かつた。一時の腹立ちにふと返す氣になつたものゝ、また直ぐにも連れて歸れるような積りで居たのに、四百里のあなたへ行つて了つてはいつ再び逢ふ日が來よう。私は涙が止め度なく湧いておばあさまの膝にすがつたまゝ、子供のように聲たてて泣いた。あゝ其夜の淋しさ！ある時のありのすさびに引かへて、なくての後の戀しさはなか／＼に身も世もあられぬ思ひであつた。お前と離れてこれから先き私は何を樂しみに生きて行かう。藝術よりも何よりも私にとつて一番尊といものはやつぱりお前であつた。お前なしに私は片時も居られない。明日はどんなにしてでももう一度お前を取り返して來て貰はう。私は狂氣した人のやうに居たり起つたり、夜もすがらまんじりともしなかつた。いまはかたみのお前の枕に、人形のるりちやんを抱いて來て、そつと寐かせて見ても、いのち無きかなしさに朱唇はほころびようともせず、頰の靨は冷たかつた。

一度籠から逃した小鳥は、再び籠へは歸しにくい。こちらから返したお前をまた直ぐ戻せとは、意地にも云へた義理ではない。翌朝少し氣が落附いた時恁う考へて、私は暗然とした。それにしてもお前との別れは餘りあつけなかつた。一生の別れなら別れのやうに、厭く程抱きしめても遣りたかつた。解らないまでも云つて聞かせて置きたい事もあつたと、おばあさまと二人で云つては泣いた。四月二日の晩、飯野の小母さまから、お前達は四日の朝××へ出發てゆくと報らせて寄こして下すつた。私は其端書を見ると堪らなくなつて下澁谷の飯野さんの家へ夢心地に走つて行つた。小母さまの顏を見るといきなり、

「奥さん、どうか一生のお願ひですから、私を一度子供達に逢せて下さい。今別れたらもう何時逢へるか解らないのですから、私はせめて一目逢つて置きたいと思ひます。」

と其手に縋つた。小母さまも涙ぐんで、それでは今夜恰度三田の東洋軒で△△さんの柔道部の送別會があつて、主人も行つて居ますから、行つて賴んでみませうと直ぐに私を連れて出掛けて下すつた。飯野さんはお前のおとうさんの柔道の先生で、平常から心安くして居て、殊に私達が別れる時にも色々心配して下すつた方だから、お前のおとうさんも多分聞いて下さるに違ひないと、私は急に元氣附いて小母さまと一緒に門へ出た。櫻おぼろの晩である。空には薄絹に包まれたような月がほんのり照つて、どこかで哀れな笛の音がする。高くゆく雁の一連、あすは誰がうへと思はず首垂れて、かき合す袖に彼岸櫻がほろ〳〵と散つた。

十

その夜の願ひは甲斐なくも聞かれなかつた。一度斷つた恩愛のきづなを再び繋ぐのはお互ひに悲しみを增すばかりであると、お前のおとうさんは道理ある言葉で退けて了はれた。四月四日、お前達はとう〳〵遙かな西國の果てへ旅立つて行つた。もしやとの私の賴みも遂にあだとなつた。いたいけなお前の姿はもう都の何處にも見られない。淋しい、淋しい、身も世もあら

れないやうに淋しい。私は何をしてみても手に附かなくなつて了つた。薄暗い室の片隅にしよんぼり座つてさめ〴〵と泣く時、それが私のせめてもの心遣りであつた。夕暮、散る櫻の樹蔭にうつとり佇んで居ると白い前掛をかけたお前の姿がつい眼の前に現はれる、思はず、彌榮ちやん！と呼んで抱き寄せようとすると、幻影は儚なくぱつと消えてしまふ。あゝ、此懐に介然たる思を何によつて慰さめやう！私は只終日終夜泣くより外にすべはなかつた。そして日に〳〵糸のやうに痩せて行つた。おばあさまは私の身體を氣遣つて、御自分でも痩せる程にいろ〳〵と心配して下すつた。私にはまたそれが何よりも辛かつた。恁うした日を幾日となく續けて居たら、私はやがて死んでゆくのであろう。さう思つて私はさびしくほゝえんだ。

春雨の降る日である。朝から小雨の小止みなく降りづゞいた日である。おばあさまは午後から買物に入らしたので、私はひとり縁の柱にもたれて、細く降る雨の糸をぼんやり見詰めて居た。そのうちにふとお前達が遣瀬なく戀しくなつた。何うせ恁うして居て死んでゆく位なら、何うかしてもう一度お前達に逢つて死にたい。いつそ××へ行かうかしら、行けば何うにかならない事はあるまい。恁うして居たつて矢張皆に心配を掛ける計りなんだから、居なくなつて了つた方が宅でも反つてせい〳〵して可いかも知れない。私はふらふらと其氣になつた。恰度おばあさまが留守なので、急いで支度をして、持ち合せた自分のお金を懐に、女中には一寸親戚へ行くと云ひ置いて、とう〳〵家を出た。雨はしと〳〵と降つて居る。今日出ては又いつ歸る旅かと思へば、見馴れた門の柳にも流石に名殘が惜しまれた。

新橋を三時何十分かの下の關急行に乗込んで汽車が東京を離れると、私は漸く少しほつとした。その折の私の頭腦は餘程亂れて居た。

××へ行くとばかり、ほんの短かい置手紙を殘しただけで宅を出て、あとで兩親に何れ程心配を掛けるだらうといふ事や、衰弱し盡した身體で、幾日の旅がつ

づくだらうと云ふ事などは何んにも考へず、たゞお前達の居る土地へ行かれるといふのが私には何よりも嬉しかつた。このまゝ旅で死んで了つても、お前達に一目逢つてからなら何んの心殘りがあらう。さう思つて私はもう涙もなかつた。

十一

汽車が下の關へ着いたのは夜がしら〳〵明けそめた頃であつた。まだ深い眠りからさめないやうながらんとした停車場に、煤煙にまみれた私の身體が運び出された時、私はいよ〳〵お前達の住む土地に近附いたと歡びに胸を躍らせた。私は一睡もしなかつた汽車の窓で色々と考へて來た。××へ行つて何ういふ風にしてお前達に逢つたら宜からう。まさか如何に戀こがれたからと云つて、お前達の家へ直接に訪ねて行くわけには行かない。何うしても誰か人の力を借りなければならない。誰に頼んだら可いだらう。あれこれと物色してみても、相憎××にはこれといふ程の知己は一軒もなかつた。ふと博多から數里奧にNさんの家がある事を思ひ出した。Nさんのおとうさんは九州でも屈指の炭鑛家であつた。Nさんは其秘藏息子で暫く東京の△△大學へ來て居た。Nさんのお母さんはもと新橋の藝者であつた。其妹のお千代さんは實業家のKさんのお妾であつた。お前のおとうさんは其Kさんに頼まれて、暫くNさんの保證人になつて居られたので、そんな關係からおとうさんも私もお千代さんとは心安く交際つて居た。そのお千代さんのお母さんがお前達が××へ出發つた時一緒の汽車でNさんの家へ行かれたといふ事を、私は飯野の小母さまから聞いて居た。何より好い使手と私はNさんのおばあさんを使つてゆく事にした。

小倉から技線の汚ない汽車に乘つて、幾度も〳〵乘り替へをして、Nさんの家のある荒瀬村へ着いたのは午後の三時頃であつた。それから俥で二十町程行つて漸くNさんの家へ着いた。二瀬川の流れに添つたNさんの家は、古い大庄屋の家のように廣くがらんとして居た。折角はる〳〵訪ねて行つたのに、お千代さんのお母さんはNさんが病氣で福岡病院に入院して居るの

で、博多の別荘の方へ行つて居て留守であつた。
「もうこれからでは遅くなりませうから今夜はこちらでお泊りになつて、明日の朝博多へ入らしたら可いでせう。」
とNさんには義理のお母さんに當る本妻さんが親切に云つて下すつたので、その夜は本宅に泊る事にした。河添ひの靜かな離れで、Nさんの妹のきよ子さんと一緒に仲よく寢た。床の間に硝子の箱にはいつた大きなお禿の人形が飾つてあつた。私はお前のかたみのるりちやんの事を思ひ出して一晩中淋しかつた。
翌日の午後、私は又汚ない汽車に乘つて博多へ出掛けて行つた。汽車の止まる驛毎に石炭を山のように積んだ貨車が幾輛も並んで居た。博多へ着くと直ぐ△△町のNさんの別莊を訪れた。お千代さんのお母さんは愁いたやうな顔をして、
「まあ、何うなすつたのです。」
と云つたが、それが如何にも冷やかであつた。そして凡てが以前とは打て變つたよそ〳〵しさで、
「私が××さんと一緒の汽車でこちらへ來たなんて、そんな事は嘘ですよ。私共では私も娘もあなたがお歸りになつてからは、××さんとは餘りおちかしくして居ませんの。こちらへ來てからもつい忙がしいのでまだ一度も××の方へは參りませんの。」
と白々しい挨拶、私が涙ながらの頼みにも、
「何分ねえ、左樣いふ風ですから、私からお話しするといふ譯にはゆきません。××さんだつてあなた男ですもの、いまさらあなたにお子さん達を逢はせるなんて、そんな未練がましい事はなさりはしますまいよ。」
と剣もほろろの情なさなので、私は取附く島もなかつた。
頼みがたない人心と私はつく〴〵情けなかつた。夕暮暇を告げてその別莊を出た時、私の顔は土のように蒼ざめて居た。私はお千代さんのお母さんから思ひがけない事を聞いた。お千代さんのお母さんは別れ際に、
「何んでもねえ、この間××へ××さんを訪ねて行つた人の話に、彌榮子さんは大阪の叔母さんの家へ貰は

て入らしたとかで、おとうさんの處には入らつしやらないさうですよ。」

と云つた。其顔には稍々嘲笑が浮いて居た。

あゝお前は、母がこれ程に戀ひこがれてはる／＼來たものを……

十二

小蒸汽はいま沖に碇泊して居る朝鮮通ひの高麗丸を指して、波穩かな海上をすべるやうに走つて居る。月無き空には星が燦然と瞬いて、油を流したやうな海は星あかりに一面黑ずんで見える　刻々と遠ざかつてゆく港の灯、異國の旅にゆく人はその灯をどれ程なつかしいものに眺めるであらう。私も小蒸汽の一隅にその灯を望んで無量の感慨に沈んだ。その灯のあなたにこそいとしい子等の家はある。この靜かな夜幼ない子等はどのやうな夢を結んで居やう。狂ひ狂ふてあとを追ふて來た母が、絶望の淵に落ちていま異國のはてにさすらつて行かうとして居るのも知らずに。私は思はずほろりとした。沖で汽笛がぼうとなる。本船へ近附いたのだ。

高麗丸は新裝の綺麗な船であつた。萠えたつやうな綠色の敷物を敷き詰めた二等室には周圍に暖かさうな毛布の寢床が上下に並べて作られてあつた。船が解纜すると間もなく、白い服を着たボーイが

「お風呂にお這入りになりませんか。」

と云つて來て呉れた。東京を出てから私はまだ一度もお湯に入らなかつたので、早速入浴に行つた。陸の錢湯を少し狹くした程の湯殿で、まだ新らしい木の香がして居た。私は湯船に浸つて暫くじつと默想した。此數日に私は身も心もほと／＼疲れてしまつた。Nさんの別莊でお千代さんのお母さんに、死の宣告にも等しい慘酷な言葉を聞かされてからは、私は全く絶望の人となつて世も人も凡てが咒はしかつた。四百里の旅をはる／＼來ても遂にいとし子に逢ふすべはなかつた。私は光明を失くして暗黑の思ひにその日は日の暮れるのも知らず、博多の町をさまよひ歩いた。淋しい横町に、「運命判斷、御占ひ」と怪しげな提灯が出て居た。

私はふと這入つて見る氣になつて、其家の格子戸を開けた。その折の運命判斷がとう／＼私に朝鮮行きを思ひ立たせたのである。當るも八卦當らぬも八卦何うせ捨鉢の身はなるようになれ。私は湯の中で獨り冷やかに微笑んだ。

翌朝八時、船は釜山に着いた。棧橋はすぐ停車場に續いて居た。白堊の高層な建物の內を、日本人の驛員に混つて白い服を着た朝鮮の勞働者が荷物を擔いで右方左方に走つて居た。汽車は內地で見られない立派な大きな車であつた。私は汽船からすぐ汽車に移つた。間もなく其汽車は京城へ向けて走り出した。どこまでも淋しい一人旅である。私は變化に乏しい荒凉な朝鮮の山野を車窓にぼんやり眺め乍ら、行くの末の事越し方の事さま／＼に思ひつづけた。

大田へ着いたのは午後の二時頃であつた。大田は釜山と京城との中程にある可成な大市である。親戚の△△の伯父樣は○○○聯隊の聯隊長をして大田へ三四年前から來て居られた。私は其伯父樣を便つて遙々渡つて來たのであつた。私は汽車から降りると一先づ最寄りの宿へ落附いて、早速伯父樣の官舍へ手紙を持たせて遣つた。伯父樣は驚いてすぐに訪ねて來て下すつた。私は何んにも云はずにいきなり、

「伯父樣、私は朝鮮で宿屋を經營ようと思ひます。でもいますぐは資本の都合も附きませんし、それに少しは實地の研究も必要でせうから、伯父樣が御存じの朝鮮で何處か一流の旅館へ、私を暫く見習ひに置いて呉れるやうに賴んで下さいませんか。私はもうすつかり決心して來ましたの。」

ときつぱり云つた。伯父樣は呆れて私の顏を暫くまじまじ見て入らした。伯父樣は私を氣が狂つて居るとお思ひになつたのであつたらしかつた。

十三

伯父樣は私がお前に別れた悲しい事情や、九州へ來てからの事を種々話したので、漸く氣が狂つて居るので無いといふ事が解つて下すつて、兎に角宿屋に一人居ては何んだからと、友人のSさんの家へ預ける事に

して下すつた。Sさんは△△銀行の支店長でお宅は伯父様の家の向へであつた。伯父様は男世帶で廣い官舍に從卒と二人で暮して居られた。伯父様は早速委しい手紙を書いて東京のおぢいさまの處へお出しになつた。何事もその手紙の返事が來てからといふので、私は毎日Sさんの家で所在なく日を暮した。Sさんの家族は皆親切な人であつた。伯父様もSさん御夫婦も私の宿屋熱には不賛成であつた。私はその度に、

「でも八卦見が左様申しましたの。私は前にも占て貰つて一度左様云はれた事がありますから、屹度さういふ運命に出來上つて居るのかも知れません。」

と云つた。

「八卦見なんぞの云ふ事が當てになるものですか。あなたはいま色々思詰めて居らつしやるから、そんな事が考へられるのですよ。」

と奥様は心配して云つて下すつた。

一週間程經つと漸くおぢいさまから伯父様の處へお返事が來た。其手紙には、母が大變心配して居るから直ぐに歸るやうに云つて貰ひたい。新開地朝鮮などでそんな事を思ひたつても失敗して墮落する計りである。親の體面も考へて呉れなくては困ると、よく云ひ聞かせて貰ひたいと書いてあつた。伯父様もSさん御夫婦も口を揃へて東京へ歸るやうにとお勸めになつた。私はそれでもとも云ひかねたので、

「それでは兎に角歸りますから。」

と云つた。

二三日の後、私はまた慌たゞしく大田を旅立つた。馬關まで送らせると伯父様が附けて下すつた人を强いて釜山で斷つて、それからは又一人で船に乘つた。歸りには酷く船が搖れて、それでなくても衰弱して居た私の身體は半病人のやうに弱つて了つた。それでも私は東京へ歸る氣にはなれなかつた。あれ程の熱心で入つた文藝協會を期待に反した失望もあつたからとはいへ、今度の事のために坪内先生へ一言のお斷りもせずに飛出して了つて、いまさら何の面目で歸つて行かれやう、そしてこの心、痛ましくも七花八裂となつた此

心を抱いて、再び悲哀の古戰場へ立戻る勇氣があらうか。たとへ旅に死ぬとも都へは歸るまい。私はまた門司から汽車に乘つて東京とは方向違ひの長崎を指して立つた。東京を出て幾日になるのかもう日さへも忘れて了つた。只の一夜まどかな夢も結ばず旅から旅をさすらひ歩いて、私の氣力は悉く盡きて了つた。哀愁の極には涙も無い。私は恰度雪に凍へた人が死に近附いた前にやうに、凡ての意識が朦朧として、何を考へやうともしなくなつた。涙の形骸はかくて汽車でこと〴〵と、長崎の果てへ運ばれていつた。

十四

何町であつたか町の名は忘れた。格子戸を紅殼色に塗つた古めかしい家である。宿の名はごとうやと云つた。その宿へ夕暮私は夢心地に着いた。女中がお湯におはいりなさいましと云つて來た。浴衣に著替へて廊下へ出ると、薄暗い穴藏のやうな湯殿へ案内して呉れた。紺屋の藍瓶を二個並べたやうな、妙な作りの風呂であつた。私は其中へ浸つて暫くうつとりした。とうとう長崎へ來た。もう路金も大方費ひ盡して了つた。明日からはいよ〳〵淪落の淵に沈まねばならぬ。私といふものゝ存在はもう今宵限りである。死の前夜！何といふ悲慘な晩だらう。火のやうに熱したまぶたを閉ぢると、二十有餘年の過去が、まぼろしのやうにありありと浮ぶ。私は其瞬間ふと或るものを見た。それはゲッセマネの園にキリストが光を仰いで天父に祈りを捧げて居る畵であつた。突差に私の心の奧底で何物かと叫んだ。

「神に縋れ!!!」

私は驚愕に我れ知らず戰慄した。何事の暗示であろう？私は忽ちに直覺した。「墮落してはならない、神樣は屹度救つて下さる。」斯う感じた時、私は俄かに蘇生つた心地になつた。

翌日の午前麗らかな五月のひざしがまぶしく照した長崎の甍敷きの町を、私は白い洋傘をかざして急ぎ足に歩いた。袋町の青年會で教へられた銀屋町のメソジスト教會へ牧田牧師を訪れて行くのである。靜かな町

を四五町行くと小川へ出た。橋を渡ると行手から美しい合唱（コーラス）が洩れた。暫く行くと蔦のまとふた鐵柵を廻らした教會の前へ出た。櫻若葉の繁みの奥に古風な洋館が覗かれる。合唱は此處からであつた。と、再び美しい聲が若葉のあなたに起つた。

さまよへるものよ　たちかへりて
エスのあしもとに　とくひれふせ

その日は恰度日曜であつた。私は泣きたい思ひをじつと堪へて教會の扉を押した。

内ではいま合唱を終へて、靜かな祈禱に移つたところであつた。私も後の方の空席に跪づいた。私は祈るよりも先づ悲しかつた。手巾で眼を押へてわけもなくしく／＼泣いた。祈禱が濟むと皆ぞろ／＼と歸つて行つた。私は人影が疎らになつた時、牧田牧師に近附いて、青年會からの紹介狀を渡した。牧田牧師は三十四五の素朴な人であつた。私は此人を信じて自分の過去の凡てを物語つた。牧師は熱心に耳を傾けて下すつた。そして、私が昨夜（ゆうべ）暗黑に光を仰いだ事に話し到つた時、牧師は覺えず肅然と衿を正して、

「それは全く神の攝理です。」

と驚嘆せられた。

悉くを語り終ると、牧師は深く頷いて、

「神樣はどんな場合にでも屹度救つて下さいます。あなたは決して自暴自棄をなすつては不可ません。萬事は私におまかせ下さい。」

とその折の私に此一言は如何に心强い言葉であつたらう！私は遂に救はれた。昨夜胸底に叫んだ聲は果して空しい暗示では無かつた。私は漸く迷路から覺めた。

牧田牧師はその日直ちに私を引取つて、奥樣と共にいたはり慰さめて下すつた。貧しい牧師の家には平和な光りと清い暖かさが充ち滿ちて居た。悲しき旅にすさみはてた私の心地も日に／＼少しづゝ培（つちか）はれて行つた。然し牧師は飽迄人の自由意志を重んずる人であつた。

「まあ／＼ゆつくりお考へなさい。私の家にゐるからと云つて信者にならねばならないなどゝ窮屈にお考へになるには及びません。あなたが充分に考へて、御兩

親の傍へ歸る氣分にお成りになる事が出來れば、神樣はそれだけでも滿足なさいます。」
と私に靜かに考へる時間を與へて下すつた。

東京のおばあさまからは、私が神に救はれて迷路から覺めた事を何よりも喜こんで、過ぎ去つた事はもう何も云はないから、一日も早く歸つて來るようにと、濃やかな母のおもひを書き連らねた手紙を切々とよこして下すつた。追々に心が落附いてゆくにつれて、私は始めて父母の上を考へるやうになつた。子を思ふ闇にかほど狂ふた私には、又それと同じ思ひに泣く父があり母があつた。さう心附いてから私はやうやく東京の空が少しづゝ偲ばれるやうになつた。

或日ふと父母の事が堪らなく戀しくなつた。私はいきなり牧師夫妻に、
「先生、いろ〳〵御心配をおかけしました。私急に母に逢いたくなりましたから東京へ歸ります。」
とはら〳〵と泣いた。
「おゝよくお考へがつきました。」
夫妻は心から喜こんで下すつた。

其晩牧師夫妻は私のために送別の小宴を催して、聖書の一節を讀んで下すつた。月が傾むく頃私は夫妻に送られて、名物の枇杷を家土産に、思出多き長崎を立つた。

父母在す都へ！矢の如く歸つた私は、三月振になつかしい我家の人となつて先づ兩親の前に跪いた。おちいさまは、
「よく歸つて來た。苦しい旅をして嘸辛かつたらう。」
と只一言仰しやつた。

私は新らしい涙より何もなかつた。おばあさまはなんにも云はずに私の手を握つて泣いて下すつた。

私の室には人形のるりちやんが床の間にしよんぼり坐つて居た。

お前達！

母の惱み母の苦しみは悉く母自らが招いた必然の報いであつた。いまではお前達に母と呼ばれる資格の無

い母となつたが、母はせめて自分の切なる心をお前達に告げて、他日若しお前達が母なき淋しさを感じるやうな場合、母の靈は絶えずお前達の心の中に通つて居るといふ事だけを自覺して貰ひたい願ひであつた。母がお前達と別れて後、狂ひに〳〵、迷ひに迷つて、一目なりとも逢ひたさに、山河幾百里のあとを追つたのも、遂に空しき夢となつた。この願は母としての至情ではあつたけれど、社會の許す處では無かつた。母が悲しき旅でしみ〳〵味はされたのは、道といふものの一面には、如何に峻嚴にして犯す可らざる權威があるかと云ふ事であつた。母は自ら作つた運命の爲に、終生逃れ難い苦痛の笞を受けねばならぬ。此笞から少しでも逃れるには、神と人との前にひたすら罪を謝するより外はない。母は恁うした考へから、これからの生涯を神に縋らうとして居る。お前達が他日父となり母となるに就いても、お前達の思想の根柢が、宗教といふ磐石の上に築かれたならば、順に處し逆に處しても、常に自若として搖がぬであらうと、母は自分の失敗に顧みて、深く感じて居る。お前達が宗教を根柢として能くおとうさんの教へを守り、立派な人達になつて吳れる事を母は蔭ながら切に祈つてゐる。母もこれからは復活した信仰の人となつて、淸い生涯を送り、溫い神の御心にお前達の靈を結び附けて、いつか生の終る時、神の國で始めて現世のあらゆる迫害や束縛から逃れて、思ふやう子と呼び母と云はれやう。母は今それのみを樂しんで居る。

お前達！母が東京へ歸つてから後記者生活に入つて、種々な社會を見た事やその後の事は、お前達の處世の訓しめに、他日また書き送る積りで居る。どうぞくれ〳〵も達者で幸福で居てお吳れ。

月は傾むいて了つた。月光は名殘なく消えて、曉に近い空には、明星が淡いきらめきに夜の名殘を惜んで居る。

幾度もつぎかへた提灯の燈が、またせわしく瞬きはじめた。ろうそくも盡きたからもうこれで筆をおく。

（大正五年八月十五日）

支那大陸の秋色

小山田劍南

天下の秋

涼秋八月蕭關の路、北風吹き斷つ天山の草、朔方肅殺の氣、一たび始皇の長城を度れば、無定河邊に絡繹たる駱駝の毛衣漸く厚く、金鎖關の固めは、以て胡人の跳梁を防ぐべきも、以て北來の「秋」を防ぐべくもあらず。少昊駕を急いで、五陵の梧桐颯として朝の風に搖ぎ、病葉三兩片、飛んで歷代興亡の夢に散れば、四百餘州の天地、いつしか淅瀝たる木落の聲ならざるなく、戰後の山河、落日黃草、先憂後樂の人、誰か天下の秋を悲まざらん。

陶然亭の雅會

東單牌路は北京城内の銀座通りにして、局面宏大なる店舖、街路の兩傍に櫛比し、二六時中、人、車、輿、馬の往來、絡繹織るが如く、雜踏熱鬧名狀すべからず。而して身を此間に置く者は、三伏溽暑の天に到つて、心身の不快を覺ゆること、殊に甚し。而かも青物屋の店頭に、柿と栗の初物現はるゝころは、這の紅塵萬丈の區寰も、自ら一點蕭瑟の感を惹き來る。況んや交民巷一帶の莊麗なる洋館街は、白雲危甍に凝り、灝氣飛檐を涵し、列國使臣の夜會、復た電扇の動ぐを待たずして、爽凉の氣室に滿ちて溢れ、秋信は夙に宿りて卓上の草花に在り、舞人の袂、風影冷かに、衛士の劍、月光冴え、庭樹聲あり、淙々として、雨の灑ぐが如し。若夫れ笻を牽いて郊外に出でんか、風物頓に凄其、城内流汗淋漓の時代と相距ること邈焉として數千年の感なくんばあらず。而して僕は北京郊外の秋に於て、終生忘

るべからざるの紀念を有す。アヽ北京郊外の秋!!!

歳月匆々、明治三十五年はハヤ十有餘年の昔となんぬ。僕、此年の春を以て、初めて北京に遊ぶ。宿して東單牌路なる旅館徳興堂に在り。一日飯後の消遣、歩して庭園に盤桓す。樹間に人あり、僕を凝視しつゝ前み來る、僕亦た彼を凝視しつゝ歩を進め、相見て相驚き、互に其名を呼んで手を把る。奇遇！奇遇！彼れは僕の同學の友にして、此時より數年前、海を渡つて禹城に赴きたるまゝ、杳として消息を絕ちゐたる人なりしなり。異鄕故人に逢ふ、感慨何ぞ極らん。僕、兎も角もとて、其人を拉して室に入り、互に久濶を叙べ、且つ語り、且つ酌み、歡情殊に深し。其人、當時、順治門外下斜街なる東文學社に在つて、董事の任に膺りゐたるを以て、僕に勸むるに、其經營を幇助せんことを以てす。遊子の往く所、萍蓬定まらず、男兒在る所即ち家たり、要は適意を貴ぶのみ。故人の厚志、故なくして斥くべきにあらず。乃ち就いて東文學社に客となる。東文學社は日本人が支那の子弟に新知識を授くる處にして、中島裁之君が時の直隷總督袁世凱、安徽桐城の鴻儒吳汝綸等の援助の下に、經營する所に係れり。中島君は肥後の熊本の人、早く支那に遊び、頗る彼地の事情に通ず。嘗て支那僧に變裝して北京より山西、陝西、湖北等に乞食旅行をしたる、漢口より陸路河南を經て北京まで新婚旅行をしたる、吳汝綸に負ふ所の私債百金を返濟せんとして覺えず遲延して其人の死去するに會し、乃ち千里を遠しとせず、わざ〳〵桐城に越き、恭しく其墓前に供へて還りたるなど畸行甚だ少からず。髯の中島先生が常に瘦馬に騎して鞍上書を讀みゐたる奇觀は、今猶ほ好話題として北京の邦人間に殘れり。

當時東文學社に在つて教職の任に當れる俊秀の中には、かの横川省三、脇光三、田村一三、松崎保一の諸烈士あり、而して僕が徳興堂にて邂逅したる故人は、實に沖禎介君其人なりしなり。明治三十七年、日露の國交全く斷絶するや、天子劒を按じて赫怒し給ひ、貔貅の將帥、膺懲の師を提げて海を度る。久しく髀肉の

歎に耐えざりし諸子は、蹶然手に唾して起ち、各雄圖を懷にして、深く虎狼の窟に入り、或は支那人に扮し或は蒙古服を被り、身を僂つし、心を碎き、經營慘澹困楚備さに嘗め、鐵道を破壞せんとしては果さず、事志と違うて敵手に捕へられ、千古の恨を呑んで遠き異域に不葬の鬼となる。傷い哉。

僕の東文學社に在るや。旦暮に諸子と把晤して交情日に厚く、月を閲みすること忽ち三五。西山の壯氣一たび人の鬢髮を襲へば、心身の健、意氣の豪、快甚し。社中會心の友、相集つて、風前に劍を撃ち、月下に詩を吟じ、或は出でゝ、昆明湖畔に散策し、玉泉山下に騎行し、遠くは天下の第一關を踰えて馬を八達嶺頭に立て、眦を決して遙かに北方の天を望み、相顧みて咄!と叫ぶ。皆露人の强暴を憤るなり。僕をして殊に追懷の情切なるに堪えざらしむる者は、其年の中秋三五の夜なりとす。此夜社中の同人、相謀つて宴を郊外の陶然亭に設く。亭は學社を西に距ること僅かに里許、四周皆衰草敗葭の原野、亭畔地を拓くこと數十畝、庭園を築きたり。泉石竹樹の趣致甚だ愛すべし。酒三行、明月原頭に出で、大さ盤の如く、一天澄清、星象數ふ可し。露華樹に輝き、虫聲地に滿ち、淸風徐ろに來つて、涼、湘簾に滴る。衆皆快哉を呼ばざるなし。興漸く酣にして、或は杯を屬して吟唱する有り、或は歩を移して池畔に逍遙するあり、笑ふもの、語るもの、默するもの、各其適意に任かせて、樂むこと涯りなし。夜深うして歸途に就けば、白露草に滿ちて衣袖皆濕ふ。越えて數日、僕事を以て草卒東歸の途に上り、返つて西安に向つて遠征を賦し、重ねて北京を經過したるも、淹留日少く、且つ居所を同くせざりしを以て、日夕相親むことを得ず、其後復た諸子と相見ず、殊に此夜同集の人たりし沖、橫川、脇、田村の諸子は幽明相隔てゝ呼べども還らず。僕、諸子を追慕するごとに當年陶然亭に於ける觀月の雅會を想起しては、悽愴悲痛の感に打たれずんばあらず。

三大名山

三大名山とは、直隷の恆山、山東の泰山と併せて、禹域九州の五嶽と稱せらるゝ湖南の衡山、陝西の華山、河南の嵩山、是れなり。僕未だ恆山と泰山の秋を知らず。餘の三者に至つては請ふ少しく其大觀を語ることを得ん。

嵩山、河南洛陽縣城の南門外にて洛水を渡り、西南行すること二十五華里、龍門に到る。一水あり、兩山對峙の間を衝いて奔流し來る、是れなん大禹の鑿開したりと傳へらるゝ伊川なり。吾人は此間に於て「奇秀なる秋」を觀ることを得。山は貧處の士の如く、身瘦せて氣益々秀。水は敗軍の猛將の如く、勢窮つて兵益々壯なり。龍門又た伊闕と名く。河の左岸の岩頭に古刹あり、潛溪寺といふ。山門を入れば、三個の大岩窟あり。窟内なる仰ぐばかりに高き石壁の面に、大小數千の佛像を刻す。寺傍更らに一大岩窟あり、共裏面の石壁にも、高さ數丈の阿彌陀を中心として一萬五千の佛像を彫刻す。此等皆漢魏六朝以來の名作に係るのみならず、共技工の破天荒なる誠に古代建築物研究家の好資料たるを失はず。潛溪寺と水を隔てゝ相對せる山の中腹なる巖頭一寺院あり。結構華麗を極む。香山寺といふ。唐の白香山こゝに葬らる。李白亦た嘗てこゝに流連したりと傳へらる。寺畔なる黃葉の樹林が夕照に映じて、山を負ひ水を帶びたる風情宛かも畫を讀むの感あり。

龍門より河を渡り、緱嶺、首陽の連山を右にして東行すること兩日、百二十八華里、神洲五嶽の一たる嵩山大室の南麓なる中嶽廟に至る。龍門を經ずして、洛陽より直ちに偃師縣を經れば、其間僅かに百華里のみ。廟は南嶽、西嶽のソレと同じく、嶽の靈を祀り、道士をして之が祭祀を司らしむ。一年の中、五、十の兩月は善男善女の四方より參詣するもの、日に千を以て數ふ。門宇殿堂の頽廢甚しく、壁破れ、甃落ち、草萊叢生、秋色荒凉たる中、唐宋の碑石古りたり。五嶽眞形圖といふがあり、頗る奇古なり。

廟の背後より羊腸を踐み、巉岏を攀ぢ、猴兒の捷を學んで行くこと二十五華里にし、大室三十四峯中の

最高峯の最高處に達す。乾隆帝御筆の碑あり。風雨多年、石斷ち字損じ、苔蝕み、蘚侵して、摩挲すれども讀むべからず。山上雲霧乍ち起つて乍ち散じ、一日の中、氣象幾たびか變化す。人は海拔五千呎の雲表に立つて蒼凉たる古神洲中原の秋を瞰下し、天下を小とするの概あり。絶頂より西のかたへ下ること約五華里、一小古廟を得。扁額に安陽宮と題す。登山者は此に到つて行き疲れたらば、廟守りに請ふて一夜の宿を借ることを得。霜頭雪眉の貧道士が手料理したる山菜の晩餐は又た格別の妙味あり。食後疲れたる五體を寛げて寐に就けば、山中の夢寒くして秋猶ほ冬のごとし。

安陽宮より下り、雲霧を踏み、嶮岨を度り、斷崖絶壁道通ぜざる間を樹枝に縁り、蔦蔓を援いて攀躋すること半日强、遂に山下十數戸の一村に出づ。それより更に西北行すること十華里餘りにして著名なる少林寺に到る。少林寺は嵩山少室三十六峯の一なる五乳峯の麓、谿谷の間に在り。後魏の時の創建に係る。いたく荒廢したれども院坊殿堂の雄大なる古碑の多存せる、自ら人をして往時の盛を想繪せしむ。今日にても僧侶三十人餘りを貯ふ。因に少林寺は哥老會匪の發生地なり。清朝乾隆の初め西域大亂あり、之を征服する能はずして大に困厄せり。偶ま少林寺の僧徒詔勅に應じて僧兵を率ゐて之を討伐して凱旋するや、帝大に其功を嘉みして勅額並に功田を賜ふ。然るに其後北京の官場之を讒訴し、寺を包攻して火を放ち、僧徒を燒殺せしむ。僧徒等、事の不意に出でたるを以て逭るゝに遑なく、塀墻を跳過して身を厄に脫する者僅かに十三人、江西に亡命して大鵬山に潛居す。北京の大官之を聞き兵を派して之を圍み、更らに八名を擊殺す。殘る者五人、走て九龍山に入り、始めて誓を立て、殺戮せられたる者の爲めに、仇を報じ、寃を雪ぐの議を決し、密かに明の遺臣を招いて共勢を養へり。此結社の首唱者の姓、洪といへりしに因り、洪家、若くは洪幇と呼び、又た哥老會と名く。徒黨次第に增加し、今や百萬の多きを算し、居然として一方の雄を爲せり。少林寺は又た梁の武帝の時、達磨が面壁九年の業を遂げたる處と

して其名を知らる。落葉降る庭もせに、鳩の遊びゐる小天地の秋は、イカにも幽邃なり。

華山、北京より山西を經て陝西に入らんとする者は道必ず蒲州なる首陽山の下に出で、嬀汭の二水を過ぎて黄河を渡らざるべからず。而して時會ま秋涼の候ならば、渡舟の舷頭に立つて、中流より一帶の形勢を顧望せよ。華山を主要なる題材とせる「雄渾なる秋」に接することを得べし。黄河の水は奔つて天上より來り、中國無双の險要たる潼關の城塞を包攻し、華山は即ち大牙の如く、颯爽たる英姿を雲際に表はし、蜴子、鳳凰の諸山之を拱擁して鞏固極めて嚴に、夕陽低く關の鎭水門頭に逗すれば、諸山の秋樹、黄紅綠青、遠近相映發し、百里の大軍、旌旗を樹て連ねて陣容の盛を誇るが如く、燦として人の目を眩せしむ。若夫れ「險崎秀拔の秋」を探らんと欲せば、更らに去つて華山の躡蹬を試みざるべからず。潼關より黄河の土坡に沿うて西行すること三十五華里、華山の麓に華嶽廟あり。廟は漢朝の創建に係れども、當時の建築物は片影をだに止めず、現に存する所のものは悉く清朝の修築に係れり。記錄に「慈寧四十二年、內帑金十二萬兩を發して巡撫畢沅に命じて西嶽廟を重修せしむと見ゆる、是れなり。規摸結構、莊宏雄大を極めたり。最初の門には「勅建西嶽廟」と題額せり。それより靈星門、金城門を過ぎて灝靈殿、萬壽閣、聖祖仁皇帝祠を經て明の太祖の御製なる「夢に西嶽に遊ぶの文」を刻みたる石碑亭まで凡そ七百步。灝靈殿の前に放生池あり。池の傍に清猗亭あり、頗る雅致あり。下馬碑の傍なる清牛樹といふは、老子が牛を繫ぎたる遺跡なりと傳へらる。華山は廟の南に當つて聳立し、秀麗の氣、壓するが如し。森閑たる境內に立並ぶ老杉古柏の中に立つて、戲ぐが如き靜籟の響きを聽けば、人は自ら秋の神々しさを覺ゆ。廟より華山の裾野の露に濕れつゝ行くこと里許、華山の直下に玉泉院あり。石造舟形の茶亭ありて流泉の心に立つ。石窟あり、窟內の路窮る處に希夷仙人の臥像を刻せり。

華山は中國五嶽の中に就いて尤も神秀と稱せらる。

山皆石ならざるなく、削成十里五千仭一石なり。玉泉院を出でゝ羊腸を度れば瀑布危崖の間に落ち聲色倶に佳なり。回心石と題したる一大圓卓子の如き平面石の縁ちに沿ふて過ぐれば、溪を隔てたる崖壁に「當思父母」の四字を鐫めり。字の大さ各々一丈許り、此れより人は生命を鐵鎖に托して上らざるべからず。一たび足を失すれば則ち千丈の澗底に落つ。危きこと甚し。千尺幢、百尺峽、天門の險隘を過ぎ二仙橋を渡る。橋頭に立つて俯して山下の諸郡邑を望むべし。歷々として地圖を開くが如し。是より兩山道を夾み霜氣乍ち清く、滿山の紅葉、靑黃相間はり、輝映絢爛す。漸く謂ふ所天外三峯の口に達すれば老松あり、將軍樹と謂ふ。或は傳ふ唐時の物なりと。高さ十丈餘、枝幹佶屈蒼龍の蟠するが如く、天風衣を吹き、濤聲樹に在り。三峯口に二谿あり。細辛坪より左すれば則ち東峯より南峯に至り。右すれば則ち西峯より南峰に至るべし。東峯の左襟下に玉女峯あり、玉女峯又た中峯といふ。峰頂に玉女祠あり。祠の東に玉女洗及び玉女の石室あり。仰いで仙人掌を見る。門前の石崖に「隻手擎天」の四大字を鐫めたり。袁文誠公の題する所に係る、筆力遒勁、書體蒼古を極む。溪崖の間琪花瑤草、異香清芬、散じて鼻を衝き、嵐氣衣を濕ふす。人は遠く塵寰の外に遊んで、飽くまで「清冽の秋」に醉ふ。

衡山　即ち南嶽なり。湖南の衡州に在り。高さ略ぼ泰山と伯仲の間に在り、四千丈と稱せらる。僕ある年の秋、其上に遊んで上封寺に宿す。雲霧の氣檐に滴り、其音愈々多くして室愈々靜かなり。寺の後に泉あり、虎跑泉と名く。涓々たる細流石より滲る。僧掬して山中產する所の茶を煎じて薦む。香氣芳烈、味殊に佳なり。僕、市井風塵の下、時に此味を思ふて、天上淸涼の秋に神馳せずんばあらざるなり。

雨の洞庭

秋雨蕭々の夕、去つて岳陽樓に上る。九嶷路遠くして、哀鴻洞庭の天に迷ひ、帆影次第に消えて、君山黛の如く杳かに煙波の際に横はる。二女何處にか在らん

や。望夫の涙、留めて湘潚の竹に在り、我れ檻に憑つて立つこと多時、孤懐悽然たり。

寒山寺

寒山寺は蘇州城外に在り。田圃の間を流るゝ野水の畔に立てり。荒廢したる一小寺なり。一僧あり、之を守るのみ。張繼の楓橋夜泊の詩を鐫めたる石碑あり、寺の傍に立つ。字は舊と文衡山の書に係れる者なりしが年久うして壞廢に歸したるを以て近年新たに石を立て兪曲園の書を鐫みたるなり。僕嘗て此に遊んで、寺に宿すること一夜、月影窓に入つて白く、虫聲唧々遠く楚辭を讀むを聽くが如し。「此上にさびしき夢を結べとか、枕に近く虫鳴きしきる」。

東坡の赤壁

赤壁に二個所あり、東坡の「赤壁の賦」を以て著名となりたる赤壁は、漢口の下游なる黄州に在り。然れども史實の徵證する所に據れば、周瑜が曹操の水軍八十萬を擊破したる赤壁は漢口の上游五十哩の處に在り。東坡が赤壁と認めたる處は誤りなれど、其地は其文に依つて著はれ、人多くは東坡の赤壁を稱す。且つ景物の絶佳なる上游の赤壁の遠く及ばざる所なり。

東坡の赤壁に遊ばんとする者は、先づ陸劍南が入蜀記の一節を讀まざるべからず。曰く晡時黄州に至る。州は最も僻陋にして事少し。杜牧之が所謂平生睡足る處、雲夢澤南の州なり。然れども牧之、王元之が出でゝ守たりしより、又た東坡先生、張文潛謫居して、遂に名邦となれり。臨皐亭に泊す。東坡嘗て寓する所。その秦少游に與ふる書に所謂門外數歩即ち大江とある、是れなり。烟波渺然、氣象疎豁。州治陋甚し。廳事僅かに數客を容るべし。晩に舟を竹園歩に移す。蓋し臨皐、風濤多くして夜泊すべからざればなり。黄州と樊口と正に相對す。東坡の所謂武昌樊口幽絶の處なり。漢の昭烈が呉の魯子敬が策を用ゐて進て鄂縣の樊口に住すとあるは即ち此地なり。十九日早東坡に遊ぶ。州門より以東、岡壟高下、東坡に至れば則ち勢、平曠開豁

東のかた一龕を起して頗る高く、屋三間あり、一を、居士亭と曰ふ。亭下南に面するの一堂頗る雄、四壁皆雪を畫く、堂中蘇公の像あり。烏帽紫裘、横に筇杖を按ず。是を雪堂と爲す。堂の東に大柳あり、公の手づから植ゑたるものなりと傳へらる。西南に橋あり、肪して小橋と曰ふ。小橋流水を忘る莫れの句を以て名を得たり。其下、初めより渠潤なく、雨に遇へば則ち涓流有るのみ。舊と止だ片石を其上に布けるのみなりしを、近ごろ増廣して木橋と爲し、覆ふに一屋を以てせるは、頗る人意を敗す。東に一井あり、暗井と曰ふ。蘇公の詩中なる走つて暗井の出づるを報ずの句に取る。泉寒うして齒を慰す。但だ甚だ甘からず。又た西望亭あり、正に雪堂と相直たる。高阜の上に在り。江山を覽視す。一郡の最と爲す。亭の名は蘇公及び張文潛の集中に見ゆ。坡西に竹林あり、古氏の故物にして南坡と號す。今已に殘存して幾くもなし。地も亦た古氏に在らず。城を出ること五里。安國寺に至る。亦た蘇公の嘗て寓する所、兵火の餘、復た遺迹なし。惟だ寺を遶るの茂林啼鳥、猶ほ當時の氣象有るに似たり。棲霞樓に群集す。蘇公樂府に云ふ、小舟春江を横截し、臥して翠壁紅樓の起るを看ると。正に此樓の謂ひなり。下、大江に臨む。烟樹微茫。遠山數點。亦た佳處なり。樓頗る華潔。是より先き、郡に慶瑞堂あり、謂ふ一故相の生ずる所の地なりと、後毀て此樓を新にす。酒味殊に惡し。蘇公齏湯蜜汁の戯、虚く發せず。郡の人何斯擧の詩にも云ふ。終年惡酒を飲み、誰が敢て督郵を憎せんと。然れども文潛は乃ち極めて黄州の酒を稱して、京師の外、過ぐる者なしと爲せり。故に其詩にも我初めて謫官せらるゝ時、帝司酒の神に問ふて曰く、此れ好飲の徒、聊か酒給して與を養ふ、國を去る一千里齊安酒最も醇、火を失して雨を得、仰て天公の仁を戴くといへり。これ文潛が黄に謫せられたる時、適ま佳匠有りたればならん。小徑に循ひ、州宅の後を繚る。竹樓に至る、規模甚だ陋。知らず、王元之の時に當り亦た此の如くなりしか。樓の下より、稍や東すれば即ち赤壁磯なり。亦た乖岡のみ。略ぼ草木なし。故に韓

子蒼が待制の詩にも、豈に危巣と棲鶻とあらんや、亦た陳迹なし但だ飛鷗のみといへり。此磯、圖經及び傳者、皆以て周公瑾が曹操を破るの地と爲せり。然れども江上此名多し。考質すべからず。李太白が赤壁の歌に、烈火天に張り雲海を照す、周瑜此に於て曹公を敗るとあり。黃州に在りと指言せず。蘇公尤も之を疑ふ。賦に云ふ、此れ曹孟德の周郎に困めらるゝ者にあらざる乎と。樂府に云ふ、故壘の西邊、人はいふ、是れ當日周郎が赤壁なりと。蓋し一字といへども輕く下ださゞること此の如し。韓子蒼に至つては、此地阿瞞をして走らしむと云へり。是れ則ち眞に指して公瑾の赤壁と爲せるものなり。又た黃人は實に赤壁を謂つて赤鼻と謂へり。尤も疑ふ可きなり云々。

陸劍南は陸上に在つて觀たる東坡の赤壁を描寫したれども、東坡の赤壁は江の中流之を觀ざるべからず。若し夫れ秋時明月の夜、舟を大江に泛べ、中流より顧望すれば、山下の石壁削立して屏風を開きたるが、その勢江を壓し、洪濤其脚を嚙み轤々として遠雷の聲を發す。實に天下の壯觀あり。蘇公の所謂白露江に横り水光天に接する間に坐し、酒把つて烏鵲南飛の歌を高唱すれば、意氣斗牛を衝くの概なくんばあらず。我友故片川浩然嘗てこゝに遊びて歌あり、詞雄に調莊鏘鏘として金石の響あり。唱へて以て舷頭の豪快を添ゆべし。曰く、舳艫千里相銜み、荊州下る樓船は、雄風あたりを拂ひつゝ、其氣東吳を呑まんとす、此時阿瞞が眼中に、豈に碧眼の兒あらんや、月明一夜赤壁に、烏鵲南飛を歌ひしも、今は昔の夢なれや、火箭一たび飛散れば、光焔天に漲りて八十餘萬の水軍は、底の藻となりにけり、鄴都も今は荒れ果てゝ、銅雀臺の風寒く、七十二塚草綠り、千古の英雄今何處に在りや。

潯陽江

江西省九江の地は卽ち唐の白樂天が司馬たりし江州なり。潯陽江は廬山の下なる龍開河が大江に會流する河口のやゝ下游にして、楓葉荻花秋瑟々の風情は今も猶ほ有れど、舟中琵琶の曲を買る淪洛の女は無し。江畔

に琵琶亭あり。頼朝公の幼少の時の頭の骨の類なり。

三峽の猿聲

三峽とは所謂、黄牛峽、巫山峽及び瞿塘峽にして、湖北の宜昌の上游約そ二十五華里なる峽口より、蜀の白帝城下に至る、約そ五百華里の間に在り。楊子江の上流なり。峽とは古書に兩巖水を束ねて壁立するをいふと見えたり。三峽の水勢險惡甚しく、舟行の困難なる、實に天下無双と稱せらる。故に李白も蜀道の難きこと青天に上るよりも難しと歎息せり。人若し大陸に游んで三峽の秋に逢ひ、孤舟萬山の中を行きつゝ險灘に困み、急湍に悩み、つく〳〵行旅の艱苦を感ずるとき、月明の夜、篷窓の下に坐して哀猿の聲を聽かば、誰か家園の情を惹かざらん。

月の西湖

西湖は浙江省の抗州府に在り。風景の優麗なる、實に支那第一と稱せらる。宋の處士林和靖が隱棲の地にして、梅を以て名有れども、秋の夜の月の西湖は又格別の風情あり。扁舟に掉して湖水に泛び、淸風に向つて酒を酌み、微醺を帶びて書圖の秋に歌ふ。其快言ふべからず。

北の秋と南の秋

支那に於ては地勢に南船北馬の別あり、人に南方の勇北方の强の別あるが如く、秋の情味も亦た南北支那各其趣きを異にし、北の秋は曠土の秋にして、南の秋は澤國の秋なり。澤國の秋は樹木を帶びて爽凉なり。曠土の秋は樹木を帶びずして荒漠なり。

秋期行事

立秋の日秋の水を飲めば痢疾を免るとの冥信あり。八月十五日は中秋節にして、中秋節は新舊年節、端午節と合せて一年中の三大節に算へらる。三大節は又た商家の決算期なり。中秋節には家々宴を催ほして月を賞す。親戚朋友の間互に酒肴菓物等を送答す。

九月九日は重陽節にして高處に登り、酒を酌んで菊花を賞す。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

和文 日記から

定價八十錢 郵稅八錢

鳥人

アートスミス著

スミスは一介の飛行機乗りである、年齢から云へば未だ二十才を越えた許りの米國若僧に過ぎぬ、併し飛行家としての彼れは世界第一人者の一人である、別して其宙返り飛行は天下一品である、彼れが日本へ來て以來日本の人氣は沛然として彼れの一身に集つた、恐らくは彼れ程短日月の間に絶大な人氣を博した者は未だ曾て其例を見ない、斯く人氣を博した彼れスミス、彼れは日本を如何に見たるか彼れの日本より受けたる印象は如何、本書は即ち其僞らざる告白である、極めて徹底的なる彼れが日本社會の觀察、日本國民の好遇に感激せる彼れが印象等之れを筆にせし彼れは筆の人として又凡ならざるを見る可し、英文は彼の手記に成り、和文は某大家の飜譯である、英文初心者の爲章句能く照應して原飜對照に便ならしめたるが聊か出版元の老婆心である。

英文 フロムゼダイヤリー

珍奇なる寫眞多數挿入

定價壹圓 郵稅八錢

訂正改版 みみずのたはこと

蘆花 德富健次郎著

四六版形 みみずのたはことの安價提供

定價壹圓二十錢

特價壹圓(郵稅八錢)(九月三十日限)

小説 黒い眼と茶色の眼

蘆花 德富健次郎著

定價壹圓二十錢 郵稅八錢

小説 柿一ツ

高濱虛子著

定價壹圓十錢 郵稅八錢

十字路

肉彈著者 櫻井大尉著

定價壹圓二十錢 郵稅八錢

自殺者の手記

長田幹彥著

定價六十錢 郵稅八錢

發行所 東京市銀座通新橋際 振替東京二〇〇番(電話新橋一九九一) 新橋堂

(中付三の一)

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

(中付三の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

(最新刊)

戰後文明の研究

(內容一般)

△國家主義の將來(阪谷芳郎)△史家の見たる文明の將來(浮田和民)△戰後に於ける社會的形勢(吉野作造)△戰後宗教道德の大勢(海老名彈正)△哲學思想の將來(桑木嚴翼)△文藝思潮の將來(金子筑水)△美術界の將來(岩村透)△劇壇の將來(中村吉藏)△歐洲大戰の敎訓(內ヶ崎作三郎)△平和運動の將來(綱島佳吉)

醫學博士永井潜先生序 兒玉昌氏著(再版出來)

滅び行く宇宙及人類

萬物は日夜流れて愁人の爲めに暫らくも止まらず流れに浮ぶ泡沫は且消え且結びて將た何れに歸せんとはする宗教迷多くして此疑を解く能はず著者は科學者の立場より廣大無邊の宇宙興亡流轉の人類とを極めて敬虔なる態度を以て觀察し宇宙の目的人生の歸趣を明にせるものなり、世の惱める者、迷へる者、翼くは本書に依つて始めて眞に徹底せる智識を得よ。

四六版布裝 箱入插畫二十枚入 定價一圓四十錢 送料八錢

文學士木下四郎一氏新著

哲學汎論

定價一圓拾錢 送料八錢

本書は著者が幽玄の感に打たれつゝ解決を試みし哲學上の根本問題と在來の哲學者の諸說を最も平易明瞭に記述せるもの何人の繙讀にも可なり讀者は本書によりて世界の本體靈魂の存在矛盾の調和有と無との一致智及情認識身心の關係宗教的哲學其他哲學上あらゆる問題を明快なる言辭を以つて叙述せり此種の書中一頭地を拔ける名著なり

最新刊

忠義の哲學

米國ハーバード大學教授ロイス原著 文學士吉田靜致序 鈴木半三郎譯 定價壹圓卅錢 送料八錢

我民族の根本精神たる忠義は近來個人主義の輕侮を蒙れり、本書は現代米國哲學界の權威たるロイス博士が我等に代りて彼等輕薄なる個人主義者に痛棒を喫はして忠義の眞意義を吾等に教ふ、今は歐洲の大戰亂は本書の主張を裏書しつゝあり、眞に是れ我思想に對する寄與の甚大なるを信じて疑はず苟も理想ある人士は何人も本書を一讀せざるべからず。

發行所 東京市麹町區平河町五丁目 振替口座東京二〇一九一四番 洛陽堂 電話番町(四二五八)

(中付三の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絶す

富山房編輯部編纂

（最新發行）

大正五年 改版

最新日本地圖

四六倍判 美本一冊 石版七回刷 精巧地圖卅五面 各種統計四十頁 定價壹圓六拾錢 郵税八錢 臺樺鮮支各十四錢

重版毎に訂正を加へ修補を施し、好評又好評、今や本邦地圖として本圖の右に出づるものなし。印刷の鮮明にして校正の嚴密なると用意の周到にして閲覽に至便なるとは滿天下の喝采を博して全國各方面に亙り無慮十數萬を提供して需要の範圍日に擴大しつゝあり。

今や帝國領土の膨張と社會の進歩とに鑑み全然改版すると同時に新領土は云ふに及ばず、更に鐵道案内圖を加へて益々日常の便用に適せしめたり。尚四面の市街圖には帝國首要の都市港津は固より近傍の要地名勝等の切圖六十六を包含し、附錄の最新各種統計五十餘項を數ふ。随て天然と人文とを兼ねて單に閲覽に便なるのみならず、活動社會の實用的活地圖として將た學習用參考として、唯一無二の精良圖たる冠冕を戴くものは實に本圖なり。家庭、學校、官衙、銀行會社、諸團體等行く處として可ならざるなく、机上に旅行に到る處、一部を供へざるべからざるは眞に切圖なり。

本邦アトラスの最大權威

家庭用旅行用學習參考として利用の範圍最廣汎

（中付三の四）

東京神田 振替五〇一

富山房

陶庵侯の同情で正氣に還つた溫泉宿の狂婦

田中貢太郎

一

『先生、私は湯河原へ行つて來ました。』と言つて私は桂月翁に話しかけた。

『左樣左樣、繪葉書をくれたね、何時歸つた。』斯う言ふ中にも桂月翁は、せつせと鏝を動かしてセメントを塗つてゐる。廣い庭の隅、手洗鉢に近い所に五六尾の金魚の浮いてゐる瓢形の小さな池に並べて、又同じやうな池を掘りかけてゐる所であつた。手洗鉢に添うて植ゑられた沈丁花の花は、粉のやうな紫がかつた花をつけてゐるが、それが三月末の正午近い暖かな日にむれて、スイ〳〵と香つて來る。沈丁花の傍には、赤い芽を吐いた楓や、横に這つた檜葉などがあつた。葉がくれに青い實を持つた梅の老木は、それ等の木の頭を踏へるやうにして立つてゐた。桂月翁はズボン下一つになつて、痩せて蛙のやうになつた赤い身體を日の光に曝して、鼠色のセメントを塗りかけた狹い池の中で、蹲んだり尻をもつたてたりしてゐる。池の側では土曜びけで學校から歸つて來たばかりの三番目の令息が鍋の缺けたのに入れてセメントと小砂とを一所に練ると、女學校に上たばかりの令孃がそれを移植鏝に入れて桂月翁の前に差出してゐる。

『昨夜歸りました。歸りは夜でしたから厭でしたが、行きは靜かな日で、海が綺麗でした。それに輕便鐵道は不快ですが、山の腰を曲り曲りして、眼下に海を見下ろして行く道の景色は一寸面白いですね、彼の道には密柑の木が多いから、それが赤や黄に熟した頃通ると好いと思ひました。』

私は小田原熱海間の輕便鐵道の話をしながら、庭を

其所此所と歩いた。庭の中程には、緣に芝草を生やした圓く支切つた花畑があつて、それに圓珠蘭と言ふ水仙の大きなやうな青々とした長い葉の澤山ある植物が植ゑてある。蘭の傍には本當の水仙も植ゑてあつた。私はその周圍も廻つた。

「湯河原の停車場に柳が一二本ありますね、何故か私は彼の柳と幸德秋水と關係があるやうな氣がしますね。それは彼所で秋水が東京に歸らうとして汽車を待つてゐると、東京から遣つて來た檢事に抑留せられたと言ふ以外にですね。行きには連れがありましたから、直ぐ彼の幌馬車の古いのに乘りましたが、歸りは一人で車で來て、茶屋に寄らずに停車場の待合へ來ましたから、何時ものやうに柳の下へ行つて、秋水の事を思ひましたよ。丁度四時頃で、芽を吐いたばかりの柳に夕日が赤く淋しさうに當つてゐました。秋水と言へば嶺雲も矢張り彼の日、湯河原の警察へ呼ばれたですね、何でも呼ばれる時に琵琶記か何かを持つて行つて、待つてゐる間にそれを讀んでゐたと何かに書いてあつたが、嶺雲は馬鹿に臆病でしたから、讀んでも文句は分らなかつたでせうよ。」

圓珠蘭の植つてゐる花畑の曲線と平行して、凹んだ八の字の形をした花畑が左右にあつて、左にはチユーリツプを植ゑ、右にはアネモネ、ヒナギク、ラツパラン、プリムローズだの言ふ物を植ゑてあつた。その先は植込で、梅や楓などがぎつしり植つてゐるので、梅雨の頃は、茂りに茂つた青葉に注ぐ雨の爲に庭が佗しく鬱陶しく見える。私は植込の中へも無意識に這入つて行つた。

嶺雲の臆病であつた事は同人間に知れてゐるので、桂月翁も微笑した。「停車場のある所は門川と言ふのですね、彼所は一寸好い所ですね、相模の海に突き出て來た箱根の山が、左右に遠退いて湯河原の谷を作つた爲に、却て山が雄大に見えますね。それに湯河原の山は、殺風景に尖つてゐないで、圓くブクブクしてゐるので、第一感じが好いですね。停車場から溫泉場まで一里位はありませうね。馬車に乘つて這入つて行く所

は、山も好いが平地も好いですね。今は丁度、畑は青青した一面の麥で綺麗でした。それからぼつ〳〵ある人家の入口には、水車の廻つてゐる所があつたり、橙の多い所で、人家の垣根などには、黄ろな大きな實のなつた橙の木があるのも好い心持ですね。未だ早いので、杏ばかり咲いて、櫻も蕾であつたが、橙の實があつたので、春らしい氣がしました。彼所は川も好いですね。本流か藤木川ですかね。左樣、左樣、溫泉場の入口で落込んでる支流は千歳川ですね。綺麗な水ですね。何時か夏の初に行つた時は、天野屋の前の水の中を箱眼鏡で覗いて、魚を突いてゐる男がありましたが、今でもその印象が繪のやうに殘つてゐるのです。私の今度行つたのは、藤木川の本流と千歳川の落合つた少し上で、前には川と川との間になつた小丘があつて、其所に大倉と言ふ陶器商か何かの別莊がありますが、その別莊と私のゐた溫泉宿との間に起つた面白い事件がありましてね、』『何だね、』と桂月翁は、身體を起して、脊延びをしながら、同時に左右の手を蛸のやうに振廻はして、クチクチと關節を鳴らした。

二

湯河原の溫泉場は、藥研のやうになつた藤木川の谷間にあつた。その溫泉場の入口に近い所に、『福住』と呼ぶ土地では第二流　屬する溫泉宿があつた。亭主は兵隊上りの顏の小さな、人の好い男で、毎日のやうに停車場に往來して、客を送つたり、客を迎へて來たりした。酒好きで、時とすると、客を送つて行つたなりに、停車場附近で飮んでゐる事もあるが、お神さんは、小肥のした勝氣な女で、人の好い亭主を相手にして、一人で家の中を切つて廻はしてゐるやうに見えた。

一體何處でも同じ事であるが、溫泉場で第一流の旅館となるには、好い溫泉の湧出する泉がなくてはならぬ。質は土地によつて如何ともしがたいから、それは別として、先決問題は溫泉の量の豐富と言ふ事である。湯河原でも『天野屋』とか『中西屋』とか言ふ第一流の溫泉宿には、泉を二つも三つも構へてゐるが、福住などになると、他處から溫泉を分けてもらつてゐるので、

客が多くても湯が少い爲に、皆その客を迎へる事が出來ない。こんな事で、福住の方でも、どうかして溫泉を掘りたいと思つた。然るに福住の家のある所は、昔し自然と溫泉が湧いてゐて、農夫などが、寒い時、鎌や鍬の柄を洗つた所だと言ふ者があるので、必らず屋敷中に湧いてゐる所があるだらうと言つて、明治四十五年になつて試掘願を出した所が、大正三年になつて許可になつた。で、翌年の九月から著手する事になつた。掘り方は上總掘と言つて、大きな鐵棒の先を鋭くした物で、揉拔井戸を掘るやうに、コツ／＼と岩に穴を開けて掘りさげて行く方法であるから、一日に一二寸しか掘れない事もある。掘手も二人ばかりで、小さな小屋を作つて、小屋の中に水車のやうな車を仕掛けて、それを廻はして調子を取りながら、鐵棒を地中に突き込むのである。

福住の建物は、玄關を中に左右に二棟になつた小さな二階家で、垣根もない裏庭の先には藤木川がザアザアと岩に當つて鳴つてゐた。川幅は十五六間位しかない。向うは藤木川と千歳川との中間になつた小丘で、權現山と言つて頂上の方は村の共有地であつたが、裾の方に別莊を持つてゐる大倉と言ふ貿易商が、遊園地にすると言つて村から借りてゐると言ふ者があつた。福住から見る大倉の別莊は、杉の生垣をした花畑でもあるらしい所を中にして、右の方の一段高くなつた所に瓦葺の平家があつて、それは河縁に生へた樫の大木に一半を被はれてゐた。杉垣の左の方には、煙突のあるトタン葺の炊事場があつて、それに並んで小さな二階と平家とが喰付いた建物がある。壁は鼠色であつた。其所は昨年の暮から湯河原に來てゐる西園寺侯の滯在してゐる所であつた。炊事場の背後、靑々した木の枝の垂れた下に湯殿の屋根が見えて、其所から落つる湯は、炊事場の下の石垣に付けた穴から流れてゐる。

福住の方では愈々鑿掘にかゝつて、はじめは裏庭の浴室に近い方を十五六間も掘りさげたが、どうも思はしくないので、場所を變へて、右の棟の軒下を三十間ばかり掘ると、年の暮におし詰つて、果して好い溫泉

に行き當つた。で、今年の正月三ヶ日を濟まして、四日になつて穴の口に四間ばかりの鐵管をさし込んだ。

この時亭主は、緣側に腰をかけて、煙草を飲みながら、掘手の鐵管をさすのを見てゐた。二時過ぎの風の無い日で、衣服を著更へた女中が二人、玄關側の梯子の上り口で、何か言つて笑つてゐた。と、鐵管をさし込み終つた一人の掘手が「アッ」と言つて背後に飛びすさると共に、熱い沸き立つた湯が噴き上げて、地上から二尺ばかりも立ち昇つた。「出た、」「出た、」と言ふ聲が掘手の口からも亭主の口からも出た。お神さんは拭いてゐた盆を持つたなりに飛び出て來た。女中も飛んで來た。ぽつ〳〵ある二階の客は、障子を開けて廊下に出て、欄干を掴みながら下を見下ろした。

その日から翌々日にかけて、福住では騷がしい酒宴が始まつた。支切りなしに三味線が鳴つて、それに連れて種々な歌が唄はれた。客は騷々しくて眠られなかつた。その二三日は、客は宿の人から捨てられたやうであつた。鈴を鳴らしても、手を叩いても、何人も上つて來る者は無い。「何んだ馬鹿々々しいッ」と客は舌打して憤つた。

會に亭主が顏を出すかと思ふと、客の言葉は耳に入れないで、「へい、手前どもも是れでやつと一人前になりました。直ぐ家も建て直しますから、來年からは少しはお客樣の居心地も好くなります。第一湯を他處から貰つてゐちや、商買にはなりません、へイ、」と言ふかと思ふと、その儘フイと出て行つた。客は瞠若に取られた。

溫泉はやがて急拵の樋で、浴室に送られた。湯のすくない溫泉宿の中には、分けてくれろと言つて相談に來るものも出來た。その中に誰云ふともなく大倉の別莊の湯が減つたと云ふ噂が立つた。「今日は眞鶴警察の部長が來て、駐在所の巡査と一所に、大倉へ調べに行つた。」と云ふやうな事が福住の耳に入るやうになつた。酒に浸るやうにしてゐた福住の亭主も、流石に之には心配し出した。「もし本當に減つたとしたなら何うなるだらう、」と言つて心安い人に聞いてみたりした。

二月の七日になつて、神奈川縣廳から出した一封の書類が來た。それは先掘者の方に故障が起つたから、溫泉取締規則によつて、認可を取消すから埋めよと言ふの命令であつた。その書類を玄關傍の帳場の机の上で擴げて、亭主と口の尖つた若い番頭とが心配想に小聲で話してゐると、お神さんが障子を開けて這入つて來て、『縣廳から何と言つて來たんです。』と言つた。『大倉の湯が減つたから、我家（うち）のを埋めろと言つて來た。』と亭主が言つた。『だつてそんな無法な事つたら有りやしないぢやないの、』とお神さんは凄い顏をした。

臆氣であるが亭主には溫泉の規則は分つてゐた。後から掘つた爲に、先に掘つてゐた所の湯が減ると云ふ事は、それは不都合であると云ふ公平な判斷は持つてゐた。併し亭主には種々の疑問があつた。第一大倉の湯は溫度が低いので、火を入れねば這入れないに、今度の湯は熱い熱い熱湯である。それが同脈と言ふのは怪しいと言ふのであつた。それに溫泉は、新らしく掘つた時は量が多いが、次第にすくなくなるのは、溫泉を知つてゐる者の常識となつてゐる上に、大倉の湯が近頃すくなくなつてゐると言ふ事も知れてゐる事實であつた。

其所で亭主は番頭を連れて、大倉の湯がどれ程減つてゐるかを調べる積りで、大倉の別莊へ行つて、樫の蔭の平家で監督をしてゐると言ふ男に逢つた。角顏の口髯を生やした監督は、二人を湯殿に連れて行つて、三分ばかり減つたと言つた。何人が調べたかと聞くと、興衞の部長と駐在巡査とが調べたと言つた。『そつくり出なくなつたら、兎も角二分や三分と云ふ事が素人の調べで分るもんか、』と心の中に思つたが、質樸な亭主は、監督に威壓せられて、何も云へなかつた。

福住では親類や知人が集つて、善後策に就て相談をはじめた。相談の結果、縣廳に陳情するが好いだらうと云ふ事になつた。土地の人に顏を見らるゝのが耻かしいと云ふ風をした亭主は、二三人の者と一所に横濱に出けて行つた。

縣廳へ行つてゝ思はしい事はなかつた。先掘者の方

に故障の出來たかぎり、後掘者の方は認可を取消すより外に途はないが、やむを得なければ、先掘者の大倉と妥協して、大倉に故障が無いと云ふ事にすれば好いと云つてくれた。

福住の依賴を受けた二人の者は、やがて大倉の別莊に行つて、監督に逢つて「お屋敷に使ふ湯は福住の方から鐵管で送るやうにしますから、どうか福住の湯を活かして下さい。」と云つた。「他の事なら兎も角、お湯の事は困る。」と云つて聞かなかつた。

大倉との妥協には望みが無くなつた。福住から雇はれた横濱の辯護士の一人は、神奈川縣廳に出頭して、知事に面會したりした。

その中に十五日になつた。湯河原の駐在所から福住の亭主を呼びに來た。行つてみると「未だ湯を埋めないやうだが、埋めなくてはいけないぢやないか。」と巡査が云つた。人の好い小心な亭主も亢奮してゐた。「これから行政裁判を仰いで爭つてみる積りです。」と云つた。巡査は手のつけやうがなかつた。「まア、二十日まで考へてみるが好い。」と言つた。

亭主は駐在所から歸つて、寒い風の吹いてゐる庭に下りて、無意識に溫泉の周圍を廻つたり、樋の繼目から溢れ出る熱い湯に指を觸れたりして、種々の事を考へてゐた。もう十一時頃であつた。掘りかへされて盛り上つた黃ろい土や碎かれた石などの爲に凸凹になつた庭の其所此所には、芽を吐きかけた若い櫻の木が枝を動してゐた。玄關の背後になつた所には、薄氷の張つた池があつて、下に魚の動くのが微に伺はれる。池の傍には槇の木もあつた。

亭主は何か思ひ出して、顏をあげて向う岸を見た。櫻の大木に一半を被はれた平家の前に、鼠色のマントを着た面長の老紳士が立つてゐる。一二度見かけた事のある西園寺侯であつた。「あんな豪い方に口を利いてもらつたら、大倉でもたつた一言で承知するだらう。」と思ひ出すと、何だか焦躁(もどか)しいやうな氣になつて、じつとしてゐられないので、無意識に少し歩いて、又氣が就いてみると、何時の間にか島田に結つた若い綺麗

な女と二人になつた西園寺侯は、山の方に散歩にでも行くのか徑の蔭にかくれて行つた。

福住へは朝晩に種々の人が集つて來て、頭をあつめたが好い考も出なかつた。やるなれば行政裁判であるが、亭主をはじめ皆の頭に、先夫的に、『お上と爭ふては爲にならぬ。』と言ふやうな迷信があるので、思ひ切つてこの手段に出やうと言ふ者もない。その中に十九日となつた。翌日は埋めるか埋めないかを決せねばならぬ日である。で、最後にもう一度縣廳と大倉とに運動する事にして、縣廳にはその前日、大倉にはその日、手を分けて人を遣つたが、大倉の方は依然として放ねつけられた。亭主の父で隣り部落にゐる老人をはじめ親類や知人の者が六七人集つて、縣廳から歸る人を待つてゐた。『二三分減つた所で、一軒の家で使ふ湯ぢやないか、此方はこれが身上になる。それに鐵管で湯をやらうと言つてゐるにそれを聞かないのは、餘り因業だ。』と何人かが言つてゐる所へ、縣廳へ行つてゐた者が二人で歸つて來た。『縣廳の方では、三百をよこしたと言つて、辯護士をやつたのに氣を惡くしてゐるが、それでも同情してくれてゐる。併し大倉の方で故障を言ふ限りは、埋めるより外に仕方がないから、それは埋めて外を掘るが好いだらうと言つてくれた。』と言つた。

『裁判をして勝てば好いが、それで負けでもしたら、その費用でも大變だ。それはもう惜しいには違ひないが、縣廳の方でも左樣言つてくれるなら、思ひ切つて埋めて、別に掘るとしたらどうだ。』と福住老人が言ひ出した。亭主ももう諦めてゐた。『左樣だ。仕方がない。埋めやう。』と言つた。何時の間にか傍に來てゐたお神さんは、『そんな事はない、何故埋めます。』と非常に亢奮した聲で言つた。その聲を聞くと皆が顏を見合はすやうにした。

お神さんは突然縁側に出て、足袋のまゝで庭に下り、走るやうにして川縁に行つた。『大倉の畜生ッ、鬼ッ、畜生ッ、』と叫ぶ甲高い氣味の惡い聲が、ザア〱と鳴る溪の音を壓して聞えた。『大倉の鬼ッ、畜生ッ、鬼ッ。』

亭主は驚いてそゝくさと庭に下りて、お神さんの傍に行つて「おい、みつともない、おい、」と聲をかけたが、お神さんは振返りもせずに、氣味惡い叫びを續けた。客が二階の障子を細目に開けて頭だけ出して見はじめた。隣家の庭にも物陰にかくれて、毬栗頭や銀杏返などが見えだした。

亭主はお神さんの胴に手をかけて、此方向けやうとした。お神さんは手を振つて「好いよ、好いよ、捨てておきなさいよッ、」と言つてチラと振返つた眼は鋭く光つてゐた。「好い事はない、みつともない、」と亭主は摑んだ手に力を入れて、引ずるやうにしてお神を連れて來た。お神さんは皆のゐる前の緣側に行くと、「口惜しい、口惜しい」と言つて泣いた。

もう夕方であつた。人々は唖然として座つてゐた。お神さんの泣聲が際立つて聞えた。「乃公も口惜しいが仕方がない、毎日皆様にもお氣の毒だ。思ひ切つて埋めるぞ。」と福作老人は力のある聲で言つた。人々はお神さんに氣を取られながら、埋めるより外に仕方が無いと言ふやうな事を、それからそれと言ひ合つた。何時の間にかお神さんは、復た川緣に立つて、「畜生ッ、鬼ッ、大倉の鬼ッ、」と叫びはじめた。寒い風はお神さんの裾や亂れた頭髮を吹いて物凄く見えた。

亭主は又追かけて行つて、狂ひ叫ぶお神さんを連れて來た。お神さんは勝手ににじり上つて、「口惜しい口惜しい、」と言つて泣くのみで、何人が何を言つても耳に入れない。まるで發狂の狀態であつた。人々は湯の事よりもお神さんの身體を心配しはじめた。

夜になつても一二度お神さんの叫び聲がした。翌日は二十日である。亭主は人夫を指揮して、溫泉を埋めた。併し何かの都合で使用出來ないとも限らないので、底の方はその儘にして、上の方ばかりを埋めた。その間、お神さんは川緣に立つて、「大倉の鬼ッ、覺えてゐろ、畜生ッ、どうするか見てゐろッ、」と言つて叫んでゐた。亭主は手の付けやうもないので、緣側に腰をかけて、三人の人夫の溫泉を埋めた跡の地ならしをするのを見ながら、澁い顏をして煙草を喫んでゐた。

『旦那、』と言ふ年老つた女の聲がした。見ると五十前後の大柄な赤ら顔の女が傍に蹲んだ所であつた。女は西園寺侯が來た爲に、臨時に大倉の飯炊に雇はれたものであつた。湯河原の農夫で、平生は福住に出入して、洗濯をしたり用達をしたり、夏場の客の多い時、一軒から貰つてゐる湯では足りないので、他に湯を貰つたりする時には、この女がポンプで汲み上げたりした。

『旦那、大變な事になつたもんですね。』と言つた。『小母さん、ひどい目に逢つたよ、第一あれが、』と亭主は罵り疲れた風で此方を向いて來るお神さんの方に目を遣つて、『あれが狂氣のやうに騷ぐので、みつともなくつて仕方がない。』と言つた。『なに、あれが好いのですよ、お神さんがあゝ言つてゐれば、屹と西園寺の殿樣のお耳に這入るから、這入れば監督さんを呼んで何とか言ひますよ、左樣なりや、大倉さんの方が無理だから、何とかなりますよ。』と女は言つた。亭主はふと駐在所に呼ばれた日に、西園寺侯を見かけて考へた事を思ひ出した。

その夜、裸蠟燭をつけたお神さんは、暗い庭の中を彼方此方して、『大倉の畜生ッ、鬼ッ、呪ひ殺すぞッ、』と叫んだりした。蠟燭の火がチラ〱して、青白いお神さんの横顔と蠟燭を持つた指とが物凄く浮き出て見えた。亭主はもう庭に出てお神さんを呼んで行かうとはしなかつた。お神さんの聲は、絶えては、又續いた。

翌日になると駐在所から亭主を呼びに來た。亭主が行つて見みると、『細君が大きな聲で、大倉を罵詈するさうぢやないか、言はせないやうにしなくてはいかん。』と巡査が叱つた。『いや、それは私の方でも困つてをります。いくら言ひ聞かせても、まるで狂氣ですから、どうか旦那から說諭して戴きたうございます。』と亭主は多少皮肉な言ひまわしをした。『そんな事を云つては困る。お前の家内だからお前が云へ。』と云つた。

その日の事であつた。西園寺侯のお附の若い女が炊事場に來て、飯炊の女に向つて、『小母さん、向うの宿屋の女の方は、何うしたと云ふのです。』と聞いた。『あれは、あすこの福住と云ふ家で、お湯を掘つた所が、

此方の別莊のお湯がすくなくなりましたさうで、警察から八釜しく申しまして、昨日とうとう埋めましたから、もうお神さんが發狂のやうになりまして、可愛想でございます。」と飯炊の女が云つた。

「さう、ほんとに可愛いさうね、どうかならないでせうか。」

「人を雇うて、横濱の縣廳にも行き、此方にもお願ひ致したさうでございますが、どうも都合が惡いさうで、はい、それに四百圓程もお金を入れたあげくでございますから、可愛さうでございます。此方へは福住の方から鐵管でお湯をよこさうと申しておりますから、此方で故障を言はないでゐて下さると、福住の方は大助りでございますが、さうも行かないので困ります。」

「眞箇に大倉さんも因業ねえ、妾、殿樣に申上げますわ。」

「はい、どうかお願ひで御座います。殿樣のお言葉がかゝりや、大倉さんでも承知してくれませう。」と女は眼に涙を浮べて云つた。お附の女は、別莊では「お女中さん」と云つてゐた。お女中さんが出て行くと、女は起つて臺所のガラス窓を細目にあけた。もう二時頃のうす日のさした福住の庭前には、お神さんが例の通り大聲で罵り罵りしてゐた。

その夜おそくお湯に這入りに行つてゐたお女中さんは、かへりに臺所に寄つて、「小母さん、殿樣に申上げたら、それは氣の毒だ。乃公がそんな事に口は出せないが、どうかして遣つたら好ささうだと仰つしやつたわ。」と云つた。「それはもう豪いお殿樣の事でございますから、下々の事にお口添えは出來ますまいが、殿樣から今のお言葉があつたと云ふ事を福住に申しましたら、どんなにか悅びませう。」と云つて女亦涙を滴した。

翌朝、女は隙の出來るのを待ちかねて、急いで福住に行つて、お女中さんから聞いた西園寺侯の言葉を傳へた。帳場にゐた亭主は、「西園寺樣から、斯う云ふお言葉のあつたのは、せめてものことだ。もう愚痴はよせ。」と云つて廊下から覗き込んでゐる蒼い顏をしたお

神さんの顔を見て云つた。お神さんは何も云はなかつた。

その日からお神さんの大倉を呪ふ聲は聞えなくなつた。

三

『私の行つた時は、もう西園寺侯はゐなかつたのです。そして歸る朝、階下に行つてみると、亭主が帳場へ坐つて、玄關の前を掘る事にしたから、願書を書いてゐると云つて、下手な字で一生懸命になつて書いてゐたから、書いてやりました。』と話して來た私は、圓い花畑と右の花畑との間に据ゑた底の破れた釜に、三疋の龜の子を入れてあるのを無意識に見てゐた。龜の子は射し込んだ暖な日に脊を曝して眠つてゐた。桂月翁は飽きもせずに切々と池を塗りながら、私の話に耳を傾けてゐた。

縣居の九月十三夜

文學博士 佐佐木信綱

幕府中興の名將軍八代吉宗の孫なる家治が、十代將軍の職を襲うたのは、四年の前となつた。後櫻町皇天が踐祚し給うたのは、二年の前となつた。圖書集成一千卷が舶載し、朝鮮の正使鄭尚淳が來たのは二月のこと、その六月に、寶曆十四年は改元して明和元年となつた。この年九月十三日の夜は、空に塵ばかりの雲もなく晴れ渡つて、朗らかな明月は、江戸の八百八街を照らした。

當時六十八歲の高齡に達し、幾百人の門下の師と仰がれて、江戸に門戸を張つてをる多くの儒學者の中に

一畝圓の觀を爲してゐた賀茂眞淵は、かねて濱町(二)なる本矢倉に地をトし、舊居を引移して半ば改築の工事にかかつて居たところ、落成を告げたので、この夜親しい門人の誰彼を招いて、月見の宴を催したのであつた。家は山伏井戸(三)から東に當る中通りで、福王甚左衛門の東隣に位し、細田丹後守とて御勘定頭で名のあつた人の子、細田主人時行といふ御小姓組の旗本で、五百石を領じて居る人の地百坪あまりを春頃から借りて、普請はこの七月(四)十七日に始め漸く造作が終つたのである。

隅田の流に近い東の方の本屋には、二階もあり、土藏も添うて居るが、今宵月見の宴を開いたのは、福王家に近く建てた隱居家で、それは眞淵が特に心を用ゐた古ぶりの家である。屋根は板葺で、西(五)の方に入口があつて、そこは板敷になつてゐ、上にあがると四方は庇の間で、中央の高くなつた長押の上に、四疊半の母家がある。天井(六)はくろへ杉で、棹縁にはさらし竹を用ゐた。南庇(七)と西庇の半とは開き戸で、常は簾を垂らすやうにしてあるが、今宵は捲き上げてある。東庇の下半は板壁、上半は半蔀で、その間の南の隅には、瓶中に松を挿したのが置いてあり、其傍に、今宵の祝にとて贈られた菊の造花を立てて遣水をあしらうてある洲濱が飾つてあり、北の隅には、書架と文机と柳筥が据ゑてある。北庇は襖でしきつて、勝手に通ふやうにしてある。

家は南に面し、數十坪の庭の面が月の光に限なく照らされて居る。西の方に當つていささか土を盛り上げ廻りに若松を植ゑて穴藏をこしらへた。——眞淵もさきに延享三年二月火の災に遇つたが——當時江戸には屢々大火があつたので、市人の家の余地ある者は、萬一の際の用意にとて、多く庭中にかく穴藏を設けたのであつた。

穴藏の東の方は、殊更(八)に野邊や畑のやうに造りなしてあつて、青菜(九)も植へてあれば野蒜も垣根に近くある。むかし笏にしたといふふくら(一〇)の苗木を、箱根山から堀らせて來たのも二本ある。また、萬葉集中の産物をあつめて居るので、越前の青木(一一)松珀に賴んで送つてもらつた堅香子もあり、上總から取よせた黑慈姑の小さい

惠具方言、相模から子弟がもつて來た山菅方言などを植てある。草村のこゝかしこには、清い月の光を仰いで、こほろぎや鈴蟲が頻りに鳴いて居る。

眞淵はすでに老境に達し、かつ近年病がちであつたが、(一二)髮は茶筅結びにして、長い眉、清い眼、頬はゆたかに赤みを帶びて、意氣は少しも衰へなかつた。この夜は殊に心地よげに、門人らとさまゞゝの物語に興じた。歌は(一三)おのづから成るもので、しひて詠むものでないと常にいうて、かゝる席上などではよまぬことのある彼も、今夜は數首を詠じ、好物の(一四)蕎麥や、故郷から送つて來た(一五)干魚を味はうて、拘杞の實を入れた(一六)やはらかい自用の酒を數盃かたむけた。人々が散じて後も、母屋を片づけさせ、緣近く端居して、清い月影に向つてゐた。

月の光は人をして物思はしめる。老いたる眞淵の心にも、千々の想が往來した。

思ひは、自分の門に集まりくる門弟等の上に及んだ。まづ今夜の宴に列なつた人々に就いても、今年廿六歲の春郷は、眞淵が江戸に來るや、まづ世話になつた村田春道の子で葛飾早稻の新しぼりを土産にして、葛飾の別墅から來た。彼は(一七)人品のけだかい上に、長歌に秀でて、(一八)今宵も即興の作を詠じたが、如何にも身體が弱くて、大きな事は成し得さうにないのが遺憾に思はれる。その弟で、はやくから敎へた春海は、まだ廿歲にもならぬが、漢學に長けて文才があり、老友加藤枝直の子でこれも少年の頃から導いた千蔭は、はや三十歲の男盛になつた。しかし春海も千蔭も、歌は巧みではあるが、どうも自分の上古風の眞意を十分に解して居るとはいひがたい。伊能魚彥と河津美樹とは、年齡も相似た四十二と四十四である。(一九)魚彥は學才は乏しいが、多年いそしんだので、歌に於いては頗るわが意を得て居る。美樹は、(二〇)歌はとかくに出精せぬが、道の學問にはよほど才があり、望がある。他人よりさきに來てさきに歸つた平賀源内(四十二歲)は、今年の春朝鮮の使が來てその宿所なる東本願寺で唱和の詩會があつた時、その和韻を逆書して滿座の舌を卷かしめ、また火浣布を工

夭して香敷を作り、來朝の紅毛人を驚かした。彼は非凡の才子ではあるが、吾が道の人でない。去年の九月入門して建部綾足（四十二歳）は、盡をもよくするが、これ亦翩々たる才子である。山岡浚明（五十三歳）は、年もたけ學問も深いが、畢竟一學究であらうなど思つた。また今宵來なかつた中にも、かの枝直（七十三歳）は、中々重んずべき學者で、その說にはまま聽くべき卓見はあるが、最早あまりに年老いて居る。小野古道は、江戸で最初に入門した弟子で、(三一)先年八年間つづけて成し了へた萬葉の講莚にも、缺かさず出席した熱心家ではあるが、好人物といふに過ぎぬ。女弟子の中では、子供のやうに我を慕つた天才の女歌人油谷倭文子は、十三年前、廿歳の年若さで夭がけつたが、なほ土岐新左衞門の妻なる筑波子や、(三二)片野孫兵衞の女で紀伊家に仕へて居る紅子やかの洲濱を祝つておこせた紀伊御殿の年寄の瀨川（三十六歳）などか、彼の心に數へられた。

先刻春郷が、去年の旅で共に摺つて來た佛足石の碑を掛物にしたよし話したことをふと思ひ出して、連想はつゞいてその大和路の旅のことに走せた。

大和は上代文明の故地として、年久しく彼のあこがれた國土であつた。その宿年の望みを果たして、或は三山をめぐつて藤原の御井の古へを偲び、或は輕の里の夕ぐれに立つて、人麿の妻に別れた悲しびを思ひ、或は藥師寺にかの佛足石の六句體の古歌を(三三)自ら摺り、また吉野を訪うて、萬葉歌人の吟詠のあとを忍んだ感興が、あざやかに浮んでくる。つづいて、壯年春滿の門にあつた頃、馴れ親しんだ京都の優美なけしき、東山や嵯峨あたりの今夜の月はいかにと思ひやつた。それとともに、かねて彼が主張する丈夫ぶりの大和からたをやめぶりの今の京への遷都が、當時の人心の好尙や傾向を一變し、また歌風をも一變したといふことが今更ながら思ひ出された。而して思ひをその平安舊都における皇室の上に馳せると、文永に綸旨を忝うした遠江なる賀茂の新宮の祠官の裔に生れ、しかも數代の祖は東照神君の軍に功をたてて太刀を給はり、自らは今は致仕の身ではあるが、なほ田安家の祿を食んで、

德川幕府に對しても忠順の心を忘れなかつた彼の心にも、その本來の精神たる勤王主義の炎は燃え立つた。それにつけても、皇室(二四)が江戸に遷都ましく〱て、幕府の上に立つて大御勢を振ひましまさむにはと、思ひこゝに至つては、彼の眼は曇つた。

十三夜の月はいよ〱冴えた。庭の草叢の虫の音はいよ〱淸くきこえる。彼は傍らなる杯をとつて、酒をのみつゝ靜かに家のうちを見めぐらした。その古(二五)へを慕ふ心から、家作りや調度の上にも凡て古へぶりにならつて、自分の心に協つたこの棲居を作らうとて、盡くして來た苦心の數々が胸にうかんだ。今までの家の近所の物騷がしさに、いづこかに移りたいと地を求めた。初め神田のお玉(二六)が池のほとりを望んで無く、漸うこの地を借ることが出來た。弟子の中でも魚彥が程近いところに住んでも居、また世話ずきでもあつたので、大工の事ども一切を托して、三十兩(二七)餘りで渡しにした。もとの家を引いて來たのではあつたが、しかも造作は豫想外にかかつた。田安侯からは內々に拜領金(二八)があつたが、それでも足らなかつた。平素門弟に對しては、師として一歩もかさないで、嚴然たる態度をとつてゐた彼も、さすがに此度は緣故の深い男女の門弟から、應分の金子の寄與を心ならずも請ふに至つた。其外いろ〱の煩はしい事があつて、著述に專らならむとする彼の心を亂す事が多く、寧ろ中止しようかとも思うたほどであつた。それが漸く成つたのであると思ひつつ、あたりを見まはした。机の上には今朝ほど濱松の眞淵のもとから來た手紙が置いてあつた。

思は轉じて故郷へ往つた。

濱松(二九)の宿を西へ出はなれる處の右の山下に見える里、昔は岡部郷といひ、いま伊場村といふ、其處こそは彼の生れたところである。祖先が齋きまつつた賀茂神社のうしろから、松の生ひ茂つた丘陵は、宇布見村へ通ふ道を十町あまり西に續いて居る。南は水田で、その向うに東海道の松並木が見える。棟の木と榎とが枝をさしかはして居る垣の内の廣い一かまへ、そこで二十歳を過した。その家と間近く住んだ從弟岡部政長

の女のおもかげがふと浮んだ。

　彼の面わには、若さがかゞやいた。

　思ひあうた少女を妻とした春、船を濱名湖に浮べた名も美くしき引佐細江の、水盡きんとして盡きざる細江また細江の幾つを見つゝ、舘山寺の裏山にのぼつて、岩躑躅のかげに割籠を開いた——春は逝き、うら若い妻は涙と彼とを此世に殘した。歎に沈んで一度は眞言の僧(三〇)にならうとまでしたのを、あるまじき事といさめられて美くしい面影の忘れがたさに、强ひて親んだ古代の書や、友とし代はつた濱松諏訪の大祝杉浦國頭、五社の神官森暉昌などとの上つ代の物がたりは、數年にしてからうじて彼の心を轉ぜしめた。運命の手は彼を濱松の本陣梅谷の若き主人たらしめた。長子眞滋は生れた。しかも讀書人たる彼の性行は變らなかつた。第一の妻のうつくしさ、やさしさにかふるに、第二の妻なる梅谷の女には賢しさがあつた。一逆旅の主人として終るべきであつた彼は、この賢しき妻の激勵により、家を捨て妻子を置いて、古學を研むべく京都に上つた。そこには、國學校を創設しようとした老學者——かの杉浦國頭の妻の伯父なる荷田春滿が彼を待ち迎へた。

　老いたる妻、年たけた子、また謹嚴な師の面影は、浮んでは消えた。

　一度雲に入つた月は、再び出でて光り輝いた。千年の昔から千年の後に不朽の光を放つ月の光といふことを思ふと彼の思ひは、その畢世の事業とする古道の上に馳せた。もはや殘んの齡幾許もないといふ感はたゞひとり古道の奥處を極め盡くしたとの自覺ある彼の心にしみ／＼と感ぜられた。今にしてわが身死すとも多く遺憾はない。わが實子はわが家の跡を嗣ぐやうにならなかつたが、わが精神上の子たる數々の著述、殊に自分の爲に最も快心の文字たる冠辭考、萬葉考は、一は刊行し、一は稿しをへた。吾が道はこれらの書によつて不朽に傳はるであらう。しかも筆を以てしても或程度以上は傳へがたいわが古道の眞精神、或は老莊の末流とそしり、或は古文辭の模倣とのゝしるときく儒者一派の攻擊の如きは、もとよりわが道を眞に解した

ものでないが、後世虚僞の世の心を以てしては到底解しがたいわが古文明の、をゝしくもたけく、また自らなる精神、かの萬葉の歌のうちに現はれた不朽の古文明のけだかい心、こは如何にして傳ふべきであらうか。思ひこゝに至つて、彼の心はいふばかりなき寂しさにとらはれた。この時彼の眼にうかんだのは、松坂の一夜、旅宿の行燈のもとに對した若い本居宣長の面影であつた。

去年の五月、大和路の旅を終へ、神宮に詣でて五十鈴川の清き流に心をそゝぎ、鳥羽の日和山に遊んで伊良虞が崎を遠見はるかした歸さであつた。松坂本町なる新上屋(三一)に宿をとつて、間もなく訪づれたのは本居舜庵といふ人であつた。同行の弟子の春郷等は別室にくつろがせ、座敷に通して引見した。打見たところ、三十を越えて間もない壯年で、温和な爲人のうちにも、才氣が眉宇の間にほとばしつてゐる。その語るところをきけば、少壯にして京都に遊學し、醫術を學び、廿八歳の冬松坂に歸り、醫を業として居るが、京都留學時代、契沖の著書を讀んでから古學に志したに歸郷の後わが冠辭考を得て讀んだに、初めはその眞意をさとるを得ず、數回讀み味はつて、古べよりの心詞のまことに然る事をさとり得たよしで、その造詣も中々深く思はれた。なほその語るところをきけば、年來古事記を註釋するの志があるよしで、その盾疑も緊肯を得てゐる。その學殖識見頗る稱すべく、賴もしく思はれた。年こそ違へ、自分もまた知己を得た思ひがして、自分もかねて古事記に志したが、その階梯として萬葉にかゝり、今や年たけて、日くれ道遠しの感がある。是非御身によつて古事記の研究が大成されむことをまつ。併し順序として萬葉の研究から入らねばならぬといふことを、くはしく說いた。この訓誡を聽いた宣長の顏には、燃えるやうな熱心と、貴とい敬虔の情とがあふれた。その夜の光景こそは、今まさに彼の心にまさやかに思ひ浮べらるゝのであつた。

こをえにしとして、(三二)今年正月誓詞をおくつて入門してからは、絶えず文通して、道の學びについて、問は

れもしく教へもするにつけて、いよ／＼道のため頼もしく思はれる。思うて斯の人の上に至つた時、高い峰の頂に立つて、ひとり月明に對するにも比ぶべき彼の孤獨の心にも、いひしらぬ喜びが湧きあふれた。

彼はまた杯をとつた。

(三三)うまらに喫らふる哉や一杯二杯、
ゑら／＼に掌うちあぐるかねや三杯四杯、
言直し心直しもよ五杯六杯、
天足らし國足らすもよ七杯八杯、

彼は聲たからかにうたつた。月は靜かに沈まんとした。

近代の歌人中、予が最も景慕にたへざるは賀茂眞淵なり。去年の六月濱松なる彼の舊居を訪ひ、今年六月熱田なる岡部家をとひ、史料を探り得し結果、縣庵と眞淵、眞淵傳資料の二篇をものしぬ。今また史料をもとゝし、幾分の想像をまじへてこの一編を試みぬ。ゲエテが詩と眞實のたぐひといひつべくや。

註
(一)眞淵贈眞滋書(古澤良作氏所藏)
(二)縣居の歌集
(三)眞淵贈眞滋書
同贈魚彦書(佐久間長敬氏所藏)
明治四年豐田長敦の文書(竹柏園所藏)
縣居大人の書跡、佐岡正胤
濱町の今昔、相賀調雨
縣居考、戸川殘花
(四)眞淵贈土居善次郎書(萩野由之博士所藏)
(五)內山眞龍畫縣居圖(岡部譲氏所藏)
(六)四に同じ
(七)五に同じ
(八)二に同じ
(九)村田春郷家集
(一〇)眞淵贈飯田彌兵衞書(根岸氏藏)
(一一)眞淵贈松珀書(濱千鳥)
(一二)眞龍畫眞淵像(和歌史の研究)
(一三、一四)ふぶくろ
(一五、一六)一に同じ
(一七)村田春郷墓碑
(一八)九に同じ
(一九)眞淵贈宣長書(本居清造氏所藏)
(二〇)さきくさ
(二一)小野古道家集
(二二)縣門略傳
(二三)眞淵贈祐利書(福田氏所藏)
(二四)眞淵の遷都論(心の花)
(二五)賀茂翁家集序
(二六)ふぶくろ
(二七)眞淵贈魚彦書
(二八)眞淵贈眞滋書及ふぶくろ
(二九)賀茂の川水
(三〇)玉たすき
(三一)本居宣長日記及玉かつま
(三二)泊泊筆話及縣居門人歟
(三三)賀茂翁家集

人物評論（七十六）

再び居据れる大隈首相



▽二たび居据れる大隈首相

鐵拳禪

一

首相大隈の辭職內奏を以て、彼れの腹藝なりとする者と、單に風評に過ぎずとする者と、二樣の觀察あり。一は現內閣の反對派及び、多數國民の是認し、若くは推斷する所にして、一は現內閣の與黨及び少數同情者の切りに辯じて止まざる所なり。其の眞相の何れにあるかは、現下の如き政爭の爲めの政爭

に熱中し、黨情の紛糾錯綜せる政界にありては、簡單に容易に判斷する能はずと雖も、少くとも後繼首相問題の政界の視聽を惹き、元老間の話題となり、天聽にも達したるの事實は否定すべからず。然るに之を辯ずる者は、瓢箪より駒の出でたるもの、素より嘘より出でたる誠に過ぎずとなせども、之を非難する者は、畢竟ずるに老獪爺の仕組める一狂言にして、其の意想外に出づるに於ては、彼れは不本意ながらも辭職せざる可からざりしならんと嘲笑せり。而も首相大隈は、政界の霖雨一過の後初秋の纎月を仰いで哄笑一番せり。宛然是れ、老狸の月明に對して、腹鼓を搏つの感なくんば非ず。

首相大隈は大言壯語の人にして、腹藝の人に非ずと雖も、亦一種の腹藝を有す。而して其の腹藝は、時に惡戯となり、時に陰險となり、時に詐謀となりて露はる。一體佐賀人には、二種のタイプあり。一は腹藝の人にして、深默寡言、眞實を以て人に接し、信望を以て人を率ゐんとす。一は大言の人にして、才氣縱横、虚言を恥とせず、狡智猾策を弄して他を懷柔し、操縱せんとす。一は信望上の首領となり、能く久しきを保つべしと雖も、一は當面の一時を糊塗するに止まり、其の箔の一たび剝落し來れば、又以て如何ともすべからざるの窮地に陷ること往々なり。前者は故松田正久之を代表し、後者は侯大隈重信之を代表すれども、今日の侯は自己本來の型に、更に他の特長異色を加味せり。されば彼れは大言を以て一時を瞞過すると同時に、腹藝を以て當面を魅了するの工夫を積めり。故に單純に、外面的に彼れを觀察して、彼れに些の腹藝なしとは斷ずる能はず。

今次の事、彼れの腹藝の幾許程度まで働けるかを知らずと雖も、多少の腹藝を加味せるは疑ふべからず。既に多少の加味あり、其の辭職内奏を以て、彼れが腹藝の全部なりとは猜するを得ず。吾人の見る所を以てすれば、辭職内奏の事、半ば眞許にして、半ば腹藝の產物なり。若し半ば腹藝の發動に非ずして、全然他の陰險なる手段に孕胎せりとせば、大言彼れの如きにして、口を緘して、秘密裡に葬るの理由はあるべからず。彼れは周圍の迷惑を慮り、左右を顧みて、狐疑逡巡する程に惡辣に對して用意周到ならざればなり。然るに敢て之を發せざるは、反對黨に乘ぜらるゝの危險あると、官僚派の術中に陷るの虞あるを知るに由る。是れ彼れが羹に懲りて膾と吹くの愚にあらずして、膾は即ち膾として食はんとするの怜悧に外ならず。彼れは官僚の羹を吹きつゝ政黨の膾に箸を下し、二つながら巧みに之を味ひ、以て自己の滋養として之を攝取するに汲々たり。年齒八十、體力未だ衰へず、頑健壯者を凌ぐの概あるもの如何ぞ羹に懲りて輙く箸を投ずる者ならんや。彼れは圓滿辭職を決行せんよりは、寧ろ執拗に首相の椅子を頑守し、勢ひ止む能はずんば、官僚に對して最後の血戰を辭する者に非ざるべし。唯彼れの之を決行せざるは、血戰の失ふ所多くして利する所少きを知るが故に、努めて戰鬪を避け、有利なる條件の下に妥協せんと欲しつゝあり。今次の辭職問題の如き、要は此の妥協の下に、官僚の面目を立つると共に、自己の地位を確保せんとするの計をなすに外ならず。

二

新聞の傳ふる所に據れば、首相大隈の辭職内奏は、六月二十三四日の頃なり。而して、此の二十四日は、伯寺内正毅が新に元帥を授けられたるの日なり。首相即ち闕下に伏して、後繼内閣の組織者、伯寺内を以て最適任なりと奏上せりと。或は曰く、子加藤高明をも後繼者の列に併せ加へたりと。更に其の事情を說明して、翌二十五日、地久節奉賀の爲め參内せる侯松方に對して御下問あり、夫れより宮相波多野等の活動を見るに至れりと。此の說の果して仲小路廉、有松英義、或は子三浦梧樓の一人若くは數人より洩れたるや否やを問はず、餘りに芝居の筋書めきたるの感なき能はず。是れ其の事實の眞相を衝き止むる事なく、他の風說――專ら官僚派の流布せる――を綜合して、尤もらしく編み成せるが故なり。

彼れ大隈の辭意を仄めかす、此頃に始まれるに非ず。其の眞意は暫く措き、口辯の如く適當なる後繼者だにあらば、所謂圓滿辭職を決行して、後進の爲めに進路を開かんと公言し居たり。彼れの高遠の理想を高唱して、而も非立憲的行動に陷するが如く、其の言に幾許の價値を附し、幾許の信を措き難きも、彼れは漸く常に左右の人々に喋々せり。殊に御大禮當時は、此の大任を果したる上にて、圓滿辭職をなすも可なりと、黨人にすら洩せる事あり。必ずしも現職に執著し、獅嚙み付かざる者の如くなるも、其の實飽くまでも首相の要樞に座し、與黨の基礎の確立を待たんとするに似たり。與黨の人々も亦自黨發展の必要上、可成長く侯大隈をして其の椅子を支持せしめんとし、陰に陽に其の方策を講じつゝあり。若し侯にして圓滿辭職の意を決す事能はずとせば、其の際必ず子加藤を後繼者に推薦し、以て政權を緊握して離れず、黨勢の膨大を維持せんの後圖をなすべく、裏面運動をなすを怠らず。侯自身も亦自己の將來の爲め、與黨の將來の爲め、自己の辭職する際は、子加藤を後繼者に推薦せんの底意あり。此の事大浦事件の聯帶責任を主張し、外相の椅子を去るの際、子加藤の侯大隈と默契する所なりと云ふも、其の默契の有無如何に拘らず、子加藤を推擧するは、侯の子に報ゆる所以にして、又立憲的行動の當然に進むべき路ならずんば非ず。されば子加藤の後繼首相となるの見込なき限り、彼れは自ら好んで圓滿辭職を成すものに非ず。加之、彼れは今春の議會を無事に通過し、與黨の大多數を擁するに拘らず、圓滿辭職を成すが如きは、立憲的行動に非ずと公言せるに徴するも彼れに辭職の意なきは明かなり。併し、大言侯の事なれば、いつ何時其の主張を裏切りて、自由行動を取るを測られずと雖も、其の獅嚙み付く事に於て人一倍に猛烈なる彼れは、容易に圓滿辭職をなすべしとは信ずる能はず。尤も圓滿辭職をなすに於ては、日露新協約既に成り、功を以て侯爵に陞叙されたる今日、其の絕好機會たるに相違なしと雖も、逆境に處してすら桂冠を肯んざる彼れが、順潮に乘じて勇退せざるべきは勿論、民意未だ再毀の內閣を去らず、國家の大事を控へ居るの際、一身の安全を思ふが如きは臣子の分にあらずと强辯するは知れ切つた事なり。夫の辭職の內奏の如き、若し有りとせば、是れ彼れの腹藝に外なら

ざるべく、然らずとせば彼れの多辯饒舌が、偶ま官僚一派の策士の利用する所となれるなり。

聞く所に據れば、官僚一派は侯大隈の政權を頑守し、自派の勢力日々に蹙まるを憂ひ、如何にもして現内閣を倒壞せんと試み、百方策を講じつゝあり。而して非政府黨たる政友會の徒も亦、同志會の横暴を憎み、之を居らんとせること一再ならず。此の官僚一派、政友會、及び別に陰謀團の稱ある櫻田倶樂部一味の徒は、其の主張は異なるも、現内閣破壞の一事に共鳴する所あり。侯松方を起して、現内閣の不信任的内奏を敢行せしめたるにより、遂に宮相波多野等の活動を見るに至れるなりと。彼れは元肯精系の人物なるも、現下侯大隈と昵懇の關係にあり。官僚一派の利益をのみ圖りて侯大隈を排斥するものに非ず。否今日に於ては、寧ろ侯の宮中に信任淺からざるを觀取し、廓然として侯に傾倒せるの狀あり。曾て侯は隈板内閣の際、伯板垣が辭表を捧呈せるに拘らず、彼れは平然として首相の椅子に頑張り、而も勅答に副はざりしが故に痛く宮中の信任を失し、殆んど政治的致命傷を蒙り、閑雲野鶴を伴侶とするの止むなきに至れり。然るに大正政變後は再び政界に蘇生し、宮中の信任新に深きを加ふるに至れり。是れ恐らくは長閥の專横其の極に達し、其の勢力を驅逐するに非ずんば、國家に及ぼす所の弊竇の尠からざる者あるに由る無からんや。而して之を驅逐するもの、一大隈を措いて他に其人なきに由るに非ざるなきや。彼れの輿望、内閣組織當時の如くならざるに、其の印綬を解かれざるは、彼れの獅嚙み付き主義以外、他に彼れの存在を必要とする理由の存するものと思はざるを得ず。

既に侯大隈の辭職内奏にせよ、侯松方の不信任的内奏にせよ、有力なる一石を政界に投じたる以上、其の平靜を破るべきは當然なり。果して公鷹司の公山縣往訪となり、元老政客の往復となり、官僚一派の策士の暗中飛躍となり、天候の變調と相待ちて、政界の驟雨將に現内閣の牆壁を崩潰せんとせり。而も此の驟雨の、七月五日伯寺内の入京前後に猛襲し來れるを見れば、官僚策士の運動と、何等かの關聯を有するや必せり。彼等は切に伯寺内を擁立せんとし、侯大隈も亦伯寺内を後繼に推薦せりと稱する以上、伯にして一諾せんか、政權の授受は圓滿に了せらるべき筈のものなり。其の授受の、立憲的なるや否やは茲に論ぜざるも、現に角斯くして授受を了するものとせば、侯は即日公式に辭表を提出し、伯寺内に内閣組織の大命が下るべき順序なり。然るに侯は内閣を投げ出さず、其の後繼者に伯を推薦する以上、伯は宜しく現内閣の政策を踏襲し現内閣の與黨を後援とすべきの條件を以てせるに似たり。是れ伯は勿論官僚一派の滿足する能はざる所にして、侯の欲せず、與黨三派の又好まざる所なれば、何處まで進むと雖も、妥協の一致點を見出し得べきに非ず。然らば侯を全然排斥し去りて、伯を擁立し得べきやと云ふに、今日に於ては公山縣の勢力を以てするも、如何ともすべからざる事情にあり。侯大隈の行詰りて、内閣を投げ出すに非ざるよりは、手の付けんやうもなく、再び居据りの儘に居据らしむる事となれり。

三

侯大隈は斯くして現內閣を支持し得たるも、其の難關は決して除却されたるに非ず。現內閣の難關は難關として、依然として其の前途に橫はれり。其の難關とは他に非ず、來年度の豫算編成是れなり。現內閣の倒壞せんとして、倒壞を免れたること二回あり。第一回は卽ち本年度豫算討議の際、上院の反抗によりて不成立に歸せんとせしを、公山縣の斡旋に依りて、辛うじて其の難關を切り拔け得たり。第二回は卽ち大浦事件にして、立憲の本義を辨へなば當然引責辭職すべかりしを、其の椅子に戀着するの結果、纔かに內閣の一部改造を試みて、厚顏にも居据りと決したり。此の時彼れは、政治道德を解せざる者として、一世の指彈を蒙れり。而も下院に大多數を擁する彼れは、民意を高唱して平然たりき。島の事既に過去の問題に屬し、何等將來の難關と見るべからざるも、第一回の妥協に上院と約束せる所の要件は、之を容るゝと否とに由りて、現內閣の死命は制せらる。當時の要件は、次期議會までに國有鐵道の軌制を決定すること、減債基金を復舊すること、製鐵費の全部を豫算に計上することとの三箇條にして、若し之に滿足を與へざるに於ては、明年度の豫算を無事に協賛せざるべきは言を須ゐず。加之、陸軍省が隣國に兵器を供給せんが爲めに執れる從來の會計手續を不法とし、明年度の豫算編成までに之を改善せんことを強要せり。されど陸相は、其の手續を違法に非ずとして、上院の強要を容れざるに似たり。製鐵費に關しては、上院の要求通り全部豫算に計上せる模樣なるも、鐵道軌制に對しては、廣軌尙早を唱ふるもの政府部內に多ければ或は暫く現在の儘となし置くに非ざるや。若し斷かする時は、上院には廣軌論者多ければ、其の不機嫌を買ふや逆睹するに難からず。如上は無難に解決するも、せざるも、其の抗爭の焦點となるべきは、減債基金問題なり。侯大隈が再度の居据に對する憤懣は、必ずや此の問題に就て洩さるべく、現に明かに其の氣勢を高めつゝあり。減債基金の復舊を斷行せざる限り、上院は到底明年度の豫算を無事に通過するものに非ず。然らば政府は上院に讓歩し、其の強要を甘受せば可なるも、現內閣は其の面目上、今更之を復舊すること能はざるの狀態にあり。假に現內閣は涙を飲み、垢を甞めて、其の強要に聽從するも、反隈感情の熾烈なる上院は、何かに苦情を付け、現內閣を追窮せずんば止まず。況んや對支問題と云ひ、選擧法改正問題と云ひ、言論尊重問題と云ひ、現內閣の秕政背信等を責むる材料に乏しからざるに於てをや。下院は大多數の與黨を擁するが故に、政府提案の通過には、多くの苦慮を要せずと雖も、民意漸く傾ける現內閣は、決して少數黨を、侮蔑する能はず。今次の居据りは、難關を切り拔けたるに非ずして、難關の上更に難關を築き、反隈感情を激成せるに過ぎざるなり。

唯侯大隈の此の難關を除去するの方法は、上院の感情を融和するにあるも、彼れの政權を頑守する以上、容易に望み得べきに非ず。彼れは今春上院と妥協の際、暗に辭意を洩したる結果、纔かに三箇條を表面の理由として折合ひたりと稱され、今次の辭職內奏の如きも其の時約履行に外ならずと風評されたる程なれば、彼等は侯大隈の退隱を見ざる限り

其の辛辣なる運動を中止すべしと思ふ能はず。何となれば、彼等は自家存在の必要上、自派勢力の發展上、現内閣を屠るの他に良策なければなり。侯大隈が二年有餘の執政に依り、尠からず長閥の勢力圏を侵略されたるに、搗てゝ加へて三黨首領の會商となり、元老排斥を殆んど公然に決議され、其の勢威昔日の如くならざるを見ては、公山縣乃至、伯寺内子平田の徒は、手を束ねて安閑たる能はず。何とかして、之を挽回せんとするは自然の數なり。是に於てか、彼等は伯寺内の擁立を策し、小異を捨て大同に就き、以て長閥の爲めに圖る所あらんとせり。然るに本尊の公山縣は、政爭の爲めに政爭を惹起せりとの誤解と、非難とを避けんと欲し、遮二無二現内閣の倒壞を好まず、其の自ら窮地に陷り、自滅するの日を待たんとする者の如きも、國家の前途に對して憂心忡々たるものあり。殊に首相大隈の行動に注意し、期を見て倒壞せんとするの氣勢は蔽ふ可からず。高遠の理想を力說する大隈たるもの、須らく憲政の常道に則り、内閣の面目を毀損することなく、官僚一派と最後血戰を試みて、後斃れん事を望まざるを得ず。苟くも袞龍の御袖に隱れ、若くは妥協苟合を以て一時を糊塗するが如き、陋劣なる手段の一切は飽くまで避けざる可からず。

▽大隈老侯に對する希望

早川鐵冶

○大隈侯の批評を早川に求めるのは甚だ迷惑である。二十年の親交があつて、侯の平生を知り過ぎてゐる我輩であるから、却つて餘り無遠慮に言ひかねるふしも澤山ある。又我輩は老侯の出馬を促して内閣を組織させた人間であるから、他の人並に是非の言語を弄して侯を批評するに忍びない理由がある。殊に近頃のやうに上下の信頼に乖いて、ますます人心に飽かれつゝあると云ふやうな評判の高い今日では、我輩などは侯の態度を云々する前に、先づ侯を推擧した自分の不明を天下に謝さなければならないのである。

○山本内閣が瓦解した時分、後繼内閣を組織すべき適任者は誰であるかと云ふ論が起り、世間では澤山の候補者を數へて種々な揣摩臆測を逞うしたものである。就中清浦子の如きは最も有望なる後繼者に擬せられて既に閣員の顔觸れまで定まつた。我輩はそれより二ケ月も前から、侯の意中を探りたる上屢々某方面に向つて活動し大隈侯の出廬を唱へたが、當時は我輩の此說に耳を傾ける者がなかつた。現に今日では同志會で大立物？になつてゐる某の如きも、頭から我輩の大隈說を笑殺して、それよりはまだ加藤君の方が可いだらうと云つた位である。大浦君は迚も大臣になる見込はないと諦めたか、馬を賣り馬車を賣つて了つたものであ

る。處が四月になつて我輩の說が遂に實現された。然るに今日までの侯の御成績を見るに、如何に贔屓眼に見ても、立派なものであるとは思へない。殊に外交に至つては加藤君にしても石井君にしても、非難すべき點はあつても遺憾ながら感服すべき點を見出し得ない。折角骨折つて大隈侯に出て貰つても、事每に期待は外れ、我々の理想通りには行かなかつた。今日の狀態を見ては、侯の出盧に就いては其局に當つて最も奔走した人間である丈け此早川は、國民に對しても申譯がなく、又露骨に云つて官僚元老側にも面目ない次第である。現に元老側から、大隈の近時の不始末も皆お前杯の責任であるとのお小言を頂戴してゐる。

○尤も大隈侯の方では、他の出たのは天下の大勢に推されたので、何も早川の力を藉りた譯ではないと思つてゐるかも知れない。それかあらぬか內閣組織以來兎角我輩の意見は行はれなかつた。一昨年增師問題で政友會と大衝突をした時、我輩は同志會の院內總務をしてゐたが、政友會が絕對に政府と意見を異にしてゐるのではなく、それまでの行懸り上反對するのである事を知つて、圓滿な解決を望んで大隈侯と原君とを會見させやうと解散の前夜まで奔走したのである。所が我輩の言ふ事を聞かず安川敬一郎などを使つて政友會と折衝せしめたので遂に解散した。然して解散の結果同志會は今日の如く大きくなつたのであるから、早川はつまり同志會の大を爲す邪魔をしたものであるなど〻言ふものがあつた。然し我輩は侯をして千載一遇の御大禮に參列せしめて、其光榮ある任務を了へるのを機とし、國民の信賴の薄らがない中に潔よく引退して貰ひたかつたので、解散などをして强いて根を樹へる必要はないと思つたまで〻ある。

○御大典が芽出度終つても大隈侯は依然として辭意が無い。で我輩はせめて支那問題が解決し、日露協商が成立したら圓滿に辭職して貰ひたいと思つた。處が支那問題は袁世凱の死に由つて、兎も角も解決され、近く日露協約も成立した。元來我輩は日露同盟を夙くから提唱したもので前年日露戰爭當時既に日露同盟論を「ジヤパン、クロニツクル」(一九〇五年三月)に投じた事もある位で今度の協約は大贊成である。其所で此機を逸さず辭職する方が宜しからうと、實はお目通りをして、若し侯に辭意があれば種々の方面に折衝して我輩も犬馬の勞を惜しまないと云つたが、侯は結局煮え切らずに了つた。さうして何うも陰謀團などがあつて不愉快だと慨歎された。早川は陽氣な性質であるから陰謀などは大嫌である。後藤も恐らくは同樣であらうと思ふ。唯貴族院にも樞密院にも又民間有識者の中にも、既に大隈侯に反對の氣運が動いてゐる今日、若し躊躇して機宜を失へば見苦るしい最期を終げるのは明かである。衷心侯の身を思ふが故に我輩は、全く人心が離れてしまはぬ內に引退をお勸めしたのである。

○寺內伯と旨く話がつかないなら加藤君でも推擧して、自分は潔よく何故骸骨を乞はないのであらう。加藤君を推擧して御採用になれば結構、假令ならなくてもそれは侯の與り知る處ではない。御採用になるや否やまでも掛念するのは寧ろ滑稽の至りではあるまいか。道路傳ふるが如く

事玆に至つて元老の鼻息を伺ふ何の必要があらう。最近貴族院中にも我輩に說を同ふするものあり、我輩は重ねて侯に書を寄せて斷然加藤子を推擧して辭職せられんことを忠告した。既に内奏した事實があれば之を取消すのは可笑しな話である。

○一體侯は昔から餘り萬事を樂觀して、眼先の見へなくなる人である。三十一年隈板内閣瓦解の時も、板垣伯は既に辭意を表したのに、侯は一向平氣である。種々の消息を知つてゐるに我輩は、迚も見込がないから辭職しろと說いたが、侯は相變らず前途を樂觀して聞かない。さうして遂に切端つまつてから辭職して物笑となつた。微官の我輩すら裏面を流るゝ暗流が解るのに、樂天家の大將には一向そんな暗い方面は判らないのである。現に今度の議會でも侯は寧ろ旨く行くと樂觀してゐるかも知れない。殊に侯の邸に拜趨するものは、皆求むる所があつて、善い事許り云ふから、益々萬事を樂觀して遂には樂天主義の爲めに身を誤るかも知れない。我輩は嘗て侯の信用を受け、官海を退きてより玆に二十年、世間よりは隈門の關係者なりとて各方面に於て進路を妨げられたる御蔭に、御他力を仰がず獨立獨行することを得た今日にては、我輩は彼に寸毫も求むる處がないから、我輩の言ふ所は皆肺腑から出る。然し我輩を讒訴する者もあるから如何も我輩の言に耳を傾けない。が、我輩は二十年の親友をして再び三十一年の轍を覆んで醜態を演じさせたくないから斯く苦言を呈するのである。

○時機に少し遲れてはゐるが、日露協約も成立して、侯は閣僚と共に陞爵叙勳の光榮に浴したのであるから、これを機に圓滿に辭職せん事を實望する。侯は屢々後繼者がないと云ふが、我々若い者をして局に當てしめれば立派に仕事をして御覽に入れる。我輩などでも未だ〱今日の大臣連よりは働ける。殖産工業の智識のない大臣、法律思想のない大臣が肩を並べる内閣の爲す程の仕事は誰にだつて出來るのである。だから御心配なく老侯も早く迷の夢を醒まして、本の古巢に引退して天下の英才でも教育して早稻田の聖人として靜かに餘生を送られん事を、侯の爲めでも大隈侯爵家の爲めにも衷心から切望して止まないのである。

▽立憲道の誤解から

司法省參政官　田川大吉郎

一、個人を咎めず

此度の事は要するに立憲道の誤解と思ふ、その誤解から思はぬ失錯を暴露したのだと思ふ、一人の大隈侯を難ずるは固より非、一人の寺内伯を憐むも亦固より非、大隈侯とか、寺内伯とか、乃至山縣公とか、松方侯とか、平田子とか、原敬氏とか、一人々々の立ち場を離れて、廣く政界全體を論ぜねばならぬ、廣く政界全體を憐まねばならぬと思ふ。

二、内奏は内奏とすべし

世には大隈首相の内奏が、悶着の起因と傳へられて居るが、果して内

奏が有つたとすれば、内奏の前には何が有つたので有らう、内奏は前因なくして起つたので有らうか、それとも内奏を惹き起すべき前因が有つたので有らうか、心ある人の注意は自然にこゝまで遡らねばならぬ、然し乍ら小生はそれに就ては何をも申すまい。

のみならず、小生は其の内奏の有つた事をも信じないものだと、こゝに豫じめ記入して置く。

然も便宜のため、術内奏の有つたものとして、卑見を挿まんか、内奏は内奏とすべし、公奏とすべからず、それが至當の體である。何ぞ、世間は、これを内奏と稱しつゝ、公奏の如く取扱つた、實に怪しからぬ次第であつた、果してこれを内奏として置けば、何の波瀾の洶湧も無いのに、これを公奏の事の如くし、運動し、煽揚し、尾に鰭を添へ、柄に管を添へて、持て囃したから、眞と言へば眞、その内には嘘が多量に加はつて、暗中摸索、引つ込んで居る筈の人が、浮かれて歩いた事に爲り、病氣で寢て居る人が、自動車で驅け廻つたことにも爲り、逢は無つた人が逢ふたことにも爲り、話さなかつた事が話した事にも爲り、日本人は總て神經病み同樣の浮は言を呻いて居るやうな容體に爲つて了つた、憫とも、氣の毒とも、言ひやうの無き次第であつた。

天下には内事がある、内奏すべき事も有り得る、内事は内事とせよ、左すれば事なく濟む、それを内奏と稱しつゝ、公奏同樣に取扱つたから惡い、過ちは世評のその自家撞着の點に在つた（内奏と言ひ乍ら表て向きに取り囃した。）

三、多數は明白

寺内伯にせよ原敬氏にせよ、衆議院に率ゆるその同志の數幾何か、それが多數なら、進んで内閣の更迭をも迫るべし、それが多數で無い間は内閣の更迭を迫らんにも、迫るべき適當の準備を欠いて居る譯だ、それを迫るのは不合理、不自然である、それは迫らぬ筈のもの、迫らぬのが本筋である、立憲の大道である。

衆議院の大勢は、昨年の總選擧以來定まつて居る、其の後少しも消長が無い、多數は依然として大隈派である、大隈侯の内閣は、儼然として衆議院の大勢を制して居る、國民の信望を繫いで居る。

この形勢を餘所にして、内閣更迭騷ぎをやるから無理だ、内閣更迭の夢を結ぶから惡い、それは逆さ夢だ、立憲道の承認する正當の夢、正當の望み、正當の順序、正當の計畫、正當の更迭では無い。

千八百七十三年、グラッドストーンの一次の内閣は、愛蘭教育法案で敗れた、三票の差を以て敗れた、グ氏はその翌日辭表を捧げた、氏の敵手ジスレリー氏は直に宮中に召された、而して新内閣組織を命ぜられた、然し乍らジ氏は之を辭して受けなかつた、衆議院目下の形勢にては之を受くるに由なしと申したのである、たとへ陛下より議會の解散を認容されても、尙進んで内閣を組織するに足る見込十分ならずと申して之を辭したのである、陛下は餘儀なく、再びグ氏を召し、内閣の繼續を命ぜられた、グ氏も詮方なく〳〵之をお受けをして、而して持ち耐へること一年、翌四年の二月に至つて、再び大いに破られ、ジ氏得意の第二次内

闘は此時に起つた。

右の如きは只其一例である、一旦は公然辭表を捧げたけれど、反對黨に進んで受け取る準備が未だ整はないため、形勢の不利を我慢しつゝ、尚政府を持ち續けた、政府黨とは此の如きものである、反對黨とは此の如きものである、衆議院の大多數を擁する大隈內閣に向つて、更迭を迫り、辭職を求め、何の準備も無い癖に、ワイ／＼空騷ぎをしたのは、全く心得違ゐであつた、その心得違ゐの企てを敢てしたから、總てが頓珍漢に終つたのであつた。

四、尋常の事

右のやうな次第だから、假に大隈侯が辭職の趣を內奏し、その內奏に本づいて、寺內伯と協議をし、その協議の熟せぬ所から、引き續きその內閣を維持する決心をしたとすれば、それは立憲政治の理論上からも、實際上からも、最も普通尋常な事で、少しも怪しみ咎むべきで無い。

一旦辭表を提出しても、形勢國家の爲に利ならずと見れば、その辭表の取下げを願つて、引き續き御奉公をするは臣子の分である、立憲政治家の節である、國家の重きに任ずる者は無論これ位ゐの責任は之を負はねばならぬ。

尤もそれは衆議院に多數の信任を負ふて居るだけでは可けない、絕えず陛下の厚き御信任を負ふて居ることが必要の條件である。

英國に在つてさへ、衆議院に多數の信任を負ひながら、陛下に斥ぞけられた內閣は幾つも有る、遠き昔では無い、近きヴイクトリヤ陛下の時代にも有つた。左れば衆議院の多數を必要條件と言ふのは、尚一方の裏面であつて、陛下のお考へ次第では、その多數の信任を衆議院に負へる內閣を斥ぞけて、換ふるに他の內閣を以てせらるゝことは、何處の立憲國家にも有り內の事、有り得べき事である、但、かゝる場合に、少數派を擁して立つた內閣が、その責任を負擔することは絕對の必要である、即ちその責任を微塵も陛下に嫁し奉らず、內閣自ら時の政局に對する全責任を負擔することは必要である、そのやうな意味約束で、英國に於る少數派の內閣は起つたことになつて居る。

五、議會と道理の內に

要するに議會は戰場である、その唯一の戰場である、政變は議會の中に決するが宜しい、一層明白に言へば總選擧の際に決するが宜しい、而してその以外には政變無きやうにするが宜しい、それが立憲政治の要求である、その本筋の道である。

政友會の諸氏、乃至官僚派の諸氏にして、現內閣の更迭を思ふ者は、次の議會に戰ふが宜しい、但、それも感情づくでは可けない、立憲政治は合理の政治である、感情と客氣に任せて無理を言ひ募らずに、これを第三者に訴へて、その首肯する道理の範圍內に、堂々として決戰するが宜しい、現內閣の秘政、果して反對者の言ふ如くならば、第三者即ち國民の多數は、靡然として反對者の言ふ所を聽き現內閣の攻陷にその力を借すで有らう。

然るを次の議會を待たず、國民の力に訴へず、內所に、其の望みを達

げんとしたから、今回の如き悲みに堪へたる變象は起り、互に五里霧中に迷ひ、惡戰し、妄動し、日本の譽れを高めずして、日本の位地を傷つけた。

どうしても立憲の趣旨は未だ日本に理解されて居ないかのやう、今更の如くその孟浪、突梯、滑稽、不思議なるに驚いた、日本は此から更に立憲政のいろはを學ばねばならぬ、其いろはから學び始めねばならぬ、前途は遼遠だ、小生は此度の珍事のため、敵と曰はず、味方と曰はず、偏へに日本の立憲政治のため浩嘆を發した、而して大隈老侯に對しては一も氣の毒、二も氣の毒、三も氣の毒と繰返して氣の毒千萬に感じた。

▽恐らく病的人格か

前田蓮山

一

▲濱田國兄、七月四日時事新報が突然大隈伯の辭意上奏を傳へてより、政界は俄かに騷ぎ立ち、之れを肯定するあり否定するあり、新聞紙の報道區々たる間に一ケ月半を經過したるが、八月十八日に至り、右時事新報は大隈寺内侯伯の後繼内閣に關する交渉顛末を事細かに發表せり。

▲定めし御通讀の御事と存候。申す迄も無く該記事は寺内伯側の發表したる者なるべく、中央新聞記者が該記事を携へて寺内伯の關係者（多分兒玉秀雄伯なるべし）を訪ひ、實否如何を質せしに事實相違なき旨の確答を得たりとて、同日の夕刊に之れを轉載致候。

▲大隈伯が曩に貴族院と妥協するに方り、山縣公に對して議會閉會後適當の時機に於て辭職すべき旨を表明したりとの說は、政府御用紙に依りて頻りに打消されたるも、小生の聞く所にして誤らずんば、此の大隈伯の表明は伯の承諾を得て山縣公より松方大山の二元老にも通告したる也。

▲神聖なる議會に於て起りたる大問題を、斯の如き私約に依りて暗中に葬りたる事は、實に怪しからぬ振舞と申すべく、法律上の『善良の風俗に反したる契約』に比すべき者なるを以て、之れを履行すると否とは大隈伯の勝手たるべし。

▲併し娼婦の雛すら前借を踏み倒して得たり顏する者は稀也。一國の宰相が國家の元老を瞞したりと言はゞ、假令瞞しても構はぬ理屈は立つにせよ、寔に苦々しき沙汰には候はずや。

▲例へば山縣公は詐欺賭博に引つ懸りたるが如し、金を卷き上げられたるが口惜しとて訴へ出づれば、自れも亦た賭博の罪は免がる可からざる弱身あるが故に、泣く〳〵官憲にも秘し朋輩へも秘し妻子にまで秘す。

▲貴族院の妥協は詐欺賭博なりき。之れに引つ懸りたる者は樂に金を儲けんとする慾心ありたれば也。身から出た銹、今更何とも致方なし、口惜しかるべけれど表沙汰にされぬを如何せんや。

▲併しながら賭博は告訴に依りて生ずべき罪に非らざるが故に、國民は此の宮中、臺閣、議院に渡れる神聖なる場所に於て演ぜられたる醜態妄

狀に對し、嚴重に乱斷する所なかるべからずと存じ候。

二

▲有繋嘘つきの大隈侯も山縣公に對しては知らぬ顏の半兵衛をきめ込み得ざりしと見へ、濟し崩し的に該問題を片付けんとせり、即ち月賦勘定にて居据はらんと企て居る也。

▲先づ最初は山縣公の顏さへ見れば『今に辭職する今に辭職する』と口先にて胡麻化し居たるが、佛の顏も三度とやら、然う何時までも口先許りでは相濟まぬ次第にて、三月廿六日に至り、辛つと山縣公を小田原に訪ひ、『愈々近々辭職せんと思ふが、就ては後任には加藤高明を推薦したし、願くば閣下の御贊同を乞ふ』と申出でたり。

▲大隈侯は山縣公が加藤子に反對なる事は充分に之れを知れる筈也、實に知り拔ける筈也。知つて尙且つ之れを問題としたるは、例の一寸遁れの手段にて、寸延べば巾、斯らして採み合ひ居る中には、又た何とかなるべしと思ひたる也。

▲果然山縣公は加藤子推薦に反對し、擧國一致の各派聯合內閣を持ち出したり。大隈侯は俯しては紅舌三寸、仰いでは加藤子を推して止まざりき。

▲山縣公は四月十日前後上京して、該問題を片付くる積りなりしも、折惡しく病氣に罹り、容態頗る險惡に陷りたるものから、若し此儘に死する事もあらば、自分の意見が大隈侯の爲めに誤り傳へらるゝあらんを慮り、之れを二通の覺書に作りて其の一通を大隈に送れり。

▲而して大隈侯は此の前後に於て、小松原、安廣の兩氏を樞府に入れて山縣公の意を和らげんと圖り、又た曾て山縣公の勸告ありしに拘はらず加藤外相の反對に依りて交涉を開始せざりし日露協約を、大に可なりとして締結に着手したり。

▲然れども尙ほ辭職の證文を卷き上ぐる能はず、今は何うしても寺內伯を推薦せずには居られぬ場合となれり。併し其れも少しづゝ小出しする注意を忘れざりき。

▲即ち辭表を捧呈するに先ち、寺內伯と會見協議するの手數を踏まんと欲し、五月初旬兒玉秀雄伯が朝鮮に歸任するに際し、『寺內伯と親しく協議したき事あれば、繰り合はせ上京ありたし』と傳言したり。

▲然れど寺內伯は之れに答へざりき。而かも大隈侯は之れを山縣公に告げて公の滿足する顏を見んとしたるに、公は『閣下は寺內伯と相談せんと言はるゝも、辭表を捧呈せざる以前に於て、謹嚴なる寺內伯が相手になる氣遣ひなし』と苦み返りたるらし。

▲是に於て問題は急迫し來れり。今は辭表を捧ぐるか知らぬ顏の半兵衛をきむるかの二途となりぬ。そこで又々辭表を小出しにしたり、即ち辭意內奏なるもの是也。

▲辭意內奏の事實なるや否やは陛下と自分とのみ之を知ると大隈侯は傲語したるも、开は大隈侯の奏上したる翌日、陛下より松方侯に御沙汰あり又た鷹司侍從長を以て山縣公にも通じ給ひしは事實なりと漏れ來る也。

▲此等の事に依て大隈奏上の內容なるもの傳はれり、小生の聞く所に依

れば該奏上は三段より成り(一)老齢重任に堪へざるを以て、日露協約の成立を機會として骸骨を乞ひたし(二)後任は恒例に依りて元老に御諮問ありて然るべし(三)愚考を言上するの許しを得ば、後任は憲法運用の上より申せば加藤を以て順序とすれども、彼れに對しては元老の一部に反對あり、然れば此の際は寺内伯を以て適任とせんと云ふにあり。

▲是に於て大隈侯は山縣公よりして寺内伯に上京すべきやう傳へられたしと請ひ、山縣公は之れを承諾して寺内伯に打電したり。而して寺内伯は大隈侯と山縣公との間に於て、既に議は熟し居るものと信じ、匆々上京して大隈と會見すれば實に意外。

▲辭表も出さずして條件附にて内閣を讓らんと云ふ交渉には、寺内伯も一寸面喰ひたるべし。寺内伯たるもの如何でか之れを承諾すべき、是れ常識あるものゝ判斷に苦しまざる所也。

▲大隈侯が斯の如き事に就て寺内伯に向つて交渉を始めたるは、之れを善意に解すれば、大隈侯が老人の癖として獨天狗になり、乃公にして寺内を說かば、寺内は忽ち感心して我意に從はんと自惚れたるべしとも思はれざるに非らず。然れど小生は大隈侯を然やうな甘い男とは信ぜざる也。

▲寺内伯が拒絕したるこそ大隈侯の思ふつぼなりしならん。昔彌次と喜太とあり、京都に旅行して美人の三間格子を覗るを見、戯れに其の價を問ひ且つ値切りたるに、美人は遂にまけますとて手を拍ちたり、彌次喜太大に困惑し『まけて吳れるな』とて美人を拜みたりと云ふ。

▲大隈侯は彌次喜太なるなからんや。寺内伯が引き受くれば大に困惑したるべし。然れば大隈侯が國府津に趣きて山縣、寺内公伯と折衝しつゝあるに際し、同志會の幹部が初めて大隈侯の寺内伯推薦と寺内伯が現政府與黨と提携せよと云ふ大隈侯の條件を承諾せざる事實を聞き込み、急遽狼狽して大隈侯を諫むるや、侯は下地は好きなり御意は好し、忽ち居据りと決心したり。

▲而して匆々歸京參内し、寺内は大政燮理の任に當るの決心なきが如くなれば、或は今後適當の機會あり適當の後繼者ある迄、臣が留任するやも計り難し、此の旨前以て御含み置きを乞ふと云ふ意味を奏上したるらし。即ち辭意取消奏上を小出しにしたる也。

▲此の事實は芳川樞府副議長が其の翌々日參内の折耳に挾みたる事にて、八月一日山縣公が東京驛に着するや、芳川伯と貴賓室に入りて密談したるは是れが爲めなりと傳へらる。

▲此の頃より政府側は『大隈侯が適當の機會あり適當の後繼者あるを待つて辭職せんとの意あるは事實なり、此の意味に於てならば旣に奏上せるなるべし』と言ひ山縣公側は『昨年の居据りと全然同一の手だ』と舌を卷きたり。

▲昨年大隈侯の居据るや、山縣公が召に應じて入京したる時は、旣に所謂留任の勅許ありたる後なりし事は兄の今尙ほ記憶せらるゝ所なるべし。併し此の半居据奏上は寺内伯の關する所にあらず、伯との交渉尙は縱橫中なりければ也。

▲然れば山縣公入京後更に折衝を重ねて、八月十一日遂に大隈侯に居据りの決心を公伯に表明し翌十二日日光に伺候して曩の奏上を取り消したる事、時事新報の報ずる所の如し。

三

▲瀧田詞兄、大隈侯が適當の時機に於て骸骨を乞ひたしと奏上したりとするも、或は小生の聞くが如く日露協約の成立を機會として辭職したしと奏上したりとするも、將又適當の後繼者を推薦するを得ば掛冠したしと奏上したりとするも、开は決して大問題にあらず。

▲水魚の如くなるべき君臣の間柄に於て、其れ位の事は時に應じて奏上し、何かの事情の爲めに辭表捧呈の手續を後れたりとて敢て咎むべき事に非らず、陛下より御催促あらば兎も角、然らざる以上は大隈侯の自由たるべき也。

▲又た大隈侯に辭職の意ありて、後繼者を推薦せんとするに方り、何人かに交渉して條件を持ち出し、之れを容るれば推薦すべく若し容れざれば推薦せずと云ふ如き事も更に不可なし。苟くも推薦の責任を取る以上是れだけの念を押すは當然なれば也。

▲英國の如く反對黨が代りて內閣を組織すると云ふ慣例ある場合に於ては、自己の政策に反對なる人物を推薦する形式となり居れども、日本に於ては國家の爲め最善と信ずる人物を推薦するを至當とするを以て、自れが推薦せんと欲する人に對して內交渉を試むるは決して不可ならず。

▲併し大隈侯は先づ寺內伯を推薦し置きながら、後に至りて寺內伯に條件を持ち出し、寺內伯が之れを容れざるに及びて前の奏上を取消すとは抑も何たる事ぞや。是れ輔弼の大任に在る人の爲すべき事柄なりや。

▲陛下が何人かに內閣組織の命を下し給ふに方り、前以て條件を附し給ふこと決して是れなし。されば後任者を推薦する者も亦た條件附きにて推薦する事あるべからず。かるが故に推薦前に內交渉を必要とする場合も之れあるわけ也。

▲後任者を推薦する者は單に最善の後任者と信ずる者を申上ぐるに止まるべきものなり。然るに大隈侯が既に寺內伯を此の際最も適任なる者として推薦したる上は、此の上寺內伯と六ケ敷交渉の生ずべき筈なき也。

▲大隈侯が寺內伯に持ち出したる條件の如きは、單に忠告と見るべき筋のものにして、寺內伯は『好意誠に有り難し、萬一大命を拜したらば、其の時に再び詳はしく承るべし』と答へて放置すれば足れり。寺內伯の大隈侯に答へたる所は大體に於て要領を得たれども、情誼に厚き伯の事とて多少踏み込み過ぎたる感あり。

▲斯くの如くにして放置したる時に、若し大隈侯が何時までも辭表を捧呈せざれば如何。小生の聞けるが如く大隈侯が日露協約の成立を機會として骸骨を乞ひたき旨を奏上したりとせば、協約成立の後匆々に殘務を整理して、成るべく早く辭表を捧呈するを以て穩當とすれども、何かの事情に依りて之れを捧呈せず、又た陛下よりも御催促なしとすれば、議會の反對を受けたる場合と趣を異にする大隈侯の場合に於ては、成るべく當人の意志を尊重して之れを觀過するを可とす。

▲然れど大隈侯が何時か辭表を捧ぐる場合には寺內伯の外に重ねて後繼者を推薦するは斷じて不可也。是れ輔弼の臣に自信なく、徒らに陛下を惑はし奉る所以なれば也。

▲然れば大隈侯が今回寺內伯推薦の義を取り消したる如きは、輔弼の臣たる資格なきを表白するものにして、侯たるもの畏れ謹みて罪を闕下に待つべき也。而かも侯は何の畏るる所なくして大言壯語し、國民も亦た之れを觀過するは何事ぞや、是れ實に大正政界の奇跡也。

▲小生は侯の人格を思ふ毎に、或は病的人格ならざるかを疑ふ。其の博聞强記驚くべきものあるかと思へば、其の記憶には心理學に所謂『記憶の錯誤』あるが如し、即ち他人より聞きたる事を書籍にて見たるが如く感じたり、今現に言ひつゝある事は、曾つて一度も人に話したる事もなきに、久しく自分が主張しつゝありしかのやうに感じたりするが如し。

▲又た聯想非常に鋭敏にして、一を聞いて十を悟るの才あり、所謂高遠の理想を口にすれども、行ふ所と殆んど聯絡なく、而かも當人は言ふ通りに行ひつゝあるかの如く感じ居るが如し。而して動もすれば衝動相互の間に秩序を失ひ、殆んど亂調子に陷る事もあり、時には大人格の如きも、動もすれば雜然混然として統一する所なき也。

▲兎も角、何うしても神經中樞に普通人と異なりたる所あるが如く思はしむる行動多し。大天才は常に病的なるが如く、侯も亦た大天才にして病的人格にはあらざるか。侯の如き人格は發明家又は批評家に適當にして、實際政治家としては危險至極也。

▲侯の出身地たる佐賀藩は、倒幕の大事業に殆んど關係なく、天下の事よりは先づ藩の事なりとて鋭意藩政を整理し。倒幕運動を傍觀したりき、

▲侯も亦た天下の騷動を餘所に見て長崎に洋學を修めたるが、明治政府が汲々として人才を登用するに際し、明治元年長崎裁判所參謀となり、故井上馨侯の紹介にて小松帶刀に頼り、辛つと中央の徵官となりたり。然れば侯が明治天皇の即位式に紫宸殿に參列したりとは眞赤な嘘也。

▲故岩倉具視公は薩長兩藩が維新の軍功に誇りて、第二の足利、新田と化せんことを恐れ、第三勢力を用ひて彼等を制肘しつゝ之れを駕御せんと欲せり。而して逸早く岩倉公に相應じたるを維新に何等の軍功なき佐賀藩主鍋島直正となす。

▲鍋島は巧辯を以て公卿の間に交り、其の信用に依りて大納言となると同時に大隈を參議に列せしめ、常に薩長に對してキャスチングボートを握りたるが、薩長は彼れの狡猾なる態度を憎みながら、尙且つ時に彼れを利用せざるを得ざりき。

▲明治政府に處する彼れの態度は實に斯の如くなりしを以て自然權謀術數に長じ狡猾普通の人物と成り了せり。彼れが身に寸鐵なくして、强大の兵を擁する薩長の間を切り拔け來りたる手腕は之れを認めざるを得ざるも之れが爲めに彼れの品性は陋劣野卑となれり。

▲瀧田詞兄、若し小生に完全なる大隈評を書かせんとならば、願くば百餘頁を與へられたし。是れは思ふまゝを何等の構想なく書き連ね、茲まで書き來りたる時に餘りに御注文より長くなりたるに氣付きて筆を擱き

たる也。

▽辭意は依然たり

陸 伯 牛 人

（一）

▲今回の政變騷ぎ程、其正體の判然しない政治問題は少なからう。勿論外交關係の案件、軍事關係の問題は、到底其正體を明かにせず、又態と明瞭にしないで、闇から闇に葬つた實例も從來屢々あるが。是等の問題は主として事件の關係範圍が他國に關渉し、引いては國際關係に多大の影響ある爲め、特に其眞相を韜晦せしむる必要ある事件のみで、單に內國限りの政治問題として取扱はるべき案件が、其眞相を斯樣に曖昧模糊の裡に葬り去られたことは、從來殆んど其實例を見出さぬ處である。

▲大隈首相、寺內伯、山縣公、此三人者は共に事件の當局者であるから問題の眞相は明瞭に承知して居ること云ふ迄もないが。其他の人々にして問題の眞相に通じ居るのは、官僚系に於ては平田子、安廣伴一郎氏位が關の山、內閣側に於ても武富藏相、高田文相位の處であらう。加藤子も尾崎法相も安達謙藏氏も、又田健次郎男も小松原英太郎氏も、共に其半面に精通し居る丈けで、決して事件の全豹には精通し居ると信ずることが出來ぬ。例令精通し居るとしても、又聞きの精通者で、其間相互に都合好き辯明を加味されて傳へられ居るに相違ない。但し一木內相、江木翰長、兒玉總務局長等は、各其位置關係及び職責上、事件の大體には間違なき知見を持つて居ること疑ひない。

▲蓋し夫れ其他の人々に至つては、悉く之れ聾棧敷のお客樣で、形は見えるが科白が聞えぬ人々許り。所作事でも長唄常盤津の聞えぬのは云ふ迄もなく、踊る役者の頭部丈け能く見えて、足許は却々見えぬ格の人々と云つて差支ない。夫れを知つたか振りの消息通氣取りで、好い加減の想像臆斷を滔々と語つて聞かせる有樣。流言蜚語紛々として起り、揣言風說到る處に流布さるゝのは、寧ろ當然の次第と云はねばならぬ。斯く申す余も勿論聾棧敷のお客樣、否夫れ以上に事件の內容を知るべく不便の位置にあるものであるが、只其確聞し若しくは知悉した事實のみに就て、聊か事件の經過を綴つて見やうと思ふ。其代り知らぬ事乃至疑はしい事は、其間明々白地に之を斷つて行く積りである。

（二）

▲第一に所謂首相の辭意內奏問題であるが、之れは事實である。但し後繼者として加藤子、寺內伯の二人者中、其一をと言上せるが如く傳へらるゝも、之れは疑問である。少なくも余が知見の範圍では、信ずべき根據もなく又材料もない。然らば何時如何なる場合に內奏したかと云ふに彼の侯爵大勳位に陞敍され、御禮言上の爲め參內した際、例の調子で位、人臣の榮を極め誠恐誠惶、御禮を奏上するにも言葉がないことを申上げ、其序に『臣も老齡劇務に當ること二年餘、適當の後繼者を得ば圓滿辭職をお願ひしたい心底でムりまする』位の程度で言上したことは疑ひない事實である。

▲此九重雲深き場所に於ける內奏の事實が、何時如何にして民間に傳はつたか、此經過の研究は先づ餘りせぬ事として、兎も角松方侯の耳に入つたのは事實である。山本內閣殄滅以來、是も極度の惡感情を有し居る侯及び侯を圍繞する薩派は、時こそ來れと早速官僚系を煽動したのである。第三十七議會閉會後、當然辭職を豫期し居たる官僚系は、一向其事なきに指癢を起し、あらゆる妨碍を加へ惡聲を放ち、陰謀陽謀至らざる

なかりし時も時とて、早速之を材料に官僚系蹶起の準備に着手し、結束力を強固ならしむべく、僅かに平田子を中心として田健次郎、有松英義等の諸氏、縱橫無盡に劃策奔走を始めたのは、夫れ以後の事である。

▲次は政府が寺内伯に上京を促したとの問題であるが、之れも事實である。併し其理由は政權授受問題を協議すべく促した譯でなく、問題は全く別個の事件であつた。夫れは支那問題に對する寺内伯の意見書なるものが、豫ねて政府に致されてあつたが、政府當局者と所見を異にする點あるので、五月山縣政務總監の朝鮮に歸任する際、成るべく早く上京して、親しく意見の交換をする樣にとの傳言を依賴したのである。然るに一方官僚系からは、現内閣を倒す必要上、殊に自ら取つて代るには、一日も早く上京すること肝要であると勸說し、其他例の陰謀團と稱さるゝ櫻田倶樂部組の一人、臼井哲夫氏抔は、態々お迎へに出かけた事實もある。

▲政府方では、成るべく早く上京するとしても、七月十日過ぎならんことを豫期して居つた。夫れは七月上旬に朝鮮總督府の重要會議を召集しあつた爲めで、伯は必ず之を濟ましてから上京するものと思つたのである。然るに案外にも電奏して任地を離るゝ御許可を仰ぎ、伯は七月一日京城を發して五日東京に着して了つた。最初七月一日以降向ふ二ケ月間任地を離るべき御許可を仰ぐ電報の來たことを聞いた政府は事の意外に少なからず狼狽したこと云ふ迄もない。之れと反對に官僚系の運動奔走は、俄かに活氣を帶び來りて、將さに内閣授受の機迫れるやを感知せしめたのである。而して内閣側に於ても、近く城明け渡しの悲劇あるべく豫期するもの多く、同志會を始め政府與黨の面々、表面こそ平靜冷淡の態度を維持したが、今にも内閣更迭の幕明くべきを期待して、内心少なからず煩悶しつゝあつたことは疑ふべからざる事實である。

（三）

▲七月五日入京した寺内伯は、翌六日官邸に大隈首相を訪ふた。伯の報告、首相の挨拶、氣焰取り混ぜの雄辯あつて後、適當の後繼者だにあらば、挂冠し度き心底なることを、首相自ら口外したのは事實である。併し當日は何等具體的意見の交換はなかつたらしい。只暗々裡に伯にして後繼者たる意志あらば、喜んで圓滿辭職を決行すべき意志を仄めかしたに相違ない。夫れより三浦子其他の訪問を受けて二三日を過ごした伯は九日小田原に山縣公を訪問した。無論公の病氣見舞は第一用件であるが政權授受問題に就ての指導を仰ぐことは、其最も重要なる用件の一つであつた。當時山縣公は如何に指導し又意見を述べたか不明であるが、政黨關係を度外に置き政權を獲得せんとするも、時代は最早之を許さゞることを懇々說諭した一事丈けは確實である。

▲翌十日寺内伯は再び大隈首相を訪問し、政權授受に關する具體的意見の交換を試みたが、首相は第一に現内閣政策の踏襲、第二に現政府與黨との提携を條件として、圓滿辭職の希望なることを答へた。伯は政策の踏襲問題に就ては熟考の餘地を保留し、現政府與黨との提携問題に就ては、專ら首相の後援斡旋に依りて成功せんことを依賴したのである。然るに加藤子始め尾崎法相、其他現政府與黨の態度如何にも明白にして首相の斡旋盡力を以てするも、到底圓滿なる妥協の成立すべき傾向なく且つ官僚系の露骨なる活動振りは、益々其間に惡感情を激成せしむる一方なりしを以て、伯は暫らく箱根に靜養を兼ね、勢ひの推移を觀るべく都門を去ることゝなつた。

▲七月十九日箱根宮ノ下に向へる伯は、途中山縣公を小田原古稀庵に訪問して、首相との會見顛末を報告し、且つ事後の協議を遂げたが。國府津に避暑中なる大隈首相は、三ケ月前會見を申込み、爾も山縣公病氣の爲

め延引今日に至れる古稀庵訪問を果すべく、二十二日小田原に自働車を驅つた。會見時間二時餘、其間に辭意あることを言明し、又寺内伯にして蹶起の意志あらば、喜んで政權の圓滿授受を決行すべく語つたのである。公が如何に質問し、首相が如何に答辯したか、其内容に就ては聞知する處なきも、要するに首相は巧みに危處を外せる答辯を試み後日の言質を與へざりしとは明かに推知をされるのである。之を推知すべき根據としては、公は其昵近者に向つて『大隈の云ふ事は何處迄本心で、何處から例の氣焔か區別を判斷し兼ねた』と、頗る當惑の態なりしとの一事に徴するも、明かに夫れと察し得らるゝのである。

▲翌二十三日山縣公は寺内伯を招待して、首相との相見顛末を語り、且つ首相の眞意何處にあるや、十分見當つかざることをも明瞭に指摘して寧ろ伯の輕擧を訓戒したるやの形跡がある。伯ば今迄の交渉顛末並に公の意見をも合せて報告し、且つ其智嚢を藉らん爲め、二十五日逗子に平田子を訪問した。用意周到思慮緻密なる子は、單に首相との口約丈けならば全然相手にならぬ、セメて書附にせる何等か後日に證據たるべきものを交換し、夫れを基礎として今後の交渉を繼續するの必要あることを忠告した形迹がある。世間に寺内伯覺書を提出せりとの傳説あるのは、主として之れが爲めで、事實提出したかどうか、其眞僞の程は余之を確信すべき材料を持たない。

（四）

▲平田子との會見顛末を報じ、兼ねて其後の協議を重ぬる爲め、歸途山縣公を訪問した寺内伯は、再び箱根に靜養を繼續したが、七月三十日の明治天皇祭、宮中御儀式に參列すべく、其前日即ち二十九日を以て京に入つた。山縣公の歸京は八月一日であつたが、翌二日大隈首相は目白椿山莊に公を訪問し、依然として辭職の意志あると、寺内伯を後繼者として、政權の圓滿授受を了し度きこと等を繰返した。箱根靜養中、深思熟慮し且つ政黨界の形勢を大觀するに、迚も現政府與黨の後援を得べき目算立たず、されぱとて超然内閣にては眼前に迫る議會に於て蹉躓すること明白なるに氣を腐らした寺内伯は、官僚系の熱心執拗なる運動振りに引き代へ、内心政權授受問題に就て躊躇逡巡する樣になつたこと爭ふべからざる内情である。

▲大隈首相、山縣公の會見ありし八月二日の夜、寺内伯は山縣公を訪問して、親しく其意志のある處を語り、何等の條件なければ喜んで交渉に應ずべきも、政策の踏襲と云へるが如き重荷を負擔させられ、爾も其報酬たるべき政府與黨の援助は到底望みなき實情にあること明白なるを以て、此上の交渉は寧ろ斷絶せん希望なることを打ち明けた。四日山縣公の早稻田邸訪問は、主として其返報であつたこと云ふ迄もないが、所謂世間で傳へる寺内伯の覺書の提出なるものは、此時山縣公攜へ行つたと云はれて居る。併し果して此事實あるや否や、余は今に信ずべき材料と確聞に接しない。

▲此公侯會見に於ても、首相は依然として辭意を言明し、更らに寺内伯に今一回會見して、親しく協議し度き意志あることを語つたが、五日夜に至りて首相よりの會見申し入れあり、六日午前寺内伯の早稻田邸訪問となつた次第で、之れが即ち最後の會見であつた。此會見に於ける伯の申出では、四日山縣公に依りて傳へられた趣旨を繰返したに過ぎない。即ち政策の踏襲は大體に於て異存なきも、主義としては一黨一派に偏倚せず、超然内閣を組織して、飽迄自己年來の主張方針に準據すべき事を以て答へた。斯て一ヶ月間に渉る侯伯の政權授受交渉は茲に全然斷絶することとなつたが、大隈首相の辭意は依然として繼續問題である。現に未決の問題である。其歴然たる證據には八月十一日山縣公を訪問し、寺

內伯との交渉終に斷絕せる經過を報知した當時に於ても、辭意は尙以て消滅せず、益に依て舊の如くなることを言明し、山縣公も亦是れ丈けは其眞意なりと認め居るに徵すれば、世間の所謂大隈首相再度の居据りなるものが、事實に於て甚だ相違し居ることを斷言し得るのである。即ち切言すれば、寺內伯との交渉は斷絕して了つたが、大隈首相としては現に居据りの考がない、依然として內奏した辭意其儘を實現せんと欲しつつ居るのである。

（五）

▲余の寡聞なる、如上の經過を事件の眞相に、最も近いものと聞知して居るが、其間非常の誤聞あり訛傳あり又全然事實を轉倒せるが如き個所あらば、希くは遠慮會釋なく指摘し叱正せられんことを熱望して止まぬ。

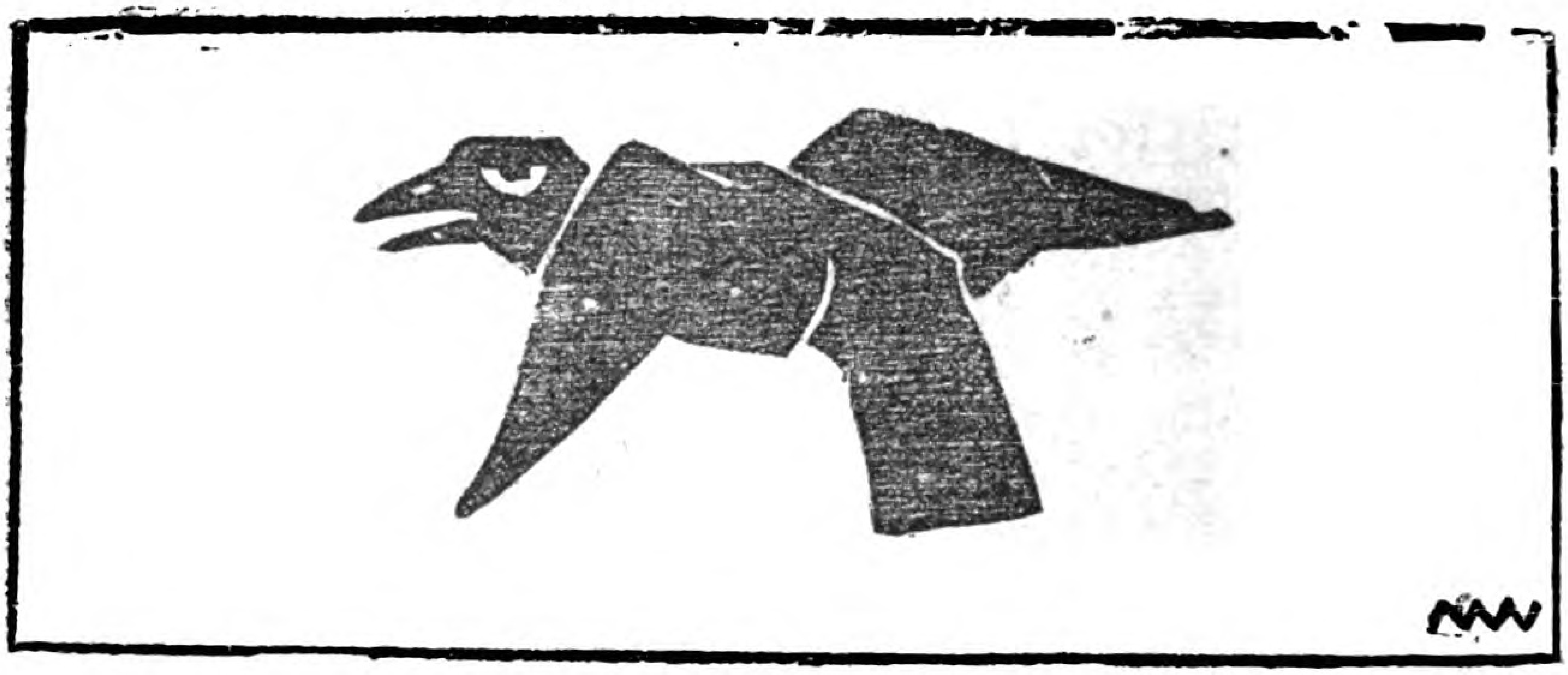
▲夫れは兎も角として、最後に一言したいのは大隈首相、山縣公の心事である。大隈首相は內心加藤子を後繼者たらしめ度きこと、何人も想像に難からぬが、されぱとて現內閣の運命今月迄永續し來れる者、其一寸の根據は山縣公の隱然たる後援にあること、之れ又蔽ふべからざる事實である。然るに此恩誼を眼中に置かず、公の最も嫌忌する加藤子を以て直ちに其繼承者たらしむること、首相としては如何にも恩に報ずるに仇を以てするが如き、一種不德義の感を起さずには居られぬ。是れ自己意中の人物を擧げずして、先づ公の系統を代表すべき寺內伯に交渉を開始した所以であらう。

▲然らば山縣公の意中は如何、大隈首相に辭意あることを承認し、又後繼者物色にも協議に與りながら、寺內伯との交渉斷絕後は、一言も其他の繼承者問題に觸れず、故意に知らざる眞似して、加藤子の事は噯にも出さず、若し萬一にも自派系統に政權の移り來らんことを僥倖せん慾望を抛たない。否な自派系統に來らずとも、少なくも加藤子の手に政權の移り行くことを妨げんとの底意は確かにある。即ち藪睨老人全く睨み合ひの姿勢を持して居るから堪られぬ。

▲若し夫れ官僚系に至つては、一度加藤子の手に政權移らんか、其辭職に際しては、必ず反對黨の代表者、即ち西園寺侯、原氏等を奏薦して退却すべく、斯くて純然たる政黨內閣の形となれば、政界に於ける自己等の存在は之を許されず、結局自滅の外なき大事の瀨戶際なるを以て、如何にしても此際寺內伯を擁立し、官僚政治最後の頁を飾らねばならぬ非常の場合である。一方政府與黨としては、此際官僚系に政權移らば、折角出來かけたる政黨政治の基礎を破壞さるゝは勿論、又々政黨界攪亂時代の必然來るべきを恐れ、扨てこそ三派合同の實力に依りて、首尾能く直接の繼承者たらんと熱心努力しつゝある次第である。政黨勝つか、官僚系勝つか、眼前の政界戰爭は實に興味もあり又我國憲法史上に於て最も注意留心すべき時代である。

中央公論秋期附録小説

中央公論秋期附録小説



死者生者

正宗白鳥

騒々しくつて埃もよく立つてゐるこの電車通りも、街燈の點く頃からは、外目には小瀟洒した凉しげな住みよさゝうな町として見られた。鬱陶しく繁つてしかも埃に汚れてゐる並木の櫻も、白い燈光を浴びて夕風にそよぐと、葉蔭がみづ〳〵した色を帶びた。麻暖簾を垂れた碁會所には、團扇を弄びながら片膝を立てたりなど氣儘な身構へして、三組四組の客が黑白を戰はせてゐる。その隣の玉突場には無駄口で賑はせながら紅白の玉を轉がせてゐる。筋肉の逞しい男達が汗みどろになつて激しい柔道の稽古をやつてゐるのが鐵格子の間から覘かれた。こんなさま〴〵な勝負事を立見しながら散歩するのも夏の夕の一興であつた。見馴れない人々も親しげに思はれた。

玉突屋から二三軒隔てゝ理髪店があつて、その直ぐ隣が八百屋だつた。土間

を二つに仕切つて斜面に並べられれ野菜や菓物は、夜目には殊に色取が美しい。バナヽだの枇杷だの夏蜜柑だの、甘酸ぱいゝ匂ひが店先に漂つてゐた。魚屋や牛肉屋の汚い臭ひには自ら顏を背けても、果物の色や香りには食慾が刺戟された。

溜池の方を本店にして此方は支店として、仕事は職人まかせで、自分は監督役でをり〳〵見廻つてゐる床屋の隱居は、蒸暑い晩などには、使ひ古しの籐椅子を櫻の木蔭へ出して、隣近所の樣子を見ながら、時々は側へ寄つて來る近所の知人と世間話をしながら、屈託のない夕涼みを樂んでゐることもあつた。自分はペンキの臭い臭ひが厭だけれど、仕事場を塗變へたり、氣持の惡い風をおくる煽風機を備へつけたり、本店に劣らぬやうに支店をも奇麗に飾つて繁盛させて、次男が兵役から歸つて來ると、自慢して引渡すのを、今から思浮べては樂んでゐた。

床屋が奇麗になるにつれて、八百屋も次第に面目を改めた。際立つて變ることがないやうでも、絶え間なき榮枯盛衰は此處等の商家にも現はれてゐて、何時も店先に喰へ煙管で頑張つてゐた胡麻鹽頭で嚴い顏した藥屋の老人は、忌中と書いた簾が出た後は、つひに姿を見せなくなつた。八百屋の看板の八百清といふ屋號が何時の間にか、八百信と變つてゐるのに、ふと目のつく散歩客もたまにはあるだらう。新しい棚が出來ていろ〳〵な鑵詰や罎詰が置かれた。以前よりも色艶のいゝ旨さうな上等物の水菓子が置かれてゐるやうだつた。代が變つたのかと思ふと、家にゐる人間は以前から見馴れた顏だつた。薄い髮を櫛卷にしてゐる顏の割に身體の横幅の廣い主婦が田舍訛りで何か云つてゐた。ひどい反つ齒で色の赭黑い小柄な下女が以前のやうに其處で働いてゐるのが殊に目についた。二十を少し過ぎたくらゐの女

盛りで、派手な浴衣に紅い襷を掛けて、笑つてゐるやうな顔してゐても、木地の醜くさは隠されなかつた。で、通りすがりの縁のない人からでも、をり〳〵は侮蔑の目を向けられた。

「でも一生懸命に磨くと見へて些とは奇麗になつた。初めて見た時にや、まるでお化見たいだつたが」

と、床屋の隠居も獨りでさう思つてゐた。

（二）

八百屋の下女のおてつは影日向の差別なく素直によく働いてゐた。妹は飯倉のあるお屋敷に奉公してゐるのだが、姉の方はさういふ所では勤まりさうにないといふ母親の考へから手足を働かせさへすれば事の足りるやうな所ばかりを渡つて來た。が、おてつは何處へ行つても居たゝまれぬほどの不平を抱いたことはなかつた。怒鳴りつけられても打たれても涙の出るやうな思ひをしたことはなかつた。この八百屋でも最早一年あまりも安い給金で激しい仕事を辛抱した。家で下女の勤めをする外に、御用聞にまでやられた。靈南阪の奥の方にたつた一軒飛離れた得意先の勝手口へも毎日顔出ししなければならなかつたので、雨の降る日には尻を端折つて籠を抱へて、傘の重みに難澁することがあつた。見掛けは頑丈な體格をしてゐても、よく酸ぱい汁を吐いたり腹下しをしたりするので、そんな時には力が拔けて歩きづらかつたが、自分から一日でも休むことはなかつた。

「親方の加減が惡いんだから、私が代りに一人で廻つてるのよ」と云つてゐたが、去年おてつが來た時

から前の主人は青い顔して兎もすると床に就き勝ちで、買出しに行つて來ると、打つ倒れてせい〳〵息を切らしてゐた。

「借金だけやう〳〵拂つて、これから商賣が自分のものになると思つてると、こんな目に會ふだもの敵はない」と、主婦のおさくは零しながら、いろ〳〵な賣藥を買つて來て、お粥の外に厭がる牛乳をも飮ませてゐた。

「こいつを飮むと逆ついて氣持が惡い」

亭主の淸吉は何を食べても腹に障るのにじれて、時としては女房にも當り散らした。近所の醫者に掛つてもはか〴〵しい利目は見えなかつた。

「東京の醫者は藥代ばかり高く取りやがつてい〻加減な藥を吳れるんだから、幾ら飮んだつて役に立たん。おれはこんな者より大村さんの煎じ藥の方が利くやうな氣がするぜ。」淸吉は幼い時分の腹痛が一杯の煎じ藥で直ぐに癒つたことをふと思ひ出して、矢も楯も溜らぬやうに、「あれはよく利いた。こんな西洋の酸ぱい水藥や何かよりや、あの苦い煎じ藥の方が腹の皮へ浸込むから効能も多いんだ。お前が信造に手紙をやつて至急に送らせるやうにして吳れ」

「東京から田舍へ藥を賴むなんて逆さまごとだ」と、おさくは亭主の氣迷ひを笑ひながらも、自分もその氣になつて、甲府在の亭主の從弟に宛て〻端書を出した。亭主よりもおさくの方が文字をよく知つてゐるので、平生よく代筆してゐるのだつた。

「大村さんの煎じ藥が利かんやうなら、おれの病氣は當分直る見込みはないかも知れん」直らないとす

りや、おれもいつそこの商賣を思切つて、誰れかに讓渡して、田舍でゆつくり養生して、死ぬにしても生れ故郷で死にたいと思ふよ」

淸吉が稍々もすると故郷の家と人とを話に出して、あれほど熱心であつた今の商賣を厭ふやうになつたのを、おきくは腑甲斐なく思つて、笑つて聞流してばかりはゐないで、時としては手酷しく叱りつけた。

「田舍に家や田地があるぢやなし、誰れもお臀を据ゑて私達を待つてゐやしないよ。彼地へ歸つたつてその身體で荒仕事が出來やしまいしね。第一出て來た時の事を考へると、見窄らしい樣をして私は歸る氣にやなれないやな。千兩箱を背負つて、隣近所へ大盤振舞でも出來るやうになつたら、そりや私だつて甲州の山の中へでも引込む氣にならうけれど」

「おれの痛い痒いが分らんから、お前は勝手なことばかり吐かしやがる。こんな商賣を何年やつたつてお大盡になれるんぢやなしさ。おれはこの身體ぢや大かい慾は持てない。粥の湯を啜つても御先祖の土地で安穩に暮したいぜ。おれが足腰が立たなくなりや、お前だつて氣樂なことを云つちや居られまいがな」

「なあに、お前さんが一月や二月休んでゐても、私一人で結構やつて見せるわな。自分で買出しにも行くし、車でも曳いて來らあね。どんなことになつてもこのまゝで凹みやしないよ。意地づくでもやり通さなければ私にや寢醒めが惡いだでな」

「おれは懶けるんぢやない」

淸吉はつけ〳〵といふ女房の言葉を聞僻んで、自分の苦しいのが相手には分らぬらしいのを牴牾かし

く思つてゐた。もつと優しくいたはつて吳れて、自分が痛みを感じた時には女房の方でも痛いやうな目顏をして吳れるのが至當だと思つてゐるのに、自分の側でさも旨さうに味噌汁を啜つたり、舌皷を打つて四杯も五杯も溫かい飯を貪つたりしてゐるので、淸吉は忌々しくつてならなかつた。

「お前さんほど耐へ性のない人はないよ」と、これほどの病氣を無雜作に思つてゐるらしい女房の心を憤つて、側の茶碗を取つて庭へ投げたこともあつた。

（二）

おてつは此處へ來てから間もなく、病人の不意の差込に手當をするため、主婦の命令で夜遲く隣の床屋へ湯を貰ひに行つた。床屋では仕舞はうとしてゐるところで、職人どもは訝しげにおてつを見入つた。

「どうも濟みませんですけど」と譯を話すと、

「へえ〳〵幾らでも持つてらつしやい、殘りものだから」と、脊の高いのが茶化すやうに云つて、麥酒の空罎へ一杯鐵砲風呂の湯を詰めて吳れながら、

「昨夕夜中にも親方の加減が惡かつたのですかい。私が便所へ起きた時分にお隣りぢや燈火を點けて起きてゐたやうだつたね。主婦の聲も聞えとつた」

「私は二階に一人で寢るから些とも知らなかつたのよ」

「ぢやおれ達とお隣同士だね。一昨年だつたか、占ひの爺さんが室借しとつた時には、夏の中は兩方で

窓を開放して、よく話をして居つたよ」と、脊の高いのが脊の低い職人に向つて云つた。

「僕は先日の折に一寸覗いて見たゞけだが、隣の二階には疊も敷いてなさゝうだね」おてつが出て行つてから、脊の低いのが云つた。

「あゝ。易者の爺さんは面白い奴で、窓越しで賭なんかをよくやつたものだ。角力が好きでね。なに見に行きやしないんだがね。夏場所十日間は毎晩商賣から歸ると、翌日の取組の賭が初まるんさ。此方が先へ寢てると、あくる朝屹度店へやつて來て、十日間一日も賭を缺かしたことはなかつたね。易者だつて駄目だ。始終見込み外れをしてるんだから」

「どんな上手な易者でも自分の事は分らないものだとさ。……さう云へば、お隣の病人は長くは持たないぜ。胃癌だらうつて豊さんが云つてたよ」

「不斷粗い物ばかり喰つてるから病氣になるのさ。易者の爺さんがさう云つてたが、そりや酷いんだつてよ。あの主婦は慾にかけちや耻も外聞も構はないのだからね」

「他人事ぢやない、誰れしも不斷の食物が肝心だあね」

二人が戸締りをして仕事場の燈火を消して、小梯子を踏んで、二階へ上ると、小僧の邦太は隅つこに小さい頭を出して眠つてゐた。微かな鼾をかいてゐた。

「僕等の床をのべてるから感心だよ」

「邦公、おべつかつてやがるな。今から根性がませてゐていけない。君が拳固を喰らはせかけたから、御機嫌を取るつもりでこんな眞似をするんだよ」

「でも可愛いゝぢやないか」
二人は毎晩の話の種にしても話し飽かぬほど樂しみにしてゐる愛宕下の馴染の賣女のことも、今夜は口に出さず、親方の蔭口をも利かないで、寢床に就くと正體もなく眠入つてしまつた。
おてつは湯の入つた麥酒罎を主婦に渡して、うろ〳〵と介抱の手傳ひをした。が、病人の疼みは容易に薄らがなかつた。先日から飲みつゞけてゐる田舍の漢法醫の煎じ藥は一時は病人の氣休めになつてゐたが、今夜は何の利き目も見せなかつた。
「上田さんに來て貰はうかね」と、主婦は止切れ〳〵に診せてゐる近所の醫者を呼ばうとしたが、
「遲いから、明日まで我慢しよう」と、病人は冷汗の浸出てゐる身體に力を入れて、齒を喰ひしばつた。
「我慢が出來りや、上田さんなんか呼ばない方がいゝよ。あの人のは一時のがれの誤魔化しだから、それよりやその中に評判のいゝ病院へ行つてよく診て貰つて緩くり治療することにしたらいゝだらう」
夜中に醫者を叩起してもいゝ顏をしないだらうし、往診料だの何だのと無駄な入費がかゝるのだしと、主婦のみか病人自身でも念頭に置いてゐた。
「折角煎じたのだから、もう一口飲んで御覽な。」
「苦くつてとても飲めない」病人は苦い汁を髯の延びた頤へだら〳〵と垂らしてゐた。そして、右へ左へぬたうちながら呻いてゐたが、やがて、
「おれは二階に寢たいから蒲團を持つて行つて呉れ」と身體を持上げた。
「何を云ひ出すんだね。動いちや惡いだらうによ」

「寢床が變つたらいくらか氣持がよくなるかも知れない」

「そんなことがあらずか」と、おきくはふと甲州訛りを出して叱つたが、病人が强いて望むので、おてつに夜着を持たせて、自分は病人を介抱しながら二階へ連れて行つた。天井は低いし、掃除など行屆かないので、黴臭い臭ひがして氣持が惡いだらうのに、病人は其處に寢倒れて、暫く呻いてゐた。

おてつは壁際へ自分の寢床をのべて眠つた。

「お前も寢ろよ。もう大分よくなつたから」と、病人は女房にも二階へ夜具を持つて來るやうに勸めた。

「氣が利かなくつても、おてつが來て吳れてから、おれは餘程氣丈夫になつたぜ。どう云ふものだか、おれはこの頃は夜中に目が醒めた時に、誰れと云ふことはない知つた人間を思ひ出すんだ。三人でも四人でも知つた者が側に寢てゐて吳れゝばいゝと思ふことがあるよ」

「病氣のせいだが、お前さんも次第に妙なことばかり考へ出すよ」おきくは怠い笑ひを浮べて、「それで二階に寢る氣になつたのかい。おてつの側に寢るのがいゝの。病氣するとそんな好奇なことが考へられるのかね」と冷やかすやうに云つた。

「それはさうぢやない」病人は眞面目に打消して、不斷望んでゐることを口には出さないで、竊かに思ひやつてゐた。……一日も早く稼業を止めて、親類緣者の住んでゐる田舍へ歸つたなら、身體にもいゝし、どれほど心丈夫になるか知れないと日ましに思慕つてゐるのだつた。幾らも金は持つて歸れなくつても、こんなに思つて生れ故鄕を懷かしんで歸つて行く自分を、古馴染の人達が見殺しにすりやしない、皆んなして親切にいたはつて吳れさうなものだ。女房だつて稼業に氣を取られてゐるから、おれの苦痛

を充分に憐んで呉れないのだ。……

おきくは不承々々に夜具を運んで來て、病人と下女との間に横はつて、今まで我慢し切つてゐた眠たい眼を閉ぢると、おてつと二人掛け合ひで高い鼾をかき出した。淸吉は獨り目を醒ましてゐながらも、二人の寢息を手頼りとしてゐた。が、疼みが薄らいで來ると、自分の手だの足だのゝ目に立つほどの衰えが涙ぐまれるほど悲しくなつた。一度々々の激しい疼みに五體の肉の削がれて行くのを自分で撫でゝ見ながら、側の二人の女の憎いほど肥つてゐるのを羨ましがつてゐた。そして、女房が田舍行を承知しないとすると、信造をあの男の望み通りに此方へ呼寄せて、自分の代りにこの商賣をやらせやうかと心が折れて來た。先日からおきくも頻りに望んでゐて、親切ごかしに話を持出してゐるのを、自分の手傳ひをさせてゐる間に、横取りせられはしないかと氣を廻して、何時も話を遮つてゐたのだつたが、今夜のやうな心細い思ひをする時には、信造でも誰れでもこの家にゐて呉れる方がよかつた。人手があればおきくももつと自分の介抱に身を入れて呉れるかも知れない。……

さう決心がつくと、直ぐにさう云つて女房を喜ばせたくて、「きく〳〵」と聲を掛けながら、足を伸して女房の脛を突いた。が、熟睡に落ちてゐるおきくは何とも感じなかつた。強く突くと、足を避けて口の内で何やら寢言を云つた。「同じ食物を喰つてゐながら、おれが次第に痩せるのとあべこべに、此奴はどうしてから身體の何處から何處までもぶく〳〵と肥るのだらう」と、足の指先で相手の皮膚を撫でゝ樂んでゐたが、すると、田舍で子供の時分に、おきくが女だてら川で泳いでゐたことが思出された。男の子に負けないやうに泳ぎも上手だつた。

「あゝ吃驚した。何をするんだね」おきくはふと夢を破られて頓興な聲を出した。煤ぶつたランプの淡い光は病人の青褪めた微笑を照らしてゐた。

「お巫山戯でないよ、明日も早く起きなけやならないんだからね」と云つて、おきくはくるりと脊を向けて、頭を枕に落した。

「お前に聞せることがあるんだ。……些との間起きとれよ」

「もう遺言なんか聞かないよ。私は明日の朝の仕事があるんだから、お前さんの遺言道樂のお相手にはかりなつちやゐられないよ」

「馬鹿。お前にもつと樂をさせやうと思つてるんぢやないか。おれもどちらつかずで愚圖々々しとつても仕様がないから、信造を呼寄せやうかと思つてるんだ」

「本當にその氣になつたのかい」

おきくは振返つて寢呆け眼で病人をちらと見たが、そのまゝ目を瞑つて快い眠りをつゞけた。淸吉は飽氣ない思ひをして、今自分が云つたことを考へ直してゐたが、人手を借りないで二人で汗水垂らして稼いで、日々の上り高を計へては勵み合つてゐた昔の夜が懷しくなつて涙が流れた。

（三）

信造は一月も立たぬ間に、肥桶の臭ひを落して、角刈頭のきびきびした目鼻立ちの、八百屋の御用聞

などには惜しいほどの若者となつた。主婦に熱心に仕込まれて、獨りで買出しにも行けるやうになつた。自轉車の稽古もはじめた。たまには骨休めに近所の活動寫眞や浪花節へも出掛けたが、そんな時には主婦かおてつかゞ案内に立つた。

「今日は信ちやんと葵館へ行くのよ」などゝ吹聽して、おてつはよく床屋の職人に揶揄はれた。

「羨ましいね。あんまり見せつけるものぢやないよ。」

「私ね、活動は飽き／＼するほど見てるんだからさう面白くはないのだけど、信ちやんは田舍から來たばかりだから、そりや面白がつて見てるのよ。私ね、寢る前にはいろんなことを話して聞かせるの」

「今に二人で世帶を持つて別な商賣でもはじめるんだらう。僕等も信ちやんにあやかりたいものだね」

「人を馬鹿にしてるよ」

おてつは揶揄はれたいために、隣の職人が手の隙いてゐる時には、戸口に立つて笑顏を見せたり聲を掛けたりした。

床屋と懇意になると、おてつは色の青白い目のぱつちりした可愛らしい小僧の邦太が、手荒らくこき使はれてゐるのを憫然に思ふやうになつた。筒袖に白い消毒衣をつけて、高足駄を穿いて仕事の手傳ひをやつてゐる邦太は二人の職人から不斷に荒らい言葉をかけられるばかりでなく、兎もすると、首筋を掴まつて小突き廻されたり、頰つぺたを毆られたりした。

「バリカンは鑷で消毒だけしときやいゝよ。お前なんかゞ下手にいぢるとまた壞れるぜ」客の耳の穴をほぢくつてゐた一人はさう云つて、横目で邦太の方を見てゐたが、やがて「さうら云はないこつちやな

い」と云ふが早いか、耳搔を持つたまゝ邦太の側へ寄つて、バリカンを取つて、「高木さんまた齒を壞したよ。……螺旋を取つていぢつちや調子を狂はせてしまう。幾度云つても聞かないんだな」

邦太は頭の天邊を拳骨で一つ二つ突かれた。が、彼れは目尻に微笑を湛へて、機械の先を見入つてゐた。

そこへ、親方が秋草を生けた花瓶を持つて奥から出て來ると、かの職人は口を尖らせて大袈裟に知らせた。「邦、親方に謝らないか。戯談ぢやないぜ」

「どうも濟みません」邦太は指圖通りに云つて頭を垂れた。

「此奴は少し生ちやんだからね」親方は花瓶の置場に迷ひながら輕く云つた。

「本當に剛情だよ。何が面白くつて機械いぢりをするんだね。お前達に機械は直りやしないよ」

「本店にゐた時にも吉の奴と二人で電氣の球の中の針金を壞したことがあつたよ」親方はそんなことを云つて職人に跋を合はせてゐたが、やがて手を洗つて奥へ入つた。

高木と呼ばれた脊の高い職人は先つきから默つて顏剃りをやつてゐたが、仕事が濟むと、棚に置かれたバリカンの齒を意地惡い目付で驗べてから、突如に邦太の頰を平手で二つ三つ續け打ちにした。先つきの拳骨とは異つてビシャッと勢ひのいゝ音がした。

「馬鹿ッ。惡戯をさせに連れて來たのぢやないぞ」言葉は後から出た。

邦太は首を縮めて目をぱちくりさせた。涙が目蓋に浸出た。が、疼みが去ると元の通りけろりとして、表を通る自働車を玻璃越しに眺めてゐた。

おてつは通りすがりにちらとこの打擲の様を隙見したのだつた。そして、暫く立留つて呆氣に取られてゐた。何故あんな可愛いゝ兒を慘い目に會はすのだらう。家の主婦さんでさへ私を打つたり蹴つたりしたことは一度もないのにと、自分の弟の虐げられるのを見たやうな腹立たしさを、脊の高い職人に向つて感じた。

で、あくる日の午過ぎに、本店から親方が連れて來た子供を乳母車に載せて遊ばせてゐる邦太に會ふと、

「昨日はどうしたの。痛かつたらう、あんなに打たれちや」と慰めてやつた。

「……」邦太は小鼻をぴくつかせて、ふゝんと笑つて答へなかつた。

「あんなに邪慳にされて、お前さんは辛抱がいゝわね」

邦太はこの女の言葉や乳母車の子供の泣聲には氣を留めないで、電車や自働車やの街上の騷々しい物音に心を取られて、のろ／＼櫻の木蔭を歩いてゐた。自轉車に乘りたいと彼れはかねて望んでゐたので、自轉車を輕妙に駛せてゐる人間を屢々羨ましさうに見送つた。八百屋の御用聞にでも牛肉屋の小僧にでも、自轉車に乘れる家に使はれた方が、床屋で働いてゐるよりやどれほど仕合せであるか知れないと、彼れの子供心にもそれ一つが儘にならぬ浮世として、時々思出されてゐたのである。

何氣なしに琴平の宮の前まで乳母車を押して行つた。嬰兒の泣聲があんまり烈しくなると、邦太は手でその口を蔽うて叱りつけたりした。薄い毛を頂いたこの嬰兒が顏をくしや／＼させて泣く有樣は、醜い厭らしいものとして彼れの目に映つた。で、賺して泣止ならせやうといふ氣にはなれないで、自分が

高木などに打たれるやうに、自分もこの子をピシャ／＼打据ゑたいやうな氣がしたり、柔かい耳朶を引張つたり、鼻をいぢつたり、頬ぺたを抓つたり嬰兒を玩具みたいにしてゐると、犬や猫を弄んだり、機械いぢりをしたりする時よりも、餘程いゝ氣持であつた。

で、往きにはあたりをきよろ／＼見ながら機械的に乳母車を押してゐた彼れも、返りには屡々珍らしさうに嬰兒のふは／＼した肉付に指を觸れて樂んだ。弄ばれると、嬰兒も何時かへら／＼微笑を洩らした。都の埃は立つてゐても、爽かな初秋の風は二人の頬に觸れてゐて、邦太は久振りにいゝ氣持で店へ歸つた。

「邦ちやん」と、その後おてつが會ふたびに親しげに聲を掛けるのを、邦太は一度も返事をしないで訝しげに見てゐた。そして、側へ寄りつかれると、女臭い臭ひが鼻を衝くのが厭さに、直ぐに遮けるやうにしてゐた。が、時々嬰兒の守をさゝれる時には、今まで知らなかつた愉快を感じ出した。洟や涎を垂れた顔は汚いけれど、柔い肉の塊りのこの子の手でも足でも耳朶でも頬ぺたでも、恣まゝにいぢり廻し小突き廻すのが、次第に彼れに不思議な快感を與へた。で、乳母車で近所を曳き歩くよりも、抱いたり負つたり、二階などへ連れて行つたりして、玩具にしてゐることもあつた。

「守をさせに來させたのぢやないぜ」職人は忙しい時には忍び音で怒鳴つた

（四）

「矢張信造に來て貰つてよかつた」清吉は絞りの三尺を締めて、矢立と煙草入とを腰の左右に差して、出て行く信造の後姿を見入つて、頼もしげに云つた。

「さうとも。あの人はもう田舍なんぞへ歸る氣は些ともない、どうしても東京で仕上げて家を持ちたいと云つてるんだから、こんな商ひでも身を入れてやつてらあね。お前さんさへ元のやうに丈夫になりや、どし／＼面白い商賣が出來るんだよ。おてつなんかに廻らせといたのぢやいゝお得意は取れつこはありやしない。尾張屋ぢや先月には店の商ひを別にしても、千圓から入つたといふぢやないかね。價が高くつても店が立派だとあゝ盛つて行くんだもの」

「尾張屋にてつ張らうたつておれ達には及びもつかないや」清吉は興もなさゝうに云つた。稼業が可成りに榮えて日々の生活に障りのないのは元より有難いことだが、それよりも信造が實の弟も及ばぬやうに大切にして呉れるのが悅しかつた。「信造にしろおてつにしろ、些とも惡氣のない人間だからいゝよ」

「おてつも使ふには重寶だけれど、この頃は妙だよ。」おきくは冷笑を洩らして、小唄か何か口すさみながら洗濯をしてゐるおてつを橫目で見ながら小聲で、「お前さんは氣がつかないのかい。あの女がいやに身のまはりを構ふやうになつたよ」

「さうかい。歲が歲だから無理はないさ。」

　清吉は寢床の上に胡座を搔いて、潤んだ目でおてつの方を顧みたが、信造が來てからおてつの樣子が變だと譯ありげに云はれると噴出した。

「まさか。……お前はそんなことに氣を廻す女ぢやなかつたがなあ」

「さうでないにしても、若い者二人を二階に寢かすのはよくないと思ふよ」

「だつて外に寢かすところはないぢやないか。おれ達が二階に寢て、あの二人を階下へ寢かしたつて同じことだしさ」

「お前さんは目敏いんだから、夜中にでもよく氣をつけといでな」

おきくが眞しやかに云ふのを、清吉はうん〱と素直に聞いてゐたが、さういふ色つぽいことに思ひを馳せると自分の息まで臭いやうな氣がした。

「いくら物好きでもあの女ぢやあね」と力のない笑ひに紛らせて、寢床に横たはつた。

が、おきくは初めの中は心に掛けなかつた夜の二階から、この二三日は頻りに面白くない思ひをさゝれることがあつた。夜中にふと變な夢などから目醒めた時に、鼠の音だの寢言だのに胸騒ぎさゝれることがあつた。いくらお化見たいな顏をしてゐたつても、若い女と男とを一つ部屋に寢かしといては、どんな間違ひが起らないとも限らないと案ぜられ出した。おてつが湯上りなどに白粉や香油をつけたりするのは厭らしくて、つひ冷かしたくなつたが、おきく自身、亭主の長患ひにかまけて、汚れ次第に身裝ふりを構はないでゐるのが省みられた。

おてつとは僅か五つしか歲が違はないのに、頭の髮をたゞの一度も滿足に結はないで、手足を荒らしてばかりゐるのが多少氣に掛らないではなかつた。鏡に映る自分の顏が歲よりも老けてゐるらしいのが、今更のやうに目立つた。

で、三日置きくらゐに風呂屋へ行つたものが、隔日かあるひはつゞけて通ふやうになつた。久振りで

薄い髪を洗つて髪結ひの手を借りた。

「主婦さん、私は一度島田に結つて見たいわ」と、おてつは主婦の頭を見詰めて、ひそかに髪の毛の濃い自分を誇つて、島田に結つたならと、自分の影を幸福に描いてゐた。

「島田にでも女優卷にでも好きなやうに結ふがいゝさ、お前さんにはよく似合ふだらうから」

おきくは揶揄つたが、おてつに髪を結ふ餘裕など與へるどころか、自分のしてゐた臺所仕事も大方はおてつに働かせた。病人の肌着でも下帶でも自分のまでも、おてつに洗濯させるやうにした。汚らしいくらゐ何でもなかつたけれど、主婦が身仕舞に氣を取られ出してから、前よりも仕事が忙しくなるのがおてつにはつらかつた。

「そんなに働いてゐて、お給金がたつた一圓五十錢なの。もつと上げて貰つたらいゝぢやないかね。お前さんのやうな人を私の家でも搜してるんだから、正直でよく働いて呉れる女中はなか〳〵見つからないのだよ」と、下女に出られて困つてゐる川瀨さんの奧さんが唆かすやうに云つた。

「何處へ行つたつて同じことだから、馴れた所に居ついてるのがいゝつて、お母さんが云ふんですよ」

「お給金を溜めてお嫁入の仕度をしてゐるのだらうね」

「私など無器量だから誰れも貰つて呉りやしませんよ。一生獨りで通すつもりなのよ。その方が結局氣樂でよ御座んすわ」と云つて、おてつはへゝゝと笑つて迷ひもしなかつた。

二階に信造と寢床を並べてからは、おてつののろい神經もいくらか鋭敏になつて、今まで氣に留めなかつた周圍のことが、多少痒くも痛くも感ぜられ出した。そして、時々は信造に向つて話した。

「家の親方は病院へ入院したらいゝだらうにね。少々お金がかゝつても、早く直して稼いだ方が得だらうと思ふよ。信ちやんがさう云つて勸めるといゝわ。私でさへたまにはお腹の疼むことがあるんだから、親方はあゝ瘦せるまでには隨分疼みが酷いんだらうと思ふと氣の毒でならないのよ」と、他人の疼さを感じたりした。

「なに、また直る時が來たら直らあ」信造は卒氣なく云つた。日が經つにつれて、おてつなぞと親しく口を利きたくなくなつてゐた。二階へ上るや否や、寢床へ入つて直ぐにぐつすり眠るやうにしてゐた。

「でも出來るだけのことはして上げたらいゝだらう。親方はこの先長かあないやうに私には思はれるよ。親方が死んだらこの家はどうなるのか知らん」

「どうなるのかなあ。おい等にや分らないが、死ぬるなんて緣喜でもないことを云ふなよ」

「さうしたら信ちやんがこの店を貰つて商賣をするんだらう。親方が先日主婦さんにさう云つとつたもの。信造に此家を讓つてお前は田舍へ歸れつて、先日遺言見たいなことを云つてゐたよ」

「おい等は一生八百屋稼業をやるために東京へ來たのぢやないや。へゝんだ」と、信造は相手を見下げたやうな目付口付をして、戯れに威張つて見せた。

凜々しい口調や體格はおてつを刺戟して興奮させた。「本當だわ。お前さんは八百屋の御用聞なんかには勿體ないわね」と、心からさう思つて云つた。「ぢや、何になるつもりなの」

「藥屋や質屋の番頭さんも座つてばかりゐるんぢや氣づまりで厭だし、……おらあ先日から自分に似合つた東京の商賣を氣をつけて見てゐるのだが、自働車の運轉手になりたいなあ」

「だつて危いぢやないの。人でも轢殺して御覧なね」

「おいらあ自分で自働車に乘れる身分にやなれつこはないんだから、せめて運轉手になつて東京中乘廻して見たいなあ。車夫は御免だし、自轉車もあんまり面白いものぢやないや」

「信ちやんも醉狂な人だよ。もつと地道な商賣をしやうとは思はないのかね」

ふと與に乘つて二人の聲が高くなつたが、すると、階子段の方から尖つた聲が聞えた。

「騷々しいぢやないかね。階下には病人が寢てゐるんだよ。分らないのかい」

階子段を中途まで上つてから叫んだおきくは、それだけでは飽足らなくて、階上まで上つて行つた。

二人は寢衣のまゝ立竦んでゐた。おきくは迂散臭い目付で男女を見比べたが、おてつのにや〱笑つてゐる顏付は小癪に觸つて溜らなくつて、

「さつさと寢たらいゝぢやないかね。朝いくら呼んでも早く起きもしない癖に」と、つんけんと云つた。

「ぢや目醒時計を私の枕許に置いといて下さいな。主婦さんよりも早く起きますから」

「生意氣お云ひでないよ。……お前は餘計なお喋舌なんかしないで、自分のすべきことをちやんとしさへすればいゝんだよ」

おきくは相手が自分の前で恐入つてゐないのが、この時は無闇に腹立しくて、「默つて寢ろつたらお寢よ」と、おてつの肩に手を當てゝ押倒すやうにした。先つきから夜具を被つて目を閉ぢてゐた信造は、おてつがどしんと寢倒れる音に薄目を開けて顧みたが、すると、主婦が此方へ怖い目を向けてゐたので、慌てゝ寢返りをした。

「階下には病人がゐるんだから、些とは遠慮してお呉れ」と、おきくは念を押して階下へ下りた。

夜が更けたと云つてもまだ終電車の通るには餘程間があつた。隣の床屋の職人は二人で俄かに思立つて、邦太に言含めて置いて家を忍び出た。「少しの間だから成べく起きとれよ」と命けて、八百屋のと向ひ合つた二階の窓は開けさせてゐた。

市中であつても蟲の音が彼方此方に聞えた。邦太は窓に凭れて居睡りをしながら、月に一度か二度は吩咐けられる厭な役目を守つてゐたが、隣の二階の物音には何となしに聞耳を立てた。

「喧嘩をしてゐるんだな」と面白がつたが、後はひそ〳〵話になつて靜まつてしまつた。

（五）

晝間はさうでもないけれど、夜になつて亭主の側に寢てゐるのを、おきくは日に〳〵味氣なく思ひ詰めた。惡いと云ひながらも時々起きて店先へ出たり、信造などを差圖したりして、商賣に氣を紛らせてゐた頃は、その中には全快して、働き手揃ひで稼いで店も擴げる話などして、まだしも頼もしかつたが、寢床に就きつきりになつたこの頃の亭主の窶れた顔からは、將來の望みは何一つ得られなかつた。醫者も首を傾げてゐたが、とても助かる見込みがないとすると、東京へ死にゝ來たやうな亭主の不運が可愛相でならなかつた。せめて生きてゐる間だけは好きなやうにさせて大事にしやうと思つてゐたが、眞夜中などに譯の分らぬことをくど〳〵云はれるのにはつく〳〵惱まされて、早くこんな思ひから逃げられた

らと、死ぬるものなら早く死ねと、むごい思ひが頭を掠めることがあつた。

胸が締めつけられるやうで、吃逆上げる苦しさを覺えた時には、病人はよく「南無阿彌陀佛」を續けざまに口にした。それが不明瞭な力のない聲で呟かれた。

「かう云つてゐると、いくらか氣が紛れる」と云つてゐた。

「何か外の事を云つたらいゝぢやないか。陰氣でいけないよ」と、おきくが顏を顰めると、

「外の事を云ふ氣にはなれないよ。南無阿彌陀佛だと御利益があるかも知れんぢやないか。お前も神佛を拜んで呉れ。女でお前のやうに信心氣のないものはないぜ」

「家にや神棚も御佛壇もないから拜まうたつて拜めないよ。南無阿彌陀佛なんか聞いてゝも哀れでいけないから、何糞こんな病氣ぐらゐと元氣を出して御覽な。その方が乾度いゝよ。お前さんは病氣に負けるからいけないのだよ」

「お前は病氣をしたことがないから、そんな思遣りのないことが云へるのだ」

泥色をした亭主の恨めしさうな口振りはおきくにも凄かつた。その長くのびた爪で此方の胸へ飛びついて來さうに思はれて身震ひした。

「お前さんが望むのなら金毘羅樣へお百度でも踏むわよ。水垢離でも取らあね。」

「さうして呉れるかい。明日の日にでも金毘羅樣へお詣りして呉れ」

「あゝ」おきくは氣休めに受合つたものゝ、眞面目に神佛へ祈願するやうなしほらしい心にはなれなかつた。東京へ來た當座一度遊びがてらに羽田のお稻荷樣へ詣つて、商賣繁盛を祈つて御供物を頂いた時

には、何となしに御利益があるらしく思はれたが、かうも衰へた死相を帶びた亭主の病氣が、神佛の力で癒らうとはどうしても信ぜられなかつた。

「おれは後一年でいゝから丈夫な身體になりたいぜ。おれの壽命が盡きるのならお前の壽命を一年取つておれの壽命に足しをして呉れ。お前は長生をするだらうから、一年くらゐおれに讓るやうに金毘羅樣にお願立てをして呉れ」

「あゝいゝとも、二年でも三年でも」

「おれの云ふことを戲談にするんか」女房がいゝ加減にあしらつてゐるのを知ると、病人は心細くもあり腹立たしくもなつた。

「だつて困るぢやないかね。私の壽命を切取る譯にや行かないしさ」

「お前に親切氣がないからだ」

「そんな無茶を云ふもんぢやないよ。私は一日働いて眠くつてならないのに、かうして夜中に起きてるんぢやないか」

　おきくも我慢しかねて荒々しく云つたが、すると、病人の窪んだ目には涙が溜つた。

「眠いくらゐが何だ。おれは今夜にも死ぬるかも知れんのに、お前は眠いくらゐがそんなにつらいのか」

「……」

　おきくは例のやうに御機嫌を取らないで、頑なに口を噤んで目を背けてゐた。そして、病人が殊更めいた術ない聲して煮切らぬことを言出すのを聞いてゐられなくて、ふと寢床を離れて寢卷に細帶を締め

たまゝ、臺所口から廻つて表へ出た。終電車も餘程前に通つた後で、周圍は寢靜まつてゐた。

薄着には冷た過ぎる夜風に吹かれてゐると、胸の蟠まりが融けて生返つたやうな氣持がした。月は東京のやうな市街にでも照つてゐるといふことを今初めて感じたやうに空を見上げて不思議に思つた。……おきくは病人の臭い息のしないところで、のび〱と手足を伸して心まかせに休息したかつた。

「主婦さん、どうしたんです」蹲んでゐるおきくの後から、突如に聲がした。

「おや、今時分何方へ？」

「へゝゝゝ。‥‥御病人は些とはよくなりましたかい」

「相變らずで困るんですよ」

「そりやいけませんね」

床屋の職人は二階を仰いで邦太を呼んだ。雨戸は開いてゐるのだが、寢込んでゐるのか返事がなかつた。例なら一人が連れの肩車に乘つて隣の廂へ飛びついて、窓から二階へ入るのだが、今夜は主婦に見られてゐるので、さうも出來なかつた。

「仕樣がないなあ」と呟いて、「邦。‥‥邦公ッ」と聲に底力を入れて呼んだ。

女の所へ遊びに行つたのだなと、おきくは興がつて見詰めてゐたが、「私が二階から呼んで見ませうよ」と云つた。

「お氣の毒ですがさう願ひませうか」

「どういたしまして」おきくは笑ひ〱云つて、「でも、朝まで家を空けないでちやんと歸つて來なさるか

ち感心ですね。引留めたでせうに、さぞ」と些つと揶揄つた。

「そんなんぢやありませんよ」

「お二人とも色男だからね。油断は出來ないよ。…ちよんの間の隱れ遊びつて面白いものですつてね」

「主婦さんも口が惡いや」

おきくは珍らしく戯談口を叩いたのでいゝ氣持になつて自分の家へ入つた。そして、病人が何か云つてゐるのを見向きもしないで、いそ〳〵二階へ上つて雨戸を開けて、「邦さん」と二三度呼立てた。はては、屋根へ踏出して隣の窓の障子を開けて呼んだ。

「落ちたら大變だ。泥棒見たいだね」と、二人を見下して云つた。

邦太は眠呆眼をこすりながら窓から顔を出した。おきくは「左樣なら」を云つて、雨戸を鎖したが、眠氣が去つて頭は冴えてゐた。先つきからの物音にも夢を破られないで、おてつや信造は正體なく眠つてゐた。階下からは「おきく〳〵」と呼んでゐたが、その聲を聞くと、おきくは階子段を下りるのが厭で溜らなかつた。階下の電氣の光を受けて上り口が明るいばかりで、二人の寢姿はよく見えなかつたが、信造の男らしい深い息を聞いてゐると、そのきび〳〵した逞ましい身體が闇の中にも描き出された。

おきくは索り足で二階を彼方此方と歩いてゐた。二人の寢床の中へ割込んで眠りたかつた。

「おきく、貴樣は何をしてるだよ」階下の聲におきくは眉を顰めて舌打ちした。返事をしないでゐると、暫くしてふと上り口に亭主の顔が現はれた。階子段に足音の前觸れもしなくつて出拔けだつたので、おきくはぎよつとした。見馴れた亭主の顔がまるで亡者のやうだつた。

「先つきから何をして騷いでゐたんだ」

病人はのそ〳〵上つて來たが、おさくが何か云はうとしても言葉が口から出ない前に、信造の足に蹴躓いてばつたり倒れた。

「危い……」

おさくは思はず叫んで、病人を搔抱いて、「じつと寢てればいゝのに。私は夜遊びから歸つた床屋の若衆に賴まれて小僧さんを起しに來たゞけだよ」と、邪慳に云つた。

「そりや餘計なおせつかいだ。外へ出たり二階へ來たり、おれが物を云つても返事もせんぢやないか。おれが疼い目をしても、今に今死んでも、お前は何とも思はんのだな」

「もう澤山だよ」

おさくはこの瞬間、亭主でも何でもない只の亡者に取付かれてゐるやうな無氣味さを覺えて、持つてゐた手を離したが、すると、病人は獅嚙みついて、髮の毛をも握つて、「出て行きたきや出て行け」と怒鳴つた。

「何をするだよ、この人は」

おさくは我武者に相手を突放した。寢床の側の騷ぎにやうやく目を醒ました信造は、譯が分らないので夢を見てゐるやうな氣で、マッチを擦つてランプをつけた。胸をはたけて脛も露はな夫婦のしどけない樣は滑稽だつた。おさくから譯を聞いて、病人を慰めながら階下へ連れて下りたが、おさく自身は容易に下りて行かなかつた。

吃驚したよ。おいらの腹の上へ打倒れたのだもの」

信造は思出すと可笑くつて溜らないやうに、おきくに向つて云つて、元の寝床へ潜込んで、「姉さんも早く階下へお出でよ」と急立てた。

「さう追立てなくつてもいゝぢやないか」おきくは不承々々に階下へ下りた。そして、物をも云はずに夜具を引被つて、直ぐに空鼾をかいてゐた。

(六)

「今日は」と、床屋の職人に朝夕の挨拶するたびに、おきくは意味ありげな笑ひを送つてゐたが、先方ではあまり取合はなかつた。そして、職人達は、いけ好かない主婦として陰口を利きてゐたが、おてつから夜中の取組合ひの話を聞くと、それを誇張して考へて、寄つて來る近所の若い者に笑ひ話の種として吹聴した。

「主婦さんは毎晩二階へ匐つて來るのかも知れないぜ。お前さんは用心してゐないと信ちやんを取られるかも知れないぜ」と、職人はおてつを揶揄つたりした。

「いやな事云ふもんぢやないよ。信ちやんが聞いたら怒るよ」

おてつは眞に受けなかつたけれど、いゝ氣持はしなかつた。先日の晩夢現で見てゐた騷ぎも、さう云はれて見ると、疑ひを容れられないでもなかつた。信ちやんに聞く譯には行かないが、これから寝たふ

りをしてそつと樣子を見てゐやうと企てた。

で、例は目を瞑りさへすれば直ぐに眠入られるのに、その夜は思ひ詰めた一心から、夜明け前まで齒を喰締めて起きてゐた。かうして起きてゐると、夜の長いことがおてつにもつく〴〵感ぜられて、信造の前後不覺に寢てゐるのが不思議でならなかつた。階下も靜かで何時まで經つても人の來る氣色などしなかつた。

天井で鼠の荒れる音や、彼方此方で吠える犬の聲を聞きながら、夜中といふものはこんなにも寂しいものかと思つて、耳を澄まして退屈な時を過ごした。

あくる日おてつは居睡りをしつゞけた。午過ぎに靈南阪のお得意へ品物を屆けて來た歸りには、どうにも我慢出來なくて、道傍のお寺の石段に腰を卸して、一しきりぐつすり寢入つた。搖起されて目を醒すと、巡査が前に立つてゐた。たゞ注意されたゞけで叱られもしなかつたが、頭を下げてお詫びをして家へ急いだ。

「何處をまご〳〵してたんだよ」主婦に劍突を喰はされたので、時計を見ると、短い針が最早四時を廻つてゐた。

二晩つゞけておてつた眞夜中まで睡りを我慢したが、つひに堪へられなくなつた。病人の苦しさうな聲は時々聞えても、何時もよく眠る信造の側には別に異常はなかつた。で、安心して平生の通りに快い眠を樂んだが、しかし、以前よりも多少目敏くなつたのか、眞夜中にふと何かに脅かされたやうに目の開くことがあつた。

「信ちやんや主婦さんに後暗いことは些ともないに」と、おてつは床屋の職人に向つて、一度惡鬼となつて辯護した。

「戯談だよ。そんな事のある譯はないやね」と、職人は笑ひ〳〵謝つた。

が、この戯談半分の噂も何時となしに、信造の耳に入つたので、信造は驚いた。根も葉もないことを云はれるのも口惜かつたし、殊に病人に對して氣の毒でならなかつた。

で、「相談がある」と云つて、おきくを二階へ呼んで、

「姉さん、おいらは暇を貰うて故郷へ歸らうか思つてるけんど、」と少し顔を紅くして云つた。

「甲州の方に急用でも出來たのかい」

「おいらは矢張田舍で働いてゐるんが氣樂でいゝと思ふよ。東京は口が煩いでな」

「お前さんのことを誰れか惡く云つたといふのかい。何だね、そのくらゐのことでさ」おきくはぽんやりある事を思つて笑つてゐた。

「姉さん知つてゐるんですか。外の事とは異つて厭なこつたからな」

「お前さんも氣が弱過ぎるよ。おてつとどうかうつて、誰れかに揶揄はれたのだらう」

「あの女なんざ」信造は吐出すやうに云つた。「姉さんだつて知つたら厭になるに違ひないや」

信造が遠廻しに傚見かすのを、おきくは興ありげに聞いてゐた。「馬鹿にしてるよ」とにつたり笑つて、

「あんまり馬鹿げて怒られもしないぢやないかね。そんな詰らないことを氣にして田舍へ行つちまうつてことがあるものかね。却つて變に思はれるわね」

「おらあ大將の病氣を心配して、御利益がありや鹽斷ちでも穀斷ちでもするくらゐに思つてるのに」

信造は昂奮して云つたが、相手が噂などにさして驚いてゐないのを見ると、彼れの若い心にも多少の安易が得られた。

「初めから來て呉れなきや兎に角、今になつてお前さんに出て行かれちや、この商賣は今日が日から止めつちまはにやならないよ。それに、私でさへ見窄らしい樣をして故鄕へ歸るのは死んでも厭だと思つてるのに、お前さんは此方で何もし出かさないで、のこ〳〵歸つて行く氣になれるのかい」

さう云はれると、信造は自分が輕はづみに過ぎたことや意氣地なしに見られることが耻かしくなつた。そして、主婦さんと差向ひでゐるのが極まりが惡くなつて目を外らした。今まで夢にも思つてゐなかつたことで心が濁らされた。

「本當に力になつてお呉れな。私はどうしてもやり通すつもりだから、信ちやんには味方になつて貰はにや困るよ」おさくは含羞んでゐる信造を見守つて、「病人は無理ばかり云つて私をいぢめるし、信ちやんにまで愛想をつかされちややり切れないよ。……他人がどんな噂を立てやうと關はないぢやないかね」

「……」信造は話を外らすために、病人は東京の評判の醫者に診せて、入院したのがよければさうしたらいゝぢやないかと、生眞面目に注意した。

「私も以前よくさう云つてゐたのだけど、當人が病院へは行きたがらないんさ。上田さんの見立てぢや、どうしたつて助からないらしいから、當人の云ふやうにして樂に息を引取らせたいと私は思つてるんだよ。あの身體ぢや俥にも乘れりやしないし、じつと寢かしとくのが何より藥なのさ」

「或る見込みはないのかね」
平生そり〳〵話合つてゐる病人の容體話は、つまり同じ言葉の繰返しであつて、何方にも以前ほどの熱心は消えてゐた。
「私は半歳の餘も介抱してゐるんだもの。根も盡きちやつたよ。こんなお役目はもうそろ〳〵切上げて貰ひたいものだね」
「主婦さん、親方が呼んでゐますよ」
おてつの聲におきくは又かと厭々座を立つたが、信造は居づらい席から救ひ出されたやうな氣がした。
が、頭に雲が懸つたやうで、それからは病人や主婦の顏を平氣で見てゐる譯に行かなくなつた。二十二のこの歳まで女といふものを知らなかつた信造には、噂を立てられたゞけでも啻ならぬ身の上の事件だつた。

（七）

主婦と一つ膳で食事をしてゐる時でも、病人の看護をしてゐる時でも、信造は日に〳〵無邪氣さを失つてゐた。そして、病人の窶れた姿を見てゐると、理由のない恐しさが感ぜられた。窪んだ鈍い眼で見られるのが凄かつた。

「おれは頭を剃りたいから床屋へ連れて行つて呉れ」と、病人は信造を招いで云つた。

「動いても惡くなけりや連れてゝ上げるけれど」

「なに惡くなつても構はん。おれはくる／＼と坊主になりたいよ」

「さう伸びてゐちや氣持が惡いだらうな。一分刈りにしたらいゝだらう」

「いやおれは髪が伸びて煩いから刈りたいのぢやない。坊主になりたいんだよ。佛様のお弟子になつたつもりで居りたい」

胸苦しいをり／＼南無阿彌陀佛を呟いてゐたゝめかと、信造は可笑く思つて、頭を剃つて氣が晴れるものならそれもよからうと同意して、肩を貸して土間まで連れて來た。店先には明るい日が差してゐて、そこらに並んだ色さま／＼の水菓子や野菜物は、病人の目にくら／＼と映つた。

「大丈夫かい」

信造はさう云つて、下駄を穿かせやうとしたが、骨と皮になつた足は下駄の重みにさへ堪へられなかつた。表を通りながら此方を顧みて顏を蹙めた者もあつたが、そこへ歸つて來たおきくは、

「何處へ行くだね」と血相變へて叫んだ。そして信造から譯を聞くと、「お前さんにも呆れるよ。病人が何と云つたつておいそれと外へ連れ出すつてことがあるものか。轉んで怪我でもしたらどうするんだよ」と、二人を叱りつけて、病人を抱へて元の寢床へ運んだ。

「床屋なぞへ行つて病氣が惡くなつて御覽なね、私の所爲にされるよ。これだけ氣をつけてるのに、お前さんを疎末にしたやうに思はれちや全く割に合はないからね」

「おりや、お前がおれの髮を剃つて呉れんか」

「私に剃れるものかね。何を云ふんだよ。坊主になるなんて縁喜でもない。もつと氣分がよくなつた時に床屋の若い衆に來て貰つて刈つて貰へばいゝぢやないか」

「どう云ふ譯だか自分でも分らないが、おれは坊主になつたら氣が安まるやうに思はれ出したのだ」

病人は今結つて來たらしい女房の髮を見入つて、「お前に親切があるんなら、おれと一緒に頭を剃れ。お前が尼になつて其處にゐて珠數をつまぐつてゝ呉れゝば、今にでもおれは安心して死ねるのだぜ」

「私が尼になつたらよく似合ふだらうね」おきくは危く噴出さうとしたが、白目を寄せて見上げてゐる相手の顏を見ると、自づから笑ひは留つた「坊主頭ぢや店へも出られやしないよ。人が狂人だと思ふよ」

「狂人と思はれるのが何だ」

病人は恨めしさうに云つた。自分の心持がどうしても女房に呑込まれないのが牴牾しくて、手も顏も足をもぶる〳〵震はせた。……狂人と思はれるのが何だ。髮を剃るのが何だ。……自分のこの術ない手賴りのない氣持は長年連れ添ふ女房にも分らないのだ。

「お前は髮を結つたりして、それが面白いのか」

執念く詰られるのに答へやうもないので、おきくは店の方へ出て行つた。そして、來合はせた客に向つてお世辭など云つてゐたが、病人はその快活な聲を聞きながら、先つき久振りに出て見たいろ〳〵に色取られた店の樣子を思起してゐると、ます〳〵心が焦立つた。昔見馴れた自分の店でも遠い所にある珍らしい世の中のやうで、其處に立働いてゐる女房や信造やおてつが妬ましかつた。枕許の障子の裾

の方に差してゐる光のしよんぼりしてゐるのに引替えて、表通りの秋の光は眩いくらゐに燦めいてゐたやうに彼れには思はれた。

で、病人はひとり憐れむやうに殊更に呻いてゐたが、ふと簞笥の側の剪刀が目につくと、寢床から匍出して取つて來て、耳朶の上までも延びてゐる髮の毛を滅茶々々に切り散らした。

「主婦さん、大變だよ」臺所から覗いて見たおてつの叫び聲に、おきくは驅けて來て剪刀を奪取つた。氣が狂つたのかと見てゐたが、病人は頻りに髮の毛を掴んで、もつと切つて吳れと强請んだ。

「仕樣がないね。ぢや、床屋に來て貰はうよ」と、おきくはおてつに吩咐けた。

脊の高い方の職人が道具箱を提げて來るまでに、寢床のまはりは大急ぎで掃除され、散らかつたものも片付けられ、病人の寢衣も取替えられてゐた。得度の式でも初まるやうに、信造も寢床の側に鹿爪らしく控へてゐた。

職人は病氣見舞の無駄口を暫く利いてから、皆んなで評議した上で、一分刈にすることにした。信造は病人の身體を支えたが、垢臭い脂臭い齒屎臭い臭ひに鼻を外らしてゐた。

冷たいバリカンが頭の皮に觸れるのはいゝ氣持であつた。前に振り落される長い髮を見てゐると、長患ひの自分の惱みをまざ〳〵と見せられてゐるやうに病人は感じて涙をこぼした。

「私はまたこのくらゐ髮の延びるまで生きちやゐまいよ」

「なあに髮なんざ直きに延びますぜ」職人は大急ぎに片付けながら、年の內に店の普請をする話などしてゐた。

「これで薩張りしたらうね」と、女房の持つて來た鏡に自分の顏の映るのを、病人はちらと見たが、懶いやうに鏡を推退けて横になつた。
「奇麗なお坊さん」と、おきくは笑つて店の方へ出た。
「南無阿彌陀佛々々々々々」と、今は苦痛を紛らすためでなくて心から念佛を唱えてゐると、清吉の胸にも少しの間俗縁を離れた安らかな諦めが得られた。そして、暫くはすや／＼と眠入つた。
「あんなことを云ふやうだと、もう死に時が來たのだよ」と、おきくは火鉢の側で一服吸つてゐる信造に云つた。
「大將は幾つだね」
「丁度だよ。こんなに早く弱るのは働き過ぎたからだらうよ。露月町に奉公してゐた時分には、其處の主人が肺病で寢たつ切りだつたので獨りで何もかもやつてゐたのだつて。さういふ譯で店が潰れたのだから、碌にお給金も貰へないで、手ぶらで甲州へ歸つたのだらう。あの病氣は露月町で傳染つたのかも知れないと私は思ふよ」
「だつて、肺の病氣が腹に傳染るつてことはあるまい」信造は主婦の無智を腹の中で笑ひながら、「姉さんは大將と一つ違ひだつたね」と、來た時よりは小瀟洒して女振りが上つたと見てゐた。
「私なんかもうお婆さんだわよ。身體一つを資本であがいてるんだもの」と、おきくは甘つたれた聲を出した。
「なあに歳よりは若いよ」

「信ちやんもお世辭が旨いよ。」

だけど、身裝ふりなんぞどうでもいゝ。うんと稼がなければならない。私はさう思つてゐるから、信ちやんも若い女なぞに目を移さないで、お金を儲けることに一心になつて呉れと、おきくはとろけかゝつた心を引締めて眞顏で云つた。

「東京の若い女はなか〳〵油斷がならないから浮かり迷はないやうおしよ」

「おいらもそんな馬鹿ぢやないさ」

信造は先日から主婦の目顏や言葉付やいろんな者で、絶えず好奇心を刺戟されながら、何事もなく過ぎてしまうのを牴牾しく感じてゐた。そして、眞心から病人の介抱をしてゐるらしいのを見ると、一寸厭な氣がした。

「南無阿彌陀佛」

病人の幽かな寢言に、二人は目を見合せて微笑した。

(八)

信造は最早おてつを優しく扱かはなくなつた。下女見たやうに差圖して時々は荒つぽく叱り飛ばしたりした。おてつはそれを氣にしないで云はれた通りに働いて、「信ちやん」と呼掛けて遠慮のない話を仕向けたが、快い返事は得られなかつた。活動寫眞や寄席などへも信造一人で出掛けることはあつても、

一緒に連れて行かれることはなくなつたので、おてつは何よりの樂みを失つた。それどころか、主婦が言付けたのか、當人が望んだのか、信造は階下へ夜具を持つて下りて、二階では寢なくなつた。
「親方が何時死ぬるかも知れないからだらう」と、おてつは獨合點をしてゐた。
「若い者を同じ部屋に寢かしとくのは爲にならんとお前さんが云つたから、信ちやんに階下へ寢て貰ふことにしたのだよ」と、おきくは病人に言譯した。病人はそんなことを云つたかどうか覺えてはゐなかつた。信造が傍に附いてゐて呉れるのは一時心丈夫であつたが、若い者の太い寢息が衰えた神經の煩ひになることが多かつた。
「おれが夜中にでも急に息を引取るやうなことがあるかと思つて、用心に信造を此處へ寢かしとくのだらう。それならさうとはつきり知らせて呉れ。おれも覺悟をしなきやならんから」
「さうぢやないと、よく譯を云つてるぢやないか」
「……おれは當分靜かな所にゐたいよ。夜中に目を開けて見てると、信造の大きな身體が目障りになつて仕樣がない」と、病人は目の前を手で拂退けるやうな眞似をした。
「ぢや見なければいゝぢやないか。電氣を消しといたらいゝだらう」
「消したつて駄目だ。元の通り信造を二階で寢させて呉れ。側にゐなくてもあれが二階にゐると思へばおれは手頼りにしてゐられるのだ」
「そんなに人間が邪魔になるのなら、私だつて此處にゐちやいけないだらう。私も二階の隅つこにでも寢てゐやうかね」

さう云つて笑つてゐるおきくの顔を、病人はぢつと見入つて默つてゐた。(女房のがつしりした身體や荒つぽい寢息が目に觸れ耳に觸れてゐればこそ、淋しい夜中でも怖い物に魂を浚つて行かれないのだつた。疼痛が激しくて念佛の効目もない時には、女房の五體を唯一つの身の置き場所でもあるやうに、その膝に身體を投げかけ、その腕に縋りその肩に縋りついで呻くのだつた)

以前のやうにむづかつて無理を云つて、物を投げつけでもしさうな氣振を見せる勢ひが最早なくなつてゐて、昨日今日はやゝともすると、憐れみを乞ふやうに相手を見据ゑるのだつたが、おきくには默つてゐる夫の心の中などはどうでもよかつた。今生の義務として時刻が來れば無理にも藥を飲ませたり、脊を撫でさすつたりしてゐたが、相手が默つてさへゐれば、その苦痛は何とも感ぜられなかつた。そして、信造をおてつの部屋から離して自分達の側に置いてゐるといふことは、病人のためよりもおきく自身のためにどれほど心の安易が得られたか知れなかつた。

「信ちやん、お前さんは眠づらいのかい」おきくはある夜夜具の中でごそ〳〵音を立てゝゐる信造に聲を掛けた。

「あゝ。……」

「どうしたのだい。お前さんは毆つても起きないくらゐの寢坊だつたのに」

「どうもしないけど、……」

「矢張りおてつの側の方が寢工合がいゝのかい」と、おきくは一寸揶揄ひながら笑つた。

「馬鹿云ふなよ」

信造は怒つたやうに云つて主婦に脊を向けた。そして空鼾を掻いてゐたが、一捻りで倒れさうな骨と皮との病人を汚いとも思はないで看護してゐる主婦の様子を見てゐると、自分が嬲り物になつてゐるやうな氣がしないではなかつた。病人の寢床の惡臭は實際以上に彼れの鼻を衝いた。…六本木の活動寫眞で見た怪談の光景が夢ともなく現ともなく彼れの頭に浮んだ。

「お前さん手を貸して具れ」…ぐつと喉佛を壓えると手應へもなかつた。

ふと薄目を開けると、明るい電氣の下で主婦は病人の側にすや／＼眠つてゐた。何だか聲がしたやうだなと思つたのは病人の聲だつた。

「信造……」

「苦しいのかい」

「おれは今さう思つてゐたのだが、おれが死んだら、おきくが何と云つてもお前は故郷へ歸れ。……」

幽かな聲で云つてゐるのがこれだけは聞取れたが、その後はよく耳へ入らなかつた。

「あゝ、おれも田舍の方が呑氣でいゝと思つてるよ」

信造は相手の顏は見ないで答へた。

八百屋の看板の書替えられたのは春になつてからだつたが、自轉車の赤い文字の「清」が消されて「信」となつたのは去年の秋の末頃だつた。

信造がどうしても階下(した)では寢ないので、おてつ一人が階下(した)で寢るやうになつたことを、おてつ自身床屋へ來て話した。「信ちやん」といふ馴々しい言葉は彼女の口から出なくなつた。

「お前さんはまだ此方に奉公してゐるつもりかい」と職人が訊くと、

「何處へ行つたつて同なじことだから居馴れたところにゐるつもりなのよ」と、おてつは答へた。

そして、おてつはお用聞やら臺所仕事やらで相變らず忙しかつた。二人の汚れ物の洗濯までしてゐた。

學生募集

新學期九月十一日授業開始

大學部（正科・別科）法律科・政治科

專門部（正科・別科）法律科・政治科

大學部本科及ビ專門部ハ午後五時半始業

上級編入試驗九月四日ヨリ執行

○中學校卒業者又ハ同檢定試驗合格者ハ正科ヘ無試驗入學ヲ許ス

○其他ハ別科ヘ入學ヲ許ス

大學部豫科

（大學部豫科學生ハ志望ニヨリ高等豫備校ノ授業ヲ聽講スルコトヲ得）

東京高等豫備校

（受驗準備教育）

○摸擬試驗

本試驗ノ實績ハ世既ニ定評アリ大正五年度本試驗受驗者一一五八人中各種官位專門學校入學合格者六八四人ヲ出セリ

（中付四の一）

學則第送申込附

法政大學

東京麴町區九段坂上

電話番町一七四・四六六二

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

書齋には必ず此書籍を缺く可からず

小春の好讀物也

小池秋草譯 フラウ、ゾルゲ（憂姫） 洋装全一冊 正價金壹圓卅五錢 郵税金十二錢

石川剛譯 ルクサンブール 洋装全一冊 正價金六拾五錢 郵税金六錢

宮家壽男譯 獨逸從軍記 洋装全一冊 正價金八拾錢 郵税金八錢

押川春浪著 空中の奇禍 洋装全一冊 正價金六拾錢 郵税金八錢

押川春浪著 春浪快著集 洋装全一冊 正價金壹圓三拾錢 郵税金十二錢

巖谷小波著 お伽口演集 洋装全一冊 正價金九拾五錢 郵税金八錢

夏目漱石著 縮刷 行人 洋装全一冊 正價金壹圓三拾錢 郵税金八錢

夏目漱石著 漾虚集 洋装全一冊 正價金壹圓四拾錢 郵税金十二錢

夏目漱石著 吾輩は猫である 洋装全一冊 正價金壹圓三拾錢 郵税金八錢

机上の好伴侶也

東京日本橋 ○ 大倉書店發行 ○ 振替東京二三八番

（中付四の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

豫約募集

水戸義公源光圀朝臣著

●大日本史中論贊遺稿
賴山陽先生抄本

朝比奈知泉先生校閲
井川巴水先生和譯

漢和両文 大日本史論贊集 完

國史中の大權威たる大日本史は義公の修撰にして享保五年之を幕府に進献す當時本史は篇尾毎に論贊を附せしが公の薨後不幸史臣の議に依り之を削除せし爲め**現行**の大日本史には**論贊を闕き**公が慘澹たる苦心は水泡に歸せり而も世人此間の消息を知る者なきを頗る遺憾とす賴山陽先生嘗て論贊全部を寫録し大日本史贊藪と名け論贊は本史の**全體を概見**するに足るとの跋を添へ旦暮愛讀措かず日本外史等の著作も此論贊に負ふ所多し因て今回本史漢文の論贊合計**二百七十四篇**即ち本紀は神武より後小松に至り諸臣傳中には藤房、正成、義貞、親房、顯家等に關する傑作あり其他后妃傳、皇子傳、皇女傳、將軍傳、將軍家臣傳、文學傳、歌人傳、孝子傳、義烈傳、烈女傳、隱逸傳、方技傳、叛臣傳、諸藩傳の各論贊を以てし卷末附錄には安積澹泊先生の史學に關する論文等一括網羅し**總假名付の和譯**を載せたる本書の發行近きにあり蓋し大日本史は本書を待てヽ始て**完全無缺**なるを得べく卓見英識亦從て明知すべし況や論贊は奔放肆大歐陽玄に超越したる大文字にして漢文を學ぶ者の無二の軌範たり。實に本書天下一品の珍寶書にして唯此絕好機會に於てのみ購讀するを得べし時機を逸せず速に申込あれ

▲體裁 ◉菊判六百頁以上紙質優良製本堅牢總クロース金文字入厚表紙紙製箱入頗美裝

▲見本 內容見本及目次發行趣旨書は葉書又は電話にて御申越次第直に送呈す

▲特價 本書壹冊**特價金貳圓也**內地送料本院持●又朝鮮滿洲臺灣樺太支那は壹冊送料金四拾錢

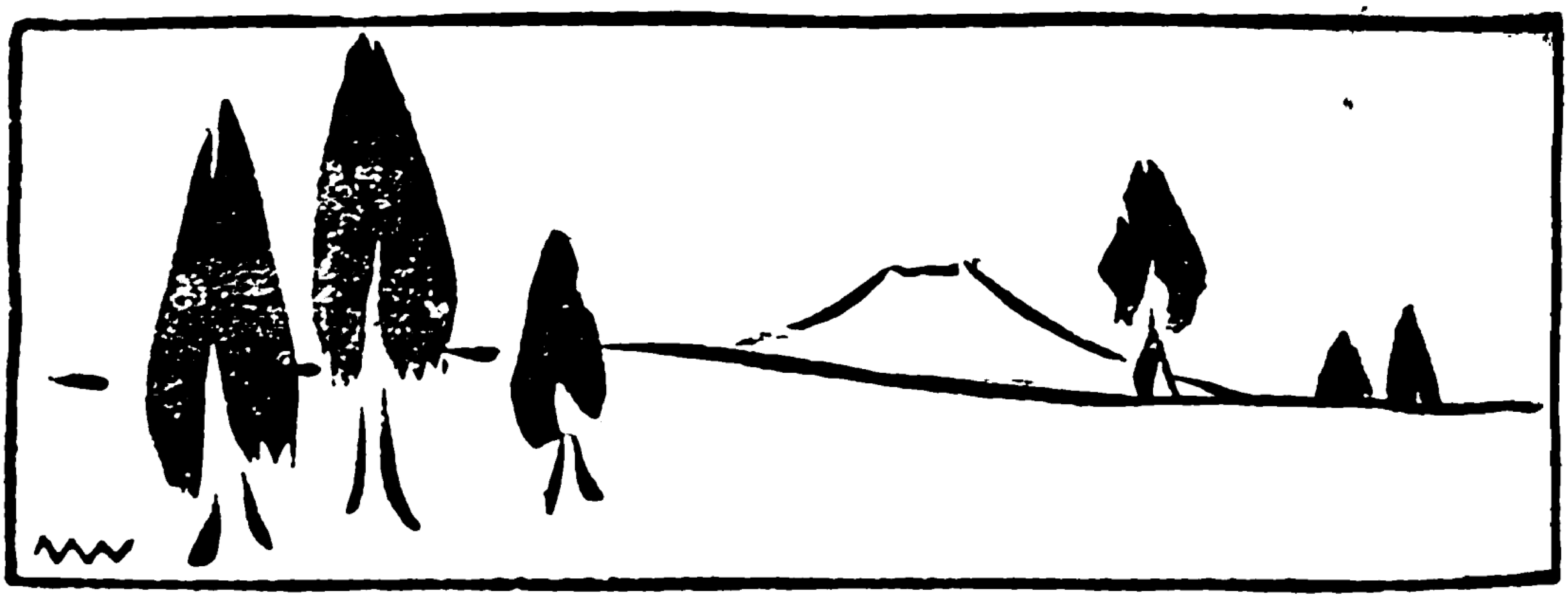
▲申込 申込の際は特價金貳圓を添ひ申込るべし但し內地以外は送料四拾錢添付の事

▲製本 大正五年八月廿五日製本出來に付申込順に依り直に送本す

▲締切 大正五年九月廿五日限り申込を締切る●期限を逸せば世界無二の本珍寶書を得難し

(中付四の四)

發行所 東京芝區愛宕町二丁目十四 **大正書院** （振替口座東京八〇八七番 電話芝二六四四番）



山莊にひとりゐて

田山花袋

一

山に面した明るい硝子戸の中で、私が獨りで筆を執つてゐると、靜かに外に人の來る氣勢がした。午前十時頃で、山は晴れて、長い斜阪の處々に草を燒く烟が白く眞直に昇つてゐた。

私の山莊の周圍は、用もない人がいつも覗いて通つて行つたりするので、私はちよつと其方に眼をやつただけで、別に注意をも拂はずにそのまゝ筆を走らせた。しかしそれは矢張私をたづねて來たのであつた。

私は立つて行つた。私は二人の靑年を見た。一人は二十一二歲、一人は十八九歲、共に白地の絣の單衣を着て、袴を着けて、新しい麥稈帽子をかぶつてゐた。

「何か用ですか？」

かうは聞いたものゝ、私は直ちにその用事を知つた。二人は唯私に逢ひに來たのであつた。二人は兄弟で、埼玉のものだが、辰野にゐる伯父の許に行く途中、此處に私のゐるのを知つてゐて、昨夜わざわざ其處で下りて、停車場の前の旅館に泊つて、そして今朝此處にやつて來たので、「今、そこに、爺さんがゐましたから、先生が忙しがつてゐるか何うか聞きましたら、昨夜、酒を召上つたやうだから、今朝はまだ勉強にかゝらないでせうと言つてましたから、それで上つたのですが……」かう言つて、莞爾(にこ〳〵)しながら私の顔を見た。

「まア、お上(あが)り……」

かう言つて私は二人を餉臺(ちやぶだい)の傍へと導いた。私は不思議にもさびしい私の心が溫かい二人の若い心の方に偏つて行つてゐるのを感じた。

「さうですか、甲府で下りたのですか。それから、昨夜、そこで下りて、停車場前で泊つたんですか。それぢや、すぐ來れば好かつた」

「でも、先生に、かうして、すぐ此處でお目に懸れるとは思ひませんでしたから」

かうして私に逢へたのが、二人にはいかにも嬉しさうであつた。そしてまたその嬉しさうなのが私の心を動かした。私は二十年も三十年も前に歸つたやうな氣がした。暑中休暇の旅行、山上に渦き上る白い雲、谷合の涼しい水の音、私もよくかうして旅をして歩いた。其時分は山を見ても水を見ても唯嬉しかつた。愉快であつた。世間に觸れない心は純で、死だの戀だの暗い心理だのにはまだ少しも觸れもしなければ汚されもしなかつた。體には力が充ち、胸には若い心が溢れ、希望は花のやうに前途にかゞや

き渡つた。口に自由を言はず、獨立を唱へないでも、體も心も小鳥のやうに自由で、いかなる艱難も艱難とは思はなかつた。從つて私は今『先生……』などと言はれて、かうして訪ねて來られるのが、一方には嬉しく一方にはまた辛く悲しかつた。

「御邪魔ぢやないんですか。先生、本當に……」

「いや……今日はもう好いんだ。君達が折角來て呉れたのが嬉しいから、一日仕事を休んでも好いんだ。よく來て呉れた――」

　こんなことを言ふ中に、私達の心は今此處で初めて逢つて、初めて口を利いたとは思へないやうな一種の親しさと融合とを感じた。『先生、これは、昨日、甲府で買つて二人で飲んだんですが、飲み切れないんです、二人では。先生、何うです？』兄の方はかう言つて、持つて來た葡萄酒の罎を飾臺の上に載せた。三分の一ほどまだ酒は殘つてゐた。

「先生、本當に一人なんですか。食ふものは？　皆な先生がなさるんですか？　自炊してるんですか？」かう言つて驚いたやうな顏をして、二人は室の内を見廻した。勝手まで續いて明放された室の内には、戸の釜だの鍋だのバケツだのが一杯に混雜を散ばつてゐた。徳利や茶椀なども昨夜のまゝになつてゐた。床の間に積み重ねられてある夜着や蒲團を見ては、『蒲團が床の間にあるのは面白いですな』などと笑つた。

　弟の方は殊に紅顏の美少年で、大抵は默つてゐたが、それでも莞爾と常に笑を頰のあたりに湛えてゐた。父親は埼玉のある中學の國語漢文の教師をしてゐて、年は五十一二ださうだが、矢張私のやうに酒

を飲むことや、不遇で不平であつたが今ではおとなしくなつたことや、漢詩を作つたり漢文を書いたりすることや、もう一人縣の師範に二十になる女の同胞があるといふことや、母親がやさしいためにのみ長い間の父親の不平が慰められて來たことや、いろいろなことを聞く中に、私の心は益々二人の生活と境遇とに深く入つて行くやうなのを覺えた。私は死んだ兄などのことを思つた。不遇な心が其處にも此處にもあることなどを思つた。續いで私の二人の男の兒のことなども思ひ出されて來た。私は弟の書いたスケッチ帖などを展けて見た。

「旨いですね」

「いゝえ」

弟の青年は顏を赧くしてゐた。草花や、山や、汽車や、それから父親の橫顏の寫生などもあつた。「ははア、かういふ父さんだね、好いお父さんだ」

「でも、今はよくなりました。……自分で漢詩の評釋の大冊なのを拵へて、長年持つてゐますが、時々酒なんか飮んだ時に、それを出して來て、ひねくり廻して、何處かの本屋で引受けて本にして吳れると好いんだがなアなんて言つてをりますが……」

「君なんかも、これから大いにやらなくちやならないんだね」

「おやぢが不遇でしたから、俺の分も貴樣達がしなくちやいけないッてよく言はれるんです」

「大いにやるさ」

かう言つた私は、私の通つて來た長い長いライフを思起さずには居られなかつた。過ぎるとなく私は

長い年月を經て來た。さうだ、本當にいつ過ぎるともなく過ぎて來た。そしてそれは長い長い斜阪ばかりで、その間には絕壁もなければ急な阪路もなかつた。曲線ではなく直線であつた。

謠婆の好きな話を私がすると、

「おや、先生、私達が賴んで來ますから、一緖に此處で午飯を戴かして下さいませんか」

「それはいゝけれど、君達に買はせては氣の毒だ。僕が御馳走するから、使だけ君達が行つて吳れ給へ」

「でも……」

「好いから、さうして吳れ給へ」

「さうですか」

暫くしてから、二人は出かけて行つた。そのあとで私は昨日から一昨日にかけてのことを考へた。丸で違つて生活。丸でこの山中に思ひもかけないやうな生活。混亂と煩悶と苦痛と愛慾との生活。私は室の內を見廻した。脂粉の氣の滿ちた風呂場、この山莊にふさはしからぬ女の匂、柔かい紙、香水の小さな罎、空然訪ねて來た東京からの客、酒の半ば殘つた罎、『跡』はそこにも此處にもあつた。

それは二日前の夜半であつた。突然、『電報』といふ聲に驚かされて出て行つた私は、『アスアサ八ジツクマサ』といふ文字のそこに書いてあるを見た。私の體は戰えた。私は摺つたマッチの私の手から消えて行くのを知らなかつた。私は暫し闇の中に立盡した。

丁度私は其翌日東京から來る二人の客を期待してゐた。二人の客は昨夜東京を立つて、富士の八湖をめぐつて、今夜は精進に泊つて、明日は此方へ來る筈であつた。暫く考へた私は、『なアに、構はん。

一緒になつたつて構はん。滿更知らない同士ではないんだから」から決心して、私はそのまゝ蚊帳の中に入つた。しかし其夜は何うしても寢られなかつた。

二

薔麥を食つて了ふと、勝手の方に立つて行つた兄の方の青年は、
「風呂があるんですね、先生」
「あゝ」
「いつでも沸かすんですか」
「昨日、東京から二三人の客があつてね。沸したんだけれど……」
「ぢや、沸せば、まだ入れますね」
「しかし、もう汚れてゐるかも知れない」
兄の青年は、風呂の蓋を取つて見たらしかつたが、「なアに、まだ綺麗ですよ。二人や三人入つたッて汚なくなりやしませんよ。少し水を汲み足せばよう御座んすよ。先生、次手に、湯を沸して入れて頂いて行つて好いですか」
「好いともね」
「ぢや、おい、一緒に、水を汲まう」から言つて、弟を促し立てゝ、二人は井戸の方へ行つた。
車井戸の鳴る音が頻りにした。
私が行つて見ると、二人は一生懸命に風呂に水を汲み入れてゐた。で、私も手傳つてやる氣になつて、

炭俵を解したのを焚つけにして、火を釜の下に燃しつけてやつた。

「先生、好う御座んすよ。私達が二人でやりますから」

「でも……」

「好う御座んすよ。學校にゐる時分、かういふことは、もう始終仕つけてゐたんですから……」

「でも、唯ゐても仕方がない」

「本當に、彼方に行つてゐて下さい。すつかり沸して、入るばかりにして、先生を入れて上げますから」

何うしても言ふことをきかないので、仕方がなく私は室の內へと上つて來た。あとでは、二人が一生懸命になつて、薪をさがしたり、火吹竹で火を吹いたりしてゐた。烟が一時室內に渦き上つた。

「かうして、先生と一緒に、蕎麥を食つたり、湯に入れて貰つたりしやうなどとは、昨日まで想像もしてゐなかつたね。先生に、お目にかゝれるか何うか、それすら期待してなかつたんだから……。唯、先生がゐる筈だから、一晩、山を見ながら、泊つて行かうツて言つて下りたんだからな」二人はこんなことを言つてゐた。

火が燃え附いたので、二人はやがて此方へと上つて來た。

「實に愉快だ」

「本當だ……」

二人はかう言つて、莞爾しながら、飼臺の處に來た。

「先生、何うでした。葡萄酒は？」

「少し甘いね」

「さうですかね」

「本場だから、質は好いんだけども、通俗相手に甘く拵へてあるから駄目だね」

「父も矢張、葡萄酒なんか甘くつて駄目だッて言ひますよ」

また種々と話が出た、何か聞きたいとが澤山にあるけれども、何から問いて好いかわからないといふ風であつた。茶を飮んだり菓子を食つたりした。一昨日精進の方から來た客が持つて來た水蜜桃が籠の中にまだ三つ四つ殘つてゐたのを二人に勸めたりした。

時々燃えさしの薪の落ちる音をきけつけては、二人は代る〲立つて行つて風呂の火を見た。

靜かな午後で、白い湧くやうな雲が八ヶ岳の上に靡き渡つてゐた。蟬が何處か遠くで鳴いてゐるのがきこえた。草原にはギスの鳴く聲がした。

「靜かですね」

「本當に靜かだ……」

兄は半ば私に半ば弟に向つて、「かうした一日があつたといふことは、僕等の日記に特筆大書して置かなければならないことだね。一生、忘れませんよ。先生」

「僕もお蔭で、一日さびしくなく暮した」

で、風呂が沸いて、それに入つて、午寢などをして、二人が暇を告げて行つたのは、山の襞がもう濃い影を帶びる頃であつた。五時半の汽車で、二人はまた旅をつゞける筈であつた。

「ぢや、先生」
「そこまで送つて行かう」
「いえ、もう」

かう辭退したが、私は下駄を穿いて、戸外へ出た。桔梗だの女郎花だのが美しく草藪の中に咲いてゐた。

「ぢや、其處を行くと、近いからね。すぐ大きな道に出るからね。」
「ぢや、左樣なら、」
「左樣なら」

折れ曲つて下に下りて行く路の見える中は、二人は何遍となく振返つて私の立つてゐる方を見た。私も純な若々しい心と情とをなつかしく嬉しく思はない譯に行かなかつた。私もその姿の見えなくなるまで見送つて居た。

一時間ほどすると、下りの汽車の通る音がした。私は立つて硝子戸のところへと行つた。山畠を隔て、谷を隔て、池を隔て、國道を隔てゝずつと向ふに、汽車のレールの長くつゞいてゐるのが一ところ打渡されて見えたが、丁度其の時貨車と客車とを繋いだ長い列車は、白い烟を嵐氣の中に漲らして通つて行くのが見えた。

三

其時、停車場の構外で、私は一刻毎に近づいて來る下りの汽車を待つてゐた。

乘客は既に大抵レールを越えて、向ふ側のプラットフォムへと集つて行つてゐた。來て間もなく懇意になつた巡査は、その時後れて急いで停車場に入つて來たが、私の其處に立つてゐるのを見て、
「お乘りになるんぢやないんですか」
「いや、今日は客が來るもんですから」
「さうですか」
かう言つて、劍をじやらつかせて、そのまゝプラットフォムの方へ出て行つた。汽車が汽罐車を前と後とにつけて、勾配の急な阪路を喘ぎ喘ぎ登つて來るのが、近寄つて來るその音で知れた。やがて折れ曲つた山と山との間から白い烟が颺つて、續いて長蛇のやうな汽車は、朝日の光線の漲り渡つた山の停車場へと入つて來た。
動いて行く客車の窓を一つ一つ見てゐた私は、ふと乘降の客の混雜の中をわけて、小さな信玄袋を抱えて此方へ下りて來る女を見た。
女も私の其處に立つてゐるのをすぐ見附けたらしく、其儘急いで改札口の方へと來た。女は昂奮したやうな蒼白い神經性の顏をして、默つて、私に信玄袋を渡した。
並んで歩きながら、
「汽車が込んで、込んで、二等でも、横になることも何にも出來ないんですもの」
「夜行は何うしても込むよ」
「電報は何時頃來て？」

「夜中に起されたよ。」

「びつくりして?」

「まさか來るとは思はなかつたからね。」

「迷惑?」といふ顏をしたが、すぐ、「さびしいとこね」

「ゐるところは、もつとひどいんだよ。周圍に家なんかありやしないから」かう言つたが、「それに、困つたことがあるんだ。今日、東京から客が來るんだ。」

「客? 誰?」

「社の人だがね……。N君とK君とが富士の裾野めぐりとして、今夜は精進といふところに泊つて、それから五六里歩いて、甲府から此方に來るッていふ手紙が來てるんだがね」

「NさんにKさん。そんなら好いぢやないの。逢つて知つてるんだから……」

「構はないには構はないけれど……」

「好いわ。逢つたッて……」

半ば笑ひながら、「私がお構ひして上げますよ」

二三歩歩いてから、「本當に、此頃は、氣がくさくさしてしやうがないんですもの。それに、體がわるくつて、お座敷なんか滅多に行きやしないんですの。母さんはね、よした方が好いだらうッて言ふんですけれども、何うしても來るッて言つて、無理にやッて來たんですの……。でも、電報を打つてッから、御迷惑かも知れないから、止さうかしらとも思つたんですけれどもね……」

「ちよと待つて。何か買つて行かなくつちや、食ふ物も何もありやしないんだから」かう言つて、私は立留つた。其處には野菜などを並べた店があつた。

で、其處で茄子だの唐茄子だのを買ふ間に、女はその向ふにある菓子屋で甘いものなどを買つた。

私達は暫く默つて並んで歩いた。

石を澤山載せた屋根だの、炭俵や薪と一杯に積んだ店だの、主婦が客の顏を剃つてやつてゐる理髪肆の店だのが續いた。此方から向ふに流れ落ちる谷川は、雨の後の凄じい音を立てゝ流れてゐた。ある大きな家屋の窓には、看護婦の白い顏などが見えた。

「病院?」

「あゝ、さうだ。こんな田舍にしては不相應なほど大きな病院だよ」

「それぢや、病氣になつても大丈夫ね。好い醫者がゐて?」

「かなりの醫者がゐるよ」

警察の分署の前を向ふに出た時には、「さう、あそこが別莊、まだ昇るのねえ。大變ねえ」かう言つて、女は前に連つてゐる測候所や別莊や松原のある長い高い丘を見渡すやうにした。

「向ふから便りがあるかえ?」

わざと碎けたやうにして、笑ひながらかう私が訊くと、女は大眞面目で、

「郡山からあつたきりよ」

「何ッて言つて來たえ?」

「雨にふられて困つてゐるらしいのだわ。また、裸になつちまつたんでせう」

さう言ふことを女は常によく言つたが、私にはもうさうした言葉は澤山であつた。私は默つて考へながら歩いた。かうして不自然に續いた關係が、燃えもせず消えもせず燻ぶつてゐるやうな狀態で、また續いて行かなければならないことを私は考へずには居られなかつた。かうした山の中までも、その重荷を負つて來なければならないとは思ひもかけなかつた。しかし、私に取つては、女が來たことは嬉しかつた。單なる興味などといふ考は私にはもうなかつた。「何んな狀態の下に置かれても好い。何うせ私には女房もあり子もある身だ。年も取つてゐる。唯、關係だけはそのまゝにして置きたい」かう突詰めて思つたことなどをもくり返した。

山に上らうとするところに來ると、「ひどい路ね。これぢや、下駄が臺なしね」

「仕方がないよ」

「蛇がゐやしないかしら？」

「大丈夫だよ」

「ゐたら、何うしやう？　私、蛇が大嫌ひなんだから……」蛇がすぐ其處からでも出て來たやうに戰慄して女は其處に立留つた。

「大丈夫だと言ふのに……」

「でも……ひどいとこね。こんな路しかないのかしら？」

實際、丘に登つて行く路は、男にしてもひどい路で、草や萱が兩方から深く深く蔽ひかぶさつてゐた。

下駄なんか仕方がないと言ふやうにして、思切つて、女は歩いてゐたが、今度は胸を突くやうな急な險しい阪に面して喘いだ。「それ、子規が鳴く」と言つてきかせても、女はそれを耳に入れるどころではなかつた。

何うやら彼うやら別莊まで來た時には、女はほつと呼吸を吐いた。「まア、さむしいとこね。こんなところに、貴方はひとりゐたんですか」

女は室に入ると、帶を解いて、伊達卷一つになつて、まアこれで安心したといふやうにして鏡臺の前に座つた。机の上には罎にさしてある紫の色の濃い桔梗の花や、ひろげたまゝになつてゐる原稿紙や、雜誌や新聞などが一杯に散らばつてゐた。「その代り、かういふ靜かなところにゐれば、書けるにはいくらも書けるでせうね」

「それよりも涼しいから好いさ」

「さうね」

信玄袋の中からは、甘納豆、佃煮、海苔を卷いた煎餅、旅行用の化粧道具などが出た。その化粧道具は、私がかの女とかうした關係になつた翌年の夏に買つたもので、十年近くも經過した今日までには、單にそれだけにでも隨分種々な思ひ出があつた。しかしその表の皮のところどころが古くなつてすれきれてゐるやうに、私達の歡樂ももう最初のやうな歡樂ではなくなつてゐた。

「もうつくづくとお座敷がイヤになつて了つた。それに、此頃のやうにひまでは、生中出てゐて、着物や税に金をかけるよりも、いつそ引いて了つた方が好いと思ふんですがね」

「…………」

「もう、何んなに小さな家でも好いから、さうしたいと思ふんですけどもね」

「…………」

「その前にまだ解決しなければならないことがあるぢやないか」とか、「それも好からう、誰かに引かして貰ふやうにするさ」とかいろ〳〵な言葉が私の口に出かゝつてゐたけれども、そんなことはもう度々言ひ古して、言ひ出すほどの意味もなくなつてゐたので、私は唯默つてゐた。

「そら、また、默つて了ふ。人が眞劍に話をすると、すぐ貴方は默つて了ふんだから……。ちつとも人のことなんか考へてゐては呉れやしないんだから。よして了へば、私なんか明日から何うなつたつて構はないといふ腹なんだから……。本當に情がないんだから。だから、私が浮氣をしたッて、それはさういふ風にさせた貴方がわるいんです。」

「だッて、仕方がないぢやないか。そんな金なんかありやしないもの」

「金、金ッて、貴方はすぐあゝだ」

「だッて、さうぢやないか」

此處まで行つて私達は又默つて了つた。押つめれば押つめるほど際限がなかつた。「まア、來る匆々、そんな話をしないでも好いぢやないか。」

「でも今度は眞劍に聞いて貰はなくつちや――」

女は暫く茶を飲だり菓子を食つたりしてゐたが、急に、着物を着更へて、紐を結び合せて襷にして、

それを十文字にかけて、女の持つた天性を發揮したと言ふやうにすぐ勝手元の掃除にかゝつた。

「男世帶に蛆がわくツて言ふけれど、本當ね」

かう言つて、水を汲んで來て、ザアザア流元を洗つたり、茶椀やお椀を幾度も幾度も洗ひ更へたりした。「あゝいやだ。蟲が……」頓狂な聲をあげて、手長蜘蛛の羽目板を匍つて行くのを見詰めたりした。

しかし、新しい手拭を形の好い丸髷の上に載せて、白い二の腕を思ひ切つて見せて、せつせと働いてゐるさまは、このさびしい山の中の世離れた別莊に一種の面白い對照を見せた。家にゐては、水仕事などには手も出したことがなく、三味線より他は持つたことのないやうな女が、かうして水を汲んだり物を洗つたりしてゐるのもあはれに思はれた。女の是非持たなければならない子供も臺所も家庭も何も持つてゐない女の憐れさが、かうして働いてゐるのを見る中にも絕えず私の胸に往來した。

何うせ藝者になつたからには、進んで好い老妓になることを心がけたら好いぢやないか。男なんかはぐんぐん騙して、その上へその上へと出て行くやうに心がけたら好いぢやないか。金も澤山に取つて、自分で自分の地盤をつくり上げるやうにする方が好いぢやないか。母親が『お前は金が道づれさ!』と言つたのを薄情だなどと言つて怒らずに、自分で自分を築き上げて行つたら好いぢやないか。かう言ふことを私は度度言つたけれども、そんな風に考へることは人間として出來ないことであるやうに、女はいつもそれを否定した。否、かの女ばかりには限らなかつた。かういふ社會にゐる女達は皆な子供にあくがれ、家庭にあくがれ、男一人といふことにあくがれ、賴るべき柱にあぐがれた。さうして普通の世の中の夫妻親子の團欒のさまを天國のやうに思ひ、自分等の生活をさながら溝竇の中にでも墜ちたものゝや

うに考へて想像した、最初にこそ——年の若い美しい驕つた孔雀のやうな時代にこそ、榮華を夢み、玉の輿を夢み、ダイヤモンドを夢み、大きな邸宅を夢み、自働車を夢みもしたが、一日毎にその幻影は破れて行つて、普通世間の女達の得てゐることさへ得られない身であることをかれ等は次第に意識して來ると、堪らない焦燥と煩悶とを内部に感ぜずには居られなかつた。「矢張、人の細君にならなけりやいけないんだね」私はよくこんなことをかの女に言つた。

「奥さんにならないでも、本當に賴りになる人があれば好いんだけども……」

「しかし、それは無理だよ」

「何うして？」

「だつて、藝者といふ稼業をしてゐる中は無理だよ。いくら愛してゐつたつて、自分の他に、男がいくらでもあり得るといふ境遇では、男は何うしても十の愛情を五つしか注ぐ氣にならないからね。現に、遠くにゐる人だつて、だから、眞劍になれないつて言ふやうなところがあるんだよ。男を幾人も持ち得るといふことが不自然なんだよ。」

「だつて、仕方がない。お座敷に出ないわけには行かないから」

「つまり、藝者といふ稼業、情を賣るといふことが不自然なのだ。それも、純然たる稼業といふ考へで、心の底にしつかりした自己を持つてゐて、單に、稼業として、商賣關係でやつてゐれば、まだ好いのだ。ところが、男の方にしても、女の方にしても、商賣關係ばかりではゐられないやうなところがある。そこが面白いのではあるが、又そこに不自然なところがある。だから、まことの愛情を得やうと思へば、

何うしても、さういふ社會から體を自由にするか、心から一人を愛するかしなければならない。しかしこの社會にゐては、心から一人を愛するといふことは、女に取つて危險だ。何故と言へば、男に甜められてるといふ形になるからね」
「それはさうね」
「だから、矢張、その日その日の風次第といふ風に生活して行くのがその社會の女達の本當の生活かも知れない。しかし、さういふと、そんな浮ついた薄情な氣分ではをられないつて言ふから、それで困るんだ」
「本當ね。だから、商賣は止して了つた方が好いと思ふの？」
「だから、遠くにゐる人に、すべてを擧げて縋り附くといふ風にした方が好いんだよ。さうする方がお前の本當の生活の爲めには好いんだよ。」
「だつて、駄目ですもの」
「いろんなことを顧慮してゐるからさ。將來が何うだらうとか、すつかり裸にされて了ひやしないだらうかとか、さういふことを顧慮してゐるからだよ」
「だツて、さういふことを考へずに居られない性分なんですもの。とても梅子さんのやうに、あんなにまでしても、男について行かうなどとは思ひませんし、それに、そんなことはとても私には出來ませんもの。矢張、ちやんと自分の腹の中で、出來ることと出來ないこととが、一番先にわかるんですもの」
「さうだね、さういふところがあるね。何と言ふのかな、矢張、打算に明るいといふやうなところがあ

ろね」
「打算ッて？」
「勘定に明るいといッたやうなところだよ。だから、眞劍になつて、戀が出來ないッていふやうなところがあるよ」
「さうね」
「そこが面白んだがね、僕には――」
こんなことを言つて私は笑つた。かうした會話は實はもう何遍繰返したかわからなかつた。私はそのをりをりについての心の狀態やら細かい氣分やらを思ひ出しながら、後姿を見せてせつせと物を洗つてゐる女の方を見た。
私は卷烟草に火をつけてそれをすばすばと吸つた。私は種々な思ひに滿されながら、傍にあつた枕を取つて、それに頭を當てゝ、仰向に天井を見た。天井には蠅が五六疋黑くくつついてゐた。
私はいつか私の生活に深く思ひ入つてゐる自分を發見した。妻の顏、大勢な子供の顏、樹木の茂つた庭、さういふものが一方にあるとともに、働かなければならない社會、奮勵努力しなければならない事業が、暗い大きな壓力を持つて私を壓した。四十近くなつて人間の陷つて行く穽、それに向つて眞逆樣に落ちて行くさまも繪卷物のやうになつて私の眼の前に歷々と描かれた。現にさういふ例はいくらもあつた。某君、某君、私の知つてゐる同年輩の人にも片手の指を屈するほどあつた。
私は妻に就いて、何うしたといふ考も持つてゐない。別に倦きたといふ譯でもない。毎日、顏を突き

合せてゐるので、今では十日や二十日旅行などに出て逢はずにゐても、戀しいとかなつかしいとか言ふ考は少しも起ならなくなつたが、しかし妻に愛情がないと言ふ譯ではない。忠實な愚直な女だけに殊にさうである。

しかし、この問題を解釋しやうとするには、もつと深く根本に入つて行つて見なければならない。生殖、さういふ境まで入つて行かなければならない。母親と子供との關係、夫妻と子供との關係、さういふ境までも細かく入つて行かなければはならない。同伴者が心も體も子供に奪はれて、乃至は生殖の完成に滿足して、結婚した當座のやうな生々した愛慾を發揮することが出來なくなつた場合、またその一方の同伴者が性の相違の下に自然に賦與されたある要求を他の同伴者が滿足させることが出來なかつた場合、さういふ場合、更に一歩を進めて、神秘の境にまでその秘密の系筋をかけてゐるといふ戀とか生命とか言ふものに對した場合、さうした場合などのことが私の心を往來した。

私はまた別なことを思つた。『何うも、仕方がない。お前が夫(をつと)を持つ場合には、僕は引下つて了ふばかりだよ。それは、今までのかうした細かい氣分を一時に打碎いて了ふのだから、辛(つら)いには辛(つら)い。しかし、さうかと言つて、妻や子供までを捨てゝ、お前について行くわけには行かない。妻はまあ好いとしても、大勢の子供、中でも幼ない子供を肉身の母親の手から離すことは出來ない。それは忍びない。かう言ふと、お前は薄情だと言ふかも知れないが、それは言はれたつて仕方がない。また、それを單に、薄情だと言ふやうなお前でもあるまい』こんなことを私は女に言つたことがあつた。その時、女の眼から淚が流れた。私の聲も曇つた。

女が初めて私の家に來たのは、あれは去年の秋の末であつた。女は前から私の妻に逢ひたいと言つてゐた。妻もまた逢つて見たいやうな氣がしてゐた。で、ある日、女はその妹を伴れてやつて來た。秋雨の靜かに降る日で、玄關の前の木犀があたりの濕つた空氣に强く薫つた。

私ははつきりとその時のさまを眼の前に浮べることが出來た。妻と女との初めての會話はプリヽアントなものであつた。私は妻の神經と女の神經との相觸れてかどやくやうなのを感じた。勿論、それは平凡な話題でもあり、會話でもあつたが、しかしその底に流るゝある暗潮は急でそして迅かつた。美しく話し、美しく打解けて、そして歸りには、女は私の末の女の兒を借りて行つた。女の兒は前に私が二三度伴れて行つて馴染んでゐるので、喜んで女に伴れられて雨の降りしきる中を出て行つた。

さういふ喜劇の幕を私は何故打つたか。或は私は不眞面目として責められるかも知れない。自己の得意を誇つたとして笑はるゝかも知れない。妻を侮辱し、子を侮辱し、また女そのものをも侮辱した不眞面目な行爲であるとして非難されるかも知れない。しかしさうした喜劇を打つ心理が人間の心の底に何故にかくされて潛んでゐるか。さういふ目新しい光景に向つて進んで行く心理が何故に人間の心の奥深く巣をつくてゐるのか。

『貴方、お客樣に風呂を立てゝあげるんでせう……』

かう勝手から女の聲がした。

『あゝ』

『ぢや、水を汲んで下さいな』

「よし」

かう言つて私は立つて行つた。女は高く尻端折をして、二三日前に立てゝ滴さずに置いた風呂の水を小桶で汲み出して、せつせと風呂場や風呂などを洗つた。『だツて、汚ないんですもの。いろんなものがくつ附いてゐましたよ。それに、かういふ虫が澤山にゐるんですよ。それそこにも……』と言つて、げじげじの小さなやうな虫の其處に跂つてゐるのを指した。

水を半分ほど汲んだ時、井戸繩の代用にした細引はふつつりと切れて、一方のバケツが井の底深く沈んで行つて了つた。

「ヤ、切れた……」

思はずかう聲を立てると、それをきゝつけて、女に勝手元から半分體を見せて、

「何うしたの！」

「切れちやつた！」

「困るわねえ」

女も出て來て井戸を覗いた。しかし何うすることも出來なかつた。私は殘つた井戸繩を手繰つて、「でも、片方は使へる。好い鹽梅に殘つた細引の方が長い」かう言つて、私は落ちた方の先に丸太をつけてそして一方で汲むことにした。

「片々で汲んでは大變ねえ。向ふの別莊に何かないかしら？」

「この前にも、釣瓶がついてゐたのが落ちて、バケツも細引も別莊から借りて來たんだから、もう言つ

て行つたッて、さうさうは無いよ」

「でも貰つてゐところはあるんでせう？」

「停車場前まで行けばあるだらうけれども……まア、好いや、これで、汲んで置かう。此方の繩はまだ大丈夫だから。」かう私は言つて、「あと、まだ餘程汲まなけりやならないかね」

「さうね、まだ餘程汲まなけりやならないでせう。半分位でせう、まだ……」

私と女とは勝手元に行つて、風呂の中を覗いて見た。それでも、もう水は五分の上に出てゐた。

「なアに、もう少しだ。汲めるよ、片方だけで……」

「大變ねえ。でも、風呂のあるとないのとでは、來た人には非常な違ひですからねえ。それに山阪を歩いて來るんだから猶更よ。風呂を立てゝおくのが、何よりも御馳走になりますからね」

「それはさうだ」

で、私は片方の釣瓶でまたせつせと水を汲んだ。鐵の車井戸はカラカラと絶えず音を立てた。井戸の周圍にある澤山の黄い月見草は、日中の暑い光線にすつかり萎れ果てゝゐた。

今度切れたら、それこそ大事だ。かう思ひ思ひ、注意しながら私は猶も細引を手繰つた。時々心配になつて、細引の結び目などを引張つて見たりした。しかし、幸ひに、切れもせずに、最後の一桶をも汲むことが出來た。

焼きつけが澤山あるので、火は容易に薪に燃え附いた。

「まあ、お茶でも飲まないか」

「え、もう、私の方も片附いたから」かう言ひながら、女は小さな鏡を立てゝ、髮の亂れたのを直してゐた。

やがて女は此方に來た。

「何うでせう、こんな格好をして？　誰もゐないから好いやうなものの、東京では、ちよつとでも、こんな扮裝はしてゐられやしませんね。着替へやうかしら？」

「なアに、それで好いよ」

「さう？」

嬉しさうな顏をして、「かうしてゐると、何うしても、別れるなんて言ふ氣はしないわえ」

私もいくらか暢々した氣分になつて、腹這ひに兩足を長く延して、女の大きな丸髷などを見てゐた。

外は靜かであつた。家の周圍に來る百姓達も、養蠶の時期に入つたので、久しくあたりにその姿を見せなかつた。

「夜は一人で淋しくなつて？」

「別に……」

「さう？　雨戸も閉めないの？」

「だッて、誰も來るやうなことはありやしないもの。」

「でも、何だか無氣味ね。女はとてもゐられないわねえ」

「さうだね、女には無理だね」

こんな話をしながら、茶を淹れて、女は菓子や煎餅などを出した。
「でも、Nさん達、本當に來るかしら？」
「來るよ、屹度來るよ」
「來て、私がゐるのでびつくりするでせうね。」
「また、やつてるなと思ふだらうよ」「その代り先生方が歸れば、すぐ社に知れる。家にも知れるよ」かう言はうとしたが、私はそれを押へた。
「Mさんは來ないの？」
「忙しいからね」
「今、何處？　新聞？」
「先生がゐなくつちや、一日の新聞も出來ないといふやうな位置にゐるんだからね。忙しいツてこぼしてよこしたよ」
「Mさん、去年、此處に來てたんでせう？」
「先生のゐたのは、この家ぢやないけどもね。こゝから一里ばかりあるところの村の寺にゐたんだがね」
かう言つて、「夕方になると、その村から若い人達がきつとやつて來るよ」
「矢張、Nさんなんか知つてる人なんですか？」
「矢張、雜誌の方で知つてるんだよ。屹度、停車場あたりまで迎へに行くかも知れない」
「さう？」

Y君がロシア人を伴れて來て、向ふの別莊に泊つて行つたことを話した時には、「さう？　Yさんも來たの？」かう言つて女は目を睜るやうにした。女はYさんが私の結婚した時の媒酌で、私に對して、友達以上のある勢力を持つてゐることをも知つてゐた。一度逢つたこともあつた。

續いて、女はこの春遠くに嫁に行つた妹の話などをした。日曜毎に夫婦してのんきに別府や耶馬溪や太宰府やその他の名所を歩き廻つてゐる話から、つひ來る時來たといふ端書を出して來て、「こゝに此間行つたんださうですがね。博多の人でも百人に一人も行かないやうなところなんですッて？　何ッて讀むの？　これは？」

私ははがきを手に取つて見た。深い海の洞窟に小舟が靜かに滑り入つてゐるやうな繪葉書であつた。

「お、芥屋の大門、えらいところに行つたもんだね。」

「何ッて言ふところですッて？」

「けやのおほとと言ふんだ。えらいところだ。本當に滅多に人の行かないところだよ。矢張若い新しい夫婦だね」

「貴方は行つて？」

「いや、僕もまだ行きたいと思ひながら行つて見ない」

「さう？　そんなところなの？　よく行つたわねえ」繪葉書を引くりかへして見て、「この奥深いでせうか」

「五六町奥まで入れるんだらう？」

「さう？　二人は仲は好いから、兄さん、雪ちやんで、一緒に歩いてるのね。のんきな夫婦ね。」
「羨しいだらう？」
「さうね、」から言つて笑つて、『でも、仲が好いのをきくと、嬉しくないことはありませんね。それ、赤阪にゐた時分、始めて貴方に逢つた時分から、さう言つてゐたんですからね」
「さうだね、もう遠い昔だね」
「十年近くなりますよ、もう」
「さうだな、あの時分から、妹は是非さうしなけりやッて言つてたね。まア、結構だアね。お前の思ふ通りに行つたんだから……。犧牲になつたお前といふことが、すつかり酬ゐられたんだから……」
「だから、本當にさう思ひますよ。もう、私なんか何うなつたッて好いわ……」急に感情が胸に溢れて來たといふやうに、眼からはらはらと落ちる涙を袖に拭いた。私も女の半生に同情せずにはゐられないやうな氣がした。
暫してから、私は笑つて、『だから、ちつとは浮氣位して、母さんを困らしてやつたッて好いさ」
「また、始めた」
「だつて、さうぢやないか」
「好う御座んすよ」
急に愛慾の念が私達を捉えた。廣い山の中の別莊は、何處に行つても人一人の影も見えず聲も聞えなかつた。

「本當に、人氣離れた奥山住ひね」女はこんなことを言つて笑つた。暫して行つて見ると、風呂の火は半ば燃えた薪を落したまゝすつかり消えて了つてゐた。

四

三時の汽車にはまだ來はしないだらうと思つたけれど、御馳走の準備も少しはして置かなければならないので、風呂の火をよく見て、新たに炭を加へなどしてから、私は停車場の方へと出かけた。

酒屋、料理屋、蕎麥屋、さういふところに一軒々々寄つて頼んで、持つて來て吳れ手のないものは自分で風呂敷につゝんで持つて、そして山の方へと歸つて來た。三時の汽車には果して客は乘つてゐなかつた。

阪に上るところに、豆腐屋が一軒あつた。其處に寄つて、豆腐を一つ買つた。赤い襷をかけてメリンスの帶をしめた娘は、「新しいのをお上げよ」といふ母親の吩咐通りに、大きな桶の淸水の中から、豆腐をざるに入れて莞爾しながら私に渡した。

阪路の半ばで、私は立留つて休んだ。前には濶い濶い高原が展げられて、八ヶ岳の裾野のスロオプには白い畑がところどころに飂つてゐた。松林の中に散在してゐる村落、人家、その上に連亘した半ば雲に蔽はれた山、私は昨日から今日にかけての名狀し難い心の狀態をこの大きな自然に對照させうとした。私は包を草原の上に置いて、蹲踞んで、そして手を額に當てた。

颶風が此處まで襲つて來るとは知らなかつた。否、更に大きな颶風が私の前に待つてゐるやうとは知らなかつた。否、更に更に大きな颶風が來て、自分の生活をすつかり打碎いて行つて了ふかもわからなか

つた。歡樂や懊惱や煩悶や歡喜や啼泣や――さういふものは大きな自然の中をそりそり通つて行く雲や霧のやうなものではないか。またそりそり掠めて通つて行く雨風のやうなものではなか。しかしいくら何物が掠めて通つて行つても、自然はじつとして動かない。何の痛痒をも感じない。人の心の動揺の中にも、この大きな自然が横つてゐるのではないか。

私は苦しくなると、いつも自然に面して立つた。

家に歸つて見ると、女は風通しの凉しいところで、白い顏を此方に見せて、心持好ささうに午寐をしてゐた。昨夜寐なかつた疲勞が一時に出たものと見える。私は硝子戸を明けて入つて行つたが、女はそれを知らなかつた。蒔繪の櫛が疊の上に落ちてゐた。

信玄袋、化粧道具、女の匂ひのついた衣裳、さういふものが私のさびしい何もない山莊の書齋にあるといふことが不思議な印象を私に與へた。私は靜かに坐つてゐた。

しかし女は容易に起きさうにもしなかつた。で私は立つて風呂の方へと行つて見た。さつき炭を入れたので、それがカンカン起つてゐて、手を入れ見ると、もう少しで入れる位に溫かい湯になつてゐる。

私は家の横を通つて、それから向ふの別莊へと通ずる松原の中の路へと行つた。こゝは夕暮などに私の獨りで散歩するところで、私は其處を眞直にある村からある村へと通ずる路のあるあたりまで行つて、そしていつもそこから引かへして來た。桔梗、女郎花、山百合などが草藪の中に咲いてゐた。

私はこの路を歩きながら、何遍愛慾の斷ち難く、煩悶の去り難きを思つたか知れなかつた。私は此處で靜かに分裂した思想と生命との統一を計らうとした。妻子のことも考へれば、女のことも考へた。あ

る時は、薄暮の孤獨に堪へかねて、感傷の涙の兩頰を傳つて落ちるのも知らなかつた。ある夕には、思ひを深紫の桔梗に托して、それを折つて來て机の上の罎に生けた。

しかし今日は心が騒いで、踊つて、いつものやうな靜かな氣分には何うしてもなることが出來なかつた。妻、女、遠くにゐる男、やがて訪ねて來る客、さういふものが唯雜然として私の胸を滿した。

畠で爺さんが草を挘つてゐた。

「暑いね」

「さうだね。今日あたりは東京は暑いずら？」

「まだ、別莊の人は來ないかね？」

「まだずら？」

私はやがて引返して來た。女はまだ眠つてゐた。

「おい、おい、もう起きないか」

女はちよつと眼をあいたが、またすぐ寐反を打つて向ふむきになつて寐て了つた。

硝子戸の外に、誰か來た氣勢（けはい）がしたと思ふと、それは酒屋の亭主が、自轉車でさつき頼んだ酒やら醬油やらをとゞけて來たのであつた。

「よく、自轉車でこんな山阪が通れるね」

「向ふから廻つて來ましたから」

かう言つて亭主は、莞爾（にこ〳〵）しながら、罎やら紙包やらを其處に並べた。「難有う御座います」と言つてそ

してまた自轉車に乘つて引返して行つた。
ぱつちりと急に驚いたやうにして目を明いた女は、
「何か言つて？」
「いや！」
「ぢや、夢かしら？」
「いや、今、酒屋が來た」
「さう」
急に起きかへつて、『もう遲いの？』
「隨分寐たね」
「もう、さつき歸つて來たの？」
「あゝ、歸つてから、一時間以上になつたらう」
「そんなになるの？　ちつとも知らなかつた。あゝよく寐た。貴方の歸つたのなどはちつとも知らなかつたんですもの。今、何か貴方が口を利いてゐるのを夢のやうにして聞いてゐたんですの」
「よく寐てたよ、』から私は言つて、『湯がわいたよ。入つたら何うだ」
「さう？　もう沸いたの？　一體何時？」
「四時だらう」
「さう、よく寐たわねえ。ぢや、もうぢき來るわねえ」

で、風呂に入つて、女がゆつくりして着物などを着更へたのは、もう五時に近かつた。女は派手な模樣の出た帶を緊めた。

硝子戸を透して見える山の色は、次第に濃やかな深い影をつけて來て、襞と襞との間に夕日が一線深くさし込んでゐるのが鮮かに見えた。女が勝手元に坐つて、種々御馳走の準備をしてゐる間、私は飾臺に向つて新聞を讀んでゐた。と、戸外に人の足音がしたと同時に、村の靑年の大きな麥稈帽子がちらと見えた。

私は立つて行つた。

「來たかえ?」

から靑年に言ひながら、向ふを見ると、N君とK君とが茣蓙を着て檜木笠を被つて金剛杖をついて莞爾しながら此方へと近寄つて來た。漸く目的地に着いたといふやうな風をして、疲れ切つたやうに呼吸をきらしてゐた。

「ヤ……」

「ヤ……」から私も合せたが、すぐつゞけて、「丁度女が來てゝね。君等とぶつつかつちやつた。今朝來てね」

私の言ふことがN君にもK君にもすぐは飲込めなかつたらしかつた。しかし尠くとも私の顏には一種の表情があつたに相違なかつた。やがてそれとわかつた時には、N君も不思議な表情をした。はつと思つたらしかつた。K君は硝子戸から中を覗くやうにした。

そこに女は急いで出て來た。『まア、よく入らつしやいました。おくたびれでしたらうね。さア何うか――』

N君もK君も始めて女の顏と相對した。『や、これはめづらしい』からN君は碎けた口のきゝ方をした。

『あゝ足がよごれてるんだね。今、水を取るよ』からまごまごしながら私が勝手元の方へ行かうとすると、N君とK君とは、『井戸があるんでせう。裏に……』から言つて裏の方へ廻つて行つた。村の青年は何う挨拶して好いかわからないやうな顏をして立つてゐた。

『君は迎へに行つたの？』

『いゝえ、停車場へ用があつて行つたら、丁度、その汽車で御出になつたで、それで一緒に來ました』

『さうかえ』

『さア、お上んなさいまし』から女は如才なく青年に言つた。

井戸で足を洗つたN君はやがて裏口から勝手元を横ぎつて、此方へと上つて來た。其處に行つた女は

『まア、一番先に御風呂にお入んなさいまし。大變お歩きになつたんですッてね。おくたびれでしたらうに……』

『いや――』

『君、N君、すぐ湯に入り給へ。君等のために沸して置いたんだから』から私は室の方から言つた。

『難有う』から言つてN君は此方に入つて來たが、取敢へず挨拶として、停車場で買つて來たといふ菊

葡萄酒の一罎と水蜜桃の一籠とを其處に出して、『もう少しでこの汽車に間に合はなかつたものだから、大騒ぎをしてね、狼狽てゝ飛込んだものだから、碌なものも買ふ隙もなくなつてね……。』

「いや、こんな心配をしないでも好いのに……。それでも大變だッたでせう。女阪を越えて甲府まで何里あるんです、一體？」

「六里位……。なアに、それも半分は馬車があつたから、そんなに困難でもないんですけども、餘り馬鹿にして、途中で晝寐なんかしたもんだから、』其處に入つて來たK君に向つて、『二時間寐たね、あれでも……」

「その位寐たね。目が覺めて、時間がなくなつて、狼狽てて、甲府まで驅足サ。それで、やつと間に合つた」

「まア、お風呂にお入んなさいましな』かう女は勝手元の方から言つた。

「さうし給へ。入るとさつぱりするから」

N君とK君は顔を合せて、

「ぢや、頂戴しやうか。」

「さうしやう」

かう言つて、二人は風呂場の方へと行つた。

不思議な氣分が一室に漲り渡つた。それは丁度私達の間にある秘密がそのまゝ世間に露骨に現はされたといふ形であつた。N君とK君と村の青年とを透して、私達は世間に相對して立つてゐた。しかし、

私も女も何も言はなかつた。

N君達もそれに對して成たけ觸れないやうに、やうにとしてゐた。「不思議なところで御目にかゝりましたね」とも、「かういふところでお目にかゝらうとは思ひもかけませんでした」とも言はなかつた。私達に對する、殊に私に對する批評と感想とを澤山にN君やK君は持つてゐるのに相違なかつたが、しかし二人はそれをおくびにも出さうともしなかつた。

「昨夜、電報で知らせて來て、今朝突然やつて來たもんだからね」私は私で、これ以上に、女について深く入つて說明しやうともしなかつた。

風呂から出て、いくらかくつろいで、今回の旅行の話、富士八湖の話、それから、この別莊の眺望の好い話などをした。「涼しいね。富士あたりの氣候とは丸で違ふね」などとN君は言つた。

村の青年のS、Rの兩君がやがてドヤドヤとやつて來た。一室は更に一層の賑かさと混雜とを加へた。S君とR君とは、私達のさまを見て、氣をきかせて、N君とK君のために、向ふの二階の別莊を明けさせやうと盡力したが、生憎留守番の爺が留守なので、村まで行かなければ庫の鍵は何うすることも出來なかつた。私は言つた。「好いぢやないか君、向ふを借りる必要はないよ。二人位泊められる蒲團はあるんだから」

「でも……」

かう言つて、S君とR君は、別の方の廣い室の雨戶を明けたり掃除をしたりした。

「此方の方が廣くつて好いでせう。それに、此方なら、蚊帳がなくつても寐られますよ。硝子戶さへあ

けなければ、蚊なんかゐやしませんよ』S君はこんなことを言つた。

私達に對して加へられた氣兼と遠慮と邪魔をしてはいけないといふ思ひやりとが、却つて私の心を暗くした。そんなにして貰はなくつても好いと私は思つた。『まア好いさ、僕のところに來た客だから、今夜一晩はゆつくりして泊つて行つて貰ふさ』これから上諏訪にでも二人を伴れて行かうとするやうな話がS君とR君との間に出た時、私はいくらか語調を强めて言つた。

その時分には、机と餉臺とを並べて、その上に、酒だの肴だのが出てゐた。冷豆腐、胡瓜もみ、女の持つて來た佃煮、そんなものが其處に並べられて、薄暗いランプの灯が、やゝ醉つたK君の顏と、いかなる時にも頭を綺麗にすることを忘れないきちんとしたN君の姿と、その隣にゐて客の斡旋につとめてゐる女の白い昻奮したやうな顏とを照した。『貴方に上げませう』などゝ言つてN君は盃を女にさした。

一時間、二時間、何んな話をしたか、私ははつきりと覺えてゐない。また、女が何んな風にしてゐたか、それも覺えてゐない。しかし、一種の不思議な空氣は依然としてこの一室に漲つてゐた。靑年達は頻りに明日何處かに遊びに行く計畫についての話などをした。

三味線なしでは、K君の唄も出なかつた。女は二三杯の酒に醉つて、いくらか氣兼から忘れて來たと言ふやうに、『何うしても三味線がなくつちや駄目ね。今度は一つ是非旅持の三つ折れを一つ拵へませうね。此間、かうきでいくらで出來るつてきいたら、七十五圓だなんて言つてゐましたがね。そんなんでなくつても好いから、拵へませうね、是非』などゝ言つた。N君やK君に向つては、

『この頃ちつとも入らつしやいませんね。ちつとは入らつしやいよ、私達の村にも？』

「え〻」

などゝN君は笑つた。

十時すぎになつて、村の青年達は、路が遠いからと言つて歸つて行つた。で、私達は寐る支度にとかゝた。「何うせ雜魚寐（じやこね）ですよ」から女ははしやいで言つて、ありたけの蒲團を其處に並べて敷いた。旅行用の夏の毛布までも其處に出した。「枕が足りない？　さう？　待つてゐらつしやい、今好いことをして上げますから」から言つて、女は解いた帶をぐる〳〵と卷いて、その上を風呂敷で包んで、それをN君に渡した。

「大丈夫でせう、蚊帳なんか釣らなくつても。蚊はゐないぢやありませんか」

N君もK君もかう言ふので、そのまゝ私達は寐ることにした。

K君、N君、私、それから女、かういふ順序であつた。「あゝ、寐るのが一番好い」などゝK君は言つたが、「ランプを消しませうか」

「いゝえ、ようございますよ」まだ寐ずに其處に立つてゐた女は言つた。女の伊達帶を解く音が微かに聞えた。

蚊が矢張二三疋ゐた。「ゐるねえ、矢張」から言つて、私達は再び起きて、蚊帳を釣つて寐た。

五

倏忽としてやつて來た颶風は、また倏忽として去つて行つて了つた。私は矢張ひとり山荘にゐる。

雜魚寐をした翌日は、午後五時に、村の青年が上諏訪に伴ふためにやつて來るまで、N君とK君とは

矢張私の山莊にゐた。私はいろいろなことを思ひ出さずには居られなかつた。丁度その日の朝の十時頃であつた。汽車の小荷物の配達夫は、私の妻から送つてよこした一箇の澁紙の包を配達して來た。

「家から？」

かう傍で見てゐた女は言つた。

「うん、さうらしい……。何か旨いものがあるかも知れない」かう言つて、逸早く私はそれを解きにかゝると、「矢張、奥さんから來ると、嬉しいのね？」

「それは嬉しいさ」

私はそれを解いて、「あ、茗荷、あ、唐辛子、あ、菓子、生薑も入つてゐる。こいつは旨いな」こんなことを言ひながら、其處等に散らばして出して、「矢張、嬶だけあるねえ」かう何の氣なしに私が言ふと、

「それはさうですとも……奥さんですもの。」女はかう言つたが、暫くして、「私だつて、こんなものなら毎日でも送つて上るわ」

「呉れやしないぢやないか」

「上げますとも……」

N君もK君も見てゐて笑つた。それから何かの時に、夕立の話が出た。歌だの俳句だのを扇子やら稽木笠やらに書いたが、近所の山の中を歩きたいといふ話から、夕立に逢ふと困るといふ話になつた。その時、「お前なんか行かれるもんか、それこそ、「天ぷらの丸髷の上に夕立す」といふ句でも出來るよ」な

など私は言つた。それが女の氣に觸つた。次に、藝者が情人を持つには、三味線引が一寸面白いさうだといふ話が出た時、Ｋ君は、『相撲は何うだらう』と何氣なく言つた。私はすぐ、『相撲は形が面白いさうだよ』と言つて笑つた。それがまた女の氣に觸つた。

始めは一緒に行くと言つてゐた上諏訪にも行かず、癇癪が起きて起きて仕方がないと言ふやうにしてゐた女のさまが、一人になつてから一層はつきりと繰返して思ひ出されて來た。女の言ふ通り、私は實際女を本當に愛してゐるのだらうか。

突詰めてゐては、到底完全に愛することは出來ないものではないか。完全に愛するといふことは主觀的では出來ないことではないか。客觀的にならなければ出來ないことではないか。

主觀的では、愛の裏面は必ず憎である。所有の裏面は必ず破壞である。犧牲的になつて來なければ、完全な愛は到底成立しないものではないか。

犧牲といふ二字、それが急にはつきりと私の頭に描かれて來た。男性に取つて唯一の尊いもの、唯一の進んだものにされてゐる犧牲、その犧牲は主觀的から考へて、いかに辛くさびしく悲しいものであらうか。私はあまりに多く『犧牲』に生きて來た。

翻つて考へた。『犧牲』は一面臆病者の口にする言葉ではないか。卑怯なるが故に、引込思案なるが故に、『犧牲』の二字を高調するのではないか。

溜息がひとり手に出た。

長い土手の朝に立つてゐる私の姿が歷々と私に見えた。川には野菜を載せた舟だの、赤煉瓦を積んだ

舟だの、朝飯の煙を立てゐる舟だのが通つて行つた。對岸の家はまだ眠りから覺めず、朝日の光線を混ぜた金色の靄が茫と繪のやうに棚引いてかゝつてゐた。私は何遍其處に立つて、深く私達のことを考へたであらうか。

其處にも此處にも女の姿があつた。狹い四疊半の室、生花の見事に生けてある六疊の室、二階の欄干に添つた長い廊下、草花の見事に咲いた庭に面した細長い室……。ある夜は淒しい雨が二人の夢を埋めるやうにして降り頻つた。

遠くに行つてゐる男に最初に逢つた時のさまは、今だにはつきりと私の頭腦に印象されてゐた。それは丁度女が私の家に來て、妻と女と相對した形に甚だよく似てゐた。唯、男性二人と女性二人との相違があるばかりであつた。

嫉妬などと言ふものは、際限のないものである。『嫉妬する位ならやめる』から始めは私は思つてゐたが、しかしそんな風に解釋して了ふことが出來るものでないといふことを私は段々味はせられて行つた。

私の今ゐる山莊に、私の來る前に、地方の豪家の息子とある女とが一月ほど一緒に同棲してゐた。息子は二十七八、女も矢張同じ年格好であつた。女は土地で酌婦などをしてゐたので、二人はあることを解決するため、――その解決のすんで了ふまで、村の人々のためにそこに置かれてあつたのであつた。

私は初めて來た時、七輪、鍋、釜、水の汲んである桶、汁の半殘つた椀、女の捨てた丸髷の形、色の褪せたかゝせ掛などを見た。この二人の戀に私は誰より先に同情した。村の人達の誰れよりも、一番多く

且深く私は男の傷いた心を思つた。

その戀の『廢墟』のあとに私達が來たといふことは不思議であつた。私達は矢張その室に寐たのである。その人達の置いて行つた簞笥の中に私達の着物を入れ、その長火鉢に私達は相對して坐つたのである。そしてその二人の七輪で私達は矢張同じやうにして物を煮て食つたのである。村の人達は言ふであらう。『それでよめた、あいつらに同情したのはそれでだ！』

私はある時、その若い二十七八の息子に逢つた。息子は村の信用組合に勤めてゐた。息子と女の關係は私の二度目に來た時には、村の大勢の人々から仲をさかれて、女は手切金といふものを無理に押つけられて、そして倦きも倦かれもせずに別れて行つたが、この戀はこのまゝに終つて了ふであらうか。第三者の邪魔のために完全な『廢墟』になつて了ふであらうか。私はそれを疑ふ。そのことに携つた村のある有力者は、『あのことばかりは、へい、先生の眼鏡が違ひました』かう言つてゐたけれども、實際、さうであらうか。そのまゝ消えて了ふであらうか。再び恐しく爆裂作用を逞うすることはないであらうか。

私のその息子に逢つたのは、信用組合の中の一室であつた。息子は背の高い、色の白い、田舍の青年には多く見ないやうな『男のやさしさ』を持つてゐた。蒼白くやつれた顏、絕えず物思ひに沈んでゐるやうな姿、殊に、その顏には傷いたものの悲しさとさびしさとが歴々と刻みつけられたやうに現はれてゐた。息子は滅多に口もきかなかつた。私は其處に私の苦痛と私の悲哀とを發見した。

歸りに、私は私の伴れの一人に言つた。『矢張、女に苦んでゐる人の顏は、一目見てわかるね。深く神

經が刻まれて、ぴりぴりと絶えず動いてゐるね。僕はあの顏を見るに忍びなかつた。」
「さうですかね」
かうその伴れの人は冷淡に言つた。矢張その人も、『それであゝいふことを言つたんだ！』かう言つて、今は私の心と境遇とを理解してゐるだらう。そして笑つてゐるだらう。
女が歸つたのは、N君やK君が上諏訪に行つた翌日であつた。女は二夜を私の山莊にすごした。一夜は私達は思ふやうに話すことが出來た。
停車場まで私は送つて行つた、信玄袋を私が持つて。
「それにしてもいつまでゐるの？　もうこんなところにゐるのは、およしなさいよ。」歩きながら女はかう言つて私の顏を見て、「何時、歸るつもりなの？」
「何時だかわからない」
「早く歸つてゐらつしやいよ」
「ひとりでゐる方が好い。本當のことが考へられて……」かう言つて私はちよつと途絶えて、「一緒にゐるよりも離れてゐる方が、お前のことでも何でも本當に考へられて好い。喧嘩なんかしないですむからね」
「あゝいふ皮肉を言ふんだからね、貴方は――」
女は笑ひもせずに言つた。
阪を下りたところにある池では、麥稈帽子をかぶつた人が二三人釣竿を垂れて頻りに魚を釣つてゐ

た。斜阪になつた山畠で働いてゐる百姓達は、私達の並んで歩いて行くのを、「あれや別莊に來てる客だんべい」と言ふやうな顏をして見送つてゐた。

「でも、歸つたら知らせて下さい」

「あゝ」

停車場まで行く間、私達は餘り多く口を利なかつた。それに、其處に行つてからも、長い間待つてゐる間もなかつた。女は私の手から信玄袋を取つて、切符を買ふのもそこそこにして、向ふ側のプラットホームに行つた。汽車はやがて來た。

六

私の經過した半生がをりをり繪卷物のやうになつて私の頭に來た。今更ながら追恨と悔悟との多い半生である。また今更ながら心の變化、姿の變化の多い半生である。城の沼のある畔の藁家で成長くなつた私、沼の錆びた水の色を朝な夕なに見て暮した私、幼くして父を喪ひ、母と祖父との手にさびしく育てられた私、蒼い顏をして人の前では碌々口もきけなかつたやうな私、女の前ではすぐ顏を赧くしたやうな私、現に、私の總領の男の兒は丁度其時分の年格好で、矢張、人見知りで、默つて、きまりのわるさうな風をしてゐる。矢張、私の總領の男の兒も、私のやうな一生を得るのであらうか。矢張、私のやうなスツルムとドラングとを經て一生を終るのであらうか。

過去は實際不思議である。自分で今まで不思議にもせずに、平氣で過ぎて來たのに驚かれる。先づ大きな一條の路があるとする。そこにいろいろな人が巴渦を卷いたやうにして行く。私もその中を歩いて

ゐる。そしてその一條の大きな路は、闇から出て闇へと入つて行つてゐる。生から死と言ふよりも、死から死へと入つてゐる。その中でゆくりなく邂逅した人が或は友となり、或は敵となり、或は妻となり、或は情婦となり、或は先輩となり、或は後輩となり、そして時には離れたりまた即いたりする。無意味に一生私のあとをついて來たりする。ちよつと近づいてそしてすぐ向ふに行つて了つたりする。實に不思議である。

私は私の過去を材料にして將來を推し量らうとはしないが――さういふ斷定は避けるが、しかし私の過去の中から、私の將來をはつきりと見出すことが出來ることは爭はれなかつた。過ぎ去つて行くものゝの中に、矢張過ぎ去つて行く私がゐた。

そしてこの一條の大路の中に、鮮かに色彩を際立たせて、その乾燥無味な一生を美しく見せてゐる愛慾――それが深く私の心に絡み着いてゐた。

私は狹い六疊の書齋の籐椅子の上に、ぶるぶる戰えながら、恐ろしい嫉妬と憤恚とに燃えてゐる自分を見ることが出來た。また、戀の歡樂に心も魂も蕩けて、生命も何もその美しいものの前に投げ出してゐる自分をも描き出すことが出來た。ある時は私はその苦痛に堪へかねて、山の寺に行つて、開かれぬ扉の前に立つて一心に祈念した。

「戀したものゝ手をねぢるのは、赤兒の手をねぢるやうなものだからね」

ある時は私はこんなことを言つた。大きな體に不似合な女々しい涙をこぼしたりした。

毎朝見る新聞記事の中でも、私に取つては歐州の大戰亂とか、支那の革命とか、政治家の一言一動と

か、さういふものよりも、三面に書いてある心中とか、戀の遺恨とか、恨みの刄に流された血汐とかいふものゝ方が更に一層深い感動と印象とを與へた。ある時は私は言つた。『實に不思議だ、實に不思議だ。性（セツクス）の道ばかりは、深く入つて行けば行くほど益々わからなくなる。今日見た新聞の中に二つとも出てゐたことだけれどもね。一つは女が多情で、ある男と切つても切れない仲でゐながら、常に他の男と關係して、いろいろな噂を立てられるので、男も考へた結果、自分の弟の家に女を伴れて來て、これなら大丈夫と思つてゐた。ところが間もなく女はその弟と通じた。兄はもうこらへてゐられなくなつた。度々三人で大立廻りをやつた。そしてある夜、酒を飲んで、泥醉して、弟の家に怒鳴り込んで、弟と女とを殺ろして、家に火を放つて、そして自分も自殺した。これはまア、よくあることだ。新聞の三面記事としてはめづらしくはない。しかし、これと同じ頁に、「三人心中」といふ題で、一人の男と二人の女と一緒に心中した記事が出てゐた」

「女は何ういふ女だね？」

「一人は内縁の妻、これは二十七八、それからもう一人は酌婦で、十七八、前の夜は三人で仲よく酒を酌み交して、床を並べて睦しく寐たが、朝起きて見ると、藥を仰いで、三人同じ枕に死んで居た。」

「へえ……」

聞いてゐた人も、不思議に堪へないやうな顏をして言つた。

「この二つの記事を同時に、同じ頁に見た時には、僕はモウパッサンの『愛』といふ短篇の書き出しのやうに、新聞を持つたまゝ、深く性（セツクス）の問題を考へずには居られなかつた。一方は男が二人、一方は女が

二人、これでその結果は正反對に終つてゐる。僕は何とも言はれない氣がした。世の中は愛慾だなアと思つた。そしてこの愛慾を離れなければ、自分の生命も危いやうな氣がした。山寺へでも行つて、佛の前に手でも合はせなければゐられないやうな氣がした。」

「矢張、思ひ當ることがあるからだらう」聞いてゐた人はかう言つて私の方を見て冷かに笑つた。

しかしその二つの事實は、長い間私の心に絡みついてゐた。否、今でもその事實は私の胸にをり〳〵蘇つて來て、それが私の苦痛と一緒になつて流れた。ある時、私はその話を女にした。女には矢張それがはつきりとは響いて來ないらしかつた。「まアイヤねえ」かう言つて、三人心中の方には興味を持つたけれども、この二つの事實の對照については別に深く考へるといふ風でもなかつた。

「しかし、お前だつて、餘り男をさういふ眼に逢はせると、危險だよ」

女は唯笑つてゐた。

「ぢや、矢張、面白いのかねえ、さういふ風に、心を二つにも三つにもわけるといふことは！」

「何うですかね」

「何うですかねぢやないよ。考へて見なくつちやいけないぢやないか」

「だつてわからないんですもの」

「さうかなア、わからないかなア」

かう言つて私は溜息を吐いた。

自分ながら自分でわからないのは、愛慾の離れ難く捨て難いことである。第三者の言ふことなどは何

うでも好いけれども、自分自身でもその際限のないのも知つてゐるし、その危險なのも飮み込んでゐるし、馬鹿馬鹿しいのを知つてゐる。それに、自分はもう分別の盛りをすぎた歳である。子供が五人も六人もある。普通の世間を見渡すと、私位の年齢の人々は、大抵は家庭に引込んで、落附いた顏をして、妻子眷屬のためのみ心をそゝいでゐる。愛慾などもうめづらしくもないといふ顏をしてゐる。生殖といふ大きな義務をすましたといふやうな靜かな態度を取つてゐる。それに比べると、自分も、時には耻かしいやうな氣がしないでもない。しかし、自分は自分の生命の一部でそして色彩の多いこの愛慾を何うして捨て去ることが出來るであらうか。

ある人は言つた。『何うも矢張働くに限りますよ。一日勞働して、晩酌でもやつて、ぐつと寐て了ふのが好い。それが一番無難だ』それは確かにさうである。しかし、この勞働が愛慾と相連繋して、愛慾あるがための勞働、勞働あるがための愛慾といふ風になつたら何うか。

私に取つても、女が勞働乃至努力の慰藉になつたことは尠くなかつた。女あるがための藝術、女あるがための努力、かういふ風に心の張り詰めて行つたことも一度や二度ではなかつた。その意味から言ふと、妻などは、私の藝術、私の努力などに對しては全く沒交渉である。しかし、その對照である女の心が、單に私の熱した心を無限に吸ひ込む海綿であり、また十分に確實に所有することの出來ない沙上の家であるといふことは、私に取つて單に笑ふべき喜劇であるであらうか。

七

「もう、今日つきり來ないから」

「え、好う御座んすとも……」

女も張詰めたやうな顏をして言つた。私達は默つて考へた。

傍には女の母親が坐つてゐた。

「ぢや、左樣なら……。」

かう言つた私は立上つた。

「まア、まア、落附いて……」

母親の達つて留るのを振切つて、私は戶外へ出た。

かういふ喜劇を私達は何遍繰返したであらうか。私はあの暗い露地を憎む。またあのじめじめした空氣を憎む。また私を陷れたあの溝竇を憎む。私はそのをりをりの事實と奮激と嫉妬と、それをヒユマンドキユメントとしてこゝに說明したいと思ふけれど、今ではとても落附いて書いて人に示すことが出來ない。自分で自分を罵つても足りない。自分で自分の肉（ししむら）を食つても足りない。考へて來ると、顏を蔽つて、穴の中にでも入つて了ひたいやうな氣が今でもする。

女は憎んでも憎んでも足りない。しかしその憎むといふ裏面は卽ち愛するといふことであるから、猶ほ堪らない。かうやつて別れて置いて、「え、好う御座んすとも……」などといふ立派な口をきいて置いて、すぐあとから女は詫の手紙をよこす。使をよこす。それでも目的を達しない時には、女は自分自身私の家にまでやつて來た。

奮激とか、激昂とか言ふことは、しかし何にもならないことである。いくら怒つて見たところで、そ

れは却つて自己の愛と自己の悲とを表白するやうなものであつた。別れるなら、私は默つて何事もないやうにして靜かに別れて行かなければならなかつた。

「何うせ、私のことなんか、少しも思つてゐては吳れやしないんだから」かう言つては、女はよく私の作品を持出した。

「だつて、さうぢやありませんか。貴方なんか、商賣で、かうして私とゐるやうなものぢやありませんか。でなけりや、何故あんなことを書いたんです？　何故、あんなことを書いて、人を怒らせたり何かするんです？」

「だつて、それは仕方がない。書くことは、僕の生命だから、お前に捨てられても、僕は書くことをやめることは出來ない」

「それ御覽なさい。だから、私なんか何うでも好いんですよ。材料にさへされてゐれや好いんですから」

しかしこの問題に就いては、私は多く言葉を費やさなかつた。細かに說明して聞かせたところで、女には到底それがわからう筈はなかつた。

熱烈なる實行者、それを唯女は求めた。熱烈なる實行者で、且つ冷淡なる傍觀者であるといふことは女にはわからなかつた。其處まで行くと、私は暗い壁に突當るやうな氣がした。

女の家の六疊に面した小さな庭、それを私は何年つゞけて見たであらうか。父親の好きな盆栽の並んでゐる棚、土を運んで來て四角に拵へた草花の園、厠に接した竹の袖垣の前には、顏を洗ふ臺があつて、その中の竹の簀子の上に、柘榴の花の咲いた鉢だの、睡蓮の大きな鉢だのが置かれてあつた。厠の手

水鉢に接した方には、四角の木製の箱に綺麗な水が一杯に湛えられてあつて、小さな岩石や藻や澤瀉などの中を錦魚が澤山に游いでゐた。

「龜の子はまだゐますね」

こんなことを言つて、私はよくそこをのぞいて見た。

床の間には幸四郎の辨慶の博多人形が飾られてあつて、竹を描いた草雲の軸がかゝつてゐた。その床の間を何遍私は張り詰めた心と眼とを持つて見たであらうか。また猜疑と嫉妬の恚を燃しつゝそれを見たであらうか。私は入つて行くや否、表面は落附いた顏をしつゝ、猫の眼のやうに鋭く注意してあたりを見た。何故なら、其處に男がゐるから……。男のゐた址があちこちに殘つてゐるから……。

藝者でも買はうと言ふものが、そんなことで何うする。そんな了簡で何うする。通人の心理などと言ふことを少しは考へて見るが好い。かう言はれても仕方がない。それからまた「お前は一體いくつだ」かう問はれても仕方がない。矢張私は私なんだから。通人ではないのだから……。

或は靜かに、或は激して、或は遊蕩兒のやうに、或は通人のやうに、時にはまた一廉の立派な旦那のやうにして、私は其處に長い年月の經つのを見た。私の知つてゐただけでも、其處に雇れて來た下女は五六人は變つて行つてゐた。栃木の在のお照といふ二十一二の女、いやらしい口の利方をして六十近くなつても猶ほ白粉を手元から離さないやうな老婆、藝者屋の内部の秘密を手に取るやうに知つてゐる中年の女、さういふ人達は、皆な私と女との細かい空氣、女と私との間に觸れずに殘つてゐる事實、さういふものを詳しく知つてゐた。女に關して私の知らないこともかれ等は皆知つてゐた。

その中で私はお照といふ婢を一番懇意にした。お照は二年ほどゐた。容色もさうわるくはなし、氣立もやさしく、立働きも甲斐々々しく、女にも家の人達にも氣に入つてゐたが、二年目の秋に、嫁に行くといふので、田舍に歸つて行つた。私はお照の田舍の番地などを私の手帳に書きつけた。私はいざといふ場合には、田舍に行つてお照の口から詳しく女の秘密を聞かうと思つてゐた。

しかし、さういふことも一つ一つ過ぎ去つて行つた。ワキとして私達の舞臺に上場して來る人達が、銘々その持役を演じて行つて了つたあとには、いつも矢張私と女とが殘つた。

それればかりではなかつた。その細い巷路の中の人々の變遷もかなりに著しかつた。奥の待合の養女の梅子といふ藝者は、ある男に夢中になつて、その養母と共に、ずつかり零落して、淺草の方へ引越して行つたし、隣の助六といふ藝者は、一時此方からのぼせ上つた役者と切れて、今度は新しい男をその長火鉢の前に坐らせたし、前の家には、幾人となく住む者が變つて、今は淺草あたりに出る女優が入つてゐるし、ある女は懷妊して男の兒を産んだし、ある女は肺病が重くなつて死んだし、長い月日と事實と人生とは、其處にも凄しい烈しい巴渦を卷いてゐるのであつた。

「あの角の家も面白いのね」

かう言ふのをよく訊いて見ると、そこには細君と妾らしい女と一緒に同棲してゐて、細君には子供が二人あるのであるが、その子供は寧ろ妾の方になついてゐて、『をばさん、をばさん』と言つて後を慕つた。誰が見ても、妾の方が細君よりは上で、その妾の內職の刺繍からもかなりの生活費もあがるらしかつた。男といふのは、四十先で、何でも代書屋さんらしく、毎日朝早く出かけて行くが、四時すぎにはい

つもきちんと歸つて來た。『その時には、細君が子供を二人つれて外へ出て行くんですとさ』こんなことを笑ひながら女は私に話した。何處も彼處も、愛慾の世の中だ。色と戀との世の中だ。世の中といふことは男女の中といふことだ……。そしてその間に、逡巡と躊躇と羈絆と愛著との中に、人間は生命の浪費を敢てしつゝ絶えず人生の大波の中に流れて行く。

現に、私もその一人だ。

八

若い二人の兄弟の學生の歸つて行つた後には、私の周圍は再び元の寂寥と孤獨とに歸つた。私の書く鉛筆の音がコッコッと机の上に靜かに聞えると同時に、傍にある小さな時計は、微かにしかし正確にあやまつことなく時の經過を刻んで行つてゐた。

カッコウ、カッコウといふ閑古鳥の聲が遠くきこえた。此頃はもう滅多に鳴かなくなつたので、めづらしいので、私は筆を措いて、耳を傾けるやうにして其方の方を見た。山の峽には雲が深く封じてあるところは湧くやうに渦き立つて見えた。

私はじつと眺め盡した。

何處かで人の聲がする。笑ふ聲もした。周圍の山畠に、百姓達が桑の葉を摘みに來たのであつた。向ふの別莊では、小さな亭を拵へるための大工や人足が二三人集つて、頻りに釿や鉋をつかつてゐる氣勢がした。

靜かな靜かな午後であつた。

ある朝は一間先きも見えないほど深く深く霧が四邊を埋めた。すぐ前にある松の林がぼんやりと海中に浮んでゐるやうに見えた。私は陶器の小さな釜の飯の熟するを待ちながら、長火鉢の前に坐つて、巻烟草を靜かに吸つた。

紫の色をした烟はすうと長く靡き上つた。

何處かで子規が啼いて行つた。

やがて釜がブウブウ吹き始めたので、私は勝手元の方へと立つて行つた。勝手元にはいろいろのものが散はつてゐる。馬鈴薯の屑、隱元の鞘、萎び果てた生薑、まだ洗はない昨夜の茶椀や鍋は、そのまゝ洗桶に浸したまゝになつてゐた。

釜を下して、今度は鍋をかけた。味噌汁である。何か汁の實になるものがないかしらと思つて、私は野菜の入れてある桶の中をかき廻して見た。しかし生憎、何もないので、仕方がないので、立つて簞笥をあけて見た。簞笥の中には、皿たの小皿だの乾物などが入つてゐた。私は取敢へず麩の三つ四つを出してそれを汁の中に入れた。

簞笥をあけた時、ふと香水の匂ひがした。それは過ぎ去つた颱風のあとの匂ひである。それに、女は柔かい紙だの、櫛や三本足の入つたたとうだの、黒味がゝつた單衣だのを殘して行つた。女はもう一度是非やつて來ると言つてゐた。

さういふものがなつかしくないことはなかつた。今に限らず、世離れた私の別莊の中に、蒲團に埋れて女の船底枕があつたり、櫛があつたり、女持の石鹼箱があつたりするのが微かに私の情味を誘つた。

歸る日に、女は私のよごれた枕のおほひだの、襦袢だの、單衣だのを洗つて行つて呉れたが、それも私には嬉しかつた。私は白い綺麗なおほひのついた枕に私の疲れた頭を當てた。

夕方の酒を一本ほど飲んで、好い心持になつて、私はいつも向ふの二階の別莊の方まで行つた。自然は平凡だ、無關心だ、人間の苦痛とは何の交渉もない。それには相違ないけれども、靜かに相對すると、私は言ふに言はれない慰藉を感じた。

ある夕暮には、別莊の留守番の爺さんが、まだ仕事を了らずに、半ば出來かゝつた小さな亭のところでせつせと屋根を葺いてゐた。

「精が出るねえ」

「もうしまふだ。一日働いても、一文にもならねえからな」

こんなことを言ひながら、爺さんは亭にかけた階子から下りて來て、大工と一緒にそこに蹲踞んだ。

「監督が氣がきかねえでな」から大工は言つたが、すぐあとをついで、「わずかの金で年中の留守番をしてゐるんだから、そこは氣をきかして、日當が六十錢のものなら、せめてその半分でも呉れると好いだがな」

「堅い旦那だでな。それア、もう滅相堅い旦那だで」爺さんは叩き潰した烟管の雁首をすぱ〱やりながらうそぶくやうにして言つた。

「一日働いても、一文にもならない？そんなことはないだらう？」

から私が言ふと、

「それでも、旦那、來れば、いくらか呉れべいよ」

この爺さんは、寒い寒い嚴冬の中でも、その山の別荘の勝手の一間にちゞこまつて住んでゐるのであつた。息子はかなりに大きいのが一人ゐるが、嬶にはもう餘程前に死にわかれて、今では全く獨りで暮してゐた。「あれでもあの爺さん、中々やるんですとも……後家狩を時々はやるんですよ」から村の人達は言つたが、さう言へば、成ほど、夜も朝も何處かに行つてゐないやうな時がをりをりあつた。

「冬は寒いだらうね」

「冬は、へえ、お話にならねえ……」

から大工は言つた。

爺さんは、「でもな、巨燵にもぐつてゐりや、そんなでもねえぞよ。雪はそんなに澤山にや降らねえだで」

「路はひどいだらうね?」

「なアに、雪の降つた時や、わらじでなけや駄目だけども、へい、ぢき解けて了ふで、下駄でも結構歩るけらア」

「さうかねえ」

突然、「お客さま、歸(けえ)つたけえ?」

「歸つた……」

「ぢや、一人(ひとり)けえ?」

「あゝ」

『また、來るけえ？』

『來るかも知れねえ』

日は既に暮れつゝあつた。冷かな山の空氣は肌に寒く泌み入つて來た。で、私はわかれて歸つて來た。夜は寐るより他に仕方がなかつた。私は蒲團を出して敷いて、蚊帳を吊つて、ひとりさびしく肱を抱いて寐た。女が帶をするすると解いて、卷いてN君の枕の代用にしたことなどを私は思ひ出した。

をりをり一歩を進めた考が私の頭を往來した。實行の出來ないのは、それは單に傍觀者たるためではない。藝術を生命としてゐるためでもない。それはお前の臆病と卑怯とを體裁よく飾る言葉である。お前が實行しないで、お前が進んで行かないで、何うして女が出て來やう。何うして女が出て來られやう？お前は卑怯だ。臆病だ。かう私の心の底の聲は叫んだ。しかし、一方ではまた別な聲が叫んだ。『そんなことが出來るか。そんな理由のないことは出來るか。自分はあの女のためには飽まで犧牲になるつもりではなかつたか。あの女の幸福のために謀る筈ではなかつたか。それが自分の通つて行く正しい路ではなかつたか。女の幸福は、私がそれを實行すると否とに由つて增減するであらうか。妻と離れて女と一緒になることが果して正しいことであらうか。年齡も違つてゐるではないか。お前はもうそんな惑溺を敢てする年齡ではないではないか』

『しかし、それは惑溺と言ふことは出來ない。ある機會とある動機とさへ來れば、私と女とはいつ一緒に地獄の焚火の中をかけるやうになるかもわからない』かう思つて私は悚然とした。

不眞面白であり、浮薄であり、輕跳であつた今までのことがひしひしと私の胸に思ひ當つて來た。十

年近い間、私のやつて來たことは、果して眞面目で正しいことであつたらうか。單に歡樂として、乃至は玩弄物として女に對してゐただけではなかつたか。今でも——現に、つい此間までも、さうした行動を敢てして女に腹を立たせたではないか。女の不眞面目と浮氣と不節操とを咎める資格がこの自分にあるだらうか。

『もつと、眞面目に、不幸な女の身の上を考へてやらなければならない』

私は私と妻と女との間に横つてゐる狀態をもつと本當に視なければならないやうな氣がした。しかし矢張、何うにもならないのが私達の狀態である。女と別れることを計畫した時分、『總てを破壞しやう。總ての自分の生活を破壞しやう。そして新規蒔直しをやらう』から斷乎として思つたことがあつたが、それが今また私の胸に浮んで來た。私は黯然とした。

一日一日とまた淋しく暮した。ある日は凄しい暴風雨がやつて來た。山上の孤屋の周圍には、風が凄しく吹き、雨が車軸を流すやうに降り、霧と雲とは蓬々として迅く迅く掠めて通つた。私は終日家の中に引籠つたまゝ一歩も戸外に出ることが出來なかつた。水がなくなつて止むを得ず裏の井戸端に出かけて行つた私は、ぬれ鼠のやうになつて辛うして戻つて來た。

屋根に當つて凄しく鳴る風、硝子戸に礫(つぶて)のやうに打つける雨、何處かでぽたぽたと洩る音、さういふ中に、私はひとりぽつねんとして机に向つて座つてゐた。

硝子戸を透して見た草や木は、皆なぬれて、動いて、ざわついて、俛首れてゐた。

夜は殊にそれが凄しかつた。家はぐらぐらと根太から動いた。大きな山脈から大きな山脈へと渡つて

行く風は、蓬々として、さながら自然の恐ろしさを私の前に展けて見せるかと思はれた。私は終夜眠られなかつた。私は蚊張を外して、ランプを細く暗くつけて、机の前に坐つて起きてゐた。

一昨年、越後の赤倉に女と一緒に行つた時にも、矢張、凄しい暴風雨であつたことなどをも私は思出してゐた。

しかし、その暴風雨も、翌日の午後になつて晴れた。隣の測候所の天氣豫報の旗竿には、半ば赤く半ば白い旗がかゝげられてあるのを見た。

「少くとも、私はもつと深く考へて見なければならない」

かう思つて私は人氣もない松原の中の小徑を歩いた。

九

「破壞か、實行か」

その二つの念は日毎に私を惱ませた。私は矢張躊躇と愛着とを脱することが出來なかつた。

ある時は女に寄せる手紙を五枚も六枚も書いて、それを封筒に入れて、出すばかりにして置いて、そのまゝまた一日二日を經つて行つた。

其間には、妻から手紙が來たり、女から物を送つてよこしたりした。女はあの時見た妻からの送物と同じやうな體裁にして、生薑だの茗荷だのくさやの乾物だのを銘々に細々と紙に包んで、それを大きな箱に入れてよこした。甘納豆の罐などもあつた。

ある時は、村の青年達がやつて來た。中で、S君は年も多いだけに、愛慾のことに就いてもやゝ深い

開けた理解を持つてゐた。S君は山の裾野の村々にゐる多くのさばしの話などをした。「なアに、へい、面白半分ですよ。そんなものに碌なものはありはしませんからね」などと笑ひながら言つた。その癖、S君も矢張中年の戀などといふことをそろそろ感じてゐて、夜になつてから一里に遠い山路を女の許に通つて行つたりした。

「本當ですな、愛慾の世の中ですな」

かう言つて笑つて私の話に同感した。

宗教の話の出た時には、私は言つた。「僕なんか、まださういふ話をする資格はないと思ひますね。何故なら、まだ、さういふことを痛感してをりませんから。それは、所謂宗教はわかる。世間の人の言ふ宗教はわかる。しかし私の宗教はまだ完成どころか、その半ばにも達しませんから。私なんか、矛盾が多くつて、分裂が多くつて、それに苦んでゐるのですから……。自分で自分のことが何うにもならないんですから。」

「しかし、宗教つて言ふやうな氣分は感ずることはあるんでせう？」

「それはある。大いにある。實際、時には何も彼も捨てゝ、捨てゝ、佛の前に手を合はせたいやうな心持がすることが幾度もあります。現に、この山莊に來てゐても、さうした思ひに燃えることはよくあります。しかし、矢張統一することは出來ない。また、一方ではなまじいそれを小さく統一して了ふのは意氣地がない。もつと深く深く觸れなければならない。もつといろいろなことに當つて碎けて見なければならない。さういふ心が一方にあつて、そしてその分裂をわざと益々混亂させて見るといふやうなところがあります。」

「さうですかね」

S君は考へるやうな顔をした。

山莊に訪ねて來る人は、しかし稀であつた。私は全く世を離れてさびしく暮した。夕暮の散歩に出かけて行く路に、來た時には卯の花が白く咲いたり、杜若が紫に咲いてゐたりしたが、今はもうさういふ花も見えなかつた。夕暮の靜かな空氣が唯燃える私の胸に染みた。

松の疎らな林の間に、私の別莊の尖つた屋根を見る時には、私はいつも何とも言はれない寂寥と孤獨とを感じた。私があそこにひとりゐる。かうした人生の重荷に惱み、かうした人生の別れ途に立つてゐる私が一人ゐる。さうして、一人物を煮て食つたり、考へたり、惱んだり、思ひ屆したりしてゐる。かう思ふと、私は全く空間に唯一人さびしく漂つてゐる生物のやうな氣がして、さびしさに堪へかねて、私はいつも急いで別莊の方へと歸つて行つた。

ある夕暮、私はいつものやうに散歩から戻つて來た。それは霧の多い雨もよひの空の山氣のしつとりと肌に染みるやうな夕であつた。私は松の林の角に來て立留つた。別莊の前に一人の男が立つてゐた。

私は急いで其方へと行つた。

「電報です」

男はかう言つて、それを私にわたした儘、急いで向ふの草原の路の中に入つて行つた。私は封を切つた。女はまた明日やつて來るといふのであつた。

私は頭を振つた。(完)



貧しき人々の群

中條百合子

(一)

村の南北に通じる往還に沿つて、一軒の農家がある。人間の住居と云ふよりも、寧ろ何かの巣と云つた方が、餘程適當して居る程穢ない家の中は、窓が少ないので非常に暗い。

三坪程の土間には、家中の雜具が散らかつて、梁の上の暑さうな鳥屋では、產褥に居る牝鷄のク、、、、、と喉を鳴らして居るのが聞える。

壁際に下つて居る鷄用の丸木枝の階子の、糞や拔け毛の白く黃色く付いた段々には、瘦せた雄鷄がちよいと止まつて、天井の牝鷄の番をして居る。

總ての物が、むさ苦しく、臭く貧しい裡に、三人の男の子が爐邊に集つて、自分等の食物が煮えるのを、今か今かと、待ち草臥れて居る。

或る者は、頭の下に敷いた一方の手を延して、燃え掛けの枝で、とろくなつ

た火を掻き廻して、溜息を吐く。或る者は、さも待ち遠さうに細い足をバタ〳〵動かしながら、まだ湯氣さへも上らない鍋の中と、兄弟共の顏を、盜み視て居る。けれ共誰一人口をきく者は無く、皆此上ない熱心さで、粗野な瞳を輝かせながら只、目前に煮え樣として居る薯の事ばつかりを、考へて居るのである。

逞ましい想像力で、やがて自分等の食ふべき物の、色、形、臭ひを想ふと、彼等の眠つて居た唾線は、急に呼び醒まされて、忽ち舌の根にはヂク〳〵と唾が湧き出し、頬つぺたの下の方が、泣きたい程痛くなる。彼等は、頭が痛い樣な思ひをしながら、折々ゴクリ、ゴクリと喉を鳴らし合つて居る。

子供等は年中腹を空かして居る。腹が張ると云ふ事を曾てちつとも知らない彼等は、明けても暮れても「食ひ度い〳〵」と云ふ欲にばつかり攻められて、食物の事になると、自分等の本性を失つて、がつがつする。

今も彼等三人が三人、同じ樣に「若し俺ら獨りで、此丈の薯が食へたらなあ」と思ひ、平常は居なければならない兄弟共も、此那時には何と云ふ邪魔になる事かと、しみ〳〵と感じて居たのである。それだもんで、いつの間にか鷄共が俵の破れから嘴を突込んで、常に親父から、一粒でも勿體なくすると目が潰れるぞと、かたく戒められて居る米粒を、拾ひ食ひして居るの等に、氣の付かう筈はなかつた。

鷄共と子供達とは、各自に自分等の食物の事許りに氣を奪はれて居たのである。

所へさつきから入口の所で、ジイッと此の樣子を眺めて居た野良犬が、何を思つたか、いきなり恐ろしい勢で礫の樣に、鷄の群へ躍り込んだ。

珍らしい米の味に現を拔かして居た鷄共は、此の意外な敵の來襲に、どの位度膽を拔かれた事だらう！、コケーッコッコッコッコッ、コケーッコッコッコッと云ふ耳を刺す様な悲鳴。バタ〳〵バタバタと空しい羽叩きをする響などが、家中の空氣を動搖させ、靜まつて居た塵は、一杯に飛び擴がつた。餘り騷動が激しいので、却つて犬の方が間誤付いて仕舞つて、濡れた鼻で地面をこすりながら、鳥路鳥路とそこいら中を、嗅ぎ廻つた。

横に垂れ下つた舌や、薄い皮の中から見えて居る助骨が、ブル〳〵震へたり、喘いだりして居るのである。

此の不意の出來事に、子供等は皆立ち上つた。そして、一番年上の子は、火の盛に燃え付いて居る木株を爐から持ち上げるや否や、犬を目がけて、力一杯投げ付けた。投げられた木株は、ヘラ〳〵焔をはきながら、犬の後足の直ぐの處に、大きな音と火花を散らして轉げたので、低い驚きの叫びを上げながら、犬は體を長く延ばして、一飛びに戸外へ逃げ去つて仕舞つた。

木の株の火は消えて、フーフーと、激しい煙が立ち始めた。

此の小さい騷ぎを挾んで、彼等の待ち遠い時は、極めてのろ〳〵と這つて行つた。けれ共、漸々鍋の中から、グッグッと云ふ嬉しい音がし始めると、皆の顔は急に明るくなり、微笑した眼が幾度も〳〵蓋を上げては、覗き込んだ。

これから暫くすると、一番の兄は、まだ朝の食物があつち、こつちに、こびり付いて居る椀を持つて來て、爐の邊に並べた。これから、此のホコ〳〵と心を有頂天にさせる様な香りのする薯が分けられよ

うと、云ふのである！

一つ二つ三つ四つ。一つ二つ三つ四つ。

彼は順繰りに分けて居たが、不意に、前後を忘却させた程强い衝動的な誘惑に驅られて、皆の顏をチラッと見てから、弟達のへ一つ入れる間に、非常な速さで自分の椀に一つ丈餘計投げ込んだ。

そして、何氣なく次の一順へ廻り始めようとした時、

「兄にい、俺らにもよ。」

と、其の時貰ふ番の弟が、强情な聲で叫んだ。後の者も、眞似をして椀をつきつけながら兄に迫つて行つた。

兄は、自分の失敗の腹立たしさに、口惜しさうな顏をしながら、突き出された椀の中に、小さい一切を又投げ込んでやつた。

けれ共、始めに見つけたすぐ下の子は、兄のと自分のとを、しげ〳〵見くらべて居た後、

「俺ら厭だあ！　お前えの方が太つてらあ。」

と云ふなり、矢庭に箸をのばして、兄の椀から其の太つた丸いのを、突き刺さうとした。

物も云はせず、其の子供の顏は、兄の平手で、三つ四つ續け樣に毆たれた。彼は火の付く樣に泣き出した。そして、齒をむき出し、拳骨をかためて「薯う一つ餘計に食ふべえと思つた奴」にかゝつて行つた。

それから暫くの間は、三人が三巴になつて、泣いたり喚いたりしながら、打つたり蹴つたりの大喧嘩

が續いた。仕舞ひには、何のために、如何う仕様として斯那に大騷ぎをして居るのかも忘れて仕舞つた程、猛り立つて摑み合つたけれ共、段々疲れて來ると共に、毆り合ひもいやになつて來た。氣拔けのした樣な風をしながら、各自が勝手な所に立つて、互に極りの惡い樣な、けれ共まだ負けたんぢやねえぞと威張り合ひながら、いつの間にかこぼれて、潰れたり灰にころがり込んだりして居る大切な薯を見詰めて居た。

皆早く食べたい、拾ひたいと思つて居るのだけれ共、思ひ切つて手を出しかねて居ると、喧嘩を始めたなかの子が、押しつけた樣な小聲で

「俺ら食うべ。」

とこぼれたものを、拾ひ始めた。

之を機に、他の者も大急ぎで拾つた。

そして、又更めて數をしらべ合ふと、今はもうすつかり氣が和らいで、掛け換への無い一椀の寶物を出來る丈ゆる〳〵と、しやぶり始めたのである。

此れは、町に地主を持つて、其の持畑に働いて居る、甚助と云ふ小作男の家での事である。

(二)

丁度其の時、私は甚助の小屋裏の畑地に出て居た。ブラ〳〵歩いて其處まで來ると、思ひ掛けず子供等の樣子が目に付いたので、傍の木蔭から非常な興味を持つて、眺めて居た。そして薯の事から、喧嘩

からすつかりを見て仕舞つたのである。始めの間は、私は只厭なものだ、淺間しいものだと思つて居たけれ共、段々恐ろしい樣になり次で、たまらなく可哀さうになつて來た。彼等に對して一切の薯は、どれ程勢力を持つて居るものか！　若し私に出來る事なら、うんと厭になるほど御馳走を食べさせて遣り度いと云ふ樣な心持も起つたけれ共、到頭、私はどうしても彼の子供等と近づきになつて見樣と云ふ激しい好奇心に、すつかり打ち負されて仕舞つた。

私は、さつさと獨りで入つて行かうともしたが、何だかばつが惡い。

向ふがいくら子供達でも、何だか極りが惡い。で、私は誰か來て私を連れてつて呉れゝばと思ひながら呆やりと立つて居た。裏口からは、子供等が口の中で薯をころがしたり、互の椀の中を覗き合つたりして居るのがすつかり見える。

丁度好い鹽梅に、そこに甚助の身内の者で、家が傍だもんで、日に一度づゝ子供はかりで留守居をして居る所を見廻つて居る婆が、いつもの樣に手拭のチヤンチヤン一枚で向ふから來た。

私は早速婆にたのんだ。そして、始めて甚助の家へ入つて見たのである。そこいら中は思つたより穢く臭かつた。

私が戸口の所に立つて、内の樣子を眺めて居ると、婆は、けげんな顏をして、ジロジロ私の方許り見て居る子供達に、元氣の好い聲で種々世話を燒いてやつて居る。

「ちやんは今日も野良さ行つたんけ？　おとなしく留守してろよ。又鐵砲玉（駄菓子）買つてくれつかんな。」

そして默り返つたまゝ、婆が何と云はうが返事を仕様ともしない子供達に、何か云はせ樣としきりに骨を折つても、頑固な彼等は只、臆面のない凝視をつゞけて居るばかりで一言も口をあかうともしない。皆が、憎い樣な眼をして私許りを見て居るので、段々私は來ちやあ惡かつたのかしらんと云ふ樣な心持になつて來た。

婆は、しきりに氣の毒がつて彼れ此れ執成（とりなし）に掛つても、子供等は一向其那事には頓着なく婆が所謂、「じようし（耻し）がつて居ますんだ。」と云ふ沈默を續けて居る。

私には、何故子供等がこんなに默り返つて居るのか一向譯が分らなかつた。それで、幾分蹴落される樣な心持になりながらもしゐて、微笑をしながら

「父さんや母（かあ）さんは？　淋しいだらう？」

と、一番大きい子に云ふと、いつの間にか私の後に、廻つて居たなかの子が耳の裂けさうな聲で

ワーッ！

とはやし立てた。

私は非常に驚いたと同時に、胸がムカ〱する程不愉快を感じた。けれ共、もう一度私は繰返して見た。

「淋しいだらうね、だあれも居ないで。」

腹は立つたけれ共、私にはまだ彼等を憫む位の餘裕はあつた。

年中貧しい暮しをして、みじめに育つて居る子に、優しい言葉の一つもかけて遣りたかつたのだ。

が、それにも拘らず、
「おめえの世話にはなんねえぞ――ッ」
と云ふ、思ひがけない怒罵の聲が、私の魂を動顚させた鋭さで投げ付けられたのである。
私は目の奥がクラ〳〵する様に感じた。
一瞬間に、今まであつた總ての事が皆嘘だつた様な氣もする。
私は、何を如何うする事も出來ずに只立つて居た。けれ共、心が少し靜まると、ジイッとして居られない程に不可解な憤怒や羞恥が激しく湧き立つて、非常に不調和な感情の騷亂は、肉體的の痛みの様に、苦しい心持にさせるのであつた。
私は寛容でなければならない。彼等から一歩立ち勝つた者の持つ落着きを保ち續けようとする虚榮心が臆病に成りきつた心を鞭韃した。けれ共空虚になつた様な頭には何を判斷する力もなくなり、齒がガチ〳〵と口の中で鳴つて居る。
此の意外な有様に、婆はすつかりとつちて仕舞つた。そして子供の手をグン〳〵引つぱつて下に座らせながら私には、詫びる様な眼差しで
「行きすつぺなあおめえ様。禮儀もなんも知んねえではあどうも。」
と立ち上つた。私も、もう歸る丈だと思つた。
婆の先に立つて子供等に背を向けた時、私は自分の上に注がれて居る憎しみに滿ちた眼を思ひ、野獸の様な彼等の前に、どれ程私は臆病に弱く醜く立ち去らうとして居るのかと思ふと、此のまゝ消え失せ

て仕舞ひ度い程の耻かしさに、火の様な涙が瞼一杯に差しぐんで來たのである。
私はしほ〳〵と杉並木の路を歩いて居た。誰に顔を見られるのも、口を利かれるのも堪らない心持でのろ〳〵と足を運んで居ると、いきなり後から唸りを立て飛んで來た小石が、私の足元で彈ずんで、コロ〳〵と傍の草中へ轉がり込んで仕舞つた。
シユツと云ふ音が鼓膜を打つや否や、私は反動的に身をねじ向けて見ると、まだすぐ近くの甚助の家の前に、子供等が犇き合つて立つて居る。
年上の子供は、私が振向くと、手に持つて居た小石を振り上げて、威す樣な身振りをした。
私は、子供等の方を見ながらのろ〳〵と杉の木陰へ身を引きそばめて、二度目の襲撃を防がうとした。
私は、手觸りの荒い杉の太い幹につかまりながら、譯もなく大きな涙をポロ〳〵とこぼしたのである。

（三）

「何と云ふ事だ！」
彼の時の樣子を思ひ出すと、私の顏は眞赤になつた。何故私は、あれ程の耻辱を受けなければならなかつたか？　私が彼等に對して云つた事が惡かつたか？　私は確かに惡い事は云はなかつたと云ふより外はない。私は同情して居たのだ。ほんとうに淋しいんだらうにと思つて居た許りだ。
私には一寸も嘘の心持はなかつた。何處から何處までも正直な氣持で居たのではないか？
私にはどうしても彼等の心持が解せない。其故彼の罵りに對しての憤りはより強く深くなる許りなのであつた。

私は、お前方から指一本指される身ぢやあない。

人が親切に云つてやつたのに石までぶつけて、それで濟む事なのか？

私は眞個に彼の子供達が厭であつた。そして、又いつもの樣に彼の時の事がじき村の噂に上つて小つぽけな可笑しい自分が、泥だらけの百姓共の嘲笑の種に引つぱり廻されるのかと思ふと、一思ひに、彼の事も彼の子供達も一まとめにして、押し潰して仕舞ひ度い程の心持がしたのである。御飯も食べられない程私はくさ〳〵した。

けれ共、夕方近くなつて、小作男の仁太と云ふのが來て二時間近くも話して行つた事は、私に或る考への緒口を與へた。

彼は、私共の持畑——二里程先の村にある——に働いて居る貧しい小作男で、其の男が來ればきつと願ひ事を持つて居ない事はないと云はれて居る程、困つて居るのである。私は彼の衰えた體をながめ、もう何も彼も運だとあきらめて居るより外仕樣のない樣な話振りを聞くと、フト甚助の事を思ひ出した。

甚助は矢張り此の仁太の樣な小作男だ。

あゝ、ほんとに彼等は此那氣の毒な小作男の子供達であつたのだ！　此の思ひ付きは段々私の心から種々の憤りやなにかを持ち去つて仕舞つた。

けれ共、後にはよく考へなければならない、悲しい思ひが深く根差したのである。

彼の男の子等は、今まで、其の兩親は誰の爲に働いて居るのを見て居たのか？

彼等の收穫を待ちかねて、何の思ひ遣りも、用捨もなく米の俵を運び去つて仕舞ふのは如何なる人種

であるのか？

實世間の事々を少しづゝ見聞して、大人の生活の分りかけて來た彼等男の子等の胸は、兩親に對する同情と、常に自分等よりもずつと餘計な衣類や食物を持つて居て、異つた樣子をし、異つた言葉で話す者共へ對しての憎惡と猜疑で滿ち／＼て居たのであらう。

俺らが大事の兩親に辛い思ひをさせ涙をこぼさせるのは、あの何時でも其耳觸りの好い聲を出して、スベ／＼した着物を着て、多勢の者にチヤホヤ云はれて居る者共ではないか？

親切らしい言葉の裏には伏兵のある事を、いつとはなく半分直覺的に注入され、「町の人あ油斷がなんねえぞ」と云はれ／＼して居る彼等であらうもの、いきなり私が現はれて、優しい言葉を掛けたからとて私を信じ得る筈はない。

彼等の頭には先づ第一に僻みが閃いた。

「又上手え事云つてけつかる！」

で、一時も早くこの小づらの憎い侵入者を驅逐するために

「おめえの世話にはなんねえぞ――ッ！」

と叫んだのであつた。

彼等はもう、所謂親切は單に親切でないと云ふ事を知つて居る。

貧乏はどれ程辛いかを知り、其の兩親へ對して生々しい同情し一かたまりになつて敵に當らうとする一方の反抗心によつて强められた、切なる同情を感じて居るのである。

朧氣ながら、眞の生活に觸れ樣として居る彼等に比して、私の心は何と云ふ單純な事で有らう！　何と云ふ臆病に、贅澤にふくれ上つて居る事であつたらう！

私は間違つて居たのだ。彼等總ての貧しい人々の群に對して、自分は誤つて居た。

私は親切ではあつた。けれども幾分の自尊と彼等に對する侮蔑とを持つて居たのである。

そして、自分自身が彼等から離れ、遠のいた者であるのを思へば思ふほど一種の安心と誇り――極く極く小さな氣のつかない程のものではあつたが――を感じて居たと云ふ事を僞れようか？

自分を彼等よりは、立派だと思つた事は、たゞの一度もなかつたか？

勿論、私は意識しながら傲慢な行爲をする程愚な心事を持つて居るとは思はないけれども、長い間の習慣の樣になつて、理由のない卑下や丁寧を何でもなく見て居たと云ふ事は恐ろしいものだ。

私共と彼等とは、生きるために作られた人間であると云ふ事に何の差が有らう？

まして、我々が幾分なりとも、物質上の苦痛のない生活をなし得る、痛ましい基となつて、彼等は貧しく醜く生きて居るのを思へば如何うして侮る事が出來よう！

どうして彼等の疲れた眼差しに高ぶつた瞥見を報い得よう！

私共は、彼等の正直な誠意ある同情者であらねばならなかつたのである。

世の中は不平等である。天才が現れゝば、より多くの白痴が生れなければならない。豐饒な一群を作らうには、より多くの群が、饑餓の境に漂つて生き死にをしなければならない事は確かである。

世が不平等であるからこそ――富者と貧者は合する事の出來ない平行線であるからこそ、私共は彼等

の同情者であらなければならない。

金持が出來る一方では氣の毒な貧乏人が出るのは、宇宙の力である。どれ程富み榮えてゐる者も、貧しい者に對して、偉大であるべき何の權利も持たないのである。

斯樣にして、私は私自身に誓つた。

私は思ひ返した。

自分と彼等との間の、彼の厭はしい溝は速く掩ひ埋めて、美くしい花園をきつと榮えさせて見せる！

（四）

私は、自分の生活の改革が、非常に必要であるのを感じた。そして、種々な思ひに滿たされながら、自分の今日までの境遇を顧みたのである。

私共の先代は、此のK村の開拓者であつた。首都から百里以上も隔り、山々に取り圍まれた小村は、同じ福島縣に屬して居る村落の中でも貧しい部に入つて居る。

明治初年に、私共の祖父が自分の半生を捧げて、開墾した此の新開地は、諸國からの移住民で、一村を作られたのである。南の者も、北の者も新らしく開けた土地と云ふ名に誘惑されて、幸福を夢想しながら、故國を去つて集つて來た。けれ共、此處でも哀れな彼等は、思ふ樣な成功が出來ない許りか、前よりも、ひどい苦勞をしなければならなくなつても、其の時はもう年も取り、他所に移る勇氣も失せて仕方なし町の小作の一生を終るのである。其故彼等は昔も今も相變らず貧しい。

そればかりか近頃では、小一里離れて居るK町が、岩越線の分岐點となつてから、めつきり總ての有

樣が異つて來たので、此の村も少なからず影響を蒙つた。そして、段々と農民の心に滲み込んで來る、都會風の鋭い利害關係の念と彼等が子供の時分から持つて居る種々の性癖が混合して、毎日の生活がより遽しく、滯りがちになつて來たのである。

村の狀態は決して工合が好いとは云へなかつた。長い間保つて來た狀態から、次の新らしい狀態に移らうとする境の不調和が、全體を非常に貧しく落付かなくして居るのである。

けれ共祖父はもう十七八年前に亡くなつて、丁度移住者もそろ〳〵村に着いて來、生活が少しつゝ、樂になつた時の樣子ほか見て居ない。

彼は、大體に滿足して、村の高味に家を建て、自分等夫婦は其處に住んで、田地の世話を燒いたり、好きな詩を作つたりして世を終つた。

それで、後に殘つた祖母も、故人の志を守つて亡夫の遺した家に住み、田地を監視し、變遷する世から遠ざかつて暮して居るのである。

一年中東京に居る私は、夏になるとK村の祖母の家に行くのを習慣にして居た。そして、二月ほどの間東京では想像もつかない樣な生活をして居るのである。

私は村中の殆ど總ての者に知られて居る。東京のお孃樣が來なすつたと云つて、野菜だの果物だのを持つて來る者に對して、土產物を一つ一つ配つてやらなければならない。朝から小作男の愚痴を聞き、年貢米を負けて遣る相談にのる。そして、彼れ此れ云ふのが面倒なので、さつさと祖母にすゝめて許してやると、大變慈悲深い有難い者の樣に私共を賞めたてる。お世辭を云ふ。

私は皆にちやほやされながら、朝夕二度の畑廻りをしたり、池の慈姑を掘つたり、持山を一日遊び廻つたり、まるで地主の馬鹿なお孫さんの生活をして居た。誰からも、干渉がましい事一つ云はれず、存分に擴がつて居たのである。

それでも私は、甘さうにされて居た事等を思ふのは、今の私にとつては眞に耻かしい。我ながら厭になる。

何としてもどうにかして、村人の少しなりとも利益(たゝめ)になる自分にしなければならない！

それで、私は心の裡に種々の計畫を立てた。そして、土地の開墾等と云ふ事は――勿論其處が人間の生活すべき所として適當であり又、榮える希望もある所ならばよいけれ共――冬が長く、地質も惡い様な所へ、貧しい一群を作つたとしても、矢張り非常に尊い事なので有らうか等と云ふ様な疑問がしきりに起つたのである。

開拓者自身は、或程度まで自分の希望を滿たし、喜ばされ尚ほ其の村の歷史上の人物として稱揚されるけれども、はかない移住民として、彼の事業の最後の最も必要な條件を充たしてくれた、澤山の貧しい者共は、どの樣な報いを得て居るか？

開墾者にとつては、居なければならなかつた彼等でありながら、廿年近い今日まで彼等は只同じ樣に貧乏な丈である。年中貧しく忘られて死んで行く丈である。

私は、祖父の時代からの澤山の貧しい者に對して、どうしても何かしなければならない。今日まで、すべき事は澤山あつたのに、臆病な自分が見ない振りをして來たのだと云ふような氣の濟まなさが、農

民に對する自分の心を、非常に謙讓なものにしたのである。

甚助の子が、私に惡戯をした次の日であつた。平常より早く目を覺まし、畑地を一廻りして來た私はほのぼのと天地を包んで居る薔薇色の靄や、裸の足の上に朝露をはね上げて、生々として居る雜草の肌觸り、作物や樹木の朝明けの薫り等に、どの位慰められた事であらう！

非常に愉快な心持になつて、女中に笑はれながら、大爐に燃火をしたり、入りもしない野菜を拔いて來たりして居ると、東側の土間に一人の女が訪ねて來た。それは、甚助の女房であつた。

私に來て吳れと云ふので、出て見ると働き着を着て大變にボサ〳〵な髮をした彼女が裸足で立つて居る。

女は、私の顏を見ると、

「お早うござりやす。昨日は、はあ俺ら家の餓鬼共が飛んでもねえ御無禮を致しやしたそうでなりえ。おわびに出やした。これ！ こけえ出て詫び云ふもんだぞ――」

と、云ひながら手を後に延ばすと、廣い背のかげから、思ひ掛けず男の子が引き出された。

彼は默つて下を向いて居る。赤面もせず、ウジ〳〵もせず、ちつとも母親にたよる樣な樣子をしないでつくねんと立つて居る。

女は、子供の方へ複雜な流し目をくれながら、しきりに繰返し〳〵勘辨しとくれとか、自分等の子達は畜生同樣なのだから、どうぞこらしめにうんと擲つてやつてくれ等とまで云つた。

けれ共私は、人に餘りあやまられたりする事は大嫌いである。自分の前にすべてを投げ出した樣にし

ていろ／＼云はれると仕舞ひには、自分が耻かしくなつて來る。何だか、如何にも自分が暴君じみて居る様に思はれて、いつも母の云ふ「いくぢなしのお前」に成り終ふせて仕舞ふ。

今も、その癖が出たとともに、もうどの子が何をしたとか、憎らしいとか云ふ事は出來る丈忘れ様とつとめ、又實際氣にもならなくなつて居るので、そんなにされる事は餘計いやであつた。

で、私が口を酸くして叱るのをやめろと云つても、彼女の方ではそれをあてこすりだと思つて居ると見えて、段々子供にひどくする。

「食うてばかりけつかつてからに、碌なことー仕出來さねぇ奴だたら。これ！ わびしな。勘辨してやつとよ。何とか云ひなてば。」

と、子供の腕を掴んで、小突いたり何かしても、子供の方でも亦强情なだんまりを守つて居る。

私には、甚助の女房がどんな心持で居るかよく分つた。分つた丈に、其那謂はゞ芝居を見て居るのは辛い。

私の云ふ事等には耳もかさずに、怒鳴つて居た彼女は、

「これ！ どうしたんだ？ う？ おわびしねぇつもりなんけ？」

と云ふと、いきなり大きな掌で、頸骨が折れたらうと思ふ程急に子供の首を突き曲げた。

そして、

「どうぞ御免なして下さりやし」

と云ふや否や、

「行つとれ！」
と叫んで突飛ばした。
私は息がつまる位喫驚して仕舞つた。けれ共、當の母親は滿足らしく笑ひながら小腰をかゞめて「お暇潰れでござりやした。」と畑へ出て行つた。
下女は彼女の後姿を見送りながら「甚助さん家のおつかあは利口もんでやすなりえ、ちやんと先々のこと―考げえてる。」と嘲笑つた。

（五）

村の四辻に多勢人立ちがして居る。
子供等や、鍬を擔いだ男女、馬を引いた他所村の者共まで、賤しい笑ひを漂べて口々に罵り騒いで居る眞中には、兩手に魚を一切づゝ握つた男が、ニヤ〳〵しながら足を内輪にして立つて居るのである。
肩の所に大きな鍵裂のある女物の着物を着て、細紐で止めた丈でズル〳〵と下つた合はせ目からは、細い脛が覗いて居る。
延びたなりで屑糸の様な髪には、木の葉や藁切れがブラ下り、下瞼に半圓の袋が下つて、青白い大きな目玉がこぼれさうに突出て居る。紫色の唇を押しあげて、黄色い縞のある反つ齒が見え、鼻の兩側の溝には腫物が出來て、其處ら一體に赤く地腫れさせて居る。
身動きする毎に、魚の臭ひや何やら彼やらがごつたになつて、胸が惡くなる様な臭氣を四邊にまき散らす。彼は「善馬鹿」と云ふ氣違ひなのである。もう彼れ此れ五六年前に、氣が變になつてから此の村

にある家へはより付かずに、村中を廻つて歩いて、行く先き〲で筵を一枚貰つては其の上に寐て暮して居るのである。

どうかして氣に入つた所があると、幾日でも追ひ立てられるまでは、木蔭等に呆やり坐つて、犬の蚤を取つてやつたり、自分が坐つたまゝ手の屆く丈草を一本のこさず拔いたりして居る。

犬が無上に好きで、あばれる事などはちつともないので、村の者共は彼の姿を見かけさへすると捕へて、罪なわるさをするのであつた。

其の時も彼は何處かへ四日も行つて漸と歸つて來た所なのである。彼は大變疲れた樣な氣がして居た。すぐ其處にころがりたい樣な心持で此處まで來ると、友達の犬に見つかつて、早速顏中を舐め廻された。それを彼は如何にも嬉しさうにして、だまつて犬の顏を見て居る所へ、

「善馬鹿！　けえつたんかあ。」

と叫びながら五六人の子供等が馳けて來た。そして、忽ち彼の體は暇で惡戯好きの者共に圍まれて仕舞つたのである。

皆は各自（てんで）に勝手な惡口や戯言を彼にあびせながら、手に持つて居る魚を突ッついたり、犬をけしかけたりした。

「う！　穢（うだ）て。あげえに犬の舐めてる魚なあ又善馬鹿が食うんだぞ。ペッ！　ペッ！　狂犬病さおつかかつたらどうすつぺ。」

「ひとー馬鹿（こけ）にしてけつかる。もうとうに狂犬病さかゝつてつとよ！　此上え掛るにや命が二つ入用ら

め。」

「わはゝゝゝ。ほんによ。うめえや。」

「おつとゝゝゝ。」

人々は急に笑ひ出した。

下等な笑聲の渦巻きの下を這ふ様にして、善馬鹿の低い甘つたるい、

「へゝゝゝ！」

と云ふ聲が飛びはなれて不快に響き渡つた。

「厭んな事してけつかる。」

「そんだら行げよ。おめえに居て貰はんとえゝとよ。フゝゝゝ」

「や！鮭が落ちんぞ。馬鹿！」

「はゝゝゝゝ」

集つて居る者共は、下等な好奇心に動かされて、互に突き合つたり打ち合つたりして喚めきながら、暫くの間大きくなつたり、小さくなつたりして居た。

けれ共、段々人數も減つて來ると、前よりもつといやな顔をした善馬鹿が、握つた鮭を落しさうにしてよろけながら、道傍の樫の大木の陰まで來ると、赤ん坊の様にドサンと仰向けに寐た。そして、大口を開いて、鼻をグーグー鳴らしながら寐込んで仕舞つた。

犬がそろ／＼と首をのばして、彼の手に持たせたまゝ片端しから鮭を食べ始めると、子供等は彼のし

た下等な身振りの眞似をしたりしながら、しきりに彼を起しにかゝつたのである。
一人の子は「狐のしつぽ」で鼻の穴を擽つた。
蹴らうが怒鳴らうが、ゆさりともしないので、圖に乘つた子供達は善馬鹿を裸體に仕始めた。彼等は掛け聲をかけながら、漸々肌脫ぎにさせた時、何時の間にか其處に居つて、樣子を見て居た若い者が、いきなり、
「そげぇなことーするでねぇぞ。天道樣あ罰ちいお下しなさんぞ。」
と眞面目に口を出した。
皆は喫驚して、惡戲の手を止めて男の顏を見て居た、すると、中でも一番頭株らしい十四五の子は、口を尖らして、理窟をこね出した。
「わりやあ朝つぱらから、おつかあに怒鳴られてけつかる癖にして、俺らの世話燒けるんけ? う?」
「おめぇあの人知つてるんけ?」
一人の子がヒソ〳〵ときくと、急にこの子は得意さうな顏になつて、一層冷笑的な口吻で叫んだ。
「うん、知つてつとも!」
「水車屋の新さんてだなあおめぇは。そんで北海道から、食へなくなつて、おつかあんげへ戾つて來たんだつて、こんねぇだおめぇのおつかあがいつてたぞ。いくじのねぇ奴だて……」
皆は聲をそろへて笑つた。
けれ共、新さんは別に顏色も變へずに

「考へてからするもんだぞ。」
と云ひながら行つて仕舞つた。
それから一しきり、子供達は腹の癒へる程妙な新さんを罵つたけれ共、もう一旦やめた悪戯は又やる氣にもなれず、肌ぬぎにした善馬鹿を、各自が、
「俺らの知つたこつちやねーえぞ！」
と叫びながら一足づゝ蹴りつけて、ちりぢりバラバラに走けて行つて仕舞つた。

（六）

今年六十八になると自分では云つて居る善馬鹿のおふくろは、孫と一緒に或る農家の納屋の様な所を借りて住んで居る。
家賃を拂はないで濟むかはり、まるで豚小屋同然な所で、年中蚤や南京蟲の巣になつて居る。
それでもまだあの狒々婆さま——彼女は顔中皺だらけの上に白髪を振りかぶつて、胸から腰が曲つて居るので何かする様子がまるで狒々なので皆が彼女の通稱にして居る——にはよすぎると云ふ程、善馬鹿の一族は、どれもこれも人間らしいのは居なかつた。
善馬鹿が、まだ彼那にならないで一人前の百姓で働いて居た時分に出來た、たつた獨りの男の子は、これも亦ほんとうの白痴である。
女房が愛想をつかして、何處かへ逃げ出して仕舞つてからは、善馬鹿と其の子を兩手に抱えて、おふくろばかりが辛い目を見て居るのである。

もう十一にもなりながら、其の子は何の言葉も知らないし、體も育たない。五つ六つの子位ほかない胴の上に、人なみの二倍もある樣な開いた頭がのつて居るので、細い頸はその重もみで年中フラ〳〵と落付いた事がない。そして、年中豆腐ばつかり食べて、他の物はどれ程美味しいものであらうが見向きもしなかつた。

彼は、自分の唯一の食料を

「たふ」

と云ふ事丈を知つて居るので、村の者達は皆何かの祟りに違ひないと云つて居る。

何でも餘程前の事だけれ共、町へ大變御利益のある女の祈禱者が來た事があつた。其の時、彿々婆も白痴の孫を連れて行つて見て貰ふとその女が云ふには、幾十代か前の祖先が馬の皮剝ぎを商賣にして居た事があつて、その剝がれた馬の怨靈の仕業なのだから、十圓出せば祈り伏せて遣るとの事だつたさうだけれ共、婆に金の出せ樣筈はない。それで、拂ひ落してもらふ事は出來ず、又もうそれつきり醫者にもかけず、自分でさへ出來る丈は忘れて居るしがくをして居た。

此の樣な有樣で、彿々婆はいやでも應でも食ふ丈けの事はしなければならないので、他家の手傳ひや洗濯などをして廻つて居る。そして、三度の食事は皆どこかですませて、自分の家へは只眠る丈に歸るので、村中からいやしめられて、何ぞと云つては惡い例に許り引き出されて居た。

可哀さうがられるために、自分の年も二つ三つは多く云つて居るとさへ噂されて居るのである。

私は、只さへ貧乏な村人のおかげで、漸々どうやら露命をつないで居る婆が氣の毒であつた。境遇上

然うでもしなければ外に生きようが無いのだから、只馬鹿にしたり酷く云つたりする事は出來ない。もうよぼ〳〵になつて先が見えて居るのに、朝から晩まで他人の家を經廻つて、氣がねな飯を食はなければならないのを思ふと可哀さうになる。

で、私は出來る丈婆に用を云ひつけて、食事などもさせ、ちよい〳〵古い着物や何かをやつた。彼女は私に對して好くは思つて居るらしいけれ共、ひどく貧乏で、恥も外聞もない慾張りな樣子が少なからず私には氣持惡かつた。

食べる物でも、膳にのせてやつた物ばかりでなく、殘り物があつたらどうせ腐るのだから呉れろと、ぐん〳〵持つて行く。そんな時に、若しやらない等と云はうものなら、もうすつかり不機嫌になつてぷン〳〵ろくに挨拶もしないで歸つて仕舞ふのである。新らしい着物でも着て居ると、一つ一つ引つぱつて見ないでは置かない。

そんな事がほんとにたまらなく厭であつたけれ共、私は、貧しい者の裡に入つて行かうとしながら、品振つて居る自分を叱り叱りして漸々馴れるまでに、堪へたのである。

善馬鹿のおふくろが、今までより屢々出入りする樣になると共に、段々村中の貧しい中でも貧しい者共に接する機會が多く與へられる樣になつた。

親父は酒飲みで、後妻は酌婦上りの女で、娘は三年前から肺病で、もう到底助かる見込みはないと云ふ樣な桶屋の家族。

中氣で腰の立たない男と聾の夫婦。

其等の、絶えず愚痴をこぼし、みじめに暗い者の上に私はそろ〳〵と自分の微かな同情を注ぎ始めたのである。

もとより私のする事は實に小さい事許りである。私が力一杯振りしぼつて仕た事であつても、世の中の事に混れば、如何うなつたか分らなくなる樣なものであるのは、自分でも知つて居る。けれ共、私は愉快であつた。

自分は彼等の事を思つて居るのだと云ふ事丈でも、私はかなりの快さを感じて居た程である。毎日毎日を私は、新らしく見出した仕事に沒頭して、滿足しながら過して居たのである。けれ共、たつた一つ私にはほんとに辛い事があつた。それは、善馬鹿の子の顏を見る事である。誰れも遊び相手もなく、道傍の木になどよりかゝりながらしよんぼりと佇んで居る樣子を見ると、ほんとに私は苦しめられた。

何とか云つてやりたい、どうにかしてやりたい。私は眞個にさう思ふ。が、彼の瘦せた體や、妙に陰慘な表情をした醜い顏を見ると、何もしないうちにもう、堪らない妙な心持になつて來る。

彼の眼付きはすつかり私を恐れさせる。私は、彼の傍を落付いて通る事さへ出來ないのであつた。何だか今にも飛付いて頸を締められさうな氣がする。そして、コソ〳〵と出來る丈け彼の目から避けて通り過ぎながら、心の裡には自分が何か彼にしなければならないと云ふ感情と、此上ない氣味惡さが混亂した、大嵐が吹いて居るのであつた。

萬一どんなか方法によつて此の白痴だと思はれて居る子の裡から、何かの輝きが見出される筈であるのを、傍の者が放擲して仕舞つた許りで、一生闇の世界で終つて仕舞ふ様な事があれば、眞個に恐ろしい事である。

今まで死なない所を見れば、何處かに生きる力は持つて居るのだ。

十一年保つて居た命の力は大きいものである。まして此處らの、ほんとに人間を生長させるには不適當な樣な總ての狀態にある所では殊に然うである。

空想では有らうけれ共、私は彼の靈と通つて居る何かゝ必ず一つはあるだらうと云ふ事を思ひ、それに對しての彼は聰明なのぢやあないかなどゝ思つた。

彼の親父は人間の仲間では氣違ひである。けれども犬と彼とはどれ程仲よく互に心を感じ合つて居るか！

白痴の心は私に謎であつた。分らなければ分らない程、私は何か有りさう、どうにかなりさうに思はずには居られなかつたのである。

（七）

まあ何と云ふ素晴らしい。

朝だ！

はてしない大空の紺碧の擴がり、山々の柔かな銀靑色の連り。

霧が彼方の耕地の末でオパール色に輝いて居る。

あらゆる木々の葉が笑ひさゞめき歌つて居る上を、愛嬌者の露が何と云ふ美くしさで飾つて居る事だらう。御覧！　お前の大好きなお天道様は、どんなに見事に光り輝いて被居つしやるか！
眞個に立派なお姿で被居つしやる。

私は、昨日も今日も同じに、圓く燦めき渡つて動いて被居つしやるのを見ると、堪らなく嬉しくなつて來る。

「お早うございます御天道様！

いつも御機嫌が好さゝうで被居つしやいますね。

私も御かげさまで、斯うして達者で御目に掛れるのは有難う存じます。

どうぞ今日も亦よろしく御願ひ致します。

私の立派なお天道様！」

風は、木々の葉の露を拂ひ落し、咽ぶ様なすが〳〵しい薫りを孕んで、むかふの空から吹いて來る。

森の木々には小鳥が囀り、家禽の朝の歌は家々の廣場から響いて來る。

道傍の草叢の中には、蛇苺が赤く實り、野薔薇の小さい花が傍の灌木の茂みに差しかゝつて、小蟲が露に濡れながら這つて居る。

桑の若葉の葉觸れの音。

勇ましく飛び立つ野鳥の群。

總ては目醒め動いて居る。

何と云ふ好い朝だらう！

私は、喜びに心を躍らせながら歩いて行つた。畑地を越え、草道を通り、暫くすると私は村に只一つの小學校の傍に出た。

其處ではもう授業が開始されて居て、狹まい粗末な教室の中には、小さく色の黒い子供が僅かづゝつまつて居るのが、外から見える。

私は誰一人居ない庭の芝草の上に座りながら自分の小學校時代を思ひ出した。種々の思ひ出が、澤山な友達の面影や教師の樣子などをはつきりと思ひ浮ばせたのにつれて、丁度四年位の時分、此處へ來るとよく此の學校のオルガンを借りた事を思ひ出した。

彼處いらの部屋らしかつたと思ひながら、一人の子供が立つたきり答に窮して呆やり黒板を見て居る教室の中を眺めて居た。

すると、段々記憶が蘇つて來るにつれて、最初に自分がオルガンを借りた時の樣子が、あり〳〵と心に歸つて來たのである。

私はその時、白い透き通るリボンで鉢卷きの樣にし、うす綠色の着物を着て居た。

外國に居た父から送つて呉れた譜本を持つて、小學校に行つた。そして、たつた獨り居たまだ若い先生にオルガンを貸して下さいと頼んだのである。

今でも思ひ出す顏の丸い、目の小さい人の好ささうなまだ廿三四位だつた教師は、私の樣子をジロジロ見下しながら、きつぱりと借せませんと云つた。

誰か一人に貸すと、他の者にたのまれた時斷はれなくなる。然うすると一時間も立たない内にオルガン一臺位滅茶々々にされて仕舞ふのだからと、種々理由を說明して拒絕したけれ共私はきかなかつた。

私は默つて立つて居た。

先生もだまつて立つて居た。

そうと暫くの間立つて居た先生はやがて少し腹を立てた樣な聲で

「一體貴女は何處の人なんです？」

と云つた。

「私？　岸田の者だわ……………」

たつた十ばかりだつた私はその時何と思つたのだらう！

私はどの位落付いて自信あるらしく云つた事だらう！　名を聞けばきつと貸すと云ふ事を明かに思つて、隨分とのし掛つた心持で微笑さへしたではないか？

「岸田の者だわ……………」

「あ！　然うですか。おやあ介意ひません。さあお上りなさい。」

と、導かれてどう云ふ滿足でもつてその鍵盤に指を置いたか！

今になつて私はその正直だつた若い敎師を非常に氣の毒に思ふと同時に、私自身の態度や心持を堪らなく耻かしくすまなく感じない譯には行かない。

小さい物も分らない私にまで、自分の理由のある出言を撤回した彼の敎師が、あの若さでありながら

平常からどの位、自己を枉げる事に馴らされて居たかと思ふと、ほんとに堪らない。

若し今の私がその教師だつたら？……

私はどうしたつてきゝはしない。ましてそんな人を呑んで掛る樣な態度を見たら、どの位怒るか分らない。却て叱つて叱つて、叱りとばして追ひ歸すだらうのに――。

私は涙がこぼれさうになつた。

自分は缺點だらけな人間だけれ共、そんな耻かしい思ひ出にせめられるのは情ない。

重く沈んだ心持になつて、彼方の窓を眺めて居ると、子供達の頭の波をのり越えて、一つの顏が自分を見て居るのに氣が付いた。

其の顏は、殆ど四角に近い程顎骨が突出て、赤くムク〳〵と肥つて居る。

非常に無邪氣な感じを與へる峰の太い鼻。睫毛をすつかり拔いた樣な瞼がピチ〳〵として居る眼は、ふくれ上つた眼蓋と盛り上つた頰に挾まれて、さも窮屈さうに並んで居る。

私は、正直さうなどちらかと云へば愚直だと云へる程の顏をまぢ〳〵眺めて居ると、益々あの自分の我儘に己を枉げてくれた教師と非常に似て居る樣に思つて來た。

で、私は立ち上つた。そして、微笑を浮べながら丁寧なお辭儀をした。

私は滿足した。けれ共、若者は非常に間誤付いたらしかつた。妙な顏をして、大いそぎで窓枠の傍から離れて、彼方に見えなくなつて仕舞つたのである。

彼は私がふざけたのだと思つたかもしれない。

けれ共、これで、今も尚何處かの空の下で今此の同じ日の光りをあびながら生きて居る彼の日の若い教師に對して、自分はしなければならなかつたものを、漸く果たした樣な氣がした。

私は又幾分か心が安らかになつた。そして元來た道を戻つて、小川の所へ行つて見た。何時も誰かゞ魚を掬つて居る其處に今日は甚助の子供達が來て居た。

子供達は熱心にして居たけれ共、流れの工合が惡かつたと見えて、網に掛るものは塵ばつかりである。

暫くだまつて居た私はフト

「ちつともとれないのね」

と云つた。

其の時、始めて私が居るのに氣が付いたらしい子供達は皆ニヤ〳〵しながら、顏を見合つて居たが、中の一人が、可笑しい訛のある調子で

「ちつともとれねえのね」

と口眞似をした。

此の惡戯はすつかり私を喜ばせた。

彼等がそんな事をする位私に、馴染んで來たのかと思ふと嬉しかつたので、私はしきりにほめた。

子供達は、私の笑ふ顏を薄笑ひして見て居たが、急に持つて來た鍋や網をとりあげると、何かしめし合はせて調子を合はせると一時に

「ほいと！　ほいと！　ほいとほーつー！」

と叫んだ。

そして崩れる様に笑ふと、岸の粘土についた馬の足跡にすべり込みながら、サッサと馳けて行つて仕舞つたのである。

私は、何が何だか分らなかつたけれ共、呆やり川面をながめながら、非常に生々と快く響いた彼等の合唱を心の裡で繰返した。

「ほいと！　ほいと！　ほいとほーつ！」

私は小聲で口誦みながら家に歸つた。

そして、誰も居ない自分の書齋に坐ると、彼の子等の仕た様に大きな口をあけて叫んで見た。

「ほいと！　ほいと！　ほいとほーつ！」

所へ、祖母が珍らしく妙な不機嫌さうな顔をして入つて來て云つた。

「お前は一體何を云つて居るの？　そんな大きな年をして馬鹿をおしでない。」

私はちつとも知らなかつた。「ほいと」と云ふのは「乞食」を指す方言であつたのだ。

（八）

此の村の農民共は、子供の教育などゝ云ふ事を少許も考へて居ない。子供等は生み落されたまゝ、自然に大きくなつて男になり女になりして行くのである。

勿論彼等だつて子供は可愛い。けれ共、すべて單純な感情に支配されて居る彼等は、子供を育てるにも、可愛いとなると甜殺しかねない程眞暗になつて可愛がる。

が、若し何か氣に入らない事や、憎い事を仕でもしやうものなら、彼等はほんとに可愛さあまつて憎さが百倍になつて仕舞ふ。擲る蹴る罵る位はあたりまへで、ひどくなると傷まで負はせて平氣である。
そんな時は、子供だなど丶云ふ氣持はなく只憎らしい、只腹が立つ許りなのである。
其れ故、子供等は餘程健康な生れ附きでないと、大抵は十にならない内に死ぬかどうかして仕舞ふ。
どんな木の實でも草の實でも、食べたい放題食べ、炎天で裸身になつて居様と、冬の最中に水をあびやうと、嚔一つしない人間が育つて行くのである。
病氣になれば、醫者にかけるより先づお禁厭ひをするので、腐つた水をのまされたり、何だか分らない丸藥を呑まされたりして、親達の迷信の人身御供に上るものは決して少なくない。
體は丈夫に育つても、親達がその日暮しに迫られて居るので、子供を學校と云ふ暇つぶしな所へはなか〳〵やられない。

女の子は早くから母親の代りをして家の事をとりしきつてしなければならず、男の子は弟達の世話や畑の小仕事に使はれる。

小作の親達は、子供等が小作の境界から脱けられる丈の力をつけてやれないので、小作の子は小作で終つて仕舞ふのが、定り(きま)の樣になつ居るのである。うざ〳〵居る子供等は、段々衰へて來る親達に代つて、地主共の食膳を肥すべく育つて居る樣なものである。

その樣な樣子なので、少し異樣な性格を持つた子は墮ちる所へさつさと墮ちて、少し大きくなれば何

處つか好きな所へ飛び出して仕舞ふ。

まして低能や白痴などはまるで顧られない。村中の惡太郎の慰み物になつて居るより外ないのである。

其故善馬鹿とその子等も、村の者が笑ひのたねにこそすれ、心配してやる等と云ふ事は夢にも思はない。

善馬鹿の名もない、白痴の子は、豆腐を食べては子供等に馬の糞を押しつけられたり、髮が延びて居る所へ藁切れを結びつけられたりして居るより外ないのである。

段々日數が立つて、少しづゝ自分の願ひが叶ひさうになつて來るにつれて私は益々、白痴の子の事が氣になつてたまらなくなつた。

それで、私はどうにかして彼に近づかうと仕た。けれ共、それはなか／＼な仕事で、私の變に臆病な心持が、どうしても彼の傍に私の足を止めて置かせない。四五度遣りかけてはやめ／＼して到頭ある日の夕方、彼の傍に私は立ちどまつた。

大變な事でもする樣に、私の胸はドキ／＼した。私は、人が傍へよつても見向きもしない子供の顏を見ながら、何を如何云つて見ようと云ふ事を散々迷つた。

けれ共、どんな事を云つたら、子供の心を引く事が出來るか分らなかつたので、四苦八苦して漸々、

「どうして居るの？」

と云つた。

この一句が唇をはれない内に、私はもう自分のやりそこないに氣が付いた。どんな人でも、呆やりと、目にも心にも何にもたしかな物が寫つて居ない時、「どうして居るの?」と云はれたら恐らく、答へに窮するにきまつて居る。

私は困つた事をしたと思ひながら様子を見て居ると、彼は暫くたつてからのろ〳〵と、顏を私の方に向けた。そして、非常に突出した、瞬きをする事の少ない目玉を据えて、私を見て居る様な位置になつた。

私も彼を見て居た。私は眞個に注意して、覩て居たのである。

さうすると、段々彼の顏付きが凄くなつて、仕舞ひには、「彼の感じ」がそろ〳〵と私の顏に乘り移つて來た様な氣持がして來た。

もう、私は意地も我慢もなくなつた。そして、一散走りに家へ歸ると、力一杯顏を洗ひ、鏡を見つめて、漸々氣が休まつたのである。

最初の試みは、私の例の幻覺ですつかり失敗して仕舞つた。けれ共、それから二度目三度目になると少しづゝ彼に馴れて來た。

が、矢張りだまつたまゝ一緒に立つて居るか、何か云つて彼の注意力をためしたりして見るばかりで、一向進む事はない。

私は彼の圍りを、堂々廻りして居る様な工合であつた。

善馬鹿の子に對しては、全く何も出來なかつたけれども、他の事は少しづゝ好い方に向いて行つた。

足の裏の腫物のために惱んで居た百姓は、町の醫者に掛つて癒つた。

桶屋の娘へは、時々牛乳だの魚だのを持たせてやつた。

そして、ほんとに下らない事ではあるが、癒つた男が畑に出て居るのを見たり、甚助の子供が、遣つた着物を着て居るのを見たりする事は、無上に嬉しかつた。歩き出しの子供が、面白さに夜眠る事も忘れて歩きたがる通りに、私も一人でも自分の何かしてやる事の出來る者が殖えれば殖える程、元氣が付いた。

又實際、どれ丈してやつたらそれで好いと云ふ見越しはつかない程、種々な物が乏しく足らぬ勝であつたのだ。

私は、自分の出來るだけの事を盡さうとした。

けれ共、私は「自分のもの」と云ふ一錢の金も一粒の米も持つて居ないので、誰に何を一つやらうにも一々祖母にたのんで出して貰はなければならない。

それが、私の仕樣とする事が多くなればなるほど屢々になり、隨つて段々、たのむのが苦痛になつて來る。

が、然しそれは仕方がなかつた。私はほんとに、無盡な財産がほしかつた。そして、この村中を驚くほど調つた、綺麗な者の集りにして、貧しい者は人間だと思はない樣な者共の前に、突きつけて遣つたらと思はない譯には行かなかつたのである。

種々の新らしい經驗が、私の心を喜ばせたり、驚ろかせたりして居る間に、なゆみない時の力は、せつせと眞夏のすべての様子を育て始めた。

日光は著しく熱くなり、往還にたまつた白い塵は、益々厚くなつて一吹き風が渡る毎に、灰色の渦卷きを起す。

麥燒きの煙が、青く活き〳〵した大空に立ちのぼり、輝やかしい焔の上を飛び交ふ麥束や、赤く火照つた幾つもの顏が、畑地の彼方此方に眺められた。

前の池には、水浴をする子供等の群が絕えず、力强い日光の漲り渡る水面からは、日燒けのした腕や足が激しい水音を立てゝ出入し、銳い叫び聲に混つてバシャバシャ水のはねる音が遠くまで響き渡る。

森林は綠深く、山並みは明るく、稻妻は農民共を喜ばせながら、每夕變化の多い雲間から、山の峯々を縫ふ。(稻妻の多いのは豐年のしるしだと彼等は云つて居る)。そして、家の四圍の耕地は美くしい盛りになるのである。

總ての作物は殆ど實つた。

私の書齋から見える丈の畑地にも、豆、玉蜀黍、胡麻、瓜その他が皆熟れて、蕎麥の花のまぶしい銀色の上に、流れて行く雲の影が照つたり曇つたりした。

食べられる様になつた杏、無花果などの果樹畑の傍から、ゆるい傾斜になつた南瓜の畑は、大きな葉かげに赤い大きな實が美くしく、馬鈴薯は、收穫時になつたのである。

二人の小作男は、俵と三本鍬と「もつこ」とを持つて、朝早くから集つた。

葉のしなび掛つた莖を拔き、その後を三本鍬で起して行く。新らしい土にしつ
背の低い、片目の男が、深く差し込んだ鍬をソーッと上の方へ持ちあげて引くと、
とりと包まれた大小の實が踊る樣に轉がり出す。
それにつれて、思ひがけず掘り出された、小さい蟲共は、滑稽な周章て方をして、男達の股引きに這
ひ上つたり、さかさになつて軟かい泥の中に、飛び上つたりした。
私も裸足になり裾をからげて、一生懸命に薯掘りを始めた。
割合に風の涼しい日だつたので、仕事は大變面白かつた。
泥の塊りを手の中で揉んでは、出て來る薯を一つ一つもつこの裡に投げて行くと、どうかした拍子に
恐ろしく妙な物を、手の裡にまるめ込んで仕舞つた。
私は思はず大聲をあげた。止められない力で、グニャッとしたものをまるめると、押し潰されてとび
出したドロ〳〵に滑らかな、腐つた薯が、手一杯について仕舞つたのである。
靑黃色い粘液から、胸の惡くなる樣な臭ひが立つて、たまらない心持になるので、私は大急ぎて、サ
ク〳〵な泥の中に兩手を突込んで、揉み落さうとした。
けれ共、前からの土がそのドロ〳〵ですつかりかたまり付いたので、なか〳〵こする位では落ち樣と
もしない。私は、もううんざりして、泣き出しさうにして居ると笑ひながら馳けつけて來た男が、木の
端を横にして、茶碗の葛湯をはがす樣に、掻き落してくれた。
「大丈夫でやすお孃樣。命に拘はる事たありやせん。」

私の周圍には、家の者だの傍の畑に居た小作共まで集まつて、笑つて居たのである。

ちよい〳〵した物が收穫時になつて來たので　私共は毎日割合に農民的な生活をした。

取れたものを小作に分けてやつたり、漬けたり乾したり、俵につめたりにせはしかつた。

けれ共、それにつれてほんとにいやな事も起つて來た。

ちつとも氣の付かないうちに、畑泥棒に入られる事である。

勿論此那事は、毎年の事である。決して珍らしい事ではないが、皆の氣持を惡くさせた。

盜まれて行く物は少許の物であるけれ共、自分等の盡した面倒だの愛情などを、取つて行かれるのが餘計腹立たしかつたのである。

で、一日掛りで、一番よく無くなる南瓜に一つ一つ、大きな大きな番號をつけた。

ふくれ返つた赤ら顔の上一杯に、「八」とか「十一」とか筆太に書かれて、ごろつとして居る姿は實に見物だつた。けれ共、皆無駄骨になつて、翌朝になれば、中でも大きい方のが無くなつて居たりした。

下女等は一番口惜しがつて、一寸でも畑地の中に烏鷺烏鷺して居る者には、誰彼れなしに、怒鳴りつけたり、小石をぶつけたりした。

正直な彼女は、坐る時は何時も畑地に向いて張番をして居たのである。

そんなだつたので、私などでさへ夜一寸氣晴らしに歩いて、うつかり畑に立ちどまつて居たりすると大きな聲で、

「だんだあ！ぶつぱたくぞーッ。」

と叱られた事さへあつた。
　所が或る非常に靄の濃い朝であつた。
　多分四時頃であつたらう。私は、例の通り何も知らずに寐込んで居ると、低いながら只事でない聲で
「早くお起き。よ！　ちよつとお起き！」
と云ふ祖母の聲に呼び醒された、
　私は喫驚して飛び起きた。まだよく目が開かないで、よろ〳〵しながら、
「何!?　え？　どうしたの？」
と、云ふ私を引つぱつて祖母は、雨戸に切つてある硝子窓の前に立たせた。
　始めの間は何にも見えなかつたが、段々目が確かになつて來ると、露で曇つた硝子越しに、一箇の人影が南瓜畑の中で動いて居るのが見える。
「オヤ！」
　額をピッタリ押しつけて見て居ると、どうも盜つて行くのを選んで居るらしく、體が延びたり曲つたりして居る。
「もう朝だと云ふのに。まあ何て大膽な！」
　暫くすると、體は延びきりになつて、小路の方へ出て來た。手には大きな丸い物を持つて居る。
　南瓜泥棒は、歩き出した。そして、もう少しで畑から出て仕舞ふ所へ、スタ〳〵ともう一つの人影が近寄つて行つた。それが祖母であるのは一目で分つた。

私は、ハッとした。一體何をどうし樣と云ふだらう？　私は大急ぎで寢間着を脫いだ。そして、出て行つて見ると、それは又どうした事だ！　私が何とも云へない心持になつて、立ちどまつてしまつたのは、決して無理ではない。

赤地に白縞のある西洋南瓜を前にころがして、うなだれて立つて居るのは、彼の甚助ぢやあないか！

私は、自分の眼が信じられなかつた。又信じたくなかつたけれ共、悲しい哉それは間違ひ樣もない甚助だ。

私は、おづ〳〵彼の顏を見た。そして、その平氣らしい樣子に一層喫驚したのである。

ほんとうに何でもなささうに彼は只立つて居る。只頭を下げて居る丈なのである。

默つて、祖母の怒つた顏を馬鹿にした樣に上目で見て居る。

私は恐ろしい心持がした。彼はさうやつて立つて居る。が、私共は此れから一體どうし樣と云ふのだらう？

祖母も私も彼に何か云はうとして居る事丈けは確かだと思つた。

しかも、さも何でもその權利を持つて居る樣に、又さも共れを振り廻して見たさうにして立つて居る自分等に氣が付いた。

私共はきつと何か云ふのだらう。何か惡事だと云はれて居る事をして居る者を見つけた者が、誰でもする通りの、妙に慰む樣にのろ〳〵と、叱つたり、おどしたりするのだらう。

けれ共、彼は私共に見られたく無い所を見つけられた。それ丈でも充分ではないか？　此上何を云ふ

に及ばう？　千人が千人云ひ古した言葉を、グドぐ〳〵と繰返して、荒立つた心持になつて見たところで互の心には何が遺るだらう。矢張り持ち古された感じが、さほどの効果もなく喰ひ入るばかりである。

私のする事は只一つだ。

何から先に云つて好いか分らない樣にして居る祖母を、傍に引きよせて、私は一生懸命にたのんだ。

「どうぞそのまんま御歸しなさいまし。その方が好い。」

「だつて……お前！」

「いゝえ！　それで好いんだから。さつと好いにきまつて居るんだから早くさうなさいまし。よ。早く！」

祖母は不平らしかつたけれ共私の賴みを聽いてくれた。

「それを持つてお歸り。けれ共こんな事は、もうこれつきりにおし。」

と云つた丈であつた。

甚助は、さもかうなる事をちやんと前から知つてでも居る樣に、何の感情も動かされないらしい顏をして、頭を一つ下げると、自分が買つたものゝ樣に、ゆつたりと彼の南瓜を抱えてまだ人通りのない往還へ出て行つて仕舞つたのである。

私は、悲しいとも腹が立つとも云へない心持になつて居た。

けれ共幾分の安心を持つて、

私にはたつた一つの南瓜で、泥棒呼はりをする事は出來ない。

と心に繰返りたのである。

今まで、私が甚助の家族に對して仕て居た事は、たかゞ古着を遣るか僅か許りの食物や金を遣つた位の事である。

（十）

ほんとに小さい事であり何でもない事である。

第三者から見れば、總ての事は、皆世間なみな、誰でも少しどうかした者の考へる事、爲る事で珍らしくも尊い事でもない。

私とても亦自分の僅かな施しから、大きな報ひを得やうとか、感謝を受けやうとかは、ちつとも思つては居ないのである。

けれ共、甚助のした事は私に輕い失望を感じさせないでは居なかつた。何だか情無かつた。

それでも、只一つの事が、私を慰め力づけてくれたのである。それは、私が始めて自分の思つて居た通りに自分を處置する事が出來たと云ふ事だ。

私は怒りつぽい。じきに腹を立てる性分である。其れ故此頃では、どうかして餘り怒りたくない、寛容な心持で居たいとどの位願つて居るか知れない。けれ共、自分の家に居て、弟達か何か自分の氣持を惡くする樣な事をすると、互の遠慮なさがつひ怒らせる。それを今度は殆ど怒りを感じないで濟んだと云ふ事は、ほんとに嬉しかつた。

で、私は今度の事を、すぐと明るい方に許り考へたのである。此れからは、畑泥棒などゝ云ふ者は、影も見せない樣になるだらうと云ふ事は、決して空想計りではなく思はれた。

けれ共、一日二日と經つまゝに、私の考へて居た事は、矢張り「實現し得ざる理想」――「お孃樣のお考へ」に過ぎなかつたと云ふ事が分つて來た。耕地には前にも增して屢々多量づゝの盜難が起る樣になつたのである。而かも大びらに、生々した玉蜀黍が踏み折られて居たり、今までは無事で居た枝豆まで根こそぎ無くなつて仕舞つたり、家から遠くあなたにある池からは、慈姑がすつかり盜まれてさへ居た。

この有樣に私はすつかり間誤付いて仕舞つた。どうかして、誰一人厭な目を見ないで、納りをつけて仕舞ひ度い。

けれ共、それにはどうしたら好いのかと云ふ事になれば何一つ私には分つて居ないのである。

まるで、眞暗な中で、何處にあるか分らないマッチと手燭を搜して居る樣で、世馴れない心は、すつかり氣味が惡くなり、おびえて仕舞つた。

その上、何か一つ盜られる度びに祖母が、さも辛さうに又皮肉に、

「今まではなかつたこつた。あゝほんとになかつた事だがねえ。」

と、つぶやくのを聞かなければならないのである。

私は、自分の仕た事は間違つて居なかつたと斷言出來る。そして又、一方では、彼等が斯うなる樣に心を誘はれたのは決して無理ではないと思ふ。

然うすれば、結局どつちが遣り樣が惡かつたのだらう？　私は心の命ずるまゝにしたのだ。彼等も亦必要上、しなければならない樣な境遇に居たのだ。兩方ながら「然うしなければならないから」したのではないか？　彼等もかうならずには居られなかつたのだらうし、私も亦あゝしなければ居られなかつた

のだ。或は、私の方がかうなる機會を與へた樣なものだから、間違つて居たかもしれないとも思つては見たけれ共、然うだと斷定する事は出來ない。彼等が間違つて居たのかと云ふ事にも「然うにきまつて居るぢやあないか」とそれ程の斷言は下されない。つまり私には分らないのである。

此の事は、私に種々な事を考へさせた。そして、世の中の多くの〳〵の事件が、所謂明快なる判斷力で、まるで何と云つて好いか素晴らしい無雜作さで、ドシ〳〵と片づいて居るのが恐ろしい樣になつた。けれ共、私は、この樣に種々の事が起り、考へずには居られなくなつて來るのは好い事だと、兎に角思つた。そして、起つて來る丈の事は正直に受け入れて、正直に考へ感じなければならないのだと思つたのである。

其の晩も私は獨りで自分の書齋に座つて、彼れから此れへと考へて居た。外は非常に月がよかつた。で、いつもの樣に灯（あかり）を消して、眞暗な處から世界の異つた樣に美くしく見える、耕地の樣子や山並みを眺めながら居たのである。

すると、暫く經つてから、芝生の彼方の方から何か輕い音が聞えて來た。どうも何かの足音らしく調子を取つて居る。そして、其の草葉のすれる樣な、押へつける樣な音は、段々近づいて來た。

近づくに隨つて到頭それは人間が忍び込んで來たのだと云ふ事が分つた。

けれ共私はすつかり安心した。何故なら、輝きの裡を泳ぐ樣にして、小さい子供が長い竿を抱へて、拔き足差し足で入つて來たのを見つけたからである。

彼の行かうとして居る方には、家中で一番美味しい杏が、鈴なりになつて居る。

これで總ては分つた。私は、今まで居た所から少し奥に引つこんだ。そして、子供の仕やうとする事を見て居たのである。木の下まで忍び寄つた子供は、注意深くあたりを見廻した。生垣で隔つて居る母屋の方にまで氣を配つた。

けれ共、猫でない彼は、眞暗闇の中に此の私が自分の一擧一動を見て居やうとは、まさか思はなかつのだ。

やがて彼は腕一杯に竿を延ばした。顏をすつかり仰向けて、熟した果へ覘ひをつけ、竿の先をカチカチと小さく搖ると、二つ三つボロ〱と落ちて來る。

彼は二三度同じ事を繰返した。仕て見る度毎に結果は好いので、彼は段々勢付いて、子供らしい、すつかりそれに熱中した樣子になつて、四度目の時には、今までより餘程力を入れて枝を搖いた。

木の頭は大きく搖れた。そしてバラ〱とかなり高い音を立てながら澤山な果が、下に居る彼の顏の上だの肩の上だのに飛び散つたのである。

彼は豫想外な結果にすつかり有頂天になつて、驚きと喜びの混合した

「ヤーッ！」

と云ふ感歎の聲を、胸の奥から無意識に發した。

しかし、まだその聲の消えないうち、彼は自分の不用心に氣が付いた。急に自分の仕て居た事がすつかりこわくなつた。

今にも誰か出て來さうに思はれて來た彼は、せわしく彼方此方をながめると、いきなり體をねぢ向け

て、大きな足音を立てながら、畑地の方へ逃げて行つて仕舞つたのである。

これを見た私は思はず微笑した。切角落した果を皆そのまんま殘して、自分の聲に嚇かされて逃げて行つた彼を見て、怒る事は出來ない。何處の子だか知らないけれ共、息を彈ませて家へ歸り付いた時、彼に遣つて居る者とては、果物の雨を身に浴びた持の嬉しさと、その後のたまらないこわさ丈であらう。

愛すべき冒險者よ！　よくおやすみ。あしたもお天氣は好からうよ。

けれ共、彼も亦私に辛い思ひをさせる畑荒しの一人だと云ふのは、何と云ふ厭な事なのだらう。

（十一）

或日突然私に桶屋から、金の無心をかけられた。彼は今までも餘り貧乏なので、祖母から種々面倒も見て貰つて居たのだけれ共、病人の娘を氣味惡がつて、家へは餘り近づけられないで居たのである。

酒精中毒の樣になつて居るので、手はいつでも震へ顔中の筋肉が皆、顎の方へ流れて來た樣な表情をして居る。

醉ふと氣が大きくなつて、殿樣にでもなつた樣に騷ぐけれ共、白面の時はまるで馬鹿の樣に、意地がなくなつて、自分より二十近く年の下の後妻に、音なしく使はれて居るので、皆の物笑ひになつて居る。

その彼が、祖母が墓參に行つた留守へ來たのである。

大の男がたつた五圓の金を貰はうとして、幾度お辭儀をし、哀れみを乞ふた事か！

彼は、命にかけてお願ひするとか、御恩は一生忘れないとか、それは〳〵齒の浮く樣に人を持ちあげた口吻で、

「御嬢樣のお爲めにやあ火水も厭ひましねえ、はい、そりやほんのことでござりやす。」と繰返し〳〵云つた。

生れて始めて直接に金を借りようとする者の、極端に己れを低めた言葉態度を見た私は、妙な極り惡さと、自分自身の滑稽らしさとに苦しめられたのである。

愚にもつかない讃辭を呈せられたり、おだてられたりするのを、別にどう爲やうでもなく、如何爲やう力もなく、聞いてすました樣子をして居る、こんな小つぽけな一文なしの私は、其れを知つて居て見たらどんなにみつともなくも亦、馬鹿らしく見えた事であらう！　私は、前からよく女中に、私共の遣つて居る食物なども、大低は彼等夫婦で食べて仕舞つて、肝腎の病人には屆かない時が多いと云ふ事を聞いて居たので、どんなにして遣つた所で、又飲まれて仕舞ふのが落ちだと云ふ氣がした。

それに、何に五圓入用るのだかと云つても、はつきり譯も云はないので、益々私の疑は深くなつた。で、私は自分の金は一文も持つて居ない米喰虫なのだから、今直ぐどうして遣る事も出來ないと斷つたのであつた。

けれ共、彼の方では、まだお世辭が利かない故だとでも思つたと見えて、思はず笑ひ出す程、下らない事まで大げさに有難がつたり、喫驚したりして喋り立てるので、私はもう眞面目に聞いて居られなくなつた。

私は、笑つて笑つて笑ひ拔いて仕舞つたので、彼も何ぼ何でも自分の口から出まかせに氣が付いたと見えて、ニヤ〳〵要領を得ない笑ひを洩して、有耶無耶の裡に喋り損をして歸つて行つて仕舞つた。

此の事は、始めから終りまで馬鹿々々しさで一貫しては居るが、彼が今無ければどうなると云ふ程でもない金を「若しあはよくば」と云ふ様な下心で「せびつて見た」と云ふような樣子に氣が付くと、只の笑ひ事ではなかつた。

若しも、私が出して遣りでも仕やうなら、誰も彼もが皆體の好い騙りになつて仕舞ひさうだ。

私のする事が、皆あまり嬉しくない結果許り生むのが、益々辛くなつて來たのである。

兎に角、此等の事がある様になつてからは、私の周りには、段々澤山「得なければならない」者共が集つて來た。

小さい娘の見る、狭い世界から抜けて居る事の、不利益を知る程の者は、何か口實を設けては訪ねて來るのである。

只雛と云ふ丈の様になつた女房共の、騒々しい追從笑ひや世辭。

裸足で戸外を馳け廻つて居た子供の、泥だらけな體が家中をころがり廻る騒ぎ。

其等の、何の秩序も拘束もない亂雜には、單に私の毎日をごみ〳〵した落着のない様にしたばかりではなく、家全體をまるで田舎のよく流行る禁厭ひ所の様にして仕舞つた。

祖母やその他家族の不平は、私一人に被ぶさつて、子供が爐へ水をひつくる返したのも、下らない愚痴を、朝から聞かされなければならない事も皆私がこんなだからだと云はれなければならなかつた。

このやうな裡にありながらも、私は出來る丈彼等に好意を持ち續けやうと努めた。

けれ共、いそがしい仕事のある時、彼等の仲間になつて聞きあきた、その當人よりよく知つて居る様

な嘩や繰言をじいつとして聞かなければならないのは、ほんとにたまらなかつた。

どうせ、出された物だと云ふ様に、腹がダブ〳〵するほど茶を飲み菓子をつまんで居る彼等を見ると私はほと〳〵途方に暮れた様な氣がした。

幾分あきらめた様な、希望のある様な心持で、秋風が立つと、祖母がやる事にきめて居る着物の地を染めたり、絞つたりしながら、自分の仕て居る事が自分で分らなくなつて來たのを感じて居たのである。

（十二）

私の周圍が此の様な狀態にあるうちに、町の婦人達の間には、或る計畫が起つて居た。

町の東北隅に新敎の基督敎會がある。創立後まださほどの年數は經つて居ないのだけれ共、繁盛すると云ふ點に於ては、成功して居た。

始めて此處に來た外國人の代には、眞面目な信者が少しづゝ集る位の事で、至極目にも立たないものだつたけれ共、すぐその後を受けて來た牧師は、非常に氣輕な男で「なあに貴女、私共だつて人間ですからな。」と云ふ様な調子であつた。

それが、町の所謂奧様連の同情を得て「面白い牧師さんですわね」と云ふ事から、めつきり敎會がにぎやかになつて來たのである。

そして、今では三代目のこれも恐ろしく人の好い愚直と云つた程の牧師が、殆ど女連の御かけで維持されて居るやうな敎會を管理して居た。

種々な意味で大切にされて居た先代は、去年の夏腦溢血で、ほんとうに天國に行けさうな死にやうを

したのである。

まだ割合に年も若く、絶えず東京風の裝に苦心して居る位の婦人連は、敎會を一つの交際機關として利用して居た。そして或時は說敎よりも互の身なりの觀察が重要な事であり、神の祝福を受けながら着物の柄を考える事が大切であつた。そして如何にも「女らしいすべての點」を備へた會合が催ふされて居たのである。

所が、此の八月の廿四日が先代の牧師の始めての命日であると云ふ事は、何か變つた事もがなと思つて居る婦人連にとつては、此上ない機會となつたのである。花の日會などゝ云ふ、派手な催しのある事を聞いて、胸をわく／＼させながらもじいつと我慢して居た人達なので、何か紀念の仕事を爲やうと云ふことは、一も二もなく贊成された。

そして、種々評議された末、終に故牧師が埋められて居るK村の貧民に、僅かづゝでも「ほどこし」を爲やうと云ふことになつた。

故人は、貧民救濟には、隨分心を用ひて居たのだけれども、多用だつたり、基金が無かつたりして、意のまゝにはならないで終つて仕舞つたから、自分達がその遺志を繼ぐのは當然の事であると云ふのであつた。

婦人達は皆勢付いた。そして、早速刷物を作つて、町中の少なくとも誰さんと云はれる程の人へは、殘らず配付して、お志の御寄附を勸誘したのである。

其の珍らしい印刷物を手にした者は、皆様々の思ひに打たれた。或る者は喜び、或る者は身に及ばな

い事ではあるが、どうかして仲間から脱けたくないものだと云ふ苦しさに迫られた。

町中は此の噂で一杯になり、町が始まつてから始めての事だと云つても好い位、女の人の仕事の稀な此の土地では、天道様が地面から出た様な騷ぎであつた。

けれ共、じきに種々な苦情が起つて來て、關係者を非常に困らせた。

それは、此那女が委員だとか何だとか、麗々しく名を出して居るのに、一體私はどうしたのだ、と云ふ様な事から、誰彼れの差別なく名を並べて置くよりは、會長とか副會長とかから、末は馳り使ひまで明かな役名をつけて置かなければ不可ないとか云ふことである。殊に、その候補者の中には自分をも加へて居る自信ある夫人達は、熱心にその必要を稱へたのである。

女の仕事は兎角事務的でない、責任を感じないと云はれて居るのだから、私共は時局に鑑みて出來る丈完全な事をしなければならないと思ひますがと云ふことが、段々大きな聲になつて來たので、到頭すべてを選出する事になつた。これは、益々町を只事でなくした。會長、副會長の望みのない者は、せめて一歩でも誰々の上に出やうとする。甲が思へば乙も願つて居るので、互の要求が衝突する。表面が平穏であり所謂婦人のつゝましやかに被はれて居れば居るほど、内輪では青くなり赤くなりして、自分の良人は彼の人のよりは上役なのだからと、狹い郡役所の二階でほか役にも立たない權利までも利用して掛つたのである。そして、散々ごたついた末漸々役割りが定まつて、事がどうやら落着いた。勿論小さい不平は決して納つた譯ではない。會長に選まれた婦人は、町で一番大きな病院長の夫人で、山田院長夫人と呼ばれて居た。別に力量がある譯でもなしするけれども、若し彼女の野心を滿たして置かないと、

あとの祟りが恐ろしいと云ふのが最大原因であつたのだ。

彼女は四十餘の大變肥つて背の低い人である。化粧に使ふ鏡は丁度胸位までしか映らないものだつたので、帶から上と下とはまるで別人の様な恰好をして居る人である。大きな束髪と耳朶や頸がぶちまだらではあつても念入りな彼女の「ちつともかまひません」化粧と、大きな帶で坐つて居る時の夫人は、實に素晴らしいものだけれども、一旦立たうものなら中心を失つた様に大きな重さうな、上半身は内輪にチヨコ〳〵運ぶ足では、到底支へ切れなさうだ。肩を互ひ違ひに前後に振る癖は、晴れの場所を通る時、極りが惡い様な氣もするが、隨分得意の時に特別ひどくなつて、息のつまりさうな頭をフラ〳〵させ、千切れさうに體を振つて行く様子を見ると、どんなに敵意を持つた者の心でも和らげられて仕舞ふ。彼女は、自分が押しも押されぬ會長様と定まつてからは、もうすつかり落着いて、只人の口端にのぼる類ひない自分の令聞を小耳に挾んでは滿足げに、うなづいて居た。

そして町長の夫人が二年前に死去したのは、何と云ふ感謝すべき事かと、人知れず其の墓に詣でたのである。若し、彼の夫人にひよんな事がなかつたら、今日自分はどうしてこの位置を贏ち得たらう！ほんとうに、まあ何と云ふ運の好い自分だらうか！　と。

斯様にして、始めはさほど大業にする積りではなかつた事が段々大きくなつて來たので、到頭奥様達の手には負へない程になつて仕舞つた。

牧師は、朝から晩まで祈る暇もない様にして、金の保管やら事務の整理にこき使はれて、

「それも道のためでございますわ、先生。」

といつも言葉を添えては、少し齒に合はない事々は、あらひざらひ、まるで川へ芥を流し込む様に押しつけられた。

顎に三本ほど白い髯が戰いで、左の手の甲に小豆大の疣のあるのを一言口を動かす毎に弄るので、それが近頃では、大變育つて來た彼は、白木綿のヨレ〳〵の着物に襷をかけて、毎日をどれ程短かく暮して居る事か！

婦人連は顔を見合はせる毎に、

「あれがすみますまではお互様にねえ。隨分いそがしうございますこと。」

と、自分等の間丈の符牒で話し合つては嬉しげに笑つた。

物見遊山に行く前の様な何だか心嬉しく、そわ〳〵した心持で、わけもなくせわしがつて居るうちに眞に困り切つたことが持ちあがつて仕舞つたのである。

これは、どんなにしても、廿四日までの間には合ひ兼ねると云ふ事である。

これには皆當惑した。泣いても笑つても、もう追付かないので、何もその日にきつかり出來ずとも、最も良い結果を得さへすれば、三日四日の日などを、故の先生は氣にも御止めなさるまいと云ふ事となつて、一週間の猶豫が善良なる故牧師の靈から與へられる事になつた。

婦人達の口には、暫く故人の厚徳を稱へ、確かに天國に安まつて居ると云ふ斷言に忙しかつたのである。

いよ〳〵日が迫つて、寄附〆切りの日には教會の内壁に紙を下げ、一々寄附金額を書き並べた。そし

「あら！まあ一寸御覽なさいましよ。彼の方はあんなに出して被居つしやる――。流石何と云つても御
て、その下に犇めき合つて、
　幕の好い方は違ひますねえ。」
と感嘆する婦人連の間に、筆頭に
「一金百圓也。會長閣下。」
と書かれた山田夫人が、氣違ひの樣に肩を振り〳〵步き廻つて、何か云はれる每に、
「いゝえ、どう致しまして。御耻かしいんでございますよ。」
と云ひながら、一金百圓也を睨み上げた。
　總ては驚くべき貴婦人らしさで進行して行つたのである。

（十三）

町の婦人連の間に、此の計畫のあると云ふ噂は、直ぐ私共の耳にも入り、次で村中に擴がつた。
日數が立つまゝに、段々其の事は事實となつて來たので、乾いて居る村の空氣は何となし、ザワつい
て來た。何處でも此の噂をしない所はない。
　貧しい者共は、盆の遊びを繰越して、金も貰はないうちから買ひ度い物の取捨撰擇に迷ひ、彼處の家
では俺ら家より餓鬼奴が澤山居つから充分に貰ふんだらうと云ふ羨みなどから、今まで邪慳にして居た
子供等を一夜の間に五人も十人も殖やし度い樣な事を云つて居る。そして、只さへ働き者ではない彼等
は、斯うやつて汗水たらして一日働いた幾倍かの物が今に來るのだと云ふ樣な思ひに心をゆるめられて

村全體にしまりのない氣分が漲り渡り始めた。

が、依然として、私の家には朝から日が暮れるまで、「行けば何にかなる」と云ふ者が、來つゞけて居たのである。

何だか自分の副業の樣にして、愚痴をこぼし哀みを求めて、施されると云ふ事は即ち、自分等がどうなるのだと云ふことなどを考へもしない、又考へる事も出來ない爲めだ。さう云ふ彼等を見ると、私は種々な事を考へさせられた。

「今度の事は好い結果を得るだらうか?」

此れが第一私の疑問である。而かも直接自分自身が苦しめられて居る、疑ひなのである。

彼等は只貰ひさへすれば好い。呉れる分には、どんな物でもいやだとは云はない。

けれ共、一枚着物を貰へば、前からの一枚はさつさと着崩して捨てゝ仕舞ひ、餘計な金が入れば下らない物――着る事もない樣な絹着物だの、靴だの帽子だのと云ふ彼等の贅澤品をせつせと買つて、平常押へられて居る、金を出して物を買ふ面白さを充分に貪つて仕舞ふのである。

其故、五圓あらうが十圓あらうが、つまりは無いと同じ事で、その金で買つた物も、しばらくして困りきつては町へ賣つて仕舞ふ。

金も、物も、その流通する間を一寸彼等の所へ止まるに過ぎない。

年中貧しくて、彼等には只、あゝ云ふ着物も買つたことがあつたつけ、あれ丈の金も持つたことがあつたつけがと云ふ記憶だけが、それもぼんやりと遺るばかりなのである。

私は此頃になつて、ほんとに難かしいものだと云ふ事をつくづく思つて居る。寛くすればつけ上る、嚴しくすれば怖ぢけて何を云つても返事もしない様になるのは、彼等の通癖である。

婦人達が彼等にめぐむ事に若し成功したら？　ほんとうに、彼等の生活の足しになる事が出來たら？

それはほんとうに結構な事である。

けれ共、私にとつては、只單純に結構な事ではすまないのである。

私は、自分を此の村に關係の深い、此の村に盡すべき事を澤山に持つて居る人間だと思つて居る。そして、少しづゝでも仕出した仕事は、失敗しさうになつて居る。

其處へ、遠くはなれて、各自には別に苦しみもせず、さほどの感激も持たない人達のする事が、彼等の上に非常に効果があるとしたら、此の自分は、どこまで小さな無意味な者だらう。

私は、彼等とはまるで異つた心持で、彼等の所謂「福の神の御來光」を待つて居た。

所へ、突然思ひがけない事件が持ち上つて、村中の者の心を動かした。

それは水車屋の新さんが豆の俵を持ち出して賣つて仕舞つたと云ふことである。其の二俵の豆は、勿論餘所から粉にする様に頼まれたものなのである。

親の金を持ち出したり自分の家の物を盜んだりした經驗の一度や二度、持たない者のないような村人の事であるから、只それ丈の事なら、皆の茶話しにも出ないで消えて仕舞つたゞらうが、新さんが名うての正直者で、おふくろが又、これは名代な慾張りで種々評判を立てられて居る女なので、皆の好奇心を煽つたのである。何か此裏には魂膽があると云つて、私の家へ來るもので新さんの噂をしない者はな

い程だつた。

私は、その新さんと云ふ男には、たつた二度ほか口を利いた事がない。随つて、どんな男だか、はつきりは分らないが、内氣さうな低い聲で、大變丁寧に口を利く人だと思つて居た。私にも、彼の男がそんな事は仕ない、又出來ないと思はれたけれ共、彼の實のおふくろが家へ來るたんびに、ほんとうに怒つて眞赤になりながら、

「俺らげの甑り損ひ奴にもはあ、ほんにこまりやす。おめえさまお聞きやしたどべえか、飛んでもねえことを仕出來しやがつてからに……。」

と、新さんがその豆を賣つた金で、町の女郎屋に五日とか六日とか流連けたと云ふことを、大きな聲で罵つた。で、私は親身の親の云ふこともまさか噓だとも思へず、さりとて新が、そんな事をしたとも思へないで、半信半疑の裡に此の事の成行を見て居たのである。

一體、水車屋は、二年前に亭主が亡くなつてからよくない噂ばかり立てられて居た。

その時分からもう、北海道に出稼ぎに行つて居た新さんを呼びよせもしないで、自分獨りですべてを取りしきつて居るのも皆陰に綵つる者があるので、隣村の傳吉と云ふ同じ水車屋が、僅か許の桃林も何も彼も自分の物にして、新さんを追ひ出しに掛つて居ると云ふことは、誰一人知らない者がなかつた。

新さんは、十六の年から北海道にやられて、此の五月になるまで、七年の間女房を持てる丈稼ぎためたら歸つて、おふくろにも樂をさせてやり、家の中をちやんとしたいと云ふことばかりをたのしみに、惡遊び一つせずに働いて、居たのであつたさうだ。

所が運悪く腎臓病に掛つて、醫者にすゝめられたので、久し振りに歸つて來た時には、八十圓の金を持つて來た。

若いに似合はず感心な事だと、私の祖母なども祝ひをやつたと云ふほど村中の者に尊敬されて居たのである。

けれ共、一度借金の事から取り上氣せて殆ど狂氣になつた事があつてからと云ふもの、五厘でも半厘でも金の事にかゝると、理も非もなくなる彼のおふくろは、病氣だと聞いて、厄介者が何にしに來たと云ふ樣に取り扱つた。

それが辛いので、新さんは、町の醫者に掛る入費や自分の小遣ひなどは皆自分の懷から出して、その上四十圓程の金をおふくろに遣りまでした。

けれ共、時々不用心に胴卷きを投げ出して置くと、僅かづゝ中が減つて行くと云ふ事や、大の男をつかまへて、おふくろが何ぞと云つては打擲したり、罵つたりすると云ふことまで、私共の耳へ入つたのである。

それだもんで、村の者は新さんに同情をし、どうしてもおふくろには面白くない噂が立つので、新さんは板ばさみの辛い目に合はなければならなかつた。

所が、或る日急に新さんはおふくろから、豆を盗んで賣り飛ばしたと云ふ罪で攻めたてられなければならない事になつた。

正直な彼は大間誤付きに間誤付いて、一體何が誰にどうされたのやらまるで分らないので、返事も出

來ずに居るうちに、おふくろの方では村中に此の事を云ひふらして歩いた。

どう考へても新さんには其の事が分らなかつた。何時か、そんな事でもあつたかしらと思ひ出さうとしたところで、まるで覺へはないしするので、煙の裡をでも歩く様な氣がして、何だか不安な、ほんとうに自分の身に後ろ暗い所でもありさうな日を送つて居たのである。

此の様な有様で、村中の者共は皆非常な興味を以て、事件の裏にひそんで居る事をさぐつて見やうと思つて居た。

私は何にも彼等に關して知つて居なかつたので、どう想像する事も出來なかつたけれども、どこにでもある世話燒きが、自分の本職の様にして、せつせと彼方此方から探りを入れ始めた。

さうすると、意外にもその問題の俵などは始めから根もないことで、只謝罪金に今新さんの持つて居る金を、皆取りあげ様とする方便に揑造されたものだと云ふ噂が、次第に事實として騷ぎ出されたのである。

新さんは、飛んでもない事だと思つて、おふくろを辯護し、その噂を押し消さう／＼と掛つた。けれ共、新さんの心は段々暗くなつて來た。自分の身が悲しく、ほんとに此のおふくろの實の子かしらんと云ふ疑も起つて來たのである。

私は青い陰氣な顔をした新さんが、心配で餘計面窶れした様な風で暑い日中被る物も無しに、村道をポコ／＼歩いて居るのを見ると、ほんとうに氣の毒になつた。

けれども、二十三にもなつた男一人が、物の道理も分らないおふくろの自由にされて、酷められても

恥かしめられても、只一言云ひ爭ひもせず、只彼女の辯護ばかりして居るのを見ると、妙な心持にならずに居られなかつた。

何だか、何處かに私共より偉い所を持つて居るやうな氣がして、どんなに氣の毒だと思つても、他の人々への樣に、僅か許り食物をやつたりする事は出來ない。

道でなど會ふと、私はほんとうに心から挨拶をして、丁寧に病氣の鹽梅を聞いた。

隨分氣分の惡さうな顏をして居る時でも、彼は、

「おかげさまで、段々樂になりやす。」

とほか云つた事がなかつた。

（十四）

新さんの事があつたので、卅一日はかなり早く來た。二百十日前の其の日は、大變に朝から暑くて、鈍い南風が、折々木の葉を眠さうに渡つた。

不常(いつも)より早く目を覺した私は、何時もの散歩がてら村を歩いて見た。

家々はもうすつかり食事までゝ濟まして居る。前の廣場だの、四辻だのには、多勢の大人子供が群れてガヤ〳〵云つて騷いで居る。

けれども、私の驚いた事には、彼等の着物や何かゞ昨日とはまるで別人の樣に、汚たなくなつて居る事である。女達は、皆蓬々(ぼう〳〵)な髮をして、同じ「ちやんちやん」でゝ何時洗つたのか分らない樣なのを着て居る。裸體で裸足の子供達は、お祭りでも來た樣にはしやいで居るし、ちつとも影も見せない樣にし

て奥に冷遇されて居たよぼ〳〵の年寄や病人が、皆往還から見える所に出て來て居る。

桶屋でも、あの死ねがしに扱つて居る娘を、今日は、特別に表の方へ出して、襤褸々々になつた寐具を臆面もなく、さらけ出して置く樣子は、私に一向解せなかつた。

村中は、もう出來るだけ穢くなつて、それで居て私が今まで一度も見た事のない程活氣づいて居る。けれ共、見て歩くうちに、段々彼等の心がよめて來た。そして、人間もどこまで慘めな心になるものかと、恐ろしい樣な情けない樣な心持になつて仕舞つた。

私は、何だか自分の力ではどう仕やうもない事が、起つて來た樣な氣持になつて、家へ歸つた。

家の中は相變らず平和に、清潔に、昔ながらの家具が小ぢんまりと落着いて居る。

私は、折々緣側に立つて向ふの街道の砂塵の立つのを見て居た。町から此の村へ來る者は、一人一人此處から見えるのである。

けれども、晝近くなるまで、町の者らしい者は一人も通らなかつた。

所が、もう十一時頃になつて、澤山の人力車が列になつて暑さうに馳けて行つた。中には、種々な色の着物が見える。町の婦人達の仕事は、これから始まらうとするのであつた。

村の入口で婦人達は車を下りた。そして、會長夫人を取り卷いて、ガヤ〳〵歩き出しの相談をして居る周圍を、裸身に赤坊を負ぶつた子守だの女房共だのが、グルッととりかこんで、段々外側から押しつけ始めた。

貧乏な女共は、喫驚して町の「奥樣方」を觀た。

光る櫛の差さゝつた髪、刺繡だらけの半衿、又は指中に燦き渡つて居る赤や青や白の指環をながめた。指環をはめて居ない人はない。皆手に小さい美くしい袋を下げて居る。まあ帶の立派だ事！　どんな白粉ならあゝむらがなく付くのだらう？　あら！　あんな洋傘もあると見える！。

女共は頭が痛くなるほど羨しかつた。同じ女に生れて、自分等のやうに死ぬまで泥まびれで居なけりやあならない者があるかと思へば、こんなお化粧をして、金を撒いて居られる人もある。

何て立派なんだらう！

けれども……………。

女達が妙に思つたのは無理もない。町の奥さん方は、ほかは金ぴか〳〵で居ながら着物は皆メリンスばかりであつた。

それは「質素を旨とし衣服はメリンス以下なるべきこと」と云ふ條件があつたので、賢明なる夫人達は、その箇條を正直に最も適當に守つたのであつた。

やがて婦人共は歩き出した。

派手な色彩の洋傘が、塵だらけの田舍道に驚くべき行列を作つた。

第一に止まつたのは桶屋の所である。

後をゾロ〳〵とついて來た者共は、先を爭つて間口一杯に立ち塞がつたので、妙に暗く息のこもつた樣になつた部屋の中には、股引一つの桶屋と、破けてボロ〳〵になつた「ちやんちやん」を着た女房が、幽靈のやうな娘を眞中にして、ピッタリと御辭儀をした。

會長夫人はふくみ聲で難かしい漢語を交へながら、今度の自分等の目的を說明した。

桶屋夫婦は、何の事やらさつぱり分らなかつたけれども、只御辭儀ばかりをして居ると、會長夫人は一寸指で合圖をした。

すると、中の一人が朱塗りの盃の上に大きな水引のかゝつた包みをのせて差し出し、集つた者どもの羨みの呼きにとりまかれて、桶屋の前に据ゑられた。

彼等は、飛び付き度い程嬉しかつた。けれども、强いて落着いて云へる丈御禮を云ひ御世辭を並べながら續けさまに頭を下げた。

そして、仕舞ひには腹が立つて來て、

「人こけにしてけつかる。行げつちやあ！」

と怒鳴りたい氣持になるほど、婦人達はだまつて頭を上げたり下げたりさせて見て居たのである。

終に婦人は動き出した。彼等はホッとした。

そして、まだ一人二人の女は自分の軒の前に居るのにもかまはず、桶屋夫婦は包みを兩方から引つぱりながら、急いで間誤付いて開けて見た。

中には五圓札が一枚入つて居た。

二人は札の面を見た瞬間、彈かれたやうに顏を見合はせて、ニヤリとした。

「當分樂が出來んなあ。」

「ほんによ。そんにこんねえだの俺の帶も買えるしな。」

女房は云つて仕舞つてからハッと氣が付いて、娘の方を見ると、ぼんやり疲れきつたやうにして、揉みくちやになつた水引だの、「病人見舞金」と楷書で書いてある包紙を見て居る。

女房はチョッと舌打ちをして、男に耳こすりをした。亭主もその紙を見て、娘を見て云つた。

「なあに大丈夫よ。奴にやあ分んねえ。」

娘は、暫くすると、よろ〳〵しながら臭い夜具を引きずつて、又暗くじめ〳〵した奥へ引つこんで仕舞つたのである。

婦人連は、一軒一軒に同じ文句を繰返しては、應揚に會釋をし、自分の品を上げる程の同情を表した。そして特に會長夫人は、何時も「えゝ、さう、さう、さう、さうですよ。」と胸まで首を曲げて返事をする代りに、今日は默つて大きく頷く丈であつた。

而も心の中では「あゝよし〳〵」とつぶやきながら。

一行は行く先々で感謝せられ尊敬せられ又驚ろかれた。

婦人達は皆、自分の仕事に滿足した。

「人にほどこしをするのは、何て面白いのだらう！」

けれども、段々疲れて來ると、同じ樣なお辭儀だの、御禮だのを聞くのにも倦きて來たし、自分等も一々丁寧に同情を表したり說明したりするのも厭になつて來て、仕舞ひには、會長婦人が一寸立ちどまつて會釋するあとから、先づ金包みを投げ込んで、先へと〳〵急行し始めた。

後について居る者共も、段々馴れるにしたがつて、婦人達に聞えるほどの惡口を云つたり品定めをし

たりするやうになつたので、婦人達は、益々うんざりして來た。

喉が乾いたり、暑かつたり、化粧崩れに氣が氣でなくなつた一行が、皆いら〳〵した氣持で或る百姓家の前に來かゝつた時、いきなり行手を塞いで燒け付く樣な地面に坐り込んだ者がある。

餘り突然な事に喫驚して、婦人達は後じさりを仕樣とすると、すぐ手近に立つて居た一人の裾を兩手で掴みながら、

「おつかねえもんぢや有りやせん。どうぞ御願えを御聞き下され。」

と涙聲を振り絞つたのは、誰あらう善馬鹿のおふくろである。

婆の後には、善馬鹿と白痴の子がぼんやり立つて居る。婦人達は間誤付き、ついて來た手合は笑ひながら立ちどまつた。

狒々婆は軋む樣な聲を張りあげた。

「お情け深え奥樣方！　どうぞ此の氣違え息子と、口も利んねえ馬鹿な餓鬼を御覧下さいやせ。」

どうぞ奥樣！　俺らが樣なもの—こそ憫然がつて下さりやせ。どこに俺等ほど情けねえもんがありやすッペ。どうぞ御惠み下さいやせ。

裾をつかまへられた婦人は泣き聲を立てゝ、

「まあどうしたのです。さあ其處をお離し！　行きやあしませんよ。さあ早くお離しつてば！」

と、自分の方へ引つぱッても「いんえ離しやせん。金輪際離しやせん。どうぞ聞いて下され。ほんに俺らがやうに……。」と尚強く握つて地面にへばり付いた。餘りの事に婦人達は、總がゝりになつて、

婆を嚇したり、賺したりしたけれども、なか〳〵離しさうにもない。

皆が、挺摺り抜いて、着物の裾を引つぱり合ひながら、途方に暮れて居る様子が餘り滑稽なので、周圍の者は、思はずドッと囃し立てた。

さうすると、いきなり人垣の間を分けて、犬のように飛び出した一人の男の子が、

「やーい！　やーい！　醜態見ろやい！」

と叫びながら、手足をピン〳〵させた。

甚助の子である。

其の一聲に、何か云ひ度がつてムズ〳〵して居た他の惡太郎共の口は一時に開かれた。

「弱えなあ。其那ぢやらくらに何出來ッぺ！」

「婆様手傳つてんべえか！」

黄色い砂塵りに混つて、ワャ〳〵云ふどよめきの中を、

「お情け深え奥様方！　どうぞ御きゝ下され。俺らげの氣違えと白痴野郎が……どうして生きて行がれますッぺ！」

と婆の聲が、切れ〳〵に歌の様に響き渡つた。

婦人達はすつかり度を失つて仕無つた。逃げ出したくはあつても、獸のような彼等に敗北して行くのは餘り口惜しい。皆興奮し、ヒステリックになつて一寸指を指されても大聲を上げさうになつて居ると甚助の子は、呆やり立つて居る善馬鹿の耳端で何かさゝやきながら、妙な身振りをして、彼を突き飛ば

した。

突飛ばされて、彼は眞直に婦人達の中に入つて、

「へ………。へ………。」

と笑ひながら、見て居られないはうな樣子を仕始めた。

婦人達は耻かしさと、怒りで眞赤になり、袂を顏にあてながら、

「失禮ぢやあありませんか！」

「餘りです！　何をするの？」

と叫びながら立ち去らうとした。

これを見ると、貧民共の獸性はすつかり露骨になつて仕舞つて、大人共までが聞くに堪えない冗談を浴せかけた。

會長夫人は氣が違ひさうになつた。そして、涙を目一杯にためながら、傍の人から金包みを引つたくると、猶々婆の顏へギユー〳〵と押しつけて叫んだ。

「は、早く行つて下さい！餘り、餘りひどい。さ！　さ！　早くつてば！　餘り………」

婆さんは漸々立ち上つて、善馬鹿を向ふに突飛ばしながら、非常に落付いて、

「どうも御有難うござりやした。御かげさまではあ三人の命がたすかりやす。御恩は決して忘れましねえ。」

と云ふと、三人一かたまりになつて、滿足げに行つて仕舞ひ、人々の騷ぎは餘程鎭まつた。

流石の婦人達も暫くは、氣抜けのした樣に立つたまんま、何うする事も出來ずに居た。けれども間もなく、會長夫人は辛うじて其の威嚴を回復して、群集一同を恐ろしい目で睨み廻した。そして、默つたまんま皆の先に立つて歩き出した。

何と云ふ歸り道のみすぼらしさだらう！　甚助の子は遠くの方から、馬の古鞋をなげつけたり、犬を嗾けたりしてついて行つたのである。

（十五）

町の婦人達は來た、金を撒いた、そして歸つて行つた。

只それ丈の事である。けれども其の爲に、狹い村中の隅から隅まですつかり掻き廻されて仕舞つた。子供等は、盗着を着せられて、村に只一軒の駄菓子屋の前に、群がつてワヤワヤ云つて居る。大人どもは、貰つた金を、何にどう使ふかと云ふことで夫婦喧嘩や親子喧嘩をして、互同志の嫉みが向三軒兩隣りに反目を起させた。

けれども、私の家だけは、相も變らず「繁盛」して居るのである。

一昨日と同じように今日も彼等は來た。

が、大低の者は小ざつぱりした裝をして、下駄まで餘りひどくないのを履いて居る。そして、町の婦人達の來てから歸つたまでの事を、細大洩さず話しては、あの家まで聞えて來たほどの、どよめきの最中に起つて居た事に對して、婦人達はどんなに、臆病に意地がなかつたかと云ふ事を嘲笑した。

裾にすがり付いて離れなかつたばつかりで、幾らかの金を貰つた彿々婆や、善馬鹿をそゝのかした甚

助の子の事は、さも面白い勇ましい事の様に、彼等を喜ばせたものらしい。

「あの婆様もあげえな體あして案外え偉れえわえ。あのときの醜態見せてあげたうござりやしたぞえ。」

皆は、自分等の貰つた金高を爭つて私共に聞かせた。

「俺ら五圓貰つた！」

「そんぢやおめえ、猾智でねえけえ。俺らなんかたつた三兩ほか貰んねえぞ。」

そして、彼那大袈裟な前觸れで來て居ながら、たつたそれつぽつちづゝほか呉れないで、有難がらせやうとしたつて無理だとか、金の割當て方が不公平だとか云ふ不平が、彼女等が來ない前よりもつとひどく、町の者への惡感を强くさせた。

私は來る者毎に今度幾らでも貰つて少しは樂だらうときいて見ると、うんと云ふ者は一人も居ない。

「俺ら見てえな貧乏のどん底さあ居るもんが、おめえ様、三兩や五兩の錢い貰つたて、どうなりやせう。錢は何が買えてえ、御亭は此んが買えてえ。そんで先ぐはあ夫婦喧嘩で、毆り合つてる内にはあそのくれえの金あ、皆どうにかなつて仕舞ひやす。三日立てば、元の木阿彌で相も變らず泥まびれでやすよ。」

それは、ほんとの事であつた。一週間も立たないうちに、町から入つた金は、又町へ吸ひとられて仕舞つて、彼等は又元の様に三圓とまとまつた金は持たない様になる。

一寸でも餘分なものが入れば彼等はせつせと何か買つて仕舞ふ。譯も分らず只ドン／＼と買つて元に幾らかの利子までつけて、町へ返濟して仕舞ふのである。

貯蓄の癖が付いて居ないので、どうしても蓄める氣になれない。そして、銀行とか郵便局とか云ふ所は、金は取りあげて仕舞つて只一冊帳面をあてがふ所の樣にほか思はれて居ないので、あづける者などは殆どない。

だから、私共が溜めろと云つた所で、聞かれる事ではないのである。金を貰ひながら彼等はやつぱり私共で飲食ひし、平氣で何をくれろとかどうして呉れとか云つて居る。

私は、自分の仕て居る事が極く少さな、例へば金をやるにしても一時にまとまつて一圓とはやらず、着物にしても、新らしいのばかりはやらないので、却つて彼等の生活には、さほどの惡い影響も及ぼさないのだと思はないでは居られなかつた。

若し私が、頭割に百圓づゝもやつたとしたら、彼等はその金の盡きるまではのらくらして暮して、又困つて來ればどうかしてくれろと、よりかゝつて來るにきまつて居る。彼等に對してする事は何時も何でも限りがない。例んば私が彼等の生活を助け樣として、自分の生計にも窮するほどになつたとした所で、彼等は矢張り何か貰はふとする。何か呉れる所だと毎日せつせと押しかけて來るだらう。

町の婦人連の仕事は、豫想通り失敗したとともに、私には、自分は一體どうしたら好いのだ？　と云ふ恐ろしい疑問が殘された。この氣持は、甚助の事の時にも私を苦しめた。けれども彼の時は、自分のして居る事にかなりの自信を持つて居たので、幾分は勢付けられて居たのであつた。が、今度は、自分のして居ることが、どうもほんとうに好い事ではないような氣がしてならなかつた。

人が自分より力弱い者を哀れむとか、惠むとか云ふ時に、少許でも虛榮心を持たないだらうか？

勿論、高く世の中を悟つたと云ふような人は別かもしれないが、少くとも、私共位の程度の人間では虚心平氣に人を惠み、慈善を施すと云ふ事は、殆ど出來ない事ではないかしらん？

町の婦人達のした事などを見ると、慈善などゝ云ふものは、或場合には、惠む者が自分の金の自由になり、自分の勢力の盛な事を、自ら享樂する方便にほかならない樣にも思はれる。

少くとも、「ほどこす者」と「ほどこされる者」との間には、もう動かせない或る力の懸隔か起るとともに、自分等の位置から種々な感情が起つて來るだらう。

其故、私が隨分彼等に對して、丁寧であり謙讓であらうとして努めて居ても、何處かには矢張り「ほどこす者」の態度がきつとあるのだ。

彼等の仲間にはどうしてもなれない。流れて行く物を拾はうとして、岸から竹竿を延ばして居るので、決して一緒に流れながら摑へやうとして居ないのを自分で知つて居る。

例へ表面的には、畑へも出、收穫の手傳ひもし、同情もし、或る共鳴は感じて居ても、決して同じ者共となり得ないのである。

それなら、私がその同じ流れの中に漂つて見たらどうか！　なか〳〵自分の溺れない爲に人の事などは見ても居られなくなる。

岸から竹を延ばして居る今までにも私はあきたらなくなつて來たと共に、一緒に濁水を浴び、苦しまぎれに引つ掻き藻掻いて、手も足も出なくなつて、終つて仕舞ふのは、只一度ほかない私の生涯に餘り慘めである。

で、私はほんとうに、謙讓になり丁寧になつて、而も今の不平や恐れをなくするにはどうしたなら好いのか？　私は情けない樣な心持になつて仕舞つた。

何處かで、

「お前の花園は一體どうしたんだ？　もうそろ〳〵芽生え位生えさうなもんだになあ！」

と嘲笑はれて居る樣な氣もする。

けれども、私は諦めの惡い人間だ。どうしても、物を「あきらめ」て靜かに落着いて、次ではそれも忘れて仕舞ふと云ふ事が出來ない。

それ故「世の中と云ふものは、どうせそんなものさ！」と落着けて仕舞ふ事が出來ないので、何時でも不平や、悲しい思ひや、苦しい思ひをして、「賢明な人々」からは妙な同情を受けて居るのである。

今も私は「何でもない、自分が小さいから丈の事だ！」と諦めが着かない。

如何にも私は小つぽけな細い聲を出して、何がゴド〳〵云つて居るに過ぎない者ではあるけれども、もう直ぐの所に大變好い事があるのに、又この好い事も搜し手を待ち兼ねて居るのに、見つけられないで居るのぢやあるまいかと云ふ事がしきりに感じられる。ほんとに、只感じられて居るばかりな、その一重向ふの何ものかを求めやうとして、私は目を目張つたり、手を動かしたり、ジイッと耳をすませたりして居るのである。

斯樣な又新らしく湧き出した望みに攻められて居る間に、村は又貧乏に戻る前の馬鹿らしい景氣よさに賑はつて居た。

村端れに酒屋が、一軒ある。今まではさほど繁昌も出來なかつたのが、此の頃になつてから急に客が澤山になつた。夕方になると野良から歸つた百姓達の中心になつて、一升と渾名のある桶屋だの甚助親子だのが集つて來た。

店先に床几を持ち出して、蚊燻しをしながら唄つたり踊つたりの陽氣さに、近所の女子供まで涼みがてらその圍りに立つて見物をする。

善馬鹿は、何時も皆の酒の肴に惡巫山戯をされて居た。

其の晩も何時もの樣に酒屋は大騷ぎであつた。酒の香りに集つて來る蚊をバタ〳〵團扇で叩きながら床几に寐ころんで、居る者の中には新さんも珍らしく混じつて居る。

皆が、漬物をつまんだり、盃を廻したりしながら、町の婦人達の惡口や愚にもつかない戲言を云つてワヤ〳〵して居る傍に、新さんは默つて、蚊が一匹溺れて居る自分の盃を見て居た。

「や、ほんに新さんが居たんだんなあ。餘り音なしいで居んの一忘れて仕舞つたわえ、さ！　一杯明けな。醉へば天地あ廣れえもんにならあ。」

新さんは酒を飮まうともしなかつた。

けれども、今まで放て置いた氣の毒さも混つて、皆は急に新さんに種々の言葉をかけた。

彼那化物豆になんか心配しないで、自分は自分でさつさと遊ぶなり、他處へ出るなりしろと力をつけながら、あの子を子とも思はない鬼婆なんかぶんなげてやれとかなんとか罵つた。

甚助などは拳を振り廻しながら、「おめえさえウンと云や己が默つちや置かねえ」とまで云つた。

チビリ〳〵と酒をなめながら、皆の云ふことを聞いて居た一升は皆の絶れ間を待つて、重々しく云ひ出した。

「一體なあ新さん。おめえはあげえなおふくろ神樣か佛樣あみたえに思つてんが、第一の間違えだぞ。おめえのおつかあにしろ。どいつのおふくろにしろ皆女子さ。どこの世界だて女子に違げえねえだ。われえこつたつてすらあな。邪魔んなりやおめえをぼん出さうともすらあな！」

「そらさうだべ。けんどあげえなこつて親子喧嘩しちや、親父にすまねえ。俺らせえ默つてりやすむこんだかんなあ。俺らそげなことをする氣はねえ。」

「だから御前は佛性よ、めつたにねえ生れつきだんなあ。死んだ親父の云つた通りの事―云つてんぞ。」

「そいから見りやおめえは、極道者だんなあ、一升、」

傍から甚助が口を入れた。

「ほんによ。こげえな極道者の行ぐ先あ大方定つてら。」

「お前等今頃から、そげえなことほざくんか？ のれえなあ。見ろ、俺の傍にやもうちやんと地獄がひつついてら。外へ行ぎやうもねえぢやねえかあ！」

と一升は、自分の傍に坐つて漬物を食はうとして居る酌婦上りの女房をさした。

「ハヽヽヽヽ。ハヽヽヽヽ」

「好え氣になつて、ほざいてけつかんから恐ろしいや。」

「さうともよ、好え氣に成んとも娑婆に居る間丈のこつた、なあ新さん。

死んだ後のこと、俺いらが知るもんけ！

あとは野となれやま……………となーれ。

ヤ、ミッチヨイサー か。

どうだ巧めえだべ。」

皆は破れる様に喝采した。新さんは妙な笑ひ方をした。

「面白れえなあ。踊りてえなあ。ちやん！」

甚助の子が、よろけながら立ち上つた時、向ふから、これも微醉の善馬鹿が來かゝつた。

これで、すつかり元の様に賑かになつて仕舞つた。

彼は皆に呼ばれて、又二三杯のまされた。

「おめえ俺らと仲よしだんなあ。善！ 踊んねえか？面白えぞ。」

甚助の子は、善馬鹿の耳朶を引つぱりながら、床几の周圍を引つぱり廻した。

「こりやうめえ、さ踊れ。又酒え飲ますぞ。」

「踊れよ、相手が好えや。ハヽヽヽヽ」

「そら踊つた、踊つた！」

單純な頭を、酒で滅茶々々にされた甚助の子は、氣違ひの様になつて居た。

肌脱ぎになり、兩手に草履を履くと、善馬鹿の體中を叩きながら、譯の分らない事を叫んで踊り出した。

「ヤー　うめえぞッー！」

「そらやれ〳〵。えゝか？　唄ふぞー！」

ホラー

俺らげーの畑でよう！………

ホラ、ミッチョイサ！………」

「ワーッハヽヽヽヽ」

「ハヽヽヽヽえゝぞッー！」

「ほら、しつかり〳〵！」

善馬鹿は甚助の子に、ペチャ〳〵と草履で叩かれながら、着物の裾を手に持つて、ザラッ、ザラッと足から先に踊り出した。

(十六)

婦人達が來てから一週間はぢきに經つた。そして、村は漸々、元の陰欝な貧しさに落着き始めた。畑の方も段々急がしくなつて來たので、自(おのづ)と酒屋の床几も淋しくなり、下らない、いざこざも少なくなつた。

けれども、町の婦人達の紀念として、善馬鹿はすつかり酒飲みになつて仕舞つた。皆の玩弄物(おもちや)となつて彼方此方で飲まされた爲であらう。

私共は、朝から晩まで、彼のだらしなく醉つた體が、泥まびれ汗まびれになつて、村中をよろけ廻つ

て居るのを見るやうになつた。
彼は何處の家でもかまはずに、這入つて行つては
「酒えくんろー」
とねだる。
村道添ひの家で、彼に酒を欲しがられない家は一軒もなかつた。けれども大抵の家では酒を一滴か二滴垂らした水を遣つたのだけれども、彼は喜んで醉つて居たのである。
或る日の午後、私共は茶の間の縁側の傍に坐つて、胡桃を挽いて居た。すると耕地の方から、グルリと廻つて庭木戸の中へノッソッソ入つて來た男がある。喫驚して見ると、善馬鹿だ。
私は何だか薄氣味惡くなつて、少し奥の方へ躄り込んだ。奥に居た祖母や其の他の者も出て來て、半ば氣味惡く半ば珍らしさうに、默つて庭に立つて居る善を見て居ると、暫くして低い聲で可なりはつきりと
「酒けえくんろー。」
と云つた。
下女は直ぐ立つて行つて、薄く酒の香ひのする水を、破れた飯茶碗に入れて來た。そして遠くの方から手をのばして、
「ホラ此處さ置くぞ」
と縁側の端に置いてやつた。

善馬鹿は下女の手が引つ込むか引つ込まないかに、引つたくる様にして、茶碗をとつた。そして、フーフー鼻息を立てゝ、喉佛をゴク〳〵云はせながら一滴もあまさず飲んだ後を、すつかり舐め廻した。空つぼの茶碗を持つたまゝいつまでもそこに立つて居る。下女は穢いから早く逐い出しませうと云つたけれども祖母は、狂人や何かにひどくすると、あとできつと「あた(仇)」をするものだからと云つて放つて置かせた。

私は久し振りで善馬鹿の顔をツク〳〵と眺めた。今日はどうしたのか、平常よりよつぽど、小ざつぱりとして居て、いつもほど臭くもなければ穢くもない。けれども、精神病者に特有な、妙に統一の缺けた様な手足の動かし方や、目の使ひやうが、却つて凄く見えた。そして、先達つて中よりは、すつかり痩せて、頬などはゲッソリこけて居る。皺も多くなつたし、全體に弱つて居る。矢張り酒等を飲んで、始終興奮狀態が續いて居るのですつかり堪えて仕舞つたものと見える。

可哀さうな！ あばれる様にでもなつたらどうするのだらう。

私はぼんやり母から聞いた北海道の氣違ひの話などを思ひ出して居た。すると、いきなり善馬鹿は、ニャ〳〵しながら、

「飯が食いてえなあ俺らあ。」とつぶやいた。

云ひやうが餘り子供のやうなので、私共は皆吹き出して仕舞つた。けれども、私は下女と二人で丼の中に飯と、晝に煮た野菜と漬物を一緒に山盛りにして又、縁側の端へ置いた。

彼は直ぐそれをとつた。そして地べたに坐りこむと足の間にそれを置いて兩手で、食べ始めた。丼の中

ばかりを見つめて、ほんとうにガツ〳〵とまるで飢えた山犬の様にして、掻つ込んだのである。

見て居るうちに、私は淺間しくなつて仕舞つた。獸より情ない姿だ。此那哀れな人間に生れる位なら、猫にでも生れた方がどんなに幸福だつたか分らない。彼にとつても、又彼の周圍の者にとつても、遙かにその方がよかつたのだと私は眞面目に考へた。そして、見て居るに忍びなくなつて、後を向いて又胡桃を挽き出した。パチ〳〵云つて破れる殼から、薄黄色い果を出しては、挽き臼でつぶすのである。

暫くすると、善馬鹿は食べて仕舞つて、立ちあがつたらしい氣配がした。そして、よろけながら兩手に空の破茶碗や丼を下げて、又耕地の方へ出て行く後姿を、私は、臼の柄につかまりながら、何とも云へない心持で見送つて居た。

秋めいた、穩やかな午後の日差しが、彼の蓬々頭の上に靜かに漂つて居た。

暑さのためと、氣苦勞で、養生の行き屆かない新さんの病氣は、時候の變り目になつてからドット惡くなつた。

體中が水腫んだので、立つて居る事さへ苦しい程なのを、家に居ればおふくろの厭味を聞かなければならないのが辛さに、跛を引き〳〵あてどもなく歩いて、林の中などに何か考へて居る新さんを見ると村中のものは、ほんとに氣の毒がつて、どうにかしてよくしてやりたいものだと心から噂し合つた。けれども、この二三日はもうこれも出來ない程になつたので、家の陰の日もろくには射さない樣な長四疊にごろ寢をして居る時が多くなつた。

部屋の直ぐ前から、ズーッと桑畑を越し、野菜の上を越えた向ふには、林に包まれた墓地が見渡せた。

新さんは、足の裏に針の束で突つく樣な痛痒い痺れを感じながら腕枕して靜かに眺めて居ると、活々した日の下に踊つて居る木々の柔かい葉觸れの音、傍に流れて行く溝流れのせゝらぎが、一つ一つ心の底まで響き渡つて、口に云はれない憧れ心地になつたり、遣瀬なさに迫られて、涙組ましい心持になつた。

「彼の林の蔭にはちやんが居る。」新さんはさう思ふと、まだ親父の生きて居た時分の事々が、遠い夢の樣に思ひ出された。

自分が、まだ七つ八つの頃、あんなに早く死なうなどとは思ふことさへ出來なかつたほど、達者で心の優しかつた父親が、自分を肩車に乘せて、食ふだけ食へと桃畑の中を歩き廻つてくれた時分の自分等は、どんなに幸福に、嬉しいお天道樣を拜んで居た事かと思ふと、飛んでも行き度いほどのなつかしさを覺えた。

それだのに此の廣い世の中に、たつた二人ぎりの母子でありながら、此頃の樣に譯も分らない事で、情無い行き違ひをして居なければならないのを思ひ、自分のもう到底癒りさうにない病氣を思ふと、本當に生きて居る甲斐もなくなつた樣に感じられた。

自分が居ておつかあの邪魔になるなら、今すぐからでも何處かへ行つても仕舞ふけれど、どうせは死ぬのも近いうちの事だらうのに、どうぞたつた一度で好いから七年前に呼んで呉れた樣に「新や！」と云つて呉れたら、どんなに嬉しからう！

新さんは、北海道で時藏と云ふ男の所に居た時、仲間の男で十九になるのが急に病ひついて、たつた三日で死んだ時の様子を、マザ／＼と思ひ出した。
その男は死ぬ日まで
「阿母さん！ 阿母さん何故來ないんだ？ 俺りや待つてるんだぜ。」
と云ひながら、生れてから別れるまで、ついぞ大きな聲さへ出した事のない程優しい母親の事ばつかり話して居た。そして、もういよ／＼と云ふ時に、一度瞑つて居た眼を大きくあけて、兩手を一杯に延ばすと、
「阿母さん！」
とはつきり叫んで、そいまんま到頭駄目になつて仕舞つた時の、あの鋭い聲、あの瘦せた手が新さんの目について離れなかつた。
何處の山中、野の端に野たれ死をしても、いまはの際に「おつかあ！」と呼んで死ぬる者は、何と云ふ幸福な事か。新さんは、眞面目に自分の死と云ふことを考へて居たのである。
或る殊に暑苦しい日、朝から新さんは身動きも出來ないほど弱つて居た。
五月蠅い蠅を追ひながら、曇つた目であてどもなく、高く高くはてもなく廣がつた空を見て居ると、何處からか飛び込んで來た様に、自分はもう生きて居られない身だと云ふ事を確かにハッキリと感じた。
新さんは、妙に笑ひながら、ムズ／＼と體を動かして顏を撫で廻しながら
「おつかあー！」

とやさしい聲で呼んだ。
裏口の水音がやんで、濡手のまゝおふくろは佛頂面をして「何だあ？」と入つて來た。
「いそがしかつぺえがちよつくら坐つて、話してえがんけえ？　俺れえ話しときてえ事があるんだがなあ。」
「何だ？　早く云つたらえゝでねえけえ。」
「ま、一寸御坐りて。ほんに俺ら話してえ事がうんとある。」
新さんは穩やかな愛情に滿ちた眼差しで、まじ〳〵と怒つた樣なおふくろの顏をながめた。そして、靜かに微笑して頭を動かした。
「なあ、おつかあ！　俺らおめえに相談しとかにやなんねえと思ふ事があるんだが……。」
「……………」
「急にこげえなことー云ふと、おつかあ氣い惡るくすつかもしんねえが、俺らもう到底助からねえと思つてる。そんで、早く家の仕事うちやんをするもんを定めときね、誰んでもえゝ。おめえのえゝと思ふ者を定めたかえゝと俺ら思つてる。」
おふくろは妙な顏をしたが、いきなり大きな聲で怒鳴つた。
「なにいあてこすり云つてけつかる！　餘計な事世話燒かねえですつこんでろ、馬鹿奴！　俺らに貴樣の心ん中が分んねえと思ふんか？」
「まあ、そげえに怒んなよ、おつかあ！　俺らあてこすりでも何でもねえ、只思つてつこと云つたんだ。

……俺ら、北海道さ行がねえ前の事を思ふと、ほんに今が辛れえ。俺ら何んでもおつかあにつくさうと思つてんだ。どんなこつてもえゝ、おめえの思つてんことーすつかり俺に打ちあけてくんねえか！なあ、おつかあ、俺はもうどんほども生きらんねえ、そいつが願んだ。昔を思ひ出してくれねえか？」
「なにい嚇してけつかんだ！ 駄目だえ。だまさうたてだまされるもんけ。面でも洗つて出なほせッちや。」
「さうぢやねえよ、おつかあ！ 俺らどう仕ようにも此の證で出來ねえな分つてんでねえけ。只俺ら皆分つて死にてえ。どうぞ昔のおつかあと俺で別れてえ、なあおつかあ？ 此間の豆の事だて、俺らにやどうして腑に落ちねえ。」
「腑に落ちねえがどうしたゞ？ 俺らおめえの云ふこため分かんねえよ。馬鹿！ おふくろー惡者に仕様とすんーやうな奴ー持つた俺れが因果よ。面白くもねえ。何とでも云へよ。俺れえ一人惡る者になつてりやおめえは嬉しかつぺえなあおい！ 嬉しかぺえよ。」
と神經的に涙をこぼし始めた。
新さんは情ない顔をして、默つて此の樣子を見て居たが、やがて布團の下から胴巻きを出すと、
「おつかあ！ もうちんとばつかしだが、こりよおめえに預けとく。どうぞそんで埋めとくれ。俺ら持つてゝも何の益にも立たねえかんな。」
と、母親の膝元に押しつけた。
おふくろは、一寸目を輝かせた。そして少し間が惡さうに、

「そうかあ。」

と、云ひながら早速これを持つて、立つて滿足げに行く樣子を見送ると新さんは、嬉しさうに微笑して目を瞑つた。

「おつかあ！　おめえも決して惡え人ぢやねえ。が、俺ら辛れえや。昔のこと＞思ひ出すのが辛れえやなあおつかあ！　俺ら何ちゆう睦まじいこつたつたらうなあ。」

新さんの眼からは、瀧の樣な涙がこぼれた。押し切つた樣な苦しい啜り泣きの聲が、靜かな部屋に悲しく響き渡つたのである。

（十七）

都會から遠く逃れた、名も知られない一小村落に起る種々の事件を包含して、秋は去年と同樣に、又百年前と同じ樣に育つて來た。

山並みや木々の葉に明かになつて來た秋の氣候と、まだどこやらに殘つて居る夏の餘力がともすれば衝突して、此の二三日の天候は非常に惡かつた。

廣い空一面に雨雲が漂つて、不愉快な濕氣が南風の生暖い吹き廻しと、垂れ下つた雲の下で縺れ合つて居る。遮ぎられがちな太陽の光りは、層雲の鈍色のかたまりに金色の緣取りをし、山並みを暗紫色に立木や家屋等の影を調はない形にくつきりと、乾いた地面に印して居る。

山から斜に這ふ風が、パーッと砂煙りを舞ひのぼせると、實の重い作物が、ザワ〳〵……ザワ……と陰鬱な音をたて＞蜒り渡る。雲の絶間から眺められる暗藍色の空からは、折々細い稻妻が閃い

て、奥深い所に低い雷がドヽヾヽヽヽと轟いた。總ては物凄い樣子で明けて暮れて居る。

其の日は時に險しい天氣で、夕方になつてからは、恐ろしい風が吹き出したので、百姓達は皆非常な不安に攻められた。今最後の發育を遂げようとして居る總ての作物が、荒い風に會ひ、强雨にたゝかれると云ふ事は憂ふべき事である。

で、彼等は田の見廻りや何かにせわしく、私共の畑も三人の小作男で、充分に圍はれたり突支え棒をあてがはれたりした。

早くから閉め切つた部屋の中にとぢ籠つて、次第に吹き荒れて行く戶外の雨の音を聞いて居ると、私共は皆何だか氣味惡い離れ〲各自の部屋に落着いて居られない樣な氣持になつた。

家中は皆茶の間に集つた。

雨戶にガタ〱ぶつかつては外れて行く風の音、何處かの軋むキー〱した響に交つて、怯えた樣な野犬の遠吠えが陰氣に凄く皆の心をおびやかして、千切れて飛んで行つた。

風は次第に强くなつて來る。薄ら明りの空を走る雲の足なみが早くなるにつれて、東南の暴風は立木と云ふ立木、家屋と云ふ家屋の有らん限りを吹き倒さないでは置かないと云ふやうに吹き始めた。

砂煙が短かい渦卷きになつて吹き上り、人氣ない往還を彼方此方とかけずり廻る。樹木の總ては、其の頭を狂亂した樣に打ち振り〱、小枝は白い肌を生々しく引き裂かれて飛び、幹は苦しげに軋り唸り、鋭い悲鳴をあげて搖れて居る。家屋の角ではぶつかる風がわめき、白い葉裏をひるがへして揉まれる葉が種々な聲で泣き叫ぶ——。

天地が巨人の掌で只一揉みに揉みつけられるやうな夜の荒れの最中に、一つの細長い人影が靜かに落着いて、往還の角から現はれた。

黑い影は靜々とその騷亂の裡を動いて行つた。

頭を眞直に保ち、手足が規則正しく動くにつれて、等しい歩調で、丁度車の上で動かされて居る人影の樣に歩く姿は、此の四周の長縮しつくして居る萬物の中に、如何程嚴からしく見えた事だらう? 慘虐な快樂に耽る暴風にとつては、驚くべき反逆者である。

彼の延びた髮はさか立つて、一吹風が吹き拂ふ毎に、顏中に亂れかゝり着物の裾はバタ〱とあほりながら足に纒ひつく。けれども其那事は、何の邪魔にならないらしく、人影は極めて沈着に、餘裕を持つて進行を續けて行く。

激しい風に卷き上げられた土砂が如何程打ちつけ樣が、上がつて居る頭は決して下らず、面を背向けようともしない。露出した細い脛に芥が嚙み付き、風の渦卷きにとられ樣とする着物が、體中でかくれたりしぼんだり、はためいたりして居る。

けれども彼は只歩いて行く。行手には何の障害もない樣に、又あつたとしても自分はこれを何の努力もなしに壓服する事が出來る樣な勢で、ひた歩きに歩いて行くのである。そして、眞直に通つて居る道の曲り角まで來たとき、此の怪しい人影の行手に當つて、又他の黑影が現はれた。

立ち舞ふ塵芥の霧の裡に、その丸くかがまつた小さい姿は、まあ何と云ふ弱々しさでよろめいて來る事か! 全くその人影はよろめいて來たのである。

一陣の烈風が、すさまじい響をたてゝ地上を拂ひ去ると、弄ばれる枯葉の樣に前後左右に突上げられ押しつけられ小突き廻されて、今に倒れさうなほどよろけ廻る人影は、暫く立ち淀んではフラ〳〵と又定まらぬ足元で離魂病者の樣に動いて居る。

兩手でしつかり顏を掩い、道一杯に彼方此方へ吹きよせられ、吹きよせられて來た人影は、思ひがけぬ人の足音に驚ろかされたらしく、掌の中から顏を出して、暗と塵の幕を透して、來かゝる者を見やうとした。

絶えずよろけながら辛くも持ち堪へて居た者の前に現はれた第一の人影は、どれほど恐ろしい偉大なものに見えたらう！

第二の影はよろ〳〵と片陰の木の茂みに身を潛めた。

人影を行き過ぎさせ樣としたのである。

けれども、どうした事か、今まで正面ばかりを見て居た第一の影は、彼の木立の前へ來るとピッタリ歩くのをやめた。そして、非常に熱心な態度で反對の方を守つて居る。其處には、かなり多くの木々の梢に遮ぎられながらも、村役場の灯火が赤く赤く、非常に目立つ輝きを以てまたゝいて居たのである。

第一の人影は、暫く全身の注意を傾けて、其の一點の光明を凝視して居たが、やがて急に身を躍らせ兩手を宙に振りあげて跳ね上ると極度の歡喜と喫驚の混同した樣な、非常に高く鋭い、

「ワアーッ！」

と云ふ叫び聲を發するや否や毬の樣に走り出した。

二つに折り曲がつた體、口を開き齒を露出した頭を前へ突出して、瞬きもせず、只一方を見守つて砂塵の裡を走る彼の體の周圍には、迅い風音がシュッシュッと後へ斷れ〳〵に取り遺されて行つたのである。

第二の影は又ソロ〳〵と歩き出した。

兩手で顔を掩ひよろめく小さい姿は、風の嬲り者となりながら、次第次第に遠くなつて行つた。

（十八）

夜中の大風は曉方になつてから驟雨を誘つた。

降つたり止んだりする雨は、かなり激しく往還を荒して幾條もの小流れが道の左右に付いて、中央に二本通つて居る車の轍の跡の溝には、茶色の泥水がゴッゴッと云つて流れて行つた。

農民共は、皆家に籠つて鞋造りや繩綯ひに時を費して居たけれども、何かせずには居られない子供等の一群は、村端れの雜木林へ入つて居た。

其處には、秋の早い頃から名もない「キノコ」が澤山頭を出し、稀には「なめこ」が黄色な姿で小さい採集者を、得意の絶頂まで引摺り上げたりする事があるので、今日も子供等は、故意と險しい天氣に「菌がり」を始めたのである。

彼等は皆一生懸命に捜した。萱の刈跡を裸足の足の裏に擽つたく感じながら、グン〳〵林の奥へ奥へと進んだ。

薄い紙を濕らして重ねた樣になつて居る落葉を掻き分けて爪の間に泥を一杯つめ込んだ彼等は、思は

ず掴んだ蚯蚓を投げつけ合つたり、松葉で擽り合つたりしながら、先を爭つて行くと、一番先に立つて林續きの墓地裏に入つて居た一人の子は、何物か急に見つけたらしくピタリと足を止めて、注意深く前方を透した。

　此の樣子に喫驚した子供等は、皆馳け集つて、指し示された一點を搖れる梢の間からながめた。其處には――葉の茂みが泡立つ浪の樣に崩れて居る間からは――白い模樣のある黑い布が旗の樣に、はた〳〵とはためいて居るのが見えた。

「何だつぺ？　何があげえにヒラ〳〵してんだつぺ！」

「ほゝになんだつぺ？　行つて見べえか？」

「うん、ほんにそれがえゝ。さ行つて見ろ。俺等此處待つてらあ。なあ、源！」

「あゝほんにおめえ行つて見ろ。俺ら此處に待つてら。」

「何んだあ、俺れ一人で行ぐのけえ？　厭んだあ、俺れそげえな事やんだあ、おめえ等も一緒に來よ！」

「俺等行ぎたくねえんだもん。おめえ云ひ出したんでねえけえ。なあ？」

「うんだうよ。」

「さうとも。おめえ云ひ出したんでねえけえ？　行つてこーよ！」

「おめえ行つてこ。俺等此處で、待つてんべ！」

　行つて見ようかと云ひ出した者はすつかり困つて仕舞つた。で、チッチノホー(じやんけん)して負けた者が行かうと云つても何つと云つても、仲間はきいてくれないので、到頭、彼が一番先に立つてその

あとから皆が付いて行くと云ふことに定まつた。

彼の小さい心は、好奇心と恐怖で張りきり、鼓動が耳の中でして居る様に感じられた。逃げ出したいほど氣味は惡いけれども、もうかうなつたからには「弱え奴等」にアッと云はせるだけ强さうでなければならないと覺悟を定めて、彼は、肩を怒らし大股に進んで行つたのである。

けれども此の驚くべき勇士の決心は、赤肌をした松の幹の高い所に、二本の靑い人間の足がブーラ、ブーラとして居るのを見出した瞬間、何の役に立つたらう！ 彼はサット靑くなつて、跳び上りざま仲間へ向つて、

「首縊りだぞッ！」

と叫ぶや否や、蹴飛ばされた樣に墓石の間をすり拔けて、往還の方へ逃げ去つて仕舞つた。

此の意外な一聲に、他の子供等はどの位仰天した事だらう！

彼等は我を忘れて、種々な叫び聲を上げながら、狹い小道を犇めき合つて、我勝ちに此の飛んでもない場所から逃げ出した。

急に、ヒッソリ閑とした四邊には木立ばかりがざわめいて、少許の「きのこ」のさゝつた笹が、投げ捨てられたまゝ、搖れる二本の足の下で、風に煽られて居た。

子供等の先達で、村の男共は殆ど皆墓地に集つた、多勢一塊りになり、努めて付元氣を出しながら嘘であれかしと近寄つて見ると、何事だらう！

ほんとうに首縊りだ。

顏を手拭ひで包みガックリと項垂れた男が一本の繩に吊る下つて、壞れ人形の樣に他愛もなく體中でブラ〳〵搖れて居るではないか！

雨に濡れてピッタリと肌に貼り付いた着物を透して、氣味惡く固まつた筋が明かに輪廓を見せて居る。

七八本づゝ粘り付いて刷毛の樣になつた髮の毛の上には、落葉だの芥だのが附いて居る。

彼等は今更胸を打たれた。

「一體誰だつぺ？」

皆はしきりに思ひ出さうとしたけれども。着物の模樣にも體の形にも見覺えはなかつた。

もう七年前に或る百姓女が同じ墓地内で縊死したのを見てから、トンとこんな恐ろしい事には出會はなかつた農民共は、取りあへず何をどうしたら好いのか、サッパリ樣子が分らなかつた。

簑だの笠だので雨仕度をした多勢は、默り返つて茫然と、どうしても玩具とほか思へない樣に風に弄ばれ嬲られて居る人間の體を見て居たのである。

赤土が雨に流されて、幾條も縞の出來た所には蹴返されて泥まびれになつた木の切株と、ピシャ〳〵になつた片方の草履がころがり、地上から三四尺隔つて居る死人の裾から落ちる雫で、下にはポチ〳〵と丸い小さい穴が澤山出來て居る。

「早くおろさにやあなんねえ。」

皆は同じ樣にさう思ひながら又、同じやうに誰か云ひ出す者を待つて居た。

大蛇の樣な音を立てゝ、風が裾から前へと吹きめぐつて行く毎に、激しく動く體の重味で、あの細い繩がブツツリ切れ、ドサンと云ふと一緒に死骸が落ちて來でも仕ようものならと云ふ恐れが、皆をすつかり怯えさせて居たのである。

手柄顔をした子供達は、自分をいつも揶つたり叱つたりする「おつかねえ父親」や「兄い」が今日は又どうした事か、手も出さないで只立つて居る丈だと云ふ不思議な樣子にすつかり喫驚した。

彼等は片隅に集つて、

「ちやんみたえな大人でもおつかねえんだなあ。――」

「ほんになあ、矢張りおつかねえと見えら。――」

とさゝやきながら大人共と死人とを見くらべて居た。

男の死骸が下ろされたのは、それからやゝ暫くして村に一人の巡査と墓堀りが來てからの事であつた。

突張つた體が戸板の上に置かれ、濡れて解き難くなつた手拭を長い事かゝつてどけると、傍に立つて居た一人は、思はず飛びしさつて、

「新さんでねえけえ？　う？　新さんでねえかよーツ！」

と、氣違ひの樣な聲で叫んだ。

急に周圍はどよめいて、澤山の頭が肩越しに一つの顔を覗き込んだ。

「や！　新さんだぞ！　新さんだぞこりやあ！」

「どれ？　一寸どいて見ね。や！　ほーんによ！　こりやあ一體あーんとしたこつたー！」

「あげえな親孝行息子を到頭あの鬼婆奴が、こげえな情けねえざまに仕くさつた！　さつさと斃れつちや、劫突張り奴！」

皆は、單純な心で死と云ふ事を恐れて居る所に、彼那に人の好いおふくろ思ひの新さんが、昨日まで口も利いて居たのが僅かの間にもうこんな情ない樣子になつて居るのを見ると、もう〳〵すつかり氣落ちがして仕て只無茶苦茶におふくろが憎らしい。口々に、まだ血氣の新さんがどんなにおふくろに酷められながらも親思ひだつたかと云ふ事を賞め立てた。

「告發したら何と云ふ罪名になるでがせうな？　毆打致死でもあんめえし……。」

集つた中での口利きが、得意らしく云つたけれども、まだ年若な經驗の無いらしい巡査は、間諜付きながら、かすれた聲で早く家の者を呼べとせきたてゝばかり居て、そんな事には耳もかさない。

一人の男は早速、大きな簑をガサ〳〵ガザ〳〵云はせながら耕地を越へて、水車屋の方へ馳けつけた。

水車屋の家は、向ふに小なく見えて居るのに、行つた限りさつきの男はなか〳〵戾つて來ない。皆は矢張り新さんと同じ樣な生れ付きで、人が惡く思へない性分だつた親父の事などを話しながら、折々手をかざしては、畑道を動いて來る人影に氣をつけて居た。

餘りおそいので、二度目の使が立たうとした時である。往還の向ふから一人の婆が半狂亂の風をしてころがる樣に馳けて來た。

「やあ誰だべ？　あげえにかけてるわ！」

「ほんになあ！　婆さまの癖にえれえ勢なこんだ。」

多勢の注目の中に駈け込んだのは、善馬鹿のおふくろである。

まあ一體何と云ふなりをして居るのだらう？

白髪が蓬々さかだつて、着物の袖が片方千切れて居るのも知らない様に、喉元でハーハー喘いで居るのだもの……。

「ま、善がおつかあでねえけえ。どうしたど。何い其様に狼狽てんだ？。」

「誰んだえ？　う？　首縊りしたなあ誰んだえ？」

婆は、眞青な顔をして、皆を突のけながら掛つて居た菰をまくらうとした。

「あんすんだ。新さんよ！　水車屋の新さんが可哀さうにこげえなざまになつたどよ！」

「氣い落着けて、ゆつくら話しても分んでねえけえ。」

震へて居る婆を皆はなだめに掛つた。

「何に？　新さん？　水車屋の新さんなんけ？」

彼女は、がつかりした様に溜息をついた。そしてしばらくだまつて居たが、急に顔をしかめると、

「俺らげの善もな行方が知んねえ。そんに、今朝俺らに、どこの奴だか知んねえが、おめえの馬鹿が隣んの村の、沼つぷちとかで妙な風してんの一見たぞと云つて來たで……。」

と云ひながら、ポロ〳〵涙をこぼした。

死ぬ筈はないから安心しろといくら慰めても、今度はきつと何か變事があつた様な氣がして居るからどうぞ死骸だけでも捜して呉れと、婆は皆の前へ土下座をするやうにしてたのんだ。

「彼奴の面倒うよく見て置きでもしたら、俺ら案じねえ。けれど碌に飯も食はせねえで居たゞから、俺ら恐ろしい。きつと死んだら俺ら怨んべえ。どうぞ、どうぞこげえにねがうわん!! 聞いてくんろーよー。」

皆は、矢張り此の二三日前からの天氣は只事ではなかつたと思つた。

「一夜のうちに、二人も人間が斃るたあ、何事だべ。」

「解くに解かんねえ前世からの因縁事たあ、恐れしいもんだ。」

「まつたくおつかねえもんだ。が、俺らの力ぢやどうにも仕様がねえだ、南無阿彌陀佛……」

「せめても極樂往生させてえもんだなあ。」

集つて居た者の半分は、婆を連れて、陰氣にのろ〳〵と、離れて行つた。

風が吹くたんびに、莚の端がめくれて、濡れしよぼけた着物だの。足の先だのゝ見える死骸の番をして、墓場の中に取り殘された者共は、ほんとうに眞面目な心持で、よく寺の和尚が話す、前世の宿縁とか、極樂とか地獄とか云ふ事を考へると、何でも默つて堪へて居た新さんは、斯うして死んで行つてから、自分の見て來た事、されて來た事を一つ殘らず、人間一人や二人はどうでも出來る者に云ひつけるのぢやあるまいかと、思はれて來た。

そして、親切にした者には好い報ひが來る樣に、ひどくした者にもそれ相當な恐ろしい報ひが降つて來さうだ。又新さんは降らせる力を持つて居るらしい。

「天道樣あ罰い御下しなさんぞ。」

とよく云ひ〳〵した言葉も、思ひあたる。

皆は、こんなにも偉かつた新さんに、自分達はあんまりよくつくしてやりはしなかつたと思ふと、堪らなくすまなく、こわくなつた。

「新さん。よーく覺えてゝくんろよ、俺らおめえを憫然に思つてただ、が俺ら貧乏だ。どねえにもすつこたあ出來なかつただかんな？」

動かない孤のもり上りに向つて、各自の心は、おそる〳〵さゝやいたのである。

（十九）

村中は全く混亂した。

聞くもいやらしい首縊り！

まして、あの惡い所と云つたら爪の垢ほどもない新さんが、そんな情ない死やうを仕やうとは……。

それに又、善馬鹿まで死んだらしいと云ふのだもの。

一體どうしたと云ふ事なんだらう？　かうなつて見ると、こないだ中の空模様は、やつぱり凶い前兆だつたと見えるなあ……。

皆が同じ事許りを云つた。そして、思ひもかけない時に、思ひもかけない人にとり付く死神、時々は自分達も狙はれる事があるに違はないおつかない死神が、今は直ぐ體の傍に近よつて來て居る樣な氣がして彼等は、戸外へ出るのさへもいやがつたのである。

私は、此の話を聞いた時、どうしてもほんとにされなかつた。

私の知つて居る中で、今日までに死んで仕舞つた人は指を折つて數へる程ほかない。私が生れた時の事を知つて居る人は、今も私を赤坊の樣に思つて可愛がつて居てくれる。そして、丈夫で勢よく働いて居るぢやあないか？

それだのに、善も新さんも、私がほんとうに知つてからまだ二月ほか立たないのにもう死んで仕舞つた。しかもこんなに急にこんなに氣味惡く……。

一昨日まで私は善馬鹿が歩いて居るのを見て居た。ついこないだまでは、「お早う。今日は工合はどう？」と新さんに挨拶して居たのに、其の新さんはもう死んで冷たくかたくなつて、直ぐ埋められて仕舞はうとして居る――。

私は、どんなに辛くともいやでも、死ぬなどゝ云ふことは思つても見ない、又思ひやうない此頃の生活を考へた。

廣い世の中では一日に幾人人が死んで行くだらう？　十人死に、百人死に、千人死んで居るかもしれない。が、その中に私は生きて居る。しかも斯うやつて達者で、する事も澤山あり可愛がられて生きて居る。

私には總て消極的な考へが出來ない。

私はどんなに困つた事に會つても――勿論私の狹い天地で動いたり消えたりする事は何でもない下らない事なのだらうけれども――どうにかやつて仕舞ふ。

死なうと思ふより先づどうして突き拔け樣かと思ふ。そして、私は自分の頭が乾からび鈍くなり、もうほんとうに生きて居る意味がなくなるまでは、どんなにしてでも生き拔かうと思つて、思つて思ひ定めて居るのである。其故私は、昔の婦人達の樣にすぐ命を捨てる事は、どんなにしても出來ない。

私の生活に意味のある間は死ねない。

けれども私の今直ぐ傍では、かうやつて二人も死んで居る。而も皆尋常の死に樣をしたのではないぢやあないか？

私が若し、あの夜彼の林へ行きかゝつて新さんの死なうとするのを助けたとしたら？

私は一生懸命に止めるだらう。體をなほして又働くやうにと云ふだらう。けれどもそれでほんとうに助けたと云へるだらうか。私には、どうしても、只あの時、あの木の枝から新さんを離した丈の事ぢやあないか。

私は新さんの一生を守つて暮す事は出來ない。年中心を勵ましつゞけては居られない。そして、僅か許り療治され、金をもらひ、貧しく辛く淋しい世の中に突き出された所で、何がうれしからう。

「俺は救はれた。けれどもどう仕ようと云ふのだ？　前よりも辛い思ひをし、苦しみもがいて生かして置かれる事はちつとも欲しくないのだ！　お前は一人の人間を助けたと云ふ事に滿足して、いつまでもたのしむだらうが、己はいつでも、『あの時死んだら』と悔まなくちやあならぬ。」

私はほんとうに、若しあの時新さんを助けたところで、一生を確かに强く、虐げられずに送らせる事が出來なければ、何でもない事になつて仕舞ふ。

死なうとする者は救けるべきだと云ふ常套的な感情に支配されて、その者の一生を考へるより先に、
自分の心に滿足を與へるのぢやあないか？
　私は此處に思ひ至ると、今までの總てがグザ〳〵に壞れて仕舞ふ樣に思はれた。
　考へて見れば、私が今日までして居た事の大部分は人を惠むと云ふ事に餓ゑて居る心を滿たして居たのぢやあないか？　私は彼等に衣服をやり、金をやり、食物をやり、同情した。
が、それ等は、彼等の一生に對してどんな意味があるのか？
　若し私がほんとうに、大きな愛で彼等を包み、深い同情で引きあげようとしたのなら、新さんを死なせずに濟んだらう！
　善馬鹿を酒のみにしないで濟んだのだらうに――。
　けれども二人は、私がどうも出來ないうちに死んで埋められやうとして居る。ほんとうに、私がどうもしないうちに、なる丈のことはちやん〳〵となつて仕舞つたのである。
　新さんが、自分の命の尊さを知るまでに私が力づける事は思ひもよらない事であつた。
　私はどうしても、彼等を眞に愛しては居ない。又愛せない！　どうしたら好いのだらう。
　私はとう〳〵失敗して仕舞つたけれども、彼等に對して何かしてやらなければならないと云ふ望みばかりが、どれほど私に情けない思ひをさせるだらう！
　私は、お前方の前には、罌粟粒程もない人間だつたのだ。お前方には、氣に入らない事も、馬鹿々々しい事も澤山したかもしれない。私は、今まで尊がられて居た所謂慈善だとか、見榮の親切だとか云ふ

ものを、お前方の爲を想ふばつかりで、散々に打ち壞した。追ひ拂つてしまつた。

けれどもその代りとしてあげるものは何處にあるか？

私の手は空つぽである。何も私は持つて居ない。此のちいつぽけな、みつともない私は、ほんとうに途方に暮れ、間誤付いて、只どうしたら好いかしらんとつぶやいて居るほか能がない。

けれども、どうぞ憎まないでおくれ。私はきつと今に何か捕へる。どんなに小さいものでもお互に喜ぶことの出來るものを見つける。どうぞそれまで待つておくれ。達者で働いておくれ！　私の悲しい親友よ！

私は泣きながらでも勉強する。一生懸命に勵む。そして、今死なうと云ふ時にでも好いから、ほんとうに打ちとけた、心置きない私とお前達が微笑み合ふ事が出來たらどんなに嬉しからう！　どんなにお天道樣は御よろこびなさるか？

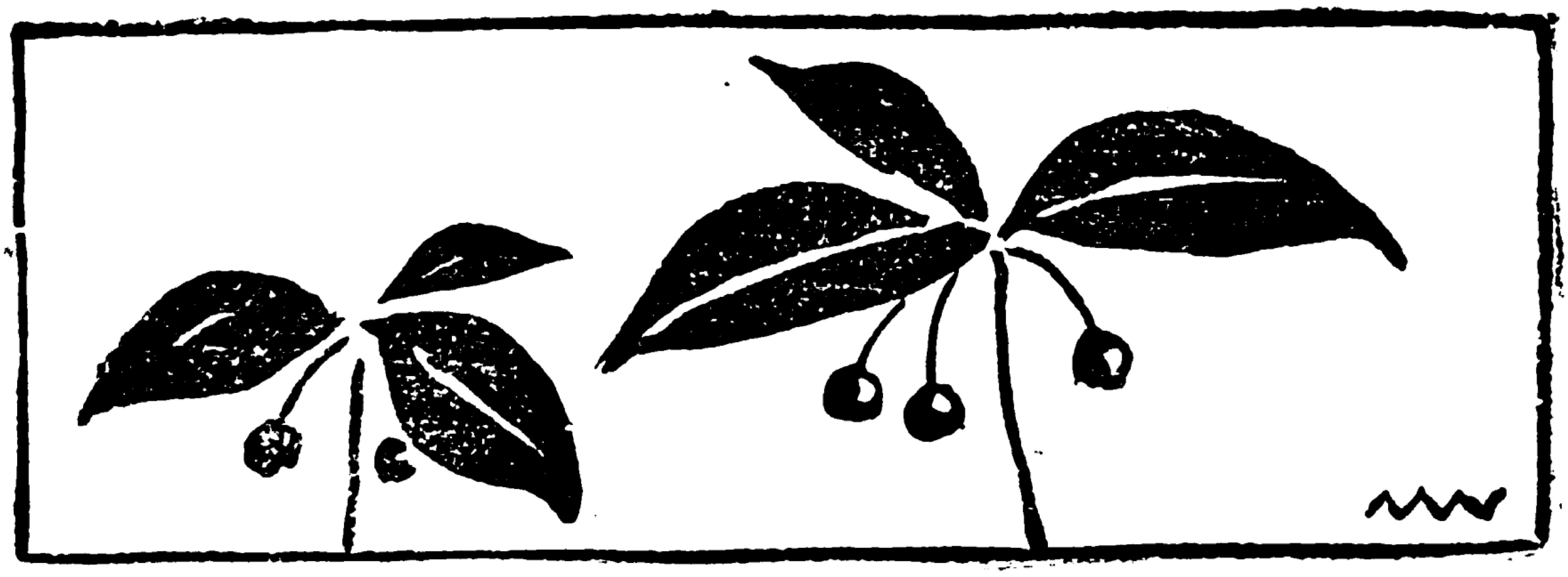
私の大好きな、私を育てゝ下さるお天道樣はどんなに「よし〳〵。」と云つて下さるか！

あの好いお天道樣が…………。

普馬鹿の死骸は夜になつてから見つかつた。

隣村の端れの沼に犬を抱いて彼は溺れて居た。

澤山の小海老の行列が、延びた髮の毛の間を、出たり入つたりして居たと云ふ。



二代目

上司小劍

一

私立でこそあれ、この春田病院は、縣立病院よりも勝つてゐると土地の人たちに評判されてゐる。殊に外科にかけては、此處の院長ほどの人を、京都の大學病院にも見出すことは出來ぬ。大學病院で欲しがつて、度々抱へに來るけれど、院長はこの町の人々の生命(いのち)をば、自分の一生だけ大事に預かつてゐるつもりで、金や身分に眼を吳れぬのである。其處がゑらいぢやないか。——

春田福太郎が、この春田病院へ入院した時、高い熱に苦みながら、此處へ入(はい)りさへすれば自分の身體は必ず回復すると、さう信じ切つてゐた。自分は院長と同じ苗字だもの、院長は自分を特別に扱つて吳れるに違ひない。事によつたら、手術料や入院料を免除して吳れるか、尠くとも半減にして吳れるやうなことがある

かも知れぬ。……なぞと、彼れは吊臺の上で考へてゐた。
福太郎の病室は、二階の三號室に定められた。坊主疊の上へ、厚い蕈蒲團を敷いて、それに痩せた福太郎の身體をソックリと置いた。左の足首から指先きへかけて、一面に繃帶を卷いてあるのが、痩せて小ひさい身體に比べて、不權衡に大きく目立つて見えた。
『あゝ痛ア、……あゝ痛ア、……』と、福太郎は薄のやうに伸びた疎らな口髯の中から、血の氣の薄い唇を動かしつゝ、斷續に叫んでゐる。何うかした拍子に、一寸でも其の痛い方の足に觸はらうものなら、福太郎は病院の門外へまでも響きさうに、
『あゝ痛い、……』と、絞るやうな聲を出すのである。
『今に院長さんがいらして、痛みを止めて下さいますから、辛抱しておゐやすや。』と、薄皮の色の白いほそ面の、眼の細い、東京戻りの看護婦は、福太郎の耳の側へ口を寄せつゝ、東京辯に大阪辯を接ぎ足して言つた。
『北尾さん、……患部の方へは蒲團をかけずに置いたらえゝし。』と、今一人の頭髮の薄い口の尖つた看護婦は、微笑を浮べながら言つた。
『村長はん、俺等もう去んでもよろしおまッしやろなア。』と、怖さうに扉を開けて、廊下から大きな豬ひつゝ、首を鈴生りにして、腮をしやくり〳〵會釋をした。
『いやア、どなたも御苦勞はん。……えらい目に遭はしました。……』と、焦茶の二重廻はしを着たま

まの村長は、病人の方へ氣兼ねする風に言ひながら、無器用に立ち上つて、痺れてゐるやうな足つきをして歩いて行つた。

「さいなら、先生、……早う快うなつて戻つとくなはれ。……さいなら、あん。……」と、農夫だちは胴間聲を上げて、白い寢床の方にも會釋して行つたが、聞こえたか、聞こえぬか、福太郎は、

「あゝ痛ア、……」とより外は、聲といふものを出さなかつた。

「俺は今夜、事によると此處へ泊つて行くさかいなア、明日のことは宜しうおたの申しますと、竹中はんに言ふてんか。」と、村長は農夫だちを廊下まで送り出して、助役への傳言を頼みなぞした。

「餘ッぽど痛むと見えますなア。」と、首席訓導の横田は、唇の反り返つた顏に、煮え切らぬ痛ましさを浮べて、光の鈍い團栗眼で福太郎の足の方を見てゐた。

「餘ッぽど痛む、もないもんや、あんたが附いてゐながら、こんなことにして了うたんやないか。」と、廊下から入つて來た村長は横田を睨み付けつゝ、先刻から幾度も言つたことをまた言つた。

「へゝゝゝえ。」と、横田は頭へ手をやつて苦笑ひをした。

「お父つあん、撫りまへうか、何處ぞ。」と、娘のお喜美は、白粉の斑らになつた顏をケロリとさして言つた。

「あゝ痛ア、……喜美の馬鹿ッ、何を言やがる。」と、福太郎は窪んだ眼にかどを立てゝ、ぐッと娘を睨んだ。お喜美は白い壁にピタリとくッ付くやうにして坐りながら、横を向いて一寸舌を出した。

「春田君、まあ〳〵さう言ふたもんやない。……喜美子さんもこれから、この病院で君の看病を一手に

引き受けるんやないか、がみ〳〵言ふてばッかりゐても何んならん。」と、村長は宥めるやうにした。

「何んのあんた、村長はん、こいつが、病院へ來るのに白粉なんぞ附けさらして、べた〳〵、……あゝ痛ア、……」と、福太郎は身體さへ自由になるならば、躍りかゝつて、お喜美の膨れた頰に拳骨を一つ加へさうな氣色を見せた。

「鬼も十八、蛇も二十歳ちうやないか、喜美子さんは十八の花盛りやもん、白粉ぐらゐ附けたかてなア。……」と、村長は氣の毒さうにしてお喜美の方を振り返つた。

「喜美ッ、……」と、福太郎が大きな聲を立てたが、お喜美はおど〳〵して容易に寄り添ふた白い壁から離れさうもなかつた。

「喜美ッ、……」と、二度目に福太郎が呼んだ聲に引ッ張られて、お喜美は父の枕頭近く膝行り寄つて來た。

「大阪の祖母さんとこへ電信打て、……」と、福太郎は紙で貼つた白い天井に、ところ〴〵黄色い汚點のあるのを眞上に仰ぐやうに、眼の玉を上の方へ寄せながら、咽喉の嗄れる聲を出した。

「電信て、何うやつて打つのん。……何んと書いて。……」

「この馬鹿がッ、……あゝ痛ア、……十八にもなりくさつて、電信一つ打てんのか。……阿呆めが、……學校の讀本にちやんと書いたるやないか。……忘れさらしたか阿呆めが。……あゝ痛ア、……」と、福太郎は泣き聲になつてゐる。

「春田さん、さう腹立てゝも仕樣がおまへんわい。……學校の讀本は讀本だけのもんで、實地の役に立

たんよつて、そいで喜美子さんを叱られるのは無理や。……』と、横田は反り返つた唇をいよ〳〵反り返へらして、無器用に執り成し振りを見せようとした。

『何が無理や横田君、……あゝ痛ア、……君までがそんなこと言ふて、何うするんや。苟くも谷山尋常高等小學校の首席訓導たるものが、教科書を實地の役に立たんとは何んぢや、さういふことなら、僕はたッた今、校長の資格で君に辭職を勸告する。……あゝ痛ア、……僕の教育上の主義は、總べて實際主義ぢや。……あゝ痛ア、……』と、福太郎は紫色に乾いた唇を舐め〳〵、鋭い聲を出した。

『まア〳〵春田君、さう君みたいに興奮し給ふな。……横田君も別にさう深い意味で言ふたんやない、なア横田君。』と、二重廻はしを脱いだ村長は紬の黒紋付の兩袖を擴げつゝ、頻りに手を振つた。

『チチニウインスグコイ』

幾度か書き消しの半紙を丸めてから、横田は漸くこれだけの電信文を書き上げて福太郎は見せると、福太郎は重々し氣に點頭いて、またチィッと上目を使ひつゝ、天井の汚點に見入つてゐた。

お喜美は少しづゝ後退りして、何時の間にか白い壁の窓際にまで寄つてゐた。窓の外には、廣い庭の塀際に一昨日の雪が消え殘つて、たゞ一本の老木の梅に蕾が笑ひてかけてゐた。

二

院長の診察があつて、左の足の患部に差しあたつての手當を加へたので、痛みだけは漸う止まつて、福太郎はうつら〳〵と、疲れ切つた神經を夢路に誘うてゐた。村長も横田も宿へ引き取つて、病室にはたゞ一人お喜美が、窓際に居睡りをしてゐた。

稲太郎は、ふと眼を覺ますと、また白張りの天井の汚點を上は目に見上げつゝ、さま〴〵のことを考へた。

自分は何うしてこの病院へ來たのであらうか。……

『關屋、……さうぢや、關屋の藪醫者が惡いのぢや。……』と、稲太郎は乾き切つてゐながら、敢へて水が欲しいとも思はぬ舌を、震へるやうに動かして、心だけで呟いた。

『關屋の座敷の緣側で左の足の藥指を切つたのは、……』と、稲太郎はまた心の裡で獨言して、それは何日のことかと考へてみようとしたけれど、僅か昨日のことが、ずうつと前のやうに思はれて、其の時のさまを確かに思ひ浮べるだけに頭の中の働きがなかつた。

足の痛みが止まつたので、音無川の淺瀨に浸りつゝ鮠を釣つてゐた時のことが、ふいと思ひ出されて來た。左の足の先きが淸々して、其處に碧を溶かしたやうな美しい水のせゝらぎがあるといふ氣がして來た。

川が曲つて淵になり、淵が溢れて瀨を作つてゐる。其の下流は、眞ん中でも水が膝には屆かない。選り分けて敷き並べた如く、綺麗な小石が水あかを付けて滑々してゐる上へ、跣足を踏み締めつゝ、嫋やかな雌竹の細竿で、蚊頭を流してゐると、鮠が頻りにかゝつて、左の手の魚籠には銀色の小ひさな鱗の跳ねるのが見る〳〵殖えて行く。左の足の痛い指は、淸らかな水に皮の白くなるまで洗ひ拔かれて、毒氣も消え失せたのか、冷やかさが其の指先きから頭のてッぺんまで滲み上つて來ると思はれた。

左の足の親指の痛さの可なりひどくなつて來たのは、三年前の夏であつた。其の年の暑中休暇は、か

うした川狩に、足を清水へ浸し通して、痛みを忘れた上、獲物を下物の晩酌で、夜はまだ酔ひに痛みを消してゐた。秋から冬、冬から春にかけての長い間、魚は淵に眠つて川狩も出來ぬので、痛い指を撫で〳〵、樂しい夏の來るのを待つた。

川狩の封ぜられた間、左の足の指の痛さを紛らすものは、たゞ酒であつた。海拔三千尺からの大きな山々に取り圍まれた、人口四千五百の谷山村には、割り合ひに金持ちが多い。財産といふのは多く山林で、田畑のやうに税が重くないから、平原の農夫のやうに、お上へ納めるものゝ爲めばかりに働いてゐるといふやうなことはない。無論田も作るから、農夫で通つてゐるが、物持ちの重なる財産は深い山林である。

汽車に乘るには、一番近いところで八里行かねばならぬ。其の中四里は車も通はぬ山路で、歩くのが厭やなら牛の背に跨つて、ノツリ〳〵と涎を垂らしつゝ歩く動物に運ばれて行かねばならぬ。馬を飼つてゐる人は、それに乘つて景氣よく鞭を揚げて行くが、この邊り耕作には一體に牛を使ふから、馬を飼つてゐる人は一二軒よりない。

可味い食物も、面白い混せ物もないこの村では、酒がたゞ人々の歡喜の種になつてゐる。税の高い酒を飲むのも、お上へ御奉公の一つだとさへいふものもある。村で生れて村で育つたものばかりの中へ、飯に砂の入つたやうに、他所で生れて他所で育つたものゝ混つてゐるのは、小學校の教員たちと駐在所の巡査とである。其の砂のやうな人々をば、柔かく醱酵さして、同じ飯の同類にして了ふのは、遍に酒の力である。この村では酒を飲まぬものは人交りが出來ぬ。

「向ふから源やんが來る。酒飲んでゐて、顏が赤い。えらいなア。……」と、子供等も飲酒家を尊敬する。同じ飲酒家でも醉つてゐる時と、醉つてゐない時とで、尊敬を受くる度が違ふのである。

「今度學校へ來た腮長はんは酒飲むんかなア。……」

「飲むとも、飲むとも。……酒の風呂へでも入るほど飲むちうで。」

「さうか、それやえらい。腮長先生えらいなア。」などと、村人が語り合ふほどで、この村の小學校へ雇はれた敎員で、酒を飲まぬものは、氣受けがわるくて、半年とは地位が保てぬのである。

　福太郎が校長としてこの村の小學校へ來たのは、五年前の寒い頃であつた。履歴書に飲酒家とは書かなかつたけれど、酒が好きだといふことは、執り持ち役の郡視學の觸れ込みで、村人は皆新校長の風貌を慕ひつゝ、其の來任を待ち構へてゐた。

　飲むと言つても、五合酒に達ぎなかつた福太郎は、この村へ來てから忽ち一升酒に昇つて、二年と經たぬ中に二升から三升に及ぶほどの酒量になつた。自ら授業はせずに村役場の連中と相談事をしたり、分校を巡廻したりしてゐる校長の地位は、何うしても酒を飲む機會が多かつた。相手がなければ飲まなかつた酒を、獨酌で一二升を傾け盡すほどになつた。足が痛くなつてからは、殊に酒で痛みを忘れようとすることが多い。川狩が出來ない時候には、酒の外に足の痛みを消すよすがもなかつたのである。

　左の足の親指の少しづゝ痛み初めたのは、三年前の霜解の頃であつたが、凍瘡のとがめたのであらう、と村の人々や敎員等がいふので、自分もさう思つてゐた。痛みは緩んだり進んだりして、親指から他の指へ順々に移つて行くやうな氣がしたが、時によると、けろり忘れたやうになつてゐることもあつ

た。一夜痛んで眠られぬといふほどのこともあつて、朝起きると直ぐ音無川の川原へ二三丁の路を急ぎ、冷たい水に足を浸してゐると、熱が去るのであらう、指の先きから清々しくなつて、痛みも緩んで來る。川狩の時候でなくとも、音無川の水は、かうして一寸した痛み止めの藥にはなつた。それから家へ歸つての朝酒にトロツとして、足の先きのことが餘り氣にもかゝらぬやうになつた。

靴を穿くのがわるいのであらう、と言つて吳れる飮み友達があつたので、早速草履にして學校へ出てみると、成るほど工合がよい。それまでは何んな山路でも靴で往來したのを、草履に後掛けをすることにして、三里四里は何んでもなく步いた。四里も步くと左の足の先きがヅキン〳〵と痛んで來るけれど、それを辛抱して、跛足を曳き〳〵してゐると、また痛みを忘れることもあつた。

四里の山路を牛に乘つて、△△の町へまで出た序に、其處からは車の通ふ縣道を四里、ガタ馬車に搖られて××の市へ行くと、久しぶりに鐵道を走る汽車の姿も見たが、七年前この市に近い村の小學校に奉職中亡なつた父の墓を極樂寺といふのに尋ねてみると、柵は壞れ花筒は破れて、『春田實之墓』とした木標も斜に傾きかけてゐた。それを眞ッ直ぐに引き起す途端に、側面を見ると、『孝子春田福太郎建之』と書いてある紛ふかたなき自分の手蹟が、自分を責めるやうに、剝げかゝつた墨色にも怖ろしい力を含んでゐるやうであつた。『孝子』の二字が殊に銳く自分の眼を射るやうであつた。

自分は孝子であらうか。と其の時さう思ふと、立つても居てもゐられぬと思はれた。墓標の側面へ『孝子何某建之』と書くのが、土地の慣はしとは言ひ條、これを建てる時には、習慣といふ麻藥を嗅がされて、何の氣も付かず、何の意味もなく臆面なしに書いた『孝子』の二字に、今はまた何んといふ氣の引

けることであらう。

自分は父に養つてもらつたに違ひない。それは學資の要らぬ師範學校などへ入れッ放しにされて、世間の子が親から受けるほどの慈愛をも費用をも注ぎ込まれては居らぬけれど、それは家が貧しかつた爲めでもあらう。

「俺は鵞ちや、子を拵へたなりで、碌に仕込みもようせなんだ。……其の代り年寄りになつても子の厄介にならうとは思はん。一人でやつて行くわい。」と、父はよく言つてゐた。さうして六十近くになつても、大阪で工場の門番などをして、小金を溜め込んでゐた。

其の父が病氣危篤といふので、自分は汽車賃を吝み〳〵、大阪まで遙々行つて見ると、府立病院の三等室で、父は物も言はれぬほどの容體になつてゐた。病症は腎臟炎とのことで、丁ど其の頃外國で腎臟病の研究をして歸つて來た副院長が、力一杯に手を盡した爲め、自分の着いた翌日あたりから、少しづつ見直して來た。

この時自分は殆んど十年振りで生みの母にも會つた。母は長いこと父と別れてゐて、父はもう母のことを「先妻」と呼んでゐたけれど、戸籍はまだ拔かれずにある。父は二三度も變な女を引つ張り込んで、後妻と呼んでゐたが、六十に近づいて身體が衰へるとゝもに、もう後妻の入用もなくなつて、寺町の小ひさな寺に座敷借りをして、自炊しながら工場へ通つてゐた。父の重病が東京から來てるえらい役人の邸へ仲働きに住み込んでゐる母の耳へも入つたので、母は流石に優しい女心から、人でなしの夫の上を案じて、病院へ見舞に來たけれど、病に障はつてはといふこれも優しい女心から、顏を見ることを避け

て、自分を受付へまで呼び出し、心を籠めて拵へたらしい鳥の羽の入つた柔かい大きな枕を持つて來て渡した。さうして自分にまで小遣ひの足しにと言つて三圓を握らせ、涙ぐんだ顔で自分の姿を頭から足まで見上げ見下ろし、名殘惜しさうにして歸つて行つた。

　父は少し快くなつて來ると、早く退院したいと、たまらないやうに言ひ出した。入院する時は夢中であつたのが、快くなつて正氣づくと、

『俺なんぞは病院へ入れる身分ぢやない。……一體この病院は無代か。』と、キョロ〳〵して枕元に坐つてゐた自分に訊いた。手續きをすれば慈善病院へ入れる途もないではなかつたさうだけれど、急場の折とて工場の上役や同僚が相談の上、此處の三等室の疊敷きの狹い室へ擔ぎ込んだのである。入院料は一日一圓八十錢、雜費を合はして二圓餘りとのこと。それを父の耳の側へ口を寄せて自分が言つて聽かすと、

『なんぢや、一日二圓あまり、そらどいらいこッちや。……』と、父は衰へ切つた身體を跳ね起さんばかりにして、周章てふためいた。

『お父つあん、生命には代へられませんよつてなあ、まア氣を落ち付けて、ゆッくり養生する氣になりなはれ。』と、自分は小學校の兒童に言つて聽かせる調子で言つた。

『生命には代へられんて、……身體が達者になつても、錢が無うては何んにもならん。……それとも貴樣入院料を出すか。』と、父は身體の自由の利かぬのに悶えつゝ、擡げやうとした禿頭を、母の優しい心を包んだ柔かい枕の上に落ち付けて、苦り切つた顔をした。

「そら入院料から何から皆私がせんならんのですけど、何分薄給の身の上で、心に任かせませんのは、幾重にもお許し下さい。」と、自分が切口上で言ひ〳〵、四角張つて頭を下げると、父はニヤリと厭やないやな笑ひかたをして、

「俺はお辭儀なんぞして貰ひたうない。……お辭儀せいで、頭の一つや二つ擲られても、錢を貰ひたいなア。……どれ一つ其の枕元の革文庫取つてんか。」と、父は入院の初め殆んど人事不省に陷りながら、これぱかりは大事に引ッ抱へてゐたといふ、五寸幅に長さ一尺あまりの古臭い革文庫を自分に取らせ、枕の下から小ひさな鍵を引き出して、「開けませうか」と自分が横から言つたのを耳にもかけず、力の失せた手首を搖かしつゝ、血の氣の乏しい黑ずんだ指先きで、行りにくさうにして革文庫の錠をあけると、大儀さうに蓋をとり、內部をば自分には隱して見せぬ心らしく、横を向けて一つ〳〵書付の類を調べた末、銀行の預金通帳を抽き出し、大黑樣の書いてある表紙を捲くると、

「あッ、……」とばかりに驚きの叫びを立て、「安田君、安田君」と、入院前後から一手に世話をしてゐる同僚の名を呼んだ。

父と同い年にしては、頭髮の黑い上に、少しも禿げてゐない安田といふ鼻の尖つた老爺が、丁ど其處へ現はれて、懷中に手帳を探ると、袂から老眼鏡を出して、丹念に其の蔓を耳に懸けてから、引き出した五十圓の金の使ひ途を、手帳の鉛筆書きに照らし合はして、諄々と說明した。父は一ヶ條毎にチッと考へた上、胡麻鹽の髯の汚なく伸びた腮を、物憂さ氣にしやくつてゐたが、漸う腑に落ちると、傍から老爺の手帳を覗き込んでゐた自分に向つて突然、

『福太郎もう退院せんならん、お前一つ先生に懸け合ふて來て呉れ。』と、矢も楯もたまらぬやうな調子で言つた。老爺は鋭さの眼を瞠つてゐたが、更に懷中から薄汚ない財布を出すと、紙幣銀貨銅貨取り混ぜたのを摑んで、幾度か丁寧に勘定した後、疊の上へ播き餅を乾すやうに並べて、

『何うぞ一つ見とくなはれ、あんたがおいなはつたさかい、會計を引き渡しますわ。』と、自分の方へ首を突き出した。父はがつ〳〵した樣子でお金の並んだ方へ横目を使つたが、それでも、老爺に『御苦勞はんだした』と挨拶することは忘れなかつた。老爺が何か物足らぬさまで病室を出て行くのを待ち兼ねてゐたらしい父は、

『何んぼ殘つたる。』と、眼を光らしつゝ自分に訊いた。

『三圓八十七錢五厘の釣錢やて、あの人が言ふてたぢやありませんか。』と、自分は稍言葉を險はしくして言ふと、父は氣味のわるい微笑を漏らして、

『あゝそやつたなア、何んしよ五十圓で二十日居られんやうでは、一日二圓であがらん勘定やないか。……こんなとこにもう二十日も居たら身代限りや。……早う退院さして貰うて呉れ。』と動くことの出來ぬ身體で口だけせか〳〵さしながら言つた。

『何んぼ何んでも、お父つあん、それは無理だへう。』と、自分は言つたが、父は拗ぢるやうに首を動かして聽き入れなかつた。さうして、『退限の話を早うして來て吳れ』と二度も急ぎ立てるので、自分は不承無承に立ち上つて、折柄牛乳を持つて來た看護婦に醫局の方角を訊き、長い廊下を曲つて階子段を下り、突き當つて折れて、道程にしたら凡そ一丁半も步いたと思ふ頃、漸くそれと分る扉を見付け、瀬戶

の把手を捩ぢて押し開くと四角い卓子を前にして、若い醫者が二人、何やら話し合つて笑ひ興じてゐたが、不意に闖入した自分を見ると、俄に改つた様子をして、白らけ切つた風になつた。自分も何んだか悪いことをしたやうな氣がして、立ち竦んだが、咽喉へ引ッかゝる聲で父の退院のことを話すと、醫者は「はアん」と氣のない返辭をした末、「いづれ院長に申しまして」とより以上は取り合はなかつた。自分は宛で鳩の使のやうにして扉を出たが、其の時振り返つて見ると、右の壁にある「醫局に出入せんとする方は必ず看護婦の案内に依らるべし」といふ貼り紙に氣が付いて、覺えず顔を赧くした。

翌日、副院長の回診の時、父が自身に退院のことを話し出したけれど、副院長は「飛んでもないこと」と取り合はなかつた。しかし父はそれに屈せず、飽くまで退院さして呉れと迫つて、「何うしてもお許しが出まへんのなら、今日から後の入院料はお拂ひしまへんよつてなア。」とまで言つたので、温和しい副院長も腹を立て、それを傳へ聞いた院長や醫員も愛相を盡かして、「さういふ我儘な患者は當方から退院を命じます」と言ひ渡された。「それ見たことか、矢ッ張り、これが欲しいよつて置きたがるね」と、父は卑しい笑ひかたをして、右の手を親指と食指とで圓い形を作つて見せ、早速吊り臺を誂へて病院を出て了つた。

借りてゐた寺の六疊に黴臭い蒲團を敷いて寢てゐると、一週間經たぬ中に、病氣はだん〳〵ぶり返して來た。すると父が今度は、

「お前んとこて、ゆッくり養生しやう。田舍は空氣がえゝよつて、……」と言ひ出したので、無理な支度をして、三等汽車へ乗るといふのを強ひて二等へ乗せることにして、吊臺を車室まで擔ぎ込むことを

断られたから、プラットフォームを自分の肩に倚りかゝらして大患の父を靜かに歩かせ、縱横に龜裂のの入つた大きな瀬戸物でも扱ふやうにして、漸くに其の頃自分の勤めてゐた小學校の舍宅まで連れて來たが、其の翌々日の晩の七時頃に、父は果敢なく落ち入つて了つた。

後から母のよこした手紙にあつた如く、父は全く自殺するやうにして生命を棄てたのであるが、「福太郎、今の世の中では、生命より錢金が大事ぢやぞ。……俺がかうなつたのは、皆酒の爲めぢや、お前もあんまり酒を飲むなよ、錢を使ふて身體を傷めて、こんな阿呆なことはない。……けどなア生命があつて錢がないより、錢があつて生命がない方が何んぼよいか知れえへん。」と、生れて初めて乘つた二等汽車の中で、父はあの大事の〳〵革文庫を抱へつて、自分に言つて聽かした通り、死んだ後にも銀行の預金帳には百圓なにがしからあつた。

父が息を引き取ると直ぐ、自分は死骸の枕頭にあつた革文庫に手をかけたが、今者の際まで他人はもとより血を承けた息子の自分にさへ指頭だに觸れさせなかつた革文庫には、父の魂魄が搦み付いてゐるやうな氣がして、死骸の手がにゆうと伸びて自分の腕を攫みはせぬかと、覺えず身慄ひをしたけれど、父が死にさへすればこの革文庫はもう天下晴れて自分のものである、何の恐るゝところがあらうか、といふ自信が俄に自分の心を強くして、一度引き込ました手でまた革文庫を引き寄せ、帶革を外さうとしたが外れないのは、周章てゝゐて錠前を開けることを忘れてゐたのである。そこで、刻々に冷たくなりつゝある父の死骸の枕の下へ手を差し込んで探つてみたが、鍵らしいものは手に觸れない。それから不圖氣の付いたのは、蒼味がゝつて黑ずんだ父の首に懸かつてゐる細い紐である。白が鼠色になつてゐる

其の紐をば、自分はさながら邯鄲師か掏換にでもなつたやうな氣持ちで、窃と引ッ張つて見ると、襟元がはだけて骨の露はな胸の下から、スル〳〵と小ひさな蟇口が手繰られて出た。それを取つて開けやうとすると、手擂れに剝げた黒い革とニッケル鍍金が眞鍮の生地を見せた金物とに、些かながら温か味のあるのに、自分の手はぶる〳〵慄へたが、ポチリンを捻ねると、中には五個ばかりる銅貨に混つて小ひさな鍵があつた。それは疑ひもなくあの革文庫の鍵で、帶革は直ぐ開いたが、内部には大阪の病院でチラと見た書付の束の下に、父が大事な中にも殊に大事にしてゐた銀行預金の通帳があつて、其の下には昔風の大きな革製の紙入れと、これも古い型の大きな銀側時計が、丁ど十時をさして止まつてゐた。

ほんの眞似事のやうな葬式を濟まして、あの極樂寺に『孝子春田福太郎建之』の墓標を立てゝから、銀行預金の引き出しやら、革文庫の中に束になつてゐる書付には、まだ物を言ひさうな證文があるので、其の貸し金の取り立てやら、父の座敷借りをしてゐた寺の方の後始末やらで、自分は初七日の濟まぬ中にまた大阪へ出たが、薄暗い寺の六疊には、簞笥もあり長火鉢もあり、粗末ながらに夜具や蚊帳も二組づゝあつて、老いた男の獨り世帶とは思はれぬまでにキチンとしてゐた。押し入れの隅には自炊用の米櫃があつて、蓋にチャンと紙で封をして赤く認め印を捺し、それに年月日を書き入れた字の亂れてゐるのも道理で、日取りを繰つて見ると、吊り臺で病院へ送られた前の日になつてゐる。其の米櫃の横にも同じやうに目張りへ封印をした可なり大きな甕があるので、封を切り目張りを破つて中を見ると、正月の切り餅を八分目ほども寒の水に漬したのであつた。もうそろ〳〵櫻の花の咲きかゝらうとする頃、こんなにドッサリ水餅の腐りかけたのを見たのには、流石の自分も呆れた。

米櫃の封印を破つて見ると、白米が五升餘りと思はるゝほど、古い二合桝を半分埋めて入つてゐた。
それからもう一つ中形の葛籠があつて、これには錠前もおりてなく、封印もしてないのを開けて見ると、
中にはいろ〳〵の燐寸がいッぱいに詰まつてゐた。其處へ寺の梵妻が縁側まで出て來て、
「お父つあんはなアあんた、工場罷めたら煙草屋する言ふてはりましてなアあんた、御自身が煙草を買やはるたんびに貰うた燐寸を溜めてはりましたんやで。…」と、莞爾々々しながら言つた。
簞笥の鍵の見付からないのに弱つた末、梵妻の世話で錠前屋を呼び寄せ、合ひ鍵をして抽斗を開けて見ると、結城紬の袷を初め、仕立てゝまだ一度も手を通さぬらしい着物や羽織が、上から下までいつぱい詰つてゐた。絹物とては結城紬の外に銘仙物が二つばかりあるだけであつたけれど、木綿物は皆地が好くて、柄も年寄相應にわるくはなかつた。
「ほんまになア、お父つあんはこないに仰山着物を持つてゝ、何時でも汚ない風してはつた。」と梵妻は、一々抽斗の中を改めてゐる自分の背後に突つ立つて、痛ましさうな顔をしながら言つた。
自炊に使つてゐたかんてきからゆきひらまで殘らず荷作りして、葛籠の中の燐寸を十ばかり梵妻へ記念に與つたゞけで、父の遺產は皆鐵道便で自分の家へ送り付け、銀行から受取つた分と、證文に物を言はして取り立てた金とを百五十圓ばかり、生れてこのかた初めて持つた大金を懷中に、まだ何か殘つてゐるものはないかと、紙屑の散らばつてゐる六疊の天井や隅々をじろ〳〵見廻はしてから、自分は梵妻に暇乞ひもそこ〳〵に、寺の玄關へ出た時、送つて出た梵妻は隅の方に立てかけてあつた毛繻子の蝙蝠傘の骨の折れたのを指さし、

「あれお父つあんのでおますよつて、持つておいでやす。」と、冷かすやうな口調で言つたのを、これも修繕すれば役に立つと、提げてゐた風呂敷包みに持ち添へて、自分は長い敷石の上に靴の音を立てつゝ、學校の制帽を被りなほすと、直ぐ其の足でステーションへ急いだ。

家へ歸つてから、先づ百五十圓餘りの金を妻のお登志と娘の喜美子とに見せて、共々に俄か分限になつたやうな歡喜に笑顔を催したが、妻は、

「わたへ、あの革文庫見ると、お父つあんの死靈が籠つてるやうで、氣味がわるうて、どんなりまへん、あれ燒いて了はうやおまへんか。」と、お登志が怖おけたさまで言ふのを、自分は笑つて聞き流してゐたけれど、父が死んで自分の家が利益をしたのは、隱れもないことである。まだ簞笥といふものゝなかつた自分の家に、東京風の三方桐の重ね簞笥が一つ出來たのも、父が死んだ爲めである。自分は薄給で、子供が多くて貧乏である。着物とても制服の外には平常着の木綿物の古いのが一つ二つあるだけで、お登志のよそいきと言へば十五六年も前に拵へたのが一二枚あるだけだ。子供等は皆着のみ着のまゝである。年頃になつた喜美子は、二十年近くも前母が嫁入りの時に持つて來た着物を仕立て直して貰つたのをば喜んで晴れ着にしてゐる。簞笥にいつぱい父の着物が自分のものになつたので、お登志は一足飛びに衣裳大盡になつた夫の果報を喜びつゝ、迫めては一枚ぐらゐ己れのものに直せる柄合ひはないかと、取つくり返へし引つくり返へし簞笥の抽斗を調べたけれど、夫のものにさへじみすぎるのが多くて、まだ老いるには間のある女の身に着けられるものとては一つもなかつた。それでも矢張りお登志は、家の内に着物の殖えた嬉れしさを損ふことはなかつた。

かくして、自分の父の死といふこととの爲めに、自分の家には喜びの氣が流れて、哀しみの雲は起らなかつた。何んといふ不孝の子であらう、と自分は左の足の指先きの痛み出してから、つく〴〵さう思ふのである。

使つても、使つても、使ひ切れぬ葛籠の燐寸を見る時に、それでもお登志は何うかすると、痛まし氣な顏をして、

『お父つあんもなア、生きてはつたら、今頃はこの燐寸を景物に出して、煙草屋してはつたかも知れん。』などと言つた。箪笥にいつぱいの着物や、革文庫の書付の爲めに、亡き父の追懷される折は稀れであつたが、葛籠の燐寸では、一日に三四度ぐらゐ、父の話柄が自分たちの口の端に上つた。

自分の一家は、多くの物を父から貰つた。さうして自分が父に捧げたものは、『孝子……建之』の墓標一本である。七回忌にもなるのに、まだ石碑は建つてゐない。左の足の指先きがチク〳〵痛んで來ると、自分はそれを思ひ出して。お登志に向ひしんみりと其のことを話したこともあるが、お登志はさういふと必ず口の端に冷笑を浮べて、

『そらまアさうだすけど、お父つあんもあんまりや思ふたことがおましたなア。……何時だしたか、……さう〳〵昇の生れた時やろ、いろ〳〵物入りが多いので、十圓貸してもろたら、親子でも金錢は他人やいふてあんた、證文書かして利息取らはりましたなア。』と、人を卑しめる風つきで言つた。

『さう〳〵、信用貸しは一番安いのが五兩一分と決めてるけど、親子やさかい十圓で二十五錢に負けたるいふてなア、恩に着せて二た月分五十錢取られたことがあるなア。』と、自分も其の折のことを思ひ出

すと、流石に妻の前にさへ顔を赧らめなければならぬ情ない父の心が怨めしくなつた。

「お父つあんはお錢のことさへ言ひ出さなんだら、ほんまに好え人やつたが、お錢を貸して呉れとでも言ふと、全で違ふた人になりましたなア。……お錢の話になると、言葉つきから顔の相まで違うて來たもんなア。」と、妻は今でもよくさう言つて、染々呆れたといふ顔をするが、さういふ時自分も合槌を打つて、

「ほんとに、親爺が金のことを話す時は、猛獸の相になつたからね。……」と、學校の教場でこれだけは校長自ら受持つことになつてゐる高等科の修身のお話に用うる東京辯で言つて、妻を笑はして了ふのを常とした。

何んといふ水臭い因緣の親子であつたのだらう。おほかた前世は仇讐でゝもあつたのであらうか。それにしても、自分は父の死によつて、金や品物の利益をした。父は息子の物にする積りで死慾を逞ましうしてゐたのではないにきまつてゐるから、金にも品物にも、一心に握つて離さぬ死靈が纒はり附いてゐるのかも知れぬ。それが祟つて自分の左の足の指が痛むのではあるまいか。それならば、兎ても癒る見込みはないであらう。あゝ、あゝ、四十三歳を一期として、自分は死ぬのであらうか。……六十一で死んだ父の祟りで生命を失ふものとすれば、差し引き十八年の損が行く。百五十圓ばかりの金と、簞笥一棹の着物と、葛籠にいッぱいの燐寸とを、十八年の生命に交換するのでは、餘り利益でもない。——

左の足の先きの痛みを忘れてゐる間に、夢ともなく幻ともなく、たゞうつら／＼して、福太郎はかう

いふことを、考へるともなく考へてゐた。
髪が狂人の頭のやうにそゝり立つたのを、柔かに埋めてゐる大きな枕は、七年前父實が病院から臨終の時まで頭を載せてゐた枕である。別れた母の心を籠めて拵へた其の鳥の羽の入つた枕である。さうして壁の方へ寄せて、亡き父の秘藏してゐた革文庫が置かれてあるのも、怪談の背景のやうで、總べてが大阪の病院での亡き父の病室の光景をば、因緣話のやうに聯想させた。

三

うつらうつらしてゐる福太郎の腋の下へ、看護婦が檢溫室を入れたのを、福太郎は半眼に目を開いてゐながら知らぬ風であつた。十時の檢溫の『四〇、五』といふのを鉛筆で印し付けると、看護婦はお喜美に一禮して立ち去つたが、一度宿へ引き取つてから、褞袍姿でまた樣子を見に來た村長は、行き違つた看護婦の白い姿を廊下で呼び戾して、
『何うだすな工合は、……まだ手術は出けまへんかなア。』と、四邊を憚るらしく密々聲で訊いた。
『さいでございます、何分お熱が高うございますよつて、手術は難かしいでございませうな。……せめて七度か、せいぜい八度ぐらいですとなア。』と。看護婦は亂れた束髮の小首を傾けつゝ言つた。
『何んぼありますかなア。熱は、……』と、村長が重ねて訊くと、看護婦は仔細らしく自分の今印し付けた檢溫表を一瞥して、
『只今は四十度五分ございます、先刻御入院になりました時が、九度五分で、午後二時が少し下がつて八度七分、午後七時がまた昇つて九度三分でございますもの。……御入院の時の九度五分は、お身體を

お動かしになつたからでござりませうが、兎に角このお熱では、……」と、看護婦はまた仔細らしく首を傾けた。中肉中背の、色も白くて、可なりな容色の女であつた。

其處へ腿摺れのしさうな體格の婦長が、電燈の影法師を廊下いツぱいに映じて、ヨチ〳〵とやつて來たので、看護婦は檢溫表を取り直すと、白い姿を翻へして、逃げるやうに廊下の果てへと飛び去つた。

「春田君でござりますがなア、明日あたりは手術が出けますでへうか。」と、村長はまた婦長の肥えて張ち切れさうな白衣姿へ縋り付くやうにして訊いたが、婦長は鷹揚に二重腮で點頭いて、

「あゝ、春田さんですか。」と、暫く考へてから、「何分お熱が高いものですから、院長さんも御心配になつて居ります。」と言ひ足して、徐ろに太い足を運びつゝ行き過ぎようとした。

「何んでまたあないに腫れたんでへうか。」と、痩せ形の村長は大きな婦長の側へ、根付けのやうにして寄り添ひながら、また問ひかけた。

「初めの手術が無茶九茶でしたよつて、其の時に黴菌が入つたのでござりますなア。……恐ろしいものでござりますよ、碌に消毒もせいで、田舍醫者が藥指を一本切つたんでござりますから、黴菌が其の切口からうぢや〳〵入つたんでござります。……脫疽と申しますものは、決して他から黴菌の入るものではござりません、不完全とも何とも申しやうのない切り方をしたんで、それが惡かつたんです。」と、婦長はゆツたりと太い足を停めて、男のやうな聲で語り出した。

「全くあの關屋ちう藪醫者が惡いのだす。あれは春田君の飲み友達でな、……」と、村長の語り續けようとするのを、婦長は斷ち切るやうに口を挾んで、

「しかし、御安心なさりませ、こちらの院長さんは大阪にも京都にもないといふほど、外科にかけては名人ですから、屹とお癒しになりますよ。」と、言ひ棄てゝ、重い身體をヨチ〳〵と行つて了つた。村長は婦長の幅の廣い俎板みたいな脊中を見送つてから、足早やに福太郎の病室へ入つて來た。

痛みがおさまつた爲めに、うつら〳〵と、眠らぬ眠りをつゞけてゐる福太郎は、村長の足音に耳を欹てることを忘れなかつた。さうして村長が、

「何うやな春田君。」と言つたのは、確かに聽き取つて、半眼の瞼を少しばかり動かしたのであるが、口では譫言のやうに、

「關屋君、……關屋君、……」と、續けて二度呼んだ。

「あゝ關屋のことを考へてると見えるなア。……無理はないわい、關屋の鈹醫者のお陰で、えらい目に遭ふたんやもんなア。」と、村長は枕元に坐り込んで、何時も窓際にばかり居るお喜美を顧みたが、知らぬ間にまた白粉の上は塗りをしたらしいお喜美は、束髮に花簪さへ一本挿し込んで、厭やに白ッぽい顏へ、ニヤリと笑を浮べつゝ、

「さいぜんから、寢言みたいなことばッかり言ふてはります。ズッと前に死なはつたお祖父さんの墓のことを言ふたりしてはります。」と、餘所事のやうに言つた。

「墓のことを、……」と、村長が眉を顰めた途端、福太郎はまた一層大きな聲をして、

「關屋君、……關屋君、……」と、今度は三度續けて呼んだ。

「何うしても關屋のことが氣にかゝると見えるなア、無理はないわい。」と、村長は獨言をしてゐたが、

其處へまた先刻の看護婦が來て、ヂッと病人の樣子を見詰めてゐる中に、五燭の電燈に淡く半面を照らされてゐる瘦せこけた顏が、漸くにしてスヤ〳〵と安らかな眠りに落ちて行つた。

「先程眠り藥を上げましたよつて、それが利いてまゐりました。」と、看護婦は低い聲で言つて、なほ暫らく樣子を見た上、誰れにともなく目禮して立ち去つた。

「かうやつてよう眠つて了うと、顏の窶れたんが餘計目に立つなア。」と、村長は痛ましげな風をして、つく〴〵と福太郎の寢顏に見入つた。

福太郎が松並村へ小學校の校長として、××市に近い小學校から轉任して來てから、丁ど足かけ六年になる。其の中の後三年は、左の足の指先きが痛いと言つて暮らしてゐたが、學校の成績はよく上つて、村人の氣受けは、これまでの校長の誰れよりも好い。相手嫌はず酒を飲んで、人を外らさぬ交際上手は、この校長先生なら一生居て貰いたいもんや、と、村の重立つた人に皆言はしてゐた。

冷たい川水に足を浸しても、大酒を飲んで醉ひ潰れても、指先きの痛みを紛らすことの出來なくなつたのに、流石の福太郎も、これではならぬと漸く考へ直して、△△町の春田病院へ四里の山路を牛の背に跨がつて乘り込んだのは、この一月の二日、すなはち一昨日のことである。八日までの冬季休業中に、ちよッくらちよッと癒して貰ふ積りで、町の下宿屋へ夜の物までを運び込んだのであるが、春田院長は委しく福太郎の左の足の患部を診察した末、

「これは脫疽の類ゐですな。……何うか明日もう一度お出で下さい、其の時誰れか御親戚のかたと御一所にね。……」と、物々しい口振りで言つた。

それが福太郎には氣に入らなかつたのである。成るだけ手輕く言つて貰ひたかつたのが、何んだか重さうに言はれたのと、脫疽といふ一言が厭やでたまらなかつたのである。それから牛に乘つて病院の門を出ると、氣が變つて、行く筈の下宿屋へは夜の物を預けッぱなしにして、牛だけ曳いて歸る積りにしてあつた草刈童に、來る時と同じやうに口を取らして、其のまゝ四里の山路をまた牛の背に運ばれて村へ歸つて了つた。

とッぷりと日を暮らして歸ると、また左の足の指が、劇しく痛んで來たので、獨酌で酒を始めてゐるところへ、年始廻はりの崩れに、何處かで落ち合つたのださうで、和服姿の首席訓導橫田と、羽織袴の學校醫關屋とが、眞ッ赤に醉つて、躍るやうな足つきで入つて來た。さうして三人が三つ鼎になつて飮み出すと、福太郎の口からは、自然に今日の春田病院での一條が、管を卷くやうに繰り返へし〳〵話された。

『憚りながら、それや一つ僕が切るかい。……何が脫疽なんて、そんなことありやせん。……瘦せても枯れても、關屋は開業醫ぢや、そんな足の指一本切れんやうなら、明日から醫者の看板外さう。……』と、關屋は突然大きな聲で、捲き舌にやり出した。

『なに、君かやつて吳れる。……それや感謝する。……僕はまた外科やないとぺヶかいな思ふてた。』と、福太郎は醉の廻はつた顏に、赤い喜びを湛へて言つた。

『醫者が醫者のことをいふのは可笑しいが、全く醫者ちうものは、仰山なことを言ふものでなア。……勿體振らんとこれにならん。』と、關屋は指先きまで赤く染まつた手の親指と食指とで圓い形を作りつゝ、

もう呂律がよく廻はらなかつた。

『藥九層倍ちうて、醫者は高いもんや。春田病院で切つたら、春田さんの指も十圓は取られるやろ。』と、横田はまた、飲めば飲むほど蒼白くなる顏の鼻先きに、冬の汗の小ひさな玉を浮らあがらせつゝ言つた。

『十圓ッ。……』と、福太郎が驚きの叫びを立てると、關屋は横から笑つて、

『春田病院でやつたら、十圓であがるもんか。……いや心配し給ふな、僕が引き受けた。……僕が酒一升でやる。』と、關屋は大醉の中にも、大丈夫受け合つたといふ心强さを見せて言つた。

芋に蒟蒻の煮しめぐらゐで、其の夜は三人で飲み明かした。酒は丁ど三升樽が空になつたと、後で細君お登志が話してゐた。

其の翌日宿醉の醒め切らぬ醫者と患者と立會人とが、前夜の飲み仲間を其のまゝに、いよいよ手術といふことになつたのである。

『お登志、春田病院へ行くと、十圓から取られるところを、關屋君が酒一升でやつて吳れるんや、差し引き九圓から値かる勘定や。前祝に一杯やらうかなア。』と、家を出がけに福太郎が言つたのを、細君が、『それはおきなはれ、毒だすで』と言つたのと、丁ど酒が切れてゐたのとで思ひ止まつたのであつた。

この村に一軒よりない醫者の關屋は、近頃家を普請して、表玄關はペンキ塗りの西洋風に出來上り、窓には靑いカーテンの垂れてゐるのが外から見えてゐる。其處は診察室で、大阪から高い運賃をかけて取り寄せたといふ長椅子なぞを並べてあるが、福太郎の手術は此處でなく、奧座敷の緣側で行つたので

ある。

それでも手術の前には、患部をアルコールで洗つたりしたのださうな。何年にも使つたことのないメスには、たいぶ錆が浮いてゐた。

『横山の源十の娘が、肛門周圍炎で、臀が瓢箪みたいに腫れたとき、これで穴を明けてやると、血膿が二合ほど出たが、直き癒つた。……あの時から一遍も使はんのやよつて、もう何年になるかなア。源十の娘が確か十六の時やつたさかい、今年は十九かなア、……足かけ四年、全三年使はんのや。』と、關屋は革砥でメスの銹を落し／＼言つてゐた。

『年頃の別嬪の臀を切つた庖丁で、僕の指をやつて貰うんや思ふと、嬉れしいなア。』と、福太郎は關屋の手にキラ／＼光るメスを眺めながら言つた。

『教育者として不謹愼なことを言ふ。……』と、關屋は態とらしい眞顔をして戯れたが、福太郎は眞面目に念を押す風で、

『君、ほんまに其の源十の娘ちうのは別嬪か。……』と訊いた。

『別嬪やとも、沈魚落雁、……』と、關屋は笑ひ／＼、指し物屋か何んぞのやうにして、頻りにメスの刃に見入つてゐた。

『美人の脂が附いてる方が好いさかい君、なるだけ其の庖丁を拭かんやうにして呉れ給へ。』と、福太郎は局部痲酔で痛みの全くなくなつた上機嫌を、取り留めもなく顔の笑に現はしつゝ言つた。

『よし、よし、別嬪の脂がこの通り刃先きへ浮いとる。……あの別嬪の手術の時も、赤田病院へ行くと

いふのを、僕が止めて、此處で手輕にプツ〱と穴明けてやつたんやが、あとをガーゼで包んで繃帶しとくと、なアに直き癒つた。』と、關屋は手柄顏をして、事もなげに言つた。

『臀へ繃帶をかけるのは難かしかつたやろ。……僕も醫者になりたかつたなア、……別嬪のお臀へ繃帶をかけるなんて。……』と、福太郎は心底から羨ましさうに言つた。

『醫者の役徳やなア。……けども役目でするんやから、一向面白うもない。……さアこれでよい、ぼし〱かゝらうか。』と、關屋は無雜作にメスを取り直し、助手に使ふ藥局生の持つて來た金盥をば二つ、其處へよきほどに並べさした。

『さア、……』と、手術服も着けない褞袍のまゝで、關屋に左の足首を抑へられた時は、流石の福太郎も、今更に怖ろしいやうな氣がして、顏の色が少し變つた。

『いよ〱行りますかなア。……酒一升の手術、……安いもんや。』と、立會人といふ眞面目腐つた名義で隨いて來た飮み友達の横田は、何處へ行つてゐたのか、先刻から姿を見せなかつたが、この時ひよツこりと藥局の方から現はれて、呑氣さうな聲を出した。

この『安いもんや』といふ一言が、どんなに福太郎の心を勵ましたか知れなかつたやうである。福太郎はこの時、『生命より錢の方が大事や』と言つた亡き父の言葉を思ひ出して、『成るほどさうぢや』と、點頭いたのである。

『なアに、學校の小使の嚊見い、押し切りで手の指を二本切り落したが、醫者にもかゝらずに癒つたぢやないか。』と、福太郎は口の內で言つた。亡き父が生命よりも錢を大切にして、たうとう錢の爲めに生

命を取られたことまでに、福太郎は考へ到らなかつた。

『さア、……』と、再び言つてから、關屋はメスを閃めかして手術に取りかゝつたが、やがて福太郎の左の足の藥指は、根元からブッツリと切り取られて、黑く腫れあがつた蛞蝓の太いやうなものは、これが人間の指かと怪まれる形をして、傍の脫脂綿の上に置かれた。黑血はどく／＼と切り口から流れて、關屋の白い指とガーゼとを染めた。

『さア、これでよい。安靜にして寢て居給へ、明後日になつたら、もう樂に歩けるよつてなア。』と、手早く創に藥を付けて厚く繃帶を捲いてから、關屋は無雜作に言つて、血に汚れた手を洗ひに立つた。

『春田さん、まアこれで、三年こッちの借錢を返したやうな氣がしますやろ。……こいつが惡かつたんや、こいつが。……』と、横田は口を尖らしつゝ、傍の脫脂綿の上に置いてある切り取られた藥指を、憎々し氣に脫脂綿ごと、子供が飯事をするやうな手付きで引き摺つて來て、心持ち顏の色を蒼くしながら何やら塞いでゐるらしい福太郎に見せた。

『そやろかなア。』と、福太郎は氣のなさゝうな返辭をしたが、今の今まで、自身の肢體の一部として、共に活き、共に衰へ、共に死し、共に葬られて、共に朽つべき筈であつたものが、獨り小ひさく離れて、蟲の死骸のやうに黑くなつてゐるのを見ると、福太郎は坐ろに哀しく名殘惜しく思はれて、眼をしよぼしよぼさしながら、ヂッと脫脂綿の上のものに見入つた。さうしてこの切り離された藥指は、矢張り自分のものであらうか、それとも醫者のものであらうか。たとへ自分のものとしても、今まではそれが直に『自分』であつたのに、もうこれからは『自分のもの』と言はなければならぬやうに關係が水くさうなつ

てゐる。言はゞ煙草入れや靴と同じやうに、自分の所有品といふものになつてゐる。この後この藥指は瓶の中でアルコールに漬けられて、自分よりは永くこの世に在るか知れぬけれど、自分には懐かしさだけがあつても一向に親しみのない『物』である。……と福太郎はこの時、今までにまだ一度も經驗したことのないほど、痛切に物を考へたのであるさうな。

それが小ひさな筋肉と骨との切れ端であるにしても、指といふ一個の形を具へたものが、自分の身體から切り離されたのは、瘤や腫物を切り取つたやうに、手輕には思つてゐられぬものかと、村長も生れて初めてさういふことを考へた。

けれども、其の時福太郎はまたつく〴〵と、脱脂綿の上のものを眺めて、これが三年の間自分を苦めた惡ものであつたか。其の惡ものが今は首尾よく切り棄てられて、こんな見苦しい姿になつてゐるのかと思ふと、長い間の怨みを復讐したやうな氣もしたのである。さうして、なアに足の指一本ぐらゐ無うても不都合はない、と心知よい笑さへ漏らした。

しかし、其の笑み心知のあとに、切つた創の痛みがチク〳〵と催して來た。さうしてそれが刻々に强くなつて、果ては大きな聲で、

『あゝ痛ア、……』と叫ばなければならぬやうになつた。

『局部痲醉が醒めると、少しは痛んで來るから、辛抱して貰はんならん。』と、慰め顔に醫屋は言つてゐたが、福太郎の痛みの一通りでなさゝうなのに氣が付くと、不安の色は先づ其の白くて廣い額から起つて、顔中に擴がり、自慢の美しい八字髯の先きが、微かに震へてゐた。

「あゝ痛ア、……あゝ痛ア、……」と、福太郎の叫びは、だん〳〵高くなつて來た。

「君、まアさう喧ましう喚いても仕様がないやないか。」と、關屋はたゞおど〳〵してゐるばかりになつた。首席訓導の横田は、何時の間にか姿を隱して了つた。

關屋の奥座敷を其のまゝ病室にして、敷いて貰つた蒲團の上へ、福太郎の小兵な身體は、關屋と藥局生との手で徐ろに抱へ載せられたが、其の間も「あゝ痛ア……」の叫びを止めなかつた。

其の夜は痛みの中に更けて、痛みの中に明けた。この山里の寒い臥床にも、福太郎は全身を汗塗れにして痛みに惱んだ。朝になつて關屋が、一夜まんじりともせぬ眼の玉を眞ッ赤にして、恐る〳〵福太郎の患部の繃帶を取つて見ると、血の染んだ純白な晒らし木綿の下は、指から甲へかけて一帶に腫れ上り、足首のあたりまでも色が變つて、粘土を捏ねたもののやうになつてゐた。

繃帶を取り換へるとそこ〳〵に、關屋は洋服に改め、病家廻はりをするらしい風で、福太郎の「あゝ痛い、……」を後に、「直き戻つて來る」と言つて、何處へか行つて了つた。横田の話しで村長と助役とが取るものも取りあへず駈け付けたのは、八時頃であつたが、十時になるのに關屋は歸つて來ないで、行方も更らに分らなかつた。

「春田君、こんなとこにぐづ〳〵してたら、生命を取られて了ふがな。……さアこれから△△町の春田病院へ行くんや、君と同なし苗字の病院やよつて縁起がよい。……さア行かう」と、村長は早鐘を撞くやうに言つて、促し立てた。

「あゝ痛ア、……いづれ晩までには關屋君も戻つて來ますよつて、相談の上にすることにします。……

あゝ痛ア、……關屋君が受け合うて癒すといふたんですもの、痛いのは辛抱して待ちます。」と、福太郎は聽き入れさうになかつた。

「まだそんなことといふてゝ、何んならんやないか。……錢の要ることなんぞは考へてゐられん。春田君、生命に係はることぢやないか。」と、村長は怒つたやうな高聲になつて言つた。

「あゝ痛ア。……かう痛むんなら、死んだ方がましやと思ひます。……村長さん、助けとくなはれ。……あゝ痛ア、……」と、福太郎は泣き聲を絞つた。

「そやさかい、僕が助けたげるんやないか、助けるには何うしても△△町へ行かんならんといふてるのやがな。」と、村長がいよ〳〵焦れ込んでゐるところへ、引き返へして吊臺の用意を調へて來た竹中助役が、人夫に仕立てた四五人の農夫とゝもに、庭先きから廻はつて、吊臺を緣側に据えさしたので、

「さア行くんや、春田君。……」と、否應なしに村長は助役と二人で、蒲團のまゝ福太郎の身體を吊臺に載せ込むと、農夫たちは

「先生、ヂッとしてゐなはれや、そッくりやりますで。」と言ひ〳〵、人擔らへのやうにして、霜解けの庭から木戸へと擔ぎ出した。

「村長さん、錢が要りますよつて、矢ッ張り此處に居て、關屋君に癒して貰ひたいなア。……あゝ痛ア、……」と、福太郎は吊臺の上で海老のやうに足を屈めて、上から萠黃に白で唐草模樣を拔いた被覆をかけられながら、まだそんなことを言つてゐた。

小川の丸木橋を渡つて、麥畑の中の細路を行くと、峠にかゝらうとする時、丁ど小學校の下を通るの

である。山を負うて丘の上に建てられた小學校の板張りの長い校舍に續いて、農家のやうな風に建てた校長の舍宅がある。吊臺の行くのが運動場の端の芝生から眞下に俯瞰される頃、舍宅の入口の戸が開いて、妊娠九ヶ月の妻お登志が膨れた腹をして眞ッ先きに、長女お喜美から長男昇等男女六人の子が、ぞろ〳〵と細い坂路を下りて、福太郎の吊臺の行手を遮るやうに並んで突ッ立つた。

『餘ッぽどわるおまッか、何うだす。』と言つて、お登志は萌黄の被覆の端を摘んで、怖さうに内部を窺ふたが、昨日から見ると、グッツリ肉の落ちた顏をした福太郎は、眼を閉ぢ齒を喰ひしばつて、うんうん唸つてゐた。『あゝ痛ア、……』と大きく叫ばぬのは、流石に白晝の往來を憚つてゐるのであらう、額にはいよ〳〵脂汗が染み出し、兩の手は固く拳を作つてゐた。お登志の袖を頭から被つて、お父つあんパアをした季の子は、父の顏を一目見るなり、『怖い……』と泣き聲を立てゝ、母の腰の下あたりへかじり付いた。漸くにして吊臺の立ち止まつたのに氣が付いたらしい福太郎は、細く眼を開いて、妻や子供を見たが、

『あの革文庫を、……』と、ひとこと言つたきり、直ぐ元の怖ろしい形相になつて、痛みを堪へ〳〵した。看病に病院まで隨いて行く筈のお喜美は、赤い帶の結びやうを氣にする風で、下手に結んだ幅の廣いお太鼓を撫でながら、舍宅まで引き返へし、言はれた革文庫を持つて來て、吊臺の中へ入れた。この時またも微かに眼を開いた福太郎は、握り詰めた拳のまゝで、革文庫を右の手に引ッ抱へた。

吊臺はまたやんはりと動き出したが、此處からは村長と横山とお喜美と、外に吊臺の手代りが引き添ひ、他の人々は萌黄の被覆の見えぬやうになるまで、伸べ首をして見送つた。

『嫁入りの荷より擔げにくいなア。』と、先棒の農夫は、肩をかへる折にさう言つて、背後を振り返への
た。

『お染は舟、久松は駕籠、……や。』と、近頃淨瑠璃に凝つてゐる後棒の若い農夫は、剽輕な聲を出して、
習つたばかりの野崎村の一節をやりかけたが、直ぐ廢しにした。

『おうい、久松を乘せた氣で腰を振つたら、先生の足が餘計痛むで。』と、附き添ひの手代りが聲をかけ
た。

『あゝ痛ア、……』と、吊臺の萌黃の被覆の中からは、福太郎が到頭堪へ切れなくなつたか、それとも
他に人通りのない山路といふことを知つてか、憚りもない大聲の叫びを立てゝ、それが四里の間ずうッ
と、△△町の入口にさしかゝるまで、きれ〳〵に續いた。——

村長はこれだけのことを考へ出したり、想つたりしながら、一心にまた福太郎の窶れ切つた寢顏に見
入つてゐた。其のうちに福太郎は、破れ障子に風のあたるやうな鼾をかき始めたが、喜美子はと見ると、
何やらの講談本を膝に置いて、一心に讀み耽つてゐた。

四

スグコイ、の電報を打つてから五日になるけれど、大阪に居る母からは何の音沙汰もなかつた。奉公
をしてゐる身は、さう自由にもなるまいと、福太郎は思ひ諦めて、自分の娘ながら、何かに付けて氣に
入らぬお喜美と二人で、白張りの天井に雨漏りの痕の見える病室を天地として、日を暮らし、夜を明か

した。

村長と助役とは交々山から下りて來て、深切に慰めて呉れるし、首席訓導の横田も來れば、部下の教員も一人二人づゝ顏を出すし、村人の誰れ彼れも來て、心の底から湧き出た見舞を述べて行く。

『渡る世間に鬼はない。……』といふ言葉を、福太郎は仰向けになつたまゝ、天井の汚點を見詰めつゝ、染々考へた。

『君、入院料のことなんぞは、一寸も心配するには及ばんで。……よしんば君が一年入院して居ようと、入り目は皆村から出すように相談を決めて來た。……中には君、子供がお世話になる校長先生の入院料の足しに上げとくなはれといふてな、其の日暮らしの小前のもんが二錢三錢と僕のとこへ持つて來よるのもあるが、そんなんは斷つてるが、偖村費といふ譯にも行かんので、重立つたものだけの寄附で、君に入院料の心配はさせんことになつたんや。……安心して、早う快うなつて呉れ給へ。』と、村長が情を籠めたといふよりは、情をまる出しにして言つた時、福太郎の窪んだ兩眼から、泉のやうに涙が溢れ出て來た。

『こんなことなら、何も入院料を惜んで、闘屋なんぞに指を切らせるんではなかつた。初めから此處へ入院すれや好かつたのや。』と、村長が去つてから、福太郎は獨りで考へた。

患部の痛みは薄らいだまゝになつてゐるけれど、腫張はいよ〳〵加はつたらしく、左の足の重味の殖えたのがよく分る。口が乾いて脣はブリキでも張つた如く硬ばつてゐるから、三度〳〵足を伸ばしたなりに起き返へつて、背後へ重ねた蒲團に凭れながら喰へるお粥と刺身とも、樂みにはなるが味はない。

他人でさへも、村長始めいづれもが、あの通り深切を盡して呉れるのに、自分は父の病氣の時、何うしてあゝ冷かであつたのか。それを考へると、今更消えも入りたい心知になる。

しかし、其の深切も金があるから出來ることだ。貧乏が不孝をさせるのだ。生命あつての物種といふが、ほんとうは金があつての物種だ。……さう思へば、生命よりも金を大事にした亡き父は、決して自分の不孝と冷淡とを怨んでゐないであらう。あの革文庫に父の死靈が搦み付いてゐるなぞといふのは噓だ。……冷淡と言へば、父も自分に對して隨分冷淡であつた。子よりも金が可愛かつたのだ。それを眞正面から承け繼いだ自分を、父は草葉の蔭から得心して見てゐるであらう。自分は父の二代目だ。――

また騰つて來た熱に、煽り立てられるやうな氣になつて、福太郎は取り留めもなく、こんなことを考へ始めた。

『お父つあん牛乳。』と、丁ど其の時刻で、お喜美が看護婦から受け取つた、鳩の形をしてゐる吸ひ呑みに入れた牛乳を、八寸の膳に載せて無恰好に差し出したのを、福太郎はチラと見ると、忽ち形相が變つて、窪んだ眼に凄いかどを立てつゝ、

『喜美ッ、……そんな膳を何時持つて來た。それは十人前揃ふて箱入りになつてる輪島の上等やないか。そんなもんを此處へ持つて來やがつて、……』と、急き込みつゝ言つた。お喜美は父が不意の怒鳴り聲にも、慣れ切つてゐるので、別に驚いた風はなく、

『阿母はんが、お茶椀と一所に竹巾はんにことづけておこしはつたんやわ。……わたへ知らん。』と、空嘯くやうに言つた。

『お登志が貴様と同なしぢや、阿呆で締りがないから、こんなことをさらすんぢや。早速其の膳を家へ戻して、元の通り箱の中へ入れさしとけ。……これから貴様持つて去んで來い。……』と、福太郎は斑らに白粉の浮き上つたお喜美の圓い顏を、仇敵のやうに睨み付けた。

『そんなら、これからこのお膳持つて去んで來ます。』と言ひ〳〵、お喜美は吸ひ呑みだけを枕元へ置き、輪島塗りの飴色の膳で顏を隱しつゝ、ペロリと舌を吐いた。

『あゝ此處ですか、有り難うござんした。』と、聞き馴れぬ東京辯が、廊下から響いて來たと思ふと、入口の扉が開いて、中くらゐの信玄袋を持つた看護婦を先きに立て、落ち付かぬ樣子で入つて來たのは、今大阪から着いた母のお雪であつた。

『あゝ阿母さん、……』と言つた切り、福太郎は輪島塗りの膳の怒りを掻き消す如く忘れて了つて、幾日振りかの笑顏を浮べた。

『もッと早く來たい〳〵と思ひながら、お上の都合でね、なか〳〵おひまが出ないもんだから、こんなに遲くなつて了つた。それでもまァ次ぎの電信がかゝらないので、急變もないのだと思つて、安心してゐましたよ。』と、母は嬰兒に對するやうな慈愛を見せて、福太郎の枕頭に寄り添ふた。

『阿母さん、すッかり江戸ッ兒（東京辯の事）になりましたね。』と、福太郎も習ひ覺えの東京辯で言つて、またニッと寂しい笑を浮べた。

『旦那樣、奧樣、お孃樣、坊ッちやま始め、書生さんから小間使、御飯炊きまでが、スッカリ江戸ッ兒なもんだから、わたしも何時の間にかこんなになつちまッたんだよ。年寄りの江戸ッ兒はいかつうてい

かんし、それに女はなァ。』と、母は帶の間から煙草入れを抽き出した。

『これ喜美ッ、自分ばッかりあたつてゐて、お祖母に火鉢を上げんか、それにお茶を何うしたんぢや。……貴樣まだお辭儀もせんのぢやないか。……何うも仕樣のない阿呆で、阿母さん、これが長女です。』

と、福太郎はまた少し急き込んで言つた。

『あゝさうかい、まァ〳〵、わたしはまた看護婦さんが平服で附き添つてるのかと思つてたんだよ。……喜美ちやんほんとに大きくおなりだつたね、二三年前に寫眞を貰つたきりなんだもの。』と、母は孫にも崩れるやうな優しい眼を向けて、流石に改つては、なか〳〵に閑稚なお喜美の挨拶を受けた。

『何うだね氣分は。……一體何うしたんだね、たゞ大病では分らんぢやないかね。……初めスグコイといふ電報だけど、何處へ行くのかそれも分らんし、電信局が△△町となつてゐるから、此處の病院だらうかとも思つたし、それとも谷山の方で療治してゐて、電信だけ此處から打つたのかとも思つたり、いろ〳〵考へたけど、チッとも分らない。後から手紙でも來るかと思つてたが、それも來ないし、まあまあ此處まで來て見れや分るだらうと思つて、來るには來たんだが、方角も分らんし、谷山の方へ行つて見ようかとも考へたんだけど、此處から先きは車が通はないんで、駕籠で行かなければならんといふぢやないか。まァ大變なところへ引ッ込んだものだと思つたよ。』と、母は續けさまに喋舌つて、病人の方へは行かぬやうに烟草の煙を横へ吹いた。

『さうでしたか。……それもこいつが阿呆やからです。……それでよう知れましたなァ。』と福太郎は、ごと〳〵と茶の仕度をしてゐるお喜美の方を睨むやうにして、言葉は優しく言つた。

「谷山へ行くとなると、今夜は此處で泊らんならんし、いづれにしたて、この町の病院へかういふものは入院してえしまへんかと、訊いてからにするつもりだつたもの、一番先きに彼方の内科の病院へ行つたら、其のお方なら多分春田病院でせうといふよつて、此方へ來たんや。……病氣は一體外科なのかい。」と、母の言葉にも追々生地が露はれて來た。

「さうでしたか、ほんまに阿呆なこッちやつた。……そいでもまアよう來とくなはつた。癒つたら引き取つて樂をさせます。……これまで阿母さんにも濟まんことばッかりして來ました。何うぞ勘忍しとくなはれ。」と、福太郎の霑んだ眼には、また涙が光つて來た。

「引き取つて貰うのもいゝが、車も通はん山の中へ行くのは、わたしや御免だよ。……それよりお前まア何處がわるいの、外科ちうと、腫物か怪我か。」と、母は膝を進めて眉を顰めつゝ訊いた。

「いゝえ、指を切つたんです、……」と、福太郎が委しい話を始めようとしたところへ、看護婦が來て、「阿母さんがおいでになりましたさうで、院長さんが一寸此方へお越し下さいと仰しやりました。」と、仔細ありさうに、福太郎へ氣を兼ねる風をして言つた。母は福太郎の顏を見てから、默つてついと立つて行つたが、一時間の餘になつても、まだ戻つて來なかつた。それで福太郎は焦れ出して、「喜美ッ、祖母が何してるんか見て來い、阿呆めが。」と、怒鳴つてゐると、母は漸うハンカチで手を拭き拭き戻つて來たが、

「隨分汚ない便所だね、病院にも似合はない。」と、紛らすやうには言つてゐるけれど、面へ急に浮き出した憂ひの色は、容易に消えさうもなかつた。

「院長が何んぞ言ひましたか。」と、福太郎も氣がゝりな風で言つた。

「なに、別に何んとも仰しやらなかつたが、まア氣永に御養生なさいッてね。」と、母は何やら考へ〳〵した。

「そんなこと言ひましたか。わたしはもう一週間もしたら退院が出けるやらうと思ふてますんや。……阿母さんも一週間ぐらゐなら、此處に居られるでせう、それとも直き去なんならんのだすか。」と、福太郎は寂しさうな、心元なさゝうな樣子を、あり〳〵と見せて言つた。

「一週間でも、二週間でも、あんたが癒る時まで居ます。……さう言つておひまを戴いて來たんだから。」と、慰めるやうに言ひながらも、母は心の奥で他のことを考へてゐるらしかつた。

「さうですか、それ聞いて安心しました。わたしは院長さんが居らいでも、阿母さんさへ居て下されば好いと思ふてます。」と、福太郎はまた小波のやうな笑を、窶れた面に寂しく見せた。

「この次ぎの室を貸してやると院長さんが仰しやつたから、喜美とわたしが其處へ寢ることにして、交代に看病をしませうよ。今までは一人で忙しかつたらう、可哀さうにね喜美ちやん。」と、母はまた慈愛の眼を輝かして、孫娘の方を見た。

「何んのこいつが、朝から白粉ばッかり塗りくさッて、ぺた〳〵さらして。……」と、お喜美のことゝし言へば、福太郎の口汚なく罵るのを、母はまだ何の氣も付かずに、笑つて聞いてゐた。

五

壁のやうに見えてゐたのは、大きな板戸に紙を貼つてあつたので、病院のしるしのある法被を着た男

が二人來て、芝居の大道具を外すやうに、ガン〳〵と二つ三つ金槌の音をさすと、隔てがとれて、狹いながらも次の室が都合好く現はれた。

火鉢や茶道具や、こま〳〵したものを皆そッちへ運んで、母は稍くつろいだ心になりながら、手から煙管を放さずに、先刻院長から聽いたことを繰り返へした。

『何分熱が高くて、心臟がお弱いので、一日も早く手術をしたいが、危險でやれません。』と言つて、頼もしさうな廣い額へ手をやつた院長の風采は、高が田舍病院と馬鹿には出來ぬ重々しさであつた。と母は先づそれから考へた。

其の頼もしい院長の話に據ると、福太郎が最初診察を受けに來た時、これは何うしても踝から切斷しなければならぬ。脫疽が念入りにこじれてゐるけれど、今のうちに踝から取つて了へば、全快疑ひなしであると診斷した。それでそれを其のまゝ本人に告げようかと思つたのであるが、何分一人前の男を生れも付かぬ不具にすることであるから、親戚の人なり何なりを立會はして、診斷の結果を知らした上、同意を得て手術をしやうと考へたのであるさうな。

ところが、必ず來るやうに約束して置いた翌日は姿を見せないで、三日目の夕景には、村の開業醫が切斷した藥指から、夥しい黴菌が侵入し、見るも淺間しいさまになつて、高い熱と劇しい痛みとに苦惱してゐる身體を運び込んで來たのである。今度は何うしても腿から切斷しなければならぬことゝ思ふが、腿から切るとなると、手術に時間がかゝるので、年來の大酒に弱り拔いてゐる心臟がそれに堪へ得るか何うか分らぬ。關節から切斷するのならば、二十分間で足りるから、かつ〳〵手術に堪へるであらうが、

何んにしても今少し熱の下がつた潮あひを待たなければならぬ。しかし關節から取つたのでは、命に
保證が出來兼ねるから、これだけは御承知置きを願ひたい。――

院長はこれだけのことを、丁寧に繰り返へして話して呉れたのであるが、それにしても、福太郎といふやつは自分の腹から生んだ子ながら、何んといふ馬鹿なやつであらう。と母は、ばり〳〵齒ぎしりを嚙みたいやうな心になつた。

『これで死んだら、まるで自殺したやうなものだ。……』と母は獨り口の中で言つた。さうして、痛いのを辛抱して脫疽を三年も打ちやらかして置くといふことがあるものか。極く初めの中なら、指を少し切開すれば癒るのだッたし、ひどくなつたにしても、指一本切り取れば大丈夫だ。それを三年もかゝつてこじらしたにしても、まだ踝から切り取れば澤山なのを、わざ〳〵亂暴きはまる手術で、關節から下を失つても、安全を保證されないことにして了つた。と院長さんの心外さうにして言はれたのは、ほんとうに尤もであると思つた。

『生命より金を惜む、汚ない根性が親爺そツくりだ。……二代目だ。……』と、母はまた口の中で獨言をした。

『阿母さん、阿母さん、……此方へ來とくなはれな、喜美ツ、彼方へ行つとれ。』と、福太郎は人懷かし氣な優しい口振と、憎體に邪險な言葉とを使ひ分けして、心細さうに言つた。

『何んぞ用かね、わたしも慣れない旅で疲れたから、少し息んでるんだよ。』と言ひ〳〵、母は立つて枕頭へ來た。

「阿母さん、わたしほんまに、阿母さんには濟まんことをしたと思ふてます。」と、福太郎は窪んだ眼で、つく〴〵と母の顏を見上げつゝ、其の皺の寄つた顏から、六十にしては白髮の尠い頭の上の、小ひさな丸髷までを見透さうとするほど、鋭い眼の玉を据ゑてゐた。

「まあ〳〵、そんなことは何うでもいゝよ。」と、母は答ふる言葉に困つて、七年前自分が棄てられた夫の爲めに柔かな心で拵へて大阪病院の受付まで持つて行つて、其の時は活々と健康であつた福太郎の血の氣の多い手に渡した其のふわ〳〵した鳥の羽の入つた枕の端の、少し折れ曲つてゐるのを直してやつた。

「いゝえ、何うでもよいことあれしまへん。……死んだ親爺が阿母さんを出すの引くのと言ふた時、息子としてわたしが何處までも執り成さんならんところでした。そいつを知らん顏して、阿母さんがこの年になつて他人の家へ奉公するのを留めもせず、盆正月には逆さまに反物なんぞ送つて貰うのをよいことにして、ねだり物までしてゐたのは、まア何んちう罪の深いことでしたやろ。……わたしがこんな身體になつたのも、皆親の罰や思ふてます。……」と、福太郎はだん〳〵泣き聲になつて、げッそりと肉の落ちた蟀谷のあたりへ涙を傳はした。

「お前何を言ふのや、そんなことよく〳〵思ふと、餘計身體に障るがな。」と、母はまた生地の言葉を出して、柔かい懷紙で窃と涙を拭いてやつた。

「阿母さん、わたし此頃毎晩死んだ親爺の夢ばッかり見るのです。」と、福太郎の顏は氣の故か、だんだん凄味ヶ加へて來るやうであつた。

「夢は五臟の疲れ、といふぢやないか。身體が衰弱してるから夢を見るんだよ。」と言ひ〳〵、母は自分の眼にも昔し馴染の革文庫が、傍にチヤンと置いてあるのに今初めて氣が付いて、覺えず慄然と水でも浴せられたやうな心になつた。

大阪、神戸、姫路、有馬と、母はこの革文庫の舊い持主とゝもに、若い頃を散々苦勞して歩いた。區役所の書記、縣廳の雇、郡役所の兵事係、溫泉場の事務員と、さま〴〵に薄給を漁り歩いて、着のみ着のまゝの貧しさに泣いた時も、この革文庫だけは、何時も夫の傍に在つた。この革文庫を見ると、其の側に坐つてゐた人の姿が、あり〳〵と浮んで來る。

「あゝ厭やなものがある。」と、母は覺えず聲を出したが、柔かい鳥の羽の入つた枕に頭を埋めてゐる福太郎の耳へは、それが意味を成した言葉としては響かなかつた。

「お登志も仕樣のないやつです。……まア阿母さんにゆッくり聽いて貰はうと思ふてますね。」と、福太郎が自分の妻のことに話を運んで行つたので、母は漸う革文庫と其の舊い持主とのことを忘れる機會を得たやうな氣がして、

「さうかね、わたしは嫁でゐて染々話をしたこともないが、溫和しさうぢやないか。……もう三十四五におなりかね。」と、自分にも珍らしいと思ふほどの早口で言つた。

「三十六になりますが、ほんまに仕樣のないやつで、……わたしつく〴〵考へてみますと、あの喜美はわたしの子でないと思ひますがな。……」と、お喜美が何處かへ行く廊下の足音の、だん〴〵小ひさく消えて行くのに耳を澄ましながら、福太郎は聲を密めて言つた。

「そんなことを言ふものぢやないよ、假りにも取り返へしの付かぬ難癖を付けるやうなことを言ふものぢやありません。……喜美の額から生え際、眉と眼の間の近いのなんぞ、あんたに生き寫しぢやないか。」と、母は押さへ付けるやうに言つて、あの革文庫の舊い持主が、自分にもそんな難癖を言ひかけて、恐ろしい口實を作つたことを思ひ出し、こゝにもまた其の二代目の面影を見ることかと、因縁の深さに驚き怖れた。

「わたしも、あのお登志さへ貰はなんだら、こんな身體にもならなんだのです。……××市に近い方の學校に居た時、女教員のことであいつが嫉妬を起しましてね。嘘八百を郡視學のとこへ書いてやるやら、村長に告げ口するやらで、大騒動を起したんです。……なァに跡形もないことですよつて、わたしは郡視學へ事情を話して、其の方はそんなりで濟んだすですが、其の女教員は土地の村長が惚れ抜いたもんですよつて、お登志の口から、いろ／＼のことを言はれると、わたしと村長の間が面白うないやうになつて、あんな山の中へ轉任せんならんことになつたんです。……あの騷動さへ無かつたら、元の學校に居ましたし、もう一年で模範學校として表彰されるところを、名譽は殘らず後任者に取られて了うて、實に阿呆な目に遭ひました。それもこれも、皆お登志が至らんからです。第一あんな山の中へ轉任さへせなんだら、足も痛うならなんだやろし、模範學校の名譽を人に取られるんやなかつたのです。……そいつを考へると殘念で／＼、お登志め、叩き殺しても飽き足らんやうな氣がします。」と、稲太郎は衰へた心をだん／＼興奮さして、痩せた兩手を夜具の外へぶる／＼と震はしながら突き出した。

「それはお登志さんが惡かつたね。けど何事も皆因縁づくだから、過ぎ去つたことを言つて、怒つてみ

ても始まらん。腹を立てるのが病氣には一番毒や。」と、母は宥め賺かさうとしながらも、到るところ女のことで騷ぎの種を蒔いたあの革文庫の舊の持主のことを考へると、福太郎の女教員しか〳〵も、お登志の見當ちがひな嫉妬ばかりではあるまいと思はれ、こゝにもまた二代目の面影が、生き寫しに見られるやうな氣がした。

「お登志みたいな締りのない人間を家内にしてますと、一生で何んぼ損や知れまへんで。」と、福太郎は稍落ち付いた調子になつて話を續けた。

「そんなに下手かね經濟向きのことが、……」と、母は氣のない返辭をして、自分もよく夫にそんなことを言はれて、いろ〳〵と爭ひ合つたことがあると思つた。

「經濟向きのことで、何んにも任かしやしませんが、二十錢なら二十錢、小づかひを宛行ふといても、締りなしに使ふて了ひよるんで、どだい仕樣がおまへん。」と、福太郎は痩せ細つた手の指を屈めて、何やら勘定をし出した。

「へえゝん、お前もお登志さんには宛行ひ扶持で、何もかもお金の出し入れは自分にしてるんかね。」と、母は自分も僅かづゝ毎日〳〵小づかひを宛行はれるだけで、浴衣一反獨りの計らひでは買うことの出來なかつた昔しを思ひ出して、かうも似た親子があるものかと、心の裡で「二代目〳〵」と繰り返へした。

六

三四日後のある朝、珍らしく熱が三十六度八分に下がつてゐた。この機會を外してはゞ、院長は早速

手術室の支度を命じて、福太郎の身體を擔架で階下へ運ばした。二人の看護婦が肥えた腕で擔架の棒を撓めつゝ、靜かに階子段を下りて行くのに引き添ふて、

「ほんの一寸切るだけやさうな、直き濟むから、後はほんとに樂になるよ。」と、母は幼兒を賺すやうに言ひ〳〵した。

白い毛布をかけた擔架が、磨き立てたやうに總べてのものゝ光つてゐる手術室へ入つたのを見屆けて、母は逃ぐるやうに病室へ戻り、拔け殼の床の前に坐つて、差し俯向きつゝ胸をわく〳〵さしてゐた。

「手術室へお越しなさりませんか。」と、看護婦が廊下を小走りに、麻裏の音を立てゝ來て、少しばかり開いてゐた扉から白い顏を出して言つたけれど、

「はア、まゐりませんから、何うぞ宜しく。」と、母は勢のない聲で挨拶して、火の乏しい火鉢へ、炭をつがうともせずに、かじり付いた。

「お祖母、わたへいて見て來うか知らん。」と、お喜美の呑氣さうな顏をしていふのを、母は押し止めて、

「お廢し、見に行つたつて仕樣がない。」と、叱るやうに言つてから、細い煙管を取り上げたが、物憂さうにして、烟草も詰めなかつた。お喜美は次ぎの室へ行つて、柱の蔭で懷中鏡を取り出し、頻りに顏を寫しては、眉のあたりなぞを指先きで撫でゝゐた。

手術は丁ど二十分間で、滯りなく濟んだ。元の擔架で病室へ戻つて來ると、全身痲醉がもう醒めて、福太郎はケロリとした顏をしてゐた。

『何うですか、御氣分は。……別に吐き氣はございませんか。』と、あの肥えた婦長が、枕頭に坐つて尋ねる脇から、看護婦が檢温器を當て、脈搏を計り、呼吸を數へた。
『いゝえ、吐き氣も何もしまへん。』と、福太郎は快さゝうにして首を振つた。
『正直なものでございます、お熱がまた下がつて、六度四分になりました。外科はこれだからたまりません。外科の覿面なのに比べると、内科はまるでお禁厭みたいなもんです。お脈も七十五になりました。これはもつと減りませう。』と、婦長は看護婦の持つてゐる檢温表を横から覗き込んで、手柄顔に言つた。
『何うもお蔭樣で有り難うございます。』と、母が心の奥底から感謝の言葉を絞り出したところへ、別の看護婦が呼びに來たので、それに隨いて行くと、急ぎ足に院長室へ導かれた。
『手術は濟みましたが、まだ安心は出來ません。』と、この室の安樂椅子の上では、一層えらく見える院長は、例の重々しい口調で言つて、ヂッと母の顔を見下ろした。
『有り難うございました。熱もお蔭樣で下がりましたさうでございます。』と、母は與へられた椅子に手をかけたまゝ、腰をおろさずに言ふと、
『午後になつて、また熱が騰らなければいゝがと思つてるんです。……何うも平生大酒をやられたので、痲醉藥が利かないし、心臟が危險なので、隨分心配しました。まああんなに早く痲醉の醒めた方は、まだわたしの經驗にありません。』と、院長は太く横文字で書き付けたものを見ながら言つた。
『それぢや何うしても駄目でございませうか。』と、母は絶望の淵に沈みかゝつた聲をして問ふてみた。

『いや、何んとも分りませんが、ほんとうは腿の附け根からでも取りたいところを、關節からで辛抱しといたんだから、なか／＼十分とは言へないんです。……それに心臟があの通りだし、腎臟が大變にわるいから、……』と、院長の顏には憂の雲がいよ／＼深くなるやうであつた。

『先生にこれだけお骨折を願ひまして、それで駄目ならわたくしも諦めますし、本人も心殘りがなからうと存じます。』と、母は切り口上で言つて、また丁寧に頭を下げつゝ、亡き夫の死因の腎臟炎であつたことを考へてゐた。

『わたしもこの上、出來るだけの手は盡すが、初めに失敗してあるので、彌縫が困難です。……それからあの切斷した足ですがね、あれは何うしますか、御希望なら保存してもいゝが、手數がかゝるし、別に珍らしくもないものだから、差支へなければ何處かへ埋めて了つたらいゝでせう。』と、院長は稍晴れ／＼しい顏になつて言つた。さうして母が默つてお辭儀をしたのを見ると、

『それぢや埋めることにしませうね。』と、卓子の上の青い硝子に嵌め込んだ小ひさな置時計に並んでゐる呼鈴を鳴らして、看護婦を呼び、切り取つた左の足を持つて來させた。

料理か何んぞのやうに、大きな白い皿へ入れられた福太郎の左の足を一目見た時、母は哀しいとも、怖ろしいとも、寂しいとも、何とも名狀することの出來ぬ感慨に打たれた。さうして、この腐れ澤庵のやうな黑ずんでぶく／＼したものが、曾つて一度は自分のお腹の中に在つて、其處から生れたものゝ片われであるかと思ふと、厭やな／＼な氣持ちになつて、眼をそむけた。

安達ヶ原の鬼婆の芝居のことや、大江山酒呑童子の繪のことが、頻りに思ひ出された。

「何うです、この藥指をこんなにして切つたものだから、……」と、院長が人形の足にでも對するやうにして、無雜作に指さすので、母は仕方なしに其の方を見やると、成るほど藥指が根元から切られて、其の痕が胡蘿蔔の腐つたやうな色をしてゐた。

『病人はこの足がかうして此處に在ることを存じませんでございませう。』と、母はおろ〳〵聲になつて言つた。

「さうです、少しばかり切開するだけだと言ひ渡してから、痲醉をかけたから、膝から下が無くなつてることを知らずに、いや親指が痛いの、脹脛がだるいのと言つとるかも知れない。」と、院長は微笑んだ。

「折れかゞみから下が無くなつてゐるといふことは、なか〳〵本人には分らないものでございませうか。」と、母は相變らず痛ましさうな顏のまゝで問ふた。

「分りませんとも、自分に見るか、手をやるかしなければ分らんが、寢ても見られやしないし、寢てちやア手は屆かないから大丈夫です。……一週間も經つて、氣分の落ち付いた時、あなたからよく言つて聞かすといゝんです。何うせ切るものなら、踝からでも關節からでも、不自由は同じことだとね、喫驚しないやうに、十分注意して言ふんですね。……それぢやこれは、このまゝ埋めさしますから何んなら埋めるところまで見ていらつしやい。」と、院長の言つたのをしほに、母は一禮して、白い皿を捧げた看護婦の後から、暖爐の熾んに燃えてゐる室を出た。

外にはちら〳〵と小雪が降つてゐた。福太郎の足は油紙に卷かれて、燻鮭でも入れた小包のやうな形になつたのを、病院の小使が左の手に提げ、右の手に鍬を持つて、固く凍て付いた土の上を、鼻緒の弛んだ下駄でコツ〳〵と踏んで行つた。其の後から母は、大きな字で病院の名の書いてある番傘を翳して隨いて行つたが、雪が小使の提げてゐる油紙の上にかゝつては直ぐ解けるのを見詰めて、中の足にまだ溫りがあるのか知らんなぞと、馬鹿なことを考へた。

福太郎が七歲の時、よか〳〵飴屋を追つかけて行つて、石橋の上で俯向きに滑り轉ろげ、ひどく兩足の膝頭を擦り剝いたことがある。芋をこそげたやうに皮が捲くれあがつて、血がだく〳〵出たが、殊に左の膝頭がひどかつた。其の疵痕は長いこと殘つてゐたが、丁どあのあたりから切り取られたのであらう。子供の時から小柄の方で、手足なんぞほんとうに細く綺麗で、透き通るやうな色をしてゐた。――

母がこんなことを考へてゐる中に、小使は葱畑の横を藪の傍まで行つて、柿の木の下に突ッ立ちながら、四邊を見廻はしてゐたが、雪はだん〳〵濃くなつて、傘を持たぬ小使の鳥打帽子が白く見えて來た。

やがて小使は柿の根かたに近く、凍てた土を掘りかけたが、固いのはほんの上かは二三寸だけで、それより下は眞ッ黑に肥えた土が、ぼか〳〵と柔かく溫かさうであつた。

『犬が掘り出しよるといかんさかい、深う掘つたれ。』と、小使は老いて皮の弛んだ腕に力を籠めつゝ、嬰兒の柩ぐらゐは納められさうな大きさの穴を掘つた。周圍へ盛り上つた黑い土の上に降りかゝる雪の花は、一際白く見えて、土の溫まりで速に消えて行く雪の形も、短い一生だと思はれた。鍬の先きが石

に觸れて、カチッと火花が散つた。

「こいでよからう。」と、小使はまた獨言をして、傍の木の切り株の上に置いてあつた油紙の包みを取ると、穴の中へぽんと投げ込んで、どた〳〵と土を被せて了つた。

「南無阿彌陀佛、……」と、母は覺えず口の中で言つたが、尻を端折つた小使の左の毛脛のまだ達者さうなのが、何んとはなしに、憎々しく見えて仕樣がなかつた。

七

院長の心配してゐた通り、福太郎は夜になつてまた三十九度近くの熱が出た。繃帶を取りかへる時には、看護婦が五人も出て來て、白い屏風を立てたやうに福太郎の眼を遮りつゝ、患部を見せないことにした。

「阿母さん、今朝の手術はたゞ切開したゞけですか、それとも踝からでも切つたんですか。踝から切つたんやと、癒つてから義足が要りますなァ。」と、重湯にスープを混ぜたのを一合五勺ほど飲んでから、母に口髯のあたりをハンケチで拭いて貰ひながら福太郎は心配らしく言つた。

「わたしもまだよく見ないが、ほんの少しばかり切つたんだらうよ。」と、母は曖昧なことを言つて、お喜美と顏を見合はせた。

病人の流動食が濟んでから、母とお喜美とは、病床の枕頭で晩の食事をした。次の室の電燈に故障が出來て點火せぬので、仕方なしにこんなところへ食器を運んで來たのであるが、福太郎は枕の上で首を振ぢ向けて。

「可味さうですなア。」と、溜息とともに言つた。さうして二人の口の動くのへ、窪んだ眼の光を注ぎながら、

「阿母さん、年が寄つても食はなか／＼いけますなア。」と、卑しい笑を窶れた顏に浮べつゝ言つた。

「お父つあんに、あないにして睨まれてると、御飯が咽喉へ詰まる。」と、お喜美は眞顏で言つて、福太郎の眼が茶碗と箸とへ屆かぬやうに横を向いて喰べた。

「喜美ッ、此頃米は何んぼづゝ要るんや。」と福太郎はいよ／＼顏の相を卑しくして、今にも息の切れさうな聲で問ふた。お喜美は暫く何とも言はずにゐたが、

「喜美ッ、……」例の雷の落ちるやうな叫び聲に促し立てられて、

「一日五合では、ちいと足らんし、六合炊くとお冷が殘ります。」と言つた。さうして毎朝小使室へ行つて飯を炊く時の、手の冷たさを思つてゐた。

「二人の賄に何んぼかゝりますやろなア。……それは入院料の外ですさかい、村から出しては呉れますまい。」と、福太郎はまだヂッと、二人の食事の方へ眼を据ゑたまゝで言つた。

「今朝手術したばかりの大病人がお前そんなことを言ふもんぢやないよ。……お米の五合や六合、……お菜だつて碌にありやしないし、幾らかゝるもんかね。……何んならわたしの食料は自分に出すよ。」と、母は怒つたらしい聲を出した。それでも福太郎は蛙のやうな顏を、平氣で母の方へ向けたまゝ、

「こないだから、ちよい／＼見てますと、阿母さんはだいぶこれを持つてゐなはるなア。」と、右の手の親指と食指とで、圓い形をして見せた。

「そらわたしだつて、この年になつてこんな遠方へ乘り出して來たんだもの、其逆の時はお金より外に賴になるものはないからね、少しぐらゐの用意はして來てゐますよ。……お菜だつて此頃は皆わたしが買つてるぢやないか。……あんたがそんなこといふから此方も言ふんだが、今日買つた五升のお米代はわたしが拂つたんだよ。二三斗も買ひ込んどかうかと思つたが、若し、……」と言ひかけて、母は言葉を切つた。

「喜美ッ、これからなア、賄の方は皆阿母さんに出して貰へ。」と、福太郎は嬉しさうにして言つた。

「幾ら母子の間柄だと言つたつて、よくあんなことが言はれたものだ。……何んといふ厭やなやつだらう。……死んだ親爺にそつくりだ。……二代目だ。……」と、母は心の中でさう思つて、ほと〳〵呆れて了つた。

「お登志も一日ぐらゐ看病がしたいと言ふてるさうだすが、妊娠九ヶ月ですよつて、來ても仕様がおますまいなア。」と、賄の入費のことで安心した故か、顏の色までも急に冴々した樣子で福太郎は言つた。

「細かい子供をぞろ〳〵連れて、大きなお腹抱へて來たッて何の役に立つもんかね。それに九月ぢや、何時知れんから、途中で蟲でもかぶつたら大變ぢやないか。……それからお前、お登志が子供をぞろ〳〵連れて來ると、また賄の入費が殖えるよ。」と、母は尖つた聲で、つけ〳〵言つたが、福太郎はたゞニヤ〳〵笑つて。

「それもさうですなア。」と、言つた顏が、母にはいよ〳〵蛙のやうに見えて來た。

「何んといふ厭やなやつだらう。」と、母はまた獨りでさう思つて、寂しく考へごとをしてゐたが、心の

奥の留い鏡に映り出して來たのは、亡き夫と二人で、今北海道と樺太とへ行つてゐる二人の息子のまだ幼なかつたのを抱へて、神戸で素人下宿を始めた時の有様であつた。

「あの二階の書生はよく喰ひよるさかい、飯は小さいお櫃へ盛り切りにせんといかん。」と、夫は臺所へ來て、奥座敷へ筒拔けに聞こえるボラ聲で言つたり、

「こないお菜を仰山したら、損がいくがな。」と言つて、三尾づゝ附けてあつた鰺の鹽燒をば、五つ並んだ膳の上から一尾づゝ減らして廻はたつりした時の夫の卑しい顔が、今の福太郎の顔其のまゝであつたやうに思はれて來て、母は情なく涙が溢れさうになつた。

八

關節を切り取つてから、二週間の餘にもなるが、福太郎の熱は何うしても下だらない。朝が三十七度五分、夕景が三十九度五分といふ間を上り下りしてゐる。

肩口に疼痛を感ずるところが一つ出來て、右の腕も峠のやうに長く腫れ上つて來てからは、氣が短かく、焦れ切つてゐて、初めは遠慮してゐた母へも、何うかすると、

「この糞婆ッ……。」などと聞くに堪へぬことを言ふやうになつた。お喜美はすることなすこと皆怒鳴り付けられる種になつて、

「こらッ喜美ッ。　」と、いふ叫びで、耳の穴に胝が出來た。

「阿母さん、もう少しぐらゐ起き返へつてもよいことないでせうか。院長さんに問ふてみとくなはれや。」と、機嫌のよい時は福太郎は、また懷かしさうに言ふこともあるが、それはまだ關節から下を切り

取つたことを知らしてないので、本人も患部が何うなつたかと氣にかゝつてたまらぬから、巧みにカマをかけるのである。

『先刻も院長さんに伺つたんだよ。スルとね、今身體を動かすのは大變創にわるいから、もう暫らく辛抱なさい、と仰しやつたよ。』と母は柔かく賺した。

『寢衣が汚れて心持ちがわるい、一つ着更へさしとくなはれなア。』と、態とらしい泣き聲を出してせがむのも、隙を狙つて患部を見ようとする計略と知つたので、母はいゝ加減にあしらつて、取り合はなかつたが、實際寢衣は汚れてもゐたので、母はまた坐に可哀さうになつた。

熱の低い時を見計らつて、湯に絞つたタオルで身體を拭いてやる時、母は、これが昔しの福太郎かと思はるゝばかりに、痩せて骨立つた肌や、ところ〳〵に痣のやうなものが出來たり、肩口と右の腕との腫れ上つたところへは、膏藥を貼つたり、切開して膿を取つた痕に、繃帶が捲くれ上つてゐたり、病の本元の左の足は折れかゝみから先きがなくなつて、擬寶珠のやうに丸く繃帶やガーゼが卷き付けられてあつたり、身體中を惡鬼に責めさいなまれてゐるやうな淺間しい姿になり果てゝゐるのを見ると、自分もたまらなくなつて、ホロリと涙の露を落した。

『あのまア卑しい根性の、……十錢の金でも他人に渡す時は、魂魄の一部が、其の金に附き纏はつて行きさうな、……死んだ親爺が、長いことかゝつて、貯へたり拵へたりしたお金や着物を、其のまゝそッくり自分のものにして了つた福太郎には、事によると、親爺の死靈が祟つてゐるのかも知れない。』と、母は眞面目に考へないでは居られぬやうになつて來た。

こんなところに、愚圖〳〵してゐると、あの執念深い、强慾な死靈が、自分にも取りついて來るか知れない。それに此頃は、服藥や食物や便通の世話まで、お醫者ではもとより、看護婦にさせても病人の氣に入らないので、總べて自分の一手でやつてやらなければならないのだから、大阪のお邸でも樂勤めの方へ廻はつてゐた老いた自分には堪へ切れない。寧そ大阪へ逃げて歸らうかと思ふことが度々ある

し、病人が癇癪を起して、
『糞婆ッ。…。』などと、惡たれ口を吐く時は、直ぐにも信玄袋を持つて、病院の門を出ようかと思ふのであるけれど、それも骨を折つて下さる院長さんに濟まないし、深切に『先生〳〵』と言つて世話をして呉れる村の人々や、第一にはあの人の好い村長に對しても義理が立たんと考へては、母も、福太郎が可哀さうだといふことよりは、福太郎の周圍に引き廻はされてある義理や人情の七五三繩に繫ぎ留められて、身動きが出來ぬやうになつた。

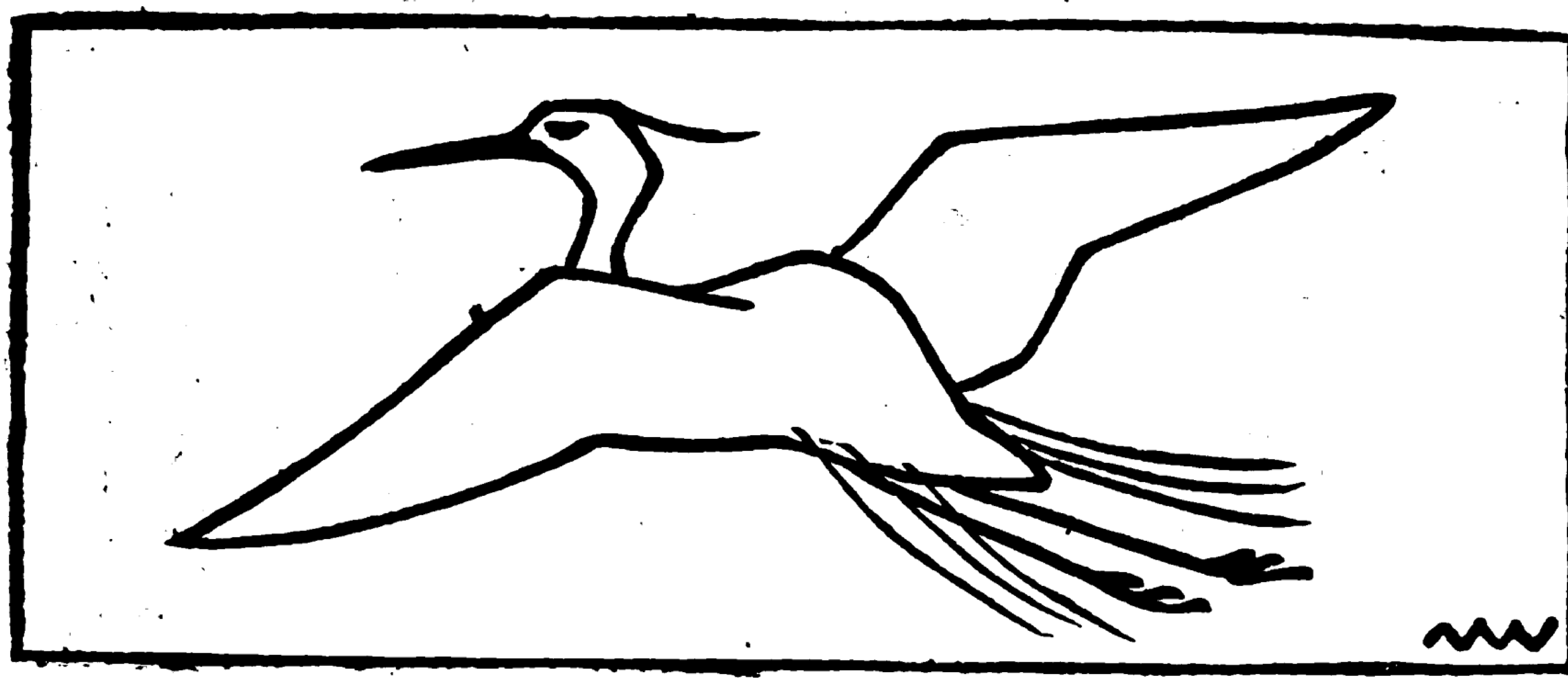
福太郎の容體は、だん〳〵惡くなるばかりであつた。院長は母を呼んで、兎ても回復の見込みのないことを告げた。

この二三日は、村長も病室へ詰め切りにして、夜も碌々眠らずに、枕頭へ坐り切りにしてゐた。其の肉親も及ばぬ温い心の底から湧き出す泉のやうな深切さには、母も何んとなくたまらなくなつて、隅の方へ顏を向けつゝ、さめ〳〵と泣いた。

『もう一遍元の春田君にならんもんかなア。』と、病人の引く息の多い、疲れ切つた顏へ、自分の顏をおッ被せるやうにして、村長は泣いた。

村長宛の大きな白い狀袋が書留郵便で來た時、村長はいそ〳〵として封を切つたが、其の手に開かれた厚い奉書紙には、『自今月俸金四十五圓ヲ給ス』と書いた縣廳から郡役所を經て來た福太郎への增俸の辭令が入つてゐた。

其の辭令をば村長が、福太郎の窪んだ眼の上へ持つて行つて見せた時、彼れの疲れ切つた、死人にひとしい顏には、幾日振りかの微笑があつた。さうして、
『阿母さん、これをあの革文庫へ入れといて下はれ。』と言つた。(完)



犧牲者

德田秋聲

私達夫婦は、此の春頃から繋りあつてゐた事件の最後の解決——或る青年とその女との間に生れた子供の處置を着けることができて、長いあひだの煩ひであつた其の問題から脫れ得た悅びに、ほつとしたやうな氣持で、幾日をか過してゐた。

ひよつとした心の動機から、ふと手をつけることになつたのであつたが、中途から手を出したことを悔ゆる心持になつてゐた其の問題を、最後まで押進めることは、私に取つては可也の興味はあつたが、妻に取つては全然意味のない努力であつた。殊に問題の性質上、自然に彼女が幾ど全責任を負ふことになつた、お產前後と赤兒の處置については、多勢の子供と世帶に疲れてゐる彼女の心を、時々いら〳〵させずには置かなかつた。然し、子供の遺口

の交渉に當つたり、産婆に預けてあつた生後一月ばかりの間に、肉がめつきり痩せおちて、股などの爛れた赤子の世話をしたりするやうな仕事は、やつぱり多く彼女の手に待つより外なかつた。私はこれほど忍耐して、事に當つたことは今迄に例がなかつた。そして時々むくれあがるやうな彼女の不滿を抑へ抑へ、事件を最後の解決まで持運んだ。私はその幼兒の前途についても、少からぬ責任を背負はされてゐるのを感じた。そして入費と手數とを厭ふ必要のない立場にさへゐたなら、幼兒のために最も幸福な方法を取りたかつたのであつたが、事情がそれを許さなかつた。

「可哀さうなものですよ。」妻は今朝から子供の荷物を取纒めたり、襁褓を取揃へたり、授乳器や幌蚊帳のやうなものを買つて來たりして、午後の二時頃にやつと先方へつれて行くことになつたのであつたが、二三時間ばかりして、歸つて來ると、さう言つて先方の樣子を私に話した。それは子供のために、決して不幸な家ではなかつた。心優しい思慮のある細君と、子煩惱のその良人との子供に對する愛情は、二人が子供を見に來たときの樣子や、その人達の氣分のうへにも十分認められたのであつたが、夫婦きりでちんまり暮してゐる其の家の座敷に寐されてゐる幼兒の寐顏を、歸りがけに覗いたときには、生みの親に緣の薄い幼兒の身のうへに含涙まずにはゐられなかつた。

この子供の最後の處置をつける前にも、私は幾分妻の提言を容れて、青年の父親の方へ、子供を手許で育てることを言出して見たのであつたが、青年の親たちが初めから侮蔑と憎しみのかゝつてゐた青年の女の腹から産れた子供の身のうへを劬つて、多くの注意を拂ふことは、最初からの行懸り上、餘計な手數と思はれたかも知れないのであつた。私たち夫婦は子供の遣先の選擇などについて、二度も三度も

失望させられた。今度の貰ひ手も、その家庭の事情のうへから、幾度となく子供を引取ることを躊躇したのであつた。

「白井(青年の名)さんの阿母さんだつて、現在子供の顔をごらんになつたり、手紙では書けないやうな此方の事情をお知りになつたら、子供を引取れないとは仰やらないでせう。親子三人きりのお家ですから、御父さんの子として籍を入れたつて、そんなに外聞の悪いことでもなささうですがね。」

彼女は白井のゐる前でも、痩こけた子供のいたいけな口元へ、牛乳の吸口を當がひながらそんな事を言つてゐた。

「お袋は駄目です。私が大喧嘩をしてしまひましたから、意地になつてゐるんです。」

どうかすると子供を無器用に抱取りなどして、我れしらず眼鏡を曇らせなどしてゐた白井は、さう言つて諦めてゐたが、子供の處置について心を惱ましてゐる彼が、初めて人間の苦痛と悲哀といふものを嘗めさせられたやうに、沈痛な目色をして子供に顔を背向けてゐるのが、私たちには氣毒でならなかつた。

「貧乏でゐゝから、知識階級の人にもらつてほしいですね。」

どんな事があつても、私たちの引取つてすることに不服を唱へたといふことのない彼は、如何かするとそれだけの希望は洩したが、親たちに秘密で、自分の手でそれを大きくしてやると云ふほどの熱愛もなかつた。世間的の苦勞を嘗めたことのない彼に取つては、それは實際困難な問題であつた。

その朝など、私は疲れてぐつすり寐込んでゐる妻が、四疊半で自分の乳呑兒と白井の赤子とを側にお

いて、古い蚊帳のなかに赤子の泣いてゐるのも知らずに不健康な深い眠りに陷ちてゐるのを見て、そつと蚊帳のなかへ入つて、赤子を抱出すと、夏の旭の漸く昇りかけた靜な庭へ降立つた。妻はお產ごとに體が衰へて行つて、この四五年は以前のやうな快活な言語動作と明い氣分とを失つてゐた。生活の壓迫も彼女の心を年に月にいぢけさせて行つた。長いあひだの慢性の腎臟病や神經衰弱などが、彼女の心や體を、彈力の鈍りきつた古い護謨のやうなものにしてしまつてゐた。自分では、その日〳〵を紛れて過してゐるのと、健康などのことについては餘り神經の働かない彼女は、それを氣づかずにゐるやうであつたが、私には能く判つた。心持の若さと、肉體の力とを段々に耗減されて行く彼女を憐れまずにはゐられなかつた。見果てぬ夢の名殘を追つてゐるやうな、うつとりした鈍い目色をして、子供に添乳などをしながら、弱々しい溜息を吐いてゐる彼女を、私は時々注意した。自分を諦めて子供に生きねばならぬやうに餘儀なくされた彼女の胸にも、まだ遣瀨ないやうな女の氣分が色の褪せた花のやうに殘つてゐた。倦怠と失望とのうちにも、子供の將來が彼女の生命であつた。この赤子を先きへ届けてから、幾日もたゝないうちに、親たちの不意をでも覘つたやうに、急に發病して一晝夜のうちに此世から消えてしまつた長女の瑞子が、殊に彼女の生活の中樞であつた。――死んだのちになつて、しみ〳〵痛切にそれが感ぜられたのであつた。

その朝、私は曾て自分の一番目の子供を、まるで人を憚かり怖れるやうな秘密の愛情を以て、時々庭

木のあひだへ抱出して、青い葉影を見せたり、梢の隙間から見えすく限り知られぬ蒼空を見せたりしたときのやうに、白井の赤子を抱いて、微かな露の音がまだ葉末にしてゐるやうな七月の朝の庭へ降立つた。私はこの赤子に對して、その頃自分の長男に持つてゐたやうな自然の愛情を感ずることは、どうしても出來なかつたが、さりとて自分の其他の子供に對するそれに比べて、そんなに差等があらうとも思へなかつた。まだ直接に光線は差してゐなかつたが、赤子はその弱い日の光にも、目眩さうに鼻筋のうへに小皺を寄せて、黑目がちの目が細く瞬いてゐた。泣くときには小い肚の底から勃起るやうな疳癪を起して、石木だつたやうな拳や足に滿身の力を籠め、顳顬のところに青い筋を立てる樣子が、父親の氣質にどこか似通つてゐるやうに思へたが、不斷は女の子のやうな優しみが口元や、目元に見えて、額つきや頭の形も赤子にしては完成しすぎるほど能く整つてゐた。そんな點も一つは白井や私たち夫婦をして赤子に特殊の愛執を感ぜしめる原因であつたが、疳癪の強いことが、大きくなるにつれて優しい養母を困らせるだらうとも想像された。

　今年十二になる瑞子は、時々この赤子を取あげて、柔かい頰に自分の顏を押しつけながら、そこらを抱きあるいてゐた。

「どうして餘所へやるの。」彼女は時々不思議さうに母親に尋ねた。

「可哀さうぢやないの。家で育てれば可いぢやありませんか。」彼女は自分に新しい兄弟ができたやうな物珍しさを感じて、母親にねだるやうに言つた。

「笑談言つちや困りますよ。家ぢや子供は澤山ですよ。」

妻はさう言つて笑つてゐたが、自分に子供さへ少ければ、手元で大くしても可いなどゝも考へた。

左に右一車の荷物と一緒に、赤子は先方へ屆けられることになつた。どや〳〵と妻と仲介者の弟とが出て行くと、家が急に寂しくなつて、私は白井と今迄子供を寐してあつた四疊半と茶の間の間に、ほつとしたやうな氣持で莨をふかしてゐたが、白井は緣側の柱に凭れて、庭の方へ顏を背向けながら、暫く沈默を續けてゐた。

「そのうち一つ行つて見ますか。」白井は大分たつてから私が何か言出したのに對して、不安らしく曇せてゐた顏をあげて、不斷の調子で言つた。

「僕等はとにかく、君とは交涉を絕ちたいと云ふのだから、行かない方が可いだらう。」

「は。叔母さんもさう言つてゐました。使つてゐる女中の親に、臺所へちよく〳〵やつて來られても、餘り好い氣持はしないものですつてね。」

「先方ではそれを非常に氣にしてゐる。」

「何に、私は何でもないんですよ。遣つてしまへば別に……。」

妻が歸るまでには可也の時間があつた。空腹を感じて來た私たちは、昨日か今朝白井の親たちの方から屆いた、細長い大きな素麵の箱の緣側においてあるのに氣がついた。

「素麵でも拵へて食べやうか。」

「私が拵へませうか。」

嚴重に釘で打つけられた箱のなかゝら、一二把ばかりの素麵が私の手に取出されて、釜のなかへ打込

まれた。そうして二人はそれの煑えるあひだ卷煙草を口に啣へながら、お汁の製造に取かゝつた。釜の底で焦げつきさうな素麵のなかへ、更に水が注がれたりした。

臺所や洗濯や多勢の子供の世話に、朝から夜おそくまで、立ちつゞけでゐる妻の母親である老人が、この春その從姉にあたる人につれられて、久振で田舍へ歸つて行つてから間もなく、近在から來てゐた一人の無口な女中も、病氣をした時から暇を出してしまつて、家にはその後漸く捜しあてた十五になる一人の子守が來たばかりであつた。

老母は久しい間の田舍からの要求で、年上の從姉に急立てられて、産れおちるから手にかけて來た六人の孫に別れて、初夏の頃に歸つて行つたのであつたが、他人の手には迚も委しきれないやうなこまごました日常の用事に立働いてくれる老人を手離すことは、妻に取つては大いなる苦痛であつた。そしてお人好しで剛情で、手足の割には頭腦の働きの鈍い、意氣地のない彼女の氣質に對して、良人の私と同じやうな不滿を感じて、始終小言を浴せかけながらも、自分たちの家庭にはなくてならない大切な道具を失つたやうな不自由を感じてゐた。私は自分の生活などについて全く理解を持つことのできない、この母親を、小いときには自分に犧牲的愛情を拂ひ、一人前の人間になつては、尊敬と矜とを感じてくれる自分の生みの母親に比べて、精神的教養の少い彼女に多くの不滿を感じない譯に行かなかつた。子供の着物の裁から、古下駄を拾ひあげて、丹念に緒をすげたり、零砕な反物の片や糸屑のやうなものをさへ、一々几帳面に始末をして、その頭腦が始終押入や物置のなかばかりに浸つてゐて、それが其の時の用に足りると足りないとに論なく、何事をも自分の思ひどほりにして行かなければ氣のすまないやうな

不思議な道樂氣をもつてゐると同時に、物の大體に通じないやうな彼女は、子供の手足の世話はしても躾などをする能力には全く缺けてゐた。潔白な彼女は、お丸や襁褓を、飯櫃や手巾のやうに綺麗に洗濯をするのに、不思議な器用さを持つてゐたが、子供を膝へ載せて愛すほどの氣働きさへなかつた。自分の仕事に浸ると、彼女は一切周圍のことを忘れてそれに掛つてゐた。襤褸を取りあげることに沒頭すると、彼女は時々寐ることをすら忘れてしまつた。衆が寐靜まつてしまつた一時二時になつても、茶の室に居眠りをしながら仕事に坐つてゐる彼女の姿が見られた。

十二三年ばかりのあひだに、下ばかり見て働きつゞけてゐたやうな彼女の腰は、七十八十の婆さんのやうに二つに折れてしまつた。老人と青年との分岐點に立つてゐるやうな年齢の私は、周圍と時代を異にしてる心寂しい不幸な老人を劬らなければならぬことを、時々感じてゐた。夙くから良人と別居してそつちこつち流浪してゐた彼女が、忙しい立働きの眞中に、心から出るやうに吐く溜息の意味を、私は能く理解することができたが、やつぱり同感することは出來なかつた。私は急には調ひかねる仕度などの點から、出發を躊躇してゐる彼女を、此機をはづしては、何時迄たつても私の家庭を去る機會がありさうにも思へないところから、強いて性急な彼女の從姉と一緒に立たせるやうにした。

立つたあとの私の家は、私に廣々したやうな安易な感じを與へた。何かしら始終私の氣分をいら〳〵させてゐた障碍物が不意に取除かれたやうな悦びを感じた。私自身の家庭であゝながら――そして彼女が些かな心持のうへの不滿や疎隔はあつても、殆んど無意識的に家庭の用事に立働いてゐるほか、私たち夫婦の生活に理解をもたないまでも、何等の干渉も惡意も有つことのできないことを知り悉してゐながら、

やつぱり十分自分の有になり切らないやうな物足りなさを感じてゐた私の息苦しい心持が、初めて寛いだやうな自由を感じた。

時々冷かな目と目と相逢ふ彼女の坐りつけの火鉢の側に、私はのうのうしたやうな氣持で胡坐をくんだ。その目は丑年の人に能くあるやうな目であつた。私はちろりと光る其目の感じを丑年の自分の母親にも感じた。姑は私の母親より一ト廻り下の丑年であつた。細い山路などで出會す眞の牛の目のやうな無氣味さが其目にあつた。

けれど老人に行かれてしまつた私の妻は、それ以來始終いらいらしい日を送らなければならなかつた。續いて女中を出してしまつてからは、一層氣分がじれじれして、性情の平衡が破れると共に、感情が激し易くなつて、ヒステリカルな荒い言が子供に浴せかけられたり、不滿らしい不快な態度が私の心に反映したりした。それに老人が歸つて行く頃から、些かの刺傷に濃を持ちだした指頭が、手當てをする後からから水に浸けられるところから、到頭腐り爛れて、毒々しい紫色に脹れあがつて來た。それが一層彼女の神經をいらいらさせた。私は時々箒を持出して、散らかつた座敷から茶の室を掃きだしたり、遊び惓れて仆れてゐる子供を揺りおこして、寐衣を着せたりした。

「出來るだけ家を引締めてみやう。」

働き疲れたやうな妻を引立てるやうに、私は時々さう言つて彼女の氣分を轉換させやうとした。

「然うでもしなかつた日には、限りのある僕の腕で、遣つて行けさうな理由がない。」私はさうも言つて私の苦しい立場を説明した。

「私もこの指さへ癒れば、大變に働きよくなるんです。」

そうして働きはじめると、彼女はまた不思議にかひかひしく幾分は反抗的に立働いた。私はいつになく、私の生活が單純化され、緊縮されたやうな愉快を感じたが、夫婦間の氣分には不思議に今迄のやうな親しみが失はれて來た。

私と白井とは煮えくたつた素麵を釜から引揚げて、それを桶に移すと、ざあざあ水道の水を注ぎかけた。そこへちよい／＼助けに來てくれる舊の女中のお清が、仕立あがつた子供の着物を持つて、臺所口から上つて來た。素麵が流しの板や溝に、夥しく粘着いてゐた。

私と白井とが、子供たちを呼び集めて、幾箇もの丼に盛られた素麵に食べ飽きてしまつた頃に、漸と妻が歸つて來た。

熱い氣忙しい其一日が暮れて、花壇の草花に星明がさす頃に、私は久振で重荷を卸したやうな氣持で机の前に坐ることができた。急ぎの仕事が、一週間も前から私の氣に引懸つてゐたが、梅雨時分から神經衰弱の滅切り募つてゐた私は、如何しても筆を執るやうな氣分になれなかつた。

お盆に子供――殊に妻の歡喜と矜であつた瑞子に着せる着物や帶などについて、ちよい／＼私に相談をかけてゐた妻は、白井の女に關する事件を片着けたとき、白井の父親から贈られた五十圓ばかりの切手の遣ひ殘しで、赤子の物を買ひ足した其のまた殘りを利用することを、私に謀つた。私はそれを一切

白井の赤子の着物に使用する意であつたが、全然妻の要求を拒むこともできずに、幾分をそれの用途に當てることを默諾したのであつた。

「お禮を受けるために遣つた仕事ぢやない。お禮を受けべき筋のものでもない。」私はさう言つて兎角それに拘泥りたがる彼女を再三說き諭して見たが、相當と思はれる程度で、先方の好意を受入れることが反つて自然らしくも考へられた。

派手な秋草模樣の、見た目の涼しさうな反物が、姉の瑞子と、妹のきよ子とのために擇ばれた。瑞子はもう本裁を着るやうな脊恰好になつてゐた。骨格の父親に似た彼女は、胴が細くて、手足が割合に詰つて、一體に精悍しい樣子をしてゐたが、近頃はもう女になるべき肉體の成熟が豫想されるほど、腰や腿などに堅いもぢもぢした肉がついて、抱きあげると手觸りは細くても、腕に持重りのする體量が感ぜられた。それが私には一種の快感を唆るので、よく抱あげ〱した。そして膝のうへに横へて、彼女の健かさうな息が感ぜられるほどに、頰に頰に推つけたりした。癖のない太めな髮が、近頃一層光澤をもつて來た。瑞子はその毛を、自身に能く手入れをすることを怠らなかつた。母親の髮の結ひ方などに滿足しない彼女は、ずつと以前から、自分で好き自由にそれを驅使することに慣されてゐた。

私は一番目の男の兒を除いては、どの子供にも餘り興味を惹されなかつた。そして何の子供にも〱產れおちるから育つて行く經過については、上の子のやうな特殊の感じや、深い印象をもつことは出來なかつた。瑞子も無論その一人であつた。

瑞子の產れたのは、私が家をもつてから、初めて鄉里の母を歸省した年の七月であつた。近所に世帯

を構へてゐた妻の兩親の家で、或る暑い日の午後の五時頃に、彼女は生を此の世に受けたのであつた。色の黝い、額際の切詰つたやうな、瘦こけた醜い赤子として、彼女は初めて明るい世界の光に、細いその目を目眩さうに瞬いてゐた。

「何と云ふ顏をしてゐるんだらう。」

舊式な産婆が、お七夜に來て、いつものやうにお湯をつかはせてから、毛を切つたり、額に墨を入れたり、口紅をさしたりしたところで、細つこけたやうな彼女の顏が、一層みじめに私の目に見えた。幼いときには能く輪廓の調つてゐた上の子に比べて、是がどんな女に成るだらうと、私には氣になつた。

「可いですよ。どんな縹緻でも片輪でさへなければ……。」

産婦も赤子の顏を眺めて、淋しげに笑ひながら負惜しみを言つてゐた。

大きくなるにつれて、彼女の皮膚は白さと滑かさとを增して來た。やゝ釣あがつたやうな目の切が、妻の父親に似てゐることが現はれて來た。きりゝと締のいゝ口元も、祖父系統のものらしく思へた。二三歲の頃には、胸圍が潤く、下脹れの顏にも豐かな肉をもつて、手足が丸々してゐた。多くの手數をかけることなしに、父親からは何の注意をも拂はれずに、愛されることもなしに、彼女は自然に育つて行つた。私は今これを淚なしに書くことはできない。

「こいつの鼻は豕の口のやうだ。」

私はその頃目立つて可笑しく見えた彼女の鼻を見て、時々笑つた。

瑞子は神經の弱々しいその兄の幼い時分のやうに、滅多に泣いたり憤れたりするやうなことはなかつ

たが、偶には母親を困らせるやうな事もあつた。四つくらゐの時分に、彼女はふとしたことから機嫌を損つて、茶の室の紙門に粘着いて、心から怒つたやうに、獨りで泣いてゐた。私は彼女の兄のめそめそした泣聲に惹つけられるやうな悲哀を唆られたが、女である瑞子の意地張りな泣き方には、反つて一種の可笑味を感じた。そして人をも寄せつけないで、際限なく泣いてゐる彼女の樣子を揶揄ひ面で眺めてゐた。

「もうお止め、ね、好い兒ですから。」妻は笑ひながら宥めた。

「止めやうと思つても止められない。」彼女は地だんだ踏んで胸の張裂けさうな聲で一層烈しく泣立てた。

「こいつは大變な奴だぜ。」私は笑ひながら手を出しかねてゐた。

「吭が痛い、吭が痛い。」瑞子はさう言つて、吭を搔挘るやうにしながら、腹から捲したてゝくるやうな泣聲に咽せてゐた。

六つ七つになると、彼女の顏が段々その愛らしさを增して來た。父親にも母親にも似ない半月形の細い眉が、切の好いその目尻のあたりまで、優しい尾を引いて、黑晴がちの目が冴え〳〵して來た。冬中荒れてゐる皮膚が、夏になると見違へるほど滑かな白い光澤をもつて來て、藍色の絞の浴衣などを着たその横顏が、殊に綺麗に見えた。その面影は、十か十一頃から次第に消えうせて、眉尻が母親のそれに似て來たり、瞳の色が父親のそれと酷肖なことが現はれて來たりした。軀の小いことも事實となつて來た。

「瑞子さんはこんなに成らうとは思はなかつたにね。」

彼女が能く負さつたり抱かれたりして可愛がられた女は、その頃彼女の思ひのほか整つて來た顏立を

眺めて、能くそんな事を言つてゐた。

學籍に入る頃になつても、私は學校の選擇などについて、長男のやうな注意をも拂はなかつた。そして區で割當てゝくれた場末の小學校に通はせることにした。彼女は、七五三の祝ひのときに作つた友禪縮緬の小袖に、赤い袴を穿かせられて、母親につれられて、初めて學校の門を潜つた。

「上級の子が大騒ぎなのよ。みんな可愛い〳〵と云つて、引張つて行くんですよ。」

妻は入學式から歸つてくると、嬉しさうに私に話した。

「縹緻が人にすぐれて好いの何のと言ふんぢやありませんけれど、でも醜い子ぢやありませんよ。」

「諏訪のおばさんに肖てゐる。」私は彼女が四つのとき妻子をつれて旅をしたときに逢ふたことのある妻の父方の叔母の顔をいつも憶出すのであつた。

暫くしてから、妻はまた學校の先生から、瑞子のことを讃められたと云つて、寧ろ不思議さうにそれを私に吹聽した。

「家のみいちやんは學校ぢや、莫迦に評判が好いんでせう。家庭でどんな躾をなさいますかと訊かれて私は赤面したくらゐでしたの。先生の仰やることに注意ぶかくて、お行儀が莫迦に好いんですつて。」

妻は含涙ましいやうな目をして、極惡さうに顏を背向けた。父母の無知識と、愛情の缺乏から、碌々普通の教育すら受けることなしに、小い時分から世間の苦勞を嘗めて來た彼女は、文字がないばかりに何のくらゐ肩身の狹い思ひをして來たか知れなかつた。讀み書きに關係の深い私に來てから、それが一層痛切に感ぜられた。負けず氣の見えの強い彼女は、それを包み隱すだけにも、人の知らない氣苦勞を

しなければならなかつた。郵便局や病院へ行くことさへ、彼女には大仕事であつた。彼女としては女の子の瑞子が、學校の先生から讃辭を頂いたことが、大いなる感激であつたのも無理はなかつた。

「さうかね。」私は何の氣もなしに應へた。

「學校が學校だから……。」

「然うぢやありません。隨分好い家のお子さんも行つてゐますよ。」

妻はさう言つて、目についたやうな生徒の髮の形や着つけなどについて、私に話した。それが悉く瑞子に引つけての見方であつた。

學年の終りに瑞子の持つて來た成績表が私がいつも可也の成績と信じてゐた彼女の兄のそれに比べて遙かに優秀であつたことが、私の驚異であり、妻の矜であつた。

瑞子の存在が、幾分私の心に認められて來た。

三年四年と進むにつれて、彼女の學校に對する興味が、一層深くなつて行つた。證書を三枚貰ふのだと云つて、一二度の熱のある時でも彼女は推して出て行つた。彼女の生活の規律の正しいことや、勉強の爲方のシムプルなことや、時をきつて遊びに沒頭することや、氣象の毅然したことなどが、年々に私の注意を引かずには置かなかつた。

白井の子供を片着けてから、少許の仕事をすませて、久し振で訪ねた大久保の友人の家から歸つて來

た十五日の晩には、彼女の身のうへにそんな可恐しい暗い影が附絡つてゐやうとは思つても見なかつた。

ダリアが盛りだから、晩食を食べに來いと云つてくれた其の友人は、私より一つ年下であつたが、晩婚であつたために、三人の子供は何れもまだ少さかつた。

東方經營などに、深い志を抱いてゐた友人は、今は或雜誌に關係して、時々原稿を寄せるほか、郊外の家に閑居して、花などを作つて暫らく隱者的生活を享樂しんでゐた。

私が其父親が市長をしてゐた此友人の家へ時々遊びに行つて、一緒に畫をかいたり文章を作つたりし初めたのは、まだ小學の高等科時代であつたが、二人が東京へ出てからも、友人が海外へ行つてからも時々の交渉が辛うじて絕えなかつた。六七年前東京に家を構へてから、何時の間にかもう三人の父親になつてゐた友人は、私の多勢の子供にも少からぬ興味をもつてゐた。

私が尋ねて行つたときに、去年の春產れたばかりの子供を抱いた友人の後姿が、向ふに見えたが、可也白いものゝ交つて見えるその頭などが、ふと私に彼を見そらせてしまつた。

三四列に作つた花畑には、大輪のダリアや偉大な百合などが疎に植はつてゐた。擇ばれた花の種類や瀟洒で寬濶な花畑の布置などが、彼の性格に酷肖であつた。私は五時間ばかり、飮食をしたり、舊友の噂をしたりしてゐた。大阪の後の陣に戰死したと云ふ友人の祖先の肖像書などを見せられたりした。そして埃及タバコや、六七輪のダリアなどを貰つて、停留場まで送られて歸つて來た。

「瑞子がもうちよつと前まで起きてゐたんですよ。御父さんがきつと花を貰つてお歸りになるから待つてゐるんだつて‥‥。」

子供たちは、一昨年私が病院にゐる時分、二三度ダリアを持つて來てくれた友人を能く知つてゐた。

「正男は。」

「正男はもう疾に寐ました。」

私はダリアの包紙を取つて、花瓶に挿したり、友人の子供たちの噂などをした。

「家の瑞子は困りますよ。」

妻はふとまた瑞子の噂をしはじめた。學校や琴や遊びにばかり耽つて、手の少ない家の用事などに無頓着な瑞子は、時々母親の氣を焦立たせた。

瑞子は自分自身のことは、何時でもきちんと調へておかなければ氣がすまなかつた。朝は時間が迫つて來るまで、寢床のなかに眠を貪つてゐた。睫毛の長い、眠つたときには餘計切長に見える目や、短い頭から耳朶のふくよかな大きい耳のあたりが、絞の寐衣を着た彼の寐顔を鮮やかに見せてゐた。

「何時？」

瑞子はやゝ氣懈さうな目をあいて、茶の間の方にゐる人たちの方へ、落着はらつた調子で訊ねた。時間が迫つて來るまでは、傍でどんな騷ぎをしてゐても、平氣で寐てゐた。

兄や弟が大騷をして出拂つた時分に、彼女は部屋の隅で、——如何かすると片膝を立てゝ——髪に櫛を入れてゐた。そしてそれを自分の好いたやうに結びあげるとお膳に向つた。

「行つてまゐります。」とお叩頭をする前に、彼女は自分の机の側で、能く鞄をかけたまゝ、ちよつと本を覗いて見てゐた。

妻の話では、瑞子は學校で約束をして來たといつて、不斷から仲好の三四人の友達が迎へに來ると、蒟蒻閻魔へ遊びに行つたのであつた。その三四人は瑞子の擇ばれたる同級の友達であつた。瑞子のお盆の着物が其時迄にはまだ仕立てあがつて來なかつたので、裄丈のやゝ詰つて來た去年の着ものを着て行つた。

「それは其で可いんですけれど、あの子の氣難しいにはほんとに困つてしまひますよ。足袋が見えないと云つて、大焦れに焦れて、お花に買つて來てもらつて、漸と出て行つたんですがね、あの氣象ぢや末が案じられますね。」

そんな處に、私と氣質の類似點が見出せるやうに思つて、私は默つて笑つてゐた。

妻は何かあるといつでも瑞子を着飾らせて出してやりたかつた。春の琴のお浚ひの時にも、彼女は何の彼のと、久しい前から自分自身の目論見をたてゝ、やきもき氣を揉んでゐた。そして遠廻しに恐る怖る私に相談をかけて見た。

「遣切れないね。一度出たんだから今度は出なくたつて可いぢやないか。」

「でも先生が瑞子に出てほしいことを言ふんですて。何にお安く出來ますよ。それにもう本裁ですから、お嫁に行く時分まで着られますもの。」

彼女は何時もそんな風に、私を說得しやうと骨を折つた。琴の師匠の家では、瑞子は今迄にない上達の迅い弟子であつた。瑞子がその師匠に通つてから、此月でちやうど半歳になつた。今三つで、中許しが受けられると言ふのであつた。

眞岡さんでは、家の瑞子をもらつて、思ふさま仕込んでみたいと言つてゐるさうですよ。あんな子は珍らしいんださうです。」

妻は同じ弟子の母親や、そこへ出入りする髮結などから聞いたことを、時々私に報告してゐた。

瑞子にねだられて、琴を初めさせる頃から見ると、私の彼女に對する此頃の興味は、いくらか向上して來てゐた。或意味に於て彼女を新時代の女に仕立てたい望みが、私の頭腦に兆しはじめてゐた。遊藝などを仕込んで、彼女を親の玩具や、男の慰みものにしたくはないと思つた。

「琴といふものも面白味のないものですね。」

時々聞倦んだと云ふ風に、私とはまた別の意味で、妻もさう言ひ〳〵してゐた。

去年の冬の初め、一ト頃私は自分の知合ひの家で、そこの養女に出稽古をしてゐる芝の方の或長唄の先生に、其の男に勸められて、音曲の手釋きをしてもらひかけたことがあつた。三四人の閑な男が、そこへ落合つて、鞍馬山だの、黒髮などを教はつてゐた。中には道成寺を稽古してゐる人もあつた。扁桃腺の肥大してゐる瑞子は、聲が餘り立たなかつたので、私は多くの望みを持たなかつたが、師匠がきつと出ますと云ふので、暫く通はせて見た。琴には長唄を習つておく必要のあることを、ちよい〳〵妻から聞されてゐたからであつた。けれどそれは長くは續かなかつた。道が可也の距離があるのと、夜が遲くなるのと、月謝の不廉なのと、――小まちやくれたそこの養女が、七つ八つで、もう可也の段數をあげてゐたなども、その原因であつた。

春の琴のお浚ひのとき、妻は到頭彼女のために、お召の襲や板帶、ハイカラな外套まで新調してしまつ

た。簞笥のなかに、年々殖えて行く瑞子の着ものを見ることは、親から何もしてもらふことの出來なかつた彼女に取つて、何よりの樂しみであつた。どんな苦痛を拂つても、瑞子のためには惜しいとは思はなかつた。

「私はかう思ひますがね――」などゝ、彼女は時々瑞子の將來について描いてゐることを私に話した。そしてそれが皆な彼女の婿の選擇や結婚などについての彼女の幻想であつた。娘のために、兄弟たちの力となるべき良人を擇ばねばならぬ、彼女は時々そんな方へ打算的な自分の考を持つて行つた。

「お母さんがこれほど貴女のために、心配して何でも言ふことを聞いてあげてるぢやありませんか。」

彼女が、時々むかッ腹を立てる瑞子に、さう云つて焦れてゐるのを、私は時々耳にした。世帶の心配や、手のない家の用事に追はれて、憤々してゐる彼女の不滿が、毎日のやうに子供たちの方へ嚮けられて行つた。水に浸けどほしの彼の指が、時々熱をもつた。

「もう眠てしまつたらうか。」

私は彼女に花を見せたかつたので、寐てゐる蚊帳の方を見遣つた。

「もう貴方……いつもの通りに、水で體を拭いて寐てしまひましたよ。それに今夜はしばらく彈かないからと言つて、お琴を三つ彈いたんですの。」

「さうかい。此頃は餘り彈かないやうだね。」

「糸が惡いから買つてほしんですと。それに今夜は妙なことを言ひましたよ、お琴なんかつまらないから止めて了ひませうかつて……。」

「へえ、どうしてだらう。」

「だつて、もう三つで中許しがもらへるんだから、今止めては詰らないぢやないかと言つたら、それも然うだけれど、それには少し譯があつて止めたいんだなんて言つてゐましたがね、しばらくお復習をしないから、手を間違へでもしてお叱言でも戴いたんぢやないでせうか。」

私は多く氣に止めなかつた。そして寐るときに、づらりと枕をならべてゐる蚊帳のなかを一巡見て、脱いだ夜のものを着せたり、暴れだしてゐる體を布團の上へ直したりしてやつた。瑞子は一日の遊びに疲れたやうに、ぐつたりと寐てゐた。

翌朝獨寐の蚊帳のなかで、私が目をさますと、微かな瑞子の泣聲が、うとゝゝしてゐる私の耳についた。彼女の泣聲を聞くやうなことは滅多になかつた。

「打たれたのだ。」

私はさう思つて、いきなり茶の室へ出て見た。

「打つたんだらう。」

「いゝえ、打ちやしません。何だか體が懈いんですて。」子供だちの食荒した餉臺の前に坐つてゐる妻が應へた。

看ると瑞子は、寐衣のまゝ四疊半の眞中に打仆れて、體を縮めて寐てゐた。

私はちよいと額に觸つてみたが、大した熱でもなかつた。

「氣分が惡いなら、醫者へつれて行かなくちや不可いぢやないか。」私はさう言つて、臺所へ顏を洗ひに立つた。

大分經つてから、彼女の兄が熱を量つてゐたやうであつたが、私の記憶するところでは八度以上ではなかつた。

「放擲つておいちや駄目ぢやないか。早く〇――氏を呼んだら可いぢやないか。」

小い子供などに氣を取られてゐて、急に醫者を呼びさうにもない妻の態度にいら〳〵して、私が二度目に警告を與へたのは、私が新聞などを見て、また火鉢の側へ寄つて來てからであつたが、さう言つて急立てる私自身にも病人に對する心配よりも、寧ろ手のないことを口實にして、私に突かけやうとしてゐるやうな彼女の心持に對する反感の方が强かつた。私はつひ一ト月程前にも、指の病氣をした次男をつれて、親類筋の醫師に診てもらつたり、大學の皮膚科の病室へ行つたりした。急を要しない、しかし心配なやうな病氣については、私はいつでも自分の責任を感じて、そつちこつち醫者を詮索するのであつたが、瑞子の病氣は、彼女が時々多少の苦痛を訴へることのある頭痛くらゐに思つて、極めて朦朧した注意しか拂はなかつた。

「ぢや連れて行きませう。來て貰ふのも氣の毒ですから。」

私は今度に限つて、妙に醫師に遠慮する彼女の心持に飽足りなかつた。

「だけど、その爲に多少の附屆けもしてあるんぢやないか。」

「でも近いんですから。」

暫くたつと、萩模様のメリンスの單衣に着替へさせて、瑞子を負つて出る彼女を、私は玄關まで出て見た。

「大きいものが見つともない。歩かせて行つたら可いぢやないか。」

そして歩かせて格子戸を出ると、瑞子はいきなりそこへ跪坐んで口から青いやうなものを吐いた。

「胃だ、胃だ。」

私は事もなげに言つて引立てゝ行く彼女を見た。上の子供が二三日食慾もなくつて、ぐつたりしてゐる三男を負つて、これも診てもらひに連れて行つた。三男は二三日前に一度服藥して、多少快くなつてゐた。

私は机の前に坐つて、仕事に頭を褫られてゐたが、暫くして歸つて來た妻の報告では、その病氣がそんなに重いと云ふ、何等の暗示をも含んでゐなかつた。そして四五日前に子供連に素麺を養べさしたことも、其次の日に二人の女客があつたとき、私の留守に、お汁粉を拵へて食べさしたと云ふことも、水蜜桃と天津桃とを、その前後に少しばかり食べてゐると云ふやうなことをも、一切分明と憶出せずにゐた。

胃腸の弱い長子が、夏毎に私たちを騒がせる腸加答兒も、此の四五年は、彼がそのために瀕死の重患に陷つたことをすら忘れさせてゐた。私は子供の胃腸病には、自ら深い經驗があると信じてゐた。そして色々の私の心持の變化から、子供の衛生――自分自身の衛生にも然うであつたが――について年々に

ルーズに流れつゝあることに氣がつかずにゐた。私は此頃殊に疾病と死に對する恐怖から、いくらか超越することが出來たやうな氣がしてゐた。年を取るに從つて、私は始終生活の苦痛に怕れわなゝいてゐた臆病な暗い頭を擡げて、明みへ這ひ出して行けるやうな氣がしてゐた。

妻は瑞子のために、油藥などを貰つて來て、それを服ませてゐたやうであつたが、私はそれが一切彼女の責任の領分であるやうに、傍觀的態度を取つてゐた。

「貴方、貴方。」

緣先の鉢前のところへ頭を垂れて、口から青い液を吐いてゐる瑞子の脊を撫さすりながら、妻が私に聲をかけたのは、それから又大分經つてからであつた。そして二三回懈さうな體を起して、あはたゞしく便所へ通つた時にも、私は何時にない無感覺な態度で離れて見てゐた。

妻が汚れ物を裏へ洗ひに行つてゐる間に、氣丈な病人が、私が枕頭に簾などをかけてやつた床を離れて、ばたばたと厠へ出て行くのを見たが、私に便所へついて來られるのを極惡がるやうに、入口の戸を閉めて了つたりした。

「少し重い。二週間も私がみつちり見てやらなければ……。」私がさう思ひながら、寢床へ歸つた彼女の側を離れてから、暫く經つて、私はまた座敷の障子につかまつて立つてゐる彼女の汚れたところを始末してゐる妻の姿を見た。汚れ物をさげて妻が裏へ出て行つてから、緣側にこぼれてゐる粘液を、私は拭いたり消毒したりしたが、長子が十年前に辛うじて死から脫れたときに、粘液に對して私が感じてゐたやうな恐怖は、私の鈍い頭の底に不思議に隱れてゐた。そして、そんな場合に「ちよつと便をごらんな

すつて」と云つて、私の注意を喚起さずにはゐられなかつた妻すら、いら〳〵したやうな氣持で、平氣で、汚れもの丶始末に頭腦を攬られてゐた。

午後に白井は日曜毎に、彼のために下町から菓子を買つて來ることに決つてゐる友人のA―氏が、その日も菓子を持つて訪ねて來た。私がいつか賴んでおいた瀬戸物の本が、それと一緒に彼の風呂敷から出た。全く白井に從屬してゐるやうな柔順なＡＩ氏は、白井を通して私の家へ遊びに來ることを、白井によつて許された唯一人の青年であつた。總ての藝術に極めてデレケートな趣味をもつてゐるA―氏は勤めてゐる會社の仕事の隙に、この頃或洋書の研究所へ通つてゐた。溫雅な此の青年は何につけても、自分だけの特殊な見解をもつてゐた。

芝居や瀬戸物の話が、三人の間に限りない興趣を以て語られた。工業出のA―氏は瀬戸物について、幾んど專門家のやうな知識を有つてゐた。二三日前に、通りを散歩したとき埃のなかゝら拾ひあげて來た圓周の似顔繪なども彼によつて品隲された。その繪は幾んど新しい寫生から成立つてゐた。

「芝居の繪と云ふ以上に、此の繪が繪としての獨立した價値をもつてゐる點が、優れてゐる。」私はさう云つてそれを矜つた。

病人について厠へ通つて行く、妻の姿が一度か二度、私たちの前を通つたやうであつた。そしてこんな場合に、芝居の話などに耽つてゐる主客の暢氣な態度にじれ〳〵してゐるやうな彼女の樣子が、時々私の心に觸れて來たらしかつたが、鈍感な私は、幾分は彼女の態度に對して今朝から有つてゐた淡い反感のために、何等の分明した意識もなしに、ぼんやり見てゐた。あれほど病氣に銳感な私が、こんなに

落着いてゐられたことは、稀有であつた。

二三時のあひだに、不幸な瑞子の病氣はぐん／＼進んで行つた。

「貴方、貴方。」

ふと遠慮ぶかい慌忙しい妻の聲に駭かされて、私は急いで病人の傍へ行つて見た。白井たちも初めて氣がついたやうに、挨拶もそこ／＼に出て行つた。

「何だか樣子が變ですよ。」

高い熱に浮されたやうに、病人は苦痛を訴へやうとしてゐるやうに、譫言を口走つてゐた。遣瀨のないやうな苦悶が、病人の表情や、無意識に動かす手足に現はれて來た。

「如何した、如何した。」

「Uーさんを呼んで、早く呼んで……。」

近所で小供の專門醫として、評判の好い醫師の名が、二三度彼女の浮づつた聲で叫ばれた。

「可し／＼、しつかりしなくちや不可いよ。」私は其手を摑まへながら言つた。

「Uーさんが……ほら、UIさんが入らしやいました。」

彼女は玄關を方を、伸びあがつて見るやうに、首を擡げながら二三度同じやうな事を夢幻のやうに口走つた。

子供たちの病氣が、少し重いとなると、是迄私は躊躇なくUー氏を迎へるのが例になつてゐた。不幸なことには此の瑞子の躁狂が、私には何等の暗示をも與へなかつた。瑞子は何時かも夜中に寢床に起直

つて、欷泣きながら、同じやうな譫語を口走つたことがあつた。そして介抱する妻の膝にすがつて、何かを懺悔するもののやうに「お許し下さいまし〳〵」と繰返した。その時私は芝居を見に行つてゐた。

「電話をかけやうかと思つたんですがね……瑞子は餘程變ですよ。床のうへに起上つて、分明した聲でお經を讀みましたよ、長いあひだ……ほんとに氣味がわるいくらゐ分明した聲で……。」

芝居から歸つた私の顏を見て、驚きのまだ全く鎭りきらぬ妻は、さう言つて其時の樣子を説明した。

「O—さんに見てもらつたら、別に心配はないんださうですけれど、あの子は何だか變ですね。」

そんな事のために、今の彼女の躁狂が、私たちに大した不安を與ふることなしに看過されてしまつた。

左に右私たちは寢床ごと、彼女を座敷の方へ持出して、O—氏を呼ぶことにした。

「樣子が變つて來ましたから、些とお出下さいましと、さう言つてね。」

妻はあわたゞしくO—氏を迎へにやつた。O—氏は何かの會に行つてゐて不在であつた。

「今一時間ほど經たなければ歸りませんが、熱が昇つたのなら、水枕をさしておいて下さいつて……。」

氷嚢や水枕の仕度されてゐる間に、此頃一度子供全體の健康診斷をやつてもらつた妻の縁家續きの或若い醫士へ、妻は電話をかけたりした。其醫士は去年私の郷里の醫學專門を出て、今は大學へ通つたりしてゐた。

M—氏と云ふ其の醫士が來てくれたのは、間もなくであつた。女のやうに、口の利き方などの優しい彼の落着いた態度が、私たちには何となく賴もしく思はれてゐた。

彼が患者を診察しをはつて、私が彼からまだ何等の診斷を聞くことを得ないうちに、O—氏がやつて

來た。O—氏はその後の經過を一ト通り聽取つてから、患者の體を診たが、重態と見てゐるやうな表情を、私は彼のどこにも見出すことは出來なかつた。

「まあ、今のところは格段御心配なことでもないでせう。」

玄關まで送つて出て、不安さうに樣子を聞いた妻の問ひに、彼は簡短にさう答へただけであつた。

勝手の方では、その間にも運び出される汚れものゝ洗濯に忙しかつた。いつの間にか弟の嫁のお力が來て、それに働いてゐた。妻は着古した單衣を二枚も引つ釋いて、當座の襁褓にあてたりした。

「惡いやうですね。大丈夫ですか、病院へお入れなすつたら奈何です。」よく物を誇張して言ふ癖のあるお力が、病人の側にゐる私達に言かけたやうであつたが、私の自信ありげな耳には、それが何等の響きをも與へなかつた。

「大變な便ですよ。洗つたつて落ちやしません。」お力はさう云つて、臺所で釜にどん／＼湯を沸してゐたやうであつたが、それも私たちには通じなかつた。

「とにかく看護婦をお上げになつたら如何です。」

M—氏は妻や私に勸めた。

「え、さうでもしなくちや迚も遣切れませんよ。」妻はわく／＼した調子で、私に言ひかけた。

M—氏が、暫くすると近所へ電話をかけに行つた。

私は時々病人の傍へ坐つて、熱の下るのを待つてゐた。四十度の熱が、少しでも下つてくれさへすれば、そんなに危險な狀態に陷る筈はないと考へてゐた。私は長子の幾度も／＼の同じやうな場合を、こ

の際唯一の經驗と賴んでゐた。愚かにも、私は彼女の病氣が、長子のそれと同じ徑路を取るものとしか想像できなかつた。私は自分の平生衿つてゐる僅の經驗が、どんなに淺薄で腑効ないものであるかに氣がつかなかつた。

「大丈夫、お父さんが癒してあげるから、しつかりして居なくちや駄目だよ。」私は今十時間のうちに迫つてゐる、生死の境に—恐く冷い死の翅の蔽ひかゝつた彼女の手を取つて、さう言つて慰めた。恐ろしい强烈な病毒が、その瞬間にも絕えず若い彼女の血と肉體とを迅速に侵蝕しつゝあつた。苦悶に喘ぎながら、彼女は時々布團の上に、體を悶掻いた。そして疲れて來ると、一ト時昏睡狀態に陷つた。

「こんなに冷してゐて、熱がちつとも下らない。」私は不安さうに呟いたが、しかし熱の下るときが、早晩來るものと信じてゐた。O—氏がつい此頃近所で、一人の疫痢患者を失敗つてゐることや、M—氏の手腕を、まだ一度も試したことのなかつた事なども、私は少しも考へやうとはしなかつた。十二歳になつた瑞子の病氣が、疫痢であらうとは想像して見やうとも思はなかつた。

O—氏が浣腸器をさげて遣つて來たのは、大分時間を經過してからであつた。浣腸器のゴムが古びてゐて、縫目の弛んだポンプのやうに所々水の洩るのをM—氏は指先で抑へたりなどして、漸と食鹽水を注入することができたが、もう肛門の緊約力が衰へてゐたせいか、食鹽水はぢび〳〵と、油紙や襁褓の上にしみ出して、時がたつても何物を浚ひ出すことが出來なかつたが、私はその時も以前の經驗で知つてゐるとほり、浣腸が爛れた腸に對する一種の療法であることゝばかりに考へて、それが腸に發生した毒素を浚ふための療法だとは知らなかつた。そして私はいくらか安心してゐた。毒素を浚ふための療法

とすれば、O—氏は既に時機を誤つてゐたのでなければならぬ。

O—氏がまだ其上にカンフルの注射を一本うつて、歸つて行つてから、私たちはいくらか落着いて來たらしい病人の側で、看護婦の來るのを待つてゐた。病人は時々術なげな泣聲を立てるきりで、喘ぎ〳〵眠つてゐた。

夜が段々更けて行つたらしかつたが、私たちは時間の經過には、一切氣がつかなかつた。

「辛子で腰湯をつかふと可いさうですがね。」枕邊にゐた弟が言つたやうであつたが、私は其事を確實に考へてみやうともしなかつた。それが反つて彼女の體を疲すであらうと考へた。

十時半頃に、ふと瑞子が劇しく悶えはじめた。うん〳〵齒を切齒つて、硬張つたやうな兩手を胸の上に鯱子張しはじめた。私も妻も急いで其手に縋つた。

「手鏡を見てゐますよ。貴方、貴方どうかしなければ……何だか變ですよ。」

妻はおろ〳〵して、泣聲を立てた。

「これあ可笑いね。O—氏に委しちやおけない。U—氏を呼んで來てもらはう。」

私は其時A—氏と散歩しての歸りがけに寄つてくれた白井氏と、弟とを振顧りながら言つた。

U—氏の頭腦の明斷なことも、經驗の廣いことも私は能く知つてゐた。長子の胃腸病に、私は幾回となくこの醫師の診斷を煩はしたことがあつた。最近にも私は彼の體を診てもらつてゐた。どこか皮肉味を有つてゐることをも私は知つてゐた。

「遲いから明朝にしてくれろと言ひましたけれど、左に右來てもらへるさうです。」弟は間もなく息をは

づませながら復命した。

私たちがU―氏の來るのを待遠しがつてゐるところへ、O―氏が不安な面持で、再び見舞つて來た。この場合O―氏の來診は、單に私を當惑させるだけであつた。

「大分重いやうですが……。」O―氏は患者の容態を診てから、不安な目色をして私に私語いた。

「貴方の方で、どなたか御存知のお醫師はありませんか。」O―氏は半ば絶望的の聲で言つた。

私は輕い驚愕を感じたが、彼の申出は時に取つて好都合であつた。

「それならば今U―さんが來てくれることになつてゐるんです。」

「U―さん！ さうですか。」彼は不安定な目色をして言つた。

「Y―さんは？」

Y―氏と云ふのは、つい此頃迄小石川の方に開業してゐた私の妻の姻戚であつた。

「Y―君はこの頃ゐません。」

U―氏の俥が門に止まつたのは、それから直であつた。

羽織袴で入つて來たU―氏の姿を見ると、O―氏の態度が急に變つて、叮嚀な言で病氣の經過が話された。

U―氏は始終微笑を目元に湛えて、しかし時々驚きの表情を見せて、それを聽了ると患者の側へ寄つて來た。

「これあ飛んだことをしましたな。注射は……。」U―氏は絶望的の調子で言つた。

「先刻一本やりました。」
「一本？　いつ頃です。」U―氏は侮蔑の色を現はして、座に戻つた。
「猛烈に來たものと見えますね。小腸をひどくやられてゐる。毒素がもう頭腦を犯してゐますから……。」
「瑞子は以前にもそんな事があつたものですから、それだと思つてゐたのですが……。」私が言つた。
「どうして、甚しいのになると部屋中歩きだすのがあります。」
「やつぱり疫痢でせうか。」O―氏が訊ねた。
「まあ疫痢とでも言ふんですが……」と、私の方へ、「恁うなれば他のお子さんが大切なくらゐなものです。下劑でもかけておく必要はあるでせう。」
O―氏とU―氏とのあひだに、二三語が交へられてゐた。
「これぢや病院へ擔ぎこむ譯にも行かず、まあ食鹽注射でもやるんですが……。」
さう言ふU―氏の言について、私が「食鹽注射をやつて戴けますか」と訊いた。U―氏の言つてゐることが、多少手當をぬかつてゐるO―氏への當つけとしか、私には思へなかつた。此數時間が、瑞子に取つてそんなに恐るべきものだとは、的確に信じられなかつた。
「食鹽注射をやるには、これから一時間半もかゝるので……。」U―氏は大業さうに言つた。
私はもう多くを言はなかつた。
「お幾歳です。十二！」U―氏は暫らくすると、また患者の側へ乘出して來て、「えらい目に逢ひましたな」と、彼女の顏を眺めながら、嗟嘆するやうに言つた。

その態度に、私の縋るべき餘地がまだ有つたのであらうか。私はその時はそれに氣がつかなかつた。そして私たちが唯一の賴みとしてゐたU－氏は何等の手當てを試むることも、O－氏の施す手當てに、何等の監視を與へることもなしに、暇を告げた。これが主治醫に對する醫師の禮儀であらう。U－氏は瀕死の生命を、O－氏に委しておけると信じたのかも知れぬ。それとも全く患者に見限をつけてしまつたのであつたであらうか。

左に右U－氏は、動搖と不安と、人々の不思議な失望的安易とを後に遺して、出て行つた。

それと同等に、看護婦が、包みや手提袋のやうなものを持込んで、玄關へ入つて來た。

すつかり仕度をして、病床の傍へ寄つて來た看護婦の姿が目に入ると、瑞子は遽に恐怖に怯えて、しく／＼泣きながら慌忙しく床のうへに起上つたり、すつくと立ちあがつて歩き出さうとしたりした。

「この方はお前の知らない田舍の小母さんなんだから、厭がつちや不可いよ。今にお婆さんも來ますからね。」さう言つて、私は慰めた。

「ちよつとお婆さんのところへ……。」患者は夢現で言つたが、看護婦と私の手で漸とそこへ寢かされた。そして苦しげに喘ぎながら、體を悶えた。

O－氏が食鹽注射に着手したのは、それから一時間半も經つてからであつた。器械の消毒さへすれば直にも取かゝれる仕事を、じつと莨をふかして時の來るのを待つてゐるらしく見えた。一分一秒をも爭はなくてはならぬ危急の場合に、彼は何のために、無駄に時間を消したのであらうか。傍にゐて葡萄酒などを勸めてゐた私は、U－氏の言から推して、それが何かの必要からであると考へてゐた。彼は直に其

仕事に取かゝることを、單に自家の體面から考へて、わざと落着いてゐたのでないであらうか。
食鹽注射はM―氏の助手で初められた。私はづぶりと股に刺れる針を想像したゞけでも、可恐しいやうであつた。患者を慰めてゐた私は時々目をあげて、硝子器のなかに食鹽水の減つて行くのを、待遠しさうに眺めた。
「吸收しませんな」と云ふO―氏の聲が聞えたやうであつた。そして食鹽水が少し殘されたまゝ、針が拔取られた。
瑞子の手を取つてゐるあひだ、私は其の指頭などの可也冷いのを感じたが、それも食鹽さへ廻れば、直に溫まつて來るものと信じてゐた。食鹽水の廻らぬ恐ろしい場合をば、餘り考へなかつた。カンフルの注射が、今一度打たれた。
「痛い。」と云つて泣く聲が、耳にしみつくやうであつた。
看護婦の注意で湯婆の手當なども施されてあつた。患者はうと〳〵と半ば昏睡の狀態に陷つてゐた。
人々は疲れて、時々緣側から茶の間や四疊半の方へ行つて、打鬱れた。昨夜眠られなかつた私の體と頭も疲勞と餒とに、鉛のやうに重かつた。私たちは晚飯を食べる隙さへなかつた。子供の晚飯のお菜に取つてあつた鮨のあることを、私はふと憶出して、それを臺所の蠅帳から引出すと、瓦斯に火をつけて掛けたりした。
先刻まで子供を負つて、へと〳〵になつた小女が、子供を母親に渡して、ぐつたり隅の方に眠つてゐた。蒸暑い晚で、皮膚に粘着くやうなのが、夜が更けてくるにつれて、煩く顏や手足に絡つた。

「私はむごくて、どうも見てゐられません。心臓がこんなです。」

弟は四疊半の簞笥の前に取出されたまゝの布團のうへに打仆れて、蒼い顔の筋肉をわななかせながら、苦しげな息使ひをした。私はそれに葡萄酒を侑めたり、子守に搔巻を着せてやつたりするだけの餘裕をもつてゐた。死を急ぎつゝある子供と父親とのあひだに、そんな間隔のあつたことなどが、私のその時の頭には、何等の不思議でもなかつた。私は私の盡せるだけの手段として、先刻U―氏に訊ねて見た辛子の濕布をさせたゞけであつた。

女たちの泣聲などに脅かされて、長子の芳雄が、狹苦しい蚊帳から出て、隅の方に蹲踞つてゐるのを見た。

「明日も試験があるんだらう。寝なくちや不可い。」私は言ひかけた。

「だつて寝られないんだもの。」

その目は涙に曇んでゐた。

「瑞子も昨日學校のことを心配してゐたね。」

「學校どころの騒ぎぢやないよ。」

「いけないの。」

「不可くはない。」

私が胸に飯を痞えさせながら、病室へ出て行つた頃には、瑞子の脛には、ぴつたり繃帯がしてあつた。辛子の濕布をしたのである。胸にも紙が貼つてあつた。瑞子は悶踠きながら、それを捲り取らうとした。

辛子がそこら中に喰着いた。看護婦は機械的にそれを拭取つた。
坐つて見てゐる醫師たちの目が、不安らしく光つてゐた。
「注射の結果は奈何ですか。」私はさう云つて瑞子の手に觸れて見た。爪はまだ紅味をもつてゐたが、心持白くなつてゐた。指頭には思つたほど温暖が通つて來なかつた。
「どうも……。」O―氏が首を傾げた。
「お父さんが見えるかい。」私はじつと据つたきり動かないやうな彼女の目を瞶めながら、聲をかけた。
瑞子は復に應へたやうであつた。
「可哀さうに……如何かならないものですかね。」
もう半分氣を取失つたやうな妻が、嗚咽くやうな聲で言つた。
暫くすると、劇しい躁狂がまた患者の頭へ上つて來た。
「私ね。私ね……。」彼女は悶踠きながら、喘ぎ〱言つた。
「苦しい、苦しい。」
「苦しいとも、苦しいとも。」妻は抱かゝえるやうにして言つた。
歔泣の聲が、彼女のまはりを取かこんだ。
「……おや謳つてよ……母さん……。」患者は夢中で口走つた。
「歌を謳ふの。お休しなさい、ねえ。病氣が快くなつたらね。」
互ひに勵ゆし、好きに進み、

彼女はふいに謳ひはじめた。

「まあ、好い聲ね。みいちやんはお上手ね。」

妻は顏を蔽ひながら言つた。

唱歌の聲は、淀みなく續いた。いつにない調子の[illegible]い、朗かな聲が續いた。

　とも〳〵懲して、惡しきを避くる、
　これこそ眞のたゞしき友よ、
　これこそ眞のたゞしき友よ。
　憂きことある時共に憂へ、
　樂しき時には互に樂しむ、
　これこそ眞の隔てぬ友よ。

私はいきなり彼女の傍を離れて、四疊半の方へ行つた。

「心臟がどき〳〵して、聞いちやゐられません。」弟が遣切れなさうに耳を蔽つた。

蚊帳のなかに歔欷いてゐる芳雄の聲も聞えた。

　まことの友こそ我身の益よ、
　身うちに優され助けとならん、
　求めて結べよ、眞の友に

……………………

…………………

彼女の口から嘗て聞いたことのない、美しい沈痛な調子がまだ流れてゐた。

「ほら、まだ遣つてゐる！もう止してくれゝば可いな。」弟は堪らないやうに呟いた

「あゝ、厭だ〳〵。」

呻吟くやうな瑞子の吐息が洩れた。

「さうとも然うとも……。」

一ト時、部屋がしんとなつた。朝はもう三時頃であつた。

私が出て行つて觸つてみたとき、患者の手頭には、前よりもやゝ溫かみが感ぜられた。顏も紅味をもつて、汗ばんだやうな潤澤を有つてゐた。

「少し利いて來たやうだ。」

私はまだ全く希望がないとは決められないやうに思つた。

弱い躁狂が、また暫らく續いた。

「彈きます、彈きます。」

患者はまた手を悶踠いて、啜泣くやうに言つた。

チントンシヤン……

そんな聲が、わなゝく彼女の乾いた唇から微かに洩れた。

「もう慥うなれば時間の問題です。」

O—氏は大分たつてから、私に言つた。

夜が明けて、涼しい朝風が憂愁の深い人々の顔に流れる頃、彼女の兄の制服姿が、ちよつと障子蔭から現はれて、そのまゝ私に勵まされて庭の方へ下りて行つたと殆んど同時頃に、瑞子は額に取すがつて正體もなく泣沈んでゐる彼女の母の聲や、十二年間愛撫された父親々見棄てゝ、嵐が去つたやうに靜かに、永い眠についた。

人々が去つてからも、私達夫婦は、しばらく、一夜のうちに烈しい暴力のために捻ぢ仆されたやうな彼女の死骸の側に坐つてゐた。

一夜助手をしてゐて、死の間際までぽろ々々涙を流してゐたM—氏は、獨りぽつねんと玄關口に腰かけて、深い悲しみに沈湎してゐた。

そこにも此處にも、朝の戶を開ける音がした。私に取つては一轉瞬よりも、短い一夜であつた。

「お迎へ、お迎へ」と云ふ麻殼賣の聲が、門前を通り過ぎて行つたりした。

私は何から手をつけて可いか判らなかつた。

「何だ、つまらない！」

私は今の先まで、もが〳〵させてゐた彼女の口元や、始終自分の手で梳いたり結つたりしてゐた髮などに、執着の手をさはつて見てゐる妻と一緒に、太息を吐くやうに言つた。咽喉が涙で塞がつたやうで

あつた。醫師たちや私たちが、彼女を見殺しにするために、一夜を無駄に彼女の傍についてゐたやうな情なさを感じた。私たちは死を迫られつゝ、悶踠き鬪つてゐた彼女の生命のために、何をしてやつたであらうか。私たちは皆な間脫けな顏をして、隙間だらけの手を擴げて、無意味に彼女を引留めやうとしてゐたのではなかつたらうか。

「もう眞實に駄目でせうか。」

妻はさう言つて、泣ふさがつた目をして、死人の顏を撫ぜてゐたが、長くは側にゐられなかつた。彼女はおろ〳〵そつちへ行つて、泣立てる幼い子供を抱いたり、此方へ來て汚れものを運び出したりしてゐた。

目に泌みるやうな朝日が、花壇の草花のうへに輝きはじめて來た。

「一昨日あんなに搜して見えなかつたみいちやんの足袋が……。」

着換をするために、四疊半の押入れを開けて、行李を動かしてゐた妻は、まだ眞新しい彼女の足袋を取りあげて、悲しげに手で顏を蔽ふた。

通知をすべき親近者に、電話がかけられたり、田舍へ電報が打れたりした。

ミズコイマシンダ

いつも原稿を書なれてゐるペンで、妻の母親や、此頃一寺に住職となつた義弟にあてゝ打つべき電報を書くとき、私は自分と瑞子の不思議な運命を異しんだ。昨日の朝までぴちゝゝしてゐた瑞子――時々膝に抱きあげて頰摺りをしてゐた瑞子、――その體ッ重みが、まだ私の腕や膝にあるやうな――つい二

三日前にも叔父や兄につれられて、知つた女優の芝居を見るために、私に送られて出て行つた彼女の姿！私は奇妙な空虚を感じつゝ、手頭がわなゝいた。

私が一時半ばかり用達しに行つてゐる間に、死骸には白い布が被せられて、たつぷりした髪が布團からこぼれて、疊のうへに垂れてゐた。義弟がそこに腹這ひになつて、最愛の姪の死顏を、片を取つては飽かず眺めてゐた。

下宿で一休みしてから、區役所などへ行つてくれた白井が、歸つて來たのは、まだ通知を受けた人達の集つて來ないうちであつた。

「規則では三尺五寸の棺に入れて、市の方で死骸を引取つて行くことになつてゐるさうです。」白井はかんゝゝ照つてゐる外から入つて來ると、汗ばんだ顏を拭きながら、そこらをうろゝゝしてゐる私に報告した。

「そして直に燒場へ送つて、骨にして下渡すのださうですが、偶然とすると此方でやらせてもらふ事にならないとも限らないから、衞生掛の人と警官が出張したら、賴んで見たら奈何かと言ふんです。多分駄目かも知れないとは言つてゐましたが、左に右宜しくと言つて引取つて來ました。どうも暑いのでね。」

彼はさう云つて、私に一枚の書附を渡した。

「ぢや、寢棺ぢやないんですか。」妻は充血した目をして、傍へ寄つて來た。

「いや、市の方でやることになれば然うですが、偶然したら可いかも知れません。」

「寢棺でなくちや可哀さうですねえ。奈何かして此方で燒いてやりたいものですね。」

掛りの官吏の出張しない前に、私達は小い子供たちを弟の家に移したり、消毒の藥液をかけられては困るやうな物を、戸棚へ始末したりした。

第一の義弟と赤阪の方から駈けつけてくれた第二の義弟とが、手分をして、寺へ行つたり、棺屋へ行つたりした。ごたゝゝする部屋から脱けて、私は薄暗い玄關わきの三疊の室へ入つて、椅子や行李や看護婦の荷物のごちや／＼した間へ敷いた布團のうへに、疲れた體を横へて、頭を落着けやうとした。瑞子の袴が、一昨日壁にかけられたまゝ下つてゐた。小い机のうへにも、彼女の書いたものや、愛讀してゐた雜誌などが散らかつてゐた。私はふとその袴にさはつて見た、彼女の軟かい肌觸りが、私の手を傳つた。

寢轉んで目を瞑らうとしてゐる私の疲れた頭に、死の間際まで憶出しもしなかつた最近の彼女の病氣の前兆や、死の豫感などが、薄すり泌みだして來た。

「私この頃何だかこゝが痛い。」

つい三四日前にも、さう言つて訴へてゐた彼女を、餉臺で見た。二度も私はそれを聞いた。

「どこが……。」私は訊ねた。

「こゝんとこ。」彼女は小いそのお腹のところを押して見せながら言つた。

「それあお醫者に診てもらはなくちや不可いね。」私は淡い不安を感じながら言つたが、それが肋に原因してゐるとは、想像も及ばなかつた。何か厄介な病氣か、そこに胚胎しつゝあるのではないかとも考へた。

「家ぢやまだ誰れも死んだ人はないの。」彼女が、やつぱり晩飯のあと、不意に言出したのも、その頃であつた。

「人が死ぬつて、どんなだらう。私死んだ人を見たくて／＼堪らないの。」彼女は愛嬌のある、利かぬ氣の、輪廓の約つたその顏ににこゝゝ笑ひながら言つた。

一昨々夜も、私は妻と一緒にゐる机の傍で、死の話をしてゐる彼女の聲を聞いた。

「……然うすれば、私はざぶりと海へ入つて死んでしまふわ。」

何かの話のついでに、彼女は微笑を含んだ目を耀かしながら言つた。

「死ぬことなんか何でもありやしないわ。」

「大變な女だね。」私は善くそんな事を口にしたがる世の中の女と、女となる彼女の將來とを聯想しながら、さう言つて笑つた。

私はまた發病の當初から死ぬまでの果敢ない一晝夜のことを、ぼんやり考へて見た。私か若くは妻かが、何時ものやうに子供の病氣に對して敏感でありさへしたら、そして少しでも側についてゐた二人の醫師の頭腦と手腕に、いつもは感じ易い不安を的確に感じさへすれば、取縋ることのできた暗示の綱が、そこにも此處にも、長く短かく垂下つてゐたやうに思へた。色々の不幸な廻合はせと、不透明な私の頭腦と、純眞な子供の愛を缺いた私の心とが、有ゆる其等の機會を無駄に見遁してしまつた。二十四時間近くの、最も緊要な、最も重大な、またと再び繰返すことの出來ない特殊な時間を、私は何を考へ、何を爲しつゝ過したのであらうか。取返すことの出來ない彼女を失つてから、彼女の生命の貴いことゝ愛

すべきことゝが、次第に私の心に入染みだした。長い間糊塗しおほせて來た私の愚かさと、浮薄と、不親切と、驕慢とが、私の目先にかうも大きな破綻を突つけた。重なり重なつて來た色々の不運な廻合せが、都て私の心と手とを遮ぎり蔽ふてゐたやうにも思へた。それに私は、彼女の死を守りつゝあるあひだ、利己的な心持が少しも私の頭を濁してゐなかつたとは言へなかつた。

警官が來たのは、それから大分經つてからであつた。續いて衞生課の官吏が、消毒掛の人夫などと、どやゝゝと遣つて來た。そして彼等は皆な心から哀悼の辭を述べた。

「棺の都合もありますので、燒場の方は、私の方でしたいのですが‥‥規則は規則でせうけれども、どうか一つ。」

私たちは庭に立つてゐる胡麻鹽髭の警官に嘆願した。

「それはまあ、そんな例がないでもありませんが‥‥衞生課の人に一つ訊いて見て下さい。」

私たちは又衞生課の人に頼んだ。多分寢棺にするつもりの、細長い寢棺を持込んで、葬儀屋がそこへ遣つて來てゐた。

「如何です貴方の方は‥‥。」市の衞生官が警察官に訊いた。

「さあ。貴方の方さへ可ければ‥‥。」

「では消毒を十分にして、當家へお委せすることにしても可いでせう。」

石炭酸が、大きな噴霧機で、部屋中に浴せかけられた。ぴしよ〳〵になつた壁からも紙門からも、雫が滴りおちた。私たちも噴霧機の口に立つた。弔みに來た晴衣のY―氏の夫人の袂や帶も、消毒液でし

とゝに濡れた。

棺に死骸を收めるために、人々は座敷の方に集つた。三疊へ入つて目を瞑つてゐた私は、私を呼びに來た妻の崩れた顏を見ると、機械のやうに立ちあがつて、其の方へ行つた。

死骸は今洗はれるところであつた。一時に年を取つたものゝやうに、目などの落窪んで、眉の鮮やかな彼女の顏が思做された。

私は彼女の手函から、有らん限りのリボンを取出して來た。琴の爪や、二三の本をもそこへ持込んだ。

「着物は何れにしませうか。」妻は簞笥の抽斗のなかを眺めながら言つた。そこにはお盆に作つた萩や桔梗の模樣の鮮かな凉しげな單衣ものが、先づ目についた。

「みいちやんもう、こんな物も着られなくなつて……。」彼女はそれを取出しながら、泣崩れた。

「これをあの前の晩に着て見て、どんなに悅んだでせう。」

しかし其は惜いと云つて、掛りの人たちに止められた。

「燒くくらゐなら人に施しなさい。」

妻はまだ一度も肌につけたことのない、切立の阿波縮を抽斗から拔いて來た。

「さあ、十分洗つておあげなさい。」掛りの人が妻を慰めるやうに言つた。

「みいちやん、こんなになつて了つて……。」妻はまだ生々してゐるやうな彼女の體を洗つた。

「まだ溫こござんすよ。」

さう言はれて、私も觸つて見た。體はカムフルのために薄紫色に斑つけられてゐた。

棺に横へられた彼女の左右へ、私は一昨夜貰つて來たばかりのダリヤを、一輪も殘さず投込んだ。間もなく棺の蓋が釘づけられた。そして其が北を枕に横へられた。白い位牌が、その前に据えられた机のうへに置かれた。線香の烟がもう立昇つてゐた。

掛りの人たちの引揚げて行つた家のなかは、慘澹として見えた。この光景のなかに立つてゐる痛々しい自分を、私は時々喚さますやうに踏ばつた。

しかし尚だそれよりも惡いものがあつた。

警察吏や衞生がゝりが來る前に、私が人々に言はれて近くにある義弟の家へやつておいた子供が、いつの間にか、急に人の出入の多くなつた家の混雜のなかへ交つてゐたのは、もう午後の三時過ぎであつた。

出張先の大宮から、自轉車で馳けつけてくれた親類の醫者のY―氏と與に、私の家へ呼びよせた葬儀屋の主と話をしたり、弔問の客に應接したりしてゐた間も、二三日前から加減の惡かつた三男の才作の氣懈さうな樣子が、時々目についたが、此際面倒なその子供の病氣についての押詰めた考察を、出來るだけ避けやう／＼としてゐた。私は今朝も徹夜の附添ひから歸つて行くO―氏に賴んで、一應彼の容態を診てもらつたのであつたが、瑞子と一緒に母親や兄に、診に連れられたときと、格別變つたやうな診斷も受けなかつたのであつたが、昨夜のどさくさ紛れに、全く放抛つておかれた其の體が、時々氣にな

た。牛田は食慾もなささうな才作は、時々鼻を鳴らしながら、すご〳〵母親の後を追つて歩いてゐた。

妻は泣腫れた目と、歪んだやうな顏をして、時々座敷へ姿を現したり、ぼんやりした顏をして、臺所の隅に突立つてゐたが、女同志で泣合ふやうな客が、時々子供を振切つて、彼女を玄關へ立たせた。

上級の生徒で、琴などに始終一緒に行つて、姉妹のやうに親しくしてゐた彼女の友達が、父親につれられて玄關まで弔みに來てくれたりした。

「子供の言ふことですから、何だか判りませんけれど、ちよつと行つて伺つてくれと家内が申しますので……。」

その父親は、さう言つて訊ねた。

「眞實でございます。もう夢のやうな氣が致しまして。」妻のさう云ふ曇み聲が茶の室にゐる私たちの耳へも傳つた。

繰言がしばらく二人の間に絶えなかつた。客の聲も曇んでゐるらしかつた。

「柳井さんの御父さんも、お泣きになつて……。」妻は手を目に當てながら入つて來た。

「御父さん、瑞子は死ぬ前に妙なことばかり言つてゐたんだつて、山村さんのおばさんも、橋本のお婆さんも皆な然う言つてゐるよ。」

芳雄が外へ遊びに出た二男の丈吉をつれ込んで來て、私の傍に坐りながら言つた。

「おばさん處には、新佛があるかなんて聞いたり、死んだらどんな處へ行くんだなんて、煩さく聞いたりしたんだつて。子供はみんな好いところへ行くと云つて聞したら、それなら私も死んでみたいなんて

大變悦んでゐたんだつて。」

つい四五日前に私たちの食べた素麺の長い箱の、長火鉢の後の押入のところに收つてあるのが、ふと私の目についた。それが今瑞子の入つてゐる寢棺そつくりの形であつた。私は恐ろしいやうな氣がした。

「何だか知らないが、妾と先を急ぐやうな子だつたね。」

「とにかく小さいなりに完成してゐましたね。」よく瑞子に揶揄はれて、にや／＼笑つてゐた白井が言つた。白井は何の子供にもにや／＼してゐるやうな男ではなかつた。瑞子だけが彼に皮肉を浴せる特權をもつてゐるのであつた。

「顏もかつ詰つて、緊張してゐた。暢びりしたところがなかつた。」

「あれで瑞子は、友達には大變優しかつたんだよ。岡田さんや何か、始終教はりに來てゐたんだよ。瑞子は何でも出來たんだね。」芳雄はさう言つて、物悲しげな面を垂れた。私や妻や大人の與り知らないやうな彼女の生活を、彼が能く知つてゐることを、私は初めて氣がついた。

「瑞子の琴を初めたのは、ちやうど去年の今月の一昨日だよ。」そんな事まで彼は記憶してゐた。

「千代ちやんがまた可笑いんですよ。」

氣持の一番素直な千代子を、一番可愛がつてゐた義弟の嫁が、さう言つて緣側からあたふた姿を現はした。

「少し下るんですよ。何だか熱もあるやうなんですの。」

私はたゞ默つて、其顏を見てゐた。

千代子が連れて來られると前後して、私は四疊半の縁先で、才作に大便をさせてゐる妻の姿を見た。それが又私の眉を顰めしめた。

「とにかくO―氏に一應來て見てもらはう。」大きい瑞子を失つた私は、七歳と五歳になる彼等の生命に瑞子以上の注意と不憫を加へることが、この場合辛い仕事のやうに思へてならなかつた。

「え、可いですとも。小さいものは如何なつても可いと思ひます。」妻もいら／＼した聲で、側から言つた。

「それあ不可んと思ふな。」Y―氏がO―氏の來ることを聞いて、「O―君もO―君ですけれど、とにかく後が大事だから確乎りした小兒科の專門家を一人おあげなさい。差出がましかつたけれど、私は今其事をM―に指圖をしたのです。此の後の始末を如何する意かつて……。」

M―氏が知つてゐる若い醫師が、やつて來てくれたのは、もう夕暮に近い時刻であつた。O―氏もちやうど來合せてゐた。

庭には暑かつた日影が全く薄れうせて、此頃の例になつてゐる、山國のやうな濕つぽい荒い風が、カンナやダリヤの葉間に吹きそよいでゐた。

新しい佛の前には、通知を受けて訪ねて來てくれた三四人の人たちが、縁端や玄關口の方に座を占めてゐた。鈴が時々悲しげに鳴つた。

「大變なことでしたね。」

さう言つて顔を見られる度に、私は淡い慚愧の念に、自然に首が俛れた。

O—氏が子供の腹へ、聽診器をあてゝゐるところへ、M—氏から頼まれて來た學士がやつて來た。

座敷の方にゐた私は、四疊半の方に枕を並べて臥かされてゐる子供の側で、差向ひでひそ〳〵話をしてゐる二人の醫師たちの姿を見たが、其側へ行くのが躊躇された。

「ひどく惡いんでせうか。」大分たつてから、私が新來の醫師に挨拶かた〴〵聞いたとき、彼は怜悧さうな、しかし友達の前、迂濶に口を利けないと云つた不安な目色をして、默つてゐた。二人が舊友であつたことが、最初顏を合したときの挨拶で判つてゐた。

「今色々相談してみてゐるのですがね、こんな御不幸のあつた後で、お氣毒ですけれど、病院へお入れになつた方が安全ぢやないかと言ふのですが……。」

新來の友達の發意らしい入院說を、O—氏がその時私に傳へた。彼の友醫が二人の容態を重いと看たことが、私にも感づけた。

「自宅ぢや駄目ですか。」

「駄目とも言へないでせうけれど、まあ入院の方が早廻しですから……。」O—氏が答へた。

O—氏に對する不滿が、この頃何事にも抑へよう〳〵と努めてゐる私の神經を發作的に焦立たせた。

「それは入院は可いでせうけれど、大きいものを亡くした以上、後は成行きに委せやうと思つてゐるんです。」

白いリネンの洋服に、金鎖を絡ませた新しい方の醫者が私に同情するらしい表情で、默つて點頭いた。

「疫痢は私も初めてですけれど、危險は危險でも醫家から言つて、そんなに難しい病氣ぢやないですか。」

「さあ」と云ふやうに、二人は目を見合せた。

「早く手當さへすれば、何だか癒る病氣のやうにも思はれるのですが‥‥疫痢と判つてからぢやもう遲いでせう。」

沈默がしばらく三人の間に續いた。醫師と醫師とは顔を見合つてゐた。

「とにかく些と外の室を拜借しませう。玄關でようございます。」

O―氏がさう云つて目配をすると、學士も後へ續いた。

その間、色々の用事に忙しい私は、座敷へ顔を出したり、玄關口へ人を送つたり、物を訊く義弟たちに口を利いたりしてゐた。外はもう夜の色に包まれてゐた。

今のところ健康でゐる芳雄と丈吉の身のうへが、私には不安になつて來た。それから夫へと、幾箇の棺が、私の狹い書齋に駢ぶかしれないと思はれた。三つだけは、左に右覺悟しなければならぬと考へた。

「小い病人を病院の方へ送りこんだ方が、此場合一番安全だ。」

私はふとさう考へた。

醫師たちが又私の傍へやつて來た。

「どうも入院させないと心配ですな。」O―氏が一層それを主張した。學士の腰が强いらしく思へた。

「では然うしませう。」私は速座に應へた。

「さう御決定なされば澤井さんが、本郷界隈で何處か病室の明きを聞合せてくれるさうですから。」O―氏が滿足さうに言つた。

自分の發言としては、一言をも發しなかつた學士はハイカラな編靴をはいて、懇ろな挨拶を遺して歸つて行つた。O—氏も續いて出て行つた。

「何だか重いやうですよ。」

病人たちの傍へ歸つて來た私に、そこに附添ふてゐた妻が言かけた。傍には先刻新たに乘込んで來た昨夜とは異つた若い看護婦が、せつせと立働いてゐた。ぐつたりして寢てゐる子供たちは、時々めそめそした泣聲を立てゝ、母親の頭腦を一層困却させた。

「瑞子も入院させたら可かつたでせうにねえ。みいちやん不運だつたね。可哀さうにねえ。」妻はさう言つて、また泣き出した。

「瑞子が眞先に、酷いのを喰つたんだ。」

「みいちやんが、あんな病氣に罹るなんて、私は如何考へても、不思議で不思議で堪りませんよ。」

「しかし入院の支度をしなければ……。」

「如何でせう、此の方が行くと言ふから、病院へ附いて行つてもらつては。」

「それも可いだらう。」

私はそこに長くもゐられなかつた。そして葬儀の相談などをしかけては、起たなければならなかつた座敷の方へ、入つて行つた。

暫くすると、玄關の方で、また涙に咽びながら娓々と繰言を言つてゐる妻と、女客との話聲が聞えた。

「姉さんを出さないやうにしたら如何でせう。」義弟が顏を顰めながら言つた。

「あれあ好くないですが……。」私の懇意な一人の青年も傍からさう言つた。

「爲方がないさ。思ふさま泣かしておくさ。」

今迄は餘所事のやうに看過してゐた、母親の涙を、私は初めて彼女に見た。

七時に燒場へ出て行くべく定められた棺の前で、經を讀んでもらふ筈になつてゐる僧を、私たちは心待ちに待つてゐたが、七時を二分ばかり過ぎでも、彼の跫音が聞えなかつた。葬儀社から手配して來た人共たちが、もう門のうちへ入つて、棺の出るのを待つてゐた。

間もなく、駿河臺の方の病院を指定してくれた學士の報知を受けたO―氏の方から、紹介の名刺が屆いた。それは四つの時芳雄が危險な腸加答兒から救はれた病院であつた。

入院の仕度をすませた妻が、俥の來た報知を聞くと同時に、擔ぎ出されやうとしてゐる佛に永い別を告げるために、たどたどと入つて來た。

彼女は深い悲しみに、暫く面も上らなかつた。そしてよろよろと立つかと看ると、長い棺桶のうへに突伏して泣崩れた。

「奥さん、駄目です。佛のために反つて惡いです。後のお子供さんのことを考へておあげなさい。」

先刻の青年が、彼女を棺から引離さうとした。

「貴方……。」

彼女は私の傍へ寄ると、腕に縋りついて泣いた。

「私はどうも病院へ行くのは厭です。瑞子さんに濟まない。」

「お前がそんな我儘を言出したんぢや、僕が遣切れないぢやないか。」私は彼女の肩を撫でながら言つた。

「成行に委さう。自分の思ひどほりにも行かない。」私はそどろに言慰めた。

人々のために、次の室へ隔てられた彼女の啜泣く聲を後にして、棺が玄關口へ擔ぎ出された。ばたばたと送つて出る人々の肩と肩とが、そこに犇めきあつた。彼女は下駄を突かけて、二三の人たちと共に、門の外までそれを見送つた。

白井や弟たちが、棺に引添ふて行つた。

棺が出ると間もなく、私はまた病院へ行く妻や子供たちを、玄關に見送つた。

家のなかゞ遽に闃寂して來た。

私が病兒の今まで寢てゐた四疊半に、はげしく石炭酸を噴かけるにかゝつてゐる間に、居殘つた二三の人たちが、座敷に番をしてゐた。臺所には色々の人が來て働いてゐた。思出すと、瑞子の發病以來、都てが不間に行つてゐる前後を憶出すと、私はそこに散つてゐた小い紐一つにも、用心しなければならなかつた。私の口が消毒液のために焦たゞれて、呼吸の切迫して來るのを感じた。私の頭はいつか昂奮しきつてゐた。

客のなかには、今年の春瑞子が種蒔三番の大きな羽子板をもらつて來た、四谷の方の私の身內の男の若夫婦もあつた。不斷から懇意にしてゐる、田舍からの私の昵みの、信心家の老婆もあつた。

「貴方がしつかりして居なくちや、駄目だよ。」

信心家の老婆は、がつかりして位牌の傍へ寄つて來た私に言つた。

「大丈夫だ。」私は心のうちに繰返した。

二人の子供たちが悄然と私の傍に引添ふてゐた。

電報を受取つた田舍の老母の着くのが何となく待たれた。(をはり)

○定價 金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

本號定價金六拾錢 郵稅金四錢

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄉區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵劵代用必ず一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直に其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄 金六錢（集金委託料
　一金五圓迄 金七錢 及送料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正五年八月三十日印刷納本
大正五年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 高木西三

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地 中央公論社
電話四下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可

